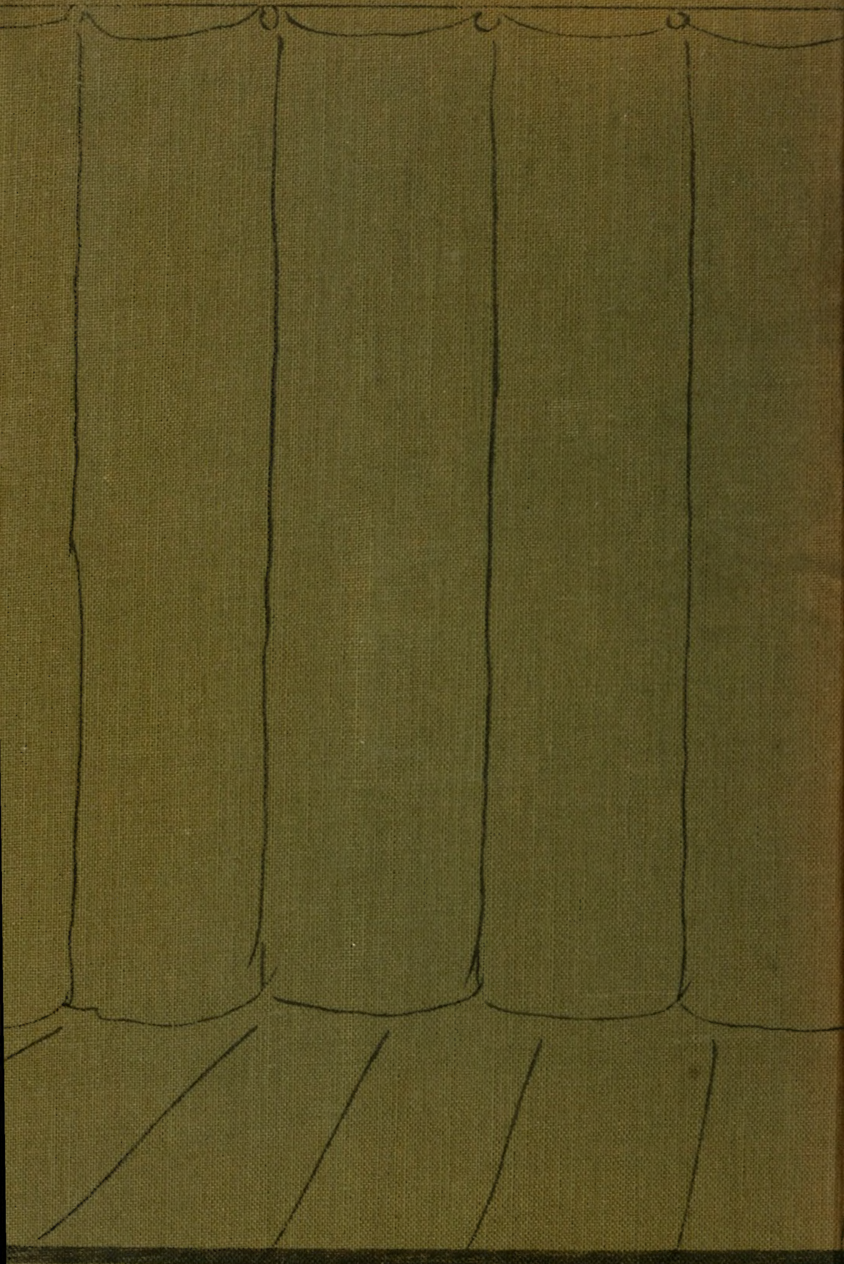


日本戲曲全集
第六卷

# 並木五瓶世話狂言集

東京
春陽堂版


岩井粂三郎
市川男女蔵
二八
豊国画

# 日本戯曲全集第六巻目次

## 並木五瓶篇（世話狂言集）

# 艶陽婀娜曲輪對面

東呉繋万里船　富岡初曙　其風流を　うたひしは　浪花夕霧文　吾嬬秋色櫻

西嶺含千秋雪　中町着初　其韛割と　きこえしは　薩摩源五兵衛　笹野三五兵衛

武藏野の開きあふ御恵みは筑波山の影よりもしげく大通と呼ぶ色男力だめしの虎ヶ石固めはしやんと津の國住吉、抑々奥の院に五大力明王と申奉るは千話のやりくり口舌のひぞり又はしみ〴〵思ひ參らせ候と其玉章の封目にかくとだに縁につるれば團三郎が濡事鬼王は初會工藤は二度目の狩場の約束兄弟が無念は五つや三つの頃は彌生の花の下女藝者の俳諧師身替りの去狀は八幡が仁義近江が釋敎戀は曲者寶の盜賊三味線かひこんだ詮議の合の手彈けや淸搔吉原細見名所名物すぐれし御國の

# 五大力戀緘

四里四方　四番續

表のカタリは「五大力戀緘」初演の時の番附から取つたものである。この時にはまだ、二番目が別名題にならず、「江戸砂子慶曾我」の一本名題の中に包含されてゐたのでカタリも曾我狂言と共通になつてゐる。

下掲の寫眞は、大正八年十月、帝國劇場でこの狂言を演じた時の寫眞で、この時は宗十郎がお家の源五兵衛に扮し、幸四郎の三五兵衛、故宗之助の小万といふ役割であつた。

大詰、花屋の場へ挿入した錦繪は、宗十郎が再演の折ので、いかにも面白く描けてゐる。また中木場の場へ入れたのは、宗十郎の子の源之助が、初役で扮した時の發行である。筆者は共に初代歌川豐國。



# 五大力戀緘

## 序幕

洲崎升屋の場

役名――薩摩源五兵衞。笹野三五兵衞。千島千太郎。近習、市塚左十郎。同、安松伊平太。玉木東作。賤ヶ谷伴右衞門。出石宅左衞門。升屋才兵衞料理人、喜兵衞。下女、おとわ。同、おちよ。藝者、淺香。同、久米吉。男藝者鶴次。同、龜吉。同澤吉。升屋娘、おこの。廻し男、彌助。下部、土手平。櫻屋の小万。

本舞臺、洲崎升屋の表のかゝり、物數寄したる中門、客路地、磨き砂の腰垣、これに升屋と記したる角行燈を掛け、すべて料理茶屋のかゝり。幕の内より料理番と肴屋と喧嘩して居る。若い者三人とりさへて居る。騷ぎ唄にて幕明く。

料理　イヤ、料簡がならない〳〵。

皆々　マア〳〵、待たつしやい〳〵。

肴屋　イヤ〳〵、放した〳〵。

若一　イヤサ〳〵、おれが呑みこんで居るワ〳〵。

若二　これサ、料理番どの、どうしたものだ。出入りの肴屋を捕へて、何をワッパサッパ云ふのだ。

料理　イヤサ、今夜は千嶋家のお客がお入りなさるゆゑ、昨日から誂らへて置いた仕込みの肴を、コレ、もう日が暮れるワ、今時分から持つて來て、間に合ふものか。

肴屋　おれも大事の得意場だから、骨を折つて持つて來た注文通り。突ッ返されて堪るものか。

料理　もういらないから返すのだ。

肴屋　不漁だからツイ遲くなつたのだ。

料理　もういらない〳〵。

若三　マア〳〵、さう云はずと、わしに預けさつしやい。

料理　否だ〳〵。

皆々　マア〳〵、ござい〳〵。

ト皆々ワヤ〳〵云うて、下の方へ連れて入る。祇園囃子になり、向うより千太郎、着付け羽織袴の、愚かしき若殿の拵らへ、その後へ近習三人、伴右衞門、三五

兵衞、宅左衞門、源五兵衞、何れも着付け羽織の形、めい／＼奴一人づゝ箱提灯を持ち、花道より出で來る。客路地より才兵衞、着付け袴の形にて、手燭を持ち、出迎へ、平伏して

才兵　これは毎度ながらお入り下されまする段、冥加に叶ひ、有り難う存じまする。これよりお通り遊ばされませう。

三五　亭主才兵衞、御案内申せ。

才兵　へイ／＼。

三五　千太郎さまには、イザ。

千太　オヽ、皆來い／＼。

ト才兵衞先に案内して、千太郎附いて入る。これに續き近習入る。

三五　源五兵衞どの、宅左衞門どの、

兩人　まづ／＼。

ト互ひに目禮して、三五兵衞、宅左衞門、源五兵衞、段々に路地へ入る。この道具を引いて取る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、見付け一面の腰障子臆病口の方、仕切りのまいら戶、臺所の體にて、爰に料理番、俎板に向ひ、料理して居る。下男大勢働いて居る。こなたは中の間の體にて、方々に丸行燈ともし、爰に久米吉、淺香、藝者の拵らへにて、三味線箱にもたれ、あやを取つて居る。脇に小万も藝者の拵らへにて硯箱を扣へ、行燈にて文を書いて居おとわ、おちよ、仲居、前垂がけ、銚子を替へに來るて居る。騷ぎ唄にて道具とまる。

とわ　サア／＼、久米吉さん、淺香さん、もうどなたも、お出でなされたぞえ。

ちよ　小万さんも一緒に。

小万　アイ、もう皆お揃ひかえ。

ト構はず文を書いて居る。

ちよ　こちの旦那さんは、せつかちぢや程に、皆さん、もう拵らへてござんせえ。

淺香　久米さん、一緒に行かうぞえ。

久米　サア、座敷へ行くは面白いけれど、左十さんの髭で摺りつけらるゝが、否やわいなア。

淺香　いつち中で千さんが、可愛らしいなう。

とわ　淺香さん、お前、千さんに氣があるかえ。

淺香　なんのマア、阿房らしい。

ト此うちおこの、娘の形にて奥より出て
この　おちよもおとわも、どこに居るぞいの。
ト皆々を見て
二人ながら、奥でお手が鳴るわいの……これいなア、久米吉さん、淺香さん、お前方も、ちやつと拵らへて行ておくれいなア。
ト此うち久米吉、淺香、鏡袋を出して顔を直して居る。
久米　サア、さう思うて、いま顔を直して居るわいなア。
淺香　小万さんも一緒に、座敷へ行かしやんせんかえ。
小万　アイ、いま行くけれどわたしやこの文、ちよつと内へ持つて行つてもらひたいが、こちの彌助どんわえ。
ちよ　彌助どんは、先刻大門屋へ行くといつて、行かしやんしたが、戻つてなら、お前に知らさうわいなア。
小万　エヽ、つんとモウ急な用があるのに、爰に居てくれたがよい。……おちよどん。お前を頼んで置く程に、彌助どんが戻らしやんしたら、この文を渡しておくれえ。
ちよ　アイ〱、わたしがきつと渡すわいなア。
ト文を受取る。
小万　急な用ぢや程に、間違はぬ樣に頼むと、云うて渡して下さんせえ。
ちよ　アイ〱、合點ぢやわいなア。
この　サア、皆さん、座敷へ行つておくれんかいなア。
小万　アイ〱、サア、お前方もござんせんか。
久米　小万さん、お前、顔を直さんせぬか。
小万　わたしやモウ、此まゝで出ようわいなア。
とわ　どうでも、小万さんは、生地でも目立つわいなア。
小万　オヤ、馬鹿らしいによ。
皆々　サア、ござんせいなア。
ト騒ぎ唄になり、小万先に、皆々奥へ入る。おとわ、おちよ、三味線箱を抱へて入る。おこの、後を片付けて、仕切りの戸を明けて
この　喜兵衛、お吸物の支度はよいかや。
料理　ハイ、ようござりまする。
ト云ふうち献立を見て
この　御膳までの間に、お屋敷から來た泡盛を出せと、仰しやつたぞや。
料理　そりやア燗場へ、さう申して置きました。いま鮟鱇のお吸物を出しまする。
この　そりやよからうわいの。コレ、お屋敷樣はむづかし

いから、随分氣を付けてもらはうによ。
　トこの間奥にて、手を叩く。
ソレ、お手が鳴るわいの。誰れも居ぬかいの。アイ……
　ト返事しながら奥へ入る。踊り三味線になり、向うより彌助、廻しの拵らへにて、走り出て來る。
料理　オヽ、彌助どん、戻らしつたか。
彌助　アイ、大門屋に客人が來てござるから、ちよつと顔を出したところが、丼で一つキウと、……イヤモウ、とんだ目に會つたやつよ。
　ト此うち奥よりおちよ、文を持つて來て
ちよ　彌助どん、先刻から待つて居たわいなア。小万さんが云はしやんすには、この文を見て、大儀ながら、内へ行つて來てもらひたいと云はしやんしたぞえ。
　ト文を渡す。
彌助　そりやアお世話でござりやした。……この文を見て、内へ行つて來てくれろとは、あの子に色がましい事は無し。何だしらん。
　ト合點の行かぬながら文を開き
今夜は歸る程に、なんとなと取繕らうてもらうて下さんせや。きつと〱頼むぞえ。彌助どのへ小万……又たんぞ、あの子の癇癪に、障つたかしらん。
　ト文を懐へ入れて
おちよどん、わしやちよつと内へ行つて來る程に、この通りを小万さんへ頼みますぞえ。
ちよ　そんなら歸つてござんすか。そりや大儀ぢやの。
彌助　なんの、爰から仲裏までいくらあるものだ、ドリヤ、一走り。
　ト向うへ走り入る。始終踊り三味線。
ちよ　ドレ、わしも、小万さんにこの様子を。
料理　おちよどん、もうお吸物が出るによ。
ちよ　合點ぢやわいなア。
　トおちよは奥、料理番は下座へ入る。矢張り踊り三味線にて、奥より左十郎、伴右衛門、伊平太、東作四人しておこのと小万を連れて出る。
四人　兩人ともに、ちよつと來やれ〱。
小万　お前さん方が、わたしに用と仰しやるは、先度からおこのさんが云はしやんす、三五兵衛さんの事かえ。
この　小万さん、あなた方まで、いろ〱と仰しやることぢやほどに、どうぞ、よいやうに返事して、おくれいなア。

小万　サア、お前が段々云うてぢやけれど、どうもならぬ譯があるゆゑ。
左十　どうもならぬ譯といふは、小万、外に色があるといふのか。
伴右　仲町で聞合したところが、其方にばかりは深間は無い、今時の藝者に似合はぬ、甚だ堅いものぢやと、聞及んで居るわサ。
伊平　我れ〳〵も三五兵衛どのに、頼まれた手前。
東作　小万、是非とも。
この　アレ、あの通りぢやわいなア。尾花屋や梅本で聞いておいでなされたゆゑ、噓もつかれず、お前の返事が無いによつて、どうやら、わたしが捨てゝ置くやうで、濟まぬわいなア。外にどう云ふ譯があるかは知らぬけれど、それはそれ。
ト小万、思ひ入れあつて
小万　サア、この事は、どんな事があつても、云ふまいとは思うたけれど、云はねば三五兵衛さんへ、お前さん方や、おこのさんが濟まぬ口振り、それぢやによつて、云ひます程に、必ずパッとならぬやうにして下さんせえ。
この　そりやモウ、わたしが呑み込んでゐやんす。そして、お前の色さんの名は、なんといふえ。
四人　早う聞かしてくれ居れやい。
小万　サア、其お方は、
四人　其お方は。
小万　千嶋のお屋敷、薩摩源五兵衛さんでござんすわいなア。
四人　ヤア、。
ト顔見合せ驚ろく。
小万　常住お前さん方と一座しても、見付けられぬやうにするは、大抵辛氣な事ぢやござんせぬわいなア。
左十　何れも、お聞きなされたか。千嶋家の御家老、薩摩源次兵衛どのゝ御子息、我れ〳〵が、毛虫どの。
伴右　日頃より四角四面な源五兵衛どの、斯樣な遊所なぞへ參るやうな仁ではないが、愚しい千太郎さまへ、世の中の世話を御覽に入れん爲、遊所へ折々の欝散。
伊平　左樣でござる。ちんぷんかんで、我れ〳〵へも意見めさるゝ源五兵衛どのが
東作　藝者の小万と色事とは。
小万　その偏屈な、堅くるしい、几帳面なお方が……思案の外とは、をかしいものぢやわいなア。

ト恥かしきこなし。四人、顔を見合せて

四人　ハテ、とんだ事な。

ト奥よりおとわ出て

とわ　モシ／＼、あなた方がお見えなさらぬとて、千太郎さまがお尋ね遊ばしてゞござりまする。サア／＼、ちやつとお出でなされませいなア。

左十　千太郎どのがお召しとござれば、參らずばなりますまい。

伴右　この様子を三五兵衞どのへ。

伊平　そりや聞を見合せての事に致さう。

東作　サア／＼、先づお出でなされい。

ト合ひ方になり、四人、奥へ入る。おこの、小万の側へ寄り

この　小万さん、なんぼお前が誠らしう云はしやんしても、どうもわたしや合點が行かぬ。源五兵衞さんはお屋敷でも、物堅いお方との噂。此方の內へお出でなされても、ついに女子を捕へて、ちよつとのてんがうも仰しやらぬ。その上、あなたの奥様といふは、お國のお血筋、きつとしたお家柄。まだ御祝言はなけれど、それさへお嫌ひなさるもの、なんぼお前が隱さんしても、源五兵衞さんと譯のある事なら、素振り目遣ひ、滿更わたしぢやと云うて、ちつとは氣取らぬ事は無いわいなア。三五兵衞さんの返事に困つて、ツイ云はしやんしたのであらうがな。なんのわたしに隱す事は無いわいなア。

小万　おこのさん、仲町と洲崎と所は隔てゝあれど、お前の深切。いつぞやからお屋敷様で內方へ來るわたし、馴染みの無い者を、可愛がつて下さんすお前に、なんの隱しませうぞいなア。御推量の通り三五兵衞さんが、しつこう云はしんやして、口說かしやんすが嫌さに、返事に困つて今のやうに、源五兵衞さんと、譯があると云うたのぢやわいなア。

この　さうでござんせう。お前源五兵衞さんに、その事を頼んでかえ。

小万　ほんに、さうでござんすな。そんなら源五兵衞さんに、この様子を話して來うかいなア。

ト行かうとする。

この　アヽ、コレイナア。立ちながら話しもなるまい。殊に座敷にお出でなさるを、お前が呼んでは目に立つ……コレ、おとわ、てまへちよつと、源五兵衞さんを呼びましておぢやいなう。

とわ　アイ／＼、わたしがそんなら。
　ト行かうとする。
小万　コレ／＼、おとわどん、マア、今の事は何にも云はずに置いて下さんせえ。
とわ　小万さん、なんぼ洲崎が場末でも、升屋のおとわでござんす。そんな事は呑み込んで居るわいなア。
　ト潮來節になり、おとわ、奥へ入る。おこの、小万、しか／＼あろ。奥にて
源五　ナニ、芝から使とは何用ぢやしらぬ。
　ト云ひ／＼出て來る。
おこの、芝から身に逢ひたいと申して參つた使者は、どれに居るぞ。
　トおこの、小万、ウヂ／＼して云ひかれる。
源五　ハテ、その使ひは、どれに居るぞ。
この　ハイ、芝からのお使ひは。
源五　どれに居るぞ。
この　ハイ、お使ひでござりまするわいなア。
源五　何を云ふぞいやい……これは小万、先程から座敷に居らぬが、何をして居るぞ。千太郎さまを始め、三五兵衛どのもお尋ねなされた。早く奥へ行きやれ。
小万　ハイ、參じは參じますが、おこのさん、今のをナ。
この　サア、今のをナ。
　ト小万、云へと云ふこなし。
源五　ハテ、何ぢややら、兩方から今のをナ……とは何の儀ぢや。
小万　サア、今のをナ、と申しまするは、へ、、、、へ。
　ト笑ふ。源五兵衛、合點の行かぬ思ひ入れにて、おこのを見る。これも笑ふ。
源五　これはマア、何の事ぢや。
この　サア、これは……オ、、それ／＼、芝からのお使ひでござりまする。
源五　サア、其お使ひに早う逢ひたい。どれに居るぞ。
この　サア、其お使ひは。
源五　その使ひは。
この　爰にでござりまする。
　ト源五兵衛の方へ小万を押しやる。
小万　おこのさん、何ぢやぞいなア。
　トうぢ／＼こなし。
源五　何ぢややら、どぎ／＼と。エ、、こりや身共を嘲弄するのぢやな。よい機嫌な者どもぢや。

ト苦笑ひする。兩人、モヂ〳〵こなし。おこの、小万に、今のを賴めと仕方。小万はお前云うてくれいといふ仕方。兩人よろしくあつて、思はず源五兵衞と顔を見合せて

この　ホヽヽヽ。

小万　ホヽヽヽ。

兩人　ホヽヽヽ。

ト氣の毒さうに笑ふ。

源五　何の事ぢや、さしてをかしくもない儀を……エヽ、芝の使ひは玄關に待つて居るか。

ト奥へ行かうとするを、おこの、源五兵衞の袖を扣へ

この　アヽモシ……其お使ひの口上は、小万さんが聞いてでござります。コレイナア、爰へ來て、今の口上を、とつくりと云はしやんせいなア。

ト小万を源五兵衞の側へ突きやる。

源五　小万がその口上を承つて居るか。何の用ぢや、早うその口上を。

ト小万、思ひ入れあつて、源五兵衞の側へ寄り

小万　その口上は、ナアヽ……ソレ、賴まれておくれなされませ。

源五　その口上は、賴まれておくれなさりませ……そりや何の事だ。

小万　その譯はマアヽ下に居て、聞いておくれなさんせいなア。

ト合ひ方になり、よろしくあつて

奥に來てござんす、あの三五兵衞さんが、何ぢややら、わたしに惚れたのなんのと云うて、口說かしやんすけれど、どういふ事やら、わたしや三五兵衞さんが、嫌ひで嫌ひでならぬわいなア。それで今まで斷り云うても、爰にござんすおこのさんや、奥にござんす伴さんや、左十さんまで賴んで、のッ引ならぬ今宵の切端。得心せぬは外に深い色でもあるやうに問ひ詰められ、せん方無さ、如何にも深う譯のあるお方といふは、源五兵衞さんでござんすと申しましたわいなア。

トこなし。

この　わたしも側に居る所で、左十さんや伴さんへ、あなたと譯のあるといふ返事。ハッと思うて後で聞けば、三五兵衞さんを初め皆さんも、常からあなたを怖がつてござるによつて、源五兵衞さんと譯があると云うたら、この後三五兵衞さんも、云ひ出してゞはあるまいと、思う

て云うたあの子の氣轉。御迷惑なはあなたお一人。

小万　常から物堅いあなた、此やうな自墮落な事は、お否であらうけれど、三五兵衛さんがお國へお歸りなさるゝまで、表向きばかりの色事になつて、わたしが難儀を救うておくれなさりませ。その代りに、嫌らしい事はしは致しませぬ。申し、源五兵衛さま、一生の御恩に着ます程に、皆さんの手前は、今お頼み申したやうに、譯のある體に見せて下さりませ。モシ、お頼み申しますわいなア。

ト源五兵衛、思ひ入れあつて

源五　芝の使ひはハテ、變つた口上ぢやなア……小万は云うても藝者の事なれば、後先の辨まへなく、只今の樣な儀を云ひ出さうとも、おこのまでが同じ樣に、益體もない事を云ひ出すは、なんぼ表向きでも內向きでも、身共は大切なる御用を蒙むり、江戶表へ下り居る身分。殊に斯樣なむくつけな侍ひが、若輩な女子を捕へ、惚れたの、イヤ色ぢやのとは……餘り馬鹿々々しい。

トおこの、思ひ入れあつて

この　それ見やしやんせ。大方斯うであらうと思うたわいなア。小万さん、お前、どうせうと思はしやんすえ。

小万　どうせうと云うたら、頼みに思うた源五兵衛さんは、お否ぢやと云うてゞござんす。詰まらぬ者になつたわいなア。

この　詰まらいでも、詰まつても、

ト源五兵衛を見る。源五兵衛は向うを見て居る。

どうも仕樣が無いもの、

小万　無いでは濟まぬわいなア。

トうぢ／＼する。おこの、源五兵衛へ指さしゝて、頼めと云ふ仕方をして見せる。

この　濟まぬわいなア。

トいろ／＼氣を揉む。小万、こなしあつて

小万　わたしが身の切なさに、源五兵衛さんの御身に心も付かず、ひよんな事を云ひ出して、さぞお腹が立ちませうが、そこをどうぞ堪忍して、今云うたやうに、表向きの所は、マア、色ぢやと云うてさへおくれなさると、よいのでござりまする程に、藝者一人助けると思うて、モシ……これぢやわいなア。

ト拜む。

源五　これは又、迷惑千萬な。

トこなしあつて

藝者といふは僞り、誠は敵討でござる、助太刀いたしてくれいと云ふやうな事なら、二言は無けれど……色ぢやとは、どうもハヤ。

ト小万が形を見て

餘り馬鹿々々しい。

小万　サア、さうではござりませうけれど、頼まれておくれなさりませぬと、どうも今宵、座敷に居られませぬわいなア。

この　ほんに、最前のやうに皆さんに云はしやんした事が、嘘ぢやと知れたら、三五兵衛さんが猶きいてゞはあるまい。

小万　それぢやによつて、此やうに押しつけてお頼み。

この　常もの云はぬあの子が、此やうに頼ましやんす事。

小万　どうぞ聞入れて

兩人　おくれなさりませいなア。

ト源五兵衛、思ひ入れあつて

源五　ムウ、すりや、今宵の所が拔けられぬから、どうあつても押しつけての頼みか。

小万　アイ、あなたより外に

この　この釘はきゝませぬ。

源五　これは又迷惑千萬……よいわ。兩人が頼み、どうなりと致して遣はさう。

小万　エヽ、そんなら頼まれておくれなさるかえ。

この　得心してあげなさるかえ

源五　いかにも頼まれて遣はさうが、表向きばかりぢやぞ。

小万　アイ、三五兵衛さんの手前を、譯のある分にさへ云うておくれなさんすとよいわいなア。

源五　サア、それでよい事なら、どうなりと云うて遣はさう。

小万　そんなら、いよ〳〵さうぢやぞえ……ア、嬉しや、おこのさん、とんと痞が下りたわいなア。

この　わたしが心までさつぱりとした。最前源五兵衛さんが、否ぢやと仰しやつた時には、こりやマアどうしようと、大抵案じた事ぢやないわいなア。

小万　さいなう、わたしもひよんな事云ひ出して、後へも先へも行かなんだによつて、いつそ駈落ちせうと思うたわいなア。

源五　ハヽヽヽヽ、客に口說かれ返事に困り、駈落ちせうとは、しどのない所が、流石は藝者。ハヽヽヽヽ。

イヤ、小万、其方が頼みを聞いて遣はすからは、また身共が頼む事も、きいてもらはねばならぬが、合點か。

小万　そりやモウ、何でもきくによつて、必らず今のを頼むぞえ。

源五　サア〳〵、よいてや〳〵。

ト奥にて

三五　おこのや〳〵、おこのはどれに居る。

ト云ひ〳〵出て來る。三人思ひ入れあつて、よろしく座を改める。三五兵衞、おこのを見て

おこの、これに居るか。最前から尋ねて居つた……源五兵衞どのもこれにござるか、……ホウ、小万もこれに居つたか。

小万　アイ。

ト源五兵衞の方へ思ひ入れ。

源五　イヤ、三五兵衞どの、御存じの通り、拙者一盃もたべませぬ。千太郎さまがお好みの泡盛、强ひつけられて甚だ酩酊、暫く醉を醒さうと存じて、失禮の段、御免下されい。

三五　成る程、御酒を參らぬおてまへ、泡盛は御難儀でござらう。然らばこれにて御休息なされい。千太郎さまの御前は、身がようしう取計らひませう。

源五　それは忝なう存じまする。

トこなし。小万立つて行かうとする。

三五　ア、小万、待て。其方は何れへ參る。

小万　アイ、お座敷が淋しからうと思うて。

三五　ハテ、座敷には藝者どもが數多居れば、よいわサ。マア〳〵、爰でちよつと話しやれな。

小万　源五兵衞さん、爰に居ても大事無いかえ。

三五　ハテ、源五兵衞どのが、お身がこれに居つたとて、なんの大事があらう。マア〳〵、下に居やれ。

この　小万さん、三五兵衞さんが、あのやうに仰しやつてぢや程に、マア、下に居りいなア。

ト小万を無理に下に置き

申し、三五兵衞さん、わたしをお尋ねなされましたは、何の御用でござりますえ。

三五　成る程、其方を尋ねたは

ト小万を見て、また源五兵衞の方を見て

イヤ、さして急な用でもない。

トこなし。

源五　おこのをお尋ねなされたは、エ、、さてはお馴染と

やらの御用向きかな。

三五　これは又、源五兵衞どのには御酒機嫌のしるし、ついにない洒落をやらつしやるな。ハヽヽヽ。時に源五兵衞どの、手前そこ許、大切なる御用につき、當所の屋敷へ參り、方々の遊所々々へ立寄りますも、彼の大切なる一品を

ト云はうとする。源五兵衞、あたりを紛らし、取合はぬゆゑ、三五兵衞、熱くなり

サア、彼の大切にいたす千太郎さま、我れ〳〵が守護いたし、當所の御逗留、下世話でいふ智惠つけの爲、拙者を乳母のやうに思し召しでござるは、氣の毒なものでござる。

源五　生得穩和なお生れつき、平常お側にござる貴殿、御心配の程、推察仕つてござる。

三五　これは〳〵御挨拶。それに付きましては、遊所へお出での砌りは、美眉よき女を御覽なさるゝと……困つたものでござる。

源五　イヤ〳〵、賢愚ともに、色情は、計られぬものと承はる。

三五　ハア、然らば其許のやうな、四角四面な、偏屈な仁でも、色は捨てられぬものでござるかな。

源五　捨てられてよいものでござるか。堅いと申すは

ト刀を見て

この手前、拙者とても同じ人間。貴殿ぢやと申しても、まんざらお嫌ひでもござるまい。

三五　イヤモウ、さう云はれては、一言もない。誠に大好物でござるわい。

ト扇子を額へ當てゝこなし。

源五　さう見える〳〵。時に、その大好物のお馴染があらうが、拙者には、なぜお隱しなさるゝな。

三五　イヤモ、隱すではござらぬが、斯樣でござる。舊冬までは馴染の女郎もござつたれど、只今ではちと外に。

ト小万を見て思ひ入れあつて。

イヤ、外に存じよりの女がござつて、彼の馴染の女郎もいつしか遠ざかりました。

源五　ハテ、それは御執心な儀でござるな。

三五　時にその執心な女めに、手を替へ品を替へ、だんだんと云ひ寄りますれど、今に於て得心いたさぬ、根の強い女めゆゑ、拙者も殆んど困り入つて居るて。

源五　して、その女めは、矢張り遊女の類でござるか。サ

ア、それを云はつしやれ〳〵。

三五　さう問はれては、どうか云ひ憎いやうなれど、てんぼの皮、云うてのけうか。必らず笑はつしやるな……身共が執心の女と申すは

源五　女といふ……

三五　これに居る

源五　これに居る

三五　小万ぼうでござる。

ト顔を隠してこなし。小万、ピンとしてあちらを向く。源五兵衛、小万に思ひ入れあつて

源五　ハ、ア、さては貴殿が御執心といふは、小万でござるか……イヨ〳〵、惚れられて様々。

三五　嬲にさつしやるな〳〵……所で彼の女は、ハテ、意地の強い奴、さま〳〵と云ひ寄りましても、今に於て返事を致さぬて。

源五　そりやその筈でござる。彼れめには、きつと致した間夫がござる。貴殿には御存じないか。

三五　イヤ、彼れが事は當所深川は勿論、吉原までも、篤と聞き合せましたところが、色がましい者は一人もないと承る。

源五　サア、そこが大きな御料簡違ひといふもの。深間がござるゆゑ、所詮貴公のお心には……ナア小万。

ト小万へこなし。三五兵衛、急いたる心にて

三五　そりや聞き事でござる。して、その深間と申すは、何奴でござるぞ。御存じならば、お聞かせなされい。

ト源五兵衛の方へにじりより、キッとなる。

源五　成る程、左やう御意あればお話し申さう。小万めが深間といふは。

三五　深間といふは。

源五　面目ないが……身共でござる。

三五　エ、。

ト悔りするこなし。源五兵衛、扇子で顔を隠す。小万嬉しきこなし

何と云はつしやる。小万が深間といふは、源五兵衛どの、其許か。

源五　餘人へ必らず御沙汰御無用。

ト三五兵衛こなしあつて

三五　ハ、、、。こりや嘘だ〳〵。嘘々。手前が小万に執心だと聞いて、嫌がらさうと思うて、嬲らしやるのか。嘘だ〳〵。

小万　イヽエ、噓ぢやござんせぬ。源五兵衛さんとは、疾から譯があるけれど、誰れにも知らさぬ忍び逢ひ。お前がいろ〳〵と云うておくれるを、素氣なう返事したは、斯ういふ譯があるゆゑ。三五兵衛さん、必らず腹立てゝ下さんすなえ。

三五　ムウ。然らば、いよ〳〵小万が。

源五　疑はしくば、證據をお目にかけう。サア、小万、斯う顯はれてからは苦しうない。爰へ來い。

小万　そんなら行ても大事ないかえ。

源五　三五兵衛どのは粹ぢや。大事ない〳〵。

　ト小万、源五兵衛の側へ來て、ベツタリともたれかゝつて坐る。三五兵衛、これを見てムツとするこなし。

この　これはマア、あんまり思ひがけないによつて、最前から御挨拶も申しませなんだ。小万さん、マア、いつの間に出來た事ぢやぞいなア。

小万　おこのさん、これまでお前に隱したのは、三五兵衛さんを初め、お屋敷は皆内方へお出でるによつて、それで隱した程に、堪忍しておくれえ……三五兵衛さんもその代りに、お慮外ながらわたしが、キツとよいのをお世話してあげる程に、今までの事は、とんと川へ流しておくれえ。

源五　ハテ、それは云ふに及ばぬ事。左樣な事を根葉に持つ、三五兵衛どのではない……ナニ、爰な通人め。只今小万が申す通り、いづれなりとも、餘の藝者を、とも〳〵お世話いたすから、小万の事は、さつぱりと思ひ切つて遣はされたが、よさゝうなものゝやうに

　ト云うて居るうち

三五　やかましい、默らつしやい〳〵。エヽ、いま〳〵しい。最前からベラリ〳〵と、はつち坊主が米を溢したやうに、やかましいわえ。身不請ながら國元よりお指圖を請け、大切な詮議に參つた身共、其許のやうに、賣女藝者に魂を奪はれるやうな侍ひぢやと思うてか。身共を馬鹿におしやるな。

　ト不興なる體。三人、顏を見合せ、源五兵衛、氣を呑へ、こなしあつて

源五　三五兵衛どの、御免下されい。拙者餘程たべ醉ひまして、何を申したやら、とんと存せぬ。この上は御免を蒙むつて、醉醒しと致したい。サア、小万、いつものやうに介抱頼む。

　ト云ひ〳〵小万が手を取り、奥へ行かうとする。三五

兵衛、こなしあつて、小万が裾を引取め
三五　源五兵衛、小万。すりや、兩人は。
ト思ひ入れ。この時奥にて
〽あれ蟲さへも、番ひ離れぬ揚羽の蝶。
ト唄ふ。源五兵衛こなしあつて
源五　番ひ離れぬ我れ〳〵二人……三五兵衛どの、後刻。
ト唄にて、源五兵衛、小万、手を引合ひ奥へ入る。後に三五兵衛、奥を見て、口惜しきこなし。おこのと顔を見合せ、ちやつと莨を吸ひつける。おこの、思ひ入れあると、奥より左十郎、伊平太、伴右衛門、東作、ツカ〳〵出て
四人　三五兵衛どの。
三五　何れも。
ト奥を見て思ひ入れ。おこのは、手をモヂ〳〵手持なく
この　なんと皆さん、お聞きなされましたか。小万とした事が、何の隠さいでもよい事を隠して、あなた方にもお腹を……サア、お腹はお立てなされまいけれど、わたしとても大抵悪い事ぢやござりませぬ。イヤ、斯うなさらぬかえ。小万さんへの面當に、仲町でどれぞよい藝者さんを色にして、ア、、どれがよかろうぞ。オ、、それそれ、仲町の事は、おちよや、おとわがよう知つて居ります。ドレ、奥へ行て尋ねて參りませう。誰れさんがよからうなア。
ト紛らし、こなしあつて奥へ入る。始終合ひ方、三五兵衛、莨のみながら
三五　いづれもお聞きの通り。面目次第もござらぬ。
左十　三五兵衛どの、こりや御思案なされずばなりますまい。
三五　思案というて外にはない。身共を今まで馬鹿にした女め、その上、今の如く、これ見よがしに兩人が有樣。この返禮は手前が胸に。
伴右　して、その御思案は。
三五　生得愚かしい千太郎さま、何事も身が詞次第。あの馬鹿者をたらしこみ、源五兵衛めに恥辱を與へ、小万めが吠え面を、たつた今見せませう。
伊平　成る程、貴殿のお詞次第で、如何やうともなる馬鹿殿の千太郎さま、玉に使ふは、天晴れの御思案。
三五　併しながら、一筋ではゆかぬ源五兵衛。まさかの時は、コレ。

四人　ト囁やく　これより段々順に囁く。
　心得ました。
ト思ひ入れある。この時彌助、花道より文を持つて戻つて來る。
彌助　どうぞ座敷の具合がよければよいが……おとわどん、おちよどん。
ト奥を見て呼ぶ。
東作　ヤイ〳〵、仲居どもを呼ぶ、われは何者だ。
彌助　私しは仲町の、櫻屋の者でござりまする。
伊平　櫻屋と申すは、慥か小万が內であらうな。
彌助　ハイ、左樣でござりまする。
ト三五兵衞、文を取れとこなし。
左十　見れば文を持つて居るが、何用あつて參つた。
彌助　ハイこの文は、小万さんに、急用があつて參りました。
伴右　フウ、小万に屆けるのか。
彌助　左樣でござりまする。
伴右　然らば身共が、いま座敷へ參るから、小万に屆けて遣はさう。
彌助　それは餘りお憚りでござりまする。
伴右　大事ない〳〵。
彌助　左樣なら憚りさまながら、お賴み申し上げまする。
ト文を伴右衞門に渡す。伴右衞門直ぐに三五兵衞が側へ持つて行く。三五兵衞、上封じを見て封を切る。彌助、恟りして
彌助　ア、申し〳〵、お前さん方が御覽じては
ト寄るを
四人　やかましい。下がらぬか〳〵。
彌助　それでもお前さん。
四人　慮外ひろぐと、ぶツ放すぞ。
ト思ひ入れ。彌助、仕方なく、怖々呟やいて居る。
三五　急ぎ申し入れ候ふ、われら事今夜は殊の外氣分惡しく候ふ間、おこのさまへ斷り申し、座敷の首尾惡しからぬやうにして、この文屆き次第早く御歸り待ち入り參らせ候ふかしく、小万どのへ、母より……なんと、何れも、お聞きなされたか。
四人　イカサマ、怪しい狀でござりまする。
三五　母親が病氣というて、ちつとも早う歸らうといふ、小万めが拵らへ狀、大概知れた事だ。ヤイ、この狀は僞りであらうがな。小万が客といふは、この三五兵衞だ。

母親が病氣であらうが、そこねやうが、今宵中は歸す事はならない。さう思つてうしやアがれ。

彌助　そりやお前さん、御無理と申すものでござりまする。なんぼお客が大事でも、親の病氣を構はずに、座敷が勤めて居られませうか。其やうに仰しやらずと、どうぞ今夜のところは。

三五　ならぬ。爰な糠味噌野郎めが。

トきつと云ふ。彌助「ハイ」と怖がる。

うぬは大分小万が贔屓をひろぐな。エヽ、聞えた。小万と源五兵衞が仲を世話やいて居るな。

左十　それゆゑ四の五のと申すのでござらう。いつそぶち放して。

ト刀に手をかける。彌助、飛びつき

彌助　ア、申し／＼、そりやア何の事でございまする。最前から承はれば、源五兵衞さまと小万さんとの中を世話やくのなんのと、とんと合點が參りませぬ。

三五　あのマア、しら／＼しい面を御覧じろ……エヽ、顏に似合はぬ太い奴だ。小万と源五兵衞が仲を知らぬといふ事はない筈。いつからの事で、どこで出合ふ。有やうに吐かし居ろう。

左十　吐かしやうが遲いと、うぬ、痛い目に會はせるぞよ。

皆々　それが否なら、キリ／＼吐かせ。

トきめつける。此うち彌助、始終ブル／＼して居る。

彌助　ア、モシ／＼、其やうに口々に仰しやつて下さりますな。なんぼ膽玉の太い私しでも、斯うお侍ひさまに取卷かれましては、ブル／＼ものでござりまする。其やうに仰しやらずと、私しが申す事を聞いておくれなさりませ。

左十　吐かす事があるなら、爰へ來て、キリ／＼吐かせ。

皆々　早く爰へうせろ。

ト彌助、氣味惡きこなしにて

彌助　さうお侍ひさまが立はだかつてお出でなされては

ト怖々眞中へ來て座り

譯と申すは外でもござりませぬ。あの小万さんは評判の石部金吉、これまで方々のお客が、いろ／＼と仰しやつても、その方は大嫌ひでござりまする。源五兵衞さまは元より、あの子に轉ぶなぞといふ嫌味な事はござりませぬ。どういふ事で源五兵衞さまと、譯のあるやうに仰しやりまするな。

三五　譯のあるといふは、小万と源五兵衞が口から、斯やう斯やうでござると、たつた今吐かしたワ。

彌助　エヽ、そんなら小万さんと源五兵衞さまとが、こりやアとんだ事だ。

ト呆れる。

伴右　然らば其方は、實正知らぬか。

彌助　藝者の色事を、廻しの私しに隱すとは

ト小判の形をして見せ

レコを放すまいと思つて、テモあたじけない源五兵衞さま、こりやア餘ッぽど儲けそこなつたわえ。

ト三五兵衞、彌助が樣子を、つく〴〵と見て

三五　彌助とやら、心底見えた。一つ呑め〳〵。

ト丼鉢を出す。

彌助　ハイ、そりやア有り難うござりまする。

三五　伴右、一つついで遣はされ〳〵。

ト彌助、捨ぜりふにて丼を取りあげる。伴右衞門一つ注ぐ。彌助こなしあつて一つ呑む。

三五　ソレ、取つて置け。

ト紙入れより小判を出し、紙に包み投げてやる。

彌助　此お金は。

三五　小万を取持つ骨折り賃。

彌助　左樣なら、あなたも小万さんに。

三五　ぞつこん惚れて惚れ拔いて居る、この三五兵衞。これまでさま〴〵と云ひ寄つても、取合はぬこそ道理、腐り合うて居る兩人、どうも身共武士が立たぬ。小万を身共に取持たば、まだその上に如何ほどでも、金子は其方が望み次第。

ト彌助思ひ入れ。

彌助　ようござりまする。源五兵衞さまを切れさせて、小万さんを取持ちませう。

三五　われ、その詞に違ひはないか。

彌助　廻し冥利、下駄を下げぬ法もあれ。

四人　しかと取持つな。

彌助　深川の廻し仲間でも、小口もきく彌助、鹽屋ぢやアないが、賴まれたら一寸でも後へは寄らぬ。親船に乘つたと思つておいでなされませ。

三五　ハテ、小氣味のよい奴だな。

ト奧にて鳴り物入りの所作の切れになる。

彌助　アレ、奧は騷ぎの太皷三味線、我れらも又このお金で、どこぞへ出かけ一騷ぎ。三五兵衞さま。

ト最前の文を引破り
これで今夜の工面はガラリと。
三五　でかした。
彌助　これから有る事無い事、見る目嗅ぐ鼻のこの彌助。
三五　身共は奥へ參り、彼の馬鹿人形を、そろ／＼と遣ひかけませうか。
左十　誠に三五兵衞どのゝ機關。
三人　水銀の仕かけやう。
三五　細工は流々、さらば仕上げをお目にかけうか。
ト踊り地にて、三五兵衞、踊りながら奥へ入る。これに付いて皆々奥へ入る。
彌助　思ひがけない此お金。
ト戴いて
これで先づ合羽の身請けをして、ドリヤ、假宅の嚊アに逢つてこようか。
ト矢張り踊り三味線にて、向うへ入る。ちやん／＼にて、この道具ぶん廻す。
本舞臺、上の方障子屋體、向う一面の襖、上の方の刀懸けに刀大分かけてあり、すべて大座敷の模樣。

爰に千太郎、三五兵衞、宅左衞門、久米吉、淺香、居て、てんでに酒盛りの體。下の方に左十郎、伴右衞門、伊平太、東作、女中二人を相手に酒盛り。方々に燭臺あまたともし、鶴次、龜吉、澤吉、廓名寄せの唄に合せ踊を踊り居る。
皆々　イヨ／＼出來ました／＼。
ト口々に褒める。
宅左　なか／＼三人とも、よい若衆ぢや。名はなんといふぞ。
澤吉　ハイ、澤吉と申しまする。
龜吉　私しは龜吉と申しまする。
鶴次　私は鶴治と申しまする。
淺香　皆男藝者さんぢやわいなア。
三五　大分味をやつた。イヤ、千太郎さま、彼れらに御褒美のお詞を遣はされませう。
千太　オヽ、遣はさう／＼。イヤ、若衆ども、爰へ來い來い。
三人　ハイ／＼。
ト三人、直ぐに千太郎が側へ來る。
千太　今の褒美に、おれが國産を遣はさう。

ト抱きつかうとする。

三人　私どもは、お國產などは存じませぬわいなア。

トこちらへ來る。

千太　こちの國の名物を知らぬとは、わいらはきつい馬太郎ぢやな。

女皆　オホヽヽヽ、ほんにきつい馬太郎さんぢやわいなア。

千太　身共は千太郎、あいらは馬太郎。ハヽヽヽ。こりやよいわいなア。

左十　イヤ、時に、先程から源五兵衛どのがござらぬが、何れへ參られたな。

三五　誠に源五兵衛には、何をして居らるゝ……ハツ、千太郎さまへ申し上げます。源五兵衛が居りませぬ。これへ呼びませうかな。

千太　ほんに最前から見えぬ。これへ呼べ〳〵。

三五　ハツ〳〵……源五兵衛どのは、何れにお居やる。千太郎さまのお召し、何れも。

皆々　源五兵衛どの〳〵。

ト口々に呼び立てる。下座の方の障子の內より

源五ハツ〳〵。

ト云ひながら出て下の方へ扣へる

三五　貴殿には、どれへお出でなされた。千太郎さまのお待兼でござる。

源五　イヤ、失禮ながら暫らく睡眠、眞平御免下さりませう。して、御用はな。

千太　その用は身は知らぬ。こりや、覺えぬか。

ト此うち源五兵衛が出た襖より小万出て來て、そこら見廻し、よき所へちやつと坐る。皆々これを見て

皆々　見付けたぞ〳〵。小万、そちやいづくへ參つた。

三五　小万、わりや、どれへ行て居つた。有やうに云へ。

小万　わしやどつこへも參りは致しませぬわいなア。

三五　千太郎さま、有やうに申させませうな。

千太　オヽ、申させい。ヤイ小万、わりやどこへ入つて居つた。有やうに云へ。云はぬと泡盛で云はすぞよ。

伊平　泡盛とはようござりませう。サア、これで飲め飲め。

ト大きなる、こつぷを小万が前へ置く。小万、ムツとして、こつぷを取上げ

小万　おとわどん、一つついでおくれ。

トおとわ、酌をする。小万、飲まうとする。源五兵衛とめて

源五　待て〳〵。もうよい……イヤナニいづれも。小万が座敷を明けましたは斯うでござる、拙者暫らく睡眠の間介抱頼みましたるゆゑ、お座敷の事を缺き、申し譯もない仕儀、彼れが不調法は拙者に免じられ、何卒御容赦を。
左十　アヽ、すりや、小万が詫び言は、其許がさつしやるか。ハテ、變つたとこから、御挨拶でござるな。
伴右　源五兵衛どの、御深切な儀でござるな。
皆々　ハヽヽヽ。
　　ト口々にやかましく笑ふ。源五兵衛、これに構はず
源五　コレサ、小万、千太郎さま名々方の御機嫌直し、わつさりと一つ飲め。
小万　アイ、それならこの杯で、思ひざしにせうわいな。
　　ト小さい杯を取上げる。
伴右　思ひざしとはよからう。おとわ、一つつげ〳〵。
とわ　アイ〳〵。
　　ト酌をする。小万、酒をのむうち
四人　思ひざしとは、どこへ行かうぞ。
　　ト口々に云ふ。小万、飲みしまひ
小万　出石宅左衛門さん、御遠慮外ながら。
　　ト敵役皆々、顔を見合せて

左十　出石宅左衛門どのへ、小万が思ひざしとは。
皆々　ヨウ〳〵、宅左衛門さまめ〳〵
　　ト宅左衛門、最前より片隅へ寄つて居て、この時
宅左　これは〳〵、何れもお褒めのお詞、有り難うござる。拙者先程より餘り杯が廻らぬゆゑ、莨ばかりのんで居つた。小万の思ひざし、さらば一つたべうか。
　　ト云ひ〳〵にじり出て杯を取上げる。
ちよ　ドレ、わたしがお酌いたしませう。
　　ト此方にて酒盛りになる。
三五　なんと千太郎さま、あれに居りまする小万、あなた様に、少々心のあるやうな體にござるが、御前にはなんと。
千太　何を嘘らしい。
　　トこなし。
三五　イヤ〳〵、誠にござりまする。何は差措き、これへ呼びませうかな。
千太　來るなら呼んで見い。
三五　ハア……小万、お召しなさるゝ。これへ參れ。
　　ト小万、聞かぬ顔にて、源五兵衛、宅左衛門と酒盛りの體。すべて大座敷にて、兩方へ分れて居る模樣なり。

四人　小万、早くこれへ來やれ〳〵。

　ト　やかましう云ふ。小万、思ひ入れあつて

小万　オヽ、仰山な、いま參りますわいなア。爰にも杯がもつれてある。もちつと待つておくれ。

源五　これはどうしたものぢや。たとひいかやうとも、千太郎さまのお召しとあれば、早う行て、御機嫌に入るやうにしやれ。

小万　そんなら行ても大事ないかえ。

源五　大事ない〳〵。

小万　お前の許しなら、ドレ、行かうわいなア。

　ト立つて此方へ來る。

兩人　イヨ〳〵、源五兵衞どのゝ云ふ事をきいて樣々。

　ト媚てる。

小万　オヽ、をかし。いつそ媚てゝぢや。久米吉さん、淺香さん、お前方も爰へお出でいなア。

　ト三五兵衞と千太郎が間へ坐る。

三五　イヤ、千太郎さま、この小万が儀、如何取計らひませうな……ハア、然らばその通り申しつけませう……ナニ小まん、これにおいでなさるゝ千太郎さま、いつぞやより其方を甚だの御執心、御大身に身を任すは、其方達が果報といふもの。有り難いと思うて、お請けを申したがよい。なんと、お心に叶ひませうがな。

千太　オヽ、叶うた〳〵。マア、ちよつと爰へ來い。

小万　ア、申し、私しは彼方へ參りますわいなア。

千太　三五兵衞、ねつから來ぬぞよ。

三五　サア、ようございます。暫らくお扣へ下さりませう……小万、イヤサ、藝者ではない、假初めながら我れ我れが御主人、千太郎さまがお心をおかけなされた其方、なぜお請けを申さぬぞ。

小万　御大身であらうが、お大名であらうが、人といふものは心意氣ばかりなものでござります。愚かしい千太郎さまをたらしこみ、お前はマア、侍ひ

　ト云はうとする。源五兵衞、莨のんで居て、咳ばらひして紛らかす。

イヤ、さもしい藝者のわたしに、御大身樣は釣り合はぬわいなア。

　ト立つて此方へ來る。三五兵衞、こなしあつて

三五　すりや、いよ〳〵千太郎さまのお心には、從はぬか。

　ト我が云ふ通りに云へと千太郎へ思ひ入れ。

千太　すりや、いよ〳〵千太郎さまのお心には、從はぬの

か。

ト云うて、三五兵衞が方を見る。小万、矢張り默つて居る。

三五　しぶとい女め。

ト千太郎へして見せる。

千太　しぶとい女め……ねつから物云はぬな。なんぼ物云はいでも、身請けして國へ連れ歸り、われと一緒に、隱居樣とはどうであらう。

四人　小万、有り難いか。どうだ〳〵。

ト云ふ時、源五兵衞にじり出て

源五　イヤ〳〵、憚りながら小万儀は、たとへ身請けをなされても、お心には從ひますまい。

左十　ムウ、千太郎さまが身請けなされても、お心に從はぬとは。

三人　源五兵衞どの、して、その樣子は。

源五　イヤ、外でもござらぬ。小万は拙者が相方でござります。

皆々　ヤアヽ。

源五　それゆゑ身請けは御無用と、お止め申しましてござりまする。

千太　イヤ、そんなら小万は、其方が色か。がをれ。

ト呆れる。三五兵衞こなしあつて

三五　源五兵衞、扣へ召され。愚かしうても千太郎さまは御主人の片割れ。その御主人の前をも憚からず、小万はお身が相方といふからは。

源五　金輪奈落、いづくまでも。

ト小万が手を持つて引寄せる。

三五　御覽なされましたか。ハテ、ほてくろしい儀ではござりませぬか。

千太　ハテ、ほてくろしい儀ではござりませぬか。

左十　御主人を踏みつけ、法外千萬。

東作　千太郎樣がお心をかけられし小万を、橫取りした源五兵衞。

伴右　家來の身をかへり見ず、これ見よがしに

伊平　云はうやうもない、憎くい奴。

ト皆々立ちかゝる。

千太　憎くい段か、小万を橫取りした源五兵衞、皆寄つて叩いてやれ〳〵。

三五　何れも、千太郎さまの御意ぢや。ぶちのめさつしやい〳〵。

四人　ハア……御意ぢや〳〵〳〵
　ト源五兵衛を皆々、扇にて散々に打擲する。源五兵衛ヂッと堪へて居る。小万取付き
小万　源五兵衛さん、思ひがけないこの様子、斯うならうとは露知らず、よしない事をお頼み申して。
　ト云はうとする。小万を引退けて
源五　コリヤ、なんにも云ふな。云ひ譯するも斯うならぬ先の事、一旦武士が頼まれてからは、是でも非でも、立て通すが、千島家の國風ぢやわやい。
小万　ぢやというて、みす〳〵
　ト源五兵衛、引取つて
源五　サア、みす〳〵知れた二人が仲を、御存じない千太郎さまの、御腹立は御尤も。それぢやによつて
　ト小万を突き放す、
小万　エ、
　ト身を震はして源五兵衛を見て
　堪忍して下さんせ〳〵。
　ト源五兵衛を拜むこなし。
三五　ハ、、、。なんといづれも、色男といふものは、女の可愛がるものでござる。

四人　左樣でござる。
　ト三五兵衛、源五兵衛が側へ寄り
三五　源五兵衛、女めゆゑに打擲され、本望であらう。小万、其方も嬉しからうなア……千太郎さまといひ、殊に大切な役目を蒙りながら、遊所の女に魂を奪はれたる源五兵衛、お國への聞え、暫らく遠慮仰せつけられずばなりますまい。
千太　さうぢや〳〵。ヤイ、源五兵衛、大事の用向きを蒙りながら、散々の身持ち、國への遠慮、身が目通りは叶はぬぞ。
小万　そんなら源五兵衛さんは。
三五　御前は叶はぬ。
　トきつと云ふ。小万、心意氣あつて、三五兵衛が側へ行かうとする。源五兵衛、引廻して留める。小万、源五兵衛を見て泣き落す。
三五　最前より、よしない事で座敷の不興、千太郎さまには、お座敷を替へられ、また改めて御酒に致しませう。
千太　それもよからう。これから奥へ行て、藝者どもには三味線胡弓、我れらは楊弓と出かけう。
皆々　これにて一興でござりまする。

千太　サア、みな來い。
三五　何事によらず、御前の御意を申し繼ぐこの三五兵衛とても事に、これも御意ぢや／＼。
ト扇にて源五兵衛を叩く。小万、源五兵衛、思ひ入れ三五兵衛、ヂロリと見て
三五　ハ、、、
ト唄になり、この一件殘らず奥へ入る。合ひ方になり、源五兵衛小万殘る。障子屋體より、おこの出て、二人が側へ來て、思ひ入れあつて、小万が袂を扣へ
この　最前よりの様子は、皆聞いたわいなア。小万さん、お氣の毒なものになつたなア。さうしてマア、この仕舞ひは、どうしようと思うておやえ。
ト源五兵衛へ思ひ入れある。
源五　ハテ、よいわい。斯様な難儀にならば頼まれまい、また難儀にならずば頼まれやうと云ふやうな、二筋な頼まれやうはせぬ。小万、何にもキナ／＼思ふ事はない。御前を遠ざけられたといふて、さしたる仕落ちでもない。また御機嫌の直る事もあらうわい。
小万　わたしに案じさせまいとて、其やうな事を仰しやつて下さんしても、三五兵衛づらがお側に居るうちは、
ト思ひ入れ。
この　さうでござんす。源五兵衛さんの御難儀も、元の起りは三五兵衛さんが、お前を口説かしやんしたを、得心さしやんせぬゆゑとは、みす／＼知れてありながら、さうとも云はれぬ最前の仕儀。
ト此うち小万、思ひ入れあつて、あたりの枕を取つて來て、刀掛けの源五兵衛が刀を抜き、指を切る。兩人、愕りして
源五　これは何事を致した。
この　痛みはせぬかいなア。
ト介抱する。
小万　イ、エ、大事ないわいなア。
トこなしあつて、指を取り、紙に包み、源五兵衛が前に置く。
これを取つて下さんせ。
源五　ヤ。
小万　賤しいわたしが頼んだ事、否とも云はず聞いて下さんしたその上に、お屋敷の住居さへ、叶はぬやうにした元の起りは、淺はかなわたしから、今更なんとお禮の云ひやうが無さに、眞實惚れたといふ、心の誓ひでござん

すわいなア。

　ト源五兵衛、思ひ入れあつて

源五　ムウ、最前頼んだは僞りなれども、その禮の云ひ樣が無さに、指まで切つて。

小万　アイ、お國には歴とした、お嫁御さんのある事は聞いて居れど、この江戸においでなさんすうちは、せめてわたしを女房に……イヤ、女房は過ぎるによつて、飯焚とも思し召して、どうぞお側に置いて。エ、モシ。

　ト思ひ入れ。おこの、こなしあつて

この　小万さん、けうといものぢやわいなア。云ひ合せの色事を、心底からの惚れやう、流石は名取り藝者さん程あつて、達引が格別ぢや。よく惚れさしやんした。指は愚か、腕も切つてあげいなア。

源五　ア、コレ〳〵、おこの、其やうに側からそやし立てるな。身共が承知ぢややら、承知でないやら、知れもせぬに、小指一本でさへ迷惑いたし居るに、腕を貰うて、なんとするものぢや。

小万　そんならわたしがお氣に入りませぬかえ……お氣に入らぬは初めから知れてはあれど、外にお禮の云ひ樣が無さに、折角切つた指も仇事。ぢやというて、わたしゆゑに、そのお身にさせまして、此まゝではどうも……得心して下さんせねば、いつそ。

　ト源五兵衛が刀に手を掛ける。よろしく留めて

源五　待て小万。それでおぬしの心底見えた。源五兵衛、承知いたした。

この　小万さん、アレ、承知ぢやと仰しやつてぢやわいなア。

小万　そんならほんまに、承知しておくれなさんすかえ。

　ト源五兵衛、小万が手を取る。

源五　親が滿足に產みつけた五體の指、それを不足さしての、其方が禮……承知した。

　ト指を頂いて懷中する。

この　小万さん、見やしやんせ。指を頂いて承知ぢやといなア。

小万　源五兵衛ざん、何にも云はぬ。エ、、忝なうござんす。

この　源五兵衛さん、思ひがけない今日の首尾。委しい話しは、あの小座敷で。

源五　それには及ばぬ事ぢや。

この　及ばぬでは、小万さんの氣が濟まぬわいなア。サア

サア、ちやつとお出でなさんせいなア。

ト源五兵衛を無理に立たせる。源五兵衛、勿怪な顔にて立ちあがり

源五　そんなら行かうか。

この　サア、お出でなされませ。

ト突きやる。源五兵衛、思ひ入れあつて

源五　今までは主人持ち。今宵からは浪人の源五兵衛。アア、まゝよ。

ト唄になる。おこの、源五兵衛と小万を障子屋體の内へ突きやり、しやんと障子をしめ、後を眺め、こなしあつて奥へ入る。始終合ひ方。向うより土手平、中間の形にて、状箱持つて來て

土手　お旦那、三五兵衛さまは何れにござるやら。三五兵衛さま、お旦那。

ト呼ぶ。奥より三五兵衛出て

三五　土手平、あわたゞしい、何事ぢや。

土手　イヤ、お國元より、只今火急のお飛脚が參り、即ちこの状箱、源五兵衛さまとお旦那へ、御連名の御状でござります。

ト状箱を差出す。三五兵衛、状を出し見て、

三五　こりや國元の家老勝間源次兵衛より、身共と源五兵衛とへ。ムウ。

ト状箱を開き状を出して讀む。

こりやコレ、主人千島の冠者さまにも、當夏富士の御狩の御供を仰せつけられたとある、それにつき先達て紛失いたしたお家の重寶、龍虎の呼子、一刻も早く、詮議仕出し、源五兵衛と身共に歸國せよとある源次兵衛の書状……こりや幸ひ、源五兵衛に及ばぬ。たとへこの状到來せずとも、此方より源五兵衛が身の上、委しう認めた源次兵衛へのこの状。

ト懐中より出して

奥にてとくと認め置いたれば、これを返事と飛脚に渡し、國元の源次兵衛へ早速屆けさせよ。

ト右の状を箱へ入れて渡す。

土手　すりや、この御状をお返事と申し、お國許の源次兵衛さまへ。

三五　いかにも。しつかりと渡せ。そして、

ト囁く。障子屋體の内にて

小万　申し、源五兵衛さん、なぜに其やうに、すげなうさしやんすぞいなア。もつと此方へお寄りいなア。

トこれを聞いて三五兵衛、障子の方を窺ふ。

土手　申しお旦那。コレ、申し。

ト大聲にて呼ぶ。

三五　コレ〳〵

ト思ひ入れあり　これをキツカケに、

ひやうし幕

# 大切

大和町貸座敷の場
仲町花屋の場
中木場の場

役名　薩摩源五兵衛。笹野三五兵衛、出石宅左衛門。賤ヶ谷伴右衛門。下郎、土手平。若黨、八右衛門。家主、六右衛門。非人、猪の堀の三。同。ちやん助。廻し男、彌助。花屋女房、おみき。藝者、おふさ。同、はる吉。花屋伊三郎。櫻屋の小万。

本舞臺、三間ともに、通し平舞臺、見付け鼠壁、押入れ唐紙、納戸口、下の方に引窓の紐下げてあり、門口据ゑ物、これに下げ板にして、へんくつもの借錢乞物貰ひ堅く無用と書きつけあり、後の方、挾箱一つ、大和風爐、源五兵衛、書物を讀んで居る。側に刀掛けに二腰かけてあり、門口に三、物貰ひ、裸身に汚れたる白張を着、女形の張り子かつら、鈴を持ち踊つて居る。ちやん助、破れ太鼓を打つて居る。この見得よろしく、口唄にて幕明く。

ちや　てん〳〵天滿の神子の振り袖、鈴を袂にひいかへた。

ト云ひ〳〵太鼓を叩いて居る。

三　ひかへたるこそ、優し振り袖、鈴をひかへて囃した。

トこれよりやかましく、云うて居る。此うち向うより六右衛門、家主の形にて、日光膳に、いろ〳〵取載せて、布巾を懸け、これを持つて出て來る。

六右　ヤイ〳〵、わいらは爰をどこだと思つて、其やうに踊つて居るぞ。通れ〳〵。

ちや　ヤイ、聞いたか。內から何とも云はぬに、表から通れとは、こいつは新らしいぢやアないか。

三　表から通れといへば、さしづめ內へ通らにやアなら

ない。サア、來い／＼。

ト兩人、内へ入らうとする。

六右　ヤイ／＼、待ちをれ。内へ入つても、貸座敷の事なれば何もない。こりや見ろ、飯まで此やうに持ち運ぶワ。米は元より、錢といつちやア、缺けたちやんころもない。役に立たぬ所に長居せうより、早く行け／＼。

ちや　旦那、そんなら莨でも、二三服下さりませ。

六右　此奴らは、樣々にねだりかけるぞ。コリヤヤイ、一體わいらは目が明いてゐるか、ゐないか。この門口にある書付けが見えぬか。

ト下げ板を見せ

變屈者、物貰ひ、借錢乞ひ堅く無用と、しかも假名交りに書いてあるぞよ。これがわいらが目には見えぬか。

ちや　見えても見えいでも、こつちやア貰ひさへすりやア、よいぢやアないか。

六右　サア、其方は貰ひさへすりやアよいであらうが、此方は遣らねばよいのぢや。何となりと、しやべれ／＼。

三　なんだ、いま／＼しい。錢にもならぬ所で、てんてん天滿の神子の振り袖。

ちや　あつたら所で破れ太皷を叩かうより、てん／＼天滿の神子の振り袖。

ト兩人、踊り廻つて、向うへ入る。六右衞門、後を見送り

六右　神子どのも、お捻りがあがらないで、怒り舞うて行かれた……イヤ、内にござりまするか。

ト戸を明ける。

源五　誰れぢや。

六右　誰れというたら、丸屋の六右衞門、家主でござる。

源五　これは／＼お家主樣、ようお出で下されたな。

ト起きかへる。

六右　イヤ／＼、矢張り其まゝ、わし／＼の御遠慮は御無用。

ト云ひ／＼、源五兵衞が側へ坐る。

源五　只今表で、何やらかしましう申して居つたが、何事でござりまする。

六右　イヤ、何事でもござらぬが、いま門口で物貰ひと下拙、少々いどみ合ひましたのでござりまする。

源五　して、物貰ひは歸りましたかな。

六右　鶴の一聲、歸れと云うたら、逃げて歸りました。

源五　最前から門口で、かしましう申して居つたれど、いつも貴公のお出で下さる時分、今に歸して下されうと存

じ、打捨て置きました。
六右　ハテ、不精なお人ぢや。畢竟、手前がよい時分に來たればこそ。もし用でもあつて來ずば、どうさつしやります。
源五　イヤモウ、貴公がお出で下されずば、其まゝに捨て置き、日が暮れうが、初夜にならうが、打捨て置きますると、どこぞでは歸りまする。
六右　ハテ、悠長な事を云ふお人ぢや。彼奴らは物貰ひもあり、また中には、そこらに有るものを、ちよいとやらかす奴があれば、氣を付けさつしやるがよい。
源五　イヤ〳〵、何を取つて參らうが苦しうござらぬ。拙者が物と申しては、爰にござる大小、其方にある明挾み箱ばかり、炬燵蒲團は貴公のお世話で、借用申した貸物屋蒲團、その外は丸行燈、火打箱、莨盆、これぢやと申して、みな其許の物、取られても、手前、何とも存ぜぬ。
ト六右衛門呆れたるこなしにて、横手を打ち
六右　ハテサテ、へつらひのない、さつぱりとした物の云ひやう、その氣性を見込んで居るこの六右衛門も、流石は深川大和町の住人、我れながら天晴れぢや。

源五　ハヽヽ、座興は格別、誠にフト致した御縁で、其許のお世話になり、二月越しに三十日餘り、家賃と申し、殊に朝夕まで、斯樣に自身お運び下さるゝ御深切、お禮の申しやうもござらぬ。身不肖ながら、千島の家中にて薩摩源五兵衛、兩手を突いてこの通り當座の御禮。首尾よく歸參も致さば、只今の御恩はキツと謝しませう。千萬忝なう存じまする。
トきつと手を突く。六右衛門、迷惑さうにして、
六右　マヽヽ、お手を上げられませう……これは改まつたお禮、痛み入りまする。合ひ縁奇縁とやら、こなさまの事といへば、忰が事より大切に存じまする。この上は二月は愚か三月四月、乃至、一年でも二年でも、ゆつくりと落ちついてござりませ。また座敷代をやらねばならぬなどゝ、苦にせぬがようござる。一文半錢取らいでもよい。もしどこぞ、漏るなら直してやりませうぞえ。其うちにも御歸參のあるやうに、及ばずながら所の氏神八幡樣、堀の内の祖師樣へも、御願をかけました。
源五　それは忝なう存じまする。
六右　彼れこれ云ふうち、なんぼ春の日でも暮れ前。夜食も大方あるまいと、思つて持つて來ました。コレ、澤庵

も今日口を明けたが、よい鹽梅だから、持つて來ました。

ト澤庵を、三本、繩にからげ、出して見せる。

源五　イヤ〳〵、まだ欲しうござらぬ。後刻たべませう。膳部は其まゝ片寄せて置いて下さりませ。

六右　ハテ、後は後の事、齋時分に物を食はぬと、體の毒でござる。一膳まゐりませ。

ト云ひ〳〵、そこらを見廻し

南無三、大和風呂に火が消えたさうな。土瓶はどこにござるな。

源五　土瓶は茶がぬるうならうと存じて、これへ掛け置きました。

ト炬燵蒲團を明ける。櫓に紐にて吊してある。

六右　炬燵とはよい思ひつきだ。わしもそれで今日は、芦久保を入れて寄越しました。

ト土瓶をいぢつて見て

土瓶は冷えきつて居るが、こりやア炬燵にも火がござらぬの。

源五　イヤ〳〵、餘寒は烈しうても、最早如月、逆上いたして惡うござるから、隨分火の無いのもようござる。

六右　でも、ぬるい茶では毒ぢや。そんなら汲み替へて進ぜませう。併しその間、飯櫃や香の物を爰に置いたら、鼠の餌食、どこに置きませうな。

源五　それは拙者が取計ひませう。此方へ遣はされ。

ト香の物を取り、引窓の紐を結びつけ、ぶら下げて置く。其うち六右衛門、飯や膳を挾み箱の内へ入れる。

六右　成る程、さう結びつけて置いては、氣遣ひはござらぬ。これが彼の、むすび〳〵と澤庵さうに。ハヽヽ。イヤ、これは兎に角、引窓へ澤庵結うて置くと、先づ第一盗人の用心になりまする。

源五　ハテ、それはなぜな。

六右　ハテ、盗人が、ひよつと引窓から入らうとすると、下で澤あんわんと啼きまする。ハヽヽ。ドレ、火をともして進ぜませうか。

ト唄になり、六右衛門、火打箱を探し出して火を打ち、行燈へともす。向うより宅左衛門、羽織袴の形にて出て、門口へ來て

宅左　ちと頼みませう〳〵。

六右　もう日が暮れた。通らつしやい〳〵。

宅左　イヤ、ちと物が尋ねたうござる。此あたりに後の月

から借宅いたさるゝ、薩摩源五兵衞どのと申す仁はござらぬかな。
ト源五兵衞、これを聞いて
源五　以前の傍輩どもでござらう。六右衞門どの、お世話ながら、口上を取次がしやつて下さりませ。
六右　合點でござる〳〵。
ト門口へ來て
源五兵衞宅はこれでござるが、どこからござりました。
宅左　然らば、手前儀、出石宅左衞門と申す者でござる。源五兵衞どの御在宿でござらば、もと御意得たいと、云ひ入れて下され。
六右　暫らくお扣へなされませ。
ト此方へ來て
留守だと云つて歸しませうか。
源五　イヤ、彼の仁は、拙者日頃から、入魂の傍輩どもでござる。苦しうござらぬ、お通し下されい。
六右　そんならお通ししませう。
ト云ひ〳〵、踏込みと羽織を取り、尻を端折る。源五兵衞、これを見て
源五　六右衞門どの、仰々しい、何をなさる。
六右　イヤ、以前の傍輩衆が尋ねてござつたに、家來が無いでも濟まぬ。そこでわしが假の可助と化けるぢや。遠慮なしに可助々々と呼捨てにさつしやるがよい。
源五　ハヽヽ。
ト六右衞門、奴のやうにして、門口を明け
六右　ネイ、源五兵衞宿に居ります。これへお通り下されませう。ネイネイ。
宅左　然らば許しめされ。
ト入る。源五兵衞、見て
源五　これは〳〵宅左衞門どの。
宅左　源五兵衞どの、その後は打絶えましてござる。
源五　先づ〳〵。
ト宅左衞門、しか〳〵あつて上の方へ坐る。
さて〳〵お懷かしう存ずる。何からお話し申さうやら、誠にいつぞや、フト致した事で只今のこの體、面目次第もござらぬ。
宅左　誠にその節は、手前もその席に居り合せながら、千太郎さまのお詞をかつて、三五兵衞が傍若無人、何と申さう詞も無い仕儀、それゆゑ其まゝ打絶えましてござる。その段は御免下されい。

源五　これは〳〵御挨拶、忝なう存じまする。

卜この挨拶のうち、宅左衛門、莨を吸ひ付けようとして火が無い思ひ入れ。

お莨盆に火が無い。可助、なぜ火を入れぬ。

六右　ネイ〳〵。

卜風呂を見ても火がないゆゑ、困つたこなしにて、火打箱を出して、忙しく火を打つて

イザ、召上がりませう。

宅左　これは〳〵。お召仕は、甚だ奇麗好きと見えまする。

卜莨を吸ひつける。此うち六右衛門、茶をくんで來る。

イヤ、構はつしやるな〳〵。

六右　ネイ〳〵。

卜下へ下がり、しやんと手を膝の上へ載せて扣へてゐる。

源五　して、宅左衛門どのには、夜分お出で下されたは、御用向きでもござるかな。

宅左　イヤ、さして用事と申すではござらぬが、先達てよりお屋敷へお立寄りも叶はず、卅日餘りの御難儀、何か御不自由もござらうかと存じ、貢ぎと申すではござらぬが

卜云ひ〳〵、紙入れより包みし金子を取出し

これに金子が一兩二分、しかも小粒で六つござる。これを用立てませうから、御歸參の砌り御返濟下され。併し申さぬ事は悪い。切り米では受取りませぬ。矢張り正金でお返しなされ。この金子をお渡し申さうと存じ、ちよつと參つたのでござる。

卜右の金を源五兵衛の前へ置く。源五兵衛、思ひ入れあつて

源五　朋友の交はりは筆墨の如くと申すに違はず、不所存な拙者をお見捨もなく……忝なう存じまする。併し、お氣遣ひ下されまするな。これに居らるゝは、即ちこの大和町の住人、丸屋六右衛門と申す、この仁の世話に相成り、この座敷も自分のかけ屋敷でござるを、豫め取繕ろひ、當所の住居、鹽噌薪に至るまで、段々の深切、詞には述べられぬ仕儀。それゆゑ隨分心易う暮らし居りまする。

宅左　委細承はつて安堵仕つてござる。然らばそれに居らるゝが家主どのでござるか。

六右　左樣でござりまする。

宅左　さて〳〵世には頼もしい仁もあるものでござるな。

拙者はまた其許のお召仕かと存じ、先程よりの無禮、御免下されい。

六右　これは〳〵痛み入りまする。イヤモウ、家主ではござれども、折々には奴にもなり、飯焚にもなり、又ある時は、源五兵衛さまの按摩も致しまする。お求めなされて、ずんとお徳用な家主でござりまする。

宅左　只今の樣子承はり、御不自由にはござるまいが、これは拙者が寸志、平に御用立てられ下されい。

源五　左やう仰せ下さるゝを、素氣なう御返濟申すも如何。

宅左　御遠慮には及びませぬ。

源五　然らば暫時、借用申しませう。

ト金子を頂き、懷中して

斯樣に貴公のお世話に相成りまするも、何卒歸參の儀を願ひまするが、今に於て彼の詮議の

ト云ふを宅左衛門、六右衛門へこなし、六右衛門思ひ入れあつて

六右　イヤモウ、侍ひの附合ひは、左樣然ればの四角四面氣が張つて居憎い。土瓶を持つて歸り、熱い茶を汲みかへて參りませう。

源五　これは〳〵、重ね〳〵御厄介になりまする。

六右　イヤ、あなた、ゆるりとお話しなされませ。源五兵衛さま、後程お目にかゝりませう。

ト唄になり、六右衛門土瓶を下げ、向うへ入る。兩人、しか〳〵ある。向うより小万、袖頭巾、藝者の形にて、出て來る。後より彌助、廻しの形、ぱつちにて、尻端折り、三味線箱と備前德利を下げて出て來る。

彌助　小万さん、毎晩々々見る顏を、ちつとやそつと、遲いというて大事か。其やうに急がずと、靜かに歩いたがよいわいの。

小万　彌助どん、何を云はしやんすやら。こちや急きはせぬけれど、こなさんが遲いのぢやわいなア。堪忍して下さんせや。

ト云ひながら本舞臺へ來る。小万、内を覗いて彌助に囁き、窺つて居る。

宅左　して、御詮議の筋は、未だ手懸りもござらぬか。

源五　イヤ、その儀も少し心當りはござれども、並々ならぬ詮議の品ゆゑ、甚だ以て心を痛め居りまする。

宅左　それにつけても、この度殿樣狩場の御供……ア、どうぞそれまでに。

源五　イヤ、毛頭油斷は仕りませぬ。

ト此うち小万、表より窺つて居る。

宅左　まだその上に、先達て貴殿と、お云ひ號けござる御家門の御息女、渚どの、この度貴殿の儀をお聞き及びあつて、甚だお案じなさるゝ由。

ト小万、これを聞いて腹立てるこなし。

源五　右縁邊の儀は、手前不承知でござる、と申す譯は、御家門の息女を妻女に申し請けましては、源五兵衞は女房の庇で、立身いたしたなどと申されては、武士道が立ちませぬ。それゆゑ婚禮も等閑、また右御用について當所へ參りましたのでござる。

ト小万、よし／＼と領づく。

宅左　ぢやと申して御歸參の上は、早速御祝言めさるゝが、御親父樣への御孝行かと存じまする。

源五　そりや、歸參の上は如何やうとも。

ト小万、これを聞いて、腹立てゝ入らうとするを

彌助　コレサ、腹の立つのは尤もぢやが、お前が今入つては、源五兵衞さまの爲にならぬ。ナ、爲に。それよりは、あの毛才六を歸した後で、存分云うたがようござりやす。

小万　ほんにさうぢやな。シタガ、どうしたら歸るぢやあらうな。

彌助　どうと云うたら……オヽ、よい思案があるぞ。幸ひその頭巾で顏を隱し、お前は家主の婆になつて、家賃から米鹽薪まで、仕送りの催促がようござりやす。

小万　滅相な。ついぞそんな事を云うた事がないわいの。

彌助　そこはわたしが、お前の息子になつて。

ト囁く。

小万　そんなら無茶苦茶で、云ふ程に、よいやうに頼むぞえ。

彌助　そりやア呑み込んで居りやす。マア、帶を前へ廻して……腰を屈めて入るのぢやぞえ。

ト婆アのやうにして見せる。小万、笑ひながら、帶を前へ廻し、身拵らへするうち、彌助は德利の置き所に困り、股ぐらへ隱し、紐を括りつけるこなし。三味線を後へ隱す。この間、内には源五兵衞、宅左衞門、よろしくあるべし。よき所にて

小万　許さつしやりませ。源五兵衞さまは内にござるかな。

ト云ひつゝ、婆アのこなしにて入る。

彌助　なんでも今夜は、お目にかゝらにやアなりませぬ

ぞ。

ト後より彌助、入る。源五兵衛、二人を見て悔りする。

小万、矢張り婆にて

小万　イヤ、なんにも悔りさつしやる事はないぞ。高で借錢乞ひでござるわいなア。

ト源五兵衛へ呑み込ませるこなし。

彌助　オヽ、母者人の云はるゝ通り、何もかも算用してもらはにやなりませぬぞ。

小万　オヽ、さうぢや。息子のおよお兵衛が云ふ通り、爰へござんしてから卅日餘りの座敷代……さうぢやあらうが。

ト彌助へ云ふこなし。彌助、そればかりぢやない、まだ米代もあると、口へ飯を食ふ眞似をして見せる。

オヽ、さうぢや、飯代。

ト云ひながら、また彌助を見る。味噌を擂る眞似をして見せる

むし代。

ト彌助、薪を割る眞似をして見せる。

薪の代。さうして又。

ト彌助を見る。鹽醬油の仕方は出來ねば困る。小万も云ふ事に困り、こなしあつて

さうして又、あれ、それ、オヽ、さうぢや。二十四日二十五日天神樣約束、八幡樣、初午の物日、無茶苦茶にしてもらうては、濟まぬによつて、なんぢやあらうと今夜中に、埒明けて下さんせにやなりませぬぞ。

ト思ひ入れある。宅左衛門、こなしあつて

宅左　イヤ、源五兵衛どの、最前のお家主は甚だの深切、それに引かへ内方は、ハテ、嚴しい催促の仕樣でござるの。

源五　そりやその筈でござりまする。この内方は家付きの後家御でござる。そこでアレ少し腰も屈んでござる。即ち後に居らるゝ御子息、といふもこの後家御の實子でござる所へ、六右衛門どのがにじり込まれましたとの事。御覽の通り、六右衛門どの、甚だ結構人なれど、内方は生れついての爪長でござれば、此やうに、度々の催促に、拙者も困り入りまする。

宅左　イヤモウ、亭主の結構に女房のけはしいは、當世の流行りものでござる。ハテ、苦々しい儀でござる。

彌助　イヤ、苦々しからうが、甘々しからうが、こな樣には構はぬ。親仁の結構人にお袋の爪長が、こなさんの事

で、毎日々々夫婦喧嘩、亂騷ぎサ。
小万　こちの親仁どのゝやうな事では、世帯が詰まらぬに
よつて、參じやした。
彌助　なんでも今宵は、算用してもらひませう。
源五　成る程、段々の仕儀、尤もでござる。併し手前も、
少々工面いたして居れば。
彌助　エヽ、工面といふは無心でござるか。
小万　コレイナア。無心なら當にせぬがようごんす。今時
の客人は惡洒落で、一向當にはならぬわいなア。
　ト云ふを、源五兵衛、彌助、いろ〳〵紛らす。小万、
心附き
イヤ、惡洒落な事云はずと、サア、早う譯立つて下さん
せいなア。
彌助　折角親子連れで來たからは、算用してもらひませ
う。源五兵衛どの、どうでござるな。
　ト思ひ入れある。源五兵衛、こなし。宅左衛門、氣の
毒なる心にて
宅左　先程から餘程の長座、拙者は最早お暇申しませう。
源五　折角お越し下されしに、よからぬ事をお聞かせ申し、
氣の毒千萬に存じまする。

宅左　なんの〳〵。只今の御身分ではあるべき事。
源五　然らば、もうお歸りでござるか。
宅左　近日又お尋ね申さう。
　ト宅左衛門表へ出る。皆々こなし。宅左衛門、花道の
角にて
家主の内方にしては
　ト小万と顏を見合せる。小万、ちやつと婆のこなし。
お江戸は、繁華の地とはいひながら、借金乞ひまで、派
手なものぢやなア。
　ト唄になり、宅左衛門、思ひ入れあつて、向うへ入る。
小万これを知らずに
小万　年寄れば腰が痛うてならぬわいなア。
彌助　コレ〳〵、もうようござりやす。
小万　イヤ、借金乞ひぢや〳〵。
源五　ハテ、もう歸つてしまうた。
小万　エヽ、もう去んだかえ。
源五　思ひがけない所へ小万……　おれをば、術ない目にあ
はせた。
小万　オヽ嬉しや。わたしも年寄りの眞似で、しんどうて
ならぬわいなア。

彌助　小万さんのせりふがならはぬので、ハア／＼思うて大汗をかきました。

小万　それでもまんまと、騙して去なしたが、また戻つて來はせまいかなア。

源五　イヤ／＼、騙して去なしたと思ふは不覺、今歸りがけに云うた一言では、まんざら覺らぬでもない。

彌助　左樣でござりまする。お江戸は繁華の地とはいひながら、「ハテ、派手な借錢乞ひぢやなア」

ト廣次の聲色を遣ひながら

歸りましたぞえ。

源五　小万、おぬしや宅左衞門を知つて居ながら、いかに顏を隱せばとて、ツカ／＼と入つてよいものか。嗜んだがよい。併し、今の婆は、大出來であつた。ハヽヽ。

彌助　そりやアさうと、肝心の物を忘れて居りました。ドレドレ、持參の御酒を差上げませう。

ト云ひ／＼股ぐらより酒德利を出す。

源五　彌助、そりや何ぢや。

彌助　隅田川一升、我れらがお見舞ひ。

ト源五兵衞、取つて

源五　これは忝ない……こりや內から、燗をして來たのか。

彌助　イヽエ、冷でござりまする。

源五　それに又この溫まりは。

彌助　ハア、聞えました。最前入りしなに、隱し所に困り私しが……酒藏に忍ばせて置きました。そんなら私しが精分の強いので、燗が出來たのでござりませう。

源五　道理でをかしい步きやうだと思うた。おぬしの持參で、先づ酒は出來たが、肴はどこから出やうぞ。

小万　彌助どん、三味線箱を出して下さんせ。

彌助　ハイ／＼。

ト小蔭より三味線箱を出して、提げようとする。

小万　コレ、其やうにすると惡いわいなア。

彌助　オツト、こりやアあやまつた。

ト三味線箱を小万の前へ持つて來る。

小万　お酒は彌助どん、お肴はわたしが進上ぢや、わいなア。

ト蓋を開ける、內へ延べ紙を敷き、三味線の上に、大きなる鯛と蛸を載せてある。源五兵衞見て

源五　鯛の濱燒に、蛸の櫻煮、これはきびしいお持たせぢやな。

小万　マア／＼、此方へ出さうかいなア。
ト鼻紙にて持ちそへ、蛸を提げ、こりやどうせうとい
ふこなし。
源五　待つたり／＼。蛸の置き所は
ト刀掛けを見て引寄せ、刀を卸して
ソレ、爰へ引ッかけたり。
小万　アイ／＼。
ト蛸を刀掛けへ引ッかける。源五兵衞、鯛を取上げ
源五　この鯛もどうせう。
トこれも置き所に困りし體にて
オヽ、あるぞ／＼。小万、その挾み箱の内に膳があらう。
持つて來やれ。
小万　アイ／＼。
ト挾み箱より膳を出し
ほんに、こりやよいものがあるわいなア。
源五　飯つぎをのけて、この鯛を据ゑるぢや。
ト鯛を置く。
彌助　モシ、飯は剛氣に仕込んでござりまするな。あなた
は御酒はあがらず、この蛸で、おまんまをあがりませぬ
か。

源五　イヤ／＼、最前、家主が持つてわせられたれど、空
みないゆゑ、片付けて置いたのぢや。
小万　そんならお前、いつおまんまをあがつたえ。
源五　今朝、茶漬をたべた儘ぢや。
小万　其やうに、むら食しなさると、毒でござんすぞえ。
ちつとばかりでもあがれいなア。ドレ、わたしが給仕し
てあげうわいなア。
ト茶碗に飯を盛り、鯛を載せて膳を据ゑる。
彌助　小万さんのお給仕、こりや否でも、あがらにやなり
ますまい
源五　然らば身共は、御飯頂戴と仕らう……イヤ、最前家主
の持つてわせられた香の物が、そこらにあらう。小万、
取つておぢや。
彌助　イヤ、こりやアわッちが。
ト立たうとする。
小万　彌助どん、さうして置いて下さんせ。爰へ來て、こ
んな事するのが、わたしが樂しみぢやわいなア。
彌助　イカサマ、源五兵衞さまの側で、世話女房のやうに
するのが、お前の樂しみ。そんならわたしやア、構はず
に手酌で、そろ／＼やりかけませう。

小万　それがよいわいなア。

ト彌助、筒茶碗で酒を呑む。小万は香の物を方々と尋ね、思はず引窓に結びつけた香の物を顔へあてゝ、悸りして

小万　オヽこは。

ト飛びのく。兩人も悸りして

源五　何ぢや〳〵。

彌助　何でござります。悸りしますわいの。

小万　それでも、誰れやら冷たい手で、わたしが顔を撫でたわいなア。

彌助　何をマア、誰れが冷たい手で顔を撫でるものか。

ト云ひ〳〵方々見廻し、香の物を見つけ

ハヽア、讀めた。モシ、今の正體

ト香の物をぶらつかせ

これでござりまするな。

小万　申し、ありや何でごさんすえ。

源五　香の物ぢや。鼠のせいたらうに難儀して、引窓の紐に括りつけて置いたのぢや。

彌助　この香の物は、いかなる科にや、縄目の恥にかゝりつらん。ハヽヽヽ。

ト香の物を下ろす。小万、取つて見て笑ふ。此うち、六右衛門、出て來て、片手に弓張り、また片手には土瓶を下げ、内へ入りかゝり、この體を見て門口に窺つて居る。彌助、手酌にて引請けながら

彌助　イヤモウ、斯うした所は、とんとお二人の宿入りを見るやうぢや。さらば祝うて私が

ト謠を謠はうとする。

六右　泉は其まゝ、盡きせぬ宿こそめでたけれ。

ト謠ひながら内へ入る。皆々見て

小万　申し、あなたは。

源五　これはお家主。

六右　最前から表へ來て居つて見たが、あんまり内で騒ぐので、何事をやらかすかと思うて、立聞きをして居たが、宿入りの藝者。そこで我れらが祝儀の小謠、盡きせぬ宿へ煮花の茶を持つてきました。

小万　ほんに、見かけから氣の輕さうなお家主様。

彌助　お持せの煮花で家移り茶漬は、どうでござりまする。

源五　ハヽヽ、こりや面白い。酒盛りと宿入り。

彌助　ごつちやになつたこの座敷。

小万　しなものゝ交はり。

彌助　たのみある仲の茶漬かなア
　　ト謠ふ。
皆々　ハヽヽヽヽ。
六右　ドレ〳〵、我れらも相伴せうか。
　　ト酒盛りになる。
彌助　時に、宵から餘ッぽどの間ぢや、わたしが影が見えぬと、小万さんのお爲に悪いから、もう歸りませうわい。
小万　そんならさうして、また明日の朝いつものやうに、駕籠をおこして下さんせや。
彌助　そりやア呑み込んで居りまする。
　　ト小万が袖を引き、そつと此方へ連れて來て
宵から云はうと思うて居りましたが、折が悪いから、ツイ云ひそゝくれて居りやした。今夜で身印が
　　ト指を五本見せる。
源五　そりや二三日のうちに。
彌助　サア、その二三日が、むちやつかうと思うてから。
　　トわざと源五兵衛に聞えるやうに云ふ。
源五　彌助、なんぢや。
彌助　イエ、こりやア、お前さんのお聞きなさる事ぢやござりませぬ。
源五　ちよつと聞いたところが、小万が身分さうな……爰にコレ、金子が一兩二分ある。それでソレよいやうに。
　　ト投げて遣る。
小万　イエモウ、それでは。
　　ト氣の毒なるこなし。
彌助　ヘヽヽ、とッとモウ、こんな事をあなたのお耳へ入れると、小万さんが大抵氣の毒がつてぢやござりませぬけれど、私しもこの間は、ふり廻しがツイ悪うて。ハヽヽ。そんならマア、これをお預かり申しませう。
源五　然らば、それでよいか。
彌助　よい段か、よすぎまする。イヤ、よい次手に、仲人は宵のうち。
六右　夜の更けぬ間にお暇申さう。
源五　左樣なら、もうお歸りなされますか。
小万　彌助どん、頼んだぞえ。
彌助　よしサ、小万さん、これから後で
六右　火の用心を
　　ト小万を見て思ひ入れ。
さつしやい。

六右　ハヽヽ。

卜唄になり、六右衛門こなしあつて、ツカ〳〵先へ入る。彌助は花道へちよつと立ちどまり

彌助　この金が一兩二分……これから此方の目論見が……斯うと……兩方摑むかすがひ儲け。うまい〳〵。

卜唄になり、思ひ入れあつて向うへ入る。小万、源五兵衛、そこらを片づけ

源五　イヤ小万、今日やつた文、屆いたであらうな。

小万　アイ、たとへ文は來いでも、毎晩來る事は知れてあるぢやござんせんかいなア。

源五　イヤ、改まつた事ながら、いつぞやフトした事が緣となり、それから身共を如才もなう、大切に致してくれる其方、なか〳〵禮の云ひやうもない仕儀、過分なぞよ。

小万　オヽをかし。お前さんが嫌がりなさるを、無理に此方から、賴んで斯うなつた事、なんのお禮に及びませう。心の屆くだけは、不自由な目はさせまいと思うても、知つて居なさる通り、座敷一通りのわたし、客人といふては拵らへねば、何やかや、辛氣な事ばつかり、その上却つて最前のやうに、お前に心遣ひをさせまして、云ひ譯もない……そしてマア、呼びに寄越しなんした、その用といふは。

源五　客人が拵らへてもらひたい。

小万　エヽ。

卜こなし。

源五　否であらうが、サ、どうぞ客人を拵らへてたもらぬかといふのぢや。

小万　姬御前の教へ草は、少さい時にお師匠さんで聞いてよう覺えて居りまする。なんぼ賤しい勤めの身でも、この人より外に一生連れ添ふまいと、心に錠を卸ろしてからは、町の女中さんも、お屋敷の姬御前も同じ事。お前さんより外に、身をば許すまいと思うて居るわたしに、客人を拵らへてくれいとはえ。

源五　オヽ、合點がゆくまい。その仔細といふは、源五兵衛が身にとつては、大切な事なれど、心底見拔いた、其方ぢやによつて。

小万　イヽエ、聞かして下さんすな。

源五　ヤ。

小万　サア、お前の身に大切な事を、わたしが聞いたその後で、どこからどう廻つて、その大切な事を、餘所外の人が云ふまいものでもない。その時には、流石は勤めの

身ぢやと、わたしが口から洩れたやうに、思うておくれなされはせまいけれど、どうもわたしが、心が濟まぬわいなア。

源五　その誠を聞くからは、どうあつても、客人が拵らへてもらひたい。小万、是非身が云ふ通りに。

小万　わたしが心を見屆けた上、どうあつてもと仰やるしには

　ト思ひ入れあつて

ようござりまする。いかにも客人を拵らへませう。たとへどのやうに、嫌と思ふ客でも。

源五　心に從ふか。

小万　イ、エ。

源五　ヤ。

小万　サア、身體を任せるばかりが、客人を拵らへるでもござんすまい。たとへ身をば任せいでも、勤めの一得、口先ばかりで、あのゝものゝと云ひ紛らし、手管といふは、お侍ひさんの、計り事とやらぢやわいなア。

源五　ウム、面白い。その手管では、よもや仕損じはせまい。その客人は外でもない。三五兵衞ぢや。

小万　エ、。

　ト合ひ方になり、源五兵衞こなしあつて

源五　斯うばかりでは合點がゆくまい。一通り聞きや。身共と笹野三五兵衞、この度江戸表へ下つたは、主人千島の家の重寶、大切なる龍虎の呼子、富士の御狩の御入用。いつぞやより紛失、詮議のために同道。時に合點のゆかぬは三五兵衞、國元にてその詮議の役目を、推して願ふ所存は、彼奴が底意に、深き企みあつてと親人の仰せ。それゆゑわざ〳〵下りしこの源五兵衞。さりながら、これぞといふ證據もなきゆゑ、迂濶に詮議もならず、もし荒立て詮議せば、却つて破却するか……これでは合點がゆくまいが、ひよつとその龍虎の呼子を打ち碎くか、また海川へ沈めてしまへば、お家の大事、サ、賴みといふは爰の事、下地から惚れて居るこそ幸ひ、何卒三五兵衞が口から云はすか、なんぞ證據になるべき書いた物か、又は少しにても、素振りはじりを聞き出してたもれば、それを手蔓に詮議仕出し、再び歸參、それゆゑ客人を拵らへてたもらぬかといふのぢやわい。

小万　よう云うて下さんした。それ程の大事を打明けて下さんすおまへの心は、起證誓紙を貰うたより、わしや嬉しいわいなア。

源五　然らば得心して。
小万　アイ、合點はいたが、意地づよい三五兵衞、ツイした事では。
源五　打明けぬところを明かさすが、其方の働らき。
小万　源五兵衞さん。
源五　ヤ。
小万　わたしの心は。
ト獨吟になり
〽いつまで草のいつまでも、なまなかまみえ物思ふ、たとへせかれて程ふるとても、緣と時節の末を待つ、なんとせう、互ひの心打ち解けて、うはべはとかぬ五大力、さはさりながら、變るいろなき御風情、やがてあほぞえ、語ろぞえ、惜しき筆とめ候かしく。
トこの唄のうち。小万、思ひ入れあつて、硯箱を引寄せ、三味線箱より三味線を出し、裏皮へ五大力と書く。
小万　これ見て下さんせえ。
ト三味線を見せる。
源五　ムウ、すべて女の人手に渡す文の封じ目に、開かすまいと認める五大力。
小万　サイナア。お侍ひさんの魂ひは刀。
源五　町人の魂ひは算盤、秤。
小万　藝者の魂ひは三味線、その三味線の封じ目堅う、心の誓ひ五大力。
源五　外へ大事は洩らさぬといふ。
小万　アイ、お前の賴み、三五兵衞さんの胸の內。
源五　首尾よう聞いたその上で
小万　やがてあほぞえ、語ろぞえ。
源五　マア、それまでは、暫しのうち。
小万　別れのやうに思はれて
源五　ヤ。
小万　惜しき筆とめ候かしくぢやわいなア。
ト兩人こなしある。向うより彌助、駕籠を一挺つらせ、走り來て、門口を叩き、
彌助　小万さん〳〵。
小万　彌助どん、何の用ぢやえ。
彌助　マア〳〵、明けて下さいまし。
小万　エヽ、けたゝましい、何ぢやぞいなア。
ト云ひ〳〵門の戶を開ける。彌助、內へ入る。
彌助　何ぢやどころぢやござりませぬ。最前、內へ去んだところが、親方が呼びつけ、今夜は小万を是非とも花

屋へやらにやアならぬ、われが働らきで、今宵の明けを貰うて來いと云はれました。

小万　それぢやというて今時分から、餘所へ行く事は否ぢや。どうなりと云うて下さんせいなア。

彌助　そこに如才があらうか。ちよぼくさやつても、いつかな諾かぬが鐵挺親仁。その上お前が爰に居なさる事を氣取つた樣子、もし爰へ親方が來ると、今度からの爲にならぬと思ふから、それで迎ひに參りやした。今夜のところはわたしに免じて、どうぞ戻つて下さりませ。

小万　イエ／＼、なんぼこなさんの云はしやんす事でも、今夜戻る事は……コレ、拜むわいなア。

彌助　イヤ、此方から拜みます。お前が歸りなさらにやア、中にたつた柱で、迷惑な者はわたし一人。こりやアマア、どうしたらよからう。

源五　彌助があのやうに云ふを、堅意地に云ふは悪からう。今宵の所は、マア、歸つたがよからう。

彌助　一遍歸つてさへおくんなさると、また今度の首尾はどうなりと致しますけれど、親方の高下には、さしもの彌助も降參でござりまする。

源五　主と病には、是非がない。歸つたがよい／＼。

彌助、アレ、旦那があのやうに仰しやつてゞござりまする。

小万　そんなら去なねば悪いかいなア。

源五　オヽサ、コレ、彌助があのやうに術ながるぢやないか。

彌助　目立つては悪いと、駕籠を持つて參りました……サ、駕籠の衆、早く頼みますぞや。

ト駕籠舁き、垂れを上げる。小万、腹立ちながら、不精々々に駕籠に乘る。

小万　モシ、七ツ時分に來る程に、叩かしておくれなさんすなえ。

源五　そりや合點して居る、彌助、大義ぢや。

彌助　ハイ／＼、旦那、もうお休みなされませ。

ト此うち駕籠を舁き上げる。彌助、三味線箱を擔ぐ。

小万　モシ、ほんに來る程に、ツイ起きて下さんせえ。

源五　オヽ、よいてや。

小万　オヽ、辛氣。

彌助　サア、早うやつてもらはう。

ト唄になり、駕籠を急ぎ、彌助、向うへ入る。源五兵衞は、眞中の炬燵へ腰をかけ

源五　ハテ、里の女には稀れな奴、一大事を明かしたれば、心得ました、仕負せませうと請合ひ、その上、三味線に五大力と、誓ひまで立つるとは、ハテ、よい氣性な奴ぢやなア。

トこれをキッカケに道具廻る。

本舞臺、正面、平舞臺、見附け三間の長暖簾、上の方、好みの二階格子、下の方、同じく二階、上下と仕切り、門口据ゑもの、これに花屋と記したる掛け行燈、平舞臺には〻吉、おふさ、藝者にて三味線彈いて居る。八右衞門、着附け羽織、田舍侍ひの拵らへにて酒盛りして居る。おみき、女房の形も小障子を立て、伊三郎、亭主の拵らへにて、おさき、仲居にて酌をしてゐる。この模樣、騷ぎ唄にて道具とまる。

さよ　サア〳〵、大盡さま、一つあがらぬかいなア。

みき　あなたは、モシ、きつう三味線がお氣に入りましたなア。

八右　いかにも、國元には無い女藝者、お江戸へ參つたればこそ、面白う三味線彈きたてゝの樂しみ。

伊三　して、旦那のお國は、どこでござりまする。

みき　コレ、申し、あなたは九州千島の御家中ぢやわいなア。

伊三　ハア、そんなら源五兵衞さまと一緒のお國でござりまするな。

みき　サア、それで小万さんを御注文で、今宵の約束ぢやわいの。

八右　それ〳〵、肝心の身共が望みの小万はどうぢや。なぜ遲い。晝から此やうに待つて居るに、なんと早う會はしてくれぬ事か。

みき　サイナア、小万さんに逢ひたいと仰しやるゆゑ、廻しの彌助を頼んで、今夜は是非此方へ見えるやうにして置きましたわいな。

さき　この深川の仲町でも、花屋のおさきさん、滅多に違ひはござんせぬわいなア。

伊三　もうおッつけ小万さんも見えるでござりませう。それまで先づ一つおあがりなされませ。

八右　イヤ〳〵、さう酒ばかり飲んで居つては、云ふ事が云はれぬ。

ふさ　小万さんに、きつい凝りぢやなア。

八右　こりか、葛籠か、知らぬが、なんでも小万に逢はう

と最前から……ア、、待たるゝとも待つ身になるなとは、ア、、よくいうたものぢやなア。

ト騒ぎ唄になり、向うより小万を駕籠に乗せて、彌助、三味線箱を持つて附いて來る。

彌助　サア〳〵、モシ、是非ならぬ小万さんを、この彌助が働らきで、貰つて來ました。

みき　それは忝ない。彌助どの、きつと恩に着る。お客様も待ちかねてなれば、ちやつと小万さんを。

彌助　合點でござりまする。

ト駕籠を内へ入れ、垂れを上げる。

小万　おさきさん、約束は内方かいなア。

ト云ひ〳〵駕籠より出る。おみき立ちあがり

みき　アイ〳〵、お前にちよつとなと逢ひたいというて、最前から待ちかねてぢや程に、早う向うへ。

小万　三五兵衛さんかと思うたら、さうでもないさうな。

はる　小万さん、大和町かえ。

小万　大和やら、唐土やら、とんと判らぬわいなア。

伊三　イヤ、判つてござりまする。いま日の出の小万さまの御來臨とは、忝ない。申し、旦那、我れらが女房の計り事は、どうでござりまする。

八右　イヤモウ、心を盡した甲斐あつて、小万どのゝお出で、祝着々々。サア〳〵、これへ〳〵。

彌助　おさきどん、小万さんを貰うて來た代りに、なんぞ好い肴でナア。

みき　酒どころか、新造さんでも、わたしが立てるわいなア。

彌助　こりや有り難い。そんなら臺所へ行て

伊三　我れらと一緒に、サア、やらう。

彌助　お前の酒も久しいものぢや。ハヽヽ。

ト彌助伊三郎、奥へ入る。八右衛門、杯を取上げ

八右　先づ初めてなれば、小万、こなたへお慮外申さう。

小万　アイ、戴き申しませう。

ト杯を取上げる。

八右　さて〳〵聞いたよりは美しい。この仲町の櫻座の小万と、名に立つたも理り、身共は初めて逢うて、此やうな嬉しい事はない。ほんに、それ〳〵。

ト風呂敷を解きて、一つ〳〵出し

これは粗末ながら上布、こちらは國府多葉粉、斯う近付になる印までに、身共が土産ぢや。どうぞ貰うて下されうなら、千萬忝ない。

小万　これはマア思ひがけない。初めてお目にかゝりました私しに、結構なこのお土産、有り難うござりまするが……マア、あなたは、

八右　千島の家中。

小万　エヽ。

八右　イヤ、其方にちと折入つて頼みたい事がある。

小万　アノ、わたしに。

八右　いかにも。

ト小万、こなしあつて、右の二品を八右衞門が前へ押し戻し

小万　マア、このお土産はお返し申しまする。わたしは藝者、ちと譯があつて、たとへどなたでも

八右　イヤ／＼、コレ、身共が頼みたいといふは、全く色がましい儀ではないぞや。

小万　それでもどうやら。

八右　ムウ。イヤ、この家の花車。小万に、少と密々に話しもあれば、皆々を連れて暫らく爰へ。

みき　ハイ／＼、合點でござりまする。おふささん、皆さん。

ふさ　氣を通して

みき　ドリヤ、奥へ參ぜうか。

ト合ひ方になり、おみき、先に立ち、おふさ、はる吉おさき奥へ入る。跡に八右衞門、小万殘る。八右衞門右の土産物を、また小万の前へ置き

八右　小万、今も云ふ通り、これは畢竟、身共が志しぢや程に、是非其方へ。

小万　義理をかけるはお客の常、たかで藝者のわたしに、お侍ひさんのお頼みとは。

八右　成る程、尤も。

ト思ひ入れあつて、下の二階へ向ひ

堤惣右衞門どの、御苦勞ながら、ちよつとこれへ。

ト下の二階より土手平、羽織野袴、捕方の形にて下りて來る。八右衞門、土手平を上座へ進める。小万、合點のゆかぬ思ひ入れ。

小万　申し、あなたはえ。

土手　イヤ、身共は千島の家中にて、堤惣右衞門といふ者、この度御用につき、はる／＼と當所へ參つた。

小万　なんの事やら、ほんに合點がゆかぬわいなア。

八右　小万、合點がゆかぬ筈。身共は何を隱さう、其方が深う云ひ交した、薩摩源五兵衞が眞實の兄でござるぞ



や。
　ト聞いて、小万、恟りして
小万　エヽ、そんなら、お前さんが源五兵衞さんの、
八右　サア、兄の身共が、ついぞ來ぬこの茶屋へ來て、其方に逢つて、折入つて頼みたいといふは、あの通りお國のお役人。
小万　エヽ。
八右　イヤナニ、惣右衞門どの、今暫らくあの二階へ。萬事の樣子、御見聞の上、拙者が取計らひ仕る間、矢張りあれへお越し下されませう。
土手　然らば身共は、あれに扣へませう。朋友のよしみ、おてまへのお頼みゆゑ、暫時の猶豫、拙者とても、惡しかれとは存ぜぬ。兎に角よろしう。
八右　忝なう存じまする。
　ト土手平思ひ入れあつて、繩捌きして
土手　ア、この捕繩が役に立たねばよいが。
小万　エヽ。
　ト思ひ入れ。
八右　サア。
　ト顏を見合せ、思ひ入れあつて

先づ〳〵。
　ト合ひ方になり、土手平、こなしあつて、元の二階へ上がる。八右衞門、見送り、小万の側へ來て
八右　小万、あのお侍ひは國元のお役人。當所へお越しは、弟の源五兵衞を召捕りの爲。
小万　エヽ。
　ト恟りする。
八右　源五兵衞と緣切つてもらひたい。
小万　エヽ。
　トまた恟りする。
八右　サア、弟と、緣を切つてもらはう。
小万　エヽ、聞えました。源五兵衞さんには、お國に云ひ號けの、お娘御さんがあるによつて。
八右　いかにも。云ひ號けは、渚どのというて、御家門の息女。それと夫婦にせねば、弟源五兵衞の命が無い。
小万　そりや、なんでいなア。
八右　アサ、この度弟が役目、首尾よう仕負せ、歸國すれば、直に祝言、渚どのと夫婦になれば、源五兵衞が身の大慶、親兄弟も一家中への面目、殊に主命重き仰せ。時に源五兵衞にはこの江戸表にて、深川の藝者、小万、其方

と云ひ交はして、大切な役目も粗略、剰さへ、愚かしい千太郎さまの御機嫌まで損なひ、身持ちはさん〴〵と國元へ相知れ、親人の腹立ち、手打ちにせんと老の一徹。また、御主人方は不屆き至極と、源五兵衛に繩かけて、國へ呼びよせ、役目粗略の仕置きと、アレ、今の堤惣右衛門どの、弟を召捕らんと思ふ所、サア、そこを云ひ號けの縁ある、渚どのの執成しにて、段々親人をなだめ、殿様へのお願ひ、どうぞ祝言したい、夫婦になりたいと甘いお詞、源五兵衛身持ち改めなば、科を免して歸國の上、夫婦にせんとの殿の御内意。ところに源五兵衛は、其方と云ひ交して居れば、所詮國へは歸るまい。さすればこれまで千島のお家にて、數代續きし薩摩の家も退轉、その元はといへば、小万、其方に源五兵衛が迷うてゐるゆゑ、親兄弟から世の人口、一家中の思はく、たとへ死んだ後でも、阿房馬鹿者人でなしと、笑はれるが口惜しい。そこをとつくり合點して、氏神よりは其方へ頼み。どうぞ源五兵衛と縁切つてもらへば、弟が心も自然と直り、國へ歸り、渚どのと祝言すれば、死罪に遇ふどころか、却つて出世の御加增。サア、それぢやによつて、小万、其方に、この兄が分けての頼み。

小万　そんなら源五兵衛さんと、縁を切れとの事かいなア　そりや胴慾ぢやわいなア〳〵。

八右　サア、どうぞ得心して。

小万　源五兵衛さんと云ひ交したは、まだ間はなけれど、大分譯のある事ぢやわいなア。

八右　ハテ、譯がなけりや云ひ交されまい。そりや身共も、聞かいでも知れて居るが、小万、云ひ交した源五兵衛が其方はよもや憎うはあるまいがの。

小万　知れた事、憎うて人に惚れられるものかいなア。

八右　その可愛いゝ源五兵衛ぢやによつて、身共が云ふ通り、縁を切つてたも。

ト小万、ズッと立つて奥へ行かうとするを引留め

待つた、小万、其方が源五兵衛と縁を切らねば、科人となつて國へ引渡される。また縁を切れば、命助かり出世する。その善惡は其方が心一つぢや。くどうは云はぬ、どちらへなりと返事が聞きたい。

小万　サア、思ひ廻せば廻す程、一旦は切れねばならぬ譯なれど。

八右　ソレ、それ程合點がいてあるぢやないか。

小万　ぢやというても。

八右　ハテ、源五兵衞の身が納まつた上では、ある縁なれば、手かけ、妾になりと。
小万　そんなら、源五兵衞さんの身の納まつた上では。これがほんの浮世の義理、情に思ひ切つてたもいの。
八右　その時は又、相談の仕樣があらう。
ト此うち三五兵衞、向うより出かけ、最前より門口にて樣子を聞いて居て、この時
三五　小万、こりや得心して、緣を切つてやらねばなるまい。
ト云ひ〳〵内へ入る。
小万　ヤア、三五兵衞さん、
三五　源五兵衞どのゝ御舍兄、樣子は承はつた。段々のお心遣ひ、推量いたして、何とも氣の毒千萬。
小万　成る程、得心して緣切りませう。
三五　ヤ。
小万　サア、いろ〳〵思案をして見れば、源五兵衞さんのお身の爲になる事なら、最前から兄御さんのお賴み、わたしやよう合點がゆきましたわいなア。
八右　ヤア〳〵、そんなら、眞實得心して。
小万　アイ、わたしが退けば、お國の首尾も直り、渚さまとやらと夫婦にならしやんす、源五兵衞さんのお身の納りとあれば、兄御さんのお賴みの通り、緣を切りまする。退きますといふ心の内を……推量して下さんせいなア。
トいろ〳〵こなしあつて泣く。
八右　オヽ、道理ぢや〳〵、よう得心してたもつた。それでこそ源五兵衞が命も助かり、身共も喜び。エヽ、忝ない。
三五　小万、出かした。流石は里に育つたゆゑ、物事に辨へがあつて、三五兵衞も感心々々。身共も一旦、其方に心をかけ、洲崎の升屋での仕儀、なんでも源五兵衞めをと思うたが、また得心して見れば、竹馬の朋友、武士道にかゝはる儀でもなく、高で色の道、當つて碎けろ。今ではさつぱりと思ひ切つて、兎角源五兵衞が爲になる事なら、共々に世話する……これサ御舍兄、とても事に、小万が思ひ切つたといふ事を、源五兵衞に見せずば、滅多に國へは歸るまいぞや。
八右　成る程さやう。併し色里の事は、不案内の拙者。三五兵衞どの、そこをよろしくお指圖を。
三五　成る程〳〵。然らば小万。
ト硯箱を引寄せ、小万にあてがひ

小万　源五兵衞への退き狀、書いてやりや。
三五　ハテ、斯ういふ事を、微塵芥子ほども知らさぬが祕密、何がなしに、否になつてしまうたといふ、一通りの退き狀を。
八右　成る程、書いた物でなくては、弟めが得心いたすまい。
小万　そんならアノ、切れ文を書くのかえ。
三五　緣切つたといふ慥かな證據。
小万　どうやらそれでは。
八右　ハテ、一旦國元へ立歸つた上では、身共が呑み込んで居るわいの。
小万　もし源五兵衞さんが誠に……イヤアノ、誠に緣を切るのぢやによつて。
三五　退き狀が肝心
ト小万、思ひ入れあつて
小万　サア、わたしや、どう書いてよい事やら。
ト不請々々の思い入れ、
三五　イヤ、その文言は、身共が云うてやらう。
八右　三五兵衞どの、お世話ながら、弟めがナ、とつくりと得心いたすやうに。
三五　承知でござる。
ト云ふ時、小万、筆を取上げる。三五兵衞、側へにじり寄り
先づそこへちよつと「一筆申し上げ參らせ候ふ、これまではそもじ樣と、段々の御心の程、嬉しく存じ參らせ候へども、どういふ事にや俄に秋風、とんと否になり申し候ふ七里けつぱい、この上は必らず〳〵逢ひに來ておくれなえ」
八右　成る程〳〵。
小万　どうもそれでは。
三五　ハテ、とつくりと聞えるやうに書かんと、源五兵衞の爲にならぬ。
八右　左やう〳〵。
ト小万、始終こなしあつて
小万　そして、どうぢやえ。
三五　逢ひに來ておくれなえ、最早わたしはふッつり思ひ切つて居るに候ふ……オ、好かん、オ、嫌ひ、緣切つたぞえ……、これでは、どうやら文句になつたわえ。
小万　暫らく遠ざかり參らせ候ふでよいわいなア。

八右　イヤ〳〵、暫らくでは悪からう。
三五　一生、遠ざかり參らせ候ふ。
小万　モシ、よいかえ。
　ト小万思ひ入れ、八右衞門こなしあつて
八右　サ、承知々々。
三五　一生遠ざかり參らせ候ふ……もうそれでよからう、恐惶謹言、イヤ、それではない、めでたくかしく。
小万　なんのめでたい事があつて。ツイかしくでよいわいなア。
三五　そりやどうなりと。時に宛名はしつかりと、薩摩源五兵衞さま參る、櫻屋小万判。イヤ判には及ばぬ……ドレ〳〵。
　ト取つて、篤と讀み、八右衞門に見せる。
八右　フム……これでよろしうござりまするかな。
三五　隨分ようござる
　ト取つて封じ
サア、上書は、薩摩源五兵衞さま櫻屋小万、大急用。
小万　なんの、遲うてもよい事を。
　トよろしく書くうち、八右衞門、三五兵衞と顏を見合せ、こなしあつて
そして、この文は、誰れに持たせて、やるのぢやえ。
三五　そりや身共が、密かに遣はす者がある。
　ト取る。
小万　申し、兄御さん、お前のお頼み、源五兵衞さんのお身の上、どうぞ無事にと思ふから、あの通りの文はあげるものの。
八右　コレ、其方の、恩は一生忘れぬ。
　ト小万、胸を押へ、癪の起つたこなし。八右衞門、ハツと介抱しようとする。三五兵衞、こなしあつて
三五　コレ〳〵、そこを弱つては
　ト八右衞門へかけて
小万、酒で押せ〳〵、御舍兄も心のきかぬ　奥へ伴ひ、憂はらしに、一つお進めなされ〳〵。
八右　いかにも。小万、大事なくば
　ト小万こなしあつて
小万　こりや醉はにや……どうもならぬわいの。
三五　オヽ、それがよい〳〵。
　ト唄になり、八右衞門、こなしあつて、小万を伴ひ、奥へ入る。三五兵衞、殘り居て、いろ〳〵思ひ入れあつて

三五　時にこの狀を……幸ひ彌助が、奧に來て居る筈ぢや。彌助々々。

ト呼ぶ。奧より

彌助　オイ／＼、おれを呼ぶは誰れだ。

ト云ひ／＼出で

三五　ヤ、三五兵衞さま、今の首尾はどうでござりまする。

三五　大極上々、まんまと退き狀は、この如く書かせたて。

彌助　そんなら小万が得心して

三五　往生づく〳〵に、何とどうぢや。

彌助　イヤ、剛氣なものでござりまする。

三五　彌助、大儀ながら、其方はこれを小万が渡したというて、源五兵衞へ屆け、先達て云ひ合せた通り、とくと合點か。

ト狀を渡す。彌助取つて

彌助　お氣遣ひなされますな。一旦、請合つた彌助、やるものぢやござりませぬ。

ト三五兵衞、紙入れより小判を出し

三五　少しながら、その狀の飛脚賃。

彌助　こりや五兩。ても高い飛脚賃な。

三五　大事ない、取つて置け。

彌助　エ、有り難い。そんなら、この狀を源五兵衞に。

三五　必らずぬかるまいぞ。

彌助　ドレ、一走り行て參りませう。

ト唄になり、彌助、狀を持つて向うへ入る。三五兵衞後を見送つて

三五　これから理詰めで、小万は身共に靡かにやならぬ。ムウ。

トうまいといふこなしにて居る所へ、向うより伴右衞門、序幕の役にて出て來る。

伴右　これは／＼三五兵衞どの、先程から土橋の大野屋方に、相待ち居りました。

三五　伴右、先達てお身に申し合はせたる、コレこの

ト我が懷へ思ひ入れして

伴右　ナ、千里一飛び、出世の出立ち。

小万　サア、その儀について、拙者方に手筋もござれば。コレ。

ト三五兵衞へ囁く。

三五　それは祝着。萬事は後刻、とくと。

伴右　然らば、土橋の大野屋方に相待ち居ります。

三五　大分機先がよくなつた。今宵は身共が振舞ひぢや。

大野屋方で、存分ふざけさつしやい。
伴右　それは忝ない。然らば三五兵衞どの。
三五　伴右、早く。
伴右　ハツ。
ト唄になり、伴右衞門、引返し、向うへ入る。この唄好みあり、奧より小万、口幕の三味線を持つて、酒に醉ひたるこなしにて出て、
小万　オヽ、三五兵衞さん、まだ爰にかいなア。
三五　小万、何ぢややら三味線を持つて、醉うたな〳〵。
ト三五兵衞、あたりを見廻し、よい所へ來たといふ思ひ入れ。
小万　サア、心は醉はぬけれど、むしやくしやするので。
トこなしある。三五兵衞、三味線を見て
三五　その三味線には、てんがう書が
小万　エヽ、これかえ、
三五　五大力とは。
小万　こりや唄の外題、いま上方で流行る五大力、わたしも習うたによつて、忘れぬやうに彈かうと思うて、滅相な、見やしやんせ、三味線へ書いて置いたわいなア。
三五　五大力とは、大阪の住吉の奧の院にあるのか。
小万　そんな事は知らぬわいなア。
三五　イヤ、小万、源五兵衞を退いた其方が今の心は。
小万　さつぱりとしたわいなア。
三五　何を嘘らしい。矢ツ張り心が殘つてあらうが。
小万　そりやまんざら殘らぬではないわいなア。丁度、殿達でも、さうぢやげな。何ぞ代りが出來るまでは、どうしても思うて居るものぢやといなア。
三五　その代りは出來てあるの。
トこなし。
小万　わたしらがやうな者は、大抵の事では。
三五　イヤ、ツイ出來る。
小万　なんのマア。
三五　イヤ、早速いま爰で出來過ぎてある。
小万　そりや何を云はしやんすぞいなア。
三五　小万、一體この三五兵衞は其方に、イヤ、こりや云はいでも、これまでとつくりと合點な筈。一旦、武士の意氣づく。思ひ切つたといふものの、源五兵衞さへ、さつぱりと譯が立つたら、身共が心に從うても、小万、大事あるまいがな。
小万　サア、わたしも、これまで段々と云つて下さんした

お前、いつそ面當てに。

三五　ヤア。

小万　とサア、思うては居るけれど、もし夫婦になつてお國へ行た折には、同じ家中で傍輩の事、源五兵衛さんと顏見合さねばならず、それも一旦切れたによつて、わたしや構はねど、お前がどうやら、あぢイなものではないかいなア。

三五　イヤ／＼、そりや氣遣ひはない。殊によると身共は國取り大名になる。

小万　エヽ。

三五　サア、今までのやうに、千島の家中では居ぬ。途方もない出世して見せる。もし、又それが行き損なうても、どんな事があつても源五兵衛が

　ト云はうとして、

サア、源五兵衛とは、顏は合せはせぬ。また一緒にも居はせぬわいなう。

小万　そりやマア耳寄りでござんすなア。

三五　耳寄りどころか、浮み上がる事ぢや。

小万　サア、その浮かみ上がる出世、お前が大名にならしやんすといふ、なんぞ慥かな事があるかえ。

三五　ある／＼。石橋を叩いて渡るよりは、まだ／＼丈夫な事ぢやて。

小万　サア、その譯は、どういふ事ぢやえ。

三五　その譯は、この度御用

　ト云はうとして

イヤ、滅多に云はれぬ。

小万　そんなら嘘ぢや。

三五　イヤ、嘘でない、大眞實。

小万　さう云うて、矢ッ張りわたしを騙さうとは、ても怖い、三五兵衛さんではあるわいなア。

三五　イヤ、小万、身共が出世するに違ひはない、その譯は、滅多に云はれぬ大事の事。それが聞きたくば

　ト手を取つて

身共が心に從うた上で、云うて聞かさう。

小万　エヽ。

　トこなし。

三五　ハテ、身共よりは、其方が誠、心に從ふ氣なら、大事の事も打明けて云うて聞かさう。

小万　それに違ひはないかえ。

三五　なに違ひあらうぞ。其方も違ひがなければ。幸ひこ

の三味線へ。
ト筆を取つて、書かうとする、小万、とめて
小万　アコレ、滅相な。この三味線へ何を書くのぢやぞいなア。
三五　ハテ、ツイ斯うぢや。
ト小万が手を無理に持ち添へて、五の字の上へ、三の字を書き、力といふ字へ土へんを書かせる。
小万　これでは五大力が
三五　三五大切。なんと身共に乘かへるといふ、其方が起請同然ぢや。
小万　ほんに三五大切と……それでは
三五　滅多には消さゝぬ。
ト三味線を脇へ寄せ
この上は小万。
小万　どうするのぢやいなア。
三五　ハテ、心に從ふ事は得心ではないか。
小万　サア、得心は得心ぢやが、ほんに今夜は、お前も知つての通り、氣がモヤ／＼して、どうやら辛氣なによつて、また翌日の晩、とつくりと話しをせうわいなア。
三五　ムウ、すりや、明日の晩に違ひなう。

小万　サア、此方は明日の晩に極めて置いて、お前の大事を。
三五　イヤ、さうさうは乘られぬわい。
小万、まだ外に何やかや、尋ねたい事があれば。
三五　然らば幸ひ、あの二階で
小万　話しをせうかえ。
三五　そんなら小万。
小万　アレ、まだいなう。
三五　でも、聞く事があるぢやないか。
小万　それぢやによつて。
三五　ハテ、おぢやといふに。
ト小万を連れて上の二階へ入る。唄になり、向うより源五兵衛、彌助、最前の切れ文を廣げて見せながら、源五兵衛を焚きつけ／＼出て來る。
彌助　源五兵衛さん、お前さんはどう思つてござりまするぞ。斯ういふ切れ文を見ては、濟みますまいぞえ／＼。この彌助でさへ、腹が立つて／＼、なりませぬわいなう。
ト いろ／＼云ひながら、出て來る。源五兵衛、構はず
源五　ハテ、よいわい。小万が心は、とくと身共が存じて居る。

彌助　アレ、まだそんなぬるい事を仰しやつてぢや。小万さんは、疾に心が腐つて、もうお前が否になつたのだ。その證據は、コレ、この切れ文。
源五　サア、それには何ぞ譯があらう。身共がとつくりと云うて置いた事もあり、今さらどうして、あれの心が替るものか。
彌助　アヽ、お前さんに金を持たしたいなア。よい客人だ。ウカ／＼と騙されるも知らず、お前の鼻毛で、小万さんの下締めが出來る。エヽ、齒がゆい。お侍ひに似合はぬ。あんまり甲斐性がない。甲斐性がござりませぬぞえ。
源五　ハテサテ、其やうにイラ／＼云はずと、一つ吞まう。來やれ。
　ト彌助矢張りしか／＼あつて、本舞臺へ連れ立ち來り、ズツと內へ入る。所へ奧よりおみき、おさき、おふさ、はる吉、連れ立ち出て
皆々　オヽ、源五兵衛さま。
源五　こりやおさき、けたゝましい、何事ぢや。
　トはつと心遣ひのこなし。
皆々　イエ、ようお出でなされました。
　ト心遣ひのこなし。
源五　小万はどうぢや、來て居るか。
みき　ハイ……いゝえ。
源五　ムウ、來ては居ぬか。
彌助　イエ／＼、來てゞござりまする。おさきどん、惡い冗談だ。あれ程、先刻わしが送つて來たものを、今夜は爰の直しにまでしてあるものを。
みき　サア、それでも。
　ト彌助へこなし。
彌助　まざ／＼しい事を云ひなさる。奧であらうがな。
みき　イヤ、小万さんは、慥か最前明いて戻らしやんしたわいなア。
ふさ　イヽエ、奧にぢやわいなア。
みき　アヽコレ……歸らしやんしたを、お前方は知らしやんせぬのぢやわいなア。
　ト吞み込ませる。
彌助　現在居るものを、あんまりだ。
源五　よいわい、彌助、歸つたら歸つたにして置け……おさき、煙草盆を貸しやれ。
みき　ハイ、煙草盆は……奧や二階へ皆出てあるが、おさき、明いたのがあるかいの。

トおさきへこなし。おさき、呑み込み

さき　イエ〳〵、皆ふさがつてござりまする。それに臺所に火もなし。

彌助　こりやモウ、見る事、聞く事がむかついて來るわえ。

源五　ハア、火が無くば、莨ものむまい〳〵。

ト煙管をしまひ

おさきや、彌助にも呑ましたい。酒を一つ呑まうか。

さき　イエ〳〵、肴が何にもござりませぬ。

源五　肴が無くば、ツイ鰻の蒲燒でも、取りにやりやれ。

さき　先刻取りに遣はしましたが、銀杏屋も、横町のも、魚切れだというてぢやわいなア。

源五　ムウ。そんなら酒も呑むまい、コリヤ〳〵、ふさ、はる吉、どうぢや、ちと爰へ來て、浮かしてくれい。せめてわれ達など話し相手に。

さき　この子達も、奧の客人をしまはずぢやわいなア。

みき　源さん、もう歸らしやんせいなア。

ト彌助、思ひ入れあつて

彌助　もう堪へられない。いま〳〵しいぞよ。なんでさう客を悪しくするのだ。エ、聞えた、こりや何、源五兵衛さまがふさがあるによつてか。いとしなげに、いかに今浪人してござるとて、さう見せつけぬものだわえ。これも大方、小万さんが切れたによつて、屆けてあるのであらう。エ、、義理を知らぬ奴等だ。よいワ、大事ござりませぬ。その金はおれが拂ふ。この彌助が拂ふ。廻しこそして居れ、金はこの通りだ。

ト最前の五兩の金の入りたる紙入れを出して、源五兵衞が前へ投げ出し

なんぼなりと、拂つておしまひなされませ。

源五　彌助、もうよい〳〵。何も云ふな。たかで女子の事ぢや。

彌助　でも、あんまりでござります。

源五　サア〳〵、よいてや〳〵。コリヤ、おみき、伊三郎を呼べ。

みき　モシ、こちの人〳〵。ちやつとござんせいなア。

伊三　オイ〳〵、なんぢや。騒がしい。

ト云ひ〳〵出る。

みき　あれ、來てぢやわいなア。

ト源五兵衛を指す。

伊三　ヤ、源五兵衛さま。

源五　ト揉み手をして、氣の毒の思ひ入れ。
伊三郎、外の事でもない。先達て身共が拂ひ殘りは、如何ほどあつた。

伊三　ハイ……オヽ、それは書き出して置きました。
ト掛け硯より出して
小万さんの約束、大和町への駕籠賃、酒肴菓子、付出して、この通りでござりまする。
ト源五兵衛に書付けを渡す。

源五　ムウ、〆めて四兩二分とある。

伊三　ハイ〳〵、差引殘りでござりまする。

彌助　モシ、そこに五兩ござりまする。拂つておしまひなされませ。

源五　彌助、この金を暫らく借り請けても苦しうないか。

彌助　大事ござりませぬ。その金をしやツ面へぶッつけておやりなされませ。一體、お前さんが結構すぎまするから、彼奴等がしたいやうに致しまする。
ト此うち源五兵衛、紙入れの金を出し

源五　コレ、金が五兩ある。四兩二分引いて、殘りは祝儀に取つて置きやれ。
ト投げ出す。

伊三　ハイ、これは有り難うござります。

源五　彌助、身共はもう歸らうわえ。

彌助　エヽ。

伊三　もうお歸りなされまするか。ようお出でなされました。

みき　表を締めて、もう寢ようわいなア。
ト源五兵衛、これを耳へもかけず、立ち戻らうとする。

彌助　モシ、お前さん〳〵、それでは小万さんに。

源五　なんの、逢はいでもよい。明日の晩に出直して來るわえ。
ト行かうとする。二階より三五兵衛、捨ぜりふにて下りて來る。

三五　ハテサテ、なんの歸らう。どう留めいでも、是非今宵は泊るといふに。
ト云ひ〳〵源五兵衛と顏を見合せ
ヤア、惡い所へ源五兵衛どの。
トわざと困るこなし。

源五　ムウ、三五兵衛どの。

伊三　こりやひよんな。
ト氣の毒な思ひ入れ。

三五　ハテ、大事ない、酒にしよう〳〵。

みき　コレイナア、なんぞお肴を拵らへさしやんせぬかいなア。

さき　サア〳〵、お莨盆を、

ト莨盆を持つて來る。

ふさ　火があるかいなア。

伊三　早うお肴を、云ひつきやいなう。

みき　アイ〳〵。お前方も、ちやつと三味線を取つておいでいなア。

藝者　アイ〳〵。

伊三　燭臺も持つてこう。

みき　サア〳〵、忙しい。早うあげねばならぬぞえ。

ト皆々やかましく云ひ〳〵奧へ入る。源五兵衛、こなしあつて又下に居る。彌助こなしあつて

彌助　エヽ、現金な奴らぢやないか。

トわざと源五兵衛が腹の立つやうに云ふ。三五兵衛、こなしあつて

三五　小万々々、爰へ來やれ。エヽ、愚圖々々と埒の明かない。

ト云ひ〳〵、二階より小万を無理に連れて來る　小万、源五兵衛を見て、ハツと思ひ入れ。三五兵衛、側へ引附ける。

三五　ハテ、其やうにウヂ〳〵する事はない。爰に居やれ。

彌助　アレ〳〵、あの態を御覽じませ。

源五　小万、そちや今まで二階に居つたか。

ト小万、もの云はずに思ひ入れ。三五兵衛こなしあつて

三五　イヤ〳〵、源五兵衛どの、何にも仰せられな。サア、存分にさつしやい。

源五　ヤ。

三五　踏むなりと、叩くなりと、この三五兵衛を心任せに。コレ、いつぞや洲崎の升屋にて、身共が打擲いたした通りに、サア、存分に召され。手向ひも致さず、一言の申し分もござらぬ。

源五　そりや何ゆゑ。

三五　小万ゆゑ。

ト源五兵衛、思ひ入れ。

小万　エヽ、それ、最前わたしに。

三五　ハテ、默つて居や。大事ない〳〵、武士の身の上なれど、其方ゆゑなら何とも思はぬ。結句構ひだてすると、

源五兵衛どのゝ腹が、餘計立つわいの。
小万　エヽ、さうぢやない、わたしや源五兵衛さんの
トこなしある。此うち、中二階の障子を明け、上の方に八右衛門、下の二階に土手平、樣子を窺ひ居る。
三五　あれ。
トこなしにて小万へ二階を敎へる　小万、二階を見る。八右衛門、こなし。小万、ハツとこなしあつて、下の二階を見る。土手平、捕り繩を持つて思ひ入れ。小万、いろ／＼術なきこなし。
小万　エヽ、どうも有やうには
ト思ひ入れ。
源五　小万、先程大身の客人ぢやというて、駕籠まで持つて迎ひに來たは、三五兵衛どのか。
小万　イエ／＼、そりや外に
ト云はうとして、八右衛門が方を見る。八右衛門、こなし。
三五　イヤ、成る程、外の客人と云うて、呼び寄せましたは身共でござる。やう／＼と小万も得心いたした。
小万　なんのマア、わたしが
ト云はうとして八右衛門が方を見る、八右衛門、拜む。

土手平は繩捌きをするゆゑ、小万、云ふに云はれぬこなし。
小万　サア、どうも云ふに云はれぬ、義理といふ枷がかゝつてナ。
三五　どうやら斯うやら得心の致した。
源五　ヤ。
ト思ひ入れ。
彌助　あれ、得心だと／＼。エヽ、コレ、あゝいふ事を聞いちやア、おれでさへ、どうも腹が、グラ／＼と沸えかへるやうだ。これが又、女郎衆なら、千人萬人のうちに誠を立つるはたつた一人、その代りはといふ事もあれど、お前は藝者ぢやないか。同じ家中の御連中に出るさへあるに、これ見よがしにこなすとは、いかに源五兵衛さまが、いま引ッ込んだというて、あんまりな仕方だ。それぢやア濟まない／＼。
ト疊を叩き立て、思ひ入れ。
小万　エヽ、なんぢやいの。こなさんまでも同じやうに、コレイナア、これには段々樣子のある事。そりやお前も合點がゆくまい。
ト源五兵衛にかけて、二階を見て

サア、合點して退き……退いて下さんせ、わたしやフッツリ思ひ切つて居るわいなア。
ト源五兵衞こなしあつて
源五　そりやどうなりと、其方が心任せに致してくれうわサ。また身共が頼んだ……イヤサ、其方が頼んで斯うなつた源五兵衞、身にも命にも替へぬ大切な……イヤ、大切な金銀を打込んで、金の威光で口說き落す事はなんぼもある。身共は又、その金銀が拂底ゆゑ、小万、大切な、ナ、サア、金銀が無いゆゑに、其方に……其方に迷うて居る。ナ、それを首尾よう、イヤ、三五兵衞どのと、仲よう添ひ遂げなりとどうなりと。
小万　アイ、そりやお前の敎へ……お前に敎へられないでも、わたしや三五兵衞さんに
ト兩方へかけて
お前に。
トこなし、彌助、思ひ入れあつて
彌助　こりやモウ、釋迦でも堪へられぬわえ。
ト立ちかゝるを、源五兵衞、ちよつととめて
源五　ハテサテ、其やうに立騷がいでも、云ふ事は云はれる。マヽ、鎭まつて居て、大事ないわい。

三五　源五兵衞どの、お腹が立つなら存分〳〵。
源五　三五兵衞どの、いよ〳〵小万と。
三五　互ひに心底打明けて
源五　フウ、アノ心底を。
小万　イヽエ、さうぢやない。
ト寄らうとするを、三五兵衞、引廻し、最前の三味線を、源五兵衞へ突きつけ
三五　イヤ、打明けた〳〵。證據はコレ……起證がはりのこの三味線。
ト源五兵衞へ見せる。源五兵衞見て
源五　ムウ、こりや最前の五大力……ヤヽ、三五大切。ムウ、すりや五大力を書き直して
三五　この三五大切。
ト思ひ入れ。
源五　ヤ。
三五　サア、この如く小万が身共へ。
ト小万、立ちかゝつて
小万　イヽエ、これはなア。
ト云はうとする。三五兵衞、小万に二階を見ろといふこなし。小万は八右衞門、土手平を見て譯を云へず、

云ひ旋きこなしにて

小万　サア、この三味線の……エ、胴慾ぢやわいなア。

ト煙管にて、三味線を打ち破る。

三五　エ、、忝ない。

トその皮を引破り、戴いて懐中する。小万、心づき、ハツとこなし。源五兵衛こなしあつて

源五　ムウ、三味線は藝者の魂ひ……誓ひを立てし五大力に、筆を加へて三五大切、剰さへ打ち破つたは。

トちよつと脇差へ手をかけ、あたりを見て、ちやつと思ひ入れあつて、急かぬこなし。

フムウ……何とせう、せう事がない。身共もフツツリ、思ひ切つた。

彌助　もう自棄だ。

ト飛びかゝらうとする。源五兵衛、これをとめて

源五　ハテ、もう何にも云ふな……彌助、履物を見てくれ。

小万　イエ〳〵、それでは。

トこなしあるを、三五兵衛とめて

三五　アレ、源五兵衛も、思ひ切つたと〳〵。

ト二階へかけて云ふ。

小万　エ、。

ト泣く。

三五　これから誰れ憚からず、小万を身共が女房にしても、點の打ち手はあるまい〳〵。

彌助　イヤある。この彌助がある。

ト又かゝらうとする。源五兵衛ヂツと留めて

源五　ハテ、もうよいてや。

彌助　それでも、あんまりでござりまする。

源五　里女に戀なし、財を以て戀とする……遊里の女は、皆あゝしたものぢわやえ。

彌助　でも、見す〳〵。

ト立つて、源五兵衛又ちよつと留めて

源五　ハテ、何にも云ふな。人ではないわえ。

ト唄になり、源五兵衛、思ひ入れあつて彌助を留めながらこなしあつて、兩人、向うへ入る。八右衛門、二階より下りて來て

八右　コレ〳〵、小万、忝ない。

小万　イヽエ、わたしやたつた一言。

ト向うを見て思ひ入れ。

三五　もうよい〳〵。心底見えた。

小万　サア、その心底を……エヽ、どうせうぞいなア。

トうろ／＼する。八右衛門は無性に喜び

八右　これで源五兵衛が身の納まり……イヤ、惣右衛門どの、これへ、お出で下されい。

ト下の方の二階より土手平、下り來て

土手　只今の仕儀、とくと見屆けし上は、源五兵衛は歸國でござらう。さすれば科を免し、元の武士、此やうにめでたい儀はござらぬ。

三五　コレ／＼御舍兄、この上は一時も早う、惣右衛門どのを御同道にて、御合點か。

八右　成る程／＼、國元へ歸國の用意、惣右衛門どのにも。

土手　然らば旅宿へ。

八右　お供仕りませう。

トこなしあつて、小万を見て立戻り

小万、きな／＼と思ふまい。藝者に似合はぬ其やうな。ア、愚痴な。コレ、身共が請合ひ、此方の身分さへ納まれば、最前も云ふ通り、また如何やうとも。それを樂しみに必らず……煩らはぬやうにナ……とは云ふものの、一筋に思ひ込んだを。

三五　これサ。

ト八右衛門に歸れといふこなし。

八右　また近日逢ひませう。

ト合ひ方になり、八右衛門、土手平こなしあつて、門口へ出て花道へ行き、兩人立ちどまり

土手　まんまと首尾よう。

八右　三五兵衛さまのお指圖にて、御家來の土手平どの。

土手　差しつけぬ大小、お國の役人、堤惣右衛門とは、やレ／＼、窮屈な目にあうた。鹽梅よく行つた上は、元の土手平。

ト羽織袴を取り、奴になる。八右衛門も上着を取り、若黨の姿になる。此うち三五兵衛は、泣き伏して居る小万が方を見い／＼門口へ出て、二人を見て、早う行けといふこなし。

八右　これ皆、若旦那源五兵衛さまが大切ゆゑ。

ト三五兵衛を見て

三五　ハテ、御朋輩のよしみとて、段々の

八右　お禮はゆるりと。

ト仕方。八右衛門、思ひ入れあつて

土手　コレサ、八右衛門どの。

八右　おさらばでござりまする。

ト八右衛門、こなしあつて、衣裳を抱へ、ツイと揚げ幕へ入る。三五兵衛、土手平を招き、木舞臺にて囁く。土手平心得、衣類大小を抱へ、拔き足にて、小万に見えぬやうに、下の二階へ上がる。此うち三五兵衛、小万に土手平が見えぬやうに、立ちはだかつて居る。始終よろしく合ひ方にて、三五兵衛、思ひ入れあつて

三五　もう、餘程夜が更けたさうな。駕籠でども歸らう。

ト云うても、小万、矢張り癪の起りしこなしにて、構はず泣き伏して居る。三五兵衛、思ひ入れあつて

ア、、積か。藥をやらう。

ト手を叩く。奥よりおさき、茶を持つて來る。

三五　茶を一つたも。

さき　さう思うて、汲んで參りましたわいなア。

三五　茲な機轉者め。

ト茶碗を取つて側へ置き、

コレ、小万、藥をやらう。ソレ、茶も爰にある。

ト小万を無理に連れて來て、夜具を着せかけ、脊中を撫る振りにて抱きつく。小万、否がり、いろ／＼こなしある所へ、向うより伴右衛門、急ぎ出て來て

伴右　三五兵衛どの／＼。

ト云へども聞えぬこなし。伴右衛門こなしあつて

これサ、三五兵衛どの、性根をおつけなされ。何と心得てお出でなさる。斯の大切なる儀につき、先程より大野屋方に相待ち居るに、どう致した儀でござる。

三五　大切な儀とは、何の儀でござる。

伴右　これはしたり、彼の呼子。

三五　呼子とは、誰れを呼びまする。

伴右　ハテ、大切な龍虎の呼子。

トこれにて悔りして

三五　ハテ、ようござる。

ト小万が方へ思ひ入れ。小万も呼子と聞いて思ひ入れ。

伴右、今少し御容赦にあづかりたい。

伴右　これサ、それでは相濟みませぬ。サア／＼、お出でなされ。

ト手を取つて、無理やりに上の二階へ連れて上がる。

小万、二人が二階へ上がりたるを見て、こなしあつて、門口へ駈け出さうとする所へ、奥よりおみき、ツカツカと出て門口へ立ちふさがり

みき　小万さん、どこへ行かしやんす。

小万　おみきさん、どうぞ大和町へ、ちよつとやつて下さ

んせいなア。
みき　イエ／＼、お前をどつこへも出すなと、最前のお客や三五兵衞さんの云ひつけ。それに大和町へ行かしやんしては惡からうぞえ。
小万　それでも逢はねば、どうも氣が濟まぬわいなア。
みき　氣の濟まぬは、わたしも同じ事。最前の樣子、源五兵衞さんが、腹立つてござんせうが、お前の身の上、知らさぬやうに歸し申さうと思うてから、こちの人と云ひ合せ……大事のお客を、なんの粗末に思ひませう。先刻のやうに云うたのも、源五兵衞さんのお爲を思うての事。お前が逢はしやんしたら、よいやうに賴んだぞえ。それはさうと、小万さん、お前は又、源五兵衞さんと、ほんまに切れる心かいなア。
小万　なんのマア、ちつと譯があつての事。それはマアゆるりと。コレ申し、拜みまする。ちよつとやつて下さんせいなア。
みき　それでも今夜はよしにして、氣の濟まぬ事があるなら、幸ひ／＼。
　　ト硯箱を取つて來て
爰に硯がある。その樣子を書いてやらしやんせ。お吉にしつかりと、持たせてやるわいなア。
小万　そんなら文を書かうかいなア。
みき　夜の更けぬうちに、早う書かんせいなア。
小万　文よりは、直に逢うて。
みき　ハテ、それでは惡いわいなア。
小万　エ、辛氣な。よう文を書く事ではあるぞ。
　　ト硯を引寄せ、こなし。
みき　ドレ、わたしや、お吉を爰へ寄越さうか……コレ、小万さん、其やうにクヨ／＼と……併し、苦は樂しみの元ぢやなア。
　　トこなしあつて入る。合ひ方になり、小万、文を書きながら、思ひのこなしあつて
小万　源五兵衞さん、さぞお腹が立つたでござんせう。これまでつひに一度、愛想づかしは愚か、ちよつと御機嫌を損なうた事もなし、殊に今、御不自由のお身の起りは皆わたしゆゑ。それとも云はず、大事の事まで打明けて云うて聞かして下さんした御心の程。それに引かへ、三味線の、誓ひに書いた五大力まで、思はず破つた事ぢやもの、お腹が立たいで何とせう。又お國の兄御さんの、お賴みを附け込んで、三五兵衞づらが、何のかのと、お

腹の立つ事ばつかり。その云ひ譯は、大事に思ふ、お前のお命に仕はるとあるゆゑ、わざとつれなう心に思はぬ事どもも、皆義理に迫つて、この身一つに引受けて、所詮長らへる心はござんせぬ。せめてあなたへの云ひ譯には、三五兵衞を騙してなりと、大切な詮議の綱をと、いろいろと尋ねても、意地強い三五兵衞。併し、いま伴右衞門が云うたは、慥かに、龍虎の呼子。どうぞこの事を……サア、何をいうても、最前の仕儀。委細の事はこの文に……これを見て、堪忍して下さんせいなア。

ト泣き落す。始終合ひ方。これより時の鐘になり、方々にて、拍子木、割り竹を鳴らす、向うより源五兵衞、頰かむりして、思案しながら出て來る。臆病口より番太郎、拍子木を打つて出て、花道へかゝる。源五兵衞と摺れちがひて通る。源五兵衞、振り返り、番太郎が首筋を取つて囁く。番太郎、悸りして、慄へながら頷づく。源五兵衞、拍子木を取つて打ちながら往來を窺ひ居る。番太郎、門口へ來て戶を叩き

番太　申し、ちよつとお賴み申しまする〳〵。

ト烈しく叩く。小万は構はず文を書いて居る。

內方に、笹野の三五兵衞さまがござりまするかな。

ト下の二階より、土手平、下りて來て

土手　なんだ、お旦那を尋ねるは、何の用だ。

番太　お屋敷から使ひに參りました。ちよつと爰を明けて下さりませ。

ト云ひ捨て、一散に向うへ駈けて入る。源五兵衞は身拵らへして、窺ひ居る。

土手　今時分、お屋敷からお使ひとは何の用だ。

ト戶を明けて

サア、入らつしやい。

ト云へども挨拶なきゆゑ、合點のゆかぬこなしにて門口へ出さうにする。源五兵衞、土手平の胸ぐらを取る。

ヤア、源五兵衞か。

ト悸りする。源五兵衞、拔き打ちに一太刀切る。土手平、仕掛けにて胴切りになる。小万、これを見て

小万　ヤア、源五兵衞さんかいなア。

ト寄るを一太刀切る。これに構はず、小万、書置を持つてゐながら、源五兵衞の胸ぐらへ取りつきながら刺し殺され、手を放さぬゆゑ、その刀にて手を切る。書置を持つた腕先、源五兵衞の胸元へ附いて居る仕掛け。この物音にて、二階には三五兵衞、伴右衞門、下を見

て燭臺を吹き消し、いろ／＼をかしみ。作右衛門はソツと下へ下り、窺つてゐる。源五兵衛は拔身にて、二階へ上がるゆゑ、作右衛門、後より、こは／゛＼窺ひ寄つて

作右　源五兵衛待て。

トかゝる。振り返つて一太刀切る。作右衛門は門の外へ逃げ出し、振り返らうとする　これも仕掛けにて大袈裟になり、バッタリ倒れる。片腕落ちる。源五兵衛、これより二階へ上がる。これにて三五兵衛、いろ／＼あつて、長持の上へ上がり、うろたへて向うへ落ちる。源五兵衛、探り寄つて、長持へあたり、蓋を明け、內を拔き身にて突き立てる。中にも居ぬゆゑ、こなしあつて下へ下りる。此うち三五兵衛は長持の向うより顏を出し、危ふい仕打ち、源五兵衛は下へ下り、方々見廻し、暖簾口を窺ひ／＼、奥を尋ねるこなしにて入る。此うち三五兵衛は長持の向うより、ソロ／＼這ひ出して、ほつと溜め息をつき、いろ／＼をかしみ。向うより彌助、傘下駄がけにて、ぶら提灯をともし、鼻唄うたひながら出て來て、作右衛門が死體に爪づき

彌助　誰れだ。とんだ所に寢て居るな。剛氣に醉つたな。

ト云ひながら、提灯にて作右衛門が死體を見て、惘りして逃げようとして、仰向けに倒れ、うろたへ內へ逃け込み、小万が死骸を見て、ハッというて、又表へ逃げようとして、門口にて土手平が胴切りに爪づき、べッタリ腰の立たぬ思ひ入れ、奥より源五兵衛出て、こなしあつて小万が首を切り、前垂れに包み、腰に結びつける。彌助はこれを見て、逃げようとして腰の立たぬ思ひ入れ。源五兵衛、表へ出ようとして、こなしあつて、長持の蓋を向うへ刎れた思ひ入れにて長持の向うの心元なきこなしにて、行燈を下げ、拔き身を持つて二階へ上がりにかゝる、これにて三五兵衛、悄りして、うろ／＼して居る。源五兵衛、行燈を階子の中段にて取落し、眞暗になつたこなし。源五兵衛、探りながら、二階へ上がる。三五兵衛うろたへ、長持の中へ入る。源五兵衛は長持の蓋を手前へ刎れて、長持の向うを刀にて突いて見て、向うにも居ぬゆゑ、是非なく下へ下りる。此うち彌助幾度も逃げようとすれど、腰の立たぬ思ひ入れにて、門口に取りつき、內を窺うて居る。源五兵衛、門口へ來るゆゑ、表よりピッシャリ戸をしめる。源五兵衛、構はず、刀の先にて戸を明け

る。彌助。門口にベツタリと手を突き、慄へて居る。

源五　源五兵衛見て

彌助。

彌助　へ、、、。

ト慄へる。

源五　三五兵衛は。

彌助　ワ、、、私しは、何にも存じませぬ。

ト慄へ聲にて云ふ。源五兵衛は口惜しき思ひ入れあつて、彌助に我が穿いた下駄を直せと仕方をする。彌助心得、慄へ〳〵下駄を直してやる。また傘も、手を出すゆゑ取つて渡す。此うち始終雨車の音あり。

源五　彌助。

彌助　へエ、、

ト這ひ出る。源五兵衛、小柄を抜いて

源五　先刻借り請けた金子の代り、祐宗の高彫り、五兩七兩にはならう程に、取つて置きやれ。

ト彌助に渡す。

彌助　ア、、有り難うござりまする。

ト時の鐘になり、源五兵衛、諸をうたひながら向うへ入る。彌助、後を見送り、ホッと思ひ入れして、內へ入る。此うち三五兵衛、二階より下りて來て、舞臺を這ひ廻つて兩人顏を見合せ、急に物の云はれぬこなしにて、三五兵衛、側に有り合せたる銚子の酒をグツと一口呑み

三五　彌助〳〵。

彌助　三五兵衛さま、いま源五兵衛が。

ト切る眞似をする。

三五　可哀や小万を始め伴右衛門、家來土手平まで殺らし居つた。

彌助　この上は、人殺しの科人、源五兵衛は下手人。

三五　いかにも、彼奴をしまひつけて、身共が所持する龍虎の呼子を賣り拂ひ

彌助　私しがお供で上方へ。

三五　成る程、爰には居られぬ。彌助、其方は土手平がはり。

彌助　樣子を聞けば盜み物。その捌け口も私しが働らきで。

三五　萬事に馴れた其方。オウ、賴もしい。

ト此うち向うより、宅左衛門ツカ〳〵と出て來て、門口にて窺うて居る。この時に

宅左　さては三五兵衛、其方は呼子の盜賊。

トつか〳〵と入つて、三五兵衛にかゝる。

三五　出石宅左衛門。

彌助　すりや、最前からの樣子を。

宅左　源五兵衛が身の上。心許なく爰へ來て、思はず兩人がその云ひ合せ。

三五　それ聞かれたら身共が大事。

ト振り切る。

彌助　彌助が働らき。

ト立ちかゝる。宅左衛門、突き廻す。三五兵衛、切つてかゝる。これより三人立廻り、見得になつて道具替る。

本舞臺、初めの大和町の貸座敷の道具になる。右の舞臺に行燈ともしある。莨盆も側に直し置き、忍び三重にて道具とまる。

ト向うより源五兵衛、前幕の形にて傘をさし出て來て門口を明け、ズツと入る。こなしあつて衿についた手を解き放し、書置を取り、寸々に引裂き、大小拔き、上着は血の附いたる、こなしにて着替へる。この時、最前の書出しも落ちる。これも寸々に引裂き、書置と一つに捻り、腕も一緒に炬燵の蒲團の下へ打込み、元の通りにして小万が首を炬燵の上へ置く。この時小万の本首を出す。源五兵衛、行燈の火をかき立てゝ燈心を澤山に入れ、小万が首を見ながら「ムツ」と首を睨みつけて、莨をのんで居る。バタ〳〵にて向うより八右衛門、以前の形にて走り出て三度笠草鞋をそこらへ拋り出し、内へ入り、後先を見廻し、門口をピツシヤリと締める。源五兵衛、この音にて、ちやつと本首へ前垂れをかける。八右衛門は源五兵衛を見て

八右　エヽ、嬉しや。まだ内にござりましたな。

ト喜ぶ。源五兵衛、八右衛門を見る。

八右　源五兵衛さま

トつか〳〵と側へ來て

申し、これサ、これを穿かつしやりませ。

ト草鞋を出し

この笠で顏を隱して、サア〳〵、早う〳〵。

ト懷中より金の入りし打返しを出して

少々路銀も、爰に用意してござる。サア〳〵、夜の明けぬうち、一先づ爰を、ちやつと〳〵。

ト引立てる。源五兵衛は落ちついて居て

源五　馬鹿め、何をするのぢや。

八右　何をするとは、落ちつき過ぎまする。さう斯ういふ間も召捕りに……コレ、早う立退く用意を、さつしやりませ〳〵。申し、仲町の騒動、上を下へと騒いで居りまするぞ……ぢやによつて、お前樣を。

源五　よいワ、噂があれば隱すに及ばぬ。

ト前垂れより、吹替への首を出し

八右衞門、コレ、これを見ろ。

ト八右衞門、首を見て

八右　不便や小万を。南無阿彌陀佛〱〱〱々々々々々々。

源五　なんと、憎くい女郎ではないか。

八右　エヽ、短氣な事をさつしやりましたなア。

源五　八右衞門、親人へ忠義を忘れなよ。

ト刀差し、行かうとする。

八右　申し若旦那、どこへござりまする。

源五　知れた事だ。云ひ交しても小万は賣女、身共は浪人、女郎めをぶち放したゆゑ、名乘つて出るわえ。

ト行かうとするを、立廻りにて無理やりに引留め

八右　イヤ〳〵、そりやならぬ〳〵。

源五　なぜ留める。

八右　コレ、さうさすまいと、この草鞋三度笠、路銀も持つて、參つたは、夜のうちに立退かさうと、うろたへ眼で駈けつけたのぢやわいなう。コレ、千島の家風と自慢した、お家のお名を穢し、親御の恥辱を思はぬ心か……エヽ、情ない若旦那、この八右衞門は幼ない時より御奉公申し、親仁どの諸ともに、譜代の家來ぢやぞや。この度この江戸へ下つたも、こなたの身の上、一部仔什お國へ相知れ、親旦那源次兵衞さまの御立腹、既にお手打にもと思し召してござるを、この八右衞門めが段々お願ひ申して、お氣遣ひなされますな、下郎めが江戸表へ下り、若旦那源五兵衞さまに御意見申して、お心を改めさせ、洗ひあげて元の武士にして、歸國仕るでござりまするると申し上げたれば、親旦那にも御立腹のお顏も變つてニツコリと、八右衞門出かした、流石は譜代の其方、悴めにとくと、意見を加へ、心を改めさせ、連れ歸つてくれ、身共とても年寄つて、今役に立つべき悴めを、まんざら手打にしたい事はないと、目のうち濕んで仰しやつたを、知らぬこなたは名乘つて出て、剩さへ云ひ交した女を手にかけ、その科で若旦那は、鈴が森で獄門にかゝつてござると、お國へ歸つて親旦那に、コレ、申し上げられさ

うなものと、思うてゐさつしやりまするか。源五兵衞さま、イヤ、若旦那。

源五　ムウ・成る程、樣子、御存じなければ、國元の親人始め、一家中其方達まで、身共がたゞ小万が色香に迷うて、身持放埓と思ふも理り。また斯くぶち放したも、女が心が變つた腹立と存ずるであらうが、なか／＼さう云ふ源五兵衞ではない。これには云ふに云はれぬ、お家の爲になる、深い思案があつての事ぢやてサ。

八右　ナニ、お家のお爲になる深い思案とは。

ト ばた／＼にて、向うより六右衞門、尻をからげて、鉢卷にて、走り出て來て内へ駈け込み、片息になつて

六右　源五兵衞どの／＼。

源五　ヤ・家主の六右衞門どの、さぞ驚きでござらう。

六右　コレそこ所ぢやアない。仲町の樣子。知らずかいの知らずかいの。

源五　氣遣ひめさるな。家主のおてまへに、難儀はかけ申さぬ。

ト 立ちあがるを、八右衞門とめる。六右衞門こなしあつて

六右　コレ、源五兵衞どの、こなたゆゑにこの家主は、牢櫃へ入つて、首を切られても、おりや大事ない。マヽ、それよりは大事がある。おれが爰へ來たは、仲町の騷動、寢耳に惘り、直ぐに駈け出して行たところが、思ひがけない昨日來たお侍ひ、慥か宅左衞門さまとやらが、三五兵衞といふ侍ひ、廻しの彌助を捕へて、呼子とやらの詮議と、掴みあひ最中。この樣子を源五兵衞に知らせたいと、あせつてござるを、聞くと其まゝ駈け出して來ました。

源五　ヤア／＼／＼。すりや宅左衞門が、人でなしの三五兵衞を。

八右　申し／＼、若旦那、誠ある三五兵衞さまを、人でなしとは。

源五　われは樣子を存ぜぬわえ。

八右　イヤ／＼、三五兵衞さまは、それは／＼御深切な。お國元へこな樣のお身の上、お知らせ下されしゆゑ、親旦那の仰せにて、拙者はこの江戸表へ下ると其まゝ、三五兵衞さまのお目にかゝり、何かのお話し申し上げたれば、即ちあなたのお指圖で、お前樣と小万が仲、百萬だらの異見でも、なか／＼聞入れる事ではない。先づ源五兵衞に逢はぬうちに、小万に逢うて、斯う／＼して緣を



切らすが近道と、お國の上布、莨まで土産にやれと、お心を附けられ、小万さへ思ひ切らすれば、自然と遠退くこなたのお爲と、三五兵衛さまと相談の上、謀し合せて御家來の土手平を、お國の役人堤惣右衛門と名乘らせてこの八右衛門めが、こなたの眞實の兄と僞はり、小万に逢うて段々と賴み、否と云ふのを、無理やりに往生づくめに、緣を切らしたのぢやわいなう。

源五　なゝ、何といふ。すりや、三五兵衛と相談にて。

六右　源五兵衛さまと小万が仲を切らした。

八右　皆三五兵衛さまのお指圖。

源五　ムウ、どうやらそれでは…待て〳〵、六右衛門どの、騷がつしやるな。

六右　イヤ、わしは、何にも騷ぎやしませぬ、

ト源五兵衛、こなしあつて、炬燵蒲團を引退け、最前破つた書置を取出し、皺を伸して繼目を合せる。六右衛門もこれを手傳ひ、八右衛門は、合點のゆかぬ思ひ入れ。

源五　「申し譯ながら、書き殘し參らせ候ふ、ふとした緣にて、云ひ交し、二世の誓ひを樂しみ參らせ候ふ、その甲斐もなく、思ひがけなくお國の兄御樣、お役人樣、御同道にて、お越しなされ候うて」

ト六右衛門、また引裂いたのを繼ぎ合せ見て

六右　「金三分、小万さま十三日、晝仕舞ひ分、一兩二分、千太郎二つ、品太夫三つ」……エヽ、こりや書出しだ。

ト引退け、兩人、捨ぜりふにて、その次を引合せ

源五　「いろ〳〵と事を分けて、兄御樣のお賴みゆゑ、緣を切らねばならぬ仕儀、それゆゑ心に思はぬ愛想づかしさぞ御立腹と存じ參らせ候ふ、そこへつけ込み三五兵衛づらが、身を任せし體に思はせ候ふ憎さ。」

六右　なんだ、憎さか〳〵。

トまた後を尋ね

一分二朱、鰻の蒲燒代。エヽ。

ト引退け、捨ぜりふにて、あれこれ探し、

これだ〳〵……「無理に思ひ切らす企みにござ候ふ」殊に又、

ト次を探し

源五　殊に又「賴みに思ふ廻しの彌助づらも、三五兵衛と馴れあひにて、お爲顏にて心の底は、御身の仇と存じ候ふ。」

ト次を取つて

六右　「又々大事のお頼みの事。」

ト讀むを、源五兵衞、こなしにて、六右衞門より引ッ取り

源五　「お頼みの龍虎の呼子のそちらは、慥かに三五兵衞が所持いたせし樣子、伴右衞門が立合ひにて、ちよつと樣子を承り候ふ……」すりや呼子は三五兵衞が。

ト思ひ入れ。六右衞門とめて

六右　マア／＼、後を見さつしやい／＼。これ／＼……この事を聞出さうと心を盡し候うても、意地強き三五兵衞ゆゑ、誠は明かさず、いろ／＼難儀に思ひ候ふところに、右の樣子を承り、嬉しく早々御知らせ申し上げ候ふ。」

トまた次を取り

「〆めて金四兩二分慥かに受取り申し候ふ。」

ト源五兵衞、また次を取り

源五　「最早最前も二階にて、いろ／＼手管めに致し候へども、とんと／＼、この身は穢し申さず候ふ。必らず必らず、死んだ後にても、それぱかりは、お疑ひ下さるまじく候ふ。」

ト此うち源五兵衞、六右衞門、思ひ入れあつて讀む。

八右衞門、後悔のこなしあつて

八右　ヤア／＼／＼、そんならその書置、小万が心底は

トいろ／＼こなしあつて

お前樣を騙したも、三五兵衞を誠ある侍ひぢやと思うたは……コレ、下司の智慧、若旦那、誤まつた／＼。

ト源五兵衞、八右衞門が襟髪を取つて引附け、

源五　エヽ、おのれはなア。

トこなしあつて

ハテ、不便な事をしたなア。

ト小万が首を見て思ひ入れ。

六右　エヽ、コレ、三五兵衞めは、憎い奴でござるわえ

ト口惜しき思ひ入れ。八右衞門思ひ入れあつて

八右　さうぢや。

ト腹を切らうとする。六右衞門とめて

六右　コレ、八右衞門どの、こなたはなんで死ぬのだ。

八右　イヤサ、小万どのを旦那の手にかけさせたは、この八右衞門、三五兵衞を頼んだばつかり。それぢやによつて。

ト又死なうとするを、無理にとめて

六右　コレ、こなたが今腹切つたら、殺された小万がよみ

がへりまするか。
八右　サ、それは。
六右　殊に大事の源五兵衛さまに、死んで忠義が立ちまするか。
八右　オヽ、立ちまする。
六右　そりや又、どうして。
八右　サア、企みのある三五兵衛とも知らず、拙者が頼んだこの身の誤まり、誠ある小万どのの心底なれど、表は藝者遊女。すりや、下手人はこの八右衛門が立つて、お旦那には大切な詮議。こりやコレ、お家に係はる一大事ツイ輕はずみな事ではない。寶がお手に入らずば、千島の家國は退轉しますわいなう。
六右　成る程、さう聞けば尤もぢや。
八右　ぢやによつて、この八右衛門。
六右　忠義に命を投げ出して、
八右　この身は下手人。
六右　天晴れ侍ひ、花は三吉野、魚は鰹ぢやなア。
トこなしある。向うより彌助を宅左衛門追つて出る。花道にてちよつと立廻りあつて、舞臺へ追つて來る。
彌助　南無三、源五兵衛。
ト引返して逃げる。宅左衛門、立ちふさがる。
源五　アヤ、彌助めか。
ト引廻すうち、宅左衛門は内へ入り
宅左　源五兵衛どの、御油斷なさるな。其奴も三五兵衛が同類。
源五　その様子は小万が書置で承知いたした。ようらせたなア。
八右　すりや、宅左衛門さまには。
宅左　仲町の騷動心ならず駈けつけしに、思はず三五兵衛と彼奴が云ひ合せ、呼子の在所も逐一に。
ト逃げようとするを、宅左衛門、引廻す。立廻りのうち、宅左衛門、門の戸をピッシヤリ締める　彌助を四人して取巻き
宅左　源五兵衛どの、呼子の詮議、彼奴にとつくりと。
六右　捕手が來ちやア惡い。早く吐かせ。
源五　三五兵衛が在所、サア、どこぢや。
ト握り拳にて、頭を毆りまはす。
四人　サア、早う吐かせ。
彌助　アイタヽヽヽ、申します／＼。
トくらはせる。彌助、痛がるこなし、いろ／＼あつて

四人　サア、吐かせ〳〵。
彌助　ハイ、高で斯うでござりまする。三五兵衞さまがわたしを賴んで、小万を口說き落して源五兵衞。
　ト源五兵衞が額を見て、
さんを江戸の地に置かぬやうに目論み、それはお國で盜んだ龍虎の呼子の捌け口がないゆゑ、兎角邪魔になる源五兵衞さん、わたしは何にも存じませぬが、三五兵衞さんが賴んでおやによつて、表向きは世話燒く顏で、內證は三五兵衞さまと一つ腹。呼子をわしが世話して賣り拂ひ、その金で上方と心ざし、江戸を立退く相談の所へ、この宅左衞門さんが見えて、ちり〳〵ばら〳〵、もうこれで何にも云ふ事はござりやせん。どうぞ堪忍して、歸しておくれなされませ。
　ト立ちあがり逃げようとする。宅左衞門、引据ゑ
宅左　源五兵衞が小万を手にかけたを幸ひ、人殺しの訴人すると吐かしたな。
彌助　そんな事云うたかいなア。
　ト云ふ。又ぶちのめす。
源五　イヤ、それよりは肝心の呼子は、三五兵衞が所持して居るか。
八右　して、三五兵衞はいづくに。
四人　サア、吐かせ。
彌助　申しまする〳〵。三五兵衞さんは、夷の宮か木場のあたりに、わたしが行くを待つてござる筈でござりまする。
源五　それ聞いたらもうよい。なんでも三五兵衞を引ッ捕へ、大切なる呼子の詮議。
　ト身拵らへする。
宅左　それが肝要。短氣は御無用。
源五　立歸るまでは、八右衞門、其方も。
八右　いづれ若旦那の吉左右次第。
源五　小まんがこの首。
六右　取片付けは家主が役。
　ト六右衞門、首を取上げる。此うち彌助、ソロ〳〵逃げようとする。
八右　詮議の目代。
　ト放し突きやる。
源五　いかにも。
　ト引窓の細引を引ッ切り、彌助を縛る。
彌助　こりや、どうなされまする〳〵。

源五　詮議のおとりに、疵はつけぬ。

宅左　夜明けぬうちに。

八右　寶の盜賊。

六右　小まんが敵。

源五　仇と

三人　情。

ト六右衛門、首を見せる。源五兵衛、ほろりと思ひ入れ、彌助、向うへ、ツカ／＼と逃げる。源五兵衛、細引を扣へ

源五　南無阿彌陀佛……うせう。

ト彌助を引立て、向うへ入る。本舞臺の三人、心いきよろしくあつて

幕

本舞臺、正面黑幕、一面木場にて、丸太矢來、よき所に大木の柳、吊り枝見事に、舞臺先に泥船、時の鐘、蛙の聲、雨車にて幕あく。

ト上の方より、三五兵衛、尻をからげ、裸足にて傘をすぼめてさして下りて來る。

三五　こりや少し雨も小降りになつたさうな。思ひがけない所で、宅左衛門めに出ツくはして、とんだ目にあつた。時に彌助は、どこへ逃げたしらん。

ト花道の方へ、ウロ／＼かゝる。向うより彌助、縛られ形にて、走つて來て三五兵衛に行きあひ

彌助か。

彌助　申し、三五兵衛さん、爰には居られませぬ。早く逃げつた、逃げつた。

三五　サア、それにつけても、彌助、おぬしに逢ひたかつた。

ト云ふうち、揚げ幕の内にて細引を曳く。彌助、その形にて後ずさりに詰をしなら切り幕の内へ引込まれる。三五兵衛はこれを知らずに

この上は、彼の呼子を一時も早くばらして

ト云へども彌助ゐぬゆゑ、方々見まはし

彌助めは、たつた今まで

ト方々見廻し、切り幕の方へ行く所へ、源五兵衛ツカツカと出で、向うへ立ちふさがる。彌助は源五兵衛に曳かれながら、後よりついて出る。

三五　源五兵衛か。

源五　ハテ、よい所で、

三五　悪い所で
二人　逢つたなア。
ト　これより舞臺へ押し戻す。
三五　源五兵衛、うぬは小万が下手人だぞ。
源五　イヤ、下手人より、其方に尋ねる仔細がある
三五　なにを。
ト驚くを留めながら、三人よろしくあつて
彌助　モシ、この繩を
ト三五兵衛が側へ行くを、源五兵衛、引廻し
源五　コリヤ、彌助、身が宅で云つた通り、今一應吐かせ。
彌助　サア、それは、
源五　吐かさにやア、うぬ、斯うか。
トしめにかゝる。
彌助　ヤア、云ふわいな。最前も云ふ通り、わしが頼まれた。
ト云はうとする。
三五　ヤイ／＼、彌助、役にも立たぬ事を吐かすな。
源五　イヤ、役に立つ事だ。龍虎の呼子、三五兵衛がお國で盜み、所持すれば、今宵の騷動尻こそはゆく、其方を頼み、呼子を賣り拂ひ、その金を持つて、二人が上方へ上ると云うたでないか。
彌助　サア、さう云うたやうにもあり、また云はぬやうにもあり。
三五　コリヤ、源五兵衛、手にも足らぬ彌助を〆めあげる事はない。身に覺えもない事を云にして、身共をどうぞしようと思ふのか。
源五　イヤ、どうもせぬ。龍虎の呼子を取返すのだ。
三五　ハテ、しやらくさい。呼子を盜んだ覺えはない。殊におのれは人殺しの科人。小万が敵。
ト拔討ちに切りかける。源五兵衛、有合ふ傘にて受け留める。
源五　大切な呼子の詮議、證據を以て出さすが式法。それに無法の三五兵衛、もうこの上は武士の禮儀を取措いて爭そへば
ト傘を刎ねる。切りまはす。切先、彌助が繩を切つてやる。三五兵衛、呼子を落す。三人よろしく見得あつて
源五　さてこそ尋ぬる龍虎の呼子。
兩人　それを。
ト取りにかゝる。源五兵衛、立廻り、三人よろしく見

得になり、誂らへの鳴り物にて、花々しきタテあて、彌助、三五兵衛を見事に泥の中へ投げ込み、兩人、泥だらけにて上へあがり、兩方より源五兵衛へ組みつく。三人一度に泥へ入る。三五兵衛を殺し、彌助を踏みのめし、呼子を取上げ

源五　嬉しや呼子は手に入つた。

ト奥より宅左衛門、八右衛門、六右衛門出で

宅左　源五兵衛との、呼子はお手に入りましたかな。

皆々　めでたい〳〵。

源五　先づ今日はこれぎり。

五大力戀緘（終り）

# 隅田春妓女容性

二番目

三挺建

口に酢の　溜る異名や　梅廓に　西東みなみに來たよ臥龍梅

是は御存じ李下齋の秀逸を昔に習ふ宗十郎頭巾寬濶と意氣地の名も堅き多田の藥師の女夫石に汝も願ひを隠す鷺と烏を比翼に染めてサテ男氣な

梅堀由兵衛

夕立や　田も三囲の　別莊に　水無月は男になつて來て見たし

是は御存じ東籬園の風流をそのまゝ移す瀬川帽子美麗と手管の名になびく妾も郷の女夫橋誰か思ひを藪井に形と影の二面テモ女房氣な

小梅村小梅

表のカタリは、「隅田春妓女容性」初演の折のものである。

下掲の寫眞は、現今この役を最も得意とする中村吉右衛門の扮裝で、吉右衛門の由兵衛に、中村時蔵の小梅、大黒屋の表門から二人が歸る場面である。この狂言は度々筆を入れられたので、今日上演のものと、本集所載のものとは、稍相違してゐる點もある。

中に挿入した錦繪は、初演の折に發行されたもので、三世宗十郎の由兵衛である。その扮裝なぞは、狂言こそ違ふが、初世宗十郎の演じた由兵衛の型に據つたものだと云はれてゐる。



# 隅田春妓女容性

## 序幕

三囲の場
大黒屋の場

役名　伊藤勘十郎、吉原額侍屋の藝者、額の小さん、藝者、お筆、同、小糸。額侍屋才兵衛。醫者、久庵。曾根伴五郎、非人、土手のどぶ六實ハ家來十平次。金谷金五郎、源兵衛堀の源兵衛。梅の由兵衛、由兵衛女房、小梅。

造り物、一面に三間の土手、水茶屋の體。三囲の景色・通り神樂にて幕開く。仕出し兩方より大勢出て來る。

仕出　なんと、この土手は、いつも／＼賑やかでないか。

同　サア、今日は正月廿日の惠美須講、來月の初午は猶の事であらう。

仕出　次手に秋葉から白髭の方へ行かう。

同　それもよからうが、龜井戸へ廻らうわいの。

同　成る程、龜井戸を通つて梅屋敷もよからう。

同　今が盛りぢやげな。サア／＼、ござれ／＼。

ト矢張り通り神樂にて仕出し皆々入る。向うより勘十郎、袖頭巾にて、家來一人連れて出て來る。

家來　モシ／＼、お旦那、何れへお出でなされまする。

勘十　身共は白髭へ參詣いたして、歸りには又梅堀邊に、ちつと内用あれば……イヤ、家來、苦しうない。其方は先に宿へ立歸り、今暫らく手間取らうと申し置け。

家來　ネイ／＼、左樣ならばお屋敷へ。

勘十　何れにも早く。

家來　畏まりました。

ト家來は引返し向うへ入る。勘十郎、こなしあつて

勘十　藏前の伯父者人へ、御無心申した金子、どうぞ由兵衛に、イヤ、先づ參詣いたして來ようか。

ト祇園囃子になり、勘十郎こなしあつて奧揚口へ入る。向うより藝者小さん、お筆、小糸、若い者、三味線箱を持ち、親方才兵衛附添ふ。

小三　ほんに三囲の稻荷さんは、いつでも賑やかな事では

ないかな。
ふで　小三さんは、まだ出やしやんして間が無ければ、勝手を知らしやんすまいが、三月花の頃は、この土手は好いわいな。
小三　サア、今日この向島の大黒屋へ來るといふ事を知らせてあれば、わたしは早う彼のお方に逢ひたいわいなア。
ふで　エ、、そりやお前の深間、金谷の
才兵　ヤ、ナニ、金谷とは。
小三　イ、エイナア、爰らに關屋といふ里があるかいな。
才兵　オ、、關屋の里、汐入の庵崎、みな隅田川八景の中ぢや。
ふで　その八景で思ひ出した。慥かに今門前で逢うたは、久庵さんであらうがなア。
才兵　あの久庵どのは、人相見やら醫者やら、とんと分らぬ人ぢや。
　ト此うち向うより久庵、思ひ付の形にて、ツカ〳〵と出て來る。
久庵　これはしたり君達衆、最前前川前でチラと見たに依つて、呼びかけたところを、利いた風といふはあれど、聞かぬ風てズイ逃げぢやな。
小三　久庵さん、今お前の噂して居たわいなア。
久庵　どうでろくには云ふまい。コリヤ、常からおれを侮れど、小さんが知つて居る通り、お國の典藥、それより江戸へ來て、段々引下がつて三里の久庵。あまり醫者も流行らぬに依つて、コレ〳〵
　ト紙入れより天眼鏡を出し
この本國の天眼鏡、源兵衛先生に賴んで買つてもらうた。
　ト天眼鏡を出して光らして見せる。
才兵　こりや餘ッほど、よさゝうに見えまする
久庵　きやつを構へて相を見るぢや。
ふで　わたしが相は、どのやうなえ。
久庵　先づ天中天帝ひらき、保壽羅高く北角丸くなし、情の道が疎いわいの。
ふで　情の道が疎いとはえ。
才兵　ハテ、色事が嫌ひぢやといふ事ぢや。
　ト此うち小さん立寄り
小三　久庵さん、わたしはどの樣なえ。
久庵　藝者のお職は、又違つたものだ。面きうさうの如く、ゑんがんこがくの相。ムウ、成る程、こりや伴五郎との

が、どのやうに口說いても靡かぬ筈ぢや。一旦思ひ詰めた男を離れぬといふは、ハヽア、貞女かな賢女かな。操正しき女郎、藝者に稀れな類相ぢやわいの。

小三　何を云はしやんすやら。久庵さん、樣子を知つて居て、嬲らさんすわいなア。

久庵　なんの嬲るのではない、本まの事ぢや。兎角藝者女郎は惡性なお方が好いぢや。久庵も餘り女郎に振らるゝゆゑ、それで思ひ付いた人相見、昨夜吉原へ行つて、見世を張つて居る女郎どもの人相を見歩き、中で惡性なやうな、好く勤める女郎を見立てゝ揚げたところが、どう間違うたやら、また振られた。

皆々　オヽ、馬鹿らしい。

才兵　イヤ、斯うして居やうより、ちやつと大黑屋へ行つて、小さんが身請けの相談、伴五郎さまが待つてござる。

久庵　さうして、源兵衞先生も行かれたであらう。おれも行つて鯉の汁を吸はうわい。

小三　小糸さん、お二人さん、わたしや大黑屋より、梅若とやらの方へ行かうかいなア。

二人　さうぢやわいなア。

才兵　アヽ、滅相な。肝心の立物の小さんを、手放して堪るものか。

ふで　大事ない。わしが呑み込んで居るわいな。

小糸　サア〳〵、小三さん。

　ト通り神樂になり、久庵、才兵衞、小さんを連れて臆病口へ入る。矢張り神樂にて、向うより曾根伴五郎、着附け羽織にて、奴一人連れて出で來り、跡より十平次、乞食の形にて附いて來る。

十平　ハイ〳〵。最前からお願ひ申しまする。どうぞ遣つて下さりませ。

奴　ハテ、此奴、附くなと云ふに。しつこい非人め。

　ト云ひながら舞臺へ來る。十平次、矢張り附いて來る。此うち神樂とまる。

十平　ハテ、結構なお旦那、御人體にも似合ひませぬ。たつた壹文遣つて下さりませ。

伴五　コリヤ〳〵非人、持合せがあれば先程から遣れど、持合せが折惡しく無いに依つて。

　ト十平次を見て

ヤア〳〵其方は。

十平　お前は曾根

　ト云はんとするを

伴五　コリヤ、一錢二錢の合力を願ふ非人、ナ。
　ト奴を教へるこなし。
ナニ家來、其方は大黒屋へ參つて、源兵衛堀の源兵衛が參つてか、尋ねて參れ。早く行け。

奴　ネイ／＼、畏まりました。
　ト臆病口へ走り入る。

伴五　身共が草履摑みの十平次。ハテ、稀有な者になつたな。

十平　なつたどころか伴五郎さま、お前に賴まれ國出奔し、この江戸へ着いて、お前に貰うた金も遣ひ無くして此ざま。

伴五　身共も其方が行くへを、より／＼尋ねて居つたが、彼の申し合した千葉のお家の重寶、菅家手向山の色紙、其方に。

十平　サア、首尾よく盜んだ菅家手向山の色紙。捌け口を指圖の通りにコレ。
　ト襤褸の間より一札を取出し
この通り。
　ト見せる。

伴五　なに／＼「菅家手向山の色紙、受取り申す所實正なり、然る上はかねてお賴みの通り、此方にて密かに賣り拂ひ、金子は跡より遣はし申すべく候ふ、念の爲色紙受取り候ふ、一札仍て如件　源兵衛判、伴五郎どのへ」

十平　いよ／＼色紙の金子せしめたさ、逢ひたうて居りました。

伴五　イヤ、氣遣ひ致すな。この上は源兵衛と相談して、褒美の金はズッシリ。先づこの一札は其方、所持して居れ。
　ト右の一札を十平次取つて懐へしつかと入れる。

十平　そりや忝ない。それまでの凌ぎ、斯くいふ風體なれば。

伴五　ソレ、當座の貢ぎ。

十平　こりやたつた二兩。

伴五　ハテ、また跡から。

十平　違ひ無く賴みまする。

伴五　それに付いて、見りや金五郎めがこの江戸にて、額の小さんといふ藝者、それゆゑ猶執心。

十平　金五郎めが事は、源兵衛が手下の者に云ひつけ、見付け次第しまひ付ける此方の魂膽。サア、それに付いて源兵衛と談じた事もあるが、何を話さうにも爰は途中。

伴五　ちやと云うて、その形では身共と同道とも云はれず。
十平　氣遣ひさつしやるな。今の間に人體を作つて見せませう。
伴五　然らば後ほど大黒屋へ。
十平　尋ね〻行くから伴五郎どの。
伴五　十平次、早く。
十平　ドレ、男振りを仕立て〻來ようか。
　ト神樂になり、十平次向うへ入る、伴五郎、臆病口へ入る。ト向うより、バタ〳〵にて、揚げ幕より惡者一を見事に投げる。金谷金五郎、着流し町人の形にて、惡者二が手を捩上げて出て
惡一　アイタ、〻〻。夢でくれろ〳〵。
金五　大川端で皆知つた顏だ。通りすがりに喧嘩を仕かけ、冗談をさつしやるな。
　ト兩人を投げる。
惡一　イヤ、とんだ強氣なものだわえ。
惡二　色男に似合はぬ。こりや兵法を見知らせるな。
惡一　働らき手のおいら。ちつと稽古してもらはう。
金五　なんの兵法の柔術のと、高で町人、そんな事知つてよいものか。
惡二　イヤ、兵法は達して居る。吉原の藝者額の小さんと、腐り合うて居る金五郎。こつてりとした二人が仲。
二人　それでおいらも、あやかりたい。
　ト金五郎、思ひ入れあつて
金五　成る程、それで筋が知れた。こりや行あひの喧嘩から持込んで、斯う〳〵しろと頼み手があつて
二人　マア、そんなものだ。
惡一　小さんをおいらが仲間へもらはう。
金五　ハ、〻〻。くれいの貰ふのと、小さんは藝者、親方の抱へ、金五郎が自由にはならぬ。よし又自由になつても、やるまいと云うたら。
二人　オヽ、斯うして貰ふわい。
金五　ハテしつこい。冗談な。
　トこれより摺り鉦入りの鳴り物になり、金五郎、兩人を相手に立廻りになり、鳴り物立廻りのうち向うより梅の由兵衛、着流し一本差し好みの誂らへの頭巾を被り出て、花道より本舞臺の立廻りを見て居る。本舞臺の後へ伴五郎出て窺つて居る。金五郎を切らう〳〵と隙を窺ふ。由兵衛靜かに本舞臺へ來り、程好き所にて伴五郎寄る所を、由兵衛引廻し、取つて投げる。伴五郎

起きあがり、由兵衛を見て、ちよつと逃げて入る。金五郎これを知らず、始終立廻りよろしくあつて、茶店の薪ざつぱにて皆々を追ひ廻し、兩人逃げて入る。金五郎追ひ駈け行くを

由兵　金五郎さま、侍つた。

金五　ヤア、由兵衛どのか。

由兵　今の樣子を來かゝつて、とつくりと見屆けましたが、なア／＼天晴れの働らき、流石はお侍ひの果ほどある。

金五　ヤア。

由兵　下總の國千葉の御家中、金谷金兵衛樣の御子息、金五郎さまのお身持でござるわいの。

ト兩人床几に腰を掛ける。合ひ方。

改め云ふには及ばねど、この由兵衛も以前は千葉の御家中、三島隼人さまの御家來、若氣の過りに。イヤ、おれが身の上は後の事、思ひがけなう古主の娘御小さんさま、お前と云ひ交し國を駈落ち。その騒動に隼人さまの預かつてござる、お家の重寶、手向山の色紙紛失、それゆゑに小さんさまの親御隼人さまにも、お國での御難儀、段段樣子を聞くに、小さんさまのその身の上に、人に騙されて廓の藝者奉公。お前は神田邊の知るべの方にござると、始終の樣子。聞捨てならぬ古主の事、大恩受けたる由兵衛が、及ばずながらお世話申すも、お二人をお國へ歸し、色紙の詮議も。

金五　サア、小さんが縁に依つて、いろ／＼の世話になる金五郎が身の上、ほんに仇には思ひませぬ。

由兵　それに、その有樣は、どうでござりまする。

金五　イヤ、小さんが事から、以前の朋輩、惚れて居る、曾根伴五郎が頼むと見えて二人が。

由兵　サア、金五郎さま、兎角強い事を廢めて、お身が大事でござりまする。さうして、お前はどれへ。

金五　今日大黒屋へ、小さんが來て居ると知らせゆゑ。

由兵　こちでもしも大黒屋へ行かねばならぬ。一緒に行くは異なもの。サアお前、お先へござつて、小さんさまにも追ツ付け。

金五　そんなら由兵衛どの。

由兵　金五郎さま、ソレ、大黒屋には小座敷がいくらもある。隨分密かに小さんさまと。エヽ、どうなりとなさりませ。

ト唄になり、由兵衛こなし。金五郎も思ひ入れあつて臆病口へ入る。由兵衛、跡見送つて居る。此うち勘十

勘十郎、着付け羽織、深編笠にて下座より出て

由兵　さう仰しやるは。

勘十　伊藤勘十郎でござる。

由兵　誠に勘十郎さま。

ト頭巾を脱がうとする。

勘十　イヤ、由兵衛、其方の頭巾の様子承つて居れば、脱がずとも、其まゝ〳〵。

由兵　左様ならば御免下さりまし。

勘十　人はその元を忘れぬを専一と存すれど、得ては忘るるものなるに、由兵衛に格別舊恩を思ひ、夏は笠の頂き、冬は其まゝ頭巾の内に。

由兵　古主隼人さまの手跡にて、私しへ御意見の狂歌、堪忍のなる堪忍が堪忍か、ならぬ堪忍するが堪忍。

勘十　成る程、堪忍は誰れもすれど、堪忍のなり悪い所を堪忍するとは、流石三島隼人どの。

由兵　御存じの通り、お國元の御城下にて、お供先の大喧嘩。相手の三人を仕留めた拙者、直ぐにお仕置にもあふ所を、御主人のお情にて、御知行替への御訴訟、不思議にも命を助かりお國を追放。その砌りにこの一首を、其方が守にせよと下された今の狂歌、頭に戴く御主人の大恩。それゆゑどなたに逢つても、滅多に取らぬこの頭巾。

勘十　イヤ、神妙なる志し。それに付けても三島隼人どのは、この勘十郎が爲にも、幼少よりお世話にあづかりし劍術軍學手蹟の御師匠、下總に育つたれど、今は親元江戸表へ立歸り、金杉のお家に勤めるも、これ皆隼人どののお庇、立身を其方に誓うて、舊恩を忘れぬ心。ナア、由兵衛。

ト懐中より財布の金を出し

役に立てゝくりやれ。

ト由兵衛、不思議さうに取上げ

由兵　こりや慥かに百兩。この金子は。

勘十　様子を聞いた御息女の身の上、思ひがけなき吉原の藝者とあれば、身請けとやら其方が心遣ひ。少しなれども身共が寸志。

由兵　師弟のよしみに勘十郎さま。

勘十　貢ぎでは無い、由兵衛どのへ。

由兵　イヤ、それは。

勘十　ハテ、役に立てば喜び。云うても身共は故郷の江戸、

藏前に米商人の親類もあれば、この後とても遠國に及はぬ。

由兵　有り難うござりまする。

勘十　梅堀の宅へ尋ねて行からと思ひしに、爰で逢うたは時の幸ひ。身共は屋敷へ。

由兵　左様ならば。

勘十　ア、、華人さまの狂歌は何とやらなう。

由兵　堪忍のなる堪忍が堪忍か、ならぬ堪忍するが堪忍、

ト頭巾を敎へる。勘十郎、思ひ入れあつて

勘十　オ、、その通り。

ト唄になり、こなしあつて勘十郎は向うへ入る。由兵衞跡見送り、金を戴き、思ひ入れあつて臆病口へ入る。ト通り神樂になり、向うより小梅、着流し、手拭を茶屋被りにして來る。源兵衞、着付け羽織の形にて出て來る。

源兵　コレサ／＼、梅堀のおかみさん／＼。

小梅　わたしが事かえ。

ト振り返り見て

ア、、源兵衞さん。

源兵　小梅ばう、久しいなア。

ト小梅、構はず、本舞臺へツカ／＼と行く。源兵衞、附いて來て

源兵　マア／＼、爰へちよつと。

ト茶見世の床几に腰を掛ける。

小梅　イヤ、わたしやちよつと心が急くわいな。

源兵　お前も今日は、三圍の稻荷參りかえ。

小梅　稻荷樣へ參り次手に、ちよつと大黒屋へ行かねばならぬわいな。

源兵　そりや何しに。

小梅　こちの人に逢ひに、

源兵　ヤア。

小梅　アイ、可愛い主、いとしい男の由兵衞どのに。モシ、わたしや前の藝者とは違ひますぞえ。三年跡に嫁入りして、今では梅堀の梅の由兵衞が女房の、小梅でござんすわいな。

源兵　ハテ、梅盡し面白い。おれも源兵衞堀の源兵衞と云はれては、大概人に知られた通り者ぢや。藝者の時から、ぞつこん惚れ拔いて居る小梅。イヤ、由兵衞のおかみさん、其やうにツン／＼せずと、この床几で一服のましても、あんまり罰が當るまいぞえ。

小梅　エ、。

ト悄りして、ちやつとこなし。

お前も氣の利かぬ、そんなら付けて下さんせいなア。昔に變らぬ莨入れといひ、煙管も意氣ぢやなア。

源兵　なんの、煙草は越後屋のうすまい、煙管はこの間迄の羅宇で張り直したのサ。

小梅　お前、矢ッ張り吉原へ、お通ひであらうなア。

源兵　今は世界が違つて、前のやうには冴えぬぢや。

ト此うち小梅、莨を付け替へて源兵衛へやる。

源兵　コレサ、野暮め、拭かいでもよい事を。

小梅　源兵衛さん、ゆるりとしてお歸りえ。

ト行かうとするを引とめ

源兵　コレサ、其やうに急がいでもよからうがな。

小梅　イヤ、こちの人に、急にちと逢はねば。

源兵　ハテ、男の樂しんで居る所へ、女房の行くも拙いものぢや。

小梅　エ、。

源兵　おれと違つて由兵衛は、男が好いゆゑ藝者が惚れて、それは／＼華やかな事。サ、今日も大黒屋で、その藝者を連れて、樂しんで居るであらう。

小梅　ムウ、そんなら、こちの人には色があるかえ。

源兵　こなさんは知らぬか。額の小さんといふ美しい、まだ新米の藝者。吉原一ぱいに浮名が立つてある。それを知らぬとは、ハ、、、、こいつはをかしい。とんだ事だわい。ハ、、、。

小梅　マア／＼、待つて下さんせ。源兵衛さん、何と云はしやんす。こちの人由兵衛どのが、云ひ交して居やしやんす藝者は、アノ小さんとやら云ふかえ。

源兵　云ふかとはのろい。どうしたものだ。

小梅　ムウ。それでよめた。小さんといふ文の來る度に、こちの人が。

トこなしある。源兵衛、莨盆を叩き／＼

源兵　梅の由兵衛に二人の女房、小さん小梅と悋氣の炎。

小梅　エ、、さういふ事とは今まで知らず。

源兵　梅の由兵衛に二人の女房。

ト小梅、源兵衛と顏見合せて思ひ入れあつて

小梅　ホ、、、、馬鹿らしい。わたしとした事が、源兵衛さんに手向けられ、思はず知らず。

源兵　コレサ、手向けるのでは無い、大眞實ぢや。これが噓ならこの源兵衛、二度と廓へ入込むまいわサ。

小梅　イエ〳〵、それでも。

源兵　おれが前からこなさんに氣があるゆゑ、由兵衛が仲を裂かうと思うて小さんが事を……こりや尤もぢや。女子の心では、嘘ぢやと思ふも聞えてあるが、コレ、源兵衛が云ふ事嘘か誠か、これから大黒屋へ行つて、小さんが來て居るであらう。マア、由兵衛が樣子を、とつくりと見たがよい。

小梅　アイ〳〵、こりやさうせうわいなア。

源兵　ハテ、たとへ行つても、小さんが實否を糺すまでは、隱れて樣子を。

小梅　そんなら源兵衛さん。

源兵　小梅どの、おれが惡うはせぬ。マアごんせ。

小梅　合點でござんす。

　ト また通り神樂になり、兩人、こなしあつて臆病口へ入る。道具替る。

　造り物、平舞臺、見附け長暖簾。上の方、廻し障子屋體。橋がゝりに枝折り門。よき所によび井戸。すべて向島大黒屋の模樣にて、誂らへの騷ぎ唄にて道具納まる。

　ト 奥より小さん、金五郎が胸倉を取つて

小三　マア、何ぢやあらうと、ちよつと來て下さんせいなア。

　ト 云ひ〳〵兩人出る。

金五　小さん、見苦しい。男の胸盡しを取つて、マア、爰を放せ。

小三　金五郎さん、お前、口舌ぢやござんせぬ。奥へ來て居る伴五郎が、わたしを身請けすると、源兵衛諸とも親方さんと相談の事で、この間からわたしも氣を揉んで居る。最前由兵衛に逢うたれど、段々の世話になる上、また身請けとはどうも云はれず、それゆゑ文で頼んであるわいな。

金五　ぢやと云うて氣の毒な。せめて手附けなりとおれが拵らへたいが、昔と違うて今の身の上、僅な金さへ手支へる。

小三　身請けの金は二百兩とやら。

金五　せめて百兩。ア、誰れぞ

小三　貸してくれぬかいなア。

　ト 兩人、當惑のこなし。此うち向うより十平次、着流し、浪人者の形にて出て來る。

十平　その金、用立てませう。
兩人　エヽ。
十兵　イヤ、其方に存じ無けれども、手前は存じて居る金谷金五郎どの。僅な金子に差支へ、當惑の様子承つて氣の毒。幸ひ拙者、持合せし金子百兩。
ト財布を出し
立替へ申す。
ト兩人、恟りして
小三　アノ、この金子を金五郎さまへ。
十平　お心置きなう。
金五　無ければならぬ金の手詰め、貸さうと仰しやるは忝ないけれど、ついにお目にかゝらぬ、近附きでもない私しに。
十平　お取替へ申すも淺からぬ、お二人が戀仲、感心いたしたゆゑ。拙者も浪人なれど以前は武士、と申すも表向き、有やうはこれが商賣でござる。
金五　エヽ。
十平　イヤサ、少々宛の金子を差引いたして、渡世仕る浪人者。それゆゑ吉原へ入込む大盡金、又は太夫金を貸して、池の端ではなけれども、口錢を取る、俗に云ふ口入れでござる。
金五　ムウ。すりや聞傳へて居る金の世話役、口入れとやらの。
十平　それで近附で無うても貸しつける。
金五　エヽ、忝ない。そんなら小さん。
小三　マア、その金を
金五　お借り申しまする。
ト取らうとする。
十平　待つた。望みなら貸して進ぜるが、金の利足と拙者が働らき代、極めは先へ引くなれど、始めての得意、金五郎どのだけ、後での差引、慥かと思へば、苦しうない、まづ一札を遣はされい。
金五　その一札とは。
ト金五郎心得て、硯箱を出して來てあてがふ。十平次、下書を書いて
十平　知れた證文、この通り。
ト金五郎見て、その通りサラ〳〵と書く。
金五　さうして、こなたのお名は。
十平　土手のどぶ……イヤ、どふ池屋六右衛門。
金五　六右衛門。

ト書くうち。
十平　六右衛門どのへ、金谷金五郎、自筆なれば書き判でも大事ない。
ト云ふ通り認める。
金五　これでようござりまするか。
十平　よし〳〵。ソレ百兩。
ト渡す。金五郎取つて
金五　エヽ、忝ない。思ひがけない、コレ、小さん。
小三　こんな嬉しい事はござんせぬわいなア。
金五　時に、肝心のお前の所はえ。
十平　返さつしやる時分は、此方から受取りに參る。
金五　そんならその時
小三　お浪人樣。
十平　お二人これに。
ト唄になり、十平次、こなしあつて奧へ入る。兩人、後に殘り、無性に悦ぶ。
金五　コレ、小さん、思ひがけないこの金が出來たから、身請けはこの金五郎。なんと、嬉しいか〳〵。
小三　こんな嬉しい事がござんせうかいな。ほんに思へば、今のお方は結ぶの神さん。
金五　この喜びに、そんならちよつと。
トこなしあつて小さんを引寄せる。小三こなしあつて
小三　金五郎さん。
金五　小さん。
小三　オヽ、嬉し。
ト抱きつく。この前より小梅、奧より出かけて樣子を見て居て、いろ〳〵こなしあつて、この時さてはト思ひ入れ。我れを忘れて
小梅　オヽ、笑止やの。
トこれにて二人、恟りして立分れる。
小三　ヤア、お前は。
ト小梅、小さんを連れて來て
小梅　額の小さんさまといふ藝者さんはお前ぢやな。
小三　アイ。
トまた金五郎を連れて來て
小梅　さうしてお前は、いよ〳〵この小さんさまと。
金五　云ひ交して居る金五郎。それがどうしました。
小梅　今の樣子ではお二人ともに、つい一通りの仲ではござんせぬなア。
小三　アイ、耻かしながら國で云ひ交し、この江戶へ來て

も矢ッ張り變らず。

金五　追ッつけ身請けして、小さんはおれが女房。

小梅　そりやこそ、わしを騙しくさつたわいなア。

金五　コレ／＼女中、二人が事を詳しく訊くこなさんは。

小三　マア、誰れさんぢやえ。

小梅　アイ、わたしや梅の由兵衛が女房。

小三　そんなら聞き傳へた小梅さんかえ。

小梅　お前どうして、こちの人由兵衛どのに。

小三　アイ、不思議にめぐり逢うた以前の家來、由兵衛が段々の世話。

金五　小さんが縁で、この金五郎まで。

小梅　エヽ、そんなら、こちの人の以前のお主、三島隼人さまとやらのお娘御さんかいなア。

金五　この江戸へ來て、人に騙され藝者の勤め。

小梅　さうとは知らず……アタ憎らしい、あの源兵衛づらめが。

ト奧の方を睨めつける。

金五　外ならぬ由兵衛どのゝ御內儀の

小三　小梅さん、この上ながら

兩人　頼み申しまするぞえ。

小梅　これは／＼、こちの人の大事のお主なれば、わたしも及ばずながら……それはさうと、由兵衛どのは。

小三　奧の座敷でお前と一緒に。わたしもちよつと。

小梅　そんなら御遠慮ながら。

金五　おれは親方に逢うて、今の金を身請けの手附けに。

小三　さうして下さんせ。

ト小梅、思ひ入れあつて

小梅　ほんに思へば、源兵衛づらに手向けられ、腹立ち紛れに爰へ來て、ようマア、こちの人に先へ逢はなんだわいなア。

小三　ニヽ。

小梅　イヤ、ドレ、由兵衛どのに。

ト騒ぎ唄になり、小梅、こなしあつて、小三金五郎を連れて奧へ入る。ト伴五郎、源兵衛、久庵、十平次出て來て

源兵　どぶ六、目算の通りに。

十平　まんまと首尾よう、金五郎に百兩。

源兵　あいつが取れゝば皆符牒分けぢや。

久庵　そりや忝ない。金が出來たら天眼鏡を買はねばならぬ。

ト出して見せる。

伴五　時に源兵衞、先達て預けて置いた彼の手向山の色紙、急に賣り拂つて小さんが身請けの

源兵　ハテ、氣遣ひさつしやるな。おれが預かつて居る色紙は、千葉家の重寶、野暮な盗み物、滅多に世間へ出されぬ。ぢやに依つて手を廻して賣り拂ひ、金さへ出來たら小さんが身請けを、おれが呑み込んで居る。

伴五　それがどうぞ今日の間に合はうか。

源兵　たとへ金が無くても、源兵衞堀の源兵衞、親方を押ツ捕へて……てつぺい押しに押しつけても、身請けはお前にさせまするわいの。

久庵　マア、先生任せに伴五郎さま。

伴五　さう行けば忝ない。

ト ばた／＼にて、奥より才兵衞、金五郎と小さんを引立て出て

小三　親方さん、こりやお前、何さしやんすぞいなア。

才兵　何するとはコレ、金五郎さま、お前は／＼、大それた人ぢやの。

金五　親方、いま奥で渡した身請けの金、なんでおれが大それた事をした。

才兵　その受取つた金、コレ、この通りの銅脈小判、似せ金ぢや。

ト財布を抛り出す。

金五　ナニこの金が。

ト取つて改め見る。

金五　ほんに、こりや似せ金。

ト悄り。

小三　エヽ、そんならその金は。

金五　ムウ。イヤ御浪人、ちよつとお目にかゝりませう。

十兵　身共に何の用ぢや。

金五　近頃卒爾ながら、最前お借り申しました百兩の金は、コレこの通りの

ト金を見せ、又こなしあつて

サア、よもやこの似せ金を、お貸しなされう筈がない。こりや何ぞ間違つて。

十平　コレ／＼、コレサ、金五郎、成る程金子御用立て申した……が、身共が貸したは正金正銘、眞の小判。

金五　それに又この金は。

十平　ドレ。

ト取つて見て、わざと悄り。



十平　ヤア／＼、ほんにこりや似せ金、似せ小判ぢや。金五郎、わりや顔に似合はぬ、恐ろしい事をするな。
金五　エヽ、なんと。
十平　イヤサ、身共より貸した正真の小判を、其方で摺替へて、その云ひ譯で返さぬのか。コリヤ、確かな一札書いて砂にするのか。それはならぬ。
才兵　コレ、金五郎さま、この小さんが身請けはどうするのぢや。
金五　エヽ、コレ。
　ト十平次を見て、こなしある。
伴五　コリヤ／＼親方、小さんが身請けは身共がするぞ。
才兵　左様ならば、其お金を。
伴五　イヤサ、その金は。
　ト源兵衛の顔を見る。
源兵　身請けの金はおれが渡す。この源兵衛が渡す。親方、云ひ分はあるまいが。
小三　イイエ、わたしや身請けは、矢ッ張り金五郎さまでござんす。
才兵　でも、其やうな金では。
金五　イヤ、それは。

　ト十平次にキッとこなしあつて。
十平　深切らしく金を貸し、こりやおれを盗人猛々しい。騙りをひろぐ金五郎、いつそ。
　ト引付けうとするを振り拂ふ。小さん留めて、ちよつと立廻りにて、十平次、兩肌脱ぐと襤褸を着て居る。金五郎、小さん、見て恟り。
金五　ヤア／＼、その形は。
十平　何を隠さう、おりやこの通りの乞食非人ぢや。
小三　そんなら、その非人が。
十平　金持金五郎さま、見る影も無い乞食非人の金を借りて、返さずには置かれまい。サア、貸した金をどうぞ、お慈悲に返して下さりませ。
金五　サア、それは。
源兵　金五郎、わりや乞食の金を借りたに違ひないか。
十平　なんの違ひがあらう。確かな一札。
金五　みす／＼こりや、うぬ。
十平　似せか正真か、なぜその時改めぬ。
金五　サア、それは。
十平　金を返すか。
兩人　サア。

三人　サア〳〵〳〵。

十平　どうだ。

ト此うち一間の障子引抜きにて開く。ト由兵衛、莨盆を扣へ、煙草のみながら

由兵　ソレ、百両。

ト前へ投げ出す。皆々見て

皆々　梅の由兵衛。

金五　ヤア、これは由兵衛どの。

由兵　ハテ、何にも云はずと、その金済ましてしまはつしやりませ。

小三　さうぢや。

ト金を取上げ

コレ、金五郎さま、この金ちやつと。

金五　イヤ〳〵、この金遣うては。

小三　大事ござんせぬ。由兵衛が志し、早う済まして下さんせいなア。

金五　これでは。

ト由兵衛が顔を見る。由兵衛こなしある。

エヽ、忝ない。

ト金を取る。

源兵　流石の由兵衛、梅堀の通り者ほどあつて、切れるぢやないか。

久庵　オヽ、切れる〳〵。追ツつけ小さんと金五郎が仲も、首も切れるであらう。

小三　エヽ。

トこなしあつて、金五郎、十平次が側へ寄つて

金五　騙りと知つて騙り取られる百両。サア、返す。

ト投げ出す。十平次、こなしあつて

十平　オヽ、受取る。なんの、貸した物、取らいでや。

ト金を受取り、襤褸の袖を引ッ断り、小判を改め、包んで懐へ入れる。

小三　金受取らしやんしたら、最前の一札とやらを金五郎さん。

十平　一札とは。

金五　オヽ、さうぢや。おれが書いた預かり手形。

十平　そりや爰にある。

ト懐の證文を出し

ソレ。

ト渡す。金五郎取つて披き

金五　一菅家手向山の色紙慥かに受取り申し候ふ所、実正

なり、然る上はお頼みの通り此方にて密かに賣り拂ひ金子は跡より遣はし申すべく候ふ、念の爲色紙受取り一札件の如し。」

皆々　ヤア、それ

十平　南無三、間違つた。

　ト取りにかゝる。金五郎、付け廻す。小三、隔てる。

金五　違うでも此方の事。

十平　でも。

　ト小三を引退けるうち、由兵衛、一間よりツカ／＼と出て來て、金五郎が一札を取つて

由兵　「菅家手向山の色紙慥かに受取り申し候ふ所實正なり、然る上はお頼みの通り密かに賣り拂ひ金子は跡より遣はし申すべく候ふ念の爲色紙受取り一札件の如し、伴印どの源印判。」

伴十　それを讀まれては。

　トかゝるを左右へ突き退け

由兵　ハテ、百兩には好い掘出し物。

伴十　イヤそれは。

　トまた兩人かゝるを立廻り、兩人を見事に取つて投げる。

由兵　今を始めの旅衣。ヨイヤマカセロナ。

　ト頭巾を取り、尻引ツからげる。源兵衛、ツカ／＼と行つてちよつと拔きかけるを、由兵衛、付け廻す。作五郎、久庵かゝるを、立廻りにて投げ退け、十平次逃げるを、襟髪取つて引付ける、久庵源兵衛、それはト寄るを、キッと睨めつける。金五郎小三隔てる。由兵衛、十平次を引付け。

ヤイ、どう乞食め、合點の行かぬ此ざまで、千葉のお家の重寶、手向山の色紙を渡した受取り。この一札の伴じるし源印の本名吐かせ。慥かにそれと知れてはあれど、うぬが口からほざかすが盗賊の證據。サア、どうだ。

十平　イヤサ、それは

由兵　吐かさにや、うぬカウ／＼。

　ト一札を持つて十平次を、いろ／＼舞臺へ捩ぢつける。此うち源兵衛、さま／＼踠く。思ひ入れあつて久庵が天眼鏡を引ツたくり、一札の上へ天日を移す。仕掛けにて一札燒ける。皆々恟り。

小三　それ／＼、大事の一札。

金五　なぜ燒き捨てた。源兵衛。

源兵　ホイ、思はぬ麁相。

由兵　大方知れた色紙の行くへ、もうこの上は。
　ト由兵衛立ちあがり、キツとなる所へ、奥より小梅、ツカ／＼と出て、頭巾を取上げ、由兵衛を見得好く留めて
小梅　コレ、こちの人、お前はこの頭巾を忘れさしやんしたか。
由兵　ヤ。
小梅　サア、この頭巾は一生の守。この内には。
　ト差付ける。由兵衛、思ひ入れあつて
由兵　ムヽ、この場の仕儀……ならぬ堪忍するが堪忍。
小梅　心一つに取納めて。
由兵　と云うても大切な。
小梅　サウ、よもや唐天竺へも渡すまい。すりや、いつでも。
由兵　オヽ、さうぢや。
　ト尻の褰げを下ろす。小梅、こなしあつて
十平　嬉しやおれが身の上は
　ト立ちあがるを、由兵衛、手早く荒繩にて引ッ縛つて。
由兵　大事の代物、金五郎さま。
金五　合點ぢや
　ト引据ゑる。源兵衛皆々顏見合せ
源兵　ムウ。
　ト落ちつくこなし。才兵衛、前へ出て
才兵　最前から爰に押默つて居りましたが、小さんが身請けは。
小三　親方さん、外へ行けば、わしや死ぬるぞえ。
小梅　滅多にや殺さぬ。身請けは此方へ。ナア、こちの人。
伴五　イヤ、この伴五郎ぢや。ナア、源兵衛。
源兵　ハテ、あちらの別れ次第。
才兵　どちらでも、兎角お金の早い方へ。
皆々　サア、その金は。
　ト由兵衛、思ひ入れあつて
由兵　女房ども、その頭巾。
小梅　アイ。
　ト渡す。取つて
由兵　金五郎さま、女房、案じる事は無い。小さんどのゝ身請けする。
　ト合ひ方になり、由兵衛、切り戸の鍵を取つて來て、右の頭巾を括り合せ、ピンと錠を卸し
　親方才兵衛、この頭巾は、ちつと樣子があつて、由兵衛が

寶には一生の守り。それで不斷滅多に脫がねども、金の手詰めに脫いだ頭巾、幸ひ在り合ふ錠前へ、ピンと鎖したこの頭巾は、身請けの手附け拵へて引替へるまで、預かつてくれまいか。

才兵　成る程、いま江戸中で顏の知れた梅の由兵衛、面白い、金の代りに預かりませうが。そりやいつまで。

由兵　明々後日の晩まで。

ト此うち小梅、思ひ入れあつて

小梅　今日が正月の廿日、明々後日は廿三日の晩。

由兵　きつと百兩の金拵らへて、頭巾を此方へ戻す。

才兵　ようござる。呑み込みました。

由兵　忝ない。きつと預けたぞ。

才兵　畏まりました。

久庵　コレ〳〵源兵衛先生、彼方に頭巾で身請けが出來た。此方はこりや足袋でなと、小さんが身請けを、ナア、伴五郎さま。

伴五　オ、サ、足袋で呑み込ますは、ぱつちでも大事ない。

源兵　ハテ、馬鹿つくす事はない。かち合はすと、こけて來る小三が身請け、廿三日の晩までおや。コレ、跡へ廻つて思案がある。

小梅　この人、アレ又。

ト源兵衛を敎へる。

由兵　ハテ、彼方に思案があれば、此方にも證據の一札、燒き捨てゝも後日にキツと。

源兵　そりや、どこでも

由兵　源兵衛堀と

源兵　梅堀と

伴五　由兵衛、

小梅　源兵衛、

由源　ムウ。

小梅　コレ、

ト立ち寄る、思ひ入れある中へ小梅入る。

由源　重ねて逢はう。

ト唄になり、皆々思ひ入れあつて由兵衛、小梅、金五郎、小三、十平次を引立て、奥へ入る。跡に源兵衛、伴五郎、久庵殘り

伴五　源兵衛、其方が働らきで、一札は燒き捨てたれど、盜賊は十平次、我れ〳〵が所持するといふ事を

久庵　さうぢや。由兵衛めが勘づき居つた。

源兵　大事ない。色紙の事は、これからはしら似せで、覺

えないと云ひ抜く。また小さんが身請けも、頭巾を預ける程の仕儀・三日のうちに金は出來ぬ。

伴五　然らば一時も早く彼の色紙を。

源兵　サア、持つては居られぬ。これから直ぐにこなさんを同道で、色紙をせいらく。久庵は跡に殘つて、どぶ六めに逃げつて來いと云へ。

久庵　そりや合點だ。

源兵　伴五郎さま、おれに附いて。

伴五　イヤ、今一度ちよつと小さんに。

源兵　ハテ、裾貧乏な人ぢや。

ト唄になり、源兵衛、伴五郎を連れて向うへ入る。久庵、奥へ入る。暮れ六ツの鐘鳴る。この時、燭臺出る。奥より

小梅　申し、それに及びませぬ。よしにして下さんせ。

ト小梅、下男を連れて出る。

下男　もう日が暮れました。是非土手から吾妻橋まで送りまする。

小梅　忙がしいのに、大事ござんせぬわいなア。

下男　イエ／＼、由兵衛さまへ云ひ譯が濟みませぬ。

小梅　是非送つて下さんすか。

ト硯を取つて來て文を書き、封じて上書を書き、立ちあがり

お前、送つて下さんすなら、とてもの御苦勞に、吾妻橋を渡つてこの文を。

ト渡す。

下男　弟淺次郎どのへ、姉小梅より。

小梅　其わしが弟が、藏前に奉公して居ますする。そこへその文を。イヤ、委しい樣子は道々。サア、來て下さんせ。

ト唄になり、小梅、下男を連れて忙がしく向うへ入る。バタ／＼にて、十平次、久庵出て

十平　久庵、源兵衛の方へかナ。

久庵　そりやマア。この繩を早く。

十平　そりや。

ト後を向く。繩を解く所へ、金五郎出て

金五　座敷を逃げつた乞食、動きやアがるな。

十平　ヤア、金五郎か。

久庵　邪魔な奴だ。

十平　片付けてしまへ。

ト金五郎へかゝる。烈しき合ひ方になり、金五郎十平次立廻り、久庵、ウロ／＼して怖がり、兩人・立廻り

のうち、臆病口の松の木へ駈けあがり、十平次よろしくあつて、金五郎追つかけ入る。久庵、こなしあつて松の木より降りようとする所へ、奥より足音。又これにて恟りして駈け登る所へ、小さん、お筆、小糸出て

筆糸　小さんさん、どのやうに尋ねても、金五郎さまは居やしやんせぬわいなア。

小三　さうして、悪者どもゝ居ず、こりや由兵衛に云はねばならぬわいなア。

ト久庵、由兵衛と聞いて怖がるこなし。お筆、久庵を見つけ

お筆　アレ〳〵、松の木に誰れやら居るぞえ。

ト久庵、ちやつと両袖にて頭を隠す。

小三　ほんになア。あれは慥かに

ふで　ア、あれは猿であらうわいなア。

ト松の木の上にて

久庵　キヤツキヤツ。

ト猿の真似をする。三人、思ひ入れあつて

小三　イヤ、猿ぢやござんせぬ。ありや、烏ぢや〳〵。ナア、お筆さん小糸さん。

筆糸　ほんに、烏ぢやさうなわいなア。

久庵　カア〳〵。

ト烏の真似をする。

小糸　イヤ、烏ぢやない、鳶ぢやわいなア。

久庵　ヒイトロ〳〵。

ト鳶の真似をする。

小三　イエ〳〵、ありや鳶ぢやない、見やしやんせ。頭が圓いに依つて、蛸ぢやわいなア。

ふで　ほんに蛸ぢやわいな。

小三　ありや蛸ぢや〳〵。ありや河岸で見せる蛸男ぢやわいなア。

ト久庵、見せ物の真似をしようとして、ようせぬこなし。

三人　コウ、蛸さま〳〵。

ふで　蛸男も慥かに啼くであらう。

ト久庵、蛸に困り、せう事なしに

久庵　タコ〳〵〳〵。

ト啼く。皆々笑うて、三人囁く。

筆糸　そんなら由兵衛さんに。さうぢや。

ト奥へ走り入る。久庵恟りして落ちる。

小三　ヤア、久庵。

久庵　小さん、うぬ。
ト かゝるを両人、立廻りにて燭臺を打ちかへす。暗がりになり立廻り。よき所にて、由兵衛、大黒屋のぶら提灯を提げて、ツカ〳〵と出て、久庵を突き返す。
久庵　ヤア、由兵衛かれを。
ト かゝるを立廻りにて、下座の呼び井戸の中へ打込む。
小三　それは。
由兵　構はずと、ござりませ。
ト 小三を連れて向うへ入る。よろしく幕引く。
ト 久庵、幕の外へズブ濡れにて、ヒヨロ〳〵と出て
久庵　アヽ、寒やなう〳〵。
ト 清玄のやうに向うへ入る。

# 二幕目

藏前米屋の場
大川端の場

役名――伊藤勘十郎。米屋佐次兵衛。同娘、お君。下女、お竹。同手代、喜助。同、權七。赤手拭の長五郎。源兵衛堀の源兵衛。由兵衛女房、小梅。丁稚、長吉。梅の由兵衛。

造り物、二重舞臺、見附け赤壁、納戸口。上の方、折廻し障子屋體。橋かゝり丸格子。いつもの所に門口。すべて藏前米屋の體にて、幕の内より二重舞臺に喜助、帳を扣へ、讀んで居る。權七、算盤を置いて居る。平舞臺に長五郎、在所角力、武骨な前髪にて、俵を差上げ、力持ちして居る。在郷唄にて幕明く。
喜助　八百七拾目。
權七　八百七拾目。
喜助　貳百三拾目。
權七　オット貳百三拾目。
長五　コリヤコリヤドツコイ。
ト 俵を差上げ、高く投出す。
ヨイヤサア。
ト 相撲に勝つた見得をする。
喜助　これは情ない。長五郎さんの力持ちで、大事の帳合をあへられた。
權七　なんぼ稽古をしても、雷電や小野川のやうには、生

れ變つてもなられまい。
兩人　ハヽヽヽ。
　ト笑ふ、長五郎これを聞いて
長五　マア〳〵、權七、喜助、そりや何を云ふのぢや。おれが好んで角力取りにならうと思つて居るこの長五郎、名乘りはのべ紙と名づけてある。この春の相撲から、番附へ入れてもらうて、土俵へ上がつて見せる。それで凝つて稽古して居るを、なんで嘲ける。
權七　イヤ、嘲りはしませぬ。所詮叶はぬ事ぢや。よしにしたらよからうと、ナア喜助。
喜助　オヽ、さうぢや。長五郎さま、お前、江戸の角力へ出ようより、ちつと遠いけれど、小豆島の關取とは、こりやよいわい。
長五　此奴が〳〵、主同然のおれを澤山さうに吐かすな。在所に居た時から、下地のあるこの長五郎、追ツつけ關取になつて見せう。喜助でも權七でも對手に嫌はぬ。一番揉んでやらう〳〵。
　ト四股を踏む。
權七　こりや面白い。米屋に奉公する者が、まんざら無手ではない。喜助、行け〳〵。
喜助　一番揉んで見ようかい。
長五　大地へ埋んでやらう。用心して、サア來い。
　ト長五郎、喜助を相手に揉みあふ。權七、行司のやうになり、長五郎いろ〳〵あり、トヾ喜助、長五郎を見事に取つて投げる。權七喜助、ワッと笑ふ。長五郎、
　ムッとして
　何ぢやい〳〵。今のは怪我の張合ひ。殊におりやこの間から、ちつと色事に凝つて居る。それで。ハテ爭はれぬものぢやなア。
兩人　それがほんの負け惜しみぢや。ハヽヽヽ。
　ト大笑ひ。奧より佐次兵衛、親仁の拵らへにて出て
佐次　たんぢや。見世がザワつくが、喜助、權七、云ひつけて置いた勘定は、どうだ、よいか。
兩人　大方片付けてしまひました。
佐次　そりや早かつた。イヤ、長五郎、慥か娘のお君が、奧で尋ねて居たぞや。
長五　そりや大方。
　トこなしあつて佐次兵衛が顏を見て
　面妖な。何ぢや知らぬ。
　ト俄に色どる思ひ入れ。

喜助　コレサ、長五郎さん、角力取りこり色取りの方がよからう。
權助　それ〳〵、滅多無性にこの中から
長五　ハテ、思ひ内に在れば面䫌に現はれるぢや。
佐次　何の事ぢや。
ト唄になり、向うより勘十郎、口幕の侍ひにて、家來を連れて出て來る。跡より長吉、角前髮の丁稚にて勘十郎と連れ立つて出て
長吉　勘十郎さまには、思ひかけない所で、お目にかゝりましてござりまする。
勘十　されば〳〵。長吉、其方もこりや、淺草でも參詣したか。
長吉　イエ〳〵、下谷の方から廣德寺前の、得意場廻りでござりまする。
勘十　身共は又、觀音へ參詣の序、伯父者人へお見舞ひ申さうと。
長吉　それは、ようお出でなされてござりまする。
勘十　サア、同道せう。長吉、來やれ〳〵。
佐次　オヽ、長吉、いま戻つたか。
長吉　ハイ、勘十郎さまがお出でなされました。
佐次　何ぢや、甥の勘十郎が來たか。
長吉　左樣でござりまする。
ト此うち勘十郎、内へ入る。
佐次　ヤレ、ようこそ〳〵。サア、これへ〳〵。
長五　勘十郎さま、ようお出でなされました。
勘十　長五郎、變る事も無いか。
長五　マア〳〵あれへ。
ト勘十郎、二重舞臺へ通り、喜助、權七、茶煙草盆など持つて行く。
佐次　勘十郎はおれが甥、あの長五郎は死にやつた婆が甥、在所に居たれど去年から、此方の內へ來て居るも、角力取りになりたい望み。いま世話するも婆が遺言。どうぞ關取に。
長五　イヤモ、伯父樣のきついお世話になりました。勘十郎さま、よろしうお禮を。
勘十　ハテ、繫がる緣なれば、たとへ何になつても、隨分出精が肝要ぢや。
佐次　おれが商業の米屋、その內に長吉といふ丁稚、長五郎といふ角力取り。曲輪日記の淨瑠璃のやうなとつ替ハヽヽヽ。

権七　ほんに長吉、得意衆の米はどうだ。
長吉　みな跡から云うてやらうと。
長五　長吉、わがみを、お君さんが尋ねて居たぞや。
長吉　なにサ、そりやお前の事であらう。
長五　へ、、、、。少し焼餅ぢやな。
ト嬲るこなし。
佐次　時に勘十郎、何と思うてわせられたぞ。
勘十　今日は観音へ参詣、次手ながら伯父者人。
ト懐中より紙包みの金を出し
金子百両、これを先日急入用あつて借用申しましたなれども、今日御返辨申し上げまする。お受取り下さりませう。
佐次　ハテ、伯父甥の中に義理固い。さうで無くても大事ないのに。
勘十　イヤ〳〵、また御無心申し上げまする儀もござりまする。先づお受取り下さりませう。
佐次　そんなら慥かに受取りました。この帳簞笥の抽斗へ入れて置きませう。
ト右の金を帳簞笥の抽斗へ入れ、錠を卸す。長吉、長五郎、これを見て居る。勘十郎、こなしあつて

勘十　百両の金、御返辨申した上は、拙者は最早お暇。
佐次　それはあまり早々。せめて奥へござつて酒一つ。
喜権　左様なら奥へ、勘十郎さま。
勘十　然らば……如何やうとも。サア、長五郎も
皆々　サア、お出でなされませう。
ト唄になり、勘十郎、佐次兵衛案内にて、皆々奥へ入る。下女おたけ出る。
たけ　長吉さん〳〵。
ト呼びながら出で、あたりを見て
面妖な。慥かに今聲がしたが、どこに行かしやんしたか知らぬ。
トそこらを尋ねる。奥にて又
きみ　おたけ〳〵。
ト云ひながらお君出で
爰に居やるかいなう。一遍尋ねて居るわいなう。
たけ　お君さん、何の御用でござりまする。
きみ　お竹、昨夜頼んだ物を、渡してたもつたかいの。
たけ　サア、長五郎さまに渡しましたが、肝心の長吉どのには、昨夜から間が悪うて、まだ渡しませぬ。今朝から得意廻りで留守でござりますで、いま聲が致しましたか

ら、渡さうと思うて、それで尋ねて居まするわいなア。
きみ　エヽ、つんと、長五郎どのは大事ない。早う長吉に
渡してたもいなう。
たけ　アイ〳〵、合點でござります。そんなら奥で、間を
見合せて渡しませうわいなア。
ト云ひ〳〵奥へ。お君、こなしあつて
きみ　どうぞわしが思ふ通りに、南無淺草の觀音樣。
トこなしあつて拜む。此うち始終合ひ方。奥より長五
郎出て來て
長五　お君さん。
ト恥かしきこなし。
きみ　エヽ。
ト愕り。
長五郎さん。
長五　アイ。
きみ　ようお出でたなア。
トこなしある。
長五　お出でたが、どうぢやえ。
きみ　長五郎さん、昨夜、たけに渡した物が屆いたかえ。
長五　そりや長たらしいあの文かえ。

ト懷より出しかけて見せる。
きみ　オヽ、恥かし。
長五　なんの恥かしい事がある。
きみ　それでもお前、あんな文讀んでくれたかいなア。
ト長五郎、無筆のこなし。
長五　讀まいでか。おりや在所に居る折、寺へ五年行つた
ものぢや。
きみ　サア、讀んでおくれたら、エヽ、誰れにも云うてお
くれなえ。
長五　誰れに云ふもので。
きみ　そんなら彼の通りぢやぞえ。
長五　マア、あの通りぢや。あの通りは彼の通りぢやが、
なんと、あの通りを口で一遍云うて聞かさんか。
きみ　エヽ、馬鹿らしい。あんな事口でどう云はれたもの
ぞいな。つんとわたしを惡がらさうと思うて。
長五　なんの、善がらさうと思うて居るものを、惡がらさ
うとして堪るものか。どうで長吉のやうには。
きみ　又そんな事を、長五郎さん。
ト奥へ指て書いて見せる。長五郎、讀めぬゆゑ、いろ
こなし。

いろぢやわいなア。

長五　ぢやわいなアで解るものかいな。

きみ　エヽ、どう讀んでぢやぞいな。

　トまた奥へ書いて

そして、斯うぢやわいナア。

長五　サア・それでも。

きみ　コレイナア。

　トまた書かうとするを

長五　エヽ、もう書くまい／＼。女子の物書き程面どいものはない。ようしやべる口持つて居て、滅多無性に書きたがる子だ程に。

きみ　それでも人が聞くわいな。

長五　聞いたら何ぢやえ。誰れぞ何の彼のと云ふか。

きみ　イヽエ。

長五　そんな愚圖／＼した筆先より、わしが筆先で、マアちよつと。

きみ　アヽ、コレイナア。

長五　得心ぢやないか。

きみ　それでもアレ、誰れやら。

　ト抱きつくを捩り放けうとする。捉へる所へ、奥より權七出る。長五郎、權七にしなだれる。

權七　コリヤ、何するのぢや。

長五　何でもするのぢや。

　ト顏を見て。

ヤア、權七か。

權七　コレ、長五郎さん、勘十郎さまが呼んでござる。サア、ござりませ。

長五　イヤ、おりや爰にお君さんと、地取りをしかけて居るが。

權七　マア、ござりませ。

　ト無理に長五郎を奥へ連れて入る。跡にこなしあつて

きみ　なんぼう此方の爲ぢやと思うても、あゝ憎らしい長五郎づらに。アヽ、どうせうぞいな。

　トぢつと下に居る。これより好みの合ひ方になり、奥より長吉、芝居の番附を見い／＼出て來る。お君、長吉を見て

ヤア、長吉か。

　ト執りつくを振り切り

長吉　ハイ、お君さま。

　ト構はず矢張り番附を見て居る。

きみ　そりや何ぢやえ。
長吉　奥の硯箱にござりましたゆゑ　見で居ましたわいなア。
きみ　わたしにも見せや。
ト引ッ奪たくり見て
きみ　こりや桐座の番附「源平柱暦」去年の顔見世の番附ぢや。
長吉　ハイ、左様かと存じます。
きみ　ほんにこの狂言を、父さんやわがみと一緒に、桟敷で見に行たなう。
長吉　ハイ、見に行たさうにござりまする。
きみ　ソレ、あの時訥子が濡盛。いつそ好かつたわいの。
ト長吉が顔を見ても相手にならず、ツンとして居るゆゑ、お君、思ひ入れあつて
きみ　長吉、アノ濱村屋の常磐も好かつたの。
長吉　イヤ、わたしや濱村屋は嫌ひでござります。
きみ　そんなら、わがみは誰れが心意氣ぢや。
長吉　女形なら中山富三郎がようござりまする。
きみ　アノぐにやをかいなう。オヽ、嫌いなう。
長吉　それでも合ひ縁奇縁とやらで、丁度お前樣が、この間から誰れやらを、附けつ廻しつなさるやうなものでござりまする。
みき　そりや、皆アノ
ト云ひ負れるこなしあつて
コレ、この狂言の濱村屋が二役、訥子が女房お菊、常磐御前になつて濡盛との濡れ事、あれが面白かつたぢやないかいなう。
長吉　お前樣は面白うござりませうが、私しは氣が揉めてござりまする。
きみ　サア、其方の氣の揉める事ゆゑに。
長吉　お君さん、お前をお頼み申しました事、覺えてござりますか。
きみ　そりや一昨日の事であらう。
長吉　サア、それぢやに依つて、わたしはナ。
ト此うち奥よりお竹出て來て、思ひ入れあつて
たけ　オヽ、嬉しい。長吉どの爰にかや。お君さまにも。
きみ　好い所へお竹。昨夜頼んだ文は、どうぢや〳〵。
たけ　矢ッ張り爰に。
ト懐より出す。お君それを取つて
きみ　コレ、長吉。どうも口ではよう云はれぬ。この文を

とつくりと見てたも。

ト抛り出す。長吉、取上げ

長吉　そんなら、この文を。

きみ　お竹、おぢや。

ト　お竹を連れ、奥へ走り入る。長吉、こなしあつて。

長吉　口で云はぬこの文。長さま參る君より。

ト封を切つて

「今更文とは御覽の程も耻かしながら、不束な我が身事を、これまで兎や角御申し候へども、人目の關に隔てられ、わざと御返事いたし申さず候ふ、殊に長吉と譯あるやうに御申しなされ候へども、戀に上下の隔無いとは申せども、長吉は奉公人の事なり、私しさら〳〵左樣の事には御座無く候ふ、必らず〳〵長吉事を、御しんにおかけ下されまじく候ふ、この上はそもじ樣と二世も三世も變らぬ女夫と存じ候へば、そもじ樣にもお心の程は變らせ無きやうに頼み上げまゐらせ、又々首尾見合せ御目もじの上、ちと〳〵御頼み申し上げ致し度き事御座候へば、逢ひたいに候ふ、めでたくかしく、長五郎さま參る君より。」

ト讀むうち、いろ〳〵こなしあつて又繰返し

殊に長吉と譯あるやうに御申しなされ候へども、戀に上下の隔無いとは申せども、長吉は奉公人の事、私しさらさら左樣の事御座無く候ふ、長五郎さま參る君より。長五郎々々々。

トよろしく思ひ入れあつて

ムウ、そんなら上書の長さまは、長五郎の長の字。ア、、さてはお竹が粗相で、長五郎へやる文を間違へて。大方わしへのは切れ文でがなあらう、さうとは知らず、これまで互ひに云ひ交し、深切らしい事も皆空言か。わしを騙して殊に又、姉者人の拠ろない無心。その事を頼んで置くに、長五郎へ其やうに。エ、、腹が立つ〳〵。思ひ替へられたより、姉者人の頼み、百兩の金が今宵中に……こりやマア、どうせう知らぬ。

ト右の文を喰ひ裂き、いろ〳〵思ひ入れあつて

さうぢや。所詮金が出來ねば、姉者人へ云ひ譯無く、云ひ交したお君さまを、人の花に眺めさせうより、いつそ。

ト出刃庖丁を取つて來て手拭に卷き、こなしあつて行かうとする所へ、勘十郎ズッと出て

勘十　長吉、どうだ。

長吉　エ、、勘十郎さま。

勘十　伯父者人のひら強ひに、合ひ頼まうと思うたに、長

吉、どうじや。ム、ハ、、、、、。イヤモウ、甚だ酩酊。

長吉　私しは奥にちよつと用事が。

ト行かうとするを、醉うた體にて引留める。

勘十　ハテ、苦しうない。矢張りこれにて。

長吉　でも。

勘十　マア、下に居やれサ。

ト無理に下に置く。長吉、ウロ〳〵こなしある。

ア、、それに在るは何ぢや。

ト番附を取上げ

芝居の番附、しかも葺屋町。この顔見世は、よく流行つたの。長吉、コレサ長吉。

長吉　ハイ。

勘十　座元は桐座、桐長桐、桐座といへども、そりや無分別であらう。

長吉　エ、。

勘十　イヤサ、この芝居といふものは、すべて世間の流行り事を取組んで狂言にする。またお染久松、八百屋お七、古手屋の八郎兵衞とやら。殊に去年の春の五人斬り、皆根が色事より、その身を果し耻を晒し、親兄弟に難儀をかける。如何に若いとて、芝居をツイ慰み、只狂言とばかり見るは、無心無駄といふもの。勸善懲惡それ〳〵に、サ、すればこそ萬代不易、太平の道具、四書五經より合點の行く近道の學問。その身に引比べて、兎角愼むが肝要。それをウカ〳〵と跡先の辨まへも無く、腹立ち紛れに騙された鬱憤に切る。サア、長桐の狂言も、約まる所は惡人亡びて善人世に出づる、切り幕の思案が大事であらうがな。

長吉　ほんに思へば、はし折かゝみの同胞、たつた一人の姉小梅さま。

勘十　梅若を尋ねて班女が物狂ひ、哀れな面白い淨瑠璃でないか。

ト長吉、合點のいたこなしあつて

長吉　勘十郎さま、有り難うござりまする。今の芝居のお話しにて、長吉め、よう合點が參りました。

勘十　合點がいたか。それは重疊。何を云ふにも醉ひ紛れ、必ず氣にさやるな。

長吉　御勿體ないあなたのお志し。

勘十　これも外ならぬ伯父の家、その奉公人の長吉、奉公大事に辛抱すれば、育ちといひ人柄といひ、好き合うた仲なら、また末ではお君が聟。獅子には矢も立たず、逢

うて語らば心も解けん。たゞ戀はわびしきにあり……又
これからとつくりと俳諧の話し。神祇釋教戀の句の、點
のきいたを語らう。長吉、奧へ來やれ。

長吉　ハイ。

ト唄になり、長吉を連れて奧へ入る。また奧より權七、
喜助、長五郎を伴て〳〵出で來り

權七　長五郎さん、なんぼお前が味噌を上げても、あの娘
御が得心して堪るものか。

喜助　まだ丁稚の長吉なら、常の鹽梅、氣があらうか知ら
ぬ。それにお前とは合點がゆかぬ。

長五　合點がゆかぬか。コリヤ、昨夜、斯ういふ物を持た
せて寄越した。

ト懷より文を出して

必らず誰れにも云うてくれなと云ひくさる。

喜助　ヤア、こりや文ぢや〳〵。

權七　ドレ、見せさんせ。

長五　何を盲目の垣覗き、わいらが見たとて胡椒丸吞み、
よう讀みやせまいがな。

喜助　侮つた事を云うてぢや。米屋の手代が女子の文位讀
まいでかいの。

長五　ほんまによう讀むか。あのお娘に大抵の者ぢや無い。
間に唐文字がチラ〳〵混ぜてある。所々に笠の無い虛無
僧のやうな事や、いつちの終ひに釣針の樣な字が書いて
ある。それでも見事讀むか。

權七　ハテ、讀まいで。二人して讀んでやるわい。

長五　口の內で、ポチヤ〳〵讀む事は叶はぬぞ。よう聞え
るやうに讀んで聞かせ。イヤ、讀んで見い。

喜助　ドレ〳〵。

ト取上げる。

長五　待て。澤山さうに、罰が當るわい。二人ともにあや
かるやうに拜ませてやらう。

ト二人に戴かせ

エヽ、戴いたな。ソレ、讀んで見い。

ト廣げて見せる。

兩人　エヽ、そりや逆樣ぢやわいの。

長五　ナニ、逆樣合點ぢや。逆樣に讀む位でなけりや、讀
む中ではない。

ト權七、文を取つて

權七　何ぢや。きつい濡れた文ぢや。

喜助　それで濡れ文といふのであらう。

長五　その筈ぢや。昨夜から肌身離さず、臍の上にヒッタリ。
權七　道理で味な臭氣がする。
喜助　なんぢや、一筆しめし
長五　そりや笠の無い虛無僧だ。
權七　エヽ、こゝやまゐらせ候ぢや。
長五　オヽさうぢや、まゐらせ候、なか〳〵よう讀むわいの。
權七　誠に昨日は氣の毒な事を聞きまして癪が發つて案じまゐらせ候。
喜助　長五郎さん、案じて癪が發つたといの。
長五　ハヽア、何の事ぢや……エヽ、おれが力持ちの石で、ちよつと摺り剝いた事を、それ程までに思つてくれるか。忝ない。
ト無性に嬉しがる。喜助、文を取つて
喜助　どうぞ〳〵お頼みの事、よろしく都合いたしたく
長五　何も頼んだ覺えは無い。
權七　マア〳〵、とつくりと聞いたがよい。
喜助　ほんにこれまで、惚れた〳〵と、アタ嫌らしいいろいろ口說き候ふを幸ひに、否ながら長五郎づら
權七　ヤア。
長五　づらぢやあるまい……さんであらうが。
喜助　でもコレ、長五郎づらめ。まだめが添へてある。
權七　ドレ〳〵、跡はおれが讀まう。否ながらも長五郎づらめに、わざと打解けたやうに見せ、右の事を拵らへたく、それで心に思はぬ嫌らしき文を遣はしまゐらせ候、必らず必らず御心惡しく思し召し下されまじく候ふ。ヤア、長五郎さん、こりや思惑が違うた文ぢやぞえ。
ト長五郎、腹立つこなし。
喜助　この狀を昨夜から、臍の上へ載せて居たとは。
權七　よう臍が宿替へせなんだの。次手に跡を讀まう。根が在所育ちの馬鹿者の長五郎なれば、口先でいろ〳〵騙し、そもじ樣のお望みを叶へたく思ひまゐらせ候。
兩人　ても酷う書き居つたワ。
長五　大方かうであらうと思つた。
ト喜助、文を取る。
喜助　何事も暫らく蟲を殺して堪忍し
ト長五郎、引ッ奪り
長五　もう跡は讀むに及ばぬ。宛名を讀め。
兩人　長吉さまへ參るお君。
長五　ヤア〳〵、そんなら矢ッ張り長吉めに。

ト撞と下に居て、キッとこなしある。

喜助　道理で最前の話し、旨過ぎると思うた。

權七　根が在所育ちの馬鹿者とは。

ト長五郎を指して

兩人　これは好い。ハヽヽヽ。

ト大笑ひにて兩人、奥へ入る。始終合ひ方、跡に長五郎殘り、いろ〳〵こなしあつて、右の文を取上げ、見ても讀めぬゆゑ引破らうとして、フッと思ひ入れあり、皺を延し、元のやうに疊み、帳箪笥をキッと見て、そろそろ行つて、最前の金を入れた抽斗の錠を煙管にてこぢ明け、金を取りて、跡へ右の文を入れ、此方へ來て

長五　勘十郎が持つて來た百兩。

ト懐へしつかと入れ

あの狀で二人の奴を。こりや好い智惠が出た。

トこの時奥より勘十郎に、佐次兵衛、お君、長吉、附いて出る。

佐次　ハテマア、もそつと緩りと。

勘十　イヤ〳〵、段々の御馳走、別して忝なう存じまする。

長五　これは勘十郎さま、お歸りなされまするか。

長吉　餘りお早々にござりまする。

勘十　イヤ、又參る。お君、隨分無事で。

きみ　もそつとお話しなされませいなア。

ト此うち佐次兵衛、帳箪笥を見て

佐次　面妖な。この箪笥の

ト抽斗を拔いて

ヤア、コりやコレ、錠をこぢ放して、中の金が無い。

皆々　ヤア、。

ト恟りする。長五郎もわざと恟りするこなしある。

勘十　こりや滅多には歸られぬわい。

ト下に居る。

佐次　イヤ、勘十郎は大事ない。こなたは主人持ちぢや。ちやつと座敷へ。

勘十　先程持參の金子紛失と承はつては、どうも聞捨てにはなりませぬ。

長五　さうでござります。錠前をこぢ放し、抽斗の金が無いとは、大それた泥坊だ。こりや皆面々吟味。マア、この抽斗を。

トつか〳〵と行き、抽斗を取つて來て裏返す。今の文落つるを取上げ

何やら書いた物が入れてある。おりや恥かしながら無筆ぢや。長吉、爰へ來て讀んで聞かせ。

長吉　そんなら、その書いた物をわしに。

長五　サア、何か譯は知らねども、詮議の種になるまいものでもない。ナア、親仁樣。

佐次　オヽ、さうぢや。長吉、ちやつと讀め〳〵。

長吉　ハイ〳〵。

ト何心なく取つて披く。

一筆しめしまゐらせ候、誠に昨日は氣の毒なる事聞きまして、積が發つて案じまゐらせ候、どうぞ〳〵御頼みの事都合いたしたく、ほんにこれまで惚れた〳〵と、アタ嫌らしく

ト讀むうちお君、悔りして、ツカ〳〵と長吉が側へ寄り

きみ　コレ〳〵、長吉、滅多にこの文、讀んでたもんな。

ト お君を長五郎引退け

長五　お君さん、お前の構ふ事ぢやない。引ツ込んでござれ。

きみ　それでもあの文

長五　ハテ。

トお君を引退け支へるうち、長吉、口の中にて文を見て

長吉　ヤア〳〵、そんならお君さま、これを。

きみ　長吉、合點がいたかや。

長吉　さうとは知らず最前

ト勘十郎を見る。勘十郎、咳拂ひする思ひ入れある。

佐次　エヽ、讀まぬは合點ゆかぬ。

ト文を引ツ奪り

何ぢや。宛名は長吉さま參る君より。

長君　ハア。

ト互ひにこなしある。

佐次　そんなら娘と長吉は。

長五　疾から乳繰つて居るその濡れ文。それがこの抽斗に入れてあるとは、泥坊の慥かな證據。不義といひ、盗人のこの二人。

ト お君、長吉兩人を引立てる。勘十郎、ツカ〳〵と長五郎を突き廻し、兩人を圍ひ

勘十　マア、長五郎。

長五　勘十郎さま、なぜ留めさつしやりまする。

勘十　この文には何と書いてある。

長五　おりや無筆ぢやさかい讀めねど、宛名は慥かに長吉

さま参る君より。それが慥かな不義盗人の

勘十　イヤ、證據にはなるまい。

長五　エ、なんと。

勘十　尤も長吉さま参る君よりと致しあれば、即ちお君より長吉へ贈つた文なれど、こりや證據にはならぬ。

長五　そりやどうしてな。

勘十　両人が誠金を盗んだに致せ、我が名の書いた文を後日の證據、これで詮議いたせと入れて置く馬鹿者があらうか。

長五　サア、それでも。

勘十　こりや泥坊は外に……みす／＼知れた古い仕組み。

長五　ムウ、そんなら又二人は不義者。その狀を

ト取りにかゝるを見事に取つて投げる。

アイタ、、、、こりや勘十郎さま、なんでおれを酷い目に。

勘十　両人が不義なら、長五郎、其方も不義者ぢや。

長五　イヤ、妙な事を勘十郎さま、お君と長吉と不義の證據はその文。それにこの長五郎を不義者とは。

勘十　證據は矢ッ張りこの狀。

ト勘十郎、狀を見せ

ほんにこれまで惚れた／＼とアタ嫌らしい口說き候ふを幸ひに、否ながら長五郎づらに……サ、なんとこの文では、長五郎、其方もこれまでお君を口說いたであらうな。

長五　イヤサそれは。

きみ　アイ、さうでござんす。これまでわたしを捉へて、いろ／＼と、それは／＼。

長五　コレ／＼、お君さん、お前は顔に似合はぬ酷い心ぢやな。

佐次　すりや、長五郎、おのれも娘を。

長五　惚れは惚れたが、大騙されに騙されたれば、矢ッ張りこの長吉めが。

ト長吉を引立てるを、勘十郎よろしく突き廻し

勘十　コリヤ、その不義を糺せば其方も同類。

長五　そんなら、これも壺を被せるか。

佐次　さうとは知らず娘が淫奔。

勘十　すべて色好き花には垣を結び、折り取る物禁制と札を建てゝも、手折るは世界の習ひ。まして主無き娘のお君。

長吉　イヤ、私しが越度。この上は如何やうとも。

きみ　コレ／＼長吉、其方に科は無い。皆わしが。

勘十　ハテ、何事も隠密に。金の行くへは追つての詮議。

佐次　成る程、おれに思案があれば、長吉は表の二階へ、娘は奥の間。

兩人　ハア。

ト兩人ともにこなしあり、長五郎もこなしあつて

長五　ヤア、これで二人は引分けたが、二階住ひの丁稚め、又お君さんの所へ忍んで行くまいものでもない。張り番はこの長五郎。

佐次　イヤ、おのれも不義者、憎い奴なれど何にも云はぬ。死んだ婆が頼みゆゑ

勘十　この家の内を放し飼ひ。

長五　おれをば鳥のやうに。イヤ、角力取りぢや。こいつは好い。

勘十　最早暮合ひ。拙者も暫らく。

佐次　二人が納まりを、どうぞ勘十郎。

長五　思へば。

ト長吉へかゝるを、勘十郎、引廻してポンと留める。長五郎、反り返るを、皆々こなし。勘十郎、思ひ入れあつて

勘十　實に戀は曲者ぢやなア。

ト唄になり、長吉、お君が手を取り、佐次兵衛諸とも皆々心意氣あつて奥へ入る。暮れ六ツ鐘の鳴る。ト奥より權七喜助、行燈を燈し出て、長五郎を見て

權七　ヤア、長五郎さんが轉けて居る。

喜助　ほんに。長五郎さん〳〵。

ト兩人、呼び生ける。長五郎、心付き

長五　うぬ、勘十郎め。

ト二人を見て

喜助か、權七か。

喜助　コレ、勘十郎は今奥へ。

權七　樣子は聞いた長五郎さま、お前は益體ぢやぞえ。

長五　二人が手前も面目ない。これからは破れかぶれぢや。お君を引ツ擔げ、この家を走らにやならぬ。それについて二人を頼む。マア、宿の工面。三味線堀のお熊婆アといふ所へ、喜助、コリヤ。

ト喜助と囁く。

喜助　ムウ、すりや婆アが所へ。

長五　合點か。コリヤ、權七にも。

トまた權七に囁く。

兩人　ハテ、そんなら奥の

長五　二人ともにおれが幕の内。

兩人　首尾好くゆけば

長五　金をばズッシリ。

兩人　そりや旨い。

長五　コリヤ……シイ。

ト長五郎こなしある。これにて道具ぶん廻す。

造り物、平舞臺、見計らひ板塀、二階の體。前側殘らず障子箝め、米屋の表の模樣。塀側に番小屋あり、琴唄にて道具とまる。

ト向うより小梅、小提灯を提げ、お竹を連れ立出で

小梅　お竹さんとやら、お前のいかいお世話でござりまするなア。

たけ　何のいなア。朋輩の事、殊に長吉どのにはちつと樣子あつて、アレ、あの二階に。折角逢ひにござんした姉樣、内から連れて行くと目に立つゆゑ、爰へ連れて廻りました。わしがさう云ふ程に、長吉どのに爰で逢はしやんせ。

小梅　アイ〳〵、忝なうござんす。是非今宵弟に、逢はねばならぬ大事の用。もう日は暮れて來る、内に居ても心ならず、それでこちの人に隱れて、そつと淺次郎に。

たけ　淺次郎とはえ。

小梅　長吉が事でござんす。内では淺次郎といひました。この家へ參つて名が變りました。

たけ　矢ツ張り長吉どのゝ事ぢやの。

小梅　さうでござんすわいなア。

たけ　ドレ、わしや切り戸から廻つて、長吉どのにお前の見えた樣子を知らせませう。ちつとの間、待つて居やしやんせ。

小梅　よろしうお頼み申しまする。

ト合ひ方になり、お竹、切り戸の内へ、小梅こなしあつて

朋輩のよしみとて、今の女中さん、どうぞ早う弟に。

ト切り戸より喜助出る。小梅、ちやつと提灯を袖にて隱し、番屋の蔭に忍ぶ。

喜助　長五郎どのゝ使ひ、三味線堀のお熊婆アが所へ。さうぢや。

ト向うへ走り入る。二階の障子を、ソロ〳〵開き、長吉顏を出し

長吉　姉じや人〳〵、小梅さま。

ト下を見下ろし尋ねる。吹替への小梅、番屋の蔭より出で

小梅 弟淺次郎か。爰に居るわいの。

ト見物へ後向きにて二階を見上げる。

長吉 コレ、お前の見えたのは、金の事かえ。

小梅 サア、一昨日文で詳しく頼んで寄越した通り。

長吉 今宵中にいるとある百兩の金。コレ〳〵、氣遣ひない、金は出來ました。

小梅 ヤア。

長吉 これまで顏は知らねども、由兵衞どのや、お前の命づくとあるゆゑ、やう〳〵百兩の金を拵らへたが、まだわたしが方へ受取らぬ。コレ、必らず案じる事はない。たとへ夜が更けても、受取り次第、わたしが持つて行くわいな。

小梅 エヽ忝ない。

ト吹替への小梅拜む、長吉、こなしあつて

長吉 勿體ない、コレ姉者人。エヽ、何を云ふも二階と下。お前の顏をちよつと。

ト小梅、提灯にて顏を見せる。始終後向きなり。長吉、思ひ入れあつて

金は追ッつけ持つて行く程に、人目に立つては惡い。お前は早う。

小梅 そんなら待つて居るぞえ。

長吉 ハテ、後までには、きつと持つて行きませうわいな。

ト障子をピッシヤリと閉す。向うより喜助戻つて來る。切り戸より權七出る。吹替への小梅、ちよつと隱れる。

權七 どうぢや喜助。小宿はよいか。

喜助 その事について長五郎どのに。權七、われも來い。

ト連れ立ち、切り戸へ入る。小梅、正面へ出る。

小梅 ア、嬉しや。同胞は持つべきものと、何やらの淨瑠璃にある通り、弟が其やうに云うてたもつたので、胸が開けて癪が下がつた。ちやつとこの樣子を由兵衞どのに。イヤ〳〵、物堅いこちの人、奉公して居る弟に無心云うたと云うては、また日頃の氣象。イヤ〳〵、こりや矢張り默つて渡しませう。ぢやというて今時分は、氣を揉んで居やしやんせう。さうぢや。

ト二足三足行つて思ひ入れあつて立ちどまり、空を眺めて

もう何時ぢやいなア。

ト唄になり、こなしあつて向うへ走り入る。ト合ひ方

になり、道具廻る。

内の體にて、上の方、高二階にて、二間の間、二重舞臺座敷の體。縁先に手水鉢あり、下座敷の方、隣の二階座敷の内にて

仕出　サア〳〵、今夜は廿三夜待ぢや。約束の淨瑠璃、「ひらがな盛衰記」がよからう。

同　それ〳〵、無間の鐘の段を太夫さん。

大勢　サア〳〵、所望ぢや〳〵。

トこれより淨瑠璃。

〽跡見送りて梅ヶ枝は、暫し涙に暮れけるが、必らず氣遣ひなさるゝな、エヽ、わしが心當のあると云うたは皆嘘、お前の命が助けたいばかりぢやわいなア。

ト此うち早替りにて長吉、二階より降りて來て

長吉　今姉さんに逢うて、氣遣ひさつしやるな、金は出來る程に、後に持つて行かうと云うたは、力を落さすまい爲。今のわしが身の上、どうなる事やら。お君さまの御返事も、最前の仕儀では。

〽金ならたつた三百兩。

此方はたつた百兩、由兵衛どの　姉さんの難儀。

〽可愛い男を殺すか。

こりやどうせうぞ。

〽エヽ、金が欲しいなア、〽二八十六で文付けられて、二九の十八でついその心、四五の二十なら一期に一度、わしや帶解かぬ。

エヽ、面白さうに隣には、廿三夜待の淨瑠璃。あれにつけても、この家へフト奉公に來て、お君さまと云ひ交し、末は一日なりと女夫にならうと、思ひ思はれた其お君さまを頼んで、拵らへる金の工面。出來ずは現在の姉樣……サア〳〵、こりやいから氣が急いて來たわいの。

〽アヽ、どうせうなア、最早日本國にこの梅ヶ枝が祈る、神も佛も無いかアヽ。

最前から心を留めず聞いて居た、あの淨瑠璃は無間の鐘。それゆゑ梅ヶ枝が

ト手水鉢を見て

わしは又姉さまへの孝行。一心を以て今宵の手詰め、百兩の金を。

トきつと手水鉢を見る。

〽オヽそれよ、夫ゆゑには、石となつたる女もあり、我れは賤しき流れの身なれど、一念は誰れに劣らん、巖と

なれる手水鉢、水掬び上げ口嗽ぎ、伏拜み〳〵、人に知らせじ聞かせじと、柄杓押取り、傳へ聞く無間の鐘を撞けば、有徳自在は心の儘、これより小夜の中山へ、遙かの道は隔つれど、思ひ詰めたる我が念力、この手水鉢を鐘と擬らへ。

今宵の手詰め、どうぞ百兩の金が出來ますやうに、どうぞ觀音樣大王樣。

ト柄杓取上げ、片手にて拜む。

〽石にもせよ鐘にもせよ、志す所は無間の鐘、この世は蛭に責められ、未來永々無間地獄の業を受くとも、だんない〳〵大事ない。

姉樣ゆゑにこの長吉。

ト柄杓にて手水鉢を叩く。トごんと本釣り鐘鳴る。長吉、悔りして

ヤア〳〵、今のは慥かに鐘の音。そんなら一心届いて無間の鐘は。

ト手を廣げ、空を見い〳〵よろしくあつて、此うち釣り鐘鳴る。

ハテ、不思議や、無間に擬らへ打つ度に、一二三四五を聞きしは鐘の音。

ト思ひ入れあつて

ムウ、さては無間の鐘では無うて、上野か淺草の時の鐘撞く響きを、それと思ふ迷ひに。段々夜も更け、はや今宵も五ツ。金が出來ねば姉樣夫婦、この長吉も次第に縮む命、屠所の羊、もう戌の刻。こりやマア何とせうぞいなア。

〽面色忽ち紅梅の、花も散り〳〵心も髮も逆立ち上がり、柄杓持つ手も顫はれ、既に打たんと振上ぐる、二階の障子の内よりも。

ト二階、バタ〳〵にてお君、長五郎、立廻りをしながら出て

きみ　長五郎さん、さぞ憎からうが、この金わしに。

長五　イヤ、折角盜んだこの金、つれないおのれに旨々と遣らうか。

きみ　イヤ、それでも。

長五　イヤ、ならぬ。

きみ　イヤ、下さんせ。

〽その金爰にと三百兩、ばらり〳〵と投げ出す、深山颪に山吹の、花吹き散らす。

ト兩人、金を取りあふはずみ、二階より下にばら蒔く。

長吉　ヤア／＼、こりや金、思ひけない。

〽如くにて、爰に三兩かしこに五兩、これは夢かや現かや、どなたか知らぬがこの御恩、死んでも忘れぬ／＼と、嬉しいやら怖いやら、拾ひ集むる心もそゞろ。

丁度百兩。

きみ　長吉、其方の賴みの百兩。

長吉　ヤア、お君さま。

長五　さては。

ト飛び下りかゝるを、勘十郎出て、長五郎を突き廻し

勘十　越度ある奉公人、親元へ預ける大法。

長吉　段々のお情。

勘十　所は本所梅堀。

きみ　其方のこの文。

ト投げて遣る。長吉、取上げ、長五郎「それを」とかかる。

〽包むに餘る喜び涙、喜び替りのこの金と、押戴き／＼。

長吉　おさらば。

勘十　早行け。

〽勇み勇んで。

ト三重にて長吉、向うへ走り入る。　ひやうし幕

---

早幕にて直ぐに開く。造り物、見附け　面の高塀、見越しの松、臆病口の天井に雲形の霞。これに後に月の出る仕掛け。すべて本所大川端の凄き模樣。しつぼりとした合ひ方、方々にて微かに拍子木、割り竹の音。これにて幕明く。

ト向うより由兵衛、着流し、一本差し頰被り、懷手にて、濟まぬ顏にて、そろ／＼出て花道に立ちどまり

由兵　もう大方四ツ過、五ツ前でもあらうか。この間向島で請合つた、小さんさまの身請けの、金の代りに渡した頭巾、取返す日限も、今宵の今になつて、その金が出來ぬとは、これまで立てた由兵衞が男の意氣づく、廢るはさら／＼厭はねど、小さんさまに、もしもの事があつては、大恩受けた隼人さまへ

ト思ひ入れあつて

ア、世間のよい喩は、命が無いと醫者の手を上げた病人、一貫目三貫目の人參を盛つて見る。併し、これは金さへあれば取上げる命。助かるも金、殺すも金、なぜに寶と世に稱へるぞ。

ト悄々と本舞臺へ來る。臆病口バタ／＼にて、權七、

喜助、長吉を引立て〳〵出る。由兵衛、これにてちよつと小隠れする。

権七　サア、長吉。われが持つて居る百兩の金、此方へ寄越せ。

長吉　滅相な。わしや金持つて居る覺えはないぞや。

喜助　覺えないとは野太い奴の。長五郎さまに頼まれて、われが跡を追ツ駈けて來た。百兩の金を渡せ。

ト兩方よりかゝる。

長吉　手籠めになつても滅多に渡さぬ。大事の〳〵この金。

兩人　否でもあらうとも引ツ奪る。

ト兩人して長吉を散々に打擲する。

長吉　アレエ〳〵。

ト聲を立てる。好き所にて由兵衛、兩人を見事に取つて投げ、長吉を引起す。

兩人　ヤア、うぬ、何奴ぢや。なんで邪魔ひろぐ。

由兵　おりや通りの者、通りかゝりで今の樣子。さてはうぬらは泥坊ぢやな。

兩人　泥坊とは、イヤうぬ。

ト由兵衛にかゝるを、ちよつと立廻りにて、トゞ兩人逃げて入る。

由兵　エヽ、憎い奴だ。もつと打ちのめしてやつたらよかつた。

ト立戻り、長吉を見て

コレ〳〵、見ればまだ若衆さうなが、ハテ、ひやいな所。怪我はごんせぬか。

長吉　イエ〳〵、怪我は致しませぬ。好い所へあなたがお出でなされて下さりましたゆゑ、わたしが仕合せでござりまする。

由兵　なんの禮に及ぶ事か。聞けば、金を持つて居やんすげな。遺ひは無いか。

長吉　ハイ〳〵、大事にかけて矢張り爰に。

由兵　油斷せぬやうに、しつかりと持つて居やんせ。さうして、こなさんはどこまで行くぞ。

長吉　ハイ、この先の駒留橋まで。

由兵　そりやまだ餘ツぽどある。とてもの事に、おれが送つてやらう。

長吉　イエ〳〵、それには及びませぬ。大事ござりませぬ。

由兵　ハテ、金持つて夜の道。又あのやうな奴等が居やうも知れぬ。おれもどうで歸り道。遠慮に及ばぬ。サアサア、行かんせ〳〵。

ト合ひ方になり、長吉先へ、由兵衛後より、ソロ／＼花道へ行きかける。

長吉　いかいお世話さまでござりまする。

由兵　なんの、おれも行く次手。さうしてこなさんの名は、長吉どのといひますか。

長吉　アイ、よう御存じてござりますな。

由兵　今の奴等が云ひ居つたゆゑ。

ト云ひ／＼兩人、花道へ行きかけるうち、由兵衛、フト思ひ入れあつて、後より切らうとする。長吉、ちやつとこなしあつて

長吉　モシ、この道は、細くて歩み憎うござりまするな。

由兵　イヤ、常に通りつけると、其やうにもない。

トまた柄へちやつと手をかける。ちやつと振り返り

長吉　闇なれど、星明りでようござりまするな。

由兵　サア／＼、今宵は廿三夜、もう追ッつけ月魄が出るであらう。

ト云ひ／＼こなしあつて、由兵衛、思ひ切つて長吉が懐へ手を突ッ込み

長吉　ヤア、お前もこの金を

由兵　サア、借りたい。

長吉　イヤ／＼ならぬ。

ト揉み合ひ、本舞臺へ戻つて來、長吉、無理に由兵衛を突き退け、吐息つき

滅相な。人を送つてやらうの何のと、正直さうに見せかけ、なんぼ前髪でも、無體な事をしやつたら、爲にならぬぞ。

由兵　コレ／＼、恟りは尤もぢや／＼。が、おれもまんざら邪ま非道の男ぢやないが、今宵に限つて、無ければならぬ百兩の金。出來ぬ時は命づく。思ひがけなき長吉どの、フツと出逢うた此方の幸ひ。其方の不仕合せ。どうぞその金、二三日貸して下され。此方の金が出來ましたら、きつと戻す。始めて逢うて折入つて男の頼み。

長吉　イヤ／＼なりませぬ。其方にも命づくならば、此方も命づく。なんだ馬鹿らしい。

由兵　すりや、どう云うてもその金を。

トきつとなる。長吉、思ひ入れあつて

長吉　エヽ、コレ／＼、貸すまいぢやないが、何を隱さう、この金が今宵中に無ければ、わしが大事の姉御、連合の命がない。それでやう／＼拵らへたこの金。貸したいけれど貸されぬ入譯。お前も料簡して、この金を借らずに

　下さりませ。
由兵　これ程頼むに、是非貸されぬか。
長吉　わたしも頼む。どうぞよしにして。
由兵　無躰といふて此やうな無體も無いが、これもお主の
　爲ぢや。長吉どの、コレ拜む。
長吉　イエ〳〵、わしが拜みまする。
由兵　貸して下され。
長吉　借りずに置いて下さりませ。
　ト兩人拜み合ふこなしあり、長吉よろしくこなしあつ
　て、由兵衛を騙し、逃げうとするを、引留めながら立
　廻りになつて、由兵衛ハヽ、一太刀切る。切られなが
　らしがみつき
長吉　エヽ、胴慾な、こなた殺すか。
由兵　サア、殺したうはなけれども、據ろなくお主の爲、
　知らぬこなたを殺すは、小の蟲と大の蟲、見替へられぬ
　此方の手詰め。不便なれどもその金が欲しさ。
長吉　エヽ、死ともない。今夜一夜さ死ともない。コレ、
　わしが命は遣らうが、金は遣る事ならぬ。この金が無う
　ては、もしも姉さんの配偶に、凶事過ちがあつたら何と
　せう。どうぞ助けてその金を。

由兵　命を助け、金を遣る程なら、可哀さうに斯うは切ら
　ぬ。二三日のうちに戻してやらうが、その先はどこぢや。
　名は何と。
長吉　イヤ〳〵、名所を云うたとて、殺して金を取る程な
　おのれぢやもの。
　ト取り付くを又切りつける。轉けながら由兵衛が小指
　を咬み切る。
　助けて下され、死ともない〳〵。
　トのた打廻るを、由兵衛乘つかゝり、止めを刺す。此
　うち天井の霞へ月の出る仕掛けにて、月は次第に上る
　と、見付の本舞臺へ段々現はれる。由兵衛、止めを刺
　し、脇差を拭ひ、手拭包みを尋ねて取上げ、口幕の狀
　も一緒にあり、心得たといふこなしにて、死骸の顏を
　見て引起し、月魄にてとつくりと見て
由兵　女房小梅に生寫し。
　ト手を放せば死骸、バッタリと轉ける。また思ひ入れ
　ある。狀を開き、これをも月魄にうつし、口の中にて
　宛名を見、
　淺次郎どのへ、姉小梅より。
　ト死骸を抱き上げ、シャンと立ち身にて顏をキッと見

る。三重になり、向うより源兵衛出て來て、本舞臺の由兵衛を見て、手拭を頬冠りして、ツカ／＼と本舞臺へ來り、下座の方へ寄つて窺うて居る。由兵衛、思ひ入れあつて、あたりの石を探りながら、取上げて、三つ四つ拾ひ、長吉の懐へ入れる。前の川を見歩く。此うち源兵衛、こなしあつて、トゞ由兵衛よろしく臆病口の深味へ行き、右の死骸を打込み、手を合せて拜んで、ツカ／＼と行かうとする。源兵衛留める。引退け行くを腰に取り付く。由兵衛振り切る。この時源兵衛、腰の胴亂を引切つて、タヂ／＼と後へ臀餅をつく。由兵衛、向うへ走り入る。

ひやうし幕

# 大詰

## 梅堀の場
## 泥仕合の場

役名——金谷金兵衛。金谷金五郎。額の小さん。米屋娘、お君。赤手拭の長五郎。醫者、久庵。額俵屋才兵衛。曾根伴五郎。家來、十平次。米屋手代、喜助。同、權七。源兵衛堀の源兵衛。下人、與太郎。由兵衛女房、小梅。梅の由兵衛。

造り物、三間の間、二重舞臺。見附け柱、押入れ納戸口。好き所に佛壇。上の方、中二階。下の方、門口、二重舞臺、本緣を敷き、炭櫃より人の出入り。すべて世話場の模様。幕の内より親方才兵衛、口幕の形にて、男二三人連れ、奥へ踏込まんとして居る。下男與太郎、馬鹿の拵らへにて、鉢巻、片肌脱ぎ、棕櫚箒を斜に構へ、これを留めて居る。

與太　イヤ／＼、滅多にやる事はならぬ。與太郎が留めた。一番待つてもらはう。

才兵　ハテ面倒な。馬鹿者に構はずと、サア、男ども。來い來い。

トばた／＼在郷唄にて幕開く。右の男とも奥へ行くを、與太郎、馬鹿な立廻りにていろ／＼留めて

與太　ヤイ親方、この與太郎が斯う留めかけては、たとへ痳病になつても滅多にやらぬぞ。

才兵　イヤ、此方の奉公人小さんが、昨夜から走つて行くへが知れぬ。かゞみ所は大方爰な内。それで家捜しする

のぢや。
與太　此奴、家搜し店搜しのと、嫌らしい奴ぢやわやい。
才兵　何でも、あの押入れが氣ぶさいな。ソリヤ、男ども。
若者　合點ぢや。
ト行かうとするを、與太郎留める。立廻りよき所へ、小梅、襷前垂れにて引分け、皆を隔てる、
小梅　これはしたり、最前から、騒々しいと思うて居たが、與太郎、こりや何事ぢや。
與太　小さんさまが此方の内に引込んであると、鼠のやうに思うて暴れ居るわい。
小梅　そんなら身請けの手附け日限りは、昨夜。それで、
才兵　イヤ、その手附けに預かつて居る頭巾は、昨夜八ツ過ぎに由兵衞どのが、金を持つて來て取替へて、手附けは濟んだれど、また後金の才覺。その前に肝心の小さんが走つたゆゑ、かゞみ所は大方爰の内。小さんを尋ねや、どちらへでもおれが物が云はれぬ。
ト小梅、こなしあつて
小梅　ムウ、何と云はしやんす、親方さん、こちの人が、昨夜手附けの金を持つて行かしやんしたかえ。
才兵　しかも夜更けて、

小梅　ハテナア。
ト思ひ入れ。
與太　アレ、まだ店搜しを吐かしをる。
才兵　でも。
小梅　待たしやんせ、親方さん。よう思うても見やしやんせ。出來憎い金を調へ、持つて行く程のこちの人、是非に小さんさまは身請けせねばならぬ仕儀。その小さんさまを、アノ此方の内に。
才兵　イヤ／＼、近年は、走らせて親方から手を廻し、日割り勘定立て金など、金の出を減らして惡せりが流行るゆゑ、
小梅　措かしやんせ。云うても梅の由兵衞、さういふ卑しい身請けはしませぬ。殊に小さんさまも、此方の内には居やしやんせぬわいなア。
才兵　そんなら由兵衞どのは、留守でござりますかえ。
小梅　留守でござんす。追ッつけ主が歸らしやんしたら、何も彼も譯が知れませう。それまではお前も
才兵　成る程、どうで由兵衞どのに逢はねばならぬ後金のせいらく。その間に行くへの知れぬ小さん、脇を尋ねて見ようか。

小梅　それがようござんす。何事もマア後に。
才兵　そんならお内儀。
小梅　親方さん。
才兵　必らず後に。マア　男ども。
小梅　ようござんした。
　ト唄になり、才兵衛、男どもを連れ、向うへ入る。小梅、こなしあり
與太　天晴れ通り者のおかみ様小梅さん、おれが最前からいろ〳〵に力んで威しても歸らぬ親方、それをお前が出て、その一言で歸るとは、雀の千聲より鶴の一聲ぢやなア。
小梅　コレ、そんな事を云はずと、ちやつと奥へ行て、茶を焚きつけて置きや。追ツつけこちの人が戻らしやんすであろ。
與太　由兵衛さまも、おれが腹も北山櫻。さらば。
　ト合ひ方になり、與太郎、奥へ入る。小梅あたりを見廻し、押入れを明ける。内より小さん出て
小三　小梅さん、大事ないかえ。
小梅　氣遣ひさしやんすな。いま親方は歸したが、合點のゆかぬこちの人。昨夜逢う手附けの金を持つて行かしやんしたといなア。
小三　サア、さういふ事とは知らず、手附けの日限りは切れるし、伴五郎方へ身請けされては、生きては居ぬ覺悟。それで廓を駈落ちして、金五郎さまに逢はうと、來る道でお前に逢うて
小梅　無理に連れて戻つて、あの押入れの内に忍ばせて置きましたが、もうこの上は隠れる事はござんすまい。
小三　でも親方が、後に來るといふ事は、後金の催促。
小梅　手附けは濟んで、一つ叶へば又一つ。これにつけても弟は今に……三つ四つ五つ。アヽ、むづかしい浮世ぢやなア。
　ト此うち始終合ひ方にて、金五郎、向うより頬冠りにて、ツカ〳〵と出て、ズッと内に入り、門の戸ピッシヤリ締める。
小三　ヤア、金五郎さま。
金五　小さん、小梅どの。
　ト頬冠りを取る。
小梅　思ひがけなき金五郎さま。
小三　わたしや昨夜から、お前に逢ひたかつたわいなア。
　ト、取りつく。金五郎、こなしあつて

金五　サア、心にかけて居る身請けの日限り。由兵衛どのに様子を聞かうと思ふうち、勘十郎さまの御内意に、この金五郎を國元より、召捕りの役人、この江戸へ。

小三　エヽ。そりやどういふ仔細で。

金五　ハテ、其方と云ひ交し、國を立退いたその跡にて、彼の色紙の紛失。これ金五郎が仕業、盗賊とやらに評議極まつたとも、また詮議の日延べが切れたとやら、譯は知らねど國元より、なんでも召捕りの役人が來て居るとの事。

小三　さういふ事なれば、わたしが身の上も、かねて互ひに云ひ合せた通り

金五　死ぬが高。小三、おぢや。

ト手を取つて行かうとする。小梅、向うへ立廻り

小梅　待たしやんせ、お二人さん。

兩人　ヤア。

小梅　そりやマア、何の事でござりまするぞいなア。たとへ身請けが埒明くまいが、お國元から召捕りに來ようが、こちの人に様子も云はず、云ひ合せたの死ぬるが高のと、二人連れにて　こりやどこへござんすのぢやえ。

兩人　サアそれは。

小梅　お二人ゆゑ様々と、心を盡して居やしやんすこちの人。ちつとマア、思ひやつても御覽じませ。

金五　サア、小さんが縁に連れて、由兵衛どのゝこれまでの志し、どうも氣の毒で。

小梅　ハテ、そこがお主なり家來なり、連れそふわたし、何にも氣遣ひに及びませぬ。何に依らず、こちの人が引受けて居やしやんすれば、小さんさまも其やうに、一言目には覺悟を極めたと云はずとも。

小三　それでも今また金五郎さまの身の上。

金五　國元の鬱さ、捕り手の役人。

小梅　そりや又こちの人が

ト　こなしあつて

さういふ事なら、斯う云ふ間もし又

ト　思ひ入れあつて、

幸ひ小さんさまと引分け置いて、人目に立たぬやう、暫しのうち、この疊の下に、マア〳〵。

ト　疊を上げる。兩人ともに手傳ひ、小梅、炭櫃の蓋を取り、下より着物を出し

面妖な。炭櫃の穴にこの着物。

ト　廣げて見せる。兩人見て、

小三　しかも男の着物。
金五　それ〳〵、血だらけになりあるは。
小梅　こりや慥かに、こちの人の昨日から着て居やしやんした。
ト思ひ入れある。此うち向うより久庵、ツカ〳〵と、出て、スツと内へ入る。
久庵　小さん、爰に居るか。サア來い。
ト小さんを引立てるを、金五郎、立廻りにて引廻し
金五　ヤア、わりや醫者の久庵。
小三　ほんに其方は。
久庵　おりや伴五郎に頼まれ、嗅出しに歩く小さんが身の上。これから直ぐに。
ト小さんにかゝるを、金五郎立廻り。小さんも手傳ひ、をかしみの仕組み。此うち小梅、右の着物を矢張り炭櫃の下へ入れ、程よく久庵を右の穴へはめ、疊を敷いて、その上へシヤンと直る。
金五　これは。
小梅　邪魔な所へこの久庵、斯うして置けば極樂落し。
金五　そんなら、この金五郎や
小三　わたしが身の上。

小梅　奥でとつくり相談いたしませう。お二人とも、サア、お出でなさんせいなア。
ト唄になり、小梅、こなしあつて金五郎と小さんを連れて奥へ入る。彈き流しの合ひ方にて、向うより由兵衛、樒の花を携へ、内へ入り、門の戸を閉し、奥を窺ひ、こなしあつて、佛檀の戸を開き、花瓶を取出し、右の樒と立替へ、懷より日暮の狀を取出し
由兵　淺次郎どのへ、姉小梅より。この狀が卽ち位牌代り。
ト狀を佛壇へ入れ、右の花瓶を直し、下に居て合掌して回向をする。此うち合ひ方、よき所にて奥より
小梅　ソレ、與太郎、必らず氣を附けてくれよ。
ト云ひ〳〵出る。由兵衛、愕りすることなし。ちやつと佛檀の戸を開き立てる。小梅もこなしあつて
オヽ、こちの人、お前、いま戻らさんしたかえ。
由兵　アイヤ、たつた今。
小梅　見れば、ついに無いお前、佛壇を明けて何さしやんすえ。
小兵　ヤア……サア、今日はちつと志しの日ぢやに依つて、それで看經を。
小梅　そんなら佛檀は掃除せずにある。

わしが掃除して御燈明をあげようわいなア。

由兵　イヤ、もうよい。看経はもう終ひぢや。さらばこれから一服のまう。小梅、莨盆たも。

小梅　アイ〳〵。

ト莨盆を持つて行く。此うち由兵衛、腰の胴亂を探し

由兵　ほんに、昨夜落して來た胴亂、あると思うて矢ッ張り腰を。ア、、惜しい事をしたわい。

小梅　この人、お前、昨夜、よう金が出來たなア。

由兵　イヤア、その金ゆゑに

ト小梅の顔を見て思ひ入れ。

イヤ、アタフタして大事の胴亂、ツイ落して來たわいなう。

小梅　わしや合點がゆかぬ。どうしてその金が

由兵　コレ、案じるより産むが易いと、思ひがけない以前の近附に逢うて、てんぽの皮と無心云うたら、ツイ百兩貸してくれた。それで小さんさまの手附けは濟んだ。これから又後金が

小梅　さうとは知らず、この間から屈托になつて、お前が呵らさんしよか知らねども、向島から直ぐに弟の淺次郎が方へ行き、是非と頼んで置いたが、堅く昨夜持つておぢやる筈。それに今に何の沙汰もないが、この人、どうしたものであらうなア。

由兵　ハテ、こなたの頼み、淺次郎、何の如才があらう。可哀さうに奉公の身の上、なんの云うてやらいでもよい事を。思へば

小梅　ニ。

由兵　イヤ、それで大方苦勞をして居るであらう。

小梅　サア、わしもさう思うて居たれど、お前の男づくなり又命づく、大事ござんせぬ。たとへ昨夜の間に合はいでも、是非今日は持つておぢやるであらう。それを又後金に。ナア申し。

由兵　サア、それは。

ト脇見して咬ひしばる思ひ入れあり、向うバタ〳〵にて、お君、走り出て表の戸を敲き

きみ　申し〳〵、ちやつと爰を明けて下さんせいなア〳〵。

小梅　これは消魂しい。誰れぢやぞいなア。

ト云ひ〳〵立つて戸を明ける。お君、内に入らうとして目を廻す。由兵衛小梅、恟りして

小梅　エ、、滅相な。人の内へ目を廻しに入つたといふやうな事があるものかいなア。

ト由兵衛、立寄り

由兵　コレ／＼

ト顔を見て

小梅、この顔を見知つて居るか。

小梅　イエ／＼、近附きではござんせぬ。

由兵　マア／＼、水々。

小梅　アイ／＼。

ト茶碗に汲んで来る。両人いろ／＼介抱して

名を知らねば、何と云うて呼び生けうぞいなア。

由兵　ハテマア、コレ、餘所の娘御イなう。

小梅　知らぬお娘御様イなう。

ト両人よろしく、お君、心附き

きみ　アイ／＼、氣が附きましたわいな。

トお君、立ちあがる。

小梅　マア／＼、嬉しや、吻りしたわいな。

きみ　段々お前様方のお世話、忝ならござんす。爰へ来る道でやつと。

小梅　さうしてお前は、どこのお娘御様で、どこへ行かしやんすのぢやえ。

きみ　アイ、この梅堀の由兵衛さんのおかみさんに逢ひに。

小梅　エヽ。

トこなしあつて

きみ　サア、そこにこちの長吉が、行て居やるに依つてナ。

小梅　ヤア、そんならお前はお藏前の、米屋のお娘御さんでござんすかえ。

きみ　思ひがけない。これはしたり。

由兵　女房ども／＼。そりや其方の弟が奉公して居る所のお娘御か。

小梅　アイ／＼。さうでござんすといなア。

きみ　さうして長吉はどこに居やるえ。奥にか、但し、あの二階に居やるかいなア。

小梅　コレ、申し／＼、わたしも待つて居りやするが、長吉はまだ此方の内へは来ませぬわいなア。

きみ　なんの／＼、昨夜四ツ過ぎに内を出やつた長吉、確かに爰へ来て居やるに違ひはない。隠さずと、どうぞ逢はして下さんせいなア。

トいろ／＼頼む。始終由兵衛思ひ入れ。小梅、こなし。

小梅　現在同胞の事、何の隠しませうぞ。眞實今におぢやらぬ。わたしもどうやら心ならず、お娘御さん、こりやマアどういふ事であらうなア。

きみ　ハテ、面妖な。昨夜中に、お前に渡さねばならぬ金と、わたしへの頼み。やう〳〵拵らへてやつたれば、喜び勇んで、その金持つて直ぐにおぢやつたが、どこへ行つて居やるぞいなア。

小梅　ムウ。そんなら百兩の金、お前が。

きみ　サア、互ひに云ひ交した仲、末は女夫ぢやもの。

小梅　アノ、弟とお前は。

きみ　オヽ、恥かしい。

　ト袖にて顔を隠す。

由兵　アヽ、南無阿彌陀佛。

小梅　オヽ、この人、思ひがけない念佛を。

由兵　イヤ、こりや看經の剰りぢや。

　ト思ひ入れあつて

ハヽヽ。まだ近附きにならぬ女房の弟と、懇ろしてござる親方のお娘御、好い頃合の色事で、思はず知らず……殊に金拵らへての貢、女房が案じ。イヤ、氣遣ひはない。昨夜から出た長吉、どこへ行くものぞ、此方の内へ來にやならぬ。來たら幸ひお娘御と一緒に馳走。早くおれも近附きになつて、共々に取持ちせにやなるまい。

小梅　ほんに、自慢ぢやないが、生れ付いて正直な弟。滅多に外へ行きませぬ。それに此やうな隙のいる事は。

きみ　長吉に片時も離れて居ともないゆゑ、わざ〳〵爰へ尋ねて來ましたわいなア。

小梅　それなれば猶の事。

きみ　是非長吉に。

由兵　サ、來ると云うても、この七月の盂蘭盆に。

兩人　エヽ。

由兵　イヤ、裏の離れ座敷を掃除させう。そこで待つてごんせ。

きみ　アイ〳〵。

由兵　おれが案内。サア、此方へ。

　ト唄になり、由兵衞こなしあつて、お君を連れて奥へ入る。跡に小梅殘り

小梅　どうも合點のゆかぬ弟の身の上。金を持つて出やつたのに今に見えず、それに不思議な疊の下の、こちの人の着る物。

　トこなしあり

こりや怪しからぬ、胸騒ぎがして來たわいな。

　ト思ひ入れある所へ、向うより長五郎、權七、喜助を連れて出て來り、内へ入り

長五　コレ、爰が梅の由兵衞が内で、こなんが内儀の小梅どのか。
小梅　小梅でござんすが、ツイに見た事もないお前方は。
權喜　おいらは藏前の米屋の者ぢや。
小梅　エ、。
長五　急にこなんに見せにやならぬ物がある。連れ立つてちやつと。
兩人　見せたら膽を潰さう。サア、ごんせ。
ト兩人して小梅を引立てるを
小梅　何ぢや知らねど、マア様子を。
長五　見たら様子が知れる。遲うなつては檢使がやかましい。ソレ、早う。
兩人　合點ぢや。
ト引立てる。
サア、コレ、ごんせ〳〵。
ト兩人して無理に小梅を引立て、向うへ連れて入る。長五郎、後に殘り
長五　これから爰な内、合點のゆかぬ由兵衞め。
ト奥へ行かうとして、ちやつと思ひ入れあつて、臆病口の方へ、ソロ〳〵と忍び込む。向うより金谷金兵衞、羽織袴、お國侍ひの拵らへにて、家來一人連れて出て來て
金兵　慥かにこの家とある。ソレ、案内いたせ。
家來　ハツ。
ト門口へ來て
頼みませう〳〵。この家は梅の由兵衞お宅かな。
ト與太郎、出て
與太　オイ〳〵、梅の由兵衞宅ぢやがな。コレ、内ぢやわいの。
金兵　然らば由兵衞どのは御在宿かな。
與太　御在宿とは何の事ぢやの。コレ〳〵、旦那さん〳〵、どこからやら侍ひが來たぞえ。
ト奥より由兵衞出て
由兵　ヤイ〳〵、何を吐かすのぢや。おのれはちやつと奥へうせう。
與太　オツトシヨ。
ト奥へ入る。
金兵　御免下されい。
ト内へ入る。由兵衞、思ひ入れあつて
由兵　ヤア、あなたは慥かに。

金兵　下總國千葉の家中、金谷金兵衛。
由兵　そりや金五郎さまの御舍兄様。
金兵　いかにも某、弟金五郎めが儀につき、由兵衛、ちつとおてまへに談じたき事あつて、わざ〳〵參つた。
　ト下に居る。由兵衛、莨盆を持つて出て
由兵　それは〳〵、見苦しい所へ思ひがけないお入り。憚りながら、私しに談じたき儀とはな。
金兵　出してくりやれ。
由兵　エヽ、出してとは。
金兵　イヤサ、金五郎を。
由兵　何と仰せられまする。
金兵　以前は同家中、三島隼人どのゝ家來、今は町人の梅の由兵衛、天晴れの心底、誠に男一匹には引替へ、人非人の弟金五郎め。イヤサ、武士の身にあるまじき、隼人どのゝ息女と不義密通、剩さへお國を出奔。今この江戸にさまよひ居て、略樣子を聞けば、由兵衛、おてまへの淺からぬ世話。身共が爲には現在の弟、忝ないと一禮を云ふに云はれぬ彼奴が不屆き。國を立退く砌り、三島家に預かりのお家の重寶、菅家手向山の色紙紛失の、詮議の日延べもはや今明中に迫り、もしも色紙出でずば、隼人どのには御切腹と、かねて覺悟を見るに忍びず、殊に立退きし小さん金五郎に疑ひかゝり、捕り手の役人を差越すべき相談區々。彼れと云ひこれと云ひ、聞捨てられぬこの金兵衛が、密かに當國へ立越えしは、人手に掛けようより、金五郎に繩ぶつて、不義の越度の云ひ譯に縛り首。さすれば隼人どのゝ明りも立ち、又も色紙の詮議日延の願ひ。この金兵衛が弟ゆゑ、三島の家を滅亡させては、朋友の義理といひ、武士は立たぬ。それゆゑおてまへに。
由兵　イヤ〳〵、申し、金兵衛さま、それではどうやら片手打ち。金五郎さまに不義の科あれば、即ち小さんさまにも隼人さまか。
金兵　イヤ、さうでない。すべて四海の掟、男女同日の論にあらず、女は輕く男は重し、それゆゑにこそ女童と稱へるではないか。
由兵　でも金五郎さまを私しが
金兵　匿まはぬとは、そりや一通り。右の入譯とつくりと申し聞かすに、由兵衛、おてまへに似合はぬ一言。弟に繩打つて召連れねば、隼人どのゝお身の上、打捨て置かれぬ色紙の日延べ。爰をとくと承知いたして、何分弟金

五郎を。

由兵　何ともハヤ。

ト兩手を組んで思案する。向うより源兵衞出て來り、ズツと内へ入る。

源兵　オヽ、由兵衞どの、内にか。

由兵　これは源兵衞、何と思うて。

源兵　ちつと貴樣に見せる物があつて。

由兵　おれもちつと逢ひたいと思うて居た。それは幸ひ……して又、見せる物とは。

源兵　外の物でもない。これぢや。

ト胴亂を外して見せる。

由兵　ヤア、そりやおれが胴亂。

ト惘り。

源兵　金物は鍬菊の定紋、煙管も象眼、同じく鍬菊。これ梅の由兵衞が提げ物とは、誰れ知らぬ者もないこの胴亂。

由兵　ムウ。それがどうした。

源兵　拾つた

由兵　ヤ。

源兵　しかも大川端の屋敷の前、廿三夜の月明り、バツタリ、ドンブリ……ではない、この胴亂。へヽヽヽ。さし潮に流してしまへば、人は知らぬと思へど、この源兵衞はよう知つて居るわな。ハテ、構つた所でこの胴亂、拾うたぢやないか。

由兵　すりや、胴亂を源兵衞、貴樣が。

源兵　賣らうと思うて。

由兵　なんと。

源兵　梅の由兵衞が定紋附かな……イヤサ、慥かに持ち主の知れてあるこの胴亂、外へ賣つたら、きつと大金になれど、そりや不實、源兵衞男を立てる氣象。由兵衞、貴樣に賣らうと思うて持つて來た。

由兵　そりや忝ない。昨夜吉原へ急いで行た道筋。さては大川端で落したその胴亂、惜しい事ぢやと思つて居たが、幸ひ拾ひ手は源兵衞。氣に入つた、成る程買はうが、その價は。

源兵　千兩。

由兵　ヤ。

源兵　萬兩々々萬々兩、惠美須講ではなけれども、この廿日、向島の出會は大黑屋、その時の達引に、溫なしく事を濟ました由兵衞、貴樣に返禮。

由兵　いよ〳〵その胴亂が

源兵　いかにも。
由兵　ムウ。ハテナア。
　ト思ひ入れある。
金兵　どうやら仔細ありげなその胴亂の賣買ひ。殊に鈨菊の金具、價の手番ひ、由兵衞が當惑。この場に在り合す金兵衞が、その胴亂を求めてくれうか。
由兵　イヤ／＼、あなたはお侍ひ、下作な代物。お求めは御無用。
源兵　でも、この品の價がなくば、外へ賣らうか。
由兵　イヤ、滅多に外へは賣らさぬ。
源兵　そんなら價を。
由兵　サア、それは。
金兵　この場の樣子、由兵衞が難儀推量すれば、慥かに元は。
　ト奥を見て思ひ入れ。
　これも大方弟め。
由兵　待つた金兵衞さま。すりや、あなたには。
　ト捕り繩を出し立ちあがり、奥へ行かうとするを止め
金兵　奥へ踏ん込み、金五郎に繩打ち、その元を糺せば、其方が難儀を免るゝ。
　ト行かうとするを、立廻りにて
由兵　イヤ、由兵衞め、少しも難儀は仕りませぬ。
源兵　難儀がなければ、この胴亂を。
　ト表へ行かうとする。由兵衞。
由兵　ハテ、おれが胴亂、滅多に外へは賣らせぬぞ。
源兵　そんなら價を。
金兵　ぢやに依つて弟めに。
　ト又奥へ行くを
由兵　待つた。
源兵　是非外へ。
由兵　ならぬ。
源兵　でも。
由兵　サア。
三人　サア／＼／＼。
　ト金兵衞は奥へ、源兵衞は表へ、兩方行くを由兵衞、立廻りよろしく、疊を蹴上げ、下より久庵、最前の着物を持つて出る。
源兵　ヤア、久庵。
久庵　コレ、由兵衞は長吉殺し。證據はこの着物。
金兵　誠にその通り。

ト立寄る所を由兵衛、拔討ちに一刀切る。久庵、手を負ひ轉ける。

源兵　ヤア、それは。

ト立寄るを、由兵衛、拔き身をヒラリと見せて

由兵　長吉は殺さぬ。久庵を手にかけたこの血汐。

金兵　ハヽヽ、見事。驚き入つた由兵衛が、手の內よりは心の內、身共が今の詞の端、弟ゆゑに人も殺せしと察せしゆゑ、金五郎に繩ぶつて、何も彼も彼奴を科人と思ひの外、承知いたしてコレこの如く、目前手を負はせしは、矢張り金五郎を庇ばふ心底。ハテ、賴もしい。さほどまで。

ト奥へこなしあつて

イヤ、惜しい性根を、町人と呼ばする事ぢやなア。

由兵　イヤ、行きがけの駄賃、久庵に手を負はせしこの由兵衛、胴亂の價に命の安賣り、懸賣りにせぬ源兵衛。此方の利分であらうが。

源兵　イヤ、負けてやらう。

由兵　なんと。

源兵　ソレ。

ト胴亂を投げ出す。

男の意氣地、拾ひ所といひ、外へ賣つたら大金になる品なれど、持ち主の由兵衛に戻してやるは、此方の商ひ草の種を蒔く。互ひに損得無しの元々ぢやないか。

由兵　こりや思ひの外折れ合うて出たワ。

源兵　元の鞘に拔き身を入れ

由兵　帳合濟ませい。

ト拔き身を鞘へシャンと納める。金兵衛、こなしあつて

金兵　イヤ、また身共が注文。

ト捕り繩を投げ出す。由兵衛取つて

由兵　これは。

金兵　緣のしがらみ、義理の捕り繩、由兵衛、其方が思案で染めあげる、彼の紛失の色紙さへ手に入らば、吟味は商賣柄。

由兵　梅や澁賣り、梅の由兵衛、色紙の染めあげ、荒立てられぬ手業が大分。慥かにそれと知れてはあれど搔き探し、しんし切れの底つけては詮なき事。そこを無事に底をつけずに、スッパリと明礬澁染め。

金兵　それを望みに身が誂らへ。

由兵　とくと承知でござりまする。

トこなしある。

久庵　ヤイ、由兵衛、おれを此やうに切つたな。その返報に、われをば訴人する。待つて居れ。

ト駈け出さうとする。由兵衛、上へ引廻す。金兵衛、久庵を捕へ、顔を見て

金兵　うぬはお國のお手醫者、伴五郎と馴合ひ、御家老に毒を盛り損なうたる大罪人。それゆゑわれを見付け次第、切り捨てろとの仰せ。

久庵　南無三。それでは。

ト振り切り逃げるを、ちよつと立廻り。引据ゑ、手早く繩打つ。

久庵　なんの事ぢや。由兵衛をしまひつけうと思うて、おれがしまひつけられた。木乃伊取り木乃伊になる。これがほんの、毛を吹いて。アイタヽヽ。疵が付いたぞ。

由兵　すりや、私しが科は。

金兵　切り德〱。

源兵　ハテ、よい手番ひ。由兵衛、われがみの上。

由兵　源兵衛、貴樣にも又とつくりと。

金兵　身共は旅宿へ。必らずともに、その捕り繩の

由兵　縺れを解いて見せませう。が只幾重にも

金兵　七度結びて兄となる。祿では果てぬ弟が身の上。無事に……心勞ながら、由兵衛さらば……家來、其奴を引立てい。

ト唄になり、金兵衛、思ひ入れあつて家來に久庵を引立てさせ、向うへツイと入る。後に由兵衛、源兵衛、こなしあつて

源兵　サア、これから由兵衛、誰れも遠慮はない。なんと打明けて。

由兵　不思議に返つたこの胴亂、馴染の煙管で一服のまうか。

ト莨盆を引寄せ、莨のむ。源兵衛は何やら云ひかぬるこなし。これも莨のむ所へ、向うより才兵衛出て來て

才兵　嬉しや、由兵衛どの、戻つてか。

由兵　親方、こりや後金の催促か。

才兵　サア、この間の手附けは、やう〱昨夜濟んだれど、あと百兩、都合二百兩の身請け。サア、由兵衛どの、受取りませうか。

由兵　渡すに違はぬ小さんさまの身請け、源兵衛が爰に居る。才兵衛、粋に似合はぬ金の催促。

才兵　イヤ〱、申し、源兵衛さまの方は、とんと手切れして、お前の方へ相談した身請け。後金が今戻らずば、昨

夜の手附けも戻して、小さんは矢ッ張り此方の奉公人。

由兵　昨夜打つたは手附けでないか。ありや半金。それを流すとは無法者。馬鹿謡せ。

才兵　イヤ〳〵、由兵衛どの、其やうにケン〳〵して物云はつしやりますな。向島で頭巾を呑み込んだ二十日の日、二十日に取つた同然の手附け。すりや、三日過ぎるぞえ。コレ、道具屋の書付けにも、お手附け三日限りとしてあれば、流さうと云ふおれが無理でえすか。

由兵　ぢやと云うて今後金の百兩。

才兵　無ければおれが云うた通り。

由兵　エ、うぬ……すりや此奴も行きがけの駄賃に。

トきつとなるを、源兵衛ちよつと留めて

源兵　由兵衛どの、ソレ百兩。

ト口幕の金を投げ出す。由兵衛、取上げて

由兵　ヤア、この金は。

源兵　向ふ島でどぶ六めが、騙り取つた百兩。壹兩もちゝうはない。其方に覺えの通り。

由兵　すりや、この金を。

源兵　貸すのではない、コリヤ、戻すのぢや。親方に渡して小さんが身請け、さつぱりと譯を立てゝしまはつしやれ。

ト由兵衛、源兵衛が顔をキッと見て、思ひ入れあつて

由兵　ムウ、これまでの源兵衛と、打つて變つた志し。マア、何事も後へ廻して手詰めの後金。

源兵　時の用には、離れの好い男であらうが。

由兵　忝ない……ソレ、親方、後金の百兩。

ト才兵衛へ渡す。

才兵　忝ない。これで云ひ分はござりませぬ。小さんが年期證文。

ト證文を渡す。由兵衛、取つて懐へ入れる。

源兵　金受取つたら云ひ分はあるまい。

才兵　なんのござりませう。これといふも源兵衛さまの達引。

源兵　コリヤ、無駄を云ふな。

ト目くばせする。才兵衛呑み込み

才兵　さらばお暇申します。男ども、來い〳〵。

ト男どもを連れ、向うへ入る。由兵衛こなしあつて

由兵　胴亂といひ、今の金、美しづくに仕掛ける源兵衛、こりや、この由兵衛に何ぞ折入つて

源兵　オヽ、頼みがある。

由兵　ムウ。

ト合ひ方になり、由兵衞、源兵衞、こなしあつて前へ出で下に居て

その頼みとはおれも承知。また由兵衞も貴様に、ちつと折入つて。

源兵　その頼みといふは、おれも承知ぢや。

由兵　殊によつたら遣らう。

源兵　そりや何を。

由兵　女房小梅。

源兵　ヤ……おれも遣らう。

由兵　そりや何を。

源兵　手向山の色紙。

由兵　ヤ。

源兵　なんと違ひはあるまいがな。ハヽヽヽヽ。由兵衞、小ツ恥かしい事なれど、この源兵衞、どうぞ小梅を貰ひたい。どういふ因果か藝者のうちから、惚れて／＼惚れ拔いて居る。ぢやに依つて、その胴亂、今の金、又この上に望みの色紙、伴五郎さまの頼みも、ツちやつて、たとへ人が笑はうが、誹らうが、小梅さへ女房に持ちやおれが本望。我が身ながらも恥かしい。どうして彼れに此やうに惚れた事ぢや知らぬ。由兵衞、必らず腹立てゝたもるなや。

由兵　鬼を欺むく源兵衞が、色ゆゑなればこそ。ハテ、心の外ぢやてな。

源兵　外か内か知らぬが、どうぞ割りない無心なれど。

由兵　現在の女房、源兵衞に斯う／＼ぢや程に、添へと云うて、取持ちはせぬが、縁を切つてやらう。ハテ、その上で女房にするは其方の手際。去り状にて縁切つたらよいでないか。

源兵　成る程、男の口から取持ちもなるまい。すりや、いよいよ小梅と縁切つてくれるか。

由兵　さつぱりと去つてしまふが、今云うた菅家の色紙、盗賊はどぶ六なれば、持ち主源兵衞と慥かに知れてあれど、表立つて詮議のならぬ筋合なれば、それで折入つて由兵衞が頼み。

源兵　根が盜み物、密かに賣り拂つてくれと頼まれて、肌身離さぬこの色紙。

ト懐より色紙の箱を出して見せる。

由兵　それを。

ト取りにかゝるを、ちやつと持ち替へ

源兵　イヤ、こればかりは滅多に渡さぬ。去り狀書いたその上で。
由兵　すりや、去り狀を見た上、その色紙を。
源兵　小梅と引替へ、違ひないしるし。由兵衞、これを破つてしまへば、小さんは元より金五郎始め、幾人死人が出來やうやら、知れまい〱。
由兵　ぢやに依つて小梅をキツと。
源兵　約束が違へば、長吉殺しの訴人はおれが。
由兵　イヤ、命は惜しまぬ。色紙が欲しい。
源兵　そんなら由兵衞。
由兵　源兵衞、とくと。
源兵　樣子を見ようわい。
ト獨吟になり、兩人こなしあつて、源兵衞は中二階へ入る。由兵衞、思ひ入れあつて、此うち唄。
〽春の夜の、闇はあやなしそれかとよ、香やは隱るゝ梅の花、散れど薫りは猶ほ高し、袂に伽羅の煙り草、きつう惜めど其かひも、なき玉ごろもほんにマア、柳は緑りくれなゐの、花を見捨てゝ歸る雁金。
トこの唄のうち、由兵衞いろ〱思案する。向うより小梅、涙悄れて花道の角にて躓き、轉けて起きあがり、門口へ來て思ひ入れあり、こなしあつて涙を拭ひ、顏を拭き所體を作る。內へ入ると唄の切れ、彈流しの合ひ方、由兵衞と顏見合せ
由兵　小梅、最前から、どこへ行た。
小梅　アイ、隅田川の渡し場へ。
由兵　ハテ、變つた所へ何しに。
小梅　サアそれは。
ト云ひかねる。ト由兵衞、こなしあつて
由兵　おれに隱して遠歩き。どうでろくな事ぢやあるまい。
小梅　なんのいなア。云ふに云はれぬ、それは〱。
ト悲しさを隱す思ひ入れあり、此うち中二階の障子を開く。ト源兵衞、樣子を見て居る。由兵衞、源兵衞をちよつと見て、わざと腹の立つこなしあつて
由兵　エヽ、グヤ〱、いま〱しうてならぬわい。
ト灰吹を煙管で叩く。小梅こなしあつて
小梅　申し、こちの人、そりや何事でござんすぞいなア。お前に隱してわたしが行つたは、ちと譯のある事。その樣子を云ひたいけれど、どうも云はれぬ。何事も堪忍して機嫌直して下さんせえ。わたしが身の上にな。
由兵　イヤ、其方よりおれが身の上、割つて云はれねど追

ッつけ。
小梅　エヽ。
由兵　イヤサ、追ッつけ男の高下、存分にせにや置かぬ。
　ト源兵衛が方へ掛けて云ふ。
小梅　それ〳〵、矢ッ張り其やうに腹立てゝ下さんす。もう機嫌直して下さんせえ。これ申し、一生の頼みぢやわいな。
由兵　ヤ、何ぢや、わりや泣くか。なんの悲しうも無い事を。
小梅　アイ、なんの悲しうもない事。泣きやしませぬ。此やうに笑つてゐますわいな。
　ト由兵衛思ひ入れ。小梅、顔をヂッと見て
こちの人、由兵衛どの、わたしよりお前が、なんで泣かしやんすぞいなア。
由兵　何が悲しくておれが。
小梅　イエ〳〵、ソレ、お前の兩の目に、涙がいつぱい溜つてあるわいなア。
由兵　イヤ、こりや春先で逆上るのぢや。
　トこなしあり、拭ふ。
小梅　こりやモウ堪へられぬわいなア。
　ト悲しさを紛らす心にて、ちろりと茶碗を取つて來て、手酌に酒を呑む。
由兵　こりやいつにない、樣々の藝が上がつたな。
小梅　アイ、上がつたわいな。
　ト一口呑んで由兵衛に、助けてくれいと出す。由兵衛、顔を背ける。
小梅　汚いかえ。
由兵　おりや酒機嫌ぢやないわえ。
　ト云ひながら由兵衛、グッと呑んで顔を蹙める。
小梅　術ないかえ。
由兵　熱鐵を呑む思ひぢや。
小梅　ほんに由兵衛どの、藝者の時にフッとお前と云ひ交して、いま此やうに女夫になつて暮らすのは、これが天上の榮華とやら。わたしやこんな嬉しい事はござんせぬわいなア。
由兵　それも逢ふは別れの元、生るは死すの元と云ふ事があれば、何時別れやうやら知れぬ。かねてその心で
小梅　イエ〳〵、わたしやお前と別れはせんぞえ。アイ、金輪奈落の底までも、お前と離れはせぬ。それで此やうに。

ト また酒をついで呑まうとする。由兵衞、左の手にて
その手をとつて

由兵　もう大概に呑んだがよい。

トこの時小梅、由兵衞が留めて居る左の手の小指をキツと見て

小梅　こちの人、お前、この小指をどうさしやんしたえ。

由兵　エ。

トちやつと引く。小梅、思ひ入れあつて

由兵　エヽ、大方髮剃る折、剃刀でちよいと。

ト小梅また手を取つて

小梅　但し深爪か、とげが立つたのかいなア。

トとつくりと見て

イヤ／＼、こりや深爪でも、とげでもござんせぬ。

由兵　オヽ、切つてやつた。

小梅　エヽ、そりや誰れに。

由兵　サア……サア、餘所の女に。

小梅　アノお前が。

由兵　心中に切つて遣つたこの小指。

小梅　そりや眞實に。

ト取り付くを酷く取つて突き退け、源兵衞が方を見て

由兵　小梅、否になつたぞ。

小梅　エヽ。

由兵　サア、とんと飽が來たぞ。側へ寄るな。胸か惡いぞ。

小梅　こちの人、そりやマア何を云うて下さんすぞいなア。ソレ、その指は慥かに……サア、たとへ心中に餘所の女子に切つて遣らしやんしても、もう／＼わたしや何にも云やしませぬ。悋氣どころか、わたしや追ひ出されて、何とせうぞいなア。

由兵　互ひの心底見拔いた上の女夫。其やうに云うてさへその通り。この上また聞いたら恟りする。

小梅　エヽ……恟りするとは。

由兵　オヽ、恟りさす。

ト源兵衞が方へかけて、硯を取り、サラ／＼と去り狀を書いて

ソリヤ。

ト去り狀を投げて、ちやつと脇見する。小梅、取上げ

小梅　去り狀の事。エヽ、そんならわたしを。

由兵　緣切つた。暇遣つた。その去り狀を、キリ／＼持つて出て行け。

小梅　この去り狀をわたしに……この去り狀を

由兵　トうぢ〳〵して由兵衞に取り付く。由兵衞も堪へ兼ね
何にも知らずに。
ト脊中を撫らうとして、源兵衞を見て、小梅を突き放し
緣切つたといふ證據の去り狀、ナ……去り狀ぢや。
ト わざと源兵衞へ聞かす。
小梅　コレお前、此やうな胴慾な心ぢやなかつたに。
由兵　飛鳥川、淵は瀨と、夜の間に變る男の心。
小梅　エヽ、わたしが心も。
由兵　何にも云ふな。聞く耳持たぬぞ。
小梅　エヽ、わたしが心竹ならば、お前に割つて見せたいわいなア。
由兵　そりやこの由兵衞も……イヤ、未練な奴ぢや。
小梅　さうぢや。
ト由兵衞が脇差にて左の小指を切る。
由兵　ヤア〳〵、なんでわりや指切つたぞ。
小梅　心中に。
由兵　ヤ。
小梅　サア、お前に去られた上は是非がない。これからはわたしも面當て。藝者の時から心をかけて、いろ〳〵と口說いて下さんした源兵衞さん、今さら女房に持つてと、口で云うても得心して下さんすまい。それで心中に切つたこの指。源兵衞さんに見せて、女房になりまする。
由兵　すりや、源兵衞へ心中の。
小梅　この後お前の構ひにならぬ。コレ、この去り狀。
由兵　心中に指といひ
小梅　よう緣を切つて下さんした。酷い心の由兵衞とのぢやもの、この世ではお前の顏を見ませぬわいなア。
由兵　なんと。
小梅　わたしや源兵衞さんと、末長う添ひ遂げまする。
ト唄になり、小梅、去り狀を持つて向うへ走り入る。由兵衞も、ツカ〳〵と出て、門口の柱を持つて、向うをキツと眺め、ホロリと泣く。此うち二階より源兵衞、喜び勇み、降りて來て
由兵　エヽ、忝ない〳〵。コレ、由兵衞との、今のを見て、おりやほんに得心ぢや。こゝな結ぶの神め、南無由兵衞大明神さま〳〵。
ト表へ出ようとする。
小梅　源兵衞、男づくの約束の去り狀遣つた上は、此方の望みの

源兵　色紙か。小梅ゆゑなら色紙も身上も持つて行け。
ト色紙の箱を由兵衛に渡し
おれが爰に居るのに、可哀や、ウロ〳〵尋ねて居やう。
小梅ぼう。おゝい〳〵。
ト現のやうになつて向うへ走り入る。奥バタ〳〵にて、
金五郎小さん出て來る。
金五　コレ〳〵、由兵衛どの、樣子を聞いたが、思ひがけない。
小三　小梅どのを、なんで其方は。
源兵　ハテ、女房の事は打ッちやつて置かしやりませ。それよりお喜びなされませい。小さんさま、お前の身請けも、さつぱり濟んで年期證文。
ト懷中より最前の證文を出し、小さんに渡す。
金五郎さま、色紙も、やう〳〵無難に取返しました。
金五　エヽ、忝ない〳〵。小さんが身請けと云ひ、この色紙。
小三　皆由兵衛の志し、なんと禮を云はうやら。
由兵　さう云ふ間に時が移る。お二人ともにその品を、勘十郎さまへ御持參あつて、金兵衛さまへお執成し。さすればお身の云ひ譯。
金五　そんなら、この色紙を一時も早う。
小三　勘十郎さまや金兵衛さまへ。
金五　由兵衛には
由兵　後から參ります。サア、お二人とも。
金五　さうぢや。小さん、おぢや。
ト唄になり、金五郎、小さんを連れ、色紙を持つて向うへ走り入る。由兵衛、後にてこなしあつて
由兵　あれでお二人の身の上、めでたく納まる上は。
ト思ひ入れある所へ、奥よりお君出で、由兵衛が顏を見て
きみ　由兵衛どの、まだ長吉はおぢやらぬかいな。
由兵　打明けて得心さゝうか……イヤ〳〵、それでは却つて。
きみ　歸つて又どこぞへ行きやつたかいなア。エヽ、長吉もわしが此やうに案じて居るのに、ちつとマア顏見せてたもつたがよいのに。
由兵　なんぼ待つても長吉はナ。
きみ　まだ隙がいるかいな。
由兵　こりやもういつそ……おれが尋ねて來よう……ムウさうぢや。

ト身拵らへする。此うちお君喜び、しか〳〵捨ぜりふの所へ、納戸口より小梅、ツカ〳〵と出て、門の戸ピツシリと締める。トこれより胡弓入りの合ひ方になり、小梅、後にて戸を押へ、由兵衞とこなし。お君、思ひがけなく

きみ　小梅どの。

由兵　去つた女房、立戻つて來たは。

小梅　由兵衞どの、名乘つて出やしやんすには及びませぬわいなア。

由兵　隅田川の渡し場へ、流れ寄つたる弟が死骸。

きみ　エヽ。

ト悔りする。

由兵　その死骸の口に咬ひ切りある小指。殺し手の證據。コレ。

ト左の小指を見せる。

小梅　イヤコレ。

ト同じく左の小指を見せる。由兵衞その手を取つて

由兵　さては最前切つた其方が小指。

小梅　お前の代りに。

由兵　イヤ。

ト小梅を突き放し

下手人は、この由兵衞。

きみ　そんならアノ長吉は。

由兵　大川端の屋敷前にて、昨夜手にかけ、殺してしまつた。

きみ　ヒエヽ。

トこれは誠に悔りする。

小梅　ハアヽ。

ト取亂し大泣き。此うち始終合ひ方。由兵衞、佛壇より最前の手紙を取つて來り

由兵　淺次郎どのへ、姉小梅より。

君梅　エヽ、その文は。

由兵　金と一緒に持つて居た。

トさつと開き取つて下に居て

コレ、現在連れ添ふ女房の弟、淺次郎とは聞いて居たれど、まだ逢はぬのが因果。昨夜手詰めの金の工面、詮方盡きて思案工夫も暗紛れ、百兩の金所持する丁稚長吉、惡者どもが手籠めにするを、片ツ端より追ひ捲り、送つてやらうと先へ立つて、お主の爲の出來心。非道と知つて無理やりに、酷う死ぬる臨終まで、この金は命づくと

云うたは、矢ッ張りこの由兵衛や姉の頼み。知らぬ事とて胴慾に、殺した時に咬ひ切られたこの小指。廿三夜の月魄に、死顔を見れば小梅に生寫し、落散りしこの狀を拾うて愕り、さては長吉と云ふのが淺次郎であつたかと、思へど跡の死骸の片付け、さし潮なれば大川へ、心は水葬、せめて名乘つて出るは、こりやせめてもの罪亡ぼし。殊に又、お君さまの心底、最前二人が樣子。この由兵衛は人殺しの、仕置に逢はぬその先に、心は死んで居るわいやい。

ト思ひ入れある。お君、こなしあつて、小梅に取り付き

きみ　小梅さん、由兵衛さんが、長吉を殺したといなア〳〵。わしやどうせう。長吉が死にやつたら何とせう。コレ、お前も弟の事ぢやないかいなア。

ト又こなしあつて、由兵衛に取り付き

なんでお前は長吉を殺さしやんした。可哀さうにマア、矢ッ張りこの家へ來て居やるであらうと思うて、知らぬ道を徒步跣足で、尋ねで來たも逢ひたさ見たさ。それを殺したとは、こちや否ぢや〳〵。長吉に逢ひたいわいなア。償うて返しやいの〳〵。

ト振り袖にて由兵衛を叩き、又打伏して泣く。小梅、こなしあつて

小梅　お君さま、娘心の一筋に、道理ぢや〳〵。道理でござんすわいな。コレ、こちの人、覺悟極めて死ぬるまで、お前に怨みを云ふまいと思うて居たが、たつた一言、エヽ、聞えぬわいなア。

由兵　コリヤ、何事も金が敵と諦めてくれ。

小梅　お主の爲に弟一人見替へはせねど、怨みはこれまでお前が、弟に逢うて遣つて下さんせぬゆゑ、互ひに顏を知らぬから起つた事。最前思はず疊の下から出た、血塗れのお前の小袖、こりや喧嘩さんしたと、外の案じに思はずも、隅田川の渡し場より、米屋の男が呼びに來て、行て見て愕り、弟が死骸。その時わたしも氣を失うたわいなア。あたりの人の世話になり、心を沈めて死骸を見れば、口に咬へた小指の證據。殺し手の詮議となつて、戾つてこの事を、云ふに云はれぬ着物の血汐、よもやと思へどお前の素振り、酒に紛らし試して見れば、その左の小指を切つて遣つた、色事と聞いて嬉しさ……と云へど矢ッ張り疑うて、去り狀取つて、思案を極め、わしや弟の下手人と、覺悟を極めて、お前の樣子を、

由兵　ト取り付き泣くを、こなしあつて
女房ども、お君さま、何を云うても詮無い繰り言。この上は跡弔ひが肝心。その次手に由兵衞も

ト立ちあゞるを兩方より取り付く。由兵衞、思ひ入れあつて

君梅　そんならお前は。

由兵　この由兵衞が、さぞ憎からう。

君梅　イエ。諦らめて居るわいなア。

由兵　思へばまだ、蒼の花の長吉を

小梅　殺すもお主の爲。

由兵　夫思ひの心を察して

ト兩人を引寄せ

三人　空に知られぬ袖の春雨。

ト手を取り交し、思ひ入れ。此うち臆病口へ長五郎、窺ひ出て

長五　長吉を殺したは、いよ／＼由兵衞、われを。

ト立廻り。

きみ　ヤア、惡者の長五郎。

長五　お君はおれが。

トお君を引立てるを、小梅支へるうち、向うバタ／＼にて、金五郎、色紙を持つて走り出て

金五　コレ／＼、由兵衞、最前受取つた色紙は、この通りの似せ物。それゆゑ勘十郎さまには以ての外のお腹立ち

由兵　ヤ、。

ト取つて見て
誠にこりや襖の卷り、ムウ。さては源兵衞めが。

金五　そればかりおやない、まだ小さんが身の上、道で待伏せして、伴五郎や源兵衞が、年期證文諸ともに、小さんも彼方へ奪はれた。

由兵　すりや、證文も小さんさまも。

小梅　こちの人、お前の身の上よりは眞の色紙。

金五　小さんが事も。

由兵　ソレ。

ト行かうとするを、長五郎又かゝるを、小梅金五郎立廻り。此うち、お君、剃刀を咽喉へ突き立て

きみ　南無阿彌陀佛。

皆々　ヤア、それは。

きみ　未來へ行つて長吉に。

皆々　それ程までに。

長五　うぬを。

ト立廻りよろしく
小梅　爰構はずと。
ト長五郎を押へる。
由兵　合點だ。
ト尻を端折[illegible]へ入る。

ひやうし幕

すべて飾つけ土手の模様。前土手、土船にて、幕の内より由兵衛、伴五郎を踏みつけ、十平次が手を捩ぢあげ、源兵衛抜きかけ、これを留めて居る。よろしく踊り三味線、早幕に開く。

源兵　由兵衛、小さんを戻したりや、云ひ分はあるまいがなア。
由兵　イヤ、小まんさまを受取つても、まだ眞の色紙を爰へ出せ。
ト突き廻す。十平次、振り切り、伴五郎も起きあがり
源兵　色紙とは何を。最前われに渡したぢやないか。
由兵　そりや襖の巻り紙。菅家正筆の手向山の色紙は、源兵衛、うぬを始め伴五郎どぶ六、骨を挫いで出させにやならぬ。
伴五　イ、ヤ、知らぬ。
十平　色紙より、うぬを。
由兵　命の濟んだ梅の由兵衛。
ト由兵衛にかゝるを、ちよつと立廻り。此うち向うより長五郎走り出て
長五　ヤア、みんな爰に居るか。
源兵　長五郎、われも一緒に、由兵衛めを消してしまへ。
皆々　合點だ。
由兵　相手嫌はぬ一くるめ。昔の商賣由兵衛が、梅や澁との心ぢや。
皆々　こりや面白い。
トこれより四人を相手に面白き鳴り物にて大タテになる。トゞ、四人を泥の中へ見事に切り込む。源兵衛を引上げ、懐中より色紙の箱を取出し
由兵　これこそ眞の色紙。エ、、忝ない。……まづ今日はこれぎり。

打出し

# 隅田春妓女容性（終り）

佐野は八橋
紀文はお賤

# 青樓詞合鏡（さとことばあはせかゞみ）

聞書三冊物

「青樓詞合鏡」のカタリは、表記の通りひどく簡單なものである。

下揭の番附は、初演の時の繪本番附の大詰の一部である。

繪本番附にも、なか／＼變遷がある。古いものになると、叮嚀に筋を書いてあつたもので、全く黄表紙と紛ふ程であつたが、後にはその筋も段々簡單になり、丁度この頃、それは全く無くなつて、繪ばかりになつてしまつたのである。それでも、後の繪本に比べれば、相當の畫家が描いただけあつて、繪柄だけでも、すぐれてゐて見榮えがする。



# 青樓詞合鏡

## 序幕

葺屋町の段
吉原町の段

役名＝＝萬字屋八つ橋。同、高崎。綠屋女房、お時。萬字屋新造、豐久野。屋敷女中、清瀧。新造、難波津。新造、初梅。下女、お種。奴、傳助。萬屋鐵吉。幇間、彥八。同、竹吉。遣り手、お杉。澤井數右衞門。半田稻荷實ハ數右衞門下部、丹助。萬屋甚八。大木場の三婦。綠屋の松藏。唐物屋小兵衞。佐野次郎左衞門。紀伊國屋文藏。

第一番目大詰、打込み、呼び納まつて、少し間を置き、拵らへ出來次第、小幕の中より

呼び　東西々々。傳馬町三丁目、紀伊國屋文藏さま、急用急用。

トいつもの通り二三遍返して呼び、暫らくあつて東の方七間より、紀伊國屋文藏、世話の拵らへ、羽織にて雪駄を持つて、本舞臺へ上がり、幕の外より縫うて見物のやうに花道へ入る。二番目の觸れ出て引込み、樂屋にて例の懸け聲をあげる。これにて幕開く。造り物、三間の間、二重舞臺、見附け、障子。すべて芝居茶屋の見世先の體にて、萬屋といふ提灯、懸け行燈、爰に鐵吉、若い衆の形、下男二人、下女一人、皆皆燒き飯、料理拵らへ忙がしき體。始終あふりの聲にて

鐵吉　サア／＼、幕が詰まつた。座敷へもお吸ひ物、土器へも鉢肴をやらねばならぬぞ。

下男　コレ／＼、それよりは、お見世の方へお膳が行くぞや。

同　燒き飯も早う拵らへてやらねばならず、旦那がお留守ぢやというて、のらをかはくまいぞ。

下女　合點ぢや／＼。なんぼ旦那がお留守でも、番頭の甚八どのや、息子どのゝ鐵さんがござるもの。

鐵吉　コリヤ／＼。皆無駄を云はずと、片附けてしまはぬかいの。

皆々　イヤ、大方片附けてしまうたぞ。

ト　わや／＼云うて居る。奥より清瀧、その外、屋敷女中の仕出し、みな見物にて、手を拭き／＼出る。甚八世話の形にて皆に附いて出る。

甚八　もう／＼幕が明きませう。お越しなされませ。

清瀧　ほんに甚八どの、いつもながら、世話でござるの。さうして、御亭主も留守なさうぢやが、先達て頼んで置いた服紗と扇を、どうぞ濱村屋に發句を書かせて下されや。

甚八　それは先程、樂屋へ持たせて遣はしましたれば、追ッつけ書いて參ります。

女一　次手に、わたしが頼んだ、紀伊國屋へ楊枝差しを。

甚八　それもようござります。紀伊國屋は松花堂、濱村屋は東江流で、それでお客樣から常住頼みに參つて、書いてもらふのも氣の毒でござります。

清瀧　コレ、今度の幕は對面であらうの。

甚八　イヤ、まだ「草摺」がござります。この幕に訥子が出ますれば、早う御覽なされませ。

女中　わたしらは瀧野屋、坂三津、早う見たいわいなア。

甚八　サア／＼。早う……サア、定七、お連れ申せ。

下男　ハイ／＼。サア、お出でなされませ、

ト　皆々しか／＼あつて、清瀧に皆々と下男附添ひ、向うへ入る。

甚八　皆、棧敷や土間へ氣を附けてもらはうぞ。又打出したらお膳が出やう。表二階も、奥二階も片附けてしまつたがよい。いつもながら忙がしい事ではあるぞ。

ト　此うち始終あふりの聲にて、向うより次郎左衞門、好み形にて、文藏と連れ立つて出て

文藏　これはしたり、思ひがけない、旦那、次郎左衞門さま、今、芝居のうちで私しを呼びましたのは、お前樣でござりましたか。

次郎　サア、文藏、其方に急に逢はねばならぬ事があつて傳馬町へ行たところが、この桐座見物と聞いて、直ぐに爰へ來て、木戸へ頼んで呼び出してもらうた。

文藏　そんなら私しに。

次郎　ちつと急な事ゆゑ。

此うち始終あふりの聲。

文藏　爰は途中、芝居近所で騷がしい所なれば

次郎　ア、どこぞ靜かな所へ。

文藏　幸ひ、この蔦屋で、サア、お出でなされませ。

ト入れ替り、兩人、本舞臺へ來る。

甚八　これは〳〵、紀文さま、よう入らつしやりました。御見物には、ちと遲うござりませうが。

文藏　イヤ〳〵、據ろない連れがあつて、桐座へは今朝から來て居るうち、ちつと此お方に密かにお話し申したい事があるが、甚八どの、奧座敷は明いてあるかな。

甚八　打出すと、お客が込みまするが、今の間は、奧なと二階なと、御勝手にお出でなされませ。併し、芝居の囃子が聞えて、やかましうござりませう。

文藏　イヤ、ちつとの間、大事あるまい。モシ、若旦那。

次郎　奧へ行かうか。

甚八　ソレ、お茶、お莨盆を持つて行けよ。

文藏　コレ、忙がしいのに、何も構ふまい〳〵。

ト次郎左衛門を連れて、文藏、奧へ入る。向うより傳助、奴にて、手箱を持つて出て來て

傳助　葺屋町の萬屋はこれだな。築地のお屋敷よりお手紙ソレ。

ト出す。甚八、開き見て

甚八　南無三、明日桐座の棧敷、しかも三軒ものと。

ト頭を掻き〳〵

イヤ、モウ、大入り、近頃の大繁昌で、棧敷が自由になり憎うござります。先へ延されますまいか。

傳助　イヤ〳〵、奧樣の御見物なれば、明日の日は延されぬ。殊に、棧敷は西の下、樂屋より役者が通る所がお望みサ。

甚八　サア、さう自由には滅多になり憎うござりますれど、どうぞ働いて見ませうが、もし出來ますと、始まりは殊の外早うござりますれば、仰せ上げられて下さりませ。

傳助　評判がよいから、早いは合點、棧敷が間違ふと惡いぞ。きつと働かつしやれ。お客は女中の大勢、おらもお供と出るで、えゝかな、承知なりや、ドリヤ、お屋敷へ歸らうか。

ト云ひ〳〵向うへ入る。

下男　コレ〳〵、甚八さん。桐座の棧敷は十日も前にせにや出來ぬのに、今のやうにお前受合うて。

甚八　ぢやというて、お出入りのお屋敷、どうも日は延されまい。

下女　それに又、濱町の棧敷、下谷の御連中も云うて來てあるぞえ。

甚八　サア、芝居が込んで來ると、棧敷が自由にならず、

お客をしくじらば、困つたものぢやなア。

　トこなしあつて、道具廻る。

　矢張り二重舞臺、奥座敷にて、文藏、莨盆を扣へ、次郎左衛門に樣子を聞いて居る體。鳴り物入りの所作の拍子にて、道具とまる。

文藏　御覽じませ。芝居の隣といふものは、やかましうて大事の話しは出來るものぢやござりませぬ。

次郎　イヤ、文藏、改めて云ふには及ばねど、其方の親の文右衛門は、おれが親人の家來で、命の恩を受けたとやら、其ゆかりで、この次郎左衛門を、其方の深切、段々の世話、忝いぞや。

文藏　ハテ、死なしやつたるわたしが親仁樣は、あなたの親御に命の御恩を受けた御家來。すりや、この文藏が爲にも、大切なお主筋。なんの、あなた、おろそかに存じませう。今でこそ御流浪のお身の上、この頃までは、下野の舟橋の御家中、佐野次郎太夫さまの御子息、同苗次郎左衛門さま。殿樣がお預りの、お家の重寶籠釣瓶の茶入れ、紛失したるお誤りにて、御勘當の御身、お國で云ひ交してござつた奥女中萩野どの、あなたの跡を慕うてこの江戸へ。それで遁がれぬ不義の科にて、重なる御難儀。

次郎　サア、その云ひ交した萩野も、おれが爲に養子親を賴んで、今では吉原の萬字屋で、八つ橋といふ勤め奉公。

文藏　その貞節を承つて、及ばずながら、この文藏めが、金輪際お世話申すも、旦那のゆかりゆゑ。

次郎　どうぞ、國で盜まれた、籠釣瓶の茶入れを詮議して元の佐野次郎左衛門と歸參すれば、八つ橋を身請けして夫婦となり、今の憂も昔語りに。イヤ、それよりは、文藏、今朝思ひがけなう國の母人より、內證にて飛脚、コレ、この狀が來たわいの。

　ト狀を出して見せる。文藏取つて、とつくりと讀み

文藏　ムウ。こりやコレ、紛失の籠釣瓶の茶入れを、詮議し出して差上げなば、歸參も叶ひ、御勘當も免すとある阿母樣よりの御狀。

次郎　それを其方に見せうと、わざ／＼爰へ尋ねて來た。殊に、お家に御婚禮があれば、彼の籠釣瓶の茶入れを早引出と、殿樣の仰せ、それゆゑ、先達て、其方に賴んで置いた通り、茶入れを急に詮議して差上げなば、歸參も叶ひ、勘當もゆりるわいの。

文藏　ムウ、成る程。して、この樣子を、八つ橋どのへお話しなされましたか。

次郎　それは如才はない。今朝吉原へ行て八つ橋に、ちよつと話しをしたれば、早う文藏さまに賴んで、茶入れを詮議してもらへと、可哀さうに彼れもこの事で、大抵心遣ひして居る事ではない。

文藏　廓は人の入込む所、勤めしてござるこそ幸ひ、もし茶入れの詮議の綱もと、八つ橋どのへは、かねてとつくりと、云うて置きました。

次郎　さうかして、隨分客に心を附けろと云うて居たが、どうぞ急に詮議の仕樣があらうかの。

文藏　日頃心懸けても、今に知れぬ籠釣瓶の茶入れ。

次郎　世に稀れなる名器。それを文藏、其方の働きで

文藏　サア、なんでも火急に、尋ね出さにやなりませぬ。

ト鳴り物になり、次郎左衛門こなしあつて

次郎　ヤア／＼、あの太皷は。

文藏　ハテ、桐座の芝居でござります。

次郎　ほんにさうぢや。慥かに「草摺引」

文藏　モシ。それでは茶入れの事を。

次郎　其方より、どうぞ急に、詮議し出してたもるまいか。

文藏　どうしたものであらうなア。

ト思案する。大ドロ／＼、タテのツケになる。

次郎　コレ／＼、芝居も打出し前ぢやさうな。

文藏　何にしても、爰では思案が出來ませぬ。お前は、マアマア、お先へお歸りなされませ。

次郎　イヤ／＼、もう暮れるに間もなければ、おりや爰から直ぐに吉原へ行て、八ッ橋に、其方に逢うた樣子を云はねばならぬ。コレ、必らず茶入れの事を。

文藏　詮議に如才はござりませぬ。それにつけても、八つ橋どのに私しも

次郎　逢ひに行きやるか。……ほんに、其方の相方高崎が、どうぞ連れて來てくれいと賴んで居たが、なんと今から猪牙で一緒に行かうか。

文藏　イヤ、マア、あなたはお先へ。私しは、まだ用事がござりますれば、見合はして後から參りませう。

次郎　それなら先へ行て、緑屋に待つて居るほどに、文藏早う出ておぢや。

文藏　サア、ようござります。

次郎　コレ、肝心の茶入れの事を賴むぞや。八つ橋もその

様子を、イヤ、高崎にも其方がおぢやると云うて置くぞや。
文藏　ハテ、どうともなされませ。
次郎　よし〳〵。……ドリヤ、吉原へ行かうか。
　ト遠寄せになり、次郎左衛門こなしあつて奥へ入る。
　文藏、あと見送つて、
文藏　誠に、太平の御代の有り難さ。武家に育つて茶の湯俳諧、色事より外は。ほんに、佐野次郎左衛門といへばどうか男達か、立派な御用達であらうと聞ゆれど、女にまさつた和らかなお生れ附き。今の御流浪、おいとしや。
　ト始終遠寄せ。
時に、どうぞ籠釣瓶の茶入れを詮議し出して、元のお身にと、口では云へど、世に稀れな船橋家の御重寶、たとへ在所が知れても、迂濶には取返されぬ、若旦那の今のお身の上。さすれば金づく。買ひ戻すにも大名道具、よもや端金では。……こりや、金の都合を、急にせねばならぬか。
　トこれをキッカケに、打出しの太鼓になる。
アレ、もう芝居は打出した。
　ト案じながら煙草をつぎ
これまでの物入り、内の女房の手前、偏屈な伯父者人といひ、商賣の勘定くるめて、旦那へ貢ぎ。
　ト云ひ〳〵煙草を吸ひつけ
又その外に大枚……ハテ、ムウ。
　ト煙を吹いて、思ひ入れ。これにて道具ぶん廻す。
　造り物、五十間、大門になり、清掻にて道具とまる。
　ト女郎買ひの仕出し、向うより出て、段々大門口へ入る。いつもの懸け聲の駕籠一挺出て、大門のこなたにて下ろし
駕舁　サア、旦那、參じました。
　ト澤井數右衛門、羽織、侍ひにて、駕籠より出て、
數右　なか〳〵早かつたわい。
駕舁　急げとあつたゆゑ、駈けました。また明朝お歸りを待ちまする。
數右　いかにも歸りを待て。大儀〳〵。
駕舁　ハイ〳〵。
　ト駕籠舁き引返して、向うへ入る。數右衛門、あたりを見て
數右　駕籠舁きが急いだゆゑ、見世の出るのにはまだ早か

らう。暫らくこれにて、見合せずばなるまい。
ト片脇の茶屋の床几に腰をかける。矢張り清掻にて、向うより丹助、茜木綿の頭巾、同じ行衣を着、幟を持ち、鈴を振り、半田稲荷の拵らへよろしく

丹助　葛西金町半田稲荷へ代參り。疱瘡も輕い。痲疹も輕い。家内安全。息災延命。
ト云ひ〳〵出て來る。町人二三人、後から附いて出て

町二　コリヤ、半田稲荷。夜まで其やうに駈け歩いて居たか。

町一　ハテ、達者なものぢや。

丹助　斯う達者でなけりやア、葛西金町へ代參り、晝は江戸中の屋敷町を歩き、今日は箕輪、金杉邊まで日を暮らして、歸りがけに、この吉原へ晝の儲けを河岸切り見世九郎助稲荷の近所へ行きたい。二朱も買はれぬ、四六も買はれぬ。お客がよければ花魁をしめる。我れらもチックリ、その氣で錢が無い。
ト半田稲荷の通りにクリ〳〵廻る。

皆々　ハヽヽヽ。おつな願人であるぞ。
ト云ひ〳〵、皆々大門を入る。丹助、浮かれて居る。此うち數右衛門、そろ〳〵側へ行つて、丹助が顔をつくづく覗き見て

數右　ヤイ、其方は家來丹助ではないか。
ト丹助、恟りして

丹助　イヤ、丹助ではない、半田稲荷。
ト數右衛門を見て
イヤ、お前は澤井數右衛門さま。思ひがけない。どうしてこれへ。

數右　先日より殿の御用に附き、當所のお屋敷へ參つたを幸ひ、丹助、其方に逢はうと、方々を尋ねさせたに、知れぬも道理、今の商賣。以前の事は。

丹助　サア、以前にあなたの御家來なれど、彼のお頼みの一儀ゆゑ、下野を立退き、今この江戸へ來て、樣々の憂き渡世。

數右　成る程。身共が云ひつけで、佐野次郎左衛門が預かり居る、彼のお家の重寶

丹助　籠釣瓶の茶入れを、首尾よう盗んで

數右　コリヤ。
ト合ひ方變り、兩人こなしあつて
その大切の茶入れを、預け置きし其方なれば、何卒尋ね逢はうと思うて。

丹助　氣遣ひはござりませぬ。なんぼ斯う落ちぶれても。お前に頼まれた大切な代物は、肌身離さず、矢ッ張り持つて居りまする。

數右　出かした〳〵。流石は身共が以前の家來ほどある。其方がその心底を見屆けたゆゑにこそ、盜ませた籠釣瓶の茶入れ、紛失させたるその科にて、戀の意趣ある佐野次郎左衞門めも、親の勘當、浪人いたして、今この江戶に流浪のよし。時に身共が惚れて居る、奧女中萩野も、この吉原で角町の万字屋にて、八つ橋といふ女郎サ。

丹助　エヽ、聞えた。それでお前も、其やうに。ハテ、執心な。

數右　忍んで通ひ、樣子をとくと見屆けたけれど、まだ八つ橋には逢はぬ。所詮、逢うてからが、得心はせまいが女郎になつたこそ幸ひ、其方に逢うて右の茶入れを受取り、當所仲通りの道具屋、唐物屋小兵衞といふ者を賴み賣り拂ひ、その金にて、八つ橋が身請けの相談。

丹助　そりやよい都合ぢやが、茶入れをお前に渡せば、この丹助にも

數右　以前のよしみ、捨てゝは置かぬ。幸ひ、まだ外に云ひ聞かす事もあれば、身共が行く茶屋、伏見町まで、なんと、歩まんか。

丹助　成る程、參りませうが、おれがこの形で、連れ立つては異なもの。お前はお先へ。

數右　然らば丹助。

丹助　數右衞門さま。

トまた淸搔になり、數右衞門、こなしあつて、ツイと大門へ入る。丹助も思ひ入れあつて

葛西金町半田稻荷へ代參り。家內安全の祈禱。疱瘡も輕い。痲疹も輕い。

ト鈴を振つて、クル〳〵廻つて、大門へ入る。これにて返し、本舞臺かはる。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、見附け、塗り骨障子一面に靑簾を掛け、二重舞臺蹴込み、緣附き、下家へ人の出入りあり、よき所にみどり屋といふ懸け行燈。すべて仲の町茶屋の景色。矢張り淸搔にて、道具とまる。

ト向うより下男、高崎の紋附いたる箱提灯ともし出る。後より高崎、女郎の拵らへ。新造難波津、かむろ筆彌、附添ひ出る。次ぎに同じく下男、菊蝶の箱提灯にて、

八つ橋、女郎の拵らへ、新造初梅、同豊久野、かむろ文字野、同久野、附添ひ、皆々花やかに出て、本舞臺へ來ろ。内より縁屋の女房お時、太鼓持ち彦八、同升吉、一緒に出て

とき　これは〳〵、花魁、お早うござりました。

升吉　彼の萬字屋に名にしおふ八つ橋さま。

彦八　今を盛りの花のいでたち、サア〳〵、これへ。

とき　申し、お二人さん。

高崎　八つ橋さん。行きやんせうか。

八橋　勝手にしなんし。

　トつんとする思ひ入れ。

初梅　花魁、マア、ようござんすわいなア。

とき　何か様子は知らねど、マア〳〵此方へ。

升彦　八つ橋さま。高崎さま。サア〳〵。

　ト八つ橋こなしあつて、二重舞臺へ腰掛ける。高崎も右の通り、皆々並びよく、下男、兩方へ箱提灯を直す此うち始終清掻にて、皆々腰を掛ける。

とき　花魁、常に似合はぬ、どういふ様子で。

升彦　モシ、高崎さん。

高崎　わつちやア構ひイせんが、何だか八つ橋さんが、焦れなんすよ。

八橋　アイ、御盛んの高崎さん、なんぼ突出しのこの八つ橋でも、あんまりしたいやうに、踏み附けてくんなんすなよ。

高崎　何をわつちが踏み附けやんしたえ。

八橋　そりや覺えがあらう。お前の心に問うてくんなんし。

高崎　イヽエ、何も覺えはござんせぬ。お前、さう云ひなさんすは、大方なんぞ聞き間違ひでござんせう。

八橋　ほんに、聞き間違ひもよいわいなア。

高崎　イヽエ、覺えはない。知りイせん。コレ、八つ橋さん。お前と次郎さんの仲は、誰れ知らぬ者は無いぞえ。それにマア、疑ぐりなんして、わつちに氣を廻して。

八橋　廻すとは、若い衆ぢやあるまいし。オヽヤ、馬鹿らしい。

高崎　馬鹿に構うてくんなんすな。

八橋　イヽヤ、わつちやア構ひイすわいなア。

高崎　構ひたきや、釜出しや。

八橋　釜は西へ飛んで行た。

高崎　知つたかよウ。

　ト兩人、せり合ふ。お時、兩人の仲へ入り

六番目序幕





とき　これはしたり、花魁、どうでござりますぞいなア。

彦八　モシ、何事のおはしますか。益體もない。八つ橋さまも、高崎さまも、同じ見世で、常から同胞のやうに睦まじいぢやござりませぬか。

八橋　お時さん始め、お前方の手前も馬鹿らしいが、常から同胞のやうに思うて居る。繪合さんや高崎さんぢやによつて、たんと腹が立つわいなア。

升吉　サア〱、得てよい仲に間違ひが出來るもの。樣子は知らねど、こりやお時さんやこの彦八、この升吉が貰ひにして、なんと機嫌直しに、酒に致しませうか。

初梅　イヤ〱、酒よりは高崎さん、お前はちやつと揚屋町へ行かしやんせずばなるまいぞえ。

彦八　誠に、いつもの大盡樣が來てござらう。わたしも御一緒に。

難波　それでは爰に、八つ橋さんお一人。

八橋　わつちやア大事ない、お前方は皆、早う行かんせいなア。

とき　成る程。彼のさんが見ゆれば、皆氣を利かして、わたしもこちの人を呼びがてら、揚屋町へ附合はうわいなア。

皆々　そんなら、高崎さん。

高崎　アイ。爰に居て八つ橋さんに、覺えの無い事を焦れさゝうより、皆さん、揚屋町へ行きんせうわいなア。

皆々　花魁、後ほど。

八橋　アイ。皆さん、行て來さんせ。

ト騷ぎ唄になり、高崎、立ち上がる。下男、箱提灯を持つて、高崎はじめ皆々、ワヤ〱云うて奥へ入る。跡に八つ橋一人殘る。向うより次郎左衞門、以前の形にて出て來る。後より數右衞門、丹助、見え隠れに附けて出る。次郎左衞門こなしあつて、八つ橋を見て、本舞臺へ行く、兩人も附いて行き、囁き合うて、數右衞門大小を拔き、二重舞臺の緣の下へ隱す。此うち

次郎　八つ橋〱。

トこなしある。

八橋　次郎さんか。よう來なんしたなア。

ト立寄る。

次郎　さぞ待ちかねて居やつたであらうが、文藏に逢うて何もかもとつくり頼んで置いた。

八橋　ほんに、紀文さんの、これまでの、いろ〱のお世話。わつちやア氣の毒で。

次郎　ハテ、以前のよしみに今の深切。ほんに、文藏が其方に逢ひに來ると云うて居た。

八橋　そんなら今宵、爰へ來なんすかえ。わつちもちつと逢はねばならぬ事が

次郎　サア、その事で。

ト八つ橋、次郎左衞門の顏を見て、ヂツと思ひ入れあつて

八橋　ほんに、お前は舟橋の御家中で、佐野次郎左衞門さまといへば、人の用ひも格別。それに、今の御流浪の、其お身の上は

ト しつぽりとなる。次郎左衞門も思ひ入れあつて

次郎　イヤ、おれよりは其方も勤めの……ハテ、愚痴な。そんな事を思うては、一日もこの里には暮らされぬ。何事も今暫らく。

八橋　歸參して國へ歸れば

次郎　コレ、吉原詞は止めにやならぬぞ。

八橋　そりやよう承知して居りんす。

次郎　コレ、矢ッ張り居りんすとは。

八橋　イヤ、わつちよりお前が、習はうよりは慣れろとやらで

次郎　大分通になつたらうがの。コリヤ、花魁め。

ト引寄せる。

八橋　そんなら、云ひなんすないなア。

次郎　ハテ、爰に居る間の樂しみサ。

八橋　おつな事を。

ト兩人こなしあつて寄り添ふ。この眞中へ數右衞門、踏み越える。

オヽ怖。……誰れぢや。

次郎　滅相な。人の眞中を踏み越えて。

數右　なんだ、滅相な。何が滅相だ。コリヤ、爰は廓の往來。心任せに歩むが、どうぢや。

次郎　でも、おれが足を踏みにじつた。

數右　ヤイ〳〵。踏みにじつたら、何とする。邪魔になりや容赦は無いぞ。この往還に蚊蜻蛉を見るやうな野郎が目にかゝらうか。往來の道を塞ぐ馬鹿者め。それになんだ。却つて物云ひ附けるのか。面白い。こりや一番相手にならうわい。

ト仰山にいふ。此うち八つ橋こなしあつて、次郎左衞門を連れ、逃げようとするを、數右衞門引ッ捕へ

待て。うぬらは、身共が云ふ事を相手にならず、どこへ

うせるのだ。憎い奴だ。
ト次郎左衛門を打つ。八つ橋、留めるを突き廻す。此うち丹助、通りかゝりのやうにして
丹助　マア／＼、待たつしやりませ／＼。こりやお二人をどうするのだ／＼。
數右　さてはうぬも、この者の同類ぢやな。
トわざと次郎左衛門を留めて打たす。此うち向うより松藏、茶屋の亭主の形、浴衣を持つて出て來る。
丹助　イヤ、同類ではない、道通り。慥かに、萬字屋の花魁、連れは客人と見えた。それで挨拶するのぢや。モウモウ、料簡してやらんせ／＼。
數右　料簡ならぬ。逆ねだりをする二才め。それを肩持つと、うぬも、カウ。
ト丹助を打つ眞似をする。丹助、次郎左衛門を圍ふやうにして、わざと打たす。八つ橋、取附くを數右衛門引き退ける。立廻りよき所にて、松藏、ツカ／＼と行つて、丹助を見事に取つて投げ、數右衛門を突き飛ばし、同じく投げる。
八橋　オヽ、松さん。よい所へ、よう歸つてくれなんしたなア。

次郎　ほんに、綠屋の亭主松藏、幸ひな所へ。
松藏　これは次郎さま。花魁、やう／＼今、湯から歸りました。
ト丹助、數右衛門、起き上がり
數右　ヤイ／＼。うぬ、素町人め。横合ひから出て、なんで身共を投げた。
丹助　オヽ、さうぢや。どういふ事で此やうに投げやアがつた。
ト松藏を見て
ヤア、お前は爰の
松藏　綠屋の松藏。てまへは、この間から、方々駈け歩く、半田稻荷ぢやないか。
丹助　アイ、葛西金町代參り。
ト悄げる思ひ入れ。
數右　アヽ、さては茶屋の亭主だな。それになんで今の如く、身共を投げたのぢや。
松藏　イヤ、ちよつと裁人に出ました。
數右　ナニ、裁人、アノ、かけも構はぬ所へ出て、人を投げ廻つて、裁人とは。
松藏　イヤ、此お方は私しが所のお客、何かは知らず、あ

なたが投げたり、踏んだり、蹴たりなされますによつて取りさへようと存じましたれば、ツイ、お前が辷り轉ばしやれて、ム、ハ、、、。イヤモ、大抵な事なら、料簡して歸つたが、ましでありさうなもの。

數右　ならぬ〳〵。料簡せぬ。オ、、現在武士に慮外働いた野郎、此まゝに料簡しては、こりや身共の侍ひが立たぬ。オ、、武士が立たぬぞ。

松藏　それは〳〵、段々御尤もではござりまするが、たかが、相手は

　ト云ひ〳〵數右衞門の體を見て

イヤ、申し、あなたは武士ぢやの、侍ひぢやのと仰しやるが、見ますところが、その丸腰で。

數右　ヤア。

松藏　ハテ、小刀一本差さずに、侍ひぢやの、ヤレ、武士ぢやのとは。……茲な大騙りめ。

　ト數右衞門、丹助顏見合せ　こなしあつて

數右　イヤサ、それは。

松藏　それはとは。

　ト薪ざつぽうにて散々に打つ。丹助、ひいやりとする次郎左衞門、八つ橋喜ぶ、松藏こなしあつて

コリヤ〳〵、半田稻荷。てまへも先刻にから手傳うたがこの騙りと近附きか。

丹助　どうして近附き。イヤ、ついぞ見た事も無い人。わしや毎日この五丁町を修行に歩くゆゑ、あの花魁に怪我でもあつては悪いと存じて、それで今のは、取りさへて居りました。ナア、お二人。

松藏　さうありさうなものぢや。この廓を修行に廻れば、所の者は皆、云はうなら、マア旦那、商人なら得意ぢや。

丹助　左樣とも〳〵、お得意同然。

松藏　お出入りの旦那が云ひ附けだ。その騙りめを、この薪ざつぽうで打ちのめせ。

丹助　エ、、、。

松藏　ハテ、旦那の云ひ附けだ。早うぶて。

丹助　ぢやというて、それが。

松藏　コリヤ、滅多に骨は盜まぬ、祝儀をやるワ。

丹助　祝儀とあれば、打つても見るものぢや。

數右　ヤイ〳〵、丹助、イヤ、半田稻荷。うぬ、身共をぶたうとは、コリヤ、慮外すると免さぬぞ。

丹助　コレ〳〵、その氣遣ひが悪い。コレ、お前は丸腰、

ナ、たかゞ町人、騙りぢやないか。サア、ナア、侍ひらしい事云うて、強い顏すると、却つて、イヤサ、今おれがぶちのめすほどに。

ト數右衞門をこかし、いろ〳〵打つ眞似をする。

次郎　コレ〳〵、それではどうやらこたへぬやうぢや。ナウ、松藏。

松藏　成る程、手ぬるい半田稻荷。とてもぶつなら、斯う。

ト薪ざつぽうを取り、丹助を打つ。

丹助　アイタヽヽヽ、そんなら、斯うぢやな。

ト數右衞門をほんに打つ。

數右　コリヤ、さうでは無いわい。

松藏　イヤ、斯うぢや。

ト丹助を打つ。また數右衞門を打ちのめす。數右衞門丹助こなしあつて、向うへ逃げて入る。

ハヽヽヽヽ。ハテ、馬鹿な奴ではある。

八橋　申し。今のは國での朋輩、澤井數右衞門であらうがな。

次郎　サア、頰かむりで顏は隱して居たれど、さうと思うたゆゑ、それでわざと扣へて居たが、松藏が仕返しの心地よさ。

松藏　イヤ、これも御懇ろして下さります。紀文さまのお庇で、お前方、今日二人の事を、くれ〴〵も。サア、強いをいがめ、弱いを肩持つ吉原氣質。なんぼ茶屋でも、この仲の町の緣屋松藏。人さんに賴まれたら、金輪際、まさかの時には、……ハテ、これも何の役に立たぬ味噌。……ほんに味噌吸ひ物で一つ上げませう。モシ、花魁、今夜のお客はあの唐小さま、氣障なお客ぢや。ナ、ソレ。……迫くほど間夫が可愛うて、都合よう……ドレ、お酒でもあげませうか。

ト唄になり、松藏、思ひ入れあつて、奥へ入る。兩人、跡見送つて

八橋　ほんにマア、あの松藏さんも男氣に、二人が事を。

次郎　サア、それも文藏が賴みやつたゆゑ。

八橋　それはさうと、申し、次郎さん、今の仕儀、お前はどこも痛みはせぬかえ。

次郎　イヤ〳〵、さうして痛みはせぬが、どうでも打ちをつたによつて、それでどうやら、この脊骨が。

八橋　オヽ、滅相な。

ト云ひ〳〵介抱して、撫つてやる。また淸搔になり、向うより小兵衞、着附け、羽織、町人の拵らへにて、

出て來て、本舞臺へ來て、これを見て居る。兩人は知らずに

次郎　コレ〳〵、八つ橋、もうよいわいの。

八橋　エヽ、默つて居なんしイなア。

ト矢張り深切に揉んだり撫つたりする。この時小兵衞ムツとして、八つ橋を引き分け

小兵　花魁、おれも撫つてもらはうか。

八橋　ヤア、お前は唐小さん。いつの間に。

小兵　今の間に。コレ……八つ橋。ありやアてまへの客人か。

八橋　エヽ。

小兵　これは綺麗な色男。きつう親しうしやるが、其方の客人かといふ事よ。

八橋　イヽエイナア、此お方は、アノ、何ぢやわいなア。オヽソレ、誰れぢややら、知らぬお人。

小兵　知らぬ人を、又なんで、撫でたり撫つたり。

八橋　サア、それは、今の、オヽ、さすりさんぢやによつて。

小兵　ムウ。して、わが身が撫でたり撫つたり、そりやどうやら方角が違つたやうな事ぢやの。ハヽヽハヽヽヽ。そんならてまへは、コレ、按摩取りか。

次郎　エ。

八橋　ア、コレ。

トこなしある。次郎左衞門、呑み込み

次郎　ハイ。……左樣ぢやさうにござります。

小兵　ムウ。按摩とあれば幸ひ、おれもいから肩が張つてある。爰で一つしてもらはうかい。

次郎　アノ、按摩を

ト八つ橋と顏見合せ、こなしあつて

どうなりとも致しませう。

小兵　そんなら、八つ橋も

ト八つ橋の手を取つて、二重舞臺へ上がり

サア、按摩。療治をしてもらはう。

次郎　左樣なら、お肩を揉みませうな。

ト二重舞臺へ上がり、後へ廻り、肩をよう揉めぬこなし。

小兵　ア、コレ〳〵。もつとこたへるやうに、きつうグツグツとやつてもらはう、

次郎　ハイ〳〵。斯うでござりまするか。

トこなしある。八つ橋もこなしあつて

八橋　申し、唐小さんえ。
小兵　ヤ。
八橋　お前はアノ、仲通りの道具屋さんぢやな。
小兵　道具屋ぢやが、何とした。
八橋　サア、わたしは茶が稽古したいによつて、アノ茶入れのやうな物が欲しいわいなア。
小兵　それで、おれをねだるのか。
八橋　イヽエ、さうぢやなけれど、ちつと急になア。
　ト次郎左衛門へこなしある。
小兵　商賣で取扱ふ茶道具、入用なら何なりと差上げようが、八つ橋、この小兵衛がねだつた事はどうだ。
　ト八ツ橋が手をチツと取つて
これまで度々通うても、今夜は障りがある、イヤ、精進ぢやの、心持ちが悪いのと、兎角おれに逢はぬやうにするも、とつくりと聞き合せたところが、佐野の次郎左衛門といふ間夫があるげな。此奴、侍ひの浪人で、殊の外貧窮と聞いたが、さうか。コレ、さうであらうがの。そんな者に心中立てゝは、身が詰まらぬぞや。ふツつりと思ひ切つて、この小兵衛に乗り替へぬか。おそらく吉原で、人も知つた唐物屋小兵衛、唐子と云や、大門も打たすといふ大盡ぢやが。
　ト此せりふのうち、次郎左衛門もムツとして、小兵衛が頭を毆る眞似をしたり、いろ〳〵とこなしある。
八橋　ほんに、お前のこれまでの深切、思ひ廻せば、わつちも、早うこの廓が出たいと思うて居れば、爲にならぬ人の事は、ふツつりと切れてしまうて、お前が世話をしてくれなさんすれば、どうとも。
　トこれを聞いて、次郎左衛門、ムツと腹を立てるを八つ橋
ちやつと、サア、此やうな利いた風な、
　ト小兵衛を教へ
サア、此やうな、イヤ、あのやうな侍ひの利いた風は、あやなしてなア……サ、切れてしまふ氣ぢやわいなア。
　ト次郎左衛門に呑みこます。次郎左衛門うなづく。
小兵　てまへがさう心が定まりさへすれば、おれが世話をする氣ぢや。なんと、道具屋のおかみさんになつてくれるか。どうぢや〳〵。
　ト八つ橋の手を取つて引寄せる。次郎左衛門、小兵衛の肩をつかまへ、後へ引きこかす。
こりや、どうする〳〵。

次郎　イヤ、あんまり肩癖が凝つてあるゆゑ、撫り下ろすのでござります。

小兵　エヽ、仰山な。もつと靜かにやつてもらはう。

次郎　ハイ〳〵。

ト揉みかける。

小兵　コレサ、八つ橋。云ひ交した奴を思ひ切れば、金輪際世話してやるが、いま云うたに違ひはないか。

八橋　アイ。通なお前に、馬鹿らしい。なんの嘘を云はうぞいなア。

小兵　エヽ、有り難い。

ト八つ橋に抱き附かうとする。次郎左衞門、頭をピッシヤリと叩く。小兵衞恂りして

アイタヽヽヽ、こりや、どうするのぢやぞいやい。

次郎　ハテ、お前は頭痛はしや致しませぬか。

小兵　エヽ、誰れが頭を叩けと云うたぞい。大事の髮を、コリヤ、らりにしをつた。

ト呟きながら、また撫らして居る所へ、向うより三婦隨分やつしの世話網仁にて、出て來て、

三婦　大分、町も賑やかなわい。何でも色の世界ぢや。時に、娘めは、どこに居るかしらぬ。

ト云ひ〳〵本舞臺へ來て、八つ橋を見て

オヽ、娘。爰に居たか

八橋　ヤア、父さん。いろ〳〵の所まで尋ね廻つて、よう來なんしたなア。

三婦　尋ねいでは。用がありやこそ尋ね廻つて來るのぢやわれが親方の角町へ行きや、仲の町を張つて居ると聞いた。それで、わざ〳〵尋ねて來た。コリヤ、ちよつと來い來い。

ト八つ橋、前へ連れて行つて

この中も云うておいた、金は調うたか。大方、出來たであらうな。サア、その金を、早うたも〳〵。

ト此うち小兵衞、莨のみながら、肩を揉ませて居る。次郎左衞門は三婦に顏を隱して揉んで居る。

八橋　お前が其やうに云ひなさんすによつて、どうぞ金を拵らへて置かうと思うても、どうも都合が惡さに

三婦　金が出來ぬか。

八橋　サア、又この間にどうぞして。

三婦　イヤ、娘。わりや金がある筈ぢやがな。

八橋　お前も氣の惡い。なんのわつちが。

三婦　イヤサ、ある〳〵。キッとある。

八橋 そりや、どうしてイなア。

三婦 なぜ切れてしまはぬ。

八橋 エヽ。

三婦 イヤサ、われは自體、死んだ婆が連れ子で、おれが爲には繼子、まだ越ケ谷に兄があるげな。こりや打ッちやつて、われが身の上、緣あつて、下野の國、舟橋のお家へ腰元奉公。屋敷勤めの其うちに、同家中の佐野次郎左衞門とやらと云ひ交して、剰へその男めは、屋敷をしくじり、勘當うけて、二人連れでこの江戶へ來て、身が詰まらぬゆゑ、どうぞ勤め奉公にやつてくれいと、この親への賴み。金を取つて、親判するワ、持つて來いと、この角町の萬字屋へ、突出しの勤め奉公。相應に繁昌して、花魁株になつて居るも、これ皆親の庇ぢやぞよ。それに、コレ〳〵、斯う着物を上下引ッ重ね、酒は飲み次第、旨い物は食ひ次第、男は抱いて寐次第になるも、これ皆親の庇ぢやぞよ。殊に、國から腐りついて居る、次郎左衞門めを思ひ切れば、身請けの大盡があるとやら。すりや、出世して、どんな榮耀もし次第。これ皆親の庇ぢやぞよ。その恩を思うて、なぜ身請けしられて、この親へ存分に、養ひ金はおこさぬぞ。

八橋 サア、其やうに云うてくれるお客人もあれど、さうしては、アノ……イヤ、アノ、オヽ、一生の片附き、相性の八卦を見てもらうたら、其方へ行くと、親も子も祟るとやら。ひよつと父さん、お前に祟るやうなことがあつては、どうもならぬによつて、それでわたしが

ト愚圖々々いふを打消して

三婦 吐かすな〳〵。たとへ祟らうが、死なうが、金になるほど結構な事があらうか。此方親子に祟る貧乏神といふは、云ひ交した佐野次郎左衞門が事ぢやわやい。

八橋 ア、コレ。そんな事を人中で、大きな聲で云ふものかいなア。

三婦 云うたら、なんぢや。オヽ、大きな聲で云ふのが、どうぢやい。イヤ、人の聽くやうに云ふのぢやわい。

八橋 そりやお前、あんまりな。

三婦 そんなら、おのれ、佐野めと切れるか。

八橋 サア、それはな。

三婦 切れにや、おれに、金寄越すか。

八橋 サア

三婦 切れるか。

八橋 サア

三婦　金寄越すか。
兩人　サア〳〵〳〵。
三婦　エヽ、面倒な、女郎め。
　ト踏まうとする。小兵衛、ツカ〳〵と行つて、三婦を留める。
小兵　コレ、親仁、てまへはこの八つ橋の親か。
三婦　大木場の三婦といふ、彼れが親ぢやが、何としました。して、こなさんは。
小兵　おりや八つ橋が客ぢや。
三婦　エヽ。……さては娘が身請けのお大盡か。これは、マア〳〵。イヤ、申し、お客様。この親が腹が立つが無理か、尤もか、聞かつしやれて下さりませ。云ひ交して居る次郎左衛門といふは、宿無しの天竺浪人。それにぞつこん惚れぬいて、離れくさらぬゆゑ、よいお客がござつても嫌ひ居るゆゑ、今では客なしの貧窮、親には金を寄越さず、借銭はし次第、親方は小言八百。それでわしが腹が立つまいものか。ぢやによつて、彼奴が土性骨を踏み直してやります。
　ト踏まうとする。
小兵　コレサ。それは聞えたが、今夜はおれが約束なればマア女房。なんぼ親の威光でも、滅多に自由にはなるまい。
三婦　成る程、尤もぢや。理窟ぢや。お前が彼れを女房ぢやとあれば、おれは舅。その舅に、初めての御挨拶が、こりや、有りさうな所ぢや。
小兵　それも承知。
　ト紙入れより小判一兩出し、三婦にやる。
　イヤ、初めて逢うた舅どの。これは些少ながら。
三婦　これは、マア〳〵、御きんたう。イヤ、モウ、畢竟、今のやうに叱るのも、實は彼れが不便さ。コリヤ〳〵娘よ。あなたを隨分大事にせいよ。必らず〳〵、次郎のならず者の事は思ひ切れよ。……ほんに結構なお客、イヤ、聟様ぢや。コレ、大事にしや〳〵。ヤレ〳〵、嬉しや〳〵、思ひがけない此お金を貰うて、歸りは直ぐに山鯨、獵りかもしか飲み明かし、顔は紅葉や牡丹汁、奢り次第に、してこいお客……おさらば。
　ト清掻になり、三婦、こなしあつて向うへ走り入る。
　小兵衛、こなしあつて、
小兵　なんと、八つ橋、見たか。金の威光といふものは、結構なものぢやないか。今、親仁が云うた、天竺浪人と

男　引ッ附いて居ては、一生笑ひ顔を見る事はなるまい。とつくりと合點して、おれが云ふ通りに承知したがよからう。

ト此うち向うより、男一人走り出で

男　モシ〳〵、あなたは中通りの道具屋、唐物屋小兵衛さまではござりませぬか。

小兵　アイ、小兵衛はおれぢやが、何ぢやの。

男　どなたやら、あなたにお目にかゝりたいと云うて、待つて居ります。

小兵　そりや、どこから。

男　伏見町の丸屋に。

小兵　ムウ。……成る程、大方、茶ゝれの、イヤ、茶屋の丸屋、知つて居る。八つ橋、おりやちよつと伏見町へ行くほどに、必らずともに、どこへも行かずと爰に。……コレ、按摩。てまへにちつとの間預ける。なんと、唐物屋小兵衛は、通な者であらうが。

男　サア、お出でなされませ。

小兵　エヽ、忙しない。ドレ、行つて來うか。

ト唄になり、小兵衛、男を連れて向うへ入る。あと合ひ方になり、次郎左衛門、八つ橋こなしあつて

次郎　八つ橋。

八橋　次郎さん。

次郎　今のやうに親仁が腹立ち、無理ではなし。

八橋　お前の手前も恥かしい。あのやうな無體な父さんゆゑ、ひよつと愛想が盡さうかと、思へば苦勞になるわいなア。

次郎　ナニガ、不自由な勘當の身の上。なんぼ其方が思うてたもつても、親甲斐といひ、金づくで、もし別れねばならぬやうにならうかと思へば、おりやそれが苦勞な。

八橋　氣遣ひして下さんすな。たとへどんな事があつてもわしや離りやせぬ。殊に、越ケ谷に居やしやんす實の兄さんにも、今の身の上は、文で知らしてやつたれば、おツつけ二人が思ふ通りに。モウ〳〵、なんにも案じずと幸ひ小兵衛が歸らぬうち、ちよつと。

ト囁く。

次郎　ハテ、とんだ事を。

八橋　イヽエイナア。ツイ、話す事があるわいなア。

次郎　大事ないか、

八橋　なんの。マア、來なんし。

ト手を取つて二重舞臺へ上がり、簾を下す。合ひ方。

向うより丹助、ウロ〳〵出て來て、そこらを尋ね廻り

丹助　慥か爰らの緣の下に、入れて置いたと云はれたが。

ト尋ね廻り、フト簾の側へ行つて、聞き耳して、恟り。

ヤア〳〵、何奴だ。

ト呟きながら、思ひ入れあつて

ありや慥かに八つ橋めぢやが、相手はてつきり次郎左衞門め。數右衞門さまの云ひ附けで、彼奴を爰で締めてやうと思うたに、おのれ。

ト此うち內にて

次郎　コレ、もう簾を上げようぢやないか。

トこれにて丹助、緣の下へ入る。見物の方へ尻を出して隱れて居る。簾上がる。

八橋　申し、では高崎さんは、紀文さんに違ひはないかえ。

次郎　ハテ、疑ひ深い。文藏が男氣を見込んで、高崎が賴み、おれが取持つてやらうと思へど、兎角文藏は、色にはあまり凝らぬ性と見えるわい。こりや皆も、よう知つて居るわいなう。

八橋　さうとは知らず、最前も、高崎さんに……面目ないどうせうなう。

---

トこなし。奧より高崎、お時、初梅、難波津、下女お種、かむろ、皆々來て

初梅　花魁、まだ爰にかいなア。

とき　高崎さんに附き合つて、揚屋町で暇取つたゆゑ、大方お前は內へと思うたが、唐小さんは見えたかえ。

八橋　アイ、今、伏見町へ行たわいなア。

ト此うち高崎、次郎左衞門を見て

高崎　そこに居なさんすは、次郎さんぢやないかいなア。申し、先刻も八つ橋さんが、わつちをな。

八橋　コレ、申し、高崎さん。もう云うてくれなんすな。今、次郎さんに樣子を聞いた。お前を疑つたわつちが誤り。これぢや〳〵。

ト拜む。

高崎　八つ橋さん。そんなら疑ひは晴れたかえ。

八橋　晴れた段か、今までよりは猶仲よう、ほんまの同胞分になつてくんなんし。

高崎　そりや、わつちが方から賴むのぢやわいなア。

八橋　アイ、同胞分の固めに、幸ひ爰で、起請を書いてあげやんせう。

ト硯箱を取つて來る。

高崎　イエ〳〵。同胞分の起證なら、わつちに先へ書かせなんし。

八橋　ハテ、わたしから先へ書いてあげるわいなア。

高崎　イエ〳〵、わたしが方から。

ト兩人せり合ふを

次郎　コレ、二人ともに起證を書くのを、何を其やうにせり合ふ事がある。

ト中へ入る拍子に、硯箱を打ち返す。

皆々　ソレ〳〵、溢れたわいなア。

禿　ほんに、爰らが墨だらけになつた。

ト裾をからげる。八つ橋、高崎、紙にて拭く。

初梅　次郎さんが邪魔しなさんすによつて、

難波　お前の手が、ソレ、墨だらけになつたわいなア。

とき　モシ、水を掛けてあげませう。これへ。

次郎　オイ〳〵。

ト縁端へ出て、手桶の側へ行つて手を洗ふ。お時、水を掛ける。黒い水、丹助の尻へかゝる。尻をヒコ〳〵させる。此うち八つ橋、高崎、起證を書きしまひ

高崎　エヽ、小刀か針が欲しいなア。

八橋　ほんに、なんぞ切れ物は無いかいなア。

次郎　おれが脇差がそこらにあらう。その小柄で

皆々　アイ〳〵。

トそこら尋ね廻り、懐劍を持つて來て

脇差は見えぬが、こんな物が。

次郎　こりや懐劍。マア〳〵、これで同胞分のしるしに

八橋　血を絞つてこの起證を

高崎　互ひに取替へるわいなア。

ト八つ橋、懐劍を取つて

八橋　わしから先へ。

ト指を切り、起證に血を附ける。

高崎　サア、わしも此やうに。

ト同じく指を切つて

オヽ、たんと血が出たわいなア。

皆々　高崎さん、痛うは無いかえ。

高崎　イエ〳〵。

次郎　ソレ。マア、手を洗うたがよい。

ト懐劍を方附ける。

高崎　アイ〳〵。

ト手桶の側へ行つて、手洗ふ。また丹助が尻へ赤い水がかゝる。以前の通り、尻をヒコ〳〵する。

八橋　これからは、高崎さん。
高崎　八つ橋さん。
二人　仲ようぢやえ。
次郎　マア〳〵、これで丸う納まつた。
高崎　八つ橋さん、唐小さんが歸らぬうち、次郎さんをちつとのうち、二階へ。
次郎　さうぢや。いつもの通りに、新造買ひになつて行かう。
ト云ひ〳〵二重舞臺より下りしなに、丹助が尻を踏まへる。
丹助　アイタ、、、、。
ト皆々悔りして
皆々　誰れおややら、緣の下に、居るさうなわいなア。
ト下を覗く。丹助、尻から段々出て、氣味わるさうに手拭にて尻を拭く。
ヤア、其方は半田稻荷、どうしてこの下に。
丹助　おきやアがれ、べら坊め。おれがこの下に隱れて、樣子を聞いて居るうちに、氣味の惡い、大事のお情所をよう三色に色分けしをつた。
ト呟き〳〵、矢張り尻を拭いて居る。皆々笑ふ。

これといふも、思へば彼奴から。
ト次郎左衞門を捕へにかゝる。高崎皆々、次郎左衞門八つ橋を圍ひ、子をとろ〳〵になる。
ヤア、こりや何ぢや。
ト鳥さしの合ひ方になり、仕組みよろしく
皆々　コレ、半田稻荷。
高崎　斯うすれば、お二人さんは
皆々　息災延命。
丹助　イヤ、おのれを。
皆々　疱瘡も輕い。痲疹も輕い。
ト合ひ方に合せ、逃げ廻る。丹助おはへ廻ろうち、八つ橋、次郎左衞門を連れ、暖簾口へ入る。後に皆々よろしくあつて、逃げて入る。向うより數右衞門走り出で、緣の下より最前入れて置いた大小を取出し、しやんと腰に差して
數右　唐物屋小兵衞を賴んだれば、茶入れの捌け口はあれでよいが、丹助に云ひ附けた。次郎左衞門めが邪魔になれば、いつそ。
ト尻引ッからげ、身拵へする。此うち奧より松藏、出かけ、見て居る。數右衞門、こなしあつて、奧へ行か

うとする。松藏、ツカ〳〵と出て、突き廻し

松藏　待つた。そちや最前の

數右　嘲りで無いぞ。コリヤ、見い。兩腰を挾めば、誠の侍ひ、身は武士だ。

松藏　その武士が、なんで此方の内を窺うて

數右　ヤ。

松藏　どうでも、次郎左衛門さまが邪魔になるか。

數右　なんと。

松藏　色男を拵ね侍ひ。いつも有る格でも久しい脚色。

數右　イヤ、ところを新らしう、最前の意趣といひ、佐野お肩持つうぬを。

トちよつとかゝるを、よろしく引き廻して

松藏　こりやちつと時代過ぎる。よしにさんせ。

數右　イヤサ、うぬを。

ト又かゝる。

松藏　なにを。

トこれより騒ぎにて、兩人、よろしくタテあつて、數右衛門を押へつけ

町人でこそあれ、綠屋の松藏。こんな事では、滅多にゆかぬ。

數右　ところを身共が。

ト又かゝる。奥より丹助出て、松藏にかゝる。三人、立廻りあつて、トヾ松藏、兩人を繩にグル〳〵巻きにする。兩人その形にて轉げる。

松藏　こいつは面白いわえ。

トよろしく。　ひやうし幕

造り物、平舞臺、見附け、奥への廊下、兩方奥深に女郎の座敷・間毎に障子はめ、よき所に大八方を吊し、平舞臺、橋がゝりの方に、二階の上がり口、切り穴にてぐるり高欄、下座敷の方、遣り手部屋。爰に遣り手お杉、火鉢に藥罐を掛け、煮花を拵らへて居る。側に彦八、升吉、最前の太鼓持ちにて、火鉢にあたり、話しをしてある。この見得、すべて吉原女郎屋二階の景色、二挺鼓にて幕明く。

ト廊下の奥より客の仕出し一人、かむろ久野、連れ立つて

久野　モシ、どこへ行きなんす。わつちが花魁に叱られます。

客　イヤ、どこへも行かぬ。手水ぢや〳〵。
久野　アレ、馬鹿らしい。手水なら此方へ來さつしやりませ。
ト奥へ連れて入る。遣り手部屋にて
すぎ　サア　煮花が出來た。彦八さん。升吉さん。
ト茶碗に汲んでやる。
升吉　こりや有り難い。お杉大明神。餘所の遣り手衆と違うて、どうでも大店の茶は格別ぢや。ナア、彦八。
彦八　さうとも〳〵。我れら醉醒めの所へ、この煮花。甘露々々。
すぎ　どうでもお前方は、酒が過ぎるであらうなう。
彦八　過ぎるから、悉皆奈良漬同然。
ト此うち手水に行つた客、久野附いて臆病口へ戻つて來て、此方の障子を明けようとする。久野、留めて
久野　コレ、滅相な。お前は奥ぢやわいなア。
客　ありやア花魁の座敷ぢやアないか。
久野　知りイせん。來さつしやりませ。
ト云ひ〳〵久野、客を連れて奥へ入る。此うち始終賑ぎ、二挺鼓、奥より又客一人、初梅、上着かひどりにて、一緒に出て來て

初梅　是非お前は歸りなんすかいなア。宵から待つて居るのに、どこへ行つて居た。
客　歸らいでおや。
初梅　花魁と一緒に仲の町へ。
客　仲の町も凄まじい、ドレ、歸らう〳〵。
ト行かうとするを捕へて
初梅　エヽ、じれつてえ。泊りなんしよ。
客　イヤ〳〵。もう引けを打つたれば、是非歸らねばならぬ。
初梅　お杉どん。引けはまだぢやの。
升吉　イエ〳〵、引けはもう疾に打つて、大方もう八つでもあらう。ナア、彦八。
客　アレ、あの通り、夜が更けたれば
初梅　エヽ、それでも、わつちやアまだ、云ふ事がありんすわな。
すぎ　初梅さん、客人はお歸りなんすかえ。マア、ようござりますわいなア。
客　イエ〳〵、歸らねば都合の惡い事がある。
初梅　そんなら、いつ來なんすえ。
客　都合して明後日の晩に來よう、

初梅　ほんにかえ。

客　違ひなしに、明後日〳〵々々。

彦八　アヽ、ありや神田の紺屋町のお客ぢやな。

初梅　必らず明後日の晩は仕舞つて居りんすぞえ。

客　どうとも〳〵。お杉どの、さらば。

ト云ひ〳〵、初梅もろとも切り穴へ下りる。

すぎ　あんまりお早うございますなア。

ト捨ぜりふある。

彦八　ドレ、おいらも座敷へ行かうか。サア、升吉。

升吉　萬事、よろしう〳〵。

彦八　また蛇か。久しいものぢや。

ト云ひ〳〵奥へ入る。

すぎ　子供や〳〵。これはしたり。又どこぞへ行つて寐て居るのか。喜助どん〳〵。これも聲がせぬ。今晩の不寐の番は誰れぢや知らぬ。

ト云ひ〳〵、これも切り穴へ、下りる。引違へて初梅切り穴より、パタ〳〵と上がつて來て

初起　辰さんは歸したが、これからは、ほんに難波津さんは、どこに居なさんすしらぬ。龍田、呼んでたも。龍田や〳〵。

ト升吉、遣り手部屋より、そろ〳〵出て

升吉　コレ、初梅さん。

ト抱きつく。

初梅　エヽ、誰れぢや〳〵。

升吉　おれぢや〳〵。色男の升吉ぢや。

初梅　エヽ、升吉さん。コレ、からかはつしやるなよ。

ト云ひ〳〵引退け、起きあがる。

升吉　ハテ、客人は歸つてしまふ。おれをお前の座敷に寢かしてもらはうと思うて。

初梅　否ぢやわいなア、馬鹿らしい。

升吉　そんなら、ツイちよつと。

トまた寄るを

初梅　エヽ、廊下鳶めが。

ト頭をピツシヤリ叩き、ツイと奥へ走り入る。

升吉　コレ〳〵、初梅さん〳〵。

ト追ひかけ入る。これよりしつぽりとした合ひ方になり、奥より八つ橋、小兵衛、連れ立つて出て

小兵　コレ、八つ橋、おれを爰へ呼び出して來たは、なんぞ用があるか。

八橋　アイ、小兵衛さん、いま座敷でちよいと噂しなんし

た。籠釣瓶の茶入れとやらを、いよ〳〵お前が、持つて居なんすかえ。

小兵　イヤ、持つては居ぬ。

八橋　エヽ。

小兵　サア、持つては居ねど、貰つてくれいと、さる人に頼まれて、世話すれば、マア、持つて居るも同然。

八橋　サア、その茶入れが急に欲しい。どうぞわつちにくんなんし。

ト急いたる體にて云ふ。

小兵　ヤア。

ト悄り。八つ橋、ちやつと思ひ入れあつて

八橋　イヽエイナア。ソレ、最前も云ひした通り、わつちやア茶が稽古したいによつて、ナ、サア、その籠釣瓶とやらの茶入れが欲しい。小兵衛さん、どうぞその茶入れを。

小兵　貰ひたさに、おれを爰へ呼び出して

八橋　折入つての頼み。

小兵　籠釣瓶の茶入れを

八橋　後生ぢや、どうぞ。

小兵　ムウ。望みなら、遣るまいものでもないが、八つ橋おれに抱かれて寢るか。

八橋　エヽ。……サア、それはな。

小兵　ハテ、茶入れの返禮。おれが頼みを聞いた上、其方の頼みも聞いてやる。

八橋　そんなら、抱かれて寢ずば

小兵　おれも否ぢや。

八橋　ハテ、そりや……どうともするわいなア。

トこなしある。

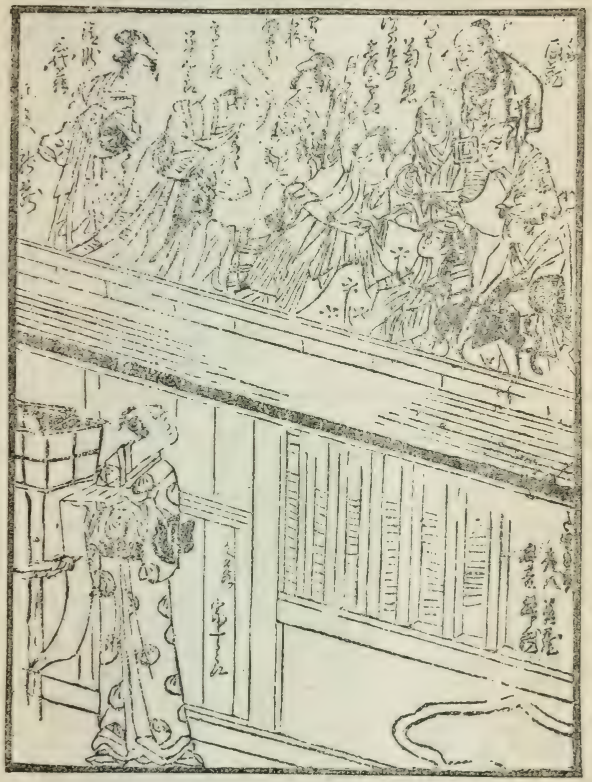
小兵　イヤ、恐ろしい。これまでおれがどのやうに口説いても、振り通した八つ橋、早速寢ようと早合點、呑み込まれぬ。佐野次郎左衛門といふ間夫があるてまへ、滅多にフワとは、乘られぬ〳〵。

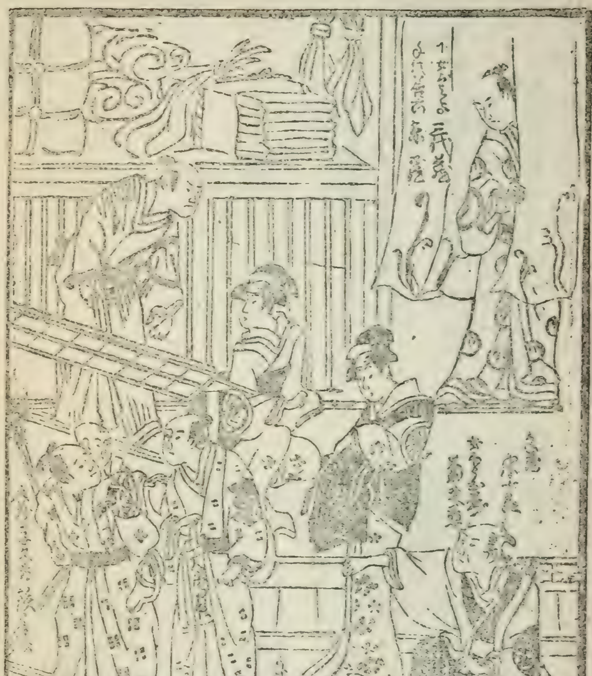
八橋　エヽ。

小兵　サア、そこを又、たとへ間夫があらうが、色があらうが、おれに承知して、ひつたりと靡いてくれる心なら、成る程、茶入れをほつかりと、遣るまいものでもないが、人に知られた唐物屋小兵衛、女郎にやられては男が立たぬ。

八橋　そんなら、云ひ交して居る、次郎左衛門さんと

小兵　おれが見る前で、さつぱりと切れてしまへば、望み





の茶入れにやらう。

八橋　ムウ。……成る程、切れませう。

小兵　確かな證據を見た上で

八橋　籠釣瓶の茶入れを

小兵　てきへにスッパリ。

八橋　必らずともに

小兵　今宵のうちに

八橋　わたしが心底。

小兵　八つ橋。

八橋　小兵衛さん。

小兵　コレ、……待つて居るぞや。

ト五大力のめりやすになり、小兵衛、こなしあつて奥へ入る。後に八つ橋殘り、いろ〳〵と思ひ入れあつて、めりやす坂田仙十郎。

八橋　アレ、あの唄は一昨年流行つた、五大力のめりやす。とつくりと話しを聞いたが、堺町の春狂言、藝者の小萬を薩摩源五兵衛が、五人斬りとやらで、むごう殺したげな。その小萬は矢ツ張り源五兵衛が爲に。……これを思へば、ひよつと次郎さんが……

トいろ〳〵思ひ入れあつて

さうぢや。

ト硯を取つて來て、これより文を書く。唄の切れに、菊之丞の聲色にて

「コレ、申し、源五兵衛さん、わたしやお前が……つた。アイ、思ひ切つて三五兵衛さんの心に隨ひますほどに、さう思うて、下さんせいな。」

奥にて大勢、

「ヨウ〳〵、濱村屋ア。」

ト又、唄になり、八つ橋、思ひ入れあつて、狀を書きしまひ、封をして上書をするうち、また奥にて、宗十郎が聲色にて

「何をいうても廓の女に戀なし、寶を以て戀をする。小萬。この源五兵衛は、もう歸るぞよ。コリヤ〳〵。」

奥にて多勢、

「紀伊國屋ア、有り難い〳〵。」

と、八つ橋、これを聞いて

八橋　アレ、あのやうに、次郎さんがわたしを

ト泣かうとして、思ひ入れあつて

イヤ〳〵、たとへ突かれやうが、これまで二人を世話して下さんす、紀伊國屋文藏さんに、この文を。……これ

でわたしの心が……ア、、誰れぞに持たせてやりたい。
ト こなし。奥より彦八出て來る。

彦八 オッとよし。承知々々。我れら一走り行てくるぢや。

八橋 モシ〳〵、彦八さん。お前、もう、歸らしやんすかえ。

彦八 イエ〳〵、水道尻まで、用があつて參ります。

八橋 そりや幸ひ、わつちが頼む所へ、ちよつと寄つてくれなんせんか。

彦八 エ、、そりや仲の町の緑屋へかえ。

八橋 アイ、孫さんにキッとさう云うて、急な事ぢや程にこの文を、紀文さんにしつかりと屆けてと、渡しておくんなんし。

彦八 よし〳〵。よい次手でぢや。慥かに緑屋へ渡しませう。

八橋 大事の文ぢや。必らずともに。

彦八 ハテ、合點でござります。
ト 狀を受取り、切り穴へ入る。八つ橋、いろ〳〵あるうち次郎左衛門、今まで寢て居たといふこなしにて出て來る。

次郎 コレ、八つ橋。もう遣り手婆アは寢たか。

八橋 ヤア、次郎さん。コレ。……籠釣瓶 茶入れはナ。

次郎 なんぢや。茶入れは、知れたか〳〵。

八橋 氣遣ひしなさんすな。その茶入れは、慥かにナ。

次郎 コレ、どこにある。

八橋 サ、思ひがけない
ト 此うち小兵衛出て來て、八つ橋と顏見合せる。八つ橋、思ひ入れあつて
エ、、次郎さん。
ト 次郎左衛門をむごく突き放す。次郎左衛門、恟りして、

次郎 コレ、八つ橋、何をするのぢや。

八橋 サア、それは。

次郎 コレ、いま云やつた茶入れの事は、どうぢやいの。

八橋 その茶入れは……茶入れで……もうお前は否になつた。わしや忘れてしまふぞえ。
ト 思ひ入れ。次郎左衛門、こなしあつて

次郎 な、な、何を云ふのぢや。

八橋 サア、ふッつりとお前の事を、思ひ切つたほどに、さう思うて……くんなんし。

ト次郎左衛門、ムツとして

次郎　すりや、どうして。

ト胸ぐら取つて、ヂツと思ひ入れあつて

エヽ、聞えた。俄にさう云ふのは、矢ツ張り高崎の事をおれぢやと疑うてか。コレ、最前も云ふ通り、あれは紀文に惚れて居る。それにマア、エヽ、愚痴な八ツ橋。嫉妬どころか、コレサ、おぬしの事は、おりやモウ身に代へ、知行に代へ、思うて居る。その證據は、今の勘當の身の上、恩に着せるではなけれど、佐野次郎左衛門とて舟橋の家中では、家柄といひ、親の庇で、式日の登城に上座した身の上、こりや其方もよう知つて居やうがの。

八橋　サア、その以前のお身にお前をしたいゆゑ。

ト小兵衛へ心遣ひして

わたしが……イエ、わたしが否になつたほどに、切れて下さんせ。

ト思ひ入れ。

次郎　ムウ。八つ橋、そりやじやれではないな。

八衛　アイ、眞實、奥のお客が大事。

トつい、と立つて行かうとする。小兵衛、奥へ入る。次郎左衛門、八つ橋の裾を捕へ。

次郎　すりや、おれを突き出すのか。

八橋　コレ、云ひたい事は、この胸に。……サア、山川の先に流るゝとちがらも、身を捨てゝこそ浮かむ瀬もあれ。

次郎　以前の事は打忘れ、わりや女郎になつたか。

八橋　アイ。勤めの習ひ。

ト振り切り、思ひ入れあつて、ツイと奥へ入る。次郎左衛門、キツと坐り、兩手を膝に置き、奥を睨みつけ腕まくりして、ホロ〳〵泣く思ひ入れ。ところへ、切り穴より若い者、拍子木打つて上がる。これにて心附き、立ち上がり、ちやつと小蔭へ隱れる。若い者、拍子木打ち〳〵奥へ行つて又戻り、矢張り打ち〳〵切り穴へ下りる。次郎左衛門、小蔭を出て、キツと思ひ入れあつて、奥へ行かうとする所へ、高崎、紙を持つて手水に下へ行く心にて、出て

高崎　次郎さん。まだそこにかえ。

次郎　ヤア、高崎どの。

トちやつとこなしあつて

コレ、定めて八つ橋と一座であらう。奥の客といふのは矢ツ張り最前の小兵衛か。

高崎　アイ、さうサ。モシエ、どういふ事か、八つ橋さん

と小兵衞さんが、何やら小蔭でしつぽりと、話して居るぞえ。
次郎　ムウ。そんならいよ〳〵。
高崎　日頃に似合はぬ八つ橋さん、今宵俄に小兵衞さんを客にしなんすは、よもやと思へど、わつちはどうも合點がゆかぬ。
次郎　こりやモウいつそ。
ト きつとなり、思ひ入れ。
高崎　コレ、次郎さん。必らず急かずと、マア、とつくりと樣子を見屆けた上、お二人を世話しなさんす紀文さんわつちも待つて居る、大方見えるであらうほどに、それまでは蟲を殺して、何事も。
次郎　イカサマ、これまでの志し、文藏が手前を思へば……ムウ。
高崎　もう來て居なんすか。綠屋へちよつと見せにやらうほどに、次郎さん、待つて居なんし。
ト 高崎、こなしあつて、切り穴へ入る。此うち始終合ひ方、次郎左衞門、思ひ入れ。奧より久野出て來て、切り穴の側へ行つて上より
久野　喜助どん〳〵。早く八つ橋さんの座敷を片附けて下され。喜助どん〳〵。
ト 云ひ捨てゝ又奧へ入る。次郎左衞門、始終思ひ入れあつて胸を撫り、フト最前の懷劍を見て、
次郎　思ひがけない。こりや最前綠屋で起證の時、初梅が取つて來た懷劍。思はずおれが懷へ入れて置いたが、丁度幸ひ、八つ橋を
ト これより好みの合ひ方になり、次郎左衞門、こなしあつて、奧へ窺ひ行くところへ、女郎一人出る。次郎左衞門は八つ橋と思ひ、捕へる。女郎悔りする。次郎左衞門、苦笑ひして、突き放し
コレ、八つ橋は。
女郎　いま座敷に。
次郎　さうぢや。
ト 血相して、奧へツイと走り入る。これより潮來騷ぎになり、小兵衞、生醉ひにて、升吉、初梅、かむろ連れて出る。切り穴より高崎、上がつて來て
高崎　こりや小兵衞さん。きつい御機嫌ぢやな。
小兵　これが嬉しうなうて堪るものか。おツつけ日頃の思ひも晴れ、益體もない。どうぢや〳〵。
ト 宗十郎の聲色。

升吉　誠に訥子と見えます。
小兵　その筈ぢや。今での色男ぢやもの。
皆々　小兵衛さん、評判がよいぞえ。
　ト奥よりバタ／＼にて、油つぎの男走り出て
男　モシ／＼、いま奥の小座敷で、八つ橋さんと若い客人とが、ひどうせり合うてござりますぞえ。
　ト云ひ／＼、油注しを持つて、切り穴へ下りる。
高崎　そりや大方次郎さんが
　トはッとこなしある。
皆々　こりや只事ぢやあるまいぞえ。
小兵　その筈。我れら少し當りがあるぢや。
　ト無性に喜ぶ。切り穴よりお杉上がつて來る。
すぎ　いま聞いたが、八つ橋さんと若い客人とが、せり合うて居るとは、小兵衛さんは爰にござるのに、合點がゆかぬ。
　ト行かうとするを高崎、留めて
高崎　コレ、お杉どん、それには及ばぬ。
すぎ　イヤ、こんな事を吟味するが、遣り手の役ぢやわいなア。
高崎　イヤ、それでも
すぎ　退きなんせ。
　ト行かうとする。高崎、留めるを、振り切り／＼、お杉、奥へ駈けて入る。小兵衛、こなしあつて
小兵　サア／＼、八つ橋が座敷は片附いたか。寢にやならぬぞ。オヽ、ぐつと寢ようと、待ちかねて居るわい。
升吉　ハテ、通に似合はぬ、床急ぎぢやなア。
　ト又バタ／＼にて、奥より客二三人逃げて出る。引き續いてお杉、あわてゝ走り出て
すぎ　コレ／＼。いま奥で次郎左衛門とやらが、八つ橋さんを懷劍で、突いたわいなア／＼。
皆々　ヤア／＼。
　ト大愕り。
小兵　こりや斯うしては居られぬ。
　ト奥へ駈けて入る。これよりバタ／＼。
皆々　どうせうぞいなア／＼。
高崎　マア、次郎さんの身の上を。
　ト奥へ走り入る。これより騷動の體。お杉、うろたへて、切り穴へ、下りようとしたり、奥へ行かうとしたり、いろ／＼思ひ入れあれて、奥へ走り入る。始終、バタ／＼にて、奥より次郎左衛門、懷劍逆手に持ち、

手負ひの八つ橋を追つて出て、兩人、立廻りある所へ、小兵衞出る。次郎左衞門、小兵衞へ突いてかゝる。小兵衞摺りぬけ、逃げ廻る。次郎左衞門、追ひ廻して、トヾ奥へ追つて入る。始終バタ〳〵。八つ橋、いろいろ苦しみ、次郎左衞門を尋ねるところへ、小兵衞引返して來て、八つ橋を介抱して

小兵　コレ〳〵、八つ橋、心底見えた。おれが女房にするぞ。創は淺い。氣を慥かに持つてたも〳〵。

トいたはり、さま〴〵こなし。八つ橋、苦しみながら

八橋　小兵衞さん。早う茶入れを〳〵。

小兵　エヽ、この場で茶入れどころかいやい。

トうろたへる所へ、次郎左衞門、皆々を追つて出て、また立廻り、此うち八つ橋、苦しみ、こける。小兵衞次郎左衞門立廻りよろしく、小兵衞を取つて投げ、懷劍を振り上げる。小兵衞恐れ、屏風を隔てゝ兩人よろしく立廻りのうち、キツカケにて、この道具ぶん廻す。

造り物、萬字屋表のかゝり、大格子、門口潜り戸締め、よき所に用水桶。たそや行燈に火をともし、すべて角町角の景色。格子の中にて物騷がしく。

ト道具とまると、向うより文藏、最前の八つ橋の狀を持つて駈けて出て、門口へ寄り、無性に戸を叩き。

文藏　傳馬町の紀伊國屋文藏でござる。八つ橋どのに急に逢ひたい。爰明けてもらはう〳〵。

トいろ〳〵叩いても答へず。中の樣子バタ〳〵に、文藏、心を附け、耳を寄せ

ヤア〳〵。内は殊の外騷動の樣子。そんなら、もう

トこなしあつて狀を擴け、たそや行燈の側へ行つて

「わざ〳〵書き殘しまゐらせ、これまで云ひ交せし次郎左衞門さまの今のお身の上、なんぼう悲しく存じまゐらせ候ところに、今日お國の阿母樣よりのお便りに、紛失の籠釣瓶の茶入れ、詮議仕出し差上げなば、歸參も叶ひ、勘當も免すとのお文を承り、嬉しく存じまゐらせ、右茶入れの行くへ知れず、兎や角案じ候ふところ、今宵思はず私し客人、唐物屋小兵衞といふ道具屋、所持いたし候ふ由、とくと承り候ふゆゑ、段々頼み候へば、心に隨ひ候ふやう口說き候ふを幸ひに、色で仕掛けて右の茶入れ、取りたき心にて御座候ふも、後で物の間違ひにて、次郎左衞門さまのお心に障り、もし又わたくし身の上になり候はゞ、死んだ跡にて、そもじ樣より、とくと心底御申し下され

茶入れは小兵衛が持つて居るに違ひなく」……サア〳〵、これぢやによつて

　トまた戸口へ來て

ちよつと、明けてもらはう〳〵。紀伊國屋文藏ぢや。紀文ぢや〳〵。コリヤ〳〵。

　ト戸を叩きても、初めの通り物騒がしきゆゑ、うろうろして、又行燈の側へ行つて、狀を見て

「色で仕掛けて右の茶入れを取りたき心にて」……エヽ、內の騒動が、どうやら心元ない。

　トまた行つて戸を叩き、明けぬゆゑ、また立戻つては狀を見て

「もし私し身の上になり候はゞ、死んだ跡にて、そもじ樣」……コレ〳〵、この樣子、ちよつとなりと旦那次郎左衛門さまに

　ト戸口へ行つて戸を叩き、元の所へ來ては狀を讀み

「紀伊國屋文藏さままゐる、八つ橋より。」

　ト始終こなしあつて、また戸口へ來て、手ひどう戸を叩き

傳馬町の紀伊國屋文藏ぢや、なんでも爰明けて

　ト無性に叩く。中より大きな聲にて

男　イヤ〳〵、誰れでも明ける事はならぬ。佐野次郎左衛門といふ浪人者が、花魁の八つ橋を殺して、內は亂騒ぎぢや。大取込みぢや。

　トこれを聞いて

文藏　ヤア〳〵。すりやモウ……チエヽ。

　トいろ〳〵あつて、また狀を見て

ホイ。

　トべつたりと下に居る。よろしく　　ひやうし、幕

## 大切

紀伊國屋の段
兩國三河屋の段
柳原の段

役名――文藏女房、お賤。紀伊國屋下女、お芳。文藏一子、文吉。手代、吉兵衛。醫者、畑道益。手代、善六。丁稚、與茂太。伯父、善右衛門。八つ橋兄、伊平次。大木場の三婦。澤井數右衛門。唐物屋小兵衛。紀伊國屋文藏。

造り物、三間の間、二重舞臺、見附け、垂れ戸棚、小袖簞笥直し、正面に納戸口。橋がゝりの方、綿見世。よき所に紙屑籠掛け、長押に傘一本吊し、下座の方、板塀、切り拔く仕掛け、いつもの所に門口。すべて傳馬町綿屋の體。幕の内より右二重舞臺上の方に善右衛門、紙子羽織、頑丈なる親仁にて、眼鏡を掛け、算盤置いて居る。眞中にお賤、世話女房にて帳面扣へ、讀んで居る。下の方に善六、手代にて、これも算盤持つて、善右衛門と合ひ算をなして居る。通り平舞臺に仕事師二人、綿の荷を拵らへて居る。神樂にて幕明く。

しづ　三百六十匁……五百三十匁。

善右　三百六十匁。……五百三十匁。

ト算盤に置く。お賤段々讀むうち

仕一　どうでも春の日は長い。晝からかゝつて、綿荷は大方拵らへてしまつた。

仕二　その筈ぢや。煙草ものまずに、精を出したもの。

仕一　そして、この荷を、どこへ送るのでござりますな。

しづ　アイ、二丸とも、芝の日蔭町の、古着屋へ廻して下さんせ。

仕二　ハイ〳〵、畏まりましたが、モシ、旦那はどこにござります。

しづ　旦那は、今朝上方の船が着いたと知らせたゆゑ、鐵砲洲へ入れ札に行かしやんしたわいなア。

仕二　イエ〳〵、旦那は慥か昨夜から吉原へ行つて、まだ歸らずでござりませう。

しづ　ア、コレ。何をお前が

ト善右衛門へ氣兼ねして

ちやつとその荷を、芝へ遣つて下さんせ。

善右　文藏が留守に見世の勘定、とつくりとし拔かにやならぬ。お賤、その帳面此方へ。

ト引ッたくる。

しづ　申し、それは。

善右　ハテ、動きは取れぬ。……サア、善六、間違はぬやうに置けよ。

仕事　ドリヤ、芝へ持つて行かうか。

ト綿荷をかたげ、向うへ入る。此うち善右衛門、帳面を繰り

善右　二百二十匁。

善六　二百二十匁。

善右　六百八十匁。

善六　六百八十匁。

ト段々讀む、善六算盤に置くうち、お賤、いろ〳〵心遣ひの思ひ入れ。

善右　どうぢや、善六。入りと出が合うたか。

善六　イヤ、どう置いても、先の算用とは勘定が合ひませぬ。

善右　その筈ぢや、文藏が吉原通ひ、內は投げやり、店は益體。二進が三進、商賣の桁外れ。お賤といふあの美しい女房といひ、文吉といふ子を持ちながら、聞きや、吉原の萬字屋の女郎に馴染を拵らへて、片時內には居ず。今日この頃は女郎を、身請けの相談とやら。それを知つて今日來たは、何もかも、この家のせい〳〵くせう爲ぢや。

しづ　なんのいなア、伯父御さん。主に限つて、女郎を請け出すのなんぞとは、ほんの人の噂。現在連れ添ふわたしが證據。そんな事には、微塵も無い事でござんす。

善六　イヤ〳〵、お賤さん。滅多にさう就成しなさんな。この善六は文藏どのゝ伯父、善右衞門の息子なれど、上方をしくじつて歸つて、今ではこの家の、居候ふやら、手代やら、常の奉公人とは違ふ。殊に、同じ內に居るもの、文藏どのゝ身持ち、吉原通ひに夜泊り日泊り、何もかもよう知つて居るぞ。

しづ　サア、それはな。

善右　コリヤ、死んだ文藏が父親は、おれが兄貴。その佛の遺言で、この家のかゝかんぼう。別家に居て、養はるゝが、よさに、現在おれが悴の善六はあのざま。又、甥の文藏は、吉原のお大盡、紀文さん〳〵と、持て囃さるゝげな。結構な事ぢや。お賤、なぜ、おれが常から云ふ通りに、得心して

しづ　エ。そりや何をえ。

善右　ハテ……ぢや、なぜ悋氣せぬぞ。

ト心意氣あるべし。

善六　悋氣せぬ女房は馬鹿者。吉原の女郎に、見代へられて居るお賤さん。お前を世間では、女の二本棒ぢやと笑うて居るぞえ。

しづ　アイ、笑はれやうが、謗られやうが、わしや文吉といふ子供のある仲、見代へられても大事ござんせぬ。ほんに、文吉を最前から、與茂太が遊ばせに連れて行つたが、疱瘡あげく、風を引かせては悪いに、早う連れて歸

つてはくれぬ事か。
ト表の方を見る。善右衛門、善六へこなし。
善右　アレ、見い、善六、何を云うても、かいしよの無い
善六　どうでも二本棒ぢや。ハ、、、、、、。
ト また通り神樂になり、向うより與茂太、下人の馬鹿にて、馬具に乘り、出て來る。
與茂　お馬が通る。ハイ／＼／＼。先退け／＼。……たうとう内ぢや。
ト入る。
しづ　オヽ、與茂太か。……コリヤ、待ちかねて居たわいやい。
與茂　おれも飯を待ちかねて歸つて來た。
ト善右衛門を見、
南無三。また毛蟲の親仁が來て居るな。
善右　この馬鹿めが、
ト睨む。
與茂　何を親仁め。
ト睨み返す。お賤、こなしあつて
しづ　コリヤ／＼、與茂太、坊はどこに居やるぞ。文吉をなぜ連れて歸らなんだ。

與茂　ほんになア。文吉さんをどこぞで落してのけた。アア、誰れぞ拾つたかしらぬて。
しづ　エヽ、憎てらしい。おのれマア、大事の子を、怪我でもさしたら、きく事ぢやないぞ。
與茂　ハヽア。おかみさん、馬鹿らしい事を云はんす。女子の身ではあるまいし、怪我さすとは、コレ、文吉さんは男の子、滅多に怪我さす事はないに。オヽをかし。
しづ　ほんにマア、呆れて物が云はれぬ。おのれ、どうせう知らぬ。
ト叱るうち、向うよりお芳、下女にて、疱瘡子の拵への、文吉を脊負ひ、酒樽を片手に持つて出て來る。
よし　モシ／＼、おかみさん。道に文吉さんが、たつた一人、遊んでござつたを、酒屋へ行た次手に、連れて參りました。
ト下ろす。文吉、お賤に取附き
文吉　コレ、母様、與茂太が坊を抛つて置いたによつて、お芳と連れ立つて戻つたわいなう。
しづ　オヽ、よう戻りやつた／＼。兎角憎いはあの馬鹿めやう／＼一昨日、笹湯をかけたものを、ようマア抛つて置いたなア。

よし　與茂太どん、大事の坊さん、ろくに守をしたがよいエヽ、まづい人ではある。

與茂　ハテ、まづくなけりや、落しては來ぬわい。ならば、また落して見たがよい。

しづ　あの口わいなう。お芳、ちつと性根の入るやうに、叩いて置きやいのう。

ふし　ヤイ〱。ちつと性根の入るやうに、くらはすぞや。

與茂　オツト、待つたり、今、人形町で、どら燒を二つ食はせた。おれも五つ食うたによつて、腹は丈夫な。

よし　ホヽヽヽ。あれ御覽じませ、おかみさん。

しづ　ほんに、あんまり、をかしいわいの。

善六　コレサ、親仁どの。鐵砲洲へ行つたとある文藏どのこりや歸りがきつう暇がいる。

善右　ハテ、また吉原へ行つて居るのであらう。

しづ　イエ〱、こちの人はおツつけ

善六　コレ〱。居續けぢやもの、滅多に歸られまい。

善右　なんでも文藏に逢はにやならぬぞ。

ト合ひ方になり、向うより文藏。道益、外科醫の形にて、連れだつて出て、花道にて

道益　コレ〱、文藏、昨夜から萬字屋の内へ行つたが、ありやどうも心元ない。

文藏　エヽ。

トこなしあつて、下に居て

モシ、道益さま、彼方にも醫者はあれど、此方にもお前をお頼み申した手負の容體。疵口は、どのやうにござりますな。

道益　サア、疵は四ヶ所。ナニガ、滅多突きに突いたものゆゑ、中に急所もあれば、かすり疵もある。殊に、何をいうても女子ゆゑ、燒酎で洗ふのも、耐へかねて目を廻したり、癪が差込んだり、段々の弱り。それで獨參湯づくめ。あの物入りを皆こなたがするとは、アヽ、大層な事ぢやぞや。

文藏　それも私しが大切なお主、次郎左衞門さまを助けたいばかり、八つ橋どのが死ぬれば、此方は理詰めで下手人。もしさうなつては、この文藏も、どうも生きては居られませぬ。

道益　いかに若いといひながら、ひよんな事を仕出だした。あの手負ひは十が九まで、マア助からぬ容體。この上は一時も早う、身請けの相談するやうにせにや、相手の次郎左衞門は助かるまい。

文藏　サア、その相談も急に揉み立て、又、八つ橋が親元へも、手を入れて金づくで。

道益　それが肝心。明日の間も知れぬ手負ひの八つ橋。如才はあるまいが、必らず油斷せぬやうに。

文藏　とつくりと心得て居りますが、何をいふにも大枚の金づく。殊に、茶入れの方も……マア、道益さまには段段の御苦勞、この上ながら

道益　又、晩に見舞ひに行きます。

文藏　兎角よろしう。

道益　愚老に如才は無けれども……ア、氣の毒なものぢや。

トこなしあつて、道益、引返して揚幕へ入る。文藏、跡見送り、溜息つき

文藏　八つ橋どのゝ噂聞く度々にビク／＼と、おれが胸へ八寸釘、どうぞして若旦那次郎左衞門さまを……ア、。

ト思ひ入れあつて、しつぽりと立つて居る。本舞臺、門口より、與茂太、覗いて見て

與茂　アレ／＼、旦那さんが戻つてぢや。旦那さん／＼。コレ、内に毛蟲の伯父さんが來て居るわいなう。

トこれにて文藏、こなしあつて、本舞臺へ、ツカ／＼と來て

文藏　女房ども。いま歸つた。

ト内へ入る。

しづ　オヽ、こちの人、よう戻つて下さんしたなア。

ト喜ぶこなし。

文吉　父樣、歸らしやつたかいなう。

ト取りつく。

文藏　オヽ、文吉。疱瘡から、大分おとなしくなつたわいやい。

ト頭を撫でる。お賤、こなしあつて

しづ　モシ、伯父樣。ハイ、主は歸られましてござります。イヤ、善六さん、こりや居續けでもなかつたさうなわいなア。

善六　ハテ、旦那、よう歸らつしやりました。

文藏　オヽ、善六。上方の船も、きつう値が張つて引合はぬ。おツつけ甲州が出て來れば、それでマア見合せて歸つた。

ト善右衞門を見て

これは伯父者人。ようござりましたな。

善右　文藏。わりや大分精が出るな。

文藏　イヤ、鐵砲洲の下り荷、厭からうと思ひの外、無駄

足を引きました。

善右　コリヤ、文藏。おれが精が出るといふは、綿の買出しではない。朝も、晩も、吉原へ通ひつめ、内はほうかい、揚句の果に、女郎を請け出す相談まで、この伯父の善右衛門は、よう知つて居るわい。

文藏　イヤ〳〵、モシ、伯父者人。そりや何仰しやる。尤も、友達に誘はれて、一二度の附合ひで、吉原へ行た事もあれど、毎日、毎晩、なんの私しが。よう思うても御覧じませ。斯ういふ可愛いゝ文吉といふ子はあり、女房はあり、それに女郎を請け出すとは、ハヽヽヽヽ、益體もない。そんな事があつてよいものでござりませうか。ナウ、お賤。

しづ　アイ〳〵。さうでござんすとも。最前も云ふ通り、現在女房のわたしが證據、伯父御さん、どう仰しやつても、主に限つてナ。

善右　アヽ、吐かすな。アタ舌たるい。いかに男ぢやというて、文藏が面見ると、びろ〳〵と側へひツつき廻つてアタ見苦しい。

ト立ち上がり、お賤を無理に引分け、睨む。お賤、思ひ入れ、ピンとする。善右衛門、文藏へ摺り寄つて

コリヤ、文藏。色狂ひ、馬鹿遣ひせぬものが、見世の勘定は蜂の巣同然、穴だらけ。最前算用し立てゝ見たが、五兩や十兩の喰ひこみぢやない。大枚の金の行き端。大方吉原で遣ひなくしたものであらう。殊に、甲州の問屋の、眞綿の仕切り金も、なぜ渡さぬ。

文藏　イヤ、その仕切りは、

善右　聞きや、これまで、見世から問屋へ持つて行くと云うて、ちよこ〳〵金を持つて出たげな。それを、どうして仕切りの金を、問屋から、毎日々々、内へ催促に來るぞ。

文藏　サア、それは。

善六　旦那、文藏さま。誰れが持つて行て云ふやら、樣々な事が親仁どのゝ耳へ入つて、アヽ、笑止千萬な。

トこなし。

文藏　ハテ、これまで段々仕切り金は渡しておいて、算用殘りが三十兩ほど。それを問屋が仰山に、催促に來るものでござりませう。

善右　なんの、三十兩、僅かな事。たとへ一兩でも、われが親の代から、不參の無い問屋、なぜ催促しられる。綿屋仲間の名折れ。文藏、おれが見る前で三十兩、キリキ

りと、問屋へ持たせてやれ。
文藏　エヽ、その金は
善右　内には素鐚一文、ありやせまいな。
文藏　エヽ、
ト仰天する。お賤、ちやつと
しづ　コレ〱、こちの人。お前、問屋へ渡す三十兩の金を、ソレ、わたしに預けて置かしやんしたぢやないかいなア。
文藏　ヤア。
ト思ひ入れ。
しづ　ハテ、コレ、仕切りの金を、甲州の、問屋へ渡せと云うて。エヽ、ソレ、物覺えの惡い。ソレ、合點がゆかぬかいなア。
文藏　でも、つひに其方に。
しづ　アレ、又、金を渡しておいて、其やうに、コレナア。
トいろ〱、呑み込ます思ひ入れしても、文藏、合點のゆかぬこなし。
これはしたり。大事の金の事を其やうに、……ようござんす、わたしが取つて來ます。
ト云ふ〱、掛け硯の引出しから、三十兩の金を出して
コレ、見やしやんせ、三十兩。この金は、問屋へ仕切りにやれと、渡して置かしやんしたぢやないかいなア。
文藏　ムウ。そんなら、この金を其方が
しづ　問屋から催促に來てもなア……とんと忘れて居ました。子持ちといふものは、事多いによつてホヽヽヽ。堪忍して下さんせえ。
トこなし、文藏、思ひ入れあつて
文藏　成る程この金
ト取上げて、お賤を見て、心意氣あり。
問屋へ渡す事をば、ハテ、粗忽な女房ども、
ト禮を云ふ氣味合ひ。
善右　その金がありやまだしも。文藏、まだわれにや尋ねる事がある。これから奥で、一せいいらく。
文藏　イヤモウ、何なりとも。
しづ　ほんに、伯父御にあげようと、取りにやつたその酒。お芳、奥で、こちの人と一緒に。
善右　また嫌らしい、こちの人とは。
しづ　ハテ、女夫ぢやもの。
善右　エヽ、いま〱しい。いつそ酒なと飲んでこまさう。早う拵らへ居らう。

よし　アイ〳〵。コレ、與茂太どん、晝中に馬鹿らしい、エヽ、與茂太どん。

ト與茂太、最前より居眠つて居て、この時、目を覺まし、

與茂　オツトショ。

ト立ち上がり

今トロ〳〵とまどろむうち、あの伯父の善右衞門が、頓死した夢を見た。

善六　また馬鹿つくすか。キリ〳〵奥へ行て、酒の拵らへしをらう。

與茂　ハテ、居候ふめが、澤山さうに吐かすワ。

善六　そんな

ト打たうとするを

與茂　そんなぢやいわい。

ト奥へツイと走り入る。

しづ　サア、こちの人。文吉も奥へおぢや。

ト手を引く。

文吉　母樣。わしもあかゝが飲みたいわいなう。

しづ　アレ、見やしやんせ。疱瘡から酒を好いて。

文藏　矢ツ張り神の好くのぢや。大事あるまい。イヤ、女房ども、この金はおれが持つて居ても

しづ　ハテ、さうぢやわいなア。

善右　サア、文藏、奥へ。

文藏　伯父者人。マア、ござりませ。

ト唄になり、善右衞門先に、文藏、お賤、こなしあつて、文吉を連れ、お芳ともに奥へ入る。跡に善六殘りこなしあつて、

善六　親仁と云ひ合せ、文藏をほいまくり、この跡式をしてやらうと思ふ壺へ、いつぞやよりふざけ出して吉原通ひ。それを幸ひ、ある事ない事を親仁へ告げて、マア大方……時に、今の三十兩、あれをどうぞせしめて、その科を文藏に……こりやどうぞ仕樣が、ありさうなものぢやが。

ト思案しかける。向うより男一人、手紙を持つて出て來て

男　モシ〳〵。紀伊國屋文藏さまは內方かな。

善六　オイ〳〵。紀伊國屋文藏は此方ぢやが、何の用ぢや。

男　イヤ、吉原仲の町の綠屋から、急なお手紙持つて來ましたが、文藏さまは、お前でござりまするか。

善六　成る程……文藏はおれぢや。仲の町の綠屋、覺えが

ある。ドレ、その手紙を。

男　ハイ〳〵。大事の事でござりますれば、お返事を急に待つて居りますとの事。お手紙をキッとお渡し申しましたぞえ。

善六　よし〳〵。慥かに文藏が直に受取つたと、云うてもらはう。

男　そんなら、必らずお返事を。

善六　ハテ、承知ぢや。こなさんは早う。

男　ドリヤ、歸りませうか。

ト男は向うへ引返して入る。此うち始終合ひ方。善六手紙を見て

善六　紀伊國屋文藏さまへ急用。絲屋松藏より。……ムウ。

ト封を切り開き

「わざ〳〵手紙を以て申し遣はし候ふ、八つ橋どの段々樣子悪しく見え候ふ間、何分身請けの相談、急々になされたく、身代は即ち五百兩と申し候へば、今宵何卒御都合なされ、百兩ばかり手附けにお遣はし下されたく、いづれにも後の人のお命は危ふく御座候ふ—……ハテ、こりやよい物が手に入つたわい。

ト思ひ入れ。奥にて

文藏　そんなら、女房ども、おりやこの金、一走り持つて行て來う。伯父者人へ其方、合點か。

トこれにて善六、思案して、荒繩を取つて來て、欄間へ掛け、踏み臺へ上がり、首を縊るこなしにて、もう文藏は出て來ぬかと、見い〳〵待つて居る所へ、奥より

サア、心得て居るワ。

と云ひ〳〵出る。善六、文藏を見て、ちやつと首を縊らうとする。文藏見、恟り。

マア〳〵、待て。コリヤ、善六。こりや何事ぢや〳〵。

善六　旦那、文藏さん。見遁がして、殺して下さりませ下さりませ。

トまた首を締めにかゝるを、文藏、しつかりと留め

文藏　こりや何で死ぬのぢや。譯も云はずに、どうでもわりや、氣がふれて居るな。

善六　そんなら、モシ、この善六は、氣がふれて居るやうに見えまするか。

文藏　首縊つては、親方のおれが難儀になる。どういふ事で死ぬる。マア、その樣子、云うて聞かしやいなう。

善六　サア、その樣子を云ふも、文藏さん、お前の手前面

目ないが、一通り聞いて下さりませ。何を隱さう、鐵砲町の、藪醫者の娘を、ちよつとおれがちよくつてから、何か互ひにこつそりの濡れ事。其おともりが腹に云ひ分。ツイ……れそになりました。

文藏　ムウ。さうしてどうぢや。

善六　それで親仁の藪醫めが、人の大事の娘を、疵者にしやつた。料簡がならぬ、綿屋の內へ斷ると、大きな聲で喚き廻る。外聞の惡さといふものは、堪つたものではござりませぬ、

文藏　そりや喚きさうなものぢや。さうして、その後は。

善六　サア、なんぼうお前とは從弟でも、表向きは手代分知つての通りの親仁、善右衞門どのなれば、おれを追ひ出すは定のもの。どうも仕樣はなし、人を頼んで挨拶に入れたれば、何がなしに毒の代に、金を五十兩寄越せと云ふ、足元を見ての高强請り。やう／＼と挨拶で、三十兩でやみ切る積り。ところで、金は無し、この間にも渡す筈を、何のかのと云ひ延し、今夜はキッと此方に工面して置いた、明日はキッと出來る筈と、向うへ云うても度々間違うて、追ひ／＼延すうちに、切端詰まつて合點せず、金はとんと間に合はず、明日はキッと出來るけれど追ひ／＼延したゆゑ承知せず、それで死ぬる覺悟を極めた。今、お前に見附けられたは幸ひ、死んだ跡で親仁にこの樣子をよいやうに、文藏さま頼みます。色ゆゑ身を果す。この善六が心の中を、推量して下さりませいなう。

ト實らしく無性に泣く。

文藏　ムウ。段々の樣子、聞けば聞くほど、善六、こまへが惡い。その金遣らねば向うは喚く筈。伯父者人の耳へ入つては、成る程、安穩では置かつしやるまい。

トよつと思案して

コレ、善六。其方の工面の金は、間違ひなう明日出來るか。

善六　命にかゝつた金、なんの違ひがござりませう。キッと明日出來ます。

文藏　ムウ。さういふ事なら、今日の所は、おれが取替へて、三十兩貸してやらう。

善六　エヽ。

文藏　コレ、爰に、知つての通り、問屋へ仕切りの三十兩今持つて行く所なれど、見す／＼首を縊るのを見遁がしにもならぬ。おれが呑み込んで、明日の朝まで貸してやらう。

善六　そんなら、その金を。
文藏　必らず明日の朝まで。
善六　イヤ、ソノ、キッと返します。
文藏　ソレ、三十兩。
ト出して渡す。
善六　エヽ、忝い。
ト金を取つて戴く。
文藏　コレ、おれは問屋へ行て、明日の朝まで云ひ延して來う。
善六　左樣なれば、御苦勞ながら
文藏　善六。
善六　文藏さま。
文藏　ドレ、行て來うか。
ト唄になり、文藏、表へ出る。
善六　まんまとしてやつた。
ト金を戴く。文藏、ちよつと立戻り、門口にて聽き耳する
この金をおれが持つて居ては。
トあたりを見て、紙屑籠を取つて來て、屑の中へ右の金を隱す。奧より善右衞門出て、これを見る。文藏は門口より内を見て、善右衞門とちよつと顔見合せ、文藏、思ひ入れあつて、向うへツイと入る、善右衞門も引込む。
これでよし／＼。
ト元の所へ直して置き、こなしあつて奧へ入る。始終合ひ方にて、善右衞門、ソロ／＼と奧より出て、紙屑籠の金を取出し、掛けてある傘の中へ隱し、素知らぬ顔にて思ひ入れ、奧にて
しづ　こちの人／＼。
ト呼び／＼出て
もう文藏どのは行かしやんしたか知らぬ。
ト善右衞門と顔見合せる。
善右　ヤア、お賤。
しづ　伯父御さん。……ドリヤ、わたしや奧へ。
善右　アヽコレ、待ちや／＼。
ト手を取つて此方へ來るを
しづ　イヽエ、わたしやちつと
トまた行かうとするを
善右　ハテ、そりや曲がない。コレ、お賤、これまでいろいろ云うて口說くのに、なぜ得心せぬ。そりやあまり、

胴慾ぢやぞや〳〵。

しづ　エヽ、嫌らしい。お年といひ、現在わたしは

善右　甥の文藏が女房。甥嫁の其方に、惚れる事は法度か。

しづ　エヽ。

善右　イヤ、甥の女房に伯父が惚れないといふ、お觸れはまだ廻らぬ。神代の昔は差合ひの構はぬ、色事を聞き傳へて居るが、ほんに又、どういふ因果な縁ぢややら、お賤、其方に常からこの善右衛門は、惚れたとこそいへいへ、死んだ婆が事は思ひ出さねど、おりや其方の事を毎晩思ひ出して、兎角思へば、老いの寢覺めの苦しさ。現在血筋の文藏めが、憎うて〳〵ならぬ程、其方が又可愛うて可愛うてどうもならぬ。せめて、ハテ、年こそよつたれ、譬へにさへ、伯父が甥の草を刈るといへは、

ト いろ〳〵あるを、お賤、叩き退け

しづ　コレ、申し、こんな事が、ほんに世界にあらう事かあるまい事か。

善右　イヤ、詮議したら、まんざら無い事もあるまい。コレ、お賤、心無うせずど、どうぞ。

ト 寄るを向うへ突退け

しづ　エヽ、馬鹿らしい。年寄りだてら、畜生といはうかあんまりな伯父さん。こちの人文藏どのに

善右　この事を云ふか。

しづ　サア、云へば現在、主の伯父御なり、それでこれまで、お前に度々口說かれる悲しさ、辛さ、腹の立つのもヂッと堪へて、よう云はぬわいなア。

善右　そりや忝ない。たとへ云うても伯父甥の事。惡うこだわりや、文藏めをばぼひこくる。オヽ、この家のかんばうして居る善右衛門、どうせうとおれが儘ぢや。殊になんぼわれが貞女立てしても、文藏は夜泊り、日泊り、吉原通ひ。あつたら者を獨り寢して、物淋しからうと思うて、惚れるはおれが情。われも情を掛けてくれぬかいやい。

ト 突き廻す。嫌がり、兩人揉み合ふ所へ、向うより文藏、戻つて來て、ズッと内へ入る。この體を見て、善右衛門を突きのける。

しづ　ヤア、こちの人。

善右　ほんに、文藏。

ト 恟り。

文藏　女房ども、伯父者人。こりや何でござります。

善右　サア、これは。

しづ　お前も、なぜ、もそつと早う歸つては下さんせぬ。わしやそウ、腹が立つて〳〵ならぬわいなア。

善右　イヤサ、お賤が腹立てるは、ソレ、文藏、われが吉原通ひ、その嫉妬で腹を立つは、オヽ、尤もぢや尤もぢや。

しづ　イヽエ、さうぢやない、お前がアノ

善右　サア、いろ〳〵になだめても、悋氣は女子の役、それで癪起して腹立てるを、撫でつ撫りつ介抱最中。

文藏　女房ども。癪を起して腹立てるは尤もぢや。其方の志し、最前の金、イヤサ、道理ぢやが、この文藏も男たとへどういふ事があつても、其方を袖には……ハテ、何もかも、とつくり合點のゆくやうに、晩にでも話さう。

しづ　アイ〳〵、そんなら晩に

ト善右衞門を見て

申し、お前と睦ましいが、當りさはりで……エヽ、つんと、云ふに云はれぬ。

善右　ハテ、女夫といふものは……エヽ、睦ましいものぢやなア。

トむつとこなし、兩人、心意氣ある所へ、向うより吉兵衞、問屋の手代にて出て來て

吉兵　モシ、文藏さまは、お宿にござりますか。

ト内へ入る。文藏、見て

文藏　ヤア、これは甲州の問屋のお手代。

吉兵　ハイ、吉兵衞でござります。この間から、毎日々々催促に來る眞綿の仕切り金、段々遲うなつては問屋の迷惑。いま受取らねば、明日から取引を止め、仲間中へ屆けて來いと、親方の云ひ附け。サア、仕切りを、いま受取りませうか。但し、仲間へ屆けませうか。文藏どの、どうでござりますな。

しづ　申し、こちの人。仕切りの金は、お前、いま持つて行かしやんしたぢやござんせぬか。それに問屋から、あのやうに云うて來るは。

善右　コリヤ〳〵、文藏、大方、三十兩の金も、女郎の揚げ代に吉原へ遣つたのか。

しづ　なんのマア、さういふ事がござんせう。サア、こちの人。

文藏　氣遣ひしやんな。その金は有る。……善六々々。ちよつと爰へ來てたも。

ト呼ぶ。奧より善六、出る。

善六　アイ〳〵。文藏さん、何の用でござります。

文藏　イヤ、外の事でもない、明日までは大事あるまいと呑み込んで貸してやつた最前の金。伯父者人にも云ひ譯おれが面晴れ。金が出來ずば、貸したといふ樣子を、てまへの口から、ちよつと云うてもらはう。

善六　コレ〳〵、文藏さん、おれに金を貸したとは、何の事だえ。

文藏　ハテ、先刻に貸した金を。

善六　先刻の金とはな。

文藏　ハテ、物覺えのわるい。てまへが先刻に、これ〳〵の時。

ト首を縊る眞似をする。善六、とぼけて

善六　これ〳〵、とは何ぢや。……とんと、おりや知らぬが。

文藏　ヤ。

善六　文藏さん、滅多無性に、貸した〳〵と仰しやりますが、こりや何か、問屋の仕切りに渡す三十兩の金を、お前が吉原の女郎狂ひの、拂ひに遣うてしまうて、親仁どのゝ前へ云ひ譯無さに、その科をおれに塗り附けるのかても、恐ろしい旦那どの、そりや事に依つたら、三十兩おれが借りたになるまいものでもないが、高でこの家の居候ふ。手代同然。よもや人が實にしよまい。よう思うても見たがよい。三十兩の金、おれが借りて、どうするものか。但し又、貸したといふ慥かな證據、書いた物でもござりますか。

文藏　義理づくの金。なんの書いた物。

善六　無いかえ。なんのあらう。お前が遣うた金を、この善六に塗り附けるのか。文藏さん、そりや、旦那に似合はぬ、お前はいかさま師ぢやなア。

文藏　ムウ。すりや、どのやうに云うても、てまへは覺えないか。知らぬか。

善六　エヽ、くど。

文藏　善六、いよ〳〵知らずば、この場の面晴れ。いま爰で神起證が取つてもらひたい。

善六　神起證とは。

文藏　ハテ、貸した借らぬと互ひの爭ひ、何方ぞ誠を顯はす誓言。疑ひ晴らしを大社の前で、神起證取つてもらはう。

善六　爰で大社とは湯島か、神田。差當つてそこまでも行かれまい。いま爰で誓言立てする、神前が無いぞえ。

文藏　イヤ、その神前は爰にある。

ト最前の紙屑籠を取つて、善六が前へ出す。善六、悔りして、

善六　ア、、コレ〳〵、文藏さん。その紙屑籠をどうするのぢや。

文藏　ハテ、これが直ぐに、神の前ぢや。

善六　エ、。

文藏　この籠の中には、見世の反古、いろ〳〵のかみの寄つた所が、即ち出雲の大社。その社の前で、誓言立てさせうと思うて。

ト籠を明けようとする。善六留めて、

善六　そりや勿體ない〳〵。この中には、いろ〳〵の反古や、書いた紙や、また何やかや拭いた穢ない紙もある。それを神さんに譬へるとは、滅相な、お前、罰が當るぞえ。

文藏　イヤ、それでは。

ト兩人せり合ふ。善右衛門、仲へ入り、籠を引ッたくり

善右　コリヤ、待て。先刻にから聞いて居れば、善六、わりやウヂ〳〵と、どうやら手むさう見える。文藏も云ひがゝり。こりや、誓言せずばなるまいが。中取つて、おれが斷うして。

ト籠を打ち返す。紙屑、パラ〳〵とこぼれる。文藏、善六、紙屑の中を、いろ〳〵探して

善六　ヤア〳〵、金が無い。

文藏　なんに、こりやどうぢや。

ト兩人悔り。

善右　文藏。金は無いか。

文藏　エ、。

善右　太い盗人め。

ト首筋取つて引きつける。

しづ　エ、、それは。

ト寄るを蹴とばし、思ひ入れ。

善右　善六。この女郎めを。

善六　合點ぢや。

トお賤を引きつける。善右衛門、文藏を捕へ

善右　おのれが科を、あの正直な善六に塗り附けうと、覺えもない者に、貸したの、ヤレ、盗んだのと、樣々の云ひかけひろいだ、うぬ。

ト散々に打つ。お賤、いろ〳〵あせり

しづ　イヤ〳〵、こちの人を。

ト善六を無理に振り切り、善右衛門を留める。善右衛門、留められながら、お賤を抱く。兩人よろしく、善六、文藏を引きつけ

善六　覺えもない云ひかけひろぎやア、旦那でも、おれが

ト算盤にて打たうとする。文藏、突き廻し、善六の腕を取つて

文藏　善六。すりや三十兩の金は。

善六　エゝ、こなたの色狂ひ、内の物を持出して、吉原へ通ふゝ、すそ貧乏。

文藏　なんと。

善六　證據はこの狀。

ト最前の手紙を出し

紀伊國屋文藏さまへ急用、絲屋松藏より。

文藏　ヤア、その手紙は。

ト取りに行くを、善右衛門、お賤を突きのけ、文藏を捕へ

善右　善六、早う讀め。

善六　色狂ひの化けの皮を。

ト手紙を開き

一わざ／＼手紙を以て申し遣はし候ふ、八つ橋どの段々樣子惡しく見え候ふ間、何分身請けの相談急々になされたく、身代は卽ち五百兩と申し候へば、今宵何卒御都合なされ、百兩ばかり手附け御遣はし下されたく候ふ、いづれにも、彼の人のお命危ふく御座候ふ」

文藏　ヤア／＼。そりや松藏より知らせの手紙といひ、最前道益どのゝ噂。是非身請けせにや叶はぬ仕儀……こりや斯うしては。

ト善右衛門を振り切り、善六を突き退け、表へ駈け出さうとするを、お賤、ツカ／＼と向うへ廻り、門の戸ピツシヤリ締めて、立ちふさがり

しづ　コレ、こちの人。どういふ樣子か知らねども、今お前が駈け出して行かしやんしては、金の行き端、伯父御の手前、いよ／＼お前の滅度になれば、その後の事を、わしや案じるわいなア。

文藏　イヤ、サア、手紙の樣子では、一時の間も打捨ておかれぬ。

しづ　それ程までに、女郎の事を。

文藏　イヤ、さうではなけれど、どうも。

しづ　心が急かうが、氣を鎭めて、マア、この場の納まり。

文藏　でも。

しづ　必らず悋氣で留めるとばし、思うて下さんすな。
文藏　ムウ。
　ト立戻り、今の手紙を見て
身請けは五百兩、手附けというても百兩
　ト思ひ入れあつて
ハテナア。
　ト手を組みながら、ヂッと下に居る。善右衞門、また文藏を引きつけ、お賤「それを」と行くを、善六支へる。
善右　うぬ、マア、何ぼうあらがうても、これまでの放埒吉原よりのその手紙に、身請けの相談。身請けは五百兩
イヤモ、呆れて物が、云はれぬわいやい／＼。
善右　三十兩もサラリと知れた手附けの足し。もうこの上は、コレ、親仁どの。
善右　善六。
　ト兩人、文藏にかゝるを、お賤、留める立廻り。文藏此うち、とつおいつ身請けの思案にて、構はぬ思ひ入れ。三人、立廻りのうち、與茂太、ツカ／＼と出て、善右衞門善六を引退け、
與茂　盗んだ／＼。
　ト兩人を留めながら、お賤を圍ふ。
しづ　與茂太。何にも知らずに、其方が
與茂　それでも、おれが、盗んだ／＼。
善六　ヤイ／＼、馬鹿め。盗んだ／＼とは、うぬ、何を盗んだ。
與茂　エヽ、金を盗んだ。慮外ながら問屋へやる仕切りの金を、おれが盗んだによつて、旦那は何にも知らんせぬぞ。
善六　ハテ、うぬ、盗んだにしてやらうが、何の爲に三十兩といふ金を、どうして盗んだ。
與茂　サア、それはなア。
善六　大枚の金、何にひろいだ。
與茂　饅頭買うて食うてしまうた。
善右　エヽ、大馬鹿め。
　ト與茂太を引き退け、お賤を捕へ
コリヤ、お賤。なんぼうわれが文藏を思ひ込んでも、吉原の女郎に打込み、問屋の仕切りも中でくすね、手附けの足しにするといふやうな、馬鹿といはうか、極道といはうか、女房子の事は思はず、世間の外聞、伯父が面まで汚す泥坊め。その心の腐つた文藏めに、われも又心中

立てる無分別。……なぜおれが云ふ通りに……イヤ、おれが目鏡は滅多に外れぬ。この文藏めが、

ト又算盤取上げ、打たうとするを、お賤キッと留めて

しづ　モシ、伯父御さん。こりや、お前、棒で當らにや針で當ると、事が叶はぬとて、こちの人を、

善右　エ、坊主が憎けりや袈裟まで憎いと　お賤、われの心柄ぢや。

しづ　現在血筋の甥御の女房、其わたしに、マア、あらうことか、あるまい事か。もう云はにやならぬ、コレこちの人、この伯父御が、常々わたしに

ト云はうとするを、文藏、ちやつと引廻して

文藏　コリヤ／＼、女房、何にも云ふな

しづ　イ、エイナア、わたしに

文藏　ハテ、目頭物堅い伯父御、心の中は知つて居る。ソレ、最前の仕儀といひ、何もかも皆おれが、サア、文藏が放埒惰弱から。コレ。

ト善右衛門を尻目にかけ

サア、色は心の外ではないか。

しづ　エヽ、悪い合點。お前の事ではござんせぬ　あの善右衛門が、年寄りだてら

文藏　サヽ、その善右衛門さまは、おれが爲には肉身の現在の伯父。サア、伯父は親の片割れと、世間の恥は即ちおれが恥。かけて深切な貞女なお賤。おれを大事と思うてくれゝば、何にも云ふな。コリヤ、サア、この手紙といひ、吉原の事、さぞ腹が立たう。ハテ、腹が立たうが、今までさへ、チッと堪へた辛抱、又この上に、文藏が頼み。

ト善右衛門を指さして、お賤に何にも云ふなと制す。

しづ　ソレ、其お前の美しい、心に恥ぢてわたしやモウ、

ト善右衛門を睨め附け

エヽ、云ひたいわいなア／＼

ト兩人いろ／＼こなし　善右衛門、お賤をヂロリと見て

善右　ハテ、云ふ事がありや、お賤、なぜ云はぬ。コリヤ、おれは文藏が爲には、眞實の伯父ぢやぞよ。いま彼奴が云うた通り、伯父は親の片割れ。すりや、親同然の善右衛門。ハヽヽ。伯父ぢやぞよ、伯父ぢやぞよ。

しづ　エヽ、それぢやによつて

文藏　ハテ、血で血を洗ふ

善右　伯父は親。

しづ　ほんに、モウ〱〵

　ト善右衛門をキッと見て

エヽ、アタ憎てらしい。

　ト文藏が膝へ取りつく。

文藏　可愛いゝ坊主に、免じてくれいやい。

　ト兩人思ひ入れ。

吉兵　モシ〱、文藏さま、最前から待つて居りますが、仕切りの金は、どうでござります。出來ずば、仲間へ取引ならぬと屆けませうか。

善右　どうでさうせずばなるまい、内のせいらく。仲間の取引差留めの屆けも、おれが直に廻つてとつくりと。イヤ、幸ひ問屋のお手代、同道いたしませう

吉兵　左樣なれば、あなたと御一緒に。

善右　成る程、コリヤ、善六。所詮役に立たぬ文藏め、この上は、おれが思案がある。問屋中へ廻つて來るうち、必らず油斷すな。

　トお賤、文藏こなしある。

善六　呑み込んで居る。隨分早う歸らつしやりませ。

善右　そりや合點ぢや。サア、お手代、ござりませ。

　ト唄になり、善右衛門、こなしあつて、吉兵衛を連れて向うへ入る、與茂太、あと見送つて

與茂　アヽ、ならう事なら、これの内にも、あの伯父と此奴が居らねばよいに。

　ト善六を見る。

善六　なにを。又しても馬鹿な癖に差出やアがつて、すッこんで居らう。

與茂　すッこむわい。

　ト片脇へ小さくなり居る。善六、こなしあつて

善六　ほんに、何でもない事で氣を揉んだ。その加減か、殊の外草臥れた。どうで親仁の歸りも遲からう。それまで奥で、一つ飲んで待つて居ようか。

　ト合ひ方になり、兩人を睨み附け、與茂太を蹴散らし奥へ入る。

與茂　ハテ、親子といふものは爭はれぬ。二人ともに憎らしい奴等ぢやなア。

　ト奥より文吉走り出て、お賤に取りつき

文吉　母樣〱、坊は眠たいわいなう〱。

しづ　ほんに、疱瘡揚句で、草臥れて居やるによつて、オオ、眠たいは道理ぢやが、今から寢かしては、また晩に

目が覺めよう。
ト文藏、此うち思案して居て
文藏　もう七つ下がり。
トすつと立ち上がる。お賤は文吉を抱きながら、矢張り下に居て
しづ　こちの人。お前又どこぞへ行かしやんすかえ。
文藏　ヤ。
ト心附き、わざと
氣遣ひしやんな。どつこへも行きはせぬ。もうとんと、吉原もやめ／＼。
トまた下に居て、煙草盆を引寄せる。
しづ　なぜになア。大事ござんせぬ。折角これまで行かしやんしたお前、俄にさう云はすと、矢ッ張り行たがよいわいなア。
文藏　イヤ／＼、伯父者人の手前、其方の深切、世間の聞えもあれば、ふツつりと思ひ切つて、内に居て、商賣に精出さにやならぬ。それに附き、おりやちつと爰に居て思案せにやならぬ事がある。わが身は坊を奥へ連れて行て、ちやつと寢さしてやりや。
しづ　アイ／＼。こんならわたしや、この子を寢さしてやりませう。與茂太、われも來て、蒲團出してくりや。
與茂　オツト合點。サア、おかみさん。
しづ　そんなら、こちの人。
ト文吉を抱いて奧へ行かうとする、文藏、思ひ入れあつて
文藏　ア丶、コレ／＼、女房ども。ちよつと待ちや。
しづ　エ、何ぢやえ。
ト立戻る。文藏、坐りながら抱く。お賤、こなしあつて
馬鹿らしい。何さしやんすぞいなア。
文藏　斯うしたところは、吉原の女郎より、また馴染みの女房。
ト腰に觸れて、お賤の巾着の鍵をソツと取り出す。これを知らぬ振りにて
しづ　何をじやら／＼と。
ト思ひ入れ。
與茂　旦那さん、をかし。
しづ　アレ、與茂太が。
文藏　ヤ。
トちやつと離し、鍵を袂へ入れ

ソレ、坊主めを寢かしてやりやれ。

トこなし。お賤、氣味合ひあつて

しづ　ドレ、坊を寢かしてやりませうか。

ト唄になり、お賤、文吉を抱き、與茂太を連れて、奥へ入る。これより好みの合ひ方になり、文藏殘り、こなしあつて最前の手紙を出して、とつくと讀み、また懷へ入れ、袂より今の鍵を取出し、思ひ入れあつて、そろ〳〵二重舞臺へ行つて、下戸棚の引出しを鍵にて明け、中より袋入りの脇差を取出し、口をほどき、ちよつと改めて見て、袋に入れ、腰へぼつこみ、ツカ〳〵と表へ出ようとする。この前よりお賤、納戸より出かけ、窺ひ居て、この時

しづ　こちの人、待つた。

文藏　ヤア、女房ども。

トはつとこなし。

しづ　お前、死ぬる覺悟かえ。

文藏　なんと。

しづ　コレ。

ト胸ぐら取つて、入れかはり

わたしは格別、あの文吉は、可愛うはござんせぬかいなア。

文藏　ヤ。

しづ　ほんに、これまでお前の身持ち、いつぞやより夜毎となく、綿の買ひ出し、問屋へ行くのと、さまざまと嘘ついて、吉原ばつかり。わたしやよう知つて居るわいなア。幼な馴染の女房の事は思はず、今日この頃は廿日の上も、内にとては寢て下さんせぬ。それを云はずに、見世の事から、伯父御へ氣兼ね、問屋よりは仕切りの催促、お前に知らさず、内證で、やう〳〵拵らへた最前の三十兩。分けて苦勞は文吉が疱瘡、殊に、子供の大役と聞けば、身に代へ、命に代へ、神佛樣のお庇にて、輕うしまうて、ヤレ嬉しやと、喜ぶ間もなう今日の仕儀。ソレ、最前、善六が出した手紙の樣子、慥かに身請けの金は五百兩、手附けは百兩とやら、鍵まで取つて氣の惡い、文藏どの。この脇差は親の讓り、お前の物。わしに隱して、我が物を我が手に盜み出すやうな、身の持ちやうがござんすかいなア、今まではさうも思はなんだが、お前が死ぬるとまで思ひ込ましやんした、吉原の女郎づらがわしや憎い。コレ、怪我ほどの事も、これまで隨分、云はぬ嗜み。わたしも同じ女子に生れたもの、見替へられ

ては腹が立つて、角も生える。そこをチッと堪へて、悋氣もようせぬは、文吉が可愛さ。お前に愛想を盡かされてはと、遣る瀨涙に寢どころの、夜着の裾にへひついて、毎晩泣いてゐるわいなア。それに引きかへ、胴慾な文藏どの、女房の事は微塵も思はず、女郎ばかりに義理を立て、なぜ死なしやんす、なぜ死なしやんす。コレ、跡に殘つて、文吉やわたしや何とせう。どうせう。そりやあんまりぢや。聞えませぬ。聞えませぬわいなア、

ト縋り附いて大泣き。文藏、思ひ入れあつて

文藏 お賤、尤もぢや、道理ぢや。其方の日頃の深切、何と云はうやうもない仕儀。併し、氣遣ひしやんな。この文藏、これまで吉原へ通ふというても、さら／＼色には迷はぬ。その譯は、死なしやつた親仁樣の、大恩あるお主の、その若旦那の佐野次郎左衞門さま、おれが大事に世話するは常々其方にも話した通り。その次郎左衞門さまが勘當受け、國を立退くほどに、深う云ひ交してござる吉原の女郎八つ橋を、この廿日以前に、思ひ違ひの譯あつて、萬字屋の二階で手を負はせ、所の留ひ、ソリヤ、心中、無理殺しぢやと、パッと噂のあるところを、押し鎮め、段々おれが頼み廻つて、隨分世間へ知らさぬやうに、八つ橋が療養生。本腹するまで、次郎左衞門さまは廓に人質。その八つ橋が生さぬ仲の親は、大の惡黨、金づくで願はさぬやうと、また吉原の親方も取り鎮め、手入れ、足入れ、金の入る事ばつかり。色を表に、心の底は、御主人へ忠義、手負ひの八つ橋心許なく、早う身請けをすれば、次郎左衞門さまは人殺しの科を免れるとの知らせ。それに又、紛失の籠釣瓶の茶入れ、詮議し出さねば、お國へ立たず。詰まるところは、なんでも若旦那を、元の武士にせねばならぬ。歸參さへ叶へば、元の舟橋の御家中。さすれば、たとへ八つ橋が死んでも、御身に凶事はないと、人に語らず、一人して、毎日駈け歩く文藏が身の上。現在女房の其方を始め、釋迦でも、放埒惰弱と思はにやならぬ。おれが本心明かすからは、必らず疑ひ晴らしてたも。コレ、お賤、この頃の心勞は、なかなか口で云ふやうな事ではないわい。

ト お賤、樣子を聞いて、こなし

しづ そんなら、お前は、死ぬる覺悟ではござんせぬかえ。

文藏 滅相な。いま云うた通り、次郎左衞門さまを世に出すまで、滅多に死んで堪るものか。

しづ それに又、脇差は。

文藏　仕盡したこれまでの金の工面。手法盡きて、親の讓りの、この備前國行。是非なう代なして、彼の籠釣瓶の茶入れを。
しづ　そりや、お前、眞實、ほんまに。
文藏　たとへ死ぬるというても、勿體ない、親の讓りの脇差で、なんの死なう。
しづ　アレ、又、忌はしい、そんな事。
文藏　氣遣ひしやんな。命が大事、死にはせぬ。この脇差を、打ち殺すのぢや。
しづ　アヽ、嬉しや。聞いて心が落ちつきました。さうとは知らず、女房の身で、勿體ない、男に意見。あやまりました。コレ、堪忍して下さんせえ。
文藏　なんの堪忍。あやまるはおれが方から。お賤、これまではさぞ
しづ　モウ〳〵、何にも云うて下さんすな。この上は、若旦那のお身の上。さうして、モシ、籠釣瓶とやら、大事の茶入れの在所はえ。
文藏　仲通りの道具屋、唐物屋小兵衞といふ者が、慥かに持つて居る。それで脇差を、道具屋なれば
しづ　また肝心の八つ橋どのゝ、身請けは五百兩。手附けは百兩とやら、今宵中に。
文藏　そりや又、思案があらう。マア、茶入れの方から、ちよつと行つて來よう。
しづ　そんなら、お前は
文藏　仲通りの道具屋……ア、又留守でなければよいが。
ト雨車になる
しづ　アヽ、雨が降るさうな。
文藏　イヤ、時雨ぢやで、大事あるまい。
しづ　でも、傘持つて行かしやんせ。
ト掛けてある傘を取つて「コレ、申し」トひろげる。善右衞門が隱した金、亂れて、バラ〳〵と落ちる。文藏取上げ
文藏　ヤア、こりや最前の三十兩。
ト善六、出かけて居て
善六　その金は。
ト取りにかゝる。文藏、見事に投げる。
しづ　どう迴つても、お前の爲に、わたしの志し。それも一緒に。
文藏　女房ども。
ト戴き、門口へ出る。

善六　イヤ、滅多に文藏トまた行くな、お賤、よろしく押へ

しづ　こちの人。

文藏　よう留守しや。

　ト門の戸ピヤシヤリ。傘さして向うへツイと入る。善六、起き上がる。お賤、紙屑籠を冠せる。

　　　よろしく幕

造り物、三間の間、上の方に臺所口、正面に誂への大欄子、これに貸し座敷と書きし板看板を掛け、下の方玄關先い模樣、尤も、夜の景色にて、懸け行燈、軒吊りの提灯あり。爰に仲通り道具仲間參會と書いたる提灯。すべて兩國元山町三河屋のかゝり。幕の内より喜助、木綿やつし、股引の形にて風鈴蕎麥の荷を下ろし、三婦、序幕の形、頰冠りして蕎麥を食つて居る。時の鐘にて幕明く。

　ト仕出し大勢あつて入る。三婦、蕎麥を食ひながら

三婦　蕎麥屋どん。三河屋も普請が出來て、陽氣に賑やかだの。

喜助　左やうサ。今夜はそれに道具屋仲間の、寄合ひでござります。

三婦　道理で宵から彈きたてるワ。イヤ、又、今ぢやア兩國で出し物はよし、座敷は廣し、三河屋三河屋といふ筈よ。

喜助　イヤモウ、向う兩國では、きつい繁昌でござります。

三婦　貴樣の蕎麥は旨い蕎麥だ。もう一杯下さい。

喜助　强勢にあがりますな。

三婦　ちつと用があつて、傳馬町まで行くのだが、これから腹を丈夫にして、居催促と出にやならない。

　ト喜助、蕎麥を拵らへ出す。三婦、かつかちめいて掻ツ込み、財布より小錢を出し

五膳ぶりだの……五に足りない。負けて下さい。

　ト錢を渡し、行かうとする。

喜助　ア、モシ〳〵。滅相なお客だ。五膳ぶりで丁度八十。こりやアたつた廿七文しかござりませぬ。

　ト留める。

三婦　なんだ。五膳ぶりだ。腹がへつたから食ふやうなもの、水雜炊の資からしを見るやうな蕎麥が、三膳と食へるものか。

喜助　それでも、お前、五膳つけて廿七文。あまつさへ、仙臺錢が二文まで。夜の商ひだ。ぢらさずと、丁度拂つて

行きなさい。

三婦　イケ外聞の悪い。食ひ物の事だと思つて、料簡して行きやア、猿唐人め、おれを食ひ逃げにしやアがる。

喜助　錢を寄越さにやア、食ひ逃げだ。

三婦　五膳ぶり拂つて、まだ不足か。たは事つくと、荷ぐるみ爰へぶツ倒すぞ。

喜助　氣の強い親仁だ。高飛車を怖がつて、夜の商賣が出來るものか。一文缺けても、逃がしやアしないぞ。

三婦　云ひかけを吐かす大騙りめ。

喜助　食ひ逃げ親仁め。待ちやアがれ。

ト兩方立ちかゝり、捨ぜりふよろしく、摑み合ひにかゝる時、三河屋の中より小兵衞、序幕の形、數右衞門刀を提げ、出て來て

數右　小兵衞、大きに馳走になりました。

小兵　イヤ、まだお話しもござりますれど、何を申すも、仲間の寄合ひ、明日は是非お屋敷へ、私しが上がりますでござります。

數右　必らず來ておくりやれ。

ト行かうとして、三婦を見附け

三婦ではないか。何事の口論。マア〳〵、待ちやれ。

ト引分ける。

喜助　口論ぢやまない、食ひ逃げだ。親仁め、そこを動きやアがるな。

トかゝるを、小兵衞、見兼れて喜助を留め

小兵　コレサ、商人。おとなしくもない。マア、靜かにして譯を云やれサ。

三婦　恐れ多い奴だ。大木場の三婦さまに向つて食ひ逃げとは、コレ、怪しからぬ野郎だ。踏み殺すぞ。

ト蕎麥の茶碗を取つて打ち附ける。數右衞門、留めて

數右　これはしたり。聊かの事に大人氣ない。料簡しやれ。

喜助　否だ〳〵。料簡も糸瓜も無い。食ひ逃げの上に、商ひ道具をぶち毀されちやア、濟まされない濟まされない。

小兵　ハテ、往來で聲高に。また間違ひもあるものだ。いイワ、商人は相互ひ、これで料簡してゆきやれ。

ト紙入れより南鐐一ツ出して、喜助にやる。

三婦　モシ、小兵衞さん、馬鹿々々しい。彼奴に騙りでござります。

小兵　ハテ、ようごんす。細元手の商人、こなさんも萬更知らない顏でもない。不思議な緣で、仲の町の絲屋で、近附きになつた大木場の三婦どの。外の者のやうにも思

ひませぬ。

三婦　イヤモウ、面目次第もござりませぬ。併し、彼奴は皿一枚で南鐐一つ。うまいものだ。

ト喜助、氣の毒さうに

喜助　親方、これには及ひませぬ。いけッ太いあの親仁め。

トまた寄らうとするを、數右衛門、下の方へ引き分け

數右　コレサ、小兵衛が志し、四の五と云はずに持つて行け。

喜助　でも、あんまりな我慢親仁。

數右　ハテ、裁人に入つた身共も武士。云ひ分あらば、相手にならう。

喜助　ナニサ、お前。お庇で元値に致しました。

ト蕎麥の荷を擔ぎあげ

ほんに、危なく蕎麥五杯

小兵　無駄を云はずと、早く行きやれ。

喜助　大平しつぽく。にう麺や素麺。

ト通り神樂になり、喜助、向うへ入る。三人殘つて

三婦　外聞の悪い。小兵衛さま、彼奴も物師でござりますな。

小兵　イヤ、あの男より、こなさんの手際は、かねて知つて居る。八つ橋が親判、大木場の三婦どの。して、萬字屋の出入りは、どうなりました。

三婦　イヤ、モウ、どうの斯うもなし。でんどへ出せば、下手人は佐野次郎左衛門。兎も角も身請けさせてくれろと、緣屋からの挨拶さ、養生代も五十兩、傳馬町の紀文から受取る筈で、その出入りに、いま行くところでござります。

數右　ハテ、さうなつては、日頃から、佐野に意趣あるこの數右衛門。小兵衛は、いよ〳〵茶入れの事を。

小兵　コレサ、聲高に、門口で滅多な事を云はつしやりますな。幸ひ、三婦にも折入つて、話して置きたい事もあり、數右衛門さま、座敷を替へて、飲み直さうではござりませぬか

數右　イカサマ、親仁も久し振りだ。一つ飲んだら、どうあらう。

三婦　御馳走ならば、お辭儀なし。……併し、紀文に五十兩、養生代を受取るまでは、今夜はちつと大事の體、滅多に醉うてはなりませぬ。

數右　サア、その事に附いても、密々に話して置きたい。

小兵　數右衛門さま。マア、お先へ。

三婦　飲まないも損だ。お二人樣、

數右　親仁、來やれ。

ト唄になり、數右衞門、小兵衞こなしあつて、三婦附いて奧へ入る。時の鐘になり、花道より以前の文藏、傘をさし、袋入りの一腰を差し、思案しながら、出て來て

文藏　宵の口はぱらついたに、思ひの外に、空も晴れた。晴れぬはおれが胸の中。三方四方取り亂した、せめて一方片附けてと、仲通りまで尋ねて行たに、また出違うて折わるう、この兩國の三河屋とやらに、道具屋仲間の參會との事。……オヽ、また寄合ひも果てぬかして、きつう座敷も賑やかな樣子。取込みにはあらうが、誰れぞにちよつと呼び出してもらはう。さうぢや。

ト本舞臺へ來て

モシ。ちつと物が尋ねたうござります。お賴み申すノ〳〵。

男　ハイ〳〵。どなたでござりますな。

ト若い者出て來る。

文藏　イヤ、卒爾ながら、內方へ、仲通りの唐物屋小兵衞さまが、來てゞはござりませぬか。

男　ハイ、寄合ひは道具屋仲間、承つてあげませう。

文藏　モシ、左樣なら、御面倒ながら、ちつとお目にかゝりたいと、呼び出さつしやれて下さりませ。

男　ハイ〳〵、畏まりました。

ト奧へ入る。

文藏　嬉しや。どうぞ間違はぬやうに、唐小にちよつと逢ひたいものぢやが。

ト合ひ方になり、小兵衞、楊枝を遣ひながら、出て來て

小兵　誰れも尋ねる筈はないが、唐物屋小兵衞に逢ひたいとは、モシ、こなさんでござりまするか。

文藏　ハイ、この間中度々お宿へお尋ね申したれど、お留守でお目にかゝりませぬが、紀伊國屋の文藏でござりまする。

小兵　ハイ、傳馬町の紀文さん。なんぞ商賣向きの御用で。

文藏　されば、ちと折入つて、お賴み申さにやならぬ譯。

小兵　商ひ口とあれば、まづ耳より。

ト奧へ思ひ入れあつて

して、お賴みの樣子はナ。

文藏　サア、別の事でもござりませぬが、其許樣の方に、籠釣瓶の茶入れを、御所持なされてござる由。どうした

仔細で。

小兵　成る程、わしが商賣で、籠釣瓶でも活けたごでも、賣り買ひするが道具屋仲間、商ひ物で持つて居るに、不思議な事はござんすまい。

文藏　イヤ、その籠釣瓶の茶入れの事は、もと下野の舟橋家に。代々傳はる重寶にて、佐野次郎左衞門さまの預かり、何者に盜まれさつしやれたか、その越度にて浪々の身の上、御苦勞なされてござれども、荒立てゝ詮議すれば、どこからどう廻つて、幾人の難儀にならうも知れぬぢやによつて、密かに取戻し、あなたのお身の申し譯、明りを立てる大切な茶入れ。幸ひ、こなさんの方に御所持なさると聞いて

小兵　イヤ、どこの何處の何方の重寶かは知らぬが、わしが見世へ、ふりに持つて來て賣らうといふのを、買うて置いた籠釣瓶の茶入れ。ハテ、賣らうと思うて買うて置いた代物、金にさへなりや、どなたでも。しかも今日は仲間の寄合ひ。もし望み手もあらうかと、幸ひ持つて來たこの茶入れ。

ト袋入りの茶入れを出し

さういふ譯なら、こなさんへ、成る程、賣つて進ぜませう。

文藏　イヤ、それは千萬忝い。

ト嬉しきこなし

此方でも心當てに、持ち合せた三十兩、暫らくこれを手附けにして。

小兵　イヤ、それぢやア渡されぬ。値段は小判で二百兩。なんと廉いものか。外ならもつと値賣でもしようが、譯を聞いたら見知り越し、滅相な事も云はれまい。二百兩で手を打ちませう。

文藏　成る程、値段は望みの通り。

小兵　御承知ならば現金賣り、大事の代物、掛けにはならぬ。

ト持つて行かうとする。

文藏　でも、途中なり、二百兩の大金。

ト留めて

成る程、金子渡しませう。

ト腰に差したる脇差を出し

御不肖ながら、小兵衞さん、あなたも商賣、金の抵當にこれを預かつては下さるまいか。

小兵　そりや何でごんす。

文藏　恥かしながら、この脇差は、親の讓りの備前國行。ちつと外にも金の入用があつて、心當てには持つて來たが、何れの道にもその茶入れは、手離す事のならぬ品。どうぞ聞分けて、金才覺の出來るまで、抵當に取つて、その茶入れを、なんと渡しては下さるまいか。

小兵　ドレ。

ト脇差を取つて見て、思ひ入れあつて

ようごんす。それ程に云はつしやるなら、この一腰を三十兩の金に添へ、內取りにして、茶入れは貴樣に渡しませう。併し、世間一統に、手附けは三日ぎり。三日が過ぎると、この脇差、賣り拂ひ、金にするが、その時いさくさは云はれぬぞや。

文藏　いかにも、三日のうちに金を揃へて、キツと取りに參りませう。マア、それまでは、手附けやら、質物やらにこの脇差。

小兵　三十兩添へて受取つた。

ト取上げる。此うち後へ三婦、出て居て

三婦　紀文さんの金なら、五十兩の內取り、マア、わしが方へ貰ひませう。

ト引ッたくる。文藏、悩りして

文藏　モシ〳〵、こなたは、なゝ、なんでわしが金子を。無理無體に。

ト留めるを、叩き退け

三婦　無體とは、なんだ。忘れはしまい。八つ橋が親の、大木場の三婦を。年寄りだと思つて、馬鹿にするのか。養生代の五十兩、一文缺けても濟まないぞよ。

ト文藏、當惑して

文藏　成る程、その儀も此方より、御挨拶とは存じながら

三婦　云はつしやるな、文藏どん。存じながらとは、常の貸し借り、獨參湯で繫いで置く、今をも知れない娘の八つ橋。養生代で料簡してくれろと、こなたの方から賴んで寄越したによつて、次郞左衞門は憎けれど、所詮死物になつた八つ橋、こいつは料簡どころだと思つて、思案を附けた五十兩。耳を揃へて今渡しやれ。

文藏　サヽ、御尤もぢや。その事も、種々樣々に苦勞いたせば、遲うて明日。

三婦　馬鹿を云やれ。命代りの五十兩、渡さにやいゝワ。これから直ぐに、お願ひ申す分の事サ。

ト立ちかゝるを

文藏　でも、そりやあんまり。此方も全く粗略には致さぬ。

三婦　そんなら、見掛けた三十兩、五十兩につゞめて受取るべい。
文藏　ぢやと申して、大切な、茶入れの手附けに致す金。
三婦　ならにやア、直ぐに代官所か。
文藏　そこをどうぞ、今暫らく。
三婦　そんなら、金か。
文藏　サア、それは。
三婦　サア、
文藏　サア、
二人　サア〳〵〳〵。
三婦　エヽ、イケ自烈たい。どうするのだ。
ト文藏を引据ゑる。小兵衛、せゝら笑つて
小兵　イヤ、この小兵衛も、見る前で、忽ち三十兩減りの立つた取引は、快くもないから、こりやモウ茶入れは賣られない。
ト取上げる。この時、後へ數右衛門、出て來て
數右　小兵衛。最前の籠釣瓶の茶入れ、二百兩で身共へ賣つてくりやれ。
小兵　イカサマ、何か小むづかしく搦んだ代物、廉けれどあなたの方へ上げませう。
ト渡す。文藏あわてゝ留め
文藏　モシ〳〵、お侍ひ樣。仔細あつて外へ渡せぬこの茶入れ。どうござつても、私しが買ひ求めにやアなりませぬ。
ト取附く。
數右　慮外吐かすな。此方も大枚の金子で買ひ求める。町人風情の及ばぬ事だ。
ト突き退ける。
文藏　イヽヤ、無體にこの茶入れ、人手に渡せば拙者が命生きても、死んでも
ト留めるを、小兵衛、むごく突き退け
小兵　おぬしが死ぬのを、數右衛門さまや、おいらの知つた事ぢやアない。
文藏　イヤ、わしばかりが命でない、大切な
三婦　次郎左衛門がくたばるは、心中のしそこなひ、彼奴が科て、自業自得。
文藏　イヤ、代々傳はるお家の退轉。
數右　それが此方の望むところ。その上、また彼奴にやア、國元からの戀の意趣。
文藏　サヽヽヽ、何事の恨みも、仇も、命に代へてこの茶

入れ、どこまでも、渡さぬ〳〵。
數右　ハテ、執念深い奴だ。さう吐かしやア
　ト文藏が持つて居る茶入れを、小兵衞、數右衞門、兩方より持ち添へ
數右　いつそ斯うして、念を晴らせ。
　ト舞臺へ打ち附ける。茶入れ割れる。文藏、恟りして
文右　ヤア〳〵〳〵。こりや大切な茶入れを。
　トいろ〳〵あつて
　ホヽヽ。……ホイ。
　ト撞と下に居る。此うち三婦は氣を改めて居る。これより砧の合ひ方になる。數右衞門、小兵衞、喜び、砧に合せて
數右　そりやこそ〳〵。
小兵　うろたぢや〳〵。
數右　茶入れは〳〵。
小兵　割れたか〳〵。
數右　それで、うろたぢや〳〵。
小兵　にえるワ〳〵。
數右　可哀や〳〵。
小兵　よいざま〳〵。

　トいろ〳〵騒てる。文藏、此うちあちこち駈け歩き、うろ〳〵として
文藏　チエヽ。
　ト鎮まり、泣く。また兩人とも目くばせして
數右　騙し討ちに、臑を薙ざつぽで
　ト以前の傘にて叩き据ゑる。これにて文藏、ウンと氣を失ふ。兩人、こなしあつて
小兵　まんまと寂滅。
數右　いつその事に
　トかゝるを、三婦、ちやつと留め
三婦　殺すは野暮だ、お二人さん。たうとう首尾よく三十兩
數右　備前國行。
小兵　誠の茶入れ。
　ト懐より出して見せる。
數右　打つておけ。しやん〳〵。
三婦　も一つせい。しやん〳〵。
　ト三人手を打つ。
小兵　きほひ口だに、數右衞門さん。
數右　今夜も直ぐに吉原へ

三婦　柏屋から、猪牙でございませ。
數右　三婦は後から。
　ト囁く。
三婦　呑み込みました。
小兵　サア、ございませ。
　ト唄になり、小兵衛、數右衛門、こなしあつて、花道へ入る。文藏、氣が附いて起きあがり
文藏　小兵衛め。うぬを。
　ト立ちかゝるを、三婦、むごく引据ゑ
三婦　動きやアがるな、大騙りめ。人の命が百兩や二百兩で買はれるものか。そこを情に料簡して、五十兩の詫び代。今取つた三十兩、あと二十兩はどうするのだ。
文藏　サ、詫び代の心當てに、女房が志しの三十兩、親の譲りの一腰まで、内をくろめて持つて來て、うま〳〵彼等に騙し取られ、まだその上のぶち打擲。おれは死んでも、生きてもぢやが、大切な茶入れを打ち割られ、よう安穏で二人の奴等。
　トまた立ちかゝるを、上の方へ突き廻し
三婦　茶入れ〳〵と澤山さうに、それをおれが構ふものか。娘の敵を取らせるとも、詫び代揃へて渡すとも、方を附けやれ。どうするのだ。
　ト胸ぐらを取つてこづき廻す。花道より序幕の遣り手お杉、小提灯を提げ、出て來て
すぎ　向う兩國の三河屋とやら、……オヽ、爰だ〳〵
　ト本舞臺へ來て、文藏を見付け
すぎ　ヤア、紀文さん。お前はマア、今日の約束をどうしなさる。待つても〳〵沙汰が無いによつて、船で出て來た。たつた今、唐小さんや數右衛門さんに、橋の下で逢うて聞けば、爰にござるとの話し、八つ橋さんの身請けの金は、どうだな〳〵。出來やしたかえ。
　ト文藏、うろ〳〵して物の云はれぬこなし、三婦、お杉、兩方より立寄つて
三婦　命代りの五十兩。
すぎ　身受けの五百兩。
三婦　キヨロ〳〵せずと、物を云やれ。
　ト突ッかゝる。文藏、ヂッと思案して
文藏　成る程。八つ橋どのゝ身請けの五百兩、養生代の五十兩、身を粉に砕いても渡しませう。なれども、不慮に大切な茶入れを失ひ、思案も智慧も、途方に暮れた今この時。爰のところを今暫らく。

すぎ　エヽ、小自烈たい。又待つてかえ。コレ、綠屋の兄さんも、手紙で云つて寄越しなさつた通り、死にかゝつて居る八つ橋さん。金が出來にやア否でも應でも、でんどへ出さにやアならない出入り。幸ひ爰に親判の三婦さん、料簡附けて見なさい〳〵。

三婦　料簡といつて、この上に、四の五と云やア代官所。次郎左衞門めをどうするか。堪忍袋の緒が切れた

　ト行かうするを、文藏、縋つて留め

文藏　いかにも道理、親判の其許、お腹の立つはお道理なれど、どうぞ、とてもの御料簡に。

三婦　もう否だわえ。今日まで待つた養生代。

文藏　サア、そこをどうぞ、今暫らく。

すぎ　此方は身請けの五百兩。

文藏　それもどうぞ明日まで。

すぎ　待たれやせまい、紀文さん。ゆるりとした話しぢやござりやせぬわな。

　ト向うより道益、以前の形にて、あわてゝ出て來て

道益　ヤレ〳〵、文藏どの、いま吉原から戻りましたが、氣の毒や八つ橋どのは、たうとう臨終いたされました。

文藏　エヽ、

　ト驚く。お杉、三婦も悄りして

杉三　それを聞きやア、片時も

　ト行かうとするを、文藏、ウロ〳〵して、兩人を留め

文藏　モシ、道益さま、そりや實正。

道益　ハテ、臨終まで膏藥を打ち替へたり、獨參湯を服ませたり、ア、、いぢらしい目を見て來ました。

三婦　可哀や、娘。

すぎ　モシ、三婦さん。うろたへて居る所ぢやない。

　トまた行くを、文藏、いろ〳〵留める。三婦、お杉はあちこち突き廻し、道益も留めるを、兩人すごく振り切り

すぎ　なんでも敵は次郎左衞門。

三婦　下手人に出るを、待つてうせろ。

　ト文藏を突き退け、三婦、お杉、向うへ走り入る。道益も、ウロ〳〵して

道益　でも、氣の毒な文藏どの。ひよんな事になりましたの。

　ト文藏が顏を見る。文藏、しほ〳〵と立ち上がり

文藏　せう事がござりませぬ。定まる因果、覺悟の前。……

……この文藏が身の上も。

道益　どうしました。

文藏　イヤ、一思案いたしませう。

道益　コレ、其やうに氣を落す事はない。もう四つ前だ。サア、これから連れ立つて行きませう。

文藏　ハイ。私しはまだちつと、横網に寄る所が

道益　そんなら後から、……アヽ、アレ〳〵、いかい苦勞をさつしやるなう。

トこなしあつて、道益、引返して花道へ入る。文藏、ヂツと思ひ入れあつて

文藏　いかに因果の寄合ひでも、思ひし事も鶍の嘴。アヽ、つれないは、命だなア。

ト時の鐘、誂らへの唄になり、文藏、しほ〳〵と向うへ入る。道具廻し。

元の紙仲問屋の道具になり。門口の戸を締め、二重舞臺ズツと上の方に、お芳、寝床に蒲團着て寝て居る。はるか下の方に與茂太、これも蒲團かぶつて寝て居る。九つの鐘、合ひ方にて道具とまる。

ト暫らくあつて與茂太、蒲團の中より頭を持ちあげ、あたりを見て起きあがり、褌を長うして、ソロ〳〵とお芳の方へ行つて、寝息を窺ふこなしあつて、戸棚を明け、菓子盆を出し、菓子を摑み、元の寝床へ歸り、ぐづ〳〵と蒲團の中へ入り、煙管を蒲團の突ッ張りにして、菓子を食つて居る。奥にて

善六　馬鹿よ〳〵。

トこれにて與茂太、ちやつと煙管を外し、蒲團をかぶる。善六、奥より出て

與茂太めは、もうふさつたか。コリヤ〳〵。

ト引摺り起す。與茂太、菓子を咬へて、寝た顔して居る。

馬鹿の癖に、ようふさる奴だや。

トこなしあつて突き放す。與茂太、グニヤ〳〵と他愛なき體にてこける。善六、お芳の方を見て、こなしあつて、お芳に寄り添ふ。お芳、恟りして

よし　誰れぢや〳〵。

善六　シイ〳〵。おれぢやわい。

よし　エヽ、善六さん。何をじやら〳〵と。

善六　コリヤ〳〵。じやら〳〵ぢやないわサ。人は大概目元で知れる。君と我れとは有馬の松よ、藤に卷かれて

與茂　ト抱きつかうとする。お芳、振り切つて逃げるを追ひ
廻す。與茂太、起きて見て居り

與茂　ハヽヽヽヽ。
ト笑ふ。善六、悔りして

善六　ヤア／＼、馬鹿め、おのれ、何を笑ひ居る。

與茂　イヤ、有馬の松ぢや。

善六　ヤ。

與茂　藤に巻かれて寝とござる。人は大概目元で知れる。
ト善六が眞似をする。

善六　エヽ、馬鹿め。何を吐かしをる。
ト箒にて叩き廻す。

善六　アレイ／＼。おかみさんいなア／＼。
ト追ひ廻す。與茂太、逃げる。奥よりお賤、出て來て

しづ　これはしたり、騒々しい。何事ぢやぞいやい。

善六　イヤ、馬鹿めが寝惚けて大騒ぎぢや。

與茂　アヽ、コレ／＼。寝惚けたとは胴慾ぢや。人は大概
目元で知れる。

善六　これは情ない。
トこなし。

與茂　君と我れとは有馬の松よ。

善六　べら坊め。おのれの相手になつて居ては果しがない
よい／＼、もう九つ打つたから、親仁どのの迎ひに行つ
て來うわい。
トぶら提灯に火をともす。お賤、こなしあつて

しづ　ハテ、伯父御ざんは、歸らしやんせいでも、大事な
いわいなア。

善六　イヤ、こなさん達は勝手はよからうが、連れて歸つ
て、内のせいらくさせにやならぬ。

與茂　コレ、藤に巻かれて寝とござる。

善六　エヽ、しつこい奴ぢや。……ドレ、行て來う
ト合ひ方になり、善六、提灯持つて向うへ入る　與茂
太、矢張り歸り立てゝ居る。お賤、思ひ入れあつて

しづ　コレ、お芳、云ひ附けて置いた事、明日の朝と思う
たが、善六が出て行つたこそ幸ひ、今の間に合點か。

よし　アイ／＼。そんなら奥の包みも

しづ　早う取つておぢや。

よし　心得ました。
トお芳奥へ入る。お賤、こなしあつて

しづ　コレ、與茂太。われは矢ッ張りそこに居て、伯父御
や善六が歸つて來たら、ちやつと知らせいよ。

與茂　おれが張り番。合點だや。
　ト戸をピッシャリ閉し、中より押へて居る。お賤、簞笥の抽出しより、小袖着物、子役のも段々に取出し、大風呂敷の中へ包み、重ねる。與茂太、不思議さうに見て居る。奥よりお芳、風呂敷包みを持つて出る。
よし　モシ。お前のお小袖、殘らずこれへ。
しづ　この簞笥のも、大方これで。
　ト右の風呂敷に包む。與芳太、ソロ〳〵側へ來て
與芳　ハヽア、さてはおかみさん、これを曲げるのだやな。
しづ　こちの人の身の上に、無ければならぬ身請けの手附け、百兩は出來ずとも、せめて半分五十兩、拵らへて進ぜたい。わしが小袖を殘らず。足らずば、坊が着物まで。
よし　そりやおかみさん、あんまりな。現在男を寢取られる、女郎の身請けの金まで、お前さんが拵らへるとは、
しづ　ハテ、何をするも、文藏どのが大切さ。何にも云はずに、コレ、お芳、與茂太を連れて、いつもの通り、出入りの婆さまを、頼んでやつてたも。
　ト云ひ〳〵、風呂敷へ包んで渡す。
與茂　お芳、待て。……おかみさん、そりやよしにして下んせ。
しづ　何を馬鹿な、われが知つた事ではない
與茂　イヤ、知つて居るゆゑ、留めるのだや。
　トこなしあつて
コレ、お前の物は男の爲、得心づくでさんす事ださによつて、構はぬけれど、あの文吉さんの着物は、遣つて下んすな。
　ト云ひ〳〵脊負ひ葛籠から出して來て
その代りに、おれが物。……コレ、こりや一昨年の仕着せ。……これは去年の。まだたつた一度ほかせぬ褌もあり、帶もある。これを皆遣つて、坊さんの着物ばかりは質屋へやつて下んすな。……一體、聞えぬは旦那さんだや。女郎にはかかり可愛がつて、お前や文吉さんや、この與茂太の事を何とも思はぬが、おりやどうした拍子の瓢簞やら、文吉さんが可愛うてならぬわいなア。
　トお賤も思ひ入れあつて
しづ　オヽ、よう云うてくれた。ア、忝い。併し、われが物を借るには及ばぬ。ナウ、お芳。
よし　アイ〳〵、さうでござります。與茂太どのゝ物は。
　……
與茂　イヤ〳〵、お芳、大事ない。コレ、おかみさん。お

前はわしをあなづらんすの。

しづ　なんのいやい。

與茂　そんなら、これを遣つて下んせ。

よし　そシ、あのやうに云ひますによつて。

しづ　成る程、あれが志し。そんなら一緒にして、早う持つて行つてたも。

よし　サア〳〵、與茂太どの。

與茂　合點ぢや。

ト風呂敷包みを背負ふ。お芳も包みを抱へる。

しづ　必らず道を用心せい。

與茂　ハテ、さすものぢやない。

よし　連添ふ殿御の爲ぢやとて

與茂　悋氣をせずに我が着物を、コレ、此やうに、質に

しづ　沖津白浪、龍田山。

與茂　さぞ旦那さんは、猪牙に乘つて

しづ　風ひかしやんせねばよいが。

ト唄になり、與茂太、お芳、風呂敷包みを持つて、向うへ入る。お賤、あと見送り、こなしあつて、戶を締め、奥へツイと入る。これより夜更けの體。しつぽりした合ひ方にて、文藏、以前の姿にて、手拭にて頰冠りして兩手を組み、思案しい〳〵出て來る。下座より番太郎、時廻りにて、拍子木を打ちながら出て來て、文藏の姿を不思議さうに見て、顏をさし覗き

番太　これは麁相な。お前は文藏さま。今時分に、エヽ、さては噂の通り、吉原歸り。それにしてはお早うござります。ハヽヽヽ。イヤ、もうお休みなされませ。

ト拍子木を打つて向うへ入る。文藏、これにて心附きあたりを見て

文藏　最前の仕儀、もう內へは歸らず、直ぐに兩國の上から身を投げやうと思ひ詰め、フト文吉が事を思ひ出して、疱瘡は仕舞ふし、常の遊び事から育ちから、手を缺いたら、どうしてあらう、斯うしてあらうと、死ぬる今でも坊主が生先き、思ひ〳〵、兩國橋も過ぎて、ツイ我が門口。……ハテ、子といふものは詮ないものぢやな。深切に思うてくれる、お賤が事はさほどにも思はねど、坊主めが事は……ア、どうぞ寢顏なと、ちよつと一生の別れ暇乞ひして

ト本舞臺へ來り、內へ入らうとして、氣を替へ

イヤ、男のやうにも無い。

ト思ひ直し、又向うへ行かうとする。向うより人影見



えるこなしにて、舞臺へ立戻り、橋がゝり、ひや間の戸を明け、隱れる。此うち始終合ひ方。夜更けの景色にて、向うより伊平次、泥坊の形にて金挺を持ち、ウツ〳〵出て來て、本舞臺門口へ來て、戸口を窺ひ、明けようとして、ひや間を見附け、明いてあるゆゑ、幸ひといふこなしにて、内へ忍び入る。向うより火の廻り、金棒引いて出て來て、直ぐに下座へ入る。暫くあつて、上の方の板塀を、中よりこち破り、伊平次ズツと出て、あたりを窺ひ、ノツ〳〵と二重舞臺へ上りが、簞笥へかゝる、此うち文藏、伊平次の出た穴より窺ひ出て、伊平次を見附けてさし足にて、見世の方、橋がかりへ隱れる。伊平次、こなしあつて、簞笥の抽出しを拔き、愕りして、又下の抽出しを拔いて見て、これも無いと驚き、又次を見ても何も無いゆゑ、いろ〳〵思ひ入れあつて

伊平　ハテ、見かけによらぬ。でも、薄い内ぢや。

ト呆れたこなしある。文藏、ソロ〳〵窺ひ出て、落ちてある金挺を取上げて、脛を掻く、伊平次、愕り轉けながら、逃げようとするを、文藏捕へる。振り切る。兩人立廻りのうち、行燈打返し、暗がりにて文藏、伊平次を盲目打ちに金挺にて散々に打ち据ゑるところへ、向うより善六、提灯提げ、善右衛門と連れ立つて出る。

善右　文藏めは又出てうせたな。

善六　どう矯め直しても、彼奴はいけませぬぞや。

善右　あれでおれが思ふ通りに。

ト云ひ〳〵本舞臺へ來て

コリヤ、戻つたぞよ。馬鹿め、明け居らぬか明け居らぬか。

ト無性に戸を叩く。文藏、愕り、うろたへ、また上の方の板塀の中へ隱れる。伊平次よろしくあるべし。表よりは

善六　親仁どのが戻つてゐるが、何奴も起き居らぬか。

二人　明け居らぬか〳〵。

トやかましく云うて戸を叩く。奥より

しづ　アイ〳〵。今明けてあげますわいなア。……せはしない。

ト云ひ〳〵二重舞臺より下りて

これはしたり。行燈が消えてある。

トこの拍子に伊平次に突當り、愕り

ヤヽ、爰に誰れか寐て居るは。……ヤア、こりや泥坊ぢや〳〵。盗人が入つてゐるわいなア。

ト飛び退き、慄うて居る。これを聞き、外にて

善右 ヤア〳〵。内へ盗人が入つてゐるとは。善六。

善六 親仁どの。

ト両人悄りして、戸をこぢ明けて内に入り

大方、此奴ぢや。

ト肩息になつてゐる、伊平次を押へ附ける。善右衛門も立騒ぎ

善右 マア〳〵、これで縛れ〳〵。

ト最前の荒繩を取つて来て渡す。善六と二人して引立てる。伊平次、足の立たぬこなしにて、グニヤ〳〵と倒れる。

善六 マア、此奴は腰が立たぬが、さては屋根越しに踏み外して落ちたか。

善右 お賤、さうか〳〵。

しづ サア、わたしやどうぢやゝら。

ト矢張り怖がつて居る。

善六 ハテ、何も其やうに怖がる事は無い。泥坊めを捕まへて置いたれば、氣遣ひはない。何も失せた物は無いか。とつくりと内を詮議せにやならぬ。マア、あの簞笥が氣ぶさいな。

ト行かうとするを、お賤、悄りして、ちやつと留め

しづ ア、コレ。モシ、あの簞笥の中は、改めいでも、ようござんすわいなア。

善右 ハテ、よいでは、濟まぬわいやい。

しづ それでも、あの簞笥はナ。

善右 どうも心元ない。

ト留めるお賤を引退げ、二重舞臺へツカ〳〵と行つて簞笥の抽出しを明け

そりやこそ無いワ。

しづ エ、。

トはつトこなし。善右衛門、又下の抽出しを明け

善右 これも空ぢや。この次は。

ト段々明けて見て悄りする。此うちお賤、一度々々ハア〳〵と思ひ入れ。善右衛門、こなしあつて

ても、早い事をし居つたな。何でもこりや相摺りがあつて、し居つたに極まつた。善六、其奴に云はせい。

善六 合點ぢや。コリヤ、どこへ逃がした。相摺りを吐かしやアがれ〳〵。

ト善右衛門と一緒にせちがふ。お賤、フトこなしあつて

しづ　オヽ、さうぢや。ほんに、あの簞笥の小袖は、幸ひその、盜人が盜んだのぢやわいなア。

兩人　何が幸ひな事。盜んだに極まつた。サア、吐かせ。どうぢや。

ト伊平次、苦しきこなしあり

伊平　アヽ、モシ、其やうにむがうせずと、マア／＼、とつくりと聞いて下され。さりとてはお綺麗な内方で、悉く皆荒山へ柴刈りに行たやうに、最前からうろついてばつかり。まだ小裂れ一尺、箸片し盜つた覺えはござりませぬ。これが違ひなしのまんの惡さ。仲間外れの同類なし。

善六　イヤ、盜人猛々しいと、茲な横着者めが。

善右　さうぢや。おのれ、簞笥に入れて置いた小袖は、殘らず盜んだに違ひはあるまい。

しづ　アイ／＼、違ひはござんせぬ。簞笥の小袖は元より坊が物まで、あの盜人が

伊平　アヽ、コレ／＼、女中さん。お前までが其やうに、女子だてら執成しはしてくれず、お前までが覺えもないおれに。

しづ　サア、それでも氣の毒ながら。……お前が盜らしやんしたぢやないかいなア。

伊平　これは情ない。盜らうと思うて、明けて見たが、簞笥は皆空から。何にも無かつた。

しづ　エヽ、それは。

ト善右衛門を見て、ちやつとこなしあつて

なんの、空から。誰れも外に盜つた者は無い。盜人に入つたゆゑ、大方お前が盜つたのぢや。それで、ソレ、其やうな、盜人ぢや。ナア、伯父御さん。

伊平　これは又迷惑な。

善右　何が迷惑。大泥坊めが。有やうに吐かさぬと、おれが仕樣があるわい。

ト伊平次を無理に引ッ立て、門口の柱に縛り附ける。

善六　親仁どの、そんなら其奴を

善右　どうで一通りでは吐かすまい。斯うして置いて、また奥も、とつくりと吟味せにやならぬ。サア、お賤、われも來て、共々に。

しづ　奥の物はまだ盜りはしよまい。もう止しにして

善六　エヽ、氣の弱い・お賤さん。泥坊に油斷がなるかいの。
しづ　ちやというて、奥を見るには及ばぬわいなア。
善右　イヤ、及ばぬぢやない。早う來い。
伊平　こりや、どういふ災難にあはうやら知れぬ。
善右　なんの災難。奥を吟味した上で、どうするか。盜人め、待つて居らうぞ。
ト唄になり、善右衛門・善六、お賤を引ッ立て、奥へ入る。あと合ひ方になり・伊平次縛られながら
伊平　なんの事ぢや。盜みに入つて何も盜らず。覺えも無いに、此ざまとは、何をしても不仕合せ。泥坊も素人ではゆかぬわい。
ト投げ首して、しつぽりとなる。奥よりお賤、窺ひ出て、伊平次が側へ怖々寄つて
しづ　コレ、盜人どの、堪忍して下されや。
伊平　エヽ。
ト惘りする。
しづ　ほんに、覺えもない今の仕儀。無實を受けて、さぞ迷惑であらうが、ひよんな所へ入つたが、こなさんの運の惡さ。何を隱さう、あの簞笥の小袖は、わしが隱して皆質においたわいの。
伊平　エヽ。そんなら、お前が泥坊か。
しづ　サア、それも連れ添ふ夫が大切さ。無ければならぬ手詰めの金、今のは連合ひの伯父御、大の惡黨。それで金の自由がならず。でも急にお主の爲に、吉原の女郎を身請けの手附けに、渡さねばならぬ義理詰めによつて
伊平　ムウ。お主のお爲、吉原の、女郎を身請けの手附け義理詰めとは……して、吉原の女郎とは、そりやどこの、何屋の内でござります。
しづ　サア、ちつと樣子あつて、慥かに角町萬字屋の
伊平　もし八つ橋とは云ひませぬか。
しづ　ヤア／＼、それをこなたは、どうして
伊平　アレ、この見世の樣子、綿商賣、そんなら爰は紀伊國屋、文藏さまの内でござりますか。
しづ　アイ、文藏どのは連合ひ、わしや女房の賤といふ者。
伊平　ヤア、これは。
ト手を打たうとして、縛られて居るゆゑ、足にてこれはしたり。
トとんと舞臺を踏んで、こなし。
しづ　ハテ、思ひがけない、盜人のこなさんに、こちの人

は近附きでござんすかいなア。
伊平　イエ〳〵。文藏さまといふお名は聞いて知つて居れど、まだつひぞお目にかゝりませぬ。
しづ　何にもせよ、樣子のありさうな事。
　ト立寄り、繩を無理に解いてやる。
伊平　これは〳〵。
　ト兩手を擦り〳〵
存じよらぬ事にて泥坊に入り、文藏さまのおかみ樣のお前にも、お初にお目にかゝります。
しづ　コレ〳〵、樣子を早う。奧には伯父御や善六、見附けられては、爲にならぬわいの。
伊平　サア、何を隱しませう。わしは彼の八つ橋が眞實の兄、越ケ谷の伊平次といふ百姓。
しづ　エヽ。
　ト愕りする。
伊平　親達の身の上に、ちつと譯がござりまして、妹めは少さい折に、伯父者人の方へ、わしは在所へ、同胞引分れて暮らすところ、母者人は妹が可愛さ、この江戸にて再緣、成人して下野の、舟橋のお屋敷へ腰元奉公。その時に、同家中の、佐野次郎左衞門さまと云ひ交し、……イヤ、樣子は云はいでも文藏さまのお主筋、とつくりと判つてござりませう。
　ト思ひ入れあつて
時に、妹めが今の身の上、文藏さまの段々の、お世話になるが氣の毒さに、わざ〳〵在所へ、詳しう書いておこした頼み狀、又あとの月、門跡樣へ參つた次手に、吉原へ尋ねて行て、逢うた時にも變らぬ頼み。只早く勤めを引いて、次郎左衞門さまと女夫になりたいとの事。生さぬ仲の父御の强慾。實の兄ゆゑこの伊平次へ、手を合せてのくれ〳〵の頼み。アヽ、可哀や、どうぞと思うても高が水呑み百姓。それから、何の便りもせず、逢ひに行からと思へど、せめては金の五兩でも、十兩でも、いつそ身請けの金でも拵らへてと、妹が可哀さに、フツと惡心の出來心。道ならぬ泥坊。少さいこの體を、斯うふつくつてこの江戸へ、日の暮れるを待ちかねて、出かけた所は傳馬町、お世話になる紀文さまとも露知らず、ひや合の明いて居たを幸ひ、忍び込んで此したら。まだしも文藏さまのお目にかからぬが仕合せ。おかみさん、必らずこの樣子を沙汰無しに、お頼み申します。
　トお賤、此うち伊平次のこなしに心を附けて居て

しづ　ハテ、面妖な。八つ橋どのの兄御なら、吉原の樣子をとつくりと、
伊平　イヤ、何も存じませぬ。今朝越ヶ谷から出て來ても、妹の賴みの金が出來ぬゆゑ、わざと逢はずに
しづ　そんなら道理、八つ橋どのは
伊平　エ、、
しづ　イヤ、サア、……八つ橋どのは、是非こちの人が、身請けをさしやんす約束。
伊平　サ、、其お世話を、妹めが、きつう氣の毒がつて
しづ　いとしや、なんにも知らずに。
伊平　貧の盜みにこの身のお話し。
しづ　云うてよいやら、惡いやら。
伊平　ハテ、何も仰しやらぬが、わしがお賴み。文藏さまには、又追つてお目にかゝりませう。
しづ　エ、、つんと……氣の毒な事ではある
ト思ひ入れある所へ、向うよりお芳、與茂太戻つて來て
よし　モシ〳〵、おかみさん。今まで待つて居りました。
與茂　貸さぬと云うたを、やう〳〵五十兩。
ト金を出す。お賤、取つて
しづ　オ、、幸ひな所へ。コレ、兄御さん、爰に五十兩。この金持つて、ちやつとお前は、吉原へ。
伊平　エ、。そんなら此お金を。
しづ　八つ橋どのの身請けの手附け。都合は後から文藏どのが。
伊平　エ、、忝ない。矢ッ張りこりやお世話に
しづ　これで盜人に入つた、志しが立たうがな。
ト屹度なる。
與茂　エ、、そんなら彼奴は泥坊。
しづ　コリヤ、麁相すな。
ト留める。伊平次こなしあつて
伊平　どう廻つても、矢ッ張り紀文さまの
しづ　コレ、マア、無事なうちに……イヤ、無事な顏を早う。
伊平　妹めも、さぞ喜びませう。
ト無性に喜ぶ。お賤、ホロリとする。與茂太、「彼奴を」と力むを、お賤、留めるうち、奥にて
善右　お賤、どこへ行た。おぢや〳〵。
ト忙しく呼ぶ。
よし　アレ、伯父御が戻つてゐるやら

しづ　コレ、お前は早う。
伊平　直ぐに吉原へ。
しづ　大儀であつた。二人ともに、おぢや。
ト唄になり、與茂太、お芳を連れて、お賤、ツイと入る。伊平次、こなしあつて
伊平　忝ない〳〵。なんでもこの金を妹に。さうぢや。
ト行かうとするところへ、善六、ツカ〳〵と出て
善六　待て、泥坊め。
伊平　ヤア。
トぎよつとする。
善六　いま持つて居たは慥かに金。エヽ、さては餘所で働らいたか。但し此方の品物を金に直したか。なんでも怪しい、その金おれが
ト取りにかゝるを振り放し
伊平　コレ、盗人ぢやというて、金持つてゐまいか。馬鹿な事を。
ト引き退ける。
善六　ヤア、此奴、最前と違うて。
伊平　オヽ、少しはやつとうも覺えて居るわい。
善六　イヤ、ちよこざいな。

トこれより兩人、をかしみの立廻りよろしくあつて、伊平次、善六を見事に取つて投げ
伊平　一時も早う妹に。ヤ、してこいなア。
ト尻引ツからげ、向うへ一散に走り入る。善六、起き上がり、「われを」と跡追ツかけて入る。これより好みの合ひ方になり、文藏、右の間より出て、向うをキッと見て
文藏　思ひがけない今の様子。八つ橋が眞實の兄、越ヶ谷の伊平次。……いとしや、後の祭り、只何事も……せめては一筆。
ト誂らへ、胡弓入りのめりやすになり、文藏、こなしあつて、掛け硯を取つて來て、有り合ふ角行燈へ書置を書き、思ひ入れあつて、奥をちよつと拜み、身拵へして表へ出ようとするところへ、奥より文吉走り出て
文吉　父樣イなう。
ト取り附く。文藏、ハツとこなし
文藏　コリヤ。シイ〳〵。
ト抱き上げ、顔をヂツと見て、泣きながら下に居る。
文吉　コレ、父樣。また吉原へ女郎買ひに行くのか。やら

ぬ〳〵。今夜は坊や母さんと一緒に、內でねんねしてお
くれいなう。
ト文藏、これを聞いて、物云はずに文吉に指さし、我が顏にも指さして、握り拳にて體を叩き、兩手を組み、くひしばり泣く。文吉、前へ廻り、無理に膝の上へ上がり、抱き附き
父樣、眠たい。寢さして下されいなう。
文藏　コリヤ〳〵。シイ〳〵。
ト奥へ心遣ひあつて
コリヤ、大きな聲すないやい。
トそれなりに立ち上がり、こなしあつてそこらをゆすぶり、二三遍歩くうち、文吉、寐る。その顏をヂツと見て、投げ首して思ひ入れあつて、有り合ふ蒲團を足にて引寄せ、その上へそつと寐させ、叩きつけ、とつくりと寐入らせ、ズツと立ち上がり、表へツカ〳〵と行く、後より抱き附き
文吉　父樣。なんぼうでも、やらぬ〳〵。
文藏　ヤア。
文吉　なぜねんねさつしやらぬぞいなう。
ト文藏、思ひ入れあつて
文藏　オヽ。
ト抱き上げ
サア、ねんねぢや〳〵。
トいろ〳〵すかして、又そこらをゆすぶり歩くうち、文吉眠る。文藏こなしあり、また寐所へ連れて行つて叩き附け、寐入らし、奥へ心遣ひ樣々あつて、ソツと起きあがり、さし足にて表へ出かけるうち、文吉、ズツと起きあがり、後より附いて行つて、よき所にて
文吉　父樣。坊も去なう。
文藏　ハア、。
トぎよつとして又抱き上げ、今度はせう事なしに門口へ出て、あたりを見い〳〵、思ひ入れあつて
ねん〳〵ねんねこや。可愛の坊を誰れがした。
ト叩きながら、花道中ほどまで行くと、ゴンと鐘の音する。文藏、思ひ入れあつて、氣の急く心にて、やうやう寢入らせ、さし足にて本舞臺へ立戻り、又ソツと蒲團の上へ寐させ、今度は外の蒲團を押へに掛け、寐顏を見い〳〵後退りして門口へ出て、それなりにヂツと戸を締めよせ、ツイと向うへ行かうとする所へ、善六、すご〳〵と獨り戻つて來て、花道にて

善六　ヤア、文藏。
文藏　善六か。
善六　われを。
トかゝる。立廻りにて、善六を本舞臺へ見事に投げ
文藏　おツつけ夜明け。さうぢや。
ト向うへ、ツイと走り入る。善六、起きあがり、うろたへ、内へ入り、「どこへうせた」と捨ぜりふにて、隷れ廻る所へ、與茂太奥より、ツカ／＼と出て
與茂　ヤア、善六か。
善六　馬鹿め。退き居らう。
ト引きのける立廻り、此うち文吉、目を覺まし
文吉　父様イなう／＼。
ト舞臺中を駈け歩く。
與茂　ヤア、文藏さんはどこへ行かしやんした。おかみさんはどこぢや。おかみさん／＼。
ト奥バタ／＼にて、お賤、猿轡をはめ、後ろ手に縛られながら走り出る。文吉、取り附く。
與茂　ヤア／＼、これは。
ト手早く猿轡を外し、繩を解く。
しづ　アタ嫌らしい伯父御面め、わしを縛つて心に隨へと無體な事を。この身は叶はねど、やう／＼爰まで。
與茂　そりや危ない加減ぢやあつたな。
善六　親仁の戀人お賤。
トお賤にかゝるを、與茂太支へる。此うち行燈の書置を見附け
しづ　「書置きの事。」
トちよつと讀み
ヤア／＼。こりや八つ橋が死んで、お主のお身の上。云ひ譯なく、こちの人が死なしやんすわいなう。
與茂　エヽ。
ト恂り。善六をちよつと當てる。善六、倒れる。
文吉　父様イなう／＼。
ト駈けあるき、お賤に取りつく。
しづ　オヽ、可哀や。
ト抱き上げ
こちの人が死なしやんしては、わしやこの子は何とせう。どうせうぞいやい／＼。
ト大泣き。向うバタ／＼にて、伊平次走り出て
伊平　コレ、お賤さま／＼。いま吉原へ行く道にて、藏前にて萬字屋の大勢に出合うたれば、妹は次郎左衛門さま

が手を負はせ、養生叶はず、死にましたといな。
しづ　それゆゑ、こちの人文藏どのも、この書置を殘して死ぬる覺悟。
伊平　ヤア〳〵。この書置とは。
ト行燈を見て
しづ　ほんに、こりやお主のお爲に、心盡しも水の泡。
大切の茶入れは毀れ
伊平　八つ橋は死ぬる。
しづ　お主の次郎左衛門さまは下手人。
伊平　身一つに迫り、云ひ譯無さに、死ぬるといふ書置。
文吉　母樣、コレ、父樣は死なつしやるかいなう〳〵。
トお賤、文吉を又抱き上げ、いろ〳〵こなしあつて、伊平次を捕へ
しづ　コレ、兄御。こりやマア、どうせう〳〵。
ト振りまはす。
伊平　どうせうというて、妹は死ぬる。お世話になる文藏さまはこの書置。途方に暮れておれも……おれも〳〵、おれもぢやわいなう。
トうろたへ、大泣き。善六、起きあがり
善六　もうこの上は。

トかゝる。與茂太、立廻る　お賤こなしあつて、伊平次を捕へ
しづ　コレ、兄御さん。まだ間の無い事、どうぞ。
伊平　さうぢや。なんでも文藏さまを。
與茂　おれも一緒に。
しづ　坊もおぢや〳〵。
文吉　父樣イなう〳〵。
トお賤、文吉を連れ、こけつ、まろびつ、與茂太、介抱する。伊平次、行燈を提げながら、皆々うろたへ、こなしあつて、花道へ行きかけ
しづ　こちの人イなう〳〵。
文吉　父樣イなう。
與茂　旦那さんイなう。
伊平　文藏さまイなう。
ト皆々よろしく、樣々こなしあつて花道へ行き
コレ、おりや此やうに尋ねても、肝心の文藏さまの顏は知らぬが。
しづ　そりやわたしが居る。
伊平　そんならよい。サア、一緒に。
善六　イヤ、死ぬる文藏、尋ねさゝうよりは。

ト善六、出ようとするを、伊平次、ちやつと戸を締め
伊平　コレ、早う。
しづ　こちの人イなう。
文吉　父様イなう。
與茂　旦那さんイなう。
ト入り亂れに呼び〳〵、向うへ入る。伊平次、矢張り行燈提げながら「文藏さまイなう」とあたりを尋ね尋ね、こなしあつて、向うへ入る。

引　返　し

造り物、本舞臺、三間の間、柳原、雪降りの體。小兵衞、數右衞門、三婦、三人して、文藏を取卷き
數右　國で意趣ある、次郎左衞門が肩持つ文藏め。見附けた上は百年目。小兵衞、三婦、彼奴を叩き殺せ。
小兵　最前死ぬ樣な目に遇はせたに、息の根が通ふとは、どうでもしぶとい文藏め。
三婦　おれが爲には娘の敵、次郎左衞門めも、おのれも生けては置かぬ。
文藏　行きがけの駄賃、意趣ある三人出合うたは、此方の幸ひ、ひツくるめて冥土の供ぢや、覺悟ひろがう。
數右　合點ぢや。
トこれより文藏、三人を相手に立廻り、よきところにて、向うより善六、走り出て
善六　ヤア、こりや文藏を小兵衞さん。
小兵　善六か。よい所へ。われも手傳へ。
善六　望むところぢや。
皆々　文藏、うぬを。
文藏　なにを。
ト鳴り物入りになり、文藏、四人を相手にタテあつて、ト二三人を打ち据ゑる。小兵衞、眞の茶入れを落すを取つて
ヤア、こりや眞の茶入れ。
小兵　それを
ト切つてかゝる。文藏、一刀に切るところへ、伊平次與茂太走り出て
伊平　コレ〳〵、文藏さま。おりや八つ橋が兄。死んだと思うた妹が、息吹き返して、又の養生。
文藏　嬉しや、この茶入れが手に入れば、若旦那のお身に氣遣ひは無いワ。
與茂　お前も死なずと、早う內へ。

ト三人起きあがり、皆々にかゝるを、立廻りにて押へ

附け

文藏　まづ、今日はこれぎり。

打出し

青樓詞合鏡（終り）

小いな
半兵衛

# 月武藏野穐狂言（つきのむさしのあきのせわごと）

通し狂言

「月武藏野穐狂言」は、其まゝで再演はされなかつたが、五瓶自身も「傀儡浅妻船」で趣向の一部をソツクリ用ひ、また三世櫻田治助は、この三幕目を二度までも自作の狂言に應用したものである。爰へ出した番附は、安政三年四月、中村座所演、「一曲奏子寶曾我」の一部で、即ち本篇の三幕目をソツクリ其まゝ借りたものである。改作された狂言の例として爰へ出して置く。この時は、稲野谷半左衛門を三駒半十郎、稲野谷半十郎を三駒幸次郎、小いなをお八重、磯町を江島と直して演じたのであつた。矢張り我童と粂三郎が、二役づつ早替りをしたものであつた。



# 月武藏野穐狂言

## 序幕　矢數の場

役名——濱田娘、小稻。傾城、田毎。下部、瀧平。桃の井先次郎。親方、十兵衞。松屋儀八。奴、德助、同、土手助、同、挺平。三河屋利兵衞。藤島主計。中間、傳助。桃の井典膳。東小僧鉦八。荒川伴作。岩城彌源次。傾城、柏木。若黨、友次。稻野谷半十郎。

造り物、平舞臺。深川八幡社内の體。柱より奧に西の方、本社の横の方を見せ、東の方に二軒茶屋、宮本の門口。見物の方へ向ひ合せに見る道具に好みよろしく、宮神樂にて幕明く

ト町人甲、乙、丙、丁、兩方より二人づゝ出て。

甲　なんと、皆、見やつしやれ。いつでも、この深川の八幡樣は、賑かな事ではないか。

乙　それ〳〵、二軒茶屋も殊の外忙がしい。

丙　江戸はどうでも繁華。どこへ行つて見ても、人混で大繁昌サ。

丁　その繁昌の次手に、これから土橋か仲町へ行つて、おいらも一きり遊ばうではないか。

甲　遊びたけれど肝心の

乙　金無き矢間重太郎。

丙　イヤ、遊ぶ事は親の喜內ぢや。

丁　それ〳〵におりゐを見て行かうわいの。

甲　おりや心が浮橋ぢやなア。

乙　コレ、皆の衆、見やしやれ。何やら面白さうなものが來るぞや。

丙　ほんに、ありや吉原の俄か知らん。

丁　イヤ〳〵、ありや俄ぢやない。最前、夷の宮で聞いたが、どこやらの大名の息子が、吉原の女郎、藝者を連れて、上方の祭り囃子をして、この八幡樣へ參るのぢやげな。

甲　そりや見ものぢや。上方の囃子とは珍らしからう。

乙　そんなら、皆一緒に、見ようではないか。

丁　サア〳〵、皆、ござれ〳〵。

ト　また宮神樂になり、ワヤ〳〵と正面へ入ると、神樂打ちあげ、向う揚幕の中にて、囃子になる。作作、黑羽二重の着流し、大小にて、絞りの手拭を首に掛け、うしろ向きにて、屋體の世話を燒き〳〵出る。この屋體、御殿造りにて、半すだれ。これに葵の蔓、方々に下がり、屋體の中に正面、先次郎、傾城田每の太鼓、傾城柏木と藝者二人の三味線、太鼓持三人の摺り鉦、笛は蔭より附けて、この人數皆々練りに三葉葵の模樣、揃ひの着物にて、後より松屋儀八、亭主にて世話役のこしらへ。この外、若い者、屋體を持ち、靜かに出る。花道の間、地にて、本舞臺へ直る。作作、拍子木を打つ、これにて、屋體、正面へ直る。これより所望になる。面白き振りあつて納まる。

作作　ヨウ〳〵。若殿の太鼓、太夫どのゝ三味線、藝者どもの摺り鉦。どうも堪つたものではない。

儀八　左やう〳〵、いつそ私しも、呆れた〳〵。上方のこの囃子。

先次　なんと、どんなものぢや。

ト云ひ〳〵屋體より出てくる。これにて柏木はじめ皆皆も、一緒に舞臺へ出てくる。

この先次郎が思ひ附き、今日この富ケ岡の八幡へ、是非參詣せねばならぬ事があるゆゑ、昨夜廓へ行て今朝からの趣向ぢや。太夫をはじめ、若倉田每。藝者どもと一緒に上方の囃子を習ひ、そこで屋體が葵祭り。加茂の名物模樣に附けた三葉葵は、離れぬ證據。どうぢや、太夫、嬉しいか〳〵。

柏木　何を云はしやんすやら。わたしが否ぢやといふものを、無理やりに三味線彈いて、爰へ來るうちも、どうやら恥かしうてならなんだわいなア。

田每　それ〳〵。廓と違うて、仲町とやら、土橋とやらは、藝者の巣と聞いて居れば

藝甲　わたしらも、よう彈かぬゆゑ、彈きぞこなひばつかり。

藝乙　さぞ聽きづらかつたでござんせうわいなア。

儀八　事も愚かや。なんぼうこの深川に藝者が澤山でも、また吉原花の君たちの三四郎のちよつかい。

作作　此方の若殿のすつてんてれつく。藝者共のちやんちきちんまで、江戸で珍らしい上方囃子。恐らく吉原の俄でも、斯ういふ事はあるまい〳〵。

先次　なんのあらう。これを上方では、京で祇園、大阪で新町、島の內の美しい藝者どもが多勢出ると、その綺麗さといふものは、

ト　これにて柏木、ムッとこなしあつて

柏木　殿さん、お前はそれを、いつ見やしやんしたえ。

先次　ハテ、都在番の時。

柏木　そんなら、その時、祇園町や新町の女郎さんや、藝子さんに。お前は〳〵。

ト　胸ぐらを取つて振り廻す。

先次　コリヤ〳〵、太夫、こりや、どうするのぢや〳〵。

柏木　お前が常住江戸の女子と違うて、上方は美しうて、物和らかなと云はしやんす筈ぢやわいなア。

作作　最早下つてしまつたあと、百三十里あなたの燒き餅とは、こりや太夫、殿には似合はぬ〳〵。

先次　それ〳〵、この先次郎は上方に色は無い。ちよつと噂をしたばかり。

柏木　惡性なお前。合點がゆかぬわいなア。

田毎　柏木さん。其やうに氣を揉まずと、打ツちやつて置いたがよいわいなア。

藝甲　太夫さん。なんぼお前が其やうに腹立てさんしても、

藝乙　菅原傳授の四の口、菅丞相が怒りの段。

皆々　都の方へは屆きませぬ。

先次　御持病が起つたら……又おれが癪を撫らねばならぬ。モウ〳〵、太夫、機嫌を直して、わつさりと。

作作　宮本へ行て、酒々。

儀八　サア、皆、一緒に

女皆　柏木さん。

ト　手を取るを振り離し

柏木　エヽ、知らぬわいなア。

ト　ぴんとする。先次郎、こなしあつて

先次　こりや酷うあしらふな。さてはなんぢやな。此方の客のくりそに、矢ツ張り氣があるのぢやな。

柏木　くりそとはえ。

先次　ハテ、登りつめて居る久利勘解由どの。

柏木　アタ好かぬ。又、そんなこと。

先次　イヤ〳〵、どうでも、どうしたに違ひあるまい。

柏木　そんな女郎ぢやないわいなア。

田毎　そりやわたしらが證據人。この間も、ソレ、廓で大恥掻きの、久利勘解由さま。

作作　何を吐かす。

トむつとする。

大切なお使者の勘解由さま、惡う仰せらるゝと、却つてお身のお爲になりませぬ。

先次　オツト、そりや合點ぢや。

作作　お合點なら、早く宮本方へ。

田毎　柏木さんも機嫌直して

皆々　サア〳〵、お出でなされませ。

トまた騷ぎ唄にて、右の一群れ、殘らず臆病口へ入る。また宮神樂になり、向うより三河屋利兵衞と下部瀧平、連れ立つて出る。

利兵　コレ〳〵、瀧平どの、この利兵衞に、少しも如才はごんせぬわいの。

瀧平　樣子を聞いては、打捨て置かれぬ大切な品。殊に、人手に渡してよいものでござるか。

利兵　イエ、こつちも質商賣。日限は、今朝から今まで、待つたは、お大名だけ、金が出來たら渡さうと、彼の硯も爰へ持つて來ました。金が出來ねば、直ぐに此方へ賣る約束。どちらへなりと、瀧平どの、こなさん政略つけて、しつかりとした、返事を聞かして下さりませ。

瀧平　いかにも。日限は昨日切れたれば、あれは脇外へ賣らつしやれても、云ひ分はなけれども、大切なお家の重寶。殊に、その寶改めとあつて、都よりお使者のお下向。是非請け戾さねば叶はぬ品。これサ、利兵衞どの、口で又々とは申さぬ。瀧平が兩手を下げる。四五日ならずば、二三日……サア、それともならずば、たつた二日。

利兵　ア、コレ〳〵、瀧平どの、此方から頼みまする。どうぞ料簡して下され。

瀧平　すりや、二日ならずば、せめて明日一日のところを待つて下され。それまでに拙者、キツと金調達いたして請け戾す程に、どうぞ聞き分けて

利兵　何とも迷惑な事ではある。

ト頭を掻く。

瀧平　何分平にお頼み申す。

利兵　とんと氣の毒なものなれど、ようごんす。こなさんの如才ない事を知つて、明日一日はならぬ、今日中待ちませう。

瀧平　ヤ。

利兵　ハテ、今日中といつても、暮れるまではならぬ。七つまで待つてやる程に、金拵らへて、どうぞ請け戾すやうにさつしやりませ。

瀧平　ムウ。すりや今日七つまで。
利兵　金が出來ずば、此方へ賣りまする。
瀧平　成る程〱、こなたの料簡、忝ない。骨が舍利になつても、請け戻さにやならぬその硯。キツと金拵らへて、利兵衞どの、こなたの宅へ。
利兵　イヤ〱、こなさんが金拵らへるに勝手がよければ、おれも矢ッ張りこの深川へ。
瀧平　そりや幸ひ。若殿の御用承つた身共なれば、どうでお邸へは歸らぬ。もし今でも金調達いたさば
利兵　こなさんに附き合つて、仲町の尾花屋に
瀧平　待つて居て下さるか。
利兵　どうしても二兩ほど、もめねばなるまい。
瀧平　忝ない。後まできつと。
利兵　必らず違はぬやうに
瀧平　今日の七つ。
利兵　いづれ返事を
瀧平　利兵衞どの
利兵　瀧平どの
瀧平　マア、行て待つてござれ。
ト唄になり、利兵衞引返して向うへ入る。跡に瀧平殘りこなしあつて
若殿の御放埒、後先なしに大切な、松蔭の硯を……これも憖かに。何にもせよ、金の都合を、ハテ、どうしたものであらうなア。
ト大拍子になり、瀧平思案してゐる。先次郎、衣裳、羽織にて、無性に腹立ち
先次　留めるな〱。もう歸るぞ〱。
皆々　マア〱、お待ちなされませいなア。
ト儀八、田毎、その外女連、留めながら一緒に來る。瀧平、これを見て
瀧平　ヤア、若殿樣。どれへ。
先次　瀧平か。よい所へよう來た。其方にも先達て云ひつけて置いた身請けの事、是非おれが方へすると云ふのに、親方が云ふには、此方に相談があるほどに、此方へ行けと云うたとて、おれをせかせをる。それで邸へは歸らぬ。仲町とやら、土橋とやらへ遊びに行くか、但し大和屋へ行くほどに、其方も供せい。
瀧平　エヽ。
トこなし。
儀八　これはしたり、殿樣、どうでござりまする。可哀さ

うに太夫樣は、外へ行く心は無いによつて、お前にお話し。

藝甲　それ〳〵。その請け人はわたしら。もう堪忍してあげなされ。

川每　あれ程滅を盡して云はしやんす柏木さん。それを其やうに疳癪起すのは、先さん、粹に似合はぬぞえ。

女皆　もう機嫌直して　ちやつと仲直りのお杯を。

先次　イヤ〳〵、杯どころか、物も云やせん。

ト行かうとするを、皆々留めて

女皆　ハテ、待たしやんせいなア。

先次　イヤ、待たぬ〳〵。肝心の太夫が出て留めぬのに、おれがどう粹たれるもので。

ト花道へ行きかけると、皆々留めながら、附いて行く。矢張り此うち右の神樂にて、向うより藤島主計、着附け、上下にて、出て來る。跡より桃の井典膳、同じく着附け、繼ぎ上下。岩城彌源次、羽織、袴、その外家來附添ひ來る。先次郎行き合ひ

先次　ヤア、藤島主計さま。

主計　ハテ、怪しからぬ惻り。

典膳　先次郎、いづれへ。

先次　イヤサ、これは。

典膳　大殿の病氣は打ッちやつて、この所の遊興。

主計　等閑ならぬ仰せゆゑ、藤島主計もこの所へ。

彌源　ハテ、氣の毒千萬。

ト先次郎、こなしあつて、チリ〳〵と本舞臺へ立戻る。これにつれて、主計、典膳、彌源次、本舞臺へ來る。主計、こなしあつて、典膳もろとも、上座の床几に腰をかける。先次郎はじめ皆々下に居る。爰へ下座より伴作出る。神樂打ちあげる。

伴作　これは〳〵、御家門たる藤島主計さま。伯父御典膳さまにも、何ゆゑ當所へ。

典膳　主計どの同道にて、この所へ參りしは、先次郎に申し渡す仔細あつて。

主計　して、その女子どもは何者。

伴作　ハア、こりや皆廓の

ト云はうとするを瀧平・留めて

瀧平　イヤ〳〵、苦しうござりませぬ。この八幡に參詣の者。コリヤ、皆の者。大切な場所、ナ、其方達も用事はあるまい。ソレ、神前へ、參れ〳〵。

ト目顏で敎へる。

儀八　ハイ／＼、畏まりました。サア、皆、一緒に彼の所へ。

藝甲　それ／＼。爰に居ては氣が詰まる。ちやつと宮本へ行かう。田毎さん。

田毎　ほんに、柏木さんが待つてござんせう。コレ、申し。

皆々　先さん。

瀧平　ハテ、早く參れと云ふに。

ト睨む。

皆々　オヽ怖。

ト皆々一緒に、儀八も上手へ入る。先次郎、こなしあつて

先次　申し、主計さま。伯父者人。して、私しに、仰せ渡されの仔細とはナ。

主計　誠に、天に不時の風雨あり、人に不時の病ありと、この度思はざる桃の井修理太夫どのには、俄の御病氣。惡寒發熱して、瘧とも時疫とも定まらぬ難病とあつて、典藥ども醫療を盡せども、其しるし未だ見えず。さるによつて、家門たる我れ／＼はじめ、家中一統評議の上、物の怪とも相見ゆれば、恐れ多くも、古しへの近衞の院の御惱、源三位賴政が例に任せ、幸ひ弓馬に達したる桃の井家なれば

典膳　一家中は殘らず、去年病死せし譜代の家臣、濱田逸當が門人なれば、卽ち蟇目を以て、大殿の御病體を糺すに評議極まり、それゆゑ今、龍虎と劣らぬ、これなる岩城彌源次、古老稻野谷半左衞門が悴半十郎と、今宵當所の三十三間堂に於て、兩人の矢數を試み、一筋にても通り矢多き方へ、蟇目の役申し附ける。

主計　その檢分は、典膳どのと、この主計。卽ち半十郎には切斑の矢。

典膳　岩城彌源次には斑の羽と、引分けての射術。

主計　一筋にても通り矢多きが、その身の譽れ、蟇目の役。又、先次郎には現在の、大殿の御病氣平癒の蟇目なれば、當所八幡宮へ今宵の通夜。祈念の上、矢數の甲乙聞き屆け、直さま館へ。

先次　すりや、親人の病氣ゆゑ、蟇目の役は矢數の勝負。

伴作　稻野谷半左衞門どのゝ御子息半十郎どのと

彌源　卽ち身共、この彌源次でござる。半十郎は未だ前髮、若衆なれば、ちと大人氣なう存じ、たつて御辭退申せども、お聞入れなく、是非とも矢數の勝負との仰せは、日頃弓馬に達した拙者ゆゑ。これを思へば、まことに藝は、

身を助くる程の、不仕合せでござる。
伴作　こりや彌源次どのが仰せらるゝ通り、また若輩の半十郎と、こなたとの勝負なら、勝たつしやるは知れた事。典膳さま、なぜ蟇目の役を、彌源次どのへ仰せ附けられませぬな。
典膳　ハテ、身共もさうは思へども、何をいうても側からの支へ。半十郎は弓矢の達人と、贔屓偏頗の執成しゆゑ。
先次　成る程、家中は皆濱田が弟子、一刀流なれど、その中でも、分けて半十郎は、武藝勝れし若者。
彌源　いかにも勝れました。半十郎は、體といひ、年も勝れた大前髪。この彌源次は野郎なれど、小男。今宵矢數の勝負に打勝ち、蟇目の役は拙者相勤め、お目にかけう。
伴作　そりや知れた事。何ぼう武藝未熟の拙者でも、前髪の半十郎に負けうとは存ぜぬ。まして達人の貴殿なれば
瀧平　イヤ／＼、申し、伴作さま。彌源次さまが達人でも、横人でも、すべて勝負は時の運とやら。又、人目が鏡。御兩人のうち、どちらぞ勝れた方へ、蟇目の役を仰せつけられたが、よからうと存じられまする。
伴作　何を下郎のちよこざいな。うぬが差出る所でない。扣へてをらう。
瀧平　イヤ、扣へますまい。一合取つても武士は武士。お家の大事、及ばずながら、差出まするも、武術に於ては、上下の隔てはござりませぬ。
伴作　まだ／＼慮外な。上下の隔てがなくば、上に立つたる荒川伴作、手並の程を見せうか。
瀧平　そりや望む所。手並を見せませう。
伴作　さう云や、うぬ、見せるぞ。
瀧平　ハテ、見ませう。
伴作　うぬ。
瀧平　サア。

ト兩人キツとなる。

主計　コリヤ／＼、瀧平、まづ扣へい。伴作も詮ない爭ひ。修理太夫どのゝ御病氣ゆゑ、お家にかゝはる矢數の勝負。その大切な場所に於て、尾籠至極。
伴瀧　サア、それは、
先次　マヽ、主計さまの仰せ。兩人ともに扣へて居やうぞ。
伴瀧　ハツ。

トこなしあつて扣へる。主計も思ひ入れあつて

主計　それにつけて先次郎……一人貪戻なれば一國亂を起すと、その身の放埒、世の人口。とくと心得、今宵の祈

念怠りなく……たゞ家國を、サア、云はぬは云ふに、ますます桃の井家の榮えが大事。
先次　主計さま、段々あやまり入りましてござりまする。この上は、兎角神力應護を祈つて
典膳　傾城の身請けが肝心。
先次　エヽ。
典膳　イヤサ、放埒のその身、家國よりは傾國の方へ迷れを流して、傾城も、うろたへ廻る其うちに、人手に渡るを知らぬ痴け。ナア、彌源次。
彌源　成る程、左やう。若殿の鼻毛にて、鳶凧を揚げたらようござりませう。ハヽヽヽヽ。
　トなぶるこなし。
先次　コリヤ〳〵、彌源次。今、伯父者人のお詞に、人手に渡るを知らぬとは、なんぞ太夫が身の上に。
主計　イヤ〳〵、先次郎、そりや何事。
先次　エヽ。
主計　サア、太夫とやら、松とやら、左樣な儀は打ッちやつて、兎角その身を清浄に、弓矢の祖神、八幡宮へ神拜の用意。おッつけこの所へ、稲野谷半十郎も參るであらう。まづ、それまでは、典膳どの。
典膳　いかにも。神主方へ暫らく。それにつけても、ナニ、伴作。其方に先達て申し渡した彼の……サア、勘解由どのに、イヤサ、家門の面々に、今宵の矢數、刻限萬端、相届けたがよからう。
　ト目顔でこなし。伴作心得
伴作　エヽ、成る程、久利……イヤサ、暮れ合圖の矢數の勝負、拙者は直さま勘解由、イヤ、御家門方へ相届けませう。
典膳　コリヤ、早く。
伴作　心得ました。
　ト伴作、こなしあつて向うへ走り入る。
典膳　時に、矢數の刻限までは、まだ間もあれば、主計どのゝ仰せの通り
先次　神主方へ。
　トこなしあつて
主計　コリヤ、彌源次。
彌源　ハツ。
主計　コリヤ、先次郎は桃の井の跡目、それを拒んで
　ト典膳を尻目に掛け
イヤサ、今宵の矢數に日頃の鍛錬。其方が手柄の程を。

彌源　御検分の主計さま。

主計　ア、心が問はゞ、何と答へん。

皆々　先づ〱、入らせられませう。

ト唄になり、主計、思ひ入れ、彌源次、典膳、こなし。瀧平、目を附ける。先次郎もよろしく、皆々こなしあつて、殘らず下座へ入る。又、宮神樂になり、向うより半十郎、角前髪にて、隨分長きぶッさき羽織、袴、大小。德助、中間にて、弓矢に菖蒲革の袋を掛け、これをかたげて供をして出る。半十郎・花道より來るうち

半十　德助、まだ餘程日が高いな。

德助　左樣でござりまする。

半十　大方いづれもには、神主方にお入りであらう。幸ひ矢數の刻限には、餘程間もあれば、どうぞ彼の人に逢ひたいものぢやが。

トあたりを見廻し

コリヤ、德助。今朝ほど其方に申し附けた手紙、いよいよ彼のお人に、直にお渡し申したか。

德助　成る程、大切なお手紙ゆゑ、お廣敷まで呼び出しまして、慥かにお渡し申しましたが、卽ち今日は、お引け番とやら仰せられました。

半十　お引け番とあらば、猶幸ひ。どうぞ早くお目にかゝりたいものぢやが。……コリヤ、其方はナ、その矢を持つて、三十三間堂の假屋へ參り居て、もし彼のお人が見えたら、早速この所へ知らせろ。

德助　そんなら、若旦那。私しは假屋へ、お先に參つて居りませう。

半十　コリヤ〱。今日の手紙の樣子、又お目にかゝる事も、大事な事ぢや程に、必らず人に口きくな。

德助　若旦那とした事が、この德助を、さう野暮と思うてござりまするか。姿は少しむさけれど、役廻りは薄雪の、妻平どころでござりまする。

半十　馬鹿な。何ゝ云ひをる。

德助　それでもお前、慥かに。

半十　又その事を。

德助　オット、云はず語らぬ我が心。チヽ、チン〱。

ト口三味線にて、向うへ走り入る。半十郎、こなしあつて

半十　彼奴はきつい馬鹿ではある。

ト合ひ方になり、半十郎、人を待ち合す心にて、此方

の床几に腰を掛ける。此うち向うより東小僧鉦八、うそ〳〵出て來て、半十郎を見て、前を二三度通り見る。半十郎、心得ぬこなしにて、目を附ける。鉦八、床几の後へ廻り、身をひそめて、半十郎が腰の巾着を切りにかゝる。半十郎、わざと知らぬ體にて、よき所にて小柄を抜き、鉦八の手首を床几へグッと刺し通す。鉦八、悄り。

鉦八　アイタヽヽヽ。こりや手ひどい目に合はした前髪さん。

ト體を踠いても、手首縫ひ附けてあるこなし。

半十　コリヤ〳〵、其やうに聲を立てると、却つてうぬが爲にならぬ。蚊泥坊め。

鉦八　でも、こりやお前、あんまり。

ト聲低に云ふ。

半十　見れば、うぬもよい骨柄、巾着切りを渡世にするとは人外め。どうでしまひは刀の銹。早く心を改め、いたづらを止めるやう、意見の爲に、その小柄は、身が定紋なれど、うぬにくれるほどに、賣り代なして露命を繫げ。エヽ、泥坊め。

ト唄になり、鉦八を其まゝに、こなしあつて下座へ入ろ。鉦八、痛むこなしにて、抜かうとする思ひ入れ。この所へ典膳出て、鉦八を見て

典膳　そちや東小僧鉦八ではないか。

鉦八　典膳さまか。お慮外ながら、この小柄を抜いて下さりませ。

典膳　誠に、縫ひ附けてあるは、盜賊を仕損じたな。

鉦八　手ごはい目にかゝつて、この通り。

典膳　ドレ〳〵。

ト小柄をグッと引抜いてやる。鉦八、立ち上がり

鉦八　アヽ、嬉しや〳〵。アヽ、助かつた。

ト疵口へ煙草を附け、手拭で括るうち、典膳、右の小柄の血を拭ひ、とくと見て

鉦八　こりやコレ、釻菊の紋所。さては鉦八がかゝつたは

典膳　何ぢや知らぬが、前髪だてら、氣の強い侍ひめ。

鉦八　その筈ぢや。此方の家中で、武藝に達した、稲野谷半十郎というて、即ち老分半左衛門といふ者の悴。

典膳　そんなら矢ッ張り、桃の井の家中ぢやな。さうとは知らず、商賣に、肝心のこの手を、續物にひろいたわえ。

典膳　時に、鉦八。半十郎が定紋の小柄、こりや何ぞ役に立ちさうなものぢやが。

鉦八 ト思案する。鉦八もこなしあつて
幸ひ、典膳さま、一旦仕置になるこの鉦八を、命助けてお頼みは、桃の井の重寶、松蔭の硯を盗んでくれいとのお頼みゆゑ、早速屋敷へ忍び込み、まんまと彼の寶の箱を明けて見たところが、箱は空きがら。寶は疾に質物。その箱の中へ、この小柄を入れて置いたら、今の前疑は寶の盗賊。しくじりさうなものではござりませぬか。

典膳 流石は東小僧。成る程、寶の箱へこの小柄を入れて、盗賊にして稲野谷親子を、科にとつて落せば、忠義立てする老分どもを退け、跡は典膳が思ふまゝに、家國を押領。

鉦八 その時は、この鉦八も、立身出世。

典膳 この小柄は身共が窃かに。
ト紙に巻き、懐中して
それに附けても、其方に、又改めて申し合はす事もあれば、二軒茶屋のうち、宮本は、先次郎、廓の者ども。

鉦八 そんなら此方の松本へ、

典膳 其方を同道。

鉦八 典膳さま。

典膳 鉦八、参れ。

ト摺り鉦入り、好みの唄になると、典膳、鉦八を連れて、下座へ入る。この唄にて、向うより娘小稲、振袖、屋敷娘にて、友次、若黨にて供して、兩人出て

友次 申し〳〵、お嬢様。なぜ其やうにお急ぎなされます。もそつとお靜かにお出でなされませ。

小稲 さいなう。今日はお引け番ぢやによつて、ちよつと宿元へ立寄つて、母さんをお頼み申して、其方を連れて、この八幡様へ参つたのは、ちつとお目にかゝらねばならぬお方があるゆゑ。

友次 申し、そりや蔭裏の豆、はじけ時ではござりませぬかえ。

小稲 友次としたことが、何を云やるやら。
トこなし。

友次 ハヽヽヽヽ。
ト兩人、本舞臺へ來る。下座より彌源次出て

彌源 これは〳〵、濱田の御息女、小稲どの。若黨友次。

小稲 思ひがけない岩城彌源次さま。御苦勞に存じまする。

彌源 あなたは今日、矢數の勝負と承はりましたが、その儀も小稲どのの御親父、去年過ぎゆかれし逸富どののお弟子の身共、半十郎どのと共にお見出しにあづ

かりしは、全く以てお師匠のお庇と、仇疎かには存じませぬ。

小稻　ほんに、御家中は、死なしやんした父さんのお弟子。その中でも、あなたと半十郎さまは、弓矢の達人とのお噂を承りまして、母さんもわたしらも、及ばずながら、嬉しう存じて居りまするわいなア。

彌源　それは深切、忝ない。……まづ〳〵、これへ掛けさつしやれ。

小稻　イヤ、わたしは。

彌源　ハテ、お師匠様の御息女、外ならぬ。平に床几へ。

小稻　左樣なれば、御免なされませ。

トせう事なしに床几へ腰を掛ける。友次は、そこらにつくばうて

友次　今日の矢數の勝負は、御兩人ながら、親旦那のお弟子。彌源次さまなり、半十郎さま、どちらをどうと甲乙はござるまいが、こちらを負かし、こちらを勝たさうと思ふ心もなく、どうか味に案じられまする。

彌源　常から實體な友次、さう思ふも、理り〳〵。さう思うてくれる其方、先達て頼み置いたる儀はどうぢや。

友次　ヘエ、。あなたが拙者にお頼みとは。

彌源　ハテ、サテ

ト小稻を教へ

あれほど其方へ話し置いたる儀を。

友次　ア、、成る程。管槍の寸法の儀でござりまするか。

彌源　ハテ、槍ではない。小稻どのゝ事を、……ナ、ソレ、エ、……頼み甲斐のない者ではある。

トむつとする。友次、こなしあつて

友次　ほんに、其お話しの儀は、とんと失念。忘れて居りました。ハ、、、、、。拙者としたことが、性根のない。

トわざと流しかける。

小稻　コレ〳〵、友次。彌源次さまが、何やらわしに話してくれいとのお頼み。もしも一刀流の

友次　イエ〳〵、左樣な事ではござりませぬ。こりやいつそ拙者が、お話し申しませう。マア〳〵、默つてござりませ。

彌源　コレサ、友次、いつそといふやうな事があるものか。さうベン〳〵と、イヤ、幸ひの折柄、頼み甲斐のない友次には構はずに、小稻どのに直にお頼み申さう。

ト紙入れより半紙の書き物を出し

これ讀んで見さつしやれ。

小稲　申し、こりや何でござりまするえ。
彌源　先づ、讀んで見さつしやれ。
　ト開いて。
小稲　「御状拜見いたし候ふ、然れば我れら娘小稲儀、其許御子息、嫁にお取り成されたき由、仲人原淸庵を以て御懇望の段承り候ふ、併しながら、我れら方には女子一人ばかりにて御座候へば、他家へ遣はしては、家名相續いたす者御座なく、委細は淸庵口上に申し入れ候ふに附き、右詳かならず、先づは御報かた〳〵斯くの如くに御座候ふ。以上、月日、岩城彌次兵衞どの、濱田逸當」
　ト讀み
こりやわたしが父さんの御状、あなたの方へ。
彌源　サア、手前親共、彌次兵衞か、其許の父御逸當どのへ、こなたを嫁に貰ひかけたその返事。其うちに逸當どのには、去年御病死。親共もその節相果てましたれど、いはゞ云ひ號け。その樣子を友次にとくと申し聞け、こなたや後家磯町どのに、お話し申してくれいと、頼み置いたのでござる。
小稲　これは〳〵、マア、思ひもよらぬお話しといひ、この御返事。

　ト友次の方へこなしある。彌源次、ちやつと狀をひツたくり、懷中して
彌源　こりや大事の物。矢ツ張り身共が……ヤ、時に、小稲どの、親々が斯ういふ文通いたしたからは、誰れ憚らぬ云ひ號け、最早互ひに添うてもよい時分。お上へお願ひ申して祝言を
　ト小稲を抱く。
小稲　こりやみだらな。何なされまする。
彌源　ハテ、天下晴れて女夫なれば、誰れ叱る人は無いわいの。
　ト小稲を抱く。小稲いやがるを、友次見かねて、彌源次を引き退け
友次　こりや彌源次さま、見苦しい。何なされまする。
彌源　何するとは、今の狀で
友次　ハテ、親旦那樣の自筆の返事があれば猶の事、表向きいうても緣邊は大事。それに、この繁華の途中で、馬鹿馬鹿しい。
彌源　でも、云ひ號けなれば。
友次　ハテ、その儀はとくと後室樣へも申し上げ、事を糺した上の事。

彌源　ぢやによつて、疾に其方に頼んではないか。
友次　とんと忘れました。拙者が不調法、眞平御免下さりませう。
ト呟やく所へ、下座より侍ひ一人出て
侍ひ　彌源次さま、これにござりましたか。あなたに火急の御用とあつて、伯父御典膳さまが、久利勘解由さまより
ト云ふを
彌源　ハテ、コリヤ、爰は八幡、永代寺の庫裏へ來いか。成る程、參らう〳〵。
侍ひ　急ぎ御同道申せとの儀でござりまする。
彌源　ハテ、せはしない。……イヤ、ナニ、小稲どの、結納物より慥かな、逸當どのゝ御返事があれば、是非女夫になる程に、さう思うてござれ。友次、屋敷へ歸つたら、後室礒町どのにも、よろしく申せ。小稲どの、合點でござらう。
侍ひ　サア、お出でなされませう。
彌源　オヽサ、……又ゆるりと逢ひませう。
ト唄になり、彌源次、侍ひを連れ、下座へ入る。あと合ひ方になり、小稲、すまぬ顔にて、思案してゐる。
友次もこなしあつて
友次　申し、お嬢様々々。
小稲　ヤ。
トぢつと顔を見る。
友次　ハテ、お前はきつう御屈托なお顔でござりますな。
小稲　サア、今、彌源次どのが、思ひがけない父様の御返事。云ひ號けとの事。わしやどうせうと、それが案じられて。
友次　ムウ。すりや、お前様には、彌源次どのと女夫になる事は、お否でござりまするか。
小稲　誰れがあんな人と。よう思うても見やいの。
友次　成る程、そりや御尤も。左様なら、お嬢様、今日この八幡へ御參詣なされましたは。
小稲　友次、この文見や。
ト懐より狀を出す。友次取つて
友次　「濱田御息女小稲さまへ、稲野谷半十郎、人々御中」。ても、堅う書いたこの文は。
小稲　サア、半十郎さまが、何やらわしに、密かに逢うて話したい事があるとの文體。幸ひこの所にて、矢數の勝負。これへ來てござると思ひ、今日はお引け番ゆゑ、わ

しも其方を連れて、八幡様へ参詣がてら、半十郎さまにお目にかゝらう為に。

友次　そんなら、お前は、半十郎さまにお氣がござりまするな。

小稻　又、そんな事云やるかいなう。なんぼう隣同士のおこゝろやすう思うても、それは〳〵物堅い、とんと色氣のある方ではないもの。

友次　イヤ、そウ、家中での御老分、物堅い半左衛門さまの御子息なれば、仰しやる通りに石部金吉、そりや私しも、よく存じて居ります。

小稻　それに其方も氣の悪い。

友次　イヤ、お家柄といひ、お人柄、武藝は元より天晴れの、今を盛りの綺麗な角前髪。丁度あなたにはよい女夫と、常住思うて、折々には、後室様へお噂申して居りましたによつて。

小稻　そんなら、お母さんも、さう思うてござるかや。

友次　あなたさへ御得心なら、後室様のところは、私しが請け合ひ。

小稻　そりや、ほんまに其方が

ト嬉しさうに、友次の顔を見て

友次とした事が、オ、をかし。わしを騙りやるかいの。

トこなし。

友次　イエ〳〵、勿體ない。親の代から御恩を受けたお主様の、お為になる事ぢやもの。なんの、私しが僞はりを申しませう。

小稻　それでも、不拙なわしが、どのやうに思うたというて、物がたい半十郎さまが、なんの女夫になつて下さんせうぞ。

ト又しいなりとなる。友次、氣の毒なるこなし。

友次　ハテ、百貫の鷹も、放して見ねば知れませぬ。何やら、お前様にお頼みありとのお文。こりや、彼方からほの字か。但しは外の事か。今日お逢ひなさるゝこそ幸ひ、マア、とつくりと、當つて御覧じませ。

小稻　そんなら、半十郎さんに逢うても、母さんに叱つてではあるまいかいの。

友次　ハテ、何ぢややら、様子も知れませぬものを。……ア、、その初心では、どうやら覺束ない。……イヤ、それよりは、今の彌源次どのへ、親旦那よりの御返事。あれを持たせて置けば、もしも此方が首尾したら、後日の邪魔。

小稻　ほんに、さうぢや。無理にわしを云ひ號けと見せた、父さんの御返事。

友次　取返せば、お前の身の上の納まり。

小稻　半十郎さまにお目にかゝつて……サア、わしばかり得心して居ても。

友次　又、氣の弱い事を。先づ、なんでも、私しがどうぞ魂膽して、彌源次どのゝ持つて居る御返事を、人知れず引ッたくるやうに。幸ひ、半十郎さまも、神主方へ來てでござらう。ちよつと呼び出して、爰へおこしませう。

小稻　ヤア、そんなら爰へ、おこしてたもるかや。

友次　おこしまする程に、必らず急かずと、あつちの様子を聞いた上で、また、お前様の思し召しの程を。御合點でござりまするか。

小稻　そりやよう合點して居るわいの。其方はちやつと半十郎さまを。

友次　ハテ、せわしない。まだ七つには間があれば、ゆるりとお逢ひなさらうとまゝ。

小稻　それでも、わしや早う

ト友次が顔を見て、思ひ入れあつて

オヽ、笑止。

ト振り袖にて顔を隱す。友次もこなしあつて、

友次　ドレ、呼んで參りませうか。

ト宮神樂になり、友次、下座へ入る。小稻跡にいろいろ思ひ入れあつて、鏡を出し、髪を直し、襟をつくらうとして居るところへ、向うより土手助、挺平、手廻りにて、海鼠の合羽、鞘金の脇差を差し、兩人とも生醉ひの體にて出て來る、此うち始終宮神樂。本舞臺へ來て、小稻を見て

土手　なんだ／＼。こりや綺麗な姐さんぢやナ。挺平、見ろ。どうだ。

挺平　こりや楊貴妃だ。土手助、只は置かれまい。

土手　オヽサ、おらが嬶アにせうわえ。

ト小稻の手を取るを、振り切つて

小稻　滅相な。こりや何するのぢや。

ト少し腹立てる。

土手　何すべい。抱いて寐るのぢや。

挺平　おらが仲間の土手助がおかみさんだワ。

ト挺平寄るを、小稻、ちやつと逃げのき

小稻　見れば、お前方も、武士の御家來。さうなら、そんな無體な事を、するものでござんすかいなア。

土手　するものなりやこそ、あながあいてある。この色男に思はるゝは、お娘の仕合せ。サア〳〵、來なさい來なさい。

　トまた手を取るを、「エヽ」と振り切り、あちらへ逃げるを、挺平、向うへ廻つて

挺平　ドツコイ。滅多に逃がさぬ。土手助、埒の明かぬ。早くしろ〳〵。

土手　オヽサ。

　ト逃げあるく小稻を追ひ廻し、捕へて、戲れんとするところへ、下座より半十郎出かけ、これを見て、ツカツカと出て、小稻を圍ひ、兩人を左右へ、見事に取つて投げる。

小稻　ヤア、半十郎さま。ても、よい所へ。

半十　マア、何も云はずと、扣へてござれ。

小稻　アイ〳〵。

　トこなしある。土手助、挺平、起きあがり

兩人　こりや、おら共をひどく取つて投げたな。

　ト半十郎を見て

土手　ヤア、うぬは若衆。

挺平　ても、剛氣な力。

兩人　なんでおら共を投げたのだ。

半十　なぜこの女を手籠めにした。

土手　手籠めにしたら、どうする。なんぞ其方が構ひになるか。

半十　オヽ、なる。

土手　そりや又どうして。

半十　云ひ號けぢや。

兩人　ヤア。

　ト小稻惘りして

小稻　ア、申し、それは。

半十　ハテ、コレ、云ひ號け、ナ、コレ、云ひ號けの女房、末では夫婦と、親の堅い約束。

小稻　イヽエ、それでも。

半十　サ、コレ、ハテ、末では夫婦と、ナ、云ひ交した、武士の女房。

小稻　オヽ、嬉し。

　ト思ひ入れある。

兩人　そんなら、前髮さん、あの娘は

半十　云ひ號けの武士の女房。イヤサ、武家の家來が、主ある女に不義仕掛けて、濟むか。

兩人　サア、それは。
半十　おやによつて、兩人ともに、斯う。
ト刀を拔きて
カウ〱〱。
トさん〲に背打ちに打ち据ゑる。
提平　アヽ、コレ、御免々々。眞平誤まり入りました。
土手　コレ、前髮さん。
半十　うぬ。
ト振りあげるを、小稻取り附き
小稻　申し、憎い奴なれど、あのやうに詫びること、もう御料簡なされて
半十　歸してくれう。
ト兩人を引起して投げる。土手助、こなしあつて
土手　なんの事だ。とんと醉ひが醒めて、本性になつたら、腰の骨が無性に痛む。
提平　アヽ、埒もない。土手助、おれにまで相伴させて
土手　思へば憎い
兩人　前髮め。
トきつとなる。
半十　なんだ。云ひ分があるか。

兩人　イヤ、無いわえ。
ト土手助、提平、腰を抱へて、こなしあつて向うへ入る。
半十　あれ御覽じろ。馬鹿者ではござらぬか。
小稻　左樣でござりまするわいなア。
トこれより三味線入りの神樂になり、小稻、こなしあつて
ほんに、思ひがけない所へ、半十郎さまのいかいお世話に。
半十　なんの〱。同家中と申し、殊に、屋敷は隣同士、外ならぬ小稻どの。
ト此うち小稻、思ひ入れあつて
小稻　申し、半十郎さま。今あなたが仰しやつた事は、ほんまの事でござりますかいなア。
半十　アヽ、そりや何をな。
小稻　ハテ、今、あの惡者どもを、きつい目に合はせなさつた時になア。
半十　なんと、申したな。
小稻　ソレ、アノ、わたしを、云ひ號けの……女房ぢやてて。

半十　ヤア。

小稲　末では夫婦と、アノ、云ひ交して居るとやらなア。

半十　ハヽヽヽ。小稲どのとした事が、今のは二人の奴等を、理窟に詰めるやうに、ツイ申した事。

小稲　そんなら……ツイでござりまするかいなア。

半十　サア、ツイ申した。お心に障つたら、御料簡にあづかりたい。

小稲　エヽ、滅相な。なんの料簡。わたしや今のツイを、どうぞツイで無いやうになア。

半十　これはしたり、小稲どの。ツイをツイで無いやうにとは、事が解りませぬ。どうでござるぞ。

小稲　サア、それはナ。

ト云はんとして、思ひ入れ、

友次が云やつた事は、爰の事ぢや。マア／＼、氣を急かずとも

半十　心を鎭めて、仰しやつたがようござる。

小稲　ほんに、今朝お屋敷へあなたのお文。

半十　成る程、拙者書面を遣はしましたが、それで其許にはこれへ。

小稲　イ、エ、今日は引け番を幸ひに、あなたにお目にかからうと存じまして、

半十　矢數の日限といひ、小稲どのゝお心、思へば

ト思ひ入れあつて

エヽ、千萬忝なう存じまする。

ト兩手を下げて辭儀するを

小稲　ア、申し。左樣になされすと、早う樣子を、申し

ト早く聞きたいといふ思ひ入れあつて

イヤ、まづ／＼、樣子を、お聞かせなされて下さりませいなア。

ト半十郎、こなしあつて、

半十　拙者今朝申し上げた通り、其許に密々御意得、ちと折入つて、お頼み申す仔細ござつて、

小稲　アノ、不束な、わたしにかえ。

半十　御恩を受けたお師匠、逸富どのの御息女なれば、

小稲　最前も、家來友次が、丁度似合ひな事ぢやてゝ、

半十　時に、小稲どの。

小稲　ハイ／＼。

ト嬉しさうに半十郎の側へ寄る。半十郎は兩手を突き

半十　何卒こなたのお情けにて、拙者が願ひ、お聞屆け下さりませうなれば、御恩はキッと忘れませぬ。

小半　アイ、二世も、三世も、未來かけて、私しも。
半十　若輩なれど、拙者も武士。御恩は忘れぬ。木石では
　ござらねば。
小稻　わたしも、一旦思ひつめたる、貞女兩夫に見えずと
　やら、申しますれば
半十　即ち忠義の爲に、こなたにお願ひ申す。
小稻　お前に、わたしが
半十　拙者が願ひを、どうぞ。
小稻　オヽ、恥かし。
半十　たんの、恥かしい儀。師匠のお娘御、逸當どのの血
　筋なれば
小稻　女房に持つておくれなされまするかえ。
半十　ヤア。
　トぎよつとする。
小稻　エヽ。
　ト恟りする。兩人顏見合せ
半十　そりやマア、何を仰せらるゝぞ。
小稻　マア、お前の仰しやるは、
半十　ハテ、逸當どのの御息女どの、矢の御傳授が申し請
　けたい。

小稻　エヽ。そんなら、わたしへお頼みと仰しやるは、
半十　今宵の矢數、運に叶うて拙者が勝たば、蟇目の役目
　蒙むるに附き、男子無き逸當どの、女子なれど血筋の御
　息女、小稻どの、一刀流の奧儀、御存じでござらうと存
　じて、心を盡して、拙者が願ひ。
小稻　エヽ。さては蟇目傳授をわたしに。
半十　申し請けたき
小稻　今朝のお文。
半十　詳しう書かねど、御意得た上
小稻　さうとは知らず
半十　小稻どの
小稻　半十郎さま
半十　忠義の魂ひ、とくとお察し下され、偏へにお願ひ申
　しまする。
小稻　これも矢ツ張り友次が云やつた通り
　ト半十郎の顏をちよつと見て
　ソレ、人のよう云ふ、エヽ、自惚れとやらであつたわい
　なア。
　トこなし。半十郎もこなしあつて
半十　小稻どの、先程から事を分けて申す通り・蟇目の役

は、大殿樣御病氣御本腹の爲。すりや、お家にかゝはる大切な役目。適當どの御存生のうち、隨分稽古に出精仕つたゆゑ、槍の御口傳許されしが、殘念なは蟇目の御傳授、申し請けぬが拙者の不覺。今宵の矢數に、彌源次に射勝つても、傳授を知らねば、的矢を放つ同然。さすれば、詮無い蟇目の役。腹切らうより外は無けれど、何卒大殿樣の御病氣、御本腹あるやうにと、思ふは拙者が手柄より、御主人へ忠義。願はくは、小稻どの、蟇目の口傳を、拙者にどうぞ。

小稻　成る程。父さんの御病中に、男子とては無く、女にても、其方は血筋、一刀流の奧義を傳へる。とくと覺えて、末々に、器量を見立て、定まる夫に傳へて、家相續と、弓矢、馬術に遠當て、一時殺しの傳授は、殘らず承りまして、及ばずながら、よう覺えて居りますわいなア。

半十　サヽヽ、それゆゑにこそ、拙者がお願ひ。

ト　にぢり寄る。

小稻　蟇目は元より何もかも、殘らず、一刀流の奧儀を、あなたに御傳授申したい、わたしが心。

半十　そりや、こなた、御眞實に。

小稻　わたしも叶へておくれなされまするかえ。

半十　すりや、拙者にも、何ぞお願ひが。

小稻　惚れました。

半十　ヤア。

小稻　サア、最前から、モウ〳〵、云はう〳〵と、氣にドタ〳〵しても、云ひかねて居りましたが、日頃の思ひ、今日の仰せ。あんまり遣る瀨なさに、どうぞ、申し。

ト　膝へ取附き、顏を隱す。半十郎、ホツと息をつき、

半十　思ひがけない、小稻どの。そんなら最前からのお詞の端に、どうやら異な事と思ひしに、

小稻　ツンとモウ、お恥かしうて何にも申されませぬ。…コレ、拜みますわいなア。

ト　兩手を合せ、拜む。その手を取りて、

半十　それが眞實なら、忝ないが、よく思うても見さつしやれ。不義は御法度。殊に、親々の許さぬ戀をしては、互ひの身の上。

小稻　サア、その事は友次が心得て、あなたさへ御得心なら、お母さんにお願ひ申して、また半左衞門さまへも。

半十　サア、さう表向きなら、如何やうとも。內證では、人に忍び、隱すより顯はるゝといへば、却つて互ひの身

の上。それよりは、マア愼んで、また折を見て。

小稻　わたしや、そんな事は否々。女子の口から恥かしい、斯う打ちつけに云ふからは、御返事次第で、覺悟は極めて居りますわいなア。

半十　これは短氣な。さういふ心を。

小稻　サア、わたしが死んだら、蟇目の口傳は、誰れにお聞きなされまするえ。

半十　傳授は傳授、戀は戀と。

小稻　イエ〳〵。こちや兩方一時でなければ。

半十　益體もない。さういふ事が、どうマア。

小稻　それでも父さんの仰しやつたには、もし傳授を許すには、他聞を憚かり、日の内は無用。夜分窃かに圍ひの内にて、差向ひに云ひ聞かすが、それが傳授、口傳の許しの作法。

半十　そりやさうありさうな儀。

小稻　ぢやによつて、あなたにも、今宵は矢數、明日の夜に。

半十　忍んで行かうが、そりや何れへ。

小稻　ハテ、中屋敷の裏座敷の、廊下傳ひに、圍ひの内へ。

半十　成る程、明晩キッと忍ばう、

小稻　必らずその時、わたしが頼みも

半十　ハテ、しつこい。その儀は御免。

小稻　そんなら、傳授も

半十　コレ。然らば……マア〳〵、どうなりと。

小稻　オウ、嬉し。

トちよつと寄り添ふ。半十郎もこなしある所へ、下座より友次出て

友次　お孃樣、まんまと首尾よう、おめでたう存じまする。

小稻　ヤア、友次か。

半十　ハテ、面目ない。

友次　なんの、半十郎さま。法度ではあるまいし、侍ひの身の上。子孫を殘すが先祖への孝。その殘す根本の女房。こちのお孃樣と夫婦におなりなされて、血氣盛りのお若い同士、幾人でも年子に御出精あつて、稲野谷、濱田のお跡目を、お願ひ申しまする。ナア、お孃樣。

小稻　エヽ、友次。こちや否いの。

友次　なんの、否な事。斯うなりやこそ、この相談ではござりませぬか。

半十　イヤ〳〵、友次、今宵半十郎は矢數の役目なれば、最早その支度、小稻どのを其方、早くお屋敷へお供した

ちよからう。
友次　イヤ〳〵、苦しうござりませぬ。よい時分には、私しが、お供いたして歸りまする。其お案じよりは、半十郎さま、神主方にて、ちよつとお杯を。
小稻　それ〳〵。友次、こりや、よう氣が附いたわいの。
半十　イヤ〳〵、祝言なぞとは表向き、何事も又折を見て。
友次　ハイ、祝言ではござりませぬ。師弟のお杯。明日の晩には窃かに御傳授を、お受けなさるゝぢやござりませぬか。
小稻　そんなら、半十郎さま。
　ト手を取るを振り拂ひ
半十　人目があるから、後からござれ。
　トついと下座へ入る。
小稻　友次。アレ、あのやうに。
友次　大事ない。私しが居りまする。ちやつとござりませ。
　ト唄になり、友次、小稻を連れ、こなしあつて、下座へ入る。引き違へて柏木、先次郎を連れて出て
柏木　サア、ござんせ〳〵。
先次　コレ、太夫。譯も云はずに、來い〳〵と、滅多無性に、おれを爰へ連れて來たは、どういふ事ぢや。
柏木　先刻も云ふ通り、わしを外に身請けの相談が、急に出來たと親方の知らせは、慥かに久利であらうと、わたしが案じ。それぢやによつて、お前に。
先次　サア、身請けの事は、とつくりと聞いてゐれど、何をいうても、伯父者人や藤島主計さまも來てござるによつて、金の事も云ひ附けられず、途方に暮れてゐるわいの。
柏木　そんな事云はずと、ちやつと、よい思案をして下さんせいなア。
先次　思案というて、さう急に出るものではなし。おれよりマア、其方が思案をしやいの。
柏木　サア、わたしが思案は、いつそお前と二人連れ、駈落ちをせうかいなア。
先次　そりや面白い。駈落ちとは、よい思案ぢや。サアサア、駈落ちせう〳〵。
柏木　そんなら、駈落ちと極めるかえ。
　ト云ひ〳〵兩人身拵へして、おちよぼからげなど互ひにしあひ、をかしみの仕組みよろしく
先次　なんでも大名の駈落ちとは新らしい。
柏木　さうして、どこを當てに行くのぢやえ。

先次　ハテ、どこというたら、上屋敷は悪い。中屋敷か、下屋敷へ。
柏木　イエ〳〵、それでは御家來さん方が、見附けしやんすわいなア。
先次　そんなら、どこへ行かう。
柏木　マア、滅多無性に歩いて見て、叶はぬ時は、いつそ心中して死なうぢやござんせぬか。
先次　それもよいわいの。心中とは氣が變つてよからう。彼の何やらの淨瑠璃にある、死出の山や三途の川も、手に手を取つてといふ事があれば、いつそ未來へ行て、氣兼ねなしに、二人添はうか。マア、待ちや。慥か冥土におれが領分があるか知らん。
柏木　なんの、死んで行くのに、領分がいるものかいなア。
先次　でも、冥土へ行て、鬼どもに突き廻されるが無念なが。
　ト此うち向うより親方才兵衛出て來る。
才兵　ヤア、太夫か。
柏木　エヽ、親方さん。
先次　南無三。爰には。
　ト柏木を連れて行かうとするを、才兵衛、引留め
才兵　待つた、先次郎どの。こなたは昨夜から太夫を連れて、この深川に居續けと、聞いたによつて來たは、おれが抱への柏木、此方にさるお大盡のお客が、身請けの相談。なんでも今日中に、お金を受取る約束なれば、太夫を此方へ連れて行く。さう思うてもらひませう。
　ト先次郎を突き退け、柏木を捕へて
　太夫、此方へ連れて行く。サア、來い。
　ト柏木を引ッ立てる。その手を振り切り
柏木　親方さん、なんぼお前の抱へでも、滅多にさう自由にはならぬわいなア。
才兵　又、情のこはい事吐かすか。
先次　さうぢや〳〵。太夫が身請けは格別、この先次郎が揚げ詰めなれば、外へはならぬ。
才兵　そこが親方の威光ぢや。
柏木　イヽヤ、わたしが行かぬわいなア。
才兵　なにを。
　ト三人、立廻りになる。よき所にて彌源次、下座よりツカ〳〵と出て、兩人を圍み、才兵衛を取つて投げる。
柏木　ヤア、お前は

先次　岩城彌源次。
彌源　若殿、太夫どの。よい所へ拙者が參つてお仕合せ。
ト才兵衛、起き上がり
才兵　ほんに、彌源次さま、お前、見知り越しのわしを。
彌源　コレ。
ト百兩包みを抛り出す。才兵衛、取つて
才兵　ヤア、こりや百兩。
彌源　身請けの手附けぢや。受取れ。
才兵　こりや忝ない。太夫が身請けは五百兩。この百兩はマア。斯ういふ事もあらうかと、書いて來た手附け證文。
ト出して
奥の宛名をちよつと。
ト矢立を拔く。彌源次、證文を引ツたくり、見て
彌源　宛名に及ばぬ。これでよい。
ト懷中する。
才兵　して、後金四百兩は。
彌源　今宵矢數の、終りに渡さう。
才兵　成る程。聞いて來た桃の井家の、今宵の矢數。そんなら、その終りまで待つて
彌源　渡してくれう。待つて居れ。
才兵　そんなら、向うの茶屋で待つてゐませう。必らずともに。
彌源　念には及ばぬ。早くうせう。
才兵　ヤレ、嬉しやの。
ト才兵衛、下座へ走り入る。先次郎、柏木こなしあつて
先次　太夫、見やつたか。よい所へ彌源次が出て、思ひがけない身請けの金。殊に、後金は矢數の終りまでに渡さうとは。
柏木　ほんに、段々のお志し。さうとは知らず、今までは、御挨拶もろく〳〵に。モシ、堪忍して下さんせえ。
彌源　なんの〳〵。先づ身請けの手附け金を、親方に渡したれば、安堵であらう。
柏木　此やうな嬉しい事はござんせぬわいなア、殿さん。
先次　それ〳〵。二人が爲には結ぶの神。南無彌源次大明神。
ト拜む。
彌源　これは迷惑。それには及びませぬ。
先次　イヤ〳〵、仇に思うたら罰が當る。ナウ、太夫。
柏木　ソレイナア。彌源次さんには、なんとお禮を申さう

やら。
先次　そのマア、手附け證文をちよつと。
　ト手を出す。その手を叩き拂ひ
彌源　コリヤ、何をさつしやる。
先次　ハテ、その太夫が手附け證文を。
彌源　こなた、いつ手附けを打つた。
先次　ヤア。
柏木　ソレ、たつた今、親方さんに渡しやんした、わたしが身請けの手附けを。
彌源　ありや身共がのぢや。
先柏　エヽ。
彌源　ハテ、岩城彌源次が打つた手附けなれば、身共がのでないか。
先次　コレ／＼、そんな冗談を云はずと、太夫やおれが落ち附くやうに、その手附け證文を。
彌源　イヤ冗談でない。洒落でござらぬぞ。柏木が身請けを、さるお人に頼まれ、只今打つた手附けは、此方の。それに、なんぢや。證文を寄越せとは。どの證文を。馬鹿馬鹿しい。
柏木　そんなら、その手附けは、殿さんのお爲ではなうて、外に頼まれて、わたしが身請けを。
彌源　いかにも。
先次　エヽ、腹の立つ。不忠者めが。
　ト脇差を抜いて切りかけるを、叩き落し、柏木の方へ突き倒す。先次郎こけるを、柏木これを介抱する。
彌源　假りにも主といふ名目が無けりや、其まゝには置かねども、家來のよしみに免してやる。コレ、若殿、イヤ、馬鹿殿。
　トこれにて先次郎、柏木キッとなつて、左右より彌源次に詰めかけ
先次　エヽ、彌源次
柏木　お前はなう。
彌源　手附け證文は身共がぽつぽに。欲しいか。欲しからうが、マア、ならぬ。ヘヽヽヽヽヽ。
　ト唄になり、彌源次こなしあつて、下座へ入る。先次郎立ち上がり、思ひ入れあつて
先次　太夫、さらば。
　トきつとなつて奥へ行かうとするを、立廻りにて、柏木、抱き留め
柏木　そんなら、殿さん、お前はあの彌源次を。

先次　憎うて／＼ならぬ、今の仕儀。彼奴を手に掛け、この先次郎も討死する覺悟ぢや。

ト はつと倒れて、大泣きに泣く。柏木、介抱して

柏木　オヽ、お腹立ちはお道理でござんす。ほんに、御家中も廣い桃の井のお家に、誰れ一人殿さんのお爲になるお侍ひさんは無うて、あゝいふ惡者ばつかり寄り合うて

ト 此うち半十郎、下座より出かけ、この時

半十　それも日頃のお身持ち、よろしからぬゆゑでござりまする。

ト 前へ出る。先次郎、見て

先次　ヤア、半十郎か。幸ひな所へ、よう來てくれた。おりやモウ、腹が立つて、口惜しうて、無念なはやい。

ト 取り附いて泣く。

半十　サヽ、その樣子、ちよつと物蔭より見受けました。不忠と申さうか、不屆き至極の彌源次。

ト 奧を見て、こなしある。

柏木　申し、殿さん、あなたはえ。

先次　おれが家來、稻野谷半左衞門が忰、半十郎というて、まだ年ゆかねど、劍術の達人。今宵矢數の彌源次が相手ぢやわいの。

柏木　そんなら、どうぞあなたをお頼み申して、憎らしいあの彌源次づらを

先次　首討ち落すか、一寸だめしに切りさいなんでくれ、半十郎。

半十　左樣いたして、あのお傾城の身の上は、よくござりますまいがや。

先次　ヤ。

半十　御主人の仰せ、何によらず承りませうが、雜言過言の腹癒せよりは、先づ身請けとやらの儀を。

先次　ほんに、それが肝心。モウ／＼、彌源次を殺す事はない。どうぞ太夫が身請けを、此方へするやうに計らひを。

柏木　イエ／＼、わたしが事は、外へ身請けしられて死ぬる覺悟。氣遣ひなさらずと、矢ツ張り殿さんのお身の上。どうぞ、半十郎さまとやら。

先次　イヤ／＼、何をするも、其方と夫婦になるが樂しみ。それに其方が先へ死にやつたら、この先次郎も生きてはゐぬぞ。

柏木　それでは、申し

半十　イヤ／＼、若殿樣。すりや、大殿樣の御病氣、家國

の儀も、思し召さずに。

先次　太夫を餘所へやつては、桃の井先次郎、どうも大名の一分が立たぬ。其方に一生の賴みぢや。彌源次めが持つてゐる手附け證文を、取返してくれ。コリヤ、主が家來に、手を下げて、賴む〳〵。

　ト手を下げる。

半十　これはしたり。そりや何事。さうお命にかゝはる儀でござりますれば、及ばずながら、拙者がどうぞ致して、彌源次が所持する手附け證文を、無難に取返して差上げませう。

先次　ヤア〳〵。そんなら取返してたもるか。エヽ、忝ない忝ない。コレ〳〵、太夫、彌源次が持つて居る手附け證文を、あの半十郎が取返してくれるといの。其方もちやつと、禮いうてたもいなう。

柏木　ほんに、どう云うてよいやら。悲しいやら、氣の毒なやら、また恥かしいわたしが身の上。

半十　お氣遣ひなされまするな。手附け證文の儀は、半十郎め、取返しまするほどに、先づ御兩所にはお案じなく、宮本かたへ。

先次　そんなら、太夫を連れて、おりや行くほどに、必らずともに。

半十　ハテ、よろしうござりまする。コレ、申し、お女中。若殿樣に、お心附けて賴みまする。

柏木　アイ〳〵。殿樣のお身の上は、わたしがきつと

先次　おれよりは手附け證文、

柏木　お前のお世話で

半十　承知いたしました。まづ、ござりませ。

　ト唄になり、先次郎、柏木こなしあつて、下座へ入る。跡に半十郎、思ひ入れあつて

半十　あのお傾城にあのやうに、命かけて思うてござる若殿樣。手附け證文を取返さねば、もしお身に凶事があつては……ハテ、どうしたものであらうなア。

　トちよつと思案するうち、バタ〳〵にて彌源次、友次を引ッ立てゝ出る。これを見て半十郎、ちやつと小蔭へ隱れる。友次、彌源次の紙入れを持つて居る。

彌源　ヤイ、友次。うぬは身共が見ぬかと思うて、鼻紙袋をソツと取つてうせたのは、中の金子を盗むのか。イヤ、泥坊を働らくのか。

友次　コレ〳〵、彌源次さま。拙者は濱田の家來、盗み泥坊は致さぬぞ。

彌源　それに何ゆゑ、身共が鼻紙袋を取つたぞ。
友次　ハテ、最前の親御様の御返事を、今一應とつくりと改めて見ようと思うたばかり。まだ中は開かぬ鼻紙袋其方へ返しまする。
ト抛り出す。
彌源　ハテ、疑ひ深い奴の。
ト云ひ〳〵取上げ、中を開き、疊んだ二通の書き物を見て
一つは手附け證文、此方は逸當が返事。次手に金子も。
ト中をいろ〳〵見て
何もおちうは無い。よいワ。料簡いたしてくれう。
友次　なんの、料簡。七度尋ねて人を疑へと、覺えの無いこの友次。泥坊の、盗人のとは、此方から料簡する。馬鹿馬鹿しい。お孃様がお待ちかねであらう。ドレ、この樣子を。
ト云ひ〳〵、此方へ來て、彌源次が見ぬやうに、懷中より疊んだ書き物を一通出して見て、ちよつと戴き、懷へ入れ、舌を出し、コソ〳〵と下座へ入る。此うち始終合ひ方。彌源次こなしあつて
彌源　もはや矢數の刻限に間も無ければ、假り家へ行て、支度をとくと。
ト向うへ行かうとする。半十郎、小蔭より出て、
半十　岩城彌源次どの。暫らくお待ち下されませう。
彌源　ムウ。
ト振返り
貴殿は稻野谷半十郎どの。なんぞ御用がござるか。
ト立戻る。半十郎こなしあつて
半十　先づは今宵のお役目、御苦勞千萬。
彌源　そりやお互ひ。矢數の勝負は、今宵、貴殿と拙者。
半十　お上より仰せ渡されてござりますれば、御辭退は申されず、是非なく、今宵、貴殿との勝負も、日頃弓矢の達人と呼ばるゝ彌源次どのに、何として未熟の私しが、敵ひませうぞ。
彌源　イヤ〳〵、半十郎どの、卑下さつしやるな。こなたもお見出しにあづかるほどの御器量。日頃の稽古御出精見屆けて居る。彌源次なぞが何として〳〵。して、御用とは、その儀でござるかな。
半十　イヤ、もつと外に、お頼み申したい儀がござりまする。
彌源　そりや何でござる。

半十　サア、若殿様の仰せ。よんどころなく、それで貴殿に折入つて、申し請けたい品がござりまして。

彌源　貴殿の仰せ、身共に折入つて申し請けたい品とは。エ、さては傾城柏木が、手附け證文の事な。

半十　サ、その儀を若輩な私しに仰せつけられて、こなた様にお頼み申すも、何とも氣の毒には存じますれど、御主人の仰せ。

彌源　手附け證文が欲しいとな。

半十　家來の身の上、仰せはどうも背かれず。

彌源　ハテ、こなたの頼み、若殿の仰せなれば、右の手附け證文を

半十　無難に此方へ下さりませうか。

彌源　いかにも、進ぜう。と云うたらよからうが、マア、ならぬ。

半十　エ、。

彌源　百兩といふ金を出して、此方へ取つた手附け證文、又、後金は矢數の終りに、いよ／＼今宵身請けする手附け證文。それをうま／＼、半十郎どの、貴殿に

半十　イヤ、金子の儀はいか程でも、差上げませう所存でござりますれば、何分手附け證文を。

彌源　ハテ、遣る事はならぬ。

半十　すりや、武士の身の上にて、傾城を身請けなされては。サア、表立つては互ひの角菱。ぢやによつて、御内證に。

彌源　イヤ、身共は身請けはせぬ。こりや餘人に頼まれたゆゑ、それで。

半十　若輩な拙者は存ぜぬど、親共がかねての噂にも、御主人より外に、三千世界に、重き方は無いとの事。

彌源　ムウ。すりや、頼まれた先を變替へて、手附け證文を渡せと云はつしやるか。

半十　イヤ、左樣ではござりませねど、何事も御主人の仰せなれば。

彌源　ムウ、半十郎どの。さほど證文が欲しい、御主人へ忠義が立てたくば、ソレ、浮世に譬への通り、魚心ありや水心。

半十　エ、。

彌源　イヤサ、今宵の矢數は貴殿と拙者、その勝負の甲乙にて、蟇目の役目は、その身の譽れ。ナ、サア、外に知る人の無い差向ひ。そこが、彼の貴殿に、魚心ありや、此方にも水心。

半十　ムウ。そんなら、今宵の矢數の勝負、その通し矢は
彌源　凡そ千筋。一筋でも多き方が、蟇目の役目。
半十　魚心ありや、水心。
彌源　日頃の稽古に怠りない、貴殿の心掛け。拙者は又御用繁多で、稽古も等閑。それでどうやら、心の後れ。
半十　すりや、千筋の通し矢を
彌源　五六百は、慥かに手ごたへ。
半十　その上の通し矢は。
彌源　魚心ありや、水心。手附け證文が、たつて欲しくば、進上申す半十郎どの。とくと思案の拳を固め、今宵の勝負のその上にて
半十　證文貰ふか、貰はぬか
彌源　通し矢次第。
半十　心の的の
彌源　覘ひを外して
半十　お主のお爲に
彌源　甲乙なりとも、いづれ返答、假家で相待つ。
　ト唄になり、彌源次こなしあつて、向うへ入る。跡に半十郎殘り、いろ／＼思ひ入れあつて
半十　今、彌源次が詞の端。手附け證文か欲しくば、魚心ありや水心とは、今宵の矢數に射負けてくれいと、慥かにさうと……若殿樣のお爲に、わざと後れを取つて、蟇目の役を仕損じては……又、親人樣の思し召し。小稻どのに折角賴んだ傳授も、何の役にも
　ト投げ首して
又、證文を取返さねば、現在若殿樣のお身の上、……引くに引かれぬ梓弓、取れば憂し、取らねば武士の數ならで、この半十郎、武士道を捨てねばならぬか。チエ、。
　ト拳を握り、思ひ入れある所へ、向うより德助、走り出て
德助　申し／＼、若旦那樣。もうおッつけ矢數の刻限でござりまする。早く假家へお越しあつて、御用意をなされませう。
　トこれにて、ちやつとこなしあつて
半十　いかにも／＼。よく知らした。直さま假家へ行かう。
　ト始終ふさいだ心持ちにて、德助を連れ、花道へ行きかけ、ちよつと立ちどまり
今宵の勝負、通し矢は千筋。千筋にからむ胸の內、それと知つては、精も張合ひも
德助　エ、。

　ト徳助、恂りする。半十郎、徳助を見て
半十　供せい。
　ト唄になり、悄れながら半十郎、徳助を連れて、靜かに向うへ入る。あと合ひ方にて、この前より本舞臺うしろへ、小稻、友次、上と下とに立別れ、出かけ居て、半十郎入ると、ヅッと前へ出て來て、互ひに顏見合せ
小稻　友次。
友次　お孃樣。
小稻　今、半十郎さまの樣子では、どうやら今宵の矢數、わしや心元ないわいの。
友次　イヤ、お氣遣ひなされまするな。最前、彌源次が目をくらまし、御返事と思ひ、摺り替へて取つたは、思ひの外の、傾城の身請け、この手附け證文。
　ト出して見せる。
小稻　それ／＼。それが若殿樣のお賴み、半十郎さまのお心盡し、どうぞ早くお渡し申して、
友次　でも、最早七つ。先づ、お前樣をお屋敷へお供して、その上で又、私しは爰へ。
小稻　イヤ／＼、さう隙どつては、其うちひよつと。
友次　ハテ、矢數の勝負は後程。まだ早うござりまする。
小稻　そんなら、友次。
友次　お孃樣。
小稻　ちやつとおおや。
　ト小稻、友次こなしあつて、向うへツイと走り入ると、ジャン／＼と七つの半鐘を打つ。下座より、主計、典膳、家來大勢連れ、出て來て
典膳　ナニ、主計どの。最早矢數の刻限。檢分の役目なれば、急ぎ
主計　三十三間堂へ參りませう。
典膳　それがようござる。彌源次も、半十郎も、假家へ參つたでござらう。
主計　めい／＼の役目、粗略はござるまい。イザ、典膳どの。
典膳　主計どの。
主計　家來、供せい。
　ト唄になり、主計こなしあつて、典膳、家來の皆々を連れ、靜々と向うへ入る。引き違へて件作、袋入りの硯を持つて、三河屋利兵衞とせり合ひながら、向うより兩人出て來り
利兵　件作さま、大事の代物ぢや。その硯をマア、此方へ

戻して下さりませ。

伴作　ハテ、サテ、よいてや。伯父御典膳さまが、請け戻さうとある松蔭の硯、これをお目にかければ、直ぐに金子は其方へ。

利兵　それは此方の義理を缺いても、お金の早いが勝ちでござりまする。

伴作　いかにもさうであらうが、此方も

利兵　金子を只今、

伴作　サア、渡してくれうと思へば、まづ典膳さまへお目にかけた上。

ト行かうとするを、利兵衛、あわてゝ引き留め

利兵　ア、コレ、滅相な。金と引替へでなければ、心が済みませぬ。マア／＼、その硯を此方へ。

ト取りにかゝる所へ、瀧平、ツカ／＼と出て、利兵衛を突き廻し

瀧平　質屋利兵衛。

利兵　ヤア、瀧平どの。

瀧平　暮れ六つまで待たうと請合ひながら、僞はり飾る素町人めが。

トきつと云ふ。利兵衛、モヂ／＼して

利兵　サ、、、その御立腹は御尤も。何をいうても、金づく。若しこなたが間違ふと、此方も取り外すと、一も取らず、二も取らず。

瀧平　默れ。利慾にかゝはるうぬが心に引き競べ、虚言を云ふ瀧平と思ふか。

ト此うち伴作、持つて居る硯と、臆病口に直しある駒下駄と掏り替へて、服紗に包み、懷中する。

利兵　そんなら、硯を渡しませう。

ト伴作が側へ行つて

サア、それを返して下さりませ。

伴作　すりや、如何やうに云うても、この硯は。

利兵　金と引替へでござりまする。

瀧平　然らば、身共の方へ。

ト引ツたくる。

利兵　イヤ、どなたでも、お金と引替へ。それまでは、大事の代物。滅多には手離しませぬ。

ト行かうとするを

瀧平　すりや、暮れ六つまでは。

利兵　金さへ渡りや、誰れ彼れの見境ない。四角な硯は、いびつな金と、引替へに渡しまする。

ト摺替への硯を持つて、向うへ走り入る。伴作、わざとこなしあつて

伴作　あの硯を。

ト行かうとするを、瀧平、突き廻し

瀧平　伴作どの、こなたもあの硯を

伴作　ハテ、お家のお爲。いづれからでも

瀧平　イヤ、合點がゆかぬ最前の詞の端、矢數の屆けと僞はつて、さては、あの硯を

伴作　ヤ、なんと。

瀧平　滅多にやらぬ。待たつしやい。

伴作　イヤ、忠臣顏する下郎のうぬ。

トかゝる。これより兩人、烈しき立廻りよろしく、トド「どつこい」と見得になると、ちよん〳〵にて、道具廻る。

造り物、一面の三十三間堂、向う打拔きにて、この緣側に半十郎、彌源次、大肌脫ぎ、腰卷、鉢卷、ゆがけ、絃上り、射前にてよろしく、この側に矢渡しの侍ひ二人附添ひ、矢數の見得。上下の侍ひ、大勢、「した〳〵〳〵」と采を振つて居る。大小入り、好みの合ひ方にて、道具とまる。

ト半十郎、彌源次、負けず、劣らず、弓引いて居る。よき所にて

侍一　斑猫三百五十筋。

侍一　切斑の矢、僅か百八筋。

大勢　した〳〵〳〵〳〵。

ト彌源次は無性に引いてゐる。半十郎は弓を撓め直し、取り替へ、ゆとりして又射前にかゝる。始終「したした〳〵」の掛け聲。道具また廻る

造り物、元の八幡へ戻る。

ト才兵衞、柏木を引立てようとしてゐる。先次郎、柏木を圍う引ゐる。田毎はじめ女形、皆々留めて居る。常の合ひ方にて道具とまる。

皆々　そんなら、どうあつても

ト才兵衞、先次郎を引き退け、柏木にかゝる。

先次　コリヤ、親方。最前も云ふ通り、後金を渡さう

才兵　面白い。その金は、

柏木　コレ〳〵、殿さん、滅多な事云はしやんすな。爰に無い身請けの金を、渡さうというて、また御難儀を

先次　ハテ、大事ない。最前頼んだ半十郎・矢數が終ると、
此方の吉左右。その時渡す身請けの金。

才兵　すりや、矢數が終るまで

柏木　どうぞ親方さん

皆々　待つてあげなんせいなア。

ト内にて

大勢　した〳〵〳〵〳〵。

先次　ありや矢數の矢聲。

ト向うより侍ひ一人、幟を持つて出て

士ひ　通り矢の印し。

ト差出して、引き返し、入る。

先次　七百五十筋。……こりや彌源次が印しの通し矢。

ト驚ろくこなし。柏木もこなしあつて

柏木　さうして、半十郎さんのはえ。

先次　サア、その便宜を

ト向うより德助、幟を持つて走り出て

德助　若旦那の通り矢。

ト差出す。

先次　オヽ、待ちかねてゐた。

ト幟を取つて見て

ヤア、こりや僅か四百筋。

德助　どういふ事か、餘程の後れ。

先次　コリヤ、追ひ〳〵に知らしてくれ。

德助　ハツ。

ト向うへ走り入る。

才兵　どうも待ち遠な矢數の勝負。それより矢ツ張り

ト柏木を引ッ立てるを、振離し

柏木　おッつけ知れる矢數の終り。

才兵　でも。

先次　待て。

ト皆々立廻りよろしく、三人にて、ちよん〳〵と又道具廻る。

造り物・三十三間堂になる。初手の通り、彌源次は差詰め引詰め射て居る。半十郎て弓杖突いて見合せて居る。元の通り、大小入りの合ひ方にて、道具とまる。

暫らくあつて、内より

典膳　アレ、見られよ、半十郎よりは彌源次が、勝りし通り矢。最早、千筋に近づきまする。

主膳 半十郎。何を猶豫。後れを取つては、その身の恥辱。所存あつてか。なんと〳〵。

ト勵ます詞に

半十 ハツ〳〵。

トこなしあるうち、

彌源 南無三。矢を射切つたぞ。

侍ひ 矢取り〳〵。

トこれにて、二人、陣笠を着て、矢をすさまじう抱へ、彌源次と半十郎の前へ置く。彌源次、此うち弦をしごき、弓を撓めて居る。半十郎、精無く、弓を構へ、矢を取り、「心得ぬ」といふこなしにて、矢に結び文巻きあるを、ほどき見て

半十 「柏木太夫手附け證文。」

ト讀み、悄りする。彌源次もこなしあつて

彌源 ヤア、それは。

ト取りにかゝるを、弓にて突き廻して

半十 思ひがけないこの證文。

ト片脇より

友次 矢取りの働き。

ト陣笠を取つて顔見せる。

彌源 ヤア、うぬは友次。そんなら

ト側にある紙入れを手早に開き、手附け證文を出して、開き見て、

「山開き、來る二十一日より。」……ヤア〳〵、こりや吹替へ。さては。

ト友次をキッと見る。友次、又ちやつと陣笠をかぶり

友次 した〳〵〳〵〳〵。

ト云ひ〳〵、走り入る。

彌源 ムウ。

ト力む。

半十 エヽ、忝ない。

ト證文を腹帶の間へ入れると、内より

主計 兩人、勝負を早く〳〵。

半十 さうぢや。

ト弓を取りあげ、居直つて、矢繼ぎ早に段々烈しく射る。彌源次は立つたり居たりウロ〳〵して、フト半十郎を見て、俄にうろたへ、弓を取りあげては落し、矢を逆さまに番ふ事などあつて、うろたへるこなし。半十郎は、委細かまはず、差詰め引詰め射通す。此うち始終「した〳〵〳〵」の掛け聲餘程あつて、はる

侍ひ　か内にて、隨分大きな聲にて
　切斑の通り矢千筋。
ト呼ばゝると、大勢、鬨の聲を上げる。これにて半十郎、弓を持ち替へ、射前を直す。
侍ひ　斑矢は劣りて八百筋。
ト同時の聲をあげる。此うち主計、典膳、ツカ／＼と出て
主計　稻野谷半十郎。矢數の勝負に勝ちし上は、いよ／＼蟇目の役目、申し附くるぞ。
半十　時の面目。有り難う存じまする。
彌源　うぬ、半十郎。
ト刀を取上げ、切りかけるを突き廻す。典膳も、ズルズルと行つて切りかけるを、半十郎、兩方をよろしく留めて
半十　典膳さま。彌源次どの。こりや何と召さるゝ。
彌源　イヤサ、これは。
ト主計は典膳を引分け、入れかはり、半十郎は彌源次を引廻すうち
主計　コレサ、矢數の祝儀は屋敷にて
典膳　いかにも左樣。
彌源　これより直ぐに
ト又かゝるを、半十郎よろしく留めながら
半十　御兩所のお立ち。
ト皆々よろしく、行列三重にて、道具廻る。

造り物、一面の土手、松原になる。矢張り行列三重にて、道具とまる。
ト瀧平、拔き身を振あげてゐる。利兵衞、下に身を縮めてゐる。
瀧平　心得なければ、利兵衞、非道と知つても討ち殺し、その硯を取返さねば、此方のお家の滅亡。
利兵　ア、コレ／＼、瀧平どの、そりやこなさん、あんまり胴慾ぢや。約束の金も渡さず、硯を返せと、無理におれを殺さうとは、そりやあんまりぢや／＼。
瀧平　忠義に代へぬ身共が魂ひ。小の蟲を殺して、大家の納まり。不便なれども其方を。
ト切り込む。利兵衞、摺り拔け、起きあがり、逃げるを引戻す。立廻りのうち、利兵衞、瀧平の拔き身をよろしく取る。瀧平、この間に、懷の硯を引出す。「それを」と取り附き、引合ふうち、向うより東小僧鉦八走

り出て、兩人がせり合ふ中へ

鉦八　この硯を。

ト取りにかゝる。

瀧平　何をひろぐ。

鉦八　この硯を欲しい。

ト引ッたくり、逃げ出すを、瀧平、利兵衞追ひかけ、立廻りよろしくあつて、トゞ三人ともに臆病口へ入る。矢張り此うち行列三重にて、向うより中間傳助、ぽつとせ、黑の脚絆、合羽籠をかたげ、草鞋を穿き、本舞臺へ來て、右の合羽籠を下ろし、草鞋を穿きかへるうち、臆病口、バタ／＼にて、瀧平、鉦八、利兵衞を追つて出る。傳助愕り、立ちあがる。三人、滅多無性に摑み合ひ、傳助、うろたへ廻つて、臆病口へ逃げて入る。鉦八、利兵衞は向うへ逃げて入る。瀧平、追ひかけて入る。始終、バタ／＼にて、鉦八、引返し走り出て、本舞臺へ來り、倒れ、息をつき、右の合羽籠を見て「幸ひ」と立ちあがり、片荷の蓋を明け、笠合羽を投げ出して、その中へ入り、ちやつと中より蓋をして、忍び居ると、又バタ／＼にて利兵衞、逃げて出て、これもうろたへながら合羽籠を見附け、蓋を明け、また片荷の方へ入り、中より蓋をして、ヂッと隱れて居る。バタ／＼鎭まると、臆病口より傳助、ウロ／＼立戻り來て、あたりを見て、こなしあつて

傳助　今のは何事であつた知らん。あつたら膽を潰さし居つた。……肝心のお供に外れてはならぬ。ドレ／＼。

ト合羽籠へ立寄り、棒を挿めて擔がうとしても、重たいこなし、思ひ入れ、さま／＼あつて、トゞ下へつくばひ、肩を入れ、グッとかたげ上げると、兩方の底拔け、利兵衞、鉦八、坐つて居る。傳助膽を潰す。兩人愕り、傳助、ちやつと刀の反りを打つ。三人よろしき見得あつて。

ひやうし幕

## 第一番目二幕目　　桃の井屋敷の場

役名――濱田逸當娘、小稻。下部、瀧平。桃の井先次郎。山駒源吾。蔦坂平馬。桃の井與膳。修驗者、竈法印。桃の井修理太夫。東小僧鉦八。岩城彌源次。久利勘解由。長尾內藏之進。稻野谷半十

郎。

本舞臺、三間の間、屋敷の高塀。西の大臣柱、松の大樹、登るやうにして、この松、塀の屋根へ、振りよく近づき、この枝に紙を引裂き、古歌の上の句を書きて括りつけてある。右の道具よろしく、幕の内より、拍子木の音、時の鐘にて幕あく。

ト花道と下座の方より、菖蒲革の侍ひ二人、拍子木を打ちながら出て來て、互ひに行き合ひ

侍一　これは新五左衛門どの、御油斷なくお廻りなさるな。

侍二　貴殿にもお役目、御出精でござるな。

侍一　左樣でござる。この度、都、足利家より、家の寶改めとやらで、お使者の御下向。屋敷に御逗留中、御家老樣より云ひ附けにて、日暮れより嚴しく夜廻り仕り、火の元萬端氣を附けよとの仰せ渡され。

侍二　その上、當桃の井家の大殿修理太夫さまには、この程より御病氣と申す。内々承はれば、物の怪のやうたる御沙汰。それに違ひはござらぬかな。

侍一　左樣でござる。その物の怪を退くるは、蟇目に越したる事なしとて、御家中に弓勢の聞えある、稻野谷半左衞門さまの御子息、半十郎さまと、岩城彌源次さまと、深川三十三間堂にて、弓勢くらべ。勝ちたる方にその役目、仰せ附けられるとの御上意ゆゑ、昨日の晴れ勝負。たうとう半十郎さまの勝ちとなる。今日はその役目を、お勤めなさるゝとの儀でござる。

侍二　イカサマ、その蟇目にて、大殿の御本腹とあらば、半十郎さまは忽ち一廉の御立身でござらう。イヤ、思はぬ話しに時が移りまする。

侍一　もう廻りませう。

侍二　左やう仕らう。

侍一　御苦勞に存じまする。

ト左右に別れ、拍子木を打ち／＼、花道と下座へ、入れかはり入ると、忍び三重、捨て鐘になり、花道より、半十郎、着流し、一本差し、手拭を頰冠りにして、忍び出て來り、あたりを窺ひ、こなしあつて

半十　暮れて間もなき宵月を、闇こそよけれ忍ぶ身の、戀に事寄せ、蟇目の傳書、今宵ひそかに渡さんと、小稻の返事嬉しくも、日暮れを待つて出て來たが、お屋敷の内といひ、嚴しき夜廻り。見附けられぬ其うちに、どうぞ首尾ようこの塀の、松を目印し、小稻が部屋へ。それそ

れ。

ト松の木へ立ち寄り、枝の紙に目を付け、取りて來て、透かし見る事あつて

何ぢや。「わが脊子が、來べき宵なり、さゝがにの。」ムウ。この古歌は、戀の上の句。下の句は。オヽ、それ〳〵。「蛛のふるまひ、かねてしるしも。」衣通姫が、男を待つ歌。かねての約束。この半十郎が、來べき宵なり、さゝがにのと、目印しは枝折りの心。爰は塀の外おり姫。忍び込むのを松の足代。ハテ、戀には賢い小稻が計らひ。教へに從ひ、一時も早う。さうぢや。

ト始終忍び三重、捨て鐘にて、右の松の木を傳ひ、こなしあつて、塀の內へ忍び込む。向う、大バタ〳〵にて、鉦八、口幕の硯を持つて走り出て來り、舞臺にとまり、息をついて

鉦八　アヽ、嬉しや。よもや爰までは來をるまい。先次郎が質に置いた松蔭の硯。手に入つたは福德の三年目。これを與膳さまへ差上げて、御褒美の金を。うまい〳〵。

トこなしある所へ、又向うバタ〳〵にて、瀧平、走り出て來る。

瀧平　鉦八、爰に居るか。

鉦八　ヤア、瀧平、又うせたか。

瀧平　うぬが持つて居るは、慥かに松蔭の硯。此方へ渡せ。

鉦八　なにを。

ト兩人、立廻りよろしく、トヾ鉦八、下座へ逃げて入る。瀧平「うぬを」と追ひかけて入る。直ぐ

引返し

本舞臺、三間の間、桃の井屋敷の內庭、廻り廊下傳ひの心にて、東の方へ寄せて、綺麗なる圍ひの道具。爰に半十郎、卷き物の傳書を開き見てゐる。小稻、振り袖の拵へにて、手燭を差出し、見せて居る。この見得よろしく道具とまる。

ト蛙なく。合ひ方。

半十　今、この祕書を見るところ、蟇目の由來は知れたれども、口傳と記せしこの趣意は。

小稻　總じて物の傳授といふは、讓るべきその人に、用ひやうを云ひ教ふるが祕事口傳。その時渡す印可の祕書と、教へなされし上、父濱田逸當さまに、習ひ覺えし蟇目、

半十　その蟇目とは、アヽ、〳〵、折しも蛙の鳴く音に准へ、蟇目と名くるものと聞く。

小稻　イエ〳〵。全くさにあらず。蟇の鳴く音に出るものならば、蟇音、蟇聲とこそ書くべきを、目の字を附けて蟇目とは。

半十　それこそは、その昔、ある深山に妖鬼出でて、往來の人を取り喰ふ。然るところ、山中より、大いなる蟇出でて、彼の惡鬼を喰ひ殺せり。依つて彼の蟇の目の形を寫し、蟇の目を作り、妖怪を退くと聞き傳ふ。

小稻　その論も皆僻事。たとへば妖怪、狐狸の類ひ、鏃を附けず、矢を放たず、唯弦音に退くる。

半十　蟇目の文字は、

小稻　響目なり。

半十　して、寸法は。

小稻　四五寸、或ひは一尺二寸。

半十　すりや、定まりのなきものにて。

小稻　人により、弓により。

半十　彼の彌源次に射勝ちの弓勢。

小稻　それゆゑ、蟇目のお役目を

半十　蒙むりし上からは、半十郎が日頃の賴み。

小稻　わたしも願ふ戀の口傳。

半十　サア、それも合點なれど、急くは蟇目の祕事口傳。

小稻　わたしが口から

半十　口移しに

小稻　御傳授申さぬその先に、日頃の思ひを。

ト恥かしきこなし。

半十　すりや、どうあつても今爰で。

小稻　叶はぬ上は敎へぬ祕事。

半十　ぢやというて、今宵の役目、蟇目の切迫。

小稻　それぢやによつて、わたしが戀も

半十　叶へぬ時は

小稻　口傳はせぬぞえ。

半十　それでは、此方の

小稻　叶へて下さんすか。

半十　サア、それは。

小稻　サア、

半十　サア、

二人　サア〳〵〳〵。

小稻　否とあれば、その印可も

ト取りにかゝるを、半十郎、振り離し、手燭の火を吹き消す。

小稻　ヤア、灯をお消しなされしは。

半十　半十郎が戀の返事。

小稻　そんなら、アノ

　トこなしあつて

オヽ、嬉し。

ト半十郎にピッタリ寄り添ふ。これにてチョン／＼にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、見付けは金襖にて、結構なる衝立。琴唄にて道具とまる。

ト直ぐ向うにて「お使者のお入り」と呼ぶ。これにて奥より典膳、着附け、上下にて、出て來る。後より源吾、平馬、喜藤太、いづれも着附け、麻上下にて、出迎ふ。よき程に、花道より、勘解由、上下、衣裳。內藏之進、同じく上下、衣裳にて、家來連れ出て來て、花道にとまる。

勘解　これは伯父御典膳どのはじめ、源吾、その外、出迎ひ大儀。

內藏　横目役の長尾內藏之進、折よくもお出合ひ申す。直さま勘解由どのと御一緒に。

皆々　お役目御苦勞。イザ、先づ、これへ

典膳　お通りあられませう。

　ト勘解由、內藏之進、舞臺へ來る。皆々よろしく座に直り

內藏　何れも出迎ひ祝着千萬。分けて、久利勘解由どのには、この度のお役目、御苦勞に存じまする。

勘解　これは／＼、御挨拶。內藏之進どのにも、今日のお役目と申し、おめでたう存じまする。

內藏　桃の井家の伯父御、典膳どの、その外、源吾をはじめ、家中の面々揃はつしやつて、堅固の體、先づは滿足。桃の井先次郎どのには、拙者妹を以て、內緣を取組みましたは、即ち上樣よりお指圖。互ひに結納を取りかはしあれは、あひやけ同然。然るにこの程、ほゞ承れば、修理太夫どのには、只ならぬ御病氣と聞いてござるが、左樣でござるかな。

源吾　仰せの通り、主人の病氣、失禮の段は、幾重にも、御容赦なされて下されませう。

內藏　それゆゑに、婚禮の儀も延引いたし、近頃氣の毒に存じまする。

勘解　即ち武將家の嚴命により、諸家の重寶を受取るは拙者、貴殿には横目の役。それに附き、この間より、當屋

ざる。

敷に旅宿仕り、貴殿のお出でを、相待ち居りましてござる。

内藏　それはお待ち久しうござつたでござらう。この度、足利武將家に於て、「武器財集錄」と申す書を、お撰みなさるゝに附き、諸侯の重寶を御上覽との儀。當家の重寶、松蔭の硯、即ち拙者、勘解由どの立合ひの上、內見いたし、直ぐに足利家の上覽に備へ、事果てし上にて、御返進あるでござらう。當家に於ても、御違背はござるまいな。

典膳　ハツ。有り難き上意の趣き、即ち當上屋敷の寶藏に祕めある松蔭の硯、源吾、其方持參し、御內見に入れてよからう。

源吾　畏まつてござりまする。

ト立ちあがる。この時奥より先次郎、ツカ〳〵と出て源吾を留め

先次　イヤ、コレ、源吾。マア〳〵待ちや。その松蔭の硯に附いては

平馬　コレ〳〵、若殿。松蔭の硯が何と致した。

先次　イヤサ、それはの。

平馬　お使者といひ

源吾　檢使のお入り

典膳　はや寶を持參せい。

源吾　ハツ。直さま、只今。

ト立上るを又留めて

先次　イヤサ、その寶はの。

勘解　先次郎どの。如何いたした。

內藏　大切な寶、改め、なぜ辭退召さるゝ。

先次　サア、これは。

トもぢ〳〵立つたり居たりする。

內藏　何ともハテ心得ぬ。

ト先次郎、いろ〳〵あつて

先次　ホイ。

トこなし、この時、向うにて

瀧平　アイヤ、松蔭の硯は、これでござりまする。

ト瀧平、鉦八、硯の袋を奪ひ合ひながら出る。皆々鉦八を見て、恟り。

皆々　ヤア〳〵、下部瀧平。

平馬　松蔭の硯があるとは。

瀧平　即ち爰に。

ト立廻り、さま〴〵あつて

鉦八　しつこい、瀧平。おりや松蔭の硯とやらは、知らぬぞ知らぬぞ。

瀧平　ヤア、知らぬとは云はさぬ。疾からうぬを附け廻したも、大切な此方の硯は、うぬが所持して居る事、知つて居るゆゑだワ。

鉦八　われも餘ッぽど根のよい者だの。おれも昨夜から、逃げた／＼、晝夜を知らず、附け廻つた。

瀧平　こま言云はずと、早く硯を出せ。

鉦八　イヽヤ、覺えはないワ。

瀧平　覺えないと云や、斯うして。

ト懐へ手を突ッ込む。

鉦八　何をべら坊め。

ト立廻り、懐中より袋入りの硯を出し

瀧平　さてこそ、これが。

鉦八　それを。

トかゝるを、ちよつと當てる。いづれもこなし。

瀧平　松蔭の硯、只今やう／＼手に入りましたぞ。

ト勘解由が方へひけらかし、

ヘヽヽ、ムヽヽヽ。どなたもお喜び下されませう。併し、ハヤ、桃の井家の滅亡を心掛くる方もあらば、實が出たので、當の鎚が違ひませう。御上覽の濟んだ上、瀧平めがこの禮は、きつと持つて來るほどに、腰骨の用心して、待つてござれ。アノ、こゝな

ト勘解由を見て氣を變へ、鉦八の方を睨み附け

大泥坊め。

ト右の硯を袋のまゝ、勘解由・内藏之進の眞中へ置いて、下へ下がる。勘解由、これを見て

勘解　ハテ、サテ、下郎に似合はぬ、天晴れの働きながら、勘解由、何ともその意を得ぬ。大切な家の重寶、錠前に錠前を重ねて置く、寶藏に籠めあるべきを、何ゆゑ、只今、兩人が手に

先次　イヤサ、その儀は

勘解　どう致した儀でござる。

典膳　お使者のお詞、この典膳も合點が行かぬ。先次郎、御返答仕らぬか。

平馬　若殿様。どうでござるな。

先次　サア、その硯の儀は。

平馬　先次郎さまの吉原通ひ、傾城の元手に、質物となりました。

勘解　ヤ、なんと。

先次　南無阿彌陀佛。

　ト内藏之進こなし。

　ト腹を切らうとするを、瀧平とめて

瀧平　待つた、若殿。其お命を捨てさせまい爲、下郎が體を粉に砕いて、取返したるあの硯。紛失と申すにこそ、實は身の差合ひと、寶物に差入れたは内證事。たとへ露顯に及んでも、お改めの間に合へば、申し譯は立ちまする。急くところでござりませぬ。マア〱、お扣へあられませう。

内藏　成る程、瀧平とやらが申す通り、意なく手に入る寶、切腹には及ぶまい。勘解由どの、先づ〱硯を改めて遣はされい。

勘解　イカサマ、内藏之進どのゝお詞。然らば改めまするでござらう。

　ト内藏之進に目禮、勘解由、袋の紐を解き、内より駒下駄を出し、恟りして

コリヤ、下郎、瀧平とやら。桃の井の重寶、松蔭の硯はこれか。

　ト見せる。皆々恟りして

典膳　ヤア〱〱。寶の硯と思ひの外、駒下駄と變じたは。

皆々　こりや、どうだ。

　ト瀧平こなしあつて

瀧平　慥かにそれと見附けた硯。それが駒下駄になつてあるとは。

　トこなし。此うち鉦八、心附き

鉦八　そんなら、あれも吹替へであつたか。ハテナア。

　ト瀧平、ツカ〱寄つて、鉦八を引き附け、

瀧平　サア、眞の松蔭の硯を爰へ出せ。

鉦八　べら坊め。おれも眞の硯と思つて、大事にして持つて居たら、駒下駄と變つてあるは、いかな芥之助も、こりやア知るめえ。

瀧平　サア、斯ういふ事もあらうかと、われが摺替へて置いたのであらうがな。今一度、懷中を

鉦八　探せ〱。いくらでも、サア、探せ探せ。

　ト瀧平、捨ぜりふにて、いろ〱探し見て

瀧平　こりや懷中には

鉦八　何もあるまいがな。

瀧平　すりや、硯は矢ッ張り。

　ト當惑のこなし。

先次　それおやによつて、先次郎が
ト又た柄に手を掛くるを瀧平、留めて
瀧平　待つた、先次郎さま。寶の在所、黑白の解らぬうちに、御生害なされては、犬死になりますがや。
先次　ぢやというて、申し譯が。
勘解　それ〳〵。云ひ譯は先次郎どの、切腹あるが、いつち好い料簡でござらう。
內藏　アイヤ、そりや惡からうと存ずる。
勘解　そりや又、なぜな。
內藏　さればサ。武將家御懇望の寶は手に入らず、先次郎が首を、寶の代りに持ち歸つてござると、餘人は知らず、拙者などはえい申さぬ。
勘解　して又、紫檀の硯は。
源吾　ござりまする。
勘解　なんと。
源吾　ハテ、寶藏に納めある大切なお寶、持參いたす源吾を留めだてして、瀧平が思はぬ麁相は、若殿のお身の上。横目役してござる長尾さまにも、暫らく御休息のその上にて、座敷を改め、御內見。
內藏　イカサマ、源吾が申す如く、何やら縺れたこの場の樣子。一時延ぶれば廣間にて、休息の上、硯の內見、勘解由どのにも御一緒に。
勘解　參りませう。さりながら、下部の瀧平、ちよつと用がある。これへ來い。
瀧平　アノ、拙者にな。
勘解　苦しうない。免す〳〵。
瀧平　ヘイ。
ト前へ出る。
勘解　キリ〳〵、うせう。
瀧平　ヘエイ。
ト目禮して、勘解由が前へ行き
御用でござりまするかな。
勘解　いかにも。その用といふは。
ト襟首取つて引附ける。先次郎寄らうとするを
なんだ〳〵、何をヂタバタ。扣へをらう
ト睨め附ける。
ヤイ、下郎め。久利勘解由を何者だと思ふ。足利の近臣たる、その前とも憚らず、匹夫下郎の身を以て、人の臑に掛けし泥下駄を突き附け、寶で候ふなどゝ、使者に立つた勘解由を、わりや馬鹿にひろいだな。殊に、最前な

んと云つた。內見の濟んだ上、お禮持つて來る、腰骨に用心せいと、我れ〳〵に當て附け。コリヤ

ト內藏之進が方を見て

この腮で吐かしたか。この顋で吐かしたか。貴人に向つて、出る儘の雜言過言。併しハヤ、身共に向つて、大言を吐くは、なか〳〵器量のある奴だ。出かす〳〵。われへの褒美は、オヽ、それ〳〵。幸ひのこの下駄で、カウカウ〳〵。

ト內藏之進へ當て附け、瀧平を散々に打つ。皆々こなしあつて、先次郎もこなし。瀧平、キッとなつて

瀧平　勘解由さま。

勘解　なんだ。

瀧平　いかに出頭なればとて、瀧平も武士だ、侍ひだ。一合取つても忠義の魂ひ、よくも御褒美と、泥下駄で、御打擲なされましたな。

勘解　オヽ。ぶちのめしても大事ない。

瀧平　なんと。

勘解　當時出頭の某、武士の祿を喰めば、すべて侍ひと思へども、たとへば鳥類でも、われが雀なら、身共は鳳凰、大鳥だぞ。その小鳥、小雀の分で、慮外働く大泥坊め。

ト突き飛ばす。錠八、其まゝ引附け

錠八　コレ、エヽ、うぬ。昨夜から此方を、手ひどい目に會はしやアがつたな。その返報は、うぬを斯うして〳〵。

ト引附け、くらはさうとするを、瀧平、突き廻し

瀧平　なにをひろぐ。お家のお爲と思ふゆゑ、勘解由さまの惡口は聞いても居やうが、うぬはなんだ。以前はともあれ、東小僧錠八といふ、大泥坊の大盜人だワ。

錠八　イヤサ、そりやア

瀧平　繩をぶたうか。

錠八　サア

瀧平　サア

兩人　サア〳〵〳〵。

瀧平　どうだ。

ト錠八、ムウと息つまる。この時、勘解由、こなしあつて

勘解　コリヤ、錠八。其方は勘解由が抱へてくれう。

錠八　エヽ。

勘解　ハテ、どうで其方は……イヤ、サア、どうやら器量のある骨柄、身共に奉公いたせ。ナ、奉公いたすからは、勘解由が家來、慮外働らく奴等は、一々に討つて捨てい。

ト弃添を抛つてやる。鉦八、取上げ

鉦八　幸ひの仰せ。今、足利の家へ御出頭の、御家來になるからは、うぬ。

ト柄に手をかける。瀧平、突き廻す。ちよつと立廻りにてとまる。

勘解　ヤイ〱。小雀の身を以て、鳳凰の下知を背くか。

瀧平　オヽ、事と品とによつたなら、隨分背く。背きまする。

内藏　コヤリ〱、瀧平。大事の客人、場所が悪いぞ。

瀧平　でも、眼前、此奴は。

内藏　ハテ、手向ひならぬ。足利家御出頭。殊に、實改めも濟まざる上、刃向ひ立ては、叶はぬ〱。高が其方は小雀でないか。しかも小鳥ぢやによつてナ。兎角、鳳凰には負けて居れサ。

トこなし。

瀧平　ムウ。

ト先次郎と顔見合はせ、無念の思ひ入れ。

典膳　ハヽヽヽ。なんぼチタバタ騒いでも、所詮叶はぬ足利の御威光。

源吾　左様でござりまする。御兩所様にも、最前から餘程の間。

平馬　奥の別間で御酒一献。

内藏　その上にては硯の内見。

先次　それでも、どうやら

瀧平　ハテ、何事も、拙者が胸に。

勘解　その内見は、夜中の鐘。

内藏　それまでは、打寛ぎ

源吾　暫らくは御休息。

瀧平　とはいふものゝ。

ト立ちかゝる。

勘解　なんと。

トこなし。

内藏　ハテ。イザ、御一緒に。

皆々　先づ、お入りあられませう。

ト唄になり、いづれもこなしあつて、内藏之進先に、典膳、先次郎、勘解由、こなしあつて、奥へ入る。瀧平も鉦八を睨み付け、下座へ入る。跡に鉦八一人殘り、思ひ入れある。

鉦八　ヤレ〱、草臥れたぞ〱。危ない所を勘解由さまの御威光で、マア、一旦は濟んだものゝ、灰汁の拔けね

えおれが身の上。さるにても、心得ぬは、正眞の松蔭の硯、あるといふが眞か。但し又、此方の幕の内へ納まつてあるか。どうも合點がいかねえわえ。

トこなし。この前より彌源次、衣裳、上下にて、後へ出て、聞いてゐて、この時

彌源　氣遣ひいたすな、鈺八。眞の硯は手前にあるぞ。

彌源　ヤア、あなたは彌源次さま。すりや、松蔭の硯は。

鈺八　深川に於て作作が摺り替へて、身共に渡して、疾より爰に。

ト懷中より出して見せる。

鈺八　さうとは知らず似せ物を、眞と思つて、無駄骨折つたやつサ。

彌源　この彌源次も矢數の勝負、無駄骨折つて、稻野谷半十郎に射負けた意趣、即ち深川にて手に入れたる、小稻へ送りし半十郎が密談の一通。又、逸當が直筆の、小稻と某が艷談の文通。彌源次への直書を以て、不義者に仕掛けた上、寶の空き箱へ、其方が災ひとなつた半十郎が定紋の、觀菊の彼の小柄を入れ置いたれば、それを囮りに戀の意趣、晴らす手段は樣々あれば。

鈺八　併し、眞の硯所持あるは、危ないもの。

彌源　サア、そこで身共が思ふには、硯といひ、其方が身の上。事成就するまでは、暫らく隱すその目當は、コリヤ。

ト引寄せて囁く。

鈺八　すりや、大津の柴屋町へ。

彌源　シツ、聲が高い。

ト硯を渡す。鈺八、受取り

鈺八　そんなら、わしは、これより直ぐに。

彌源　ソレ。

ト金の包みを抛つてやる。鈺八、受取り

鈺八　これを路銀に。

彌源　早く行け。

ト唄になり、彌源次こなしあつて、奥へ入る。鈺八、殘り、硯を懷中して

鈺八　彌源次さまの教へに從ひ、身を隱すは柴屋町。彼の人にこの硯を、一時も早う。さうだ。

ト行かうとするを、瀧平ツカ〲と出て、向うに立ちふさがり

瀧平　泥坊め。待て。

鈺八　誰れだと思へばまた瀧平。しつこいぞ〲。

瀧平　オヽ。ひつこくとも硯の詮議。似せ物を摑ませたは眞の硯の有る證據、尋常に渡した上。うぬにも繩ぶつ、覺悟しろ。

鉦八　さう吐かしやア、われから先へ覺悟しろ。

瀧平　われから。

鉦八　われから。

ト懷中へ手を突ッ込むを、振り拂ふ。これより少し立廻りある所へ、奥より平馬、源吾走り出て、瀧平を左右より取卷き

ト爰構はずと。

平馬　合點だ。

ト鉦八は一散に花道へ走り入る。

瀧平　詮議の曲者。

ト追つかけやうとするを留めて

兩人　やる事はならぬわえ。

瀧平　たつて邪魔立てするが最後。小分ながらお相手に。

兩人　小積な下郎め、うぬ。

ト兩方より拔きかけるをキッと留める、引拔いて切り附ける。立廻り少々あつて、瀧平、平馬、源吾よろしき見得にてキッとなる。これにて九つの鐘を打ち込む。

チョン〳〵にて、

引返し

本舞臺、三間の間、眞中に、亭屋臺打廻し、塗り骨の障子。西の大臣柱、柳の木、下草あしらひ、井戸植込みの模樣。奥庭の景色にて、この柳の木へ振り出しにて、魔法印、異形の扮裝、秘文を結んで居る。亭屋臺に、修理太夫、着流し、丸括け、病ひ鉢卷にて、結構なる屛風を引廻し、幾重も重ねて蒲團の上に、刀を杖に突き、庭の燒酎火に目を附けて居る。この見得、凄き合ひ方、薄ドロ〳〵にて、道具とまる。

修理　ヤア、又も來つて修理太夫を惱ます。妖怪、狐狸の類ひか。變化の所爲か。今、立ち所に某が一刀の下に災ひを退けん。怨敵退散々々々々。

トどろ〳〵にて、修理太夫立ちあがり、刀を引拔き、切り拂ひながら、舞臺へ下りて、いろ〳〵あり、法印キッと祕文を結ぶ。トヾ修理太夫、刀を杖に、キッと思ひ入れあつて

修理　エヽ、殘念や。口惜しやなア。

トこなし。この時向うにて

半十 キウ〳〵。リヨセイ。

ト大ドロ〳〵にて、竈法印、ひとりでに苦しみ、柳の木より見事に落ちる。バツタリと倒けて死ぬる。これと一緒に、修理太夫、ベツタリと坐る。ドロ〳〵やむ。この途端に、奥より先次郎・源吾、喜藤太、平馬、典膳、いづれも手燭を持ち、バラ〳〵と出て、てん〴〵に手燭をかゝげ見て

皆々 これは。

半十 今こそ殿の御本腹。

ト大小のあしらひにて、向うより半十郎、麻上下の股立ちを取り、上を剝ねかけ、襷凜々しき拵へにて大きなる弓を抱へ、ツカ〳〵と出て、花道のよき所にとまる。

先次 オヽ、稻野谷半十郎。

典膳 蟇目の役目

三人 御苦勞に存ずる。

半十 ハテ、今日、只今、御病氣の御全快。いづれも、とくとお呼び生け。

先次 いかにも。

ト皆々修理太夫が左右より立ちかゝり

申し、父上樣。

典膳 修理太夫どの。

皆々 お心が付きましたかな。

ト修理太夫、きつと起きあがり、あたりを見廻すこなしあつて

修理 弟、典膳。悴、先次郎。喜藤太。平馬。山脇源吾。只今妖怪の妨げに、茫然たるその折から、耳に響きし弦音に、忽ち心も晴々と、常に變らぬ修理太夫。

半十 それこそ蟇目の秘事口傳。いづれも、妖怪の正體を吟味あれい。

三人 成る程。

ト平馬、喜藤太、源吾、立ちあがり、竈法印が死骸を改める。此うち半十郎も舞臺へ來り、三人、恟りして

平馬 ヤア〳〵。妖怪變化と思ひの外

源吾 こりや見知りある竈法印。

半十 すりや、その者の幻術にて

先次 父上を惱ませしか。

典膳 ハテサテ、憎い法印めだなア。

トこなし。此うち亭屋體より内藏之進出て

内藏　修理太夫どのを悩ませし、妖怪の正體は、見覺えある。修驗者とあれば、さいつ頃、某が姿をやつし、窺ふ折から、吉原の遊里にて、目を附けし竈法印は、すりや彼れが妖術を借り、修理太夫どのを亡き者と、佞人の業なるや。ハテ
ト典膳と顏見合せ
修理　これは〳〵、淺はかなる企みぢやなア。内藏之進さま。病中の略衣、眞平御免下さりませう。
内藏　なんの〳〵。さるにても、蟇目の役を勤めしは、稲野谷半左衛門悴、半十郎とな。天晴れ手柄。出かした出かした。
半十　御褒美のお詞、有り難う存じ奉りまする。
修理　我が大病全快せしも、全く蟇目の行ひゆゑ、何をがな褒美に。
ト此の時奥にて
彌源　イヤ、その褒美は、これにござりまする。
ト彌源次、小稲が首筋を持ち、引摺り出して來り、突きやる。皆々見て
修理　ヤア、其方は岩城彌源次。

先次　逸當が娘の小稲。
典膳　その者を褒美とは。
彌源　稲野谷半十郎とこの小稲は、不義間男でござりまする。
半十　ヤア、なんと。
小稲　アヽ、コレ、申し、彌源次さま。大殿樣といひ、若殿樣、殊に、御一家同志の内藏之進さまのお入り、滅多な事を仰しやりますな。
半十　それ〳〵。身に覺えなき半十郎。何を證據に不義の惡名。
彌源　オヽ。證據といふはこの一通。
ト半十郎が小稲へ送りし認み状を出し
「濱田小稲さまへ、稲野谷半十郎より。」
半十　ムウ。その一通は。
彌源　覺えがあらうが。殿樣始め、伯父御さま、内藏之進さまの御前で、いま讀みあぐる程に、何れもお聞き下されい。
小稲　でも、その文は。
ト立ちかゝるを、半十郎、押へ付け
半十　ハテ、大事ない。色絲離れた覺えの手紙、讀み上げ

られても苦しうない。

小稻　ぢやと申しましても。

半十　ハテサテ、默つて聞いてござりませ。

彌源　ハ、、、、。なんだ。色戀を離れた。さうは拔けさせねえ。今、讀み上ぐる文言、とくとお聞き下さりませう。……「手紙を以て申し入れ候ふ、この程より、毎度お願ひ申し上げ候ふ事、お聞き屆けの上、明暮れ方、お屋敷其方樣部屋まで、密かに參り申し候ふやう忝なく存じ候ふ、何分お差向ひに、日頃の願ひお叶へ下され候はば、嬉しき事に存じ候ふ、猶委しくはその砌りに、早々かしく。」なんと、これでも不義であるまいか。

半十　イヽヤ、不義でござらぬ。

彌源　そりや又、どうして。

半十　文章は、人目を憚り、内々密かに賴みしは、何を隱さん蟇目の口傳。

ト云はうとするを、小稻消して

小稻　アヽイヤ、不義でござりまするぞ。

彌源　なんと。

半十　アヽ、コレ〳〵、小稻どの。それではこなた樣の。

小稻　ハテ、大事ござんせぬ。戀は心の外とはいへど、お前がわたしへ附け文の、渡りに舟と嬉しさに、忍び逢ふ瀨を知らせの返事。證據となつたこの場の仕儀。包むとすれど穗に出でし、小稻が心の術なさを、推量して下さりませ。

半十　でも、戀ならぬ賴みの文。

小稻　イヤサ、賴みとは、矢ツ張り戀。

半十　ハテ、それでは。

小稻　ハテ、サテ、是非がござんせぬ。大殿樣の御病氣、大切な蟇目のお役目、武藝に於ては、二とも下からぬ稻野谷半左衞門さま、その御子息のお前が、なんぼ祕事でも口傳でも、女に習うては、イヤサ、女に迷うて武士道を、よもや忘れはさしやんすまいがな。

トきつといふ。半十郎、それを聞いて心附き、合點したるこなしにて

半十　成る程、いかなる良將、勇將でも、女に迷ふは間々ある事。武藝に胸に半十郎、勤め得たりし蟇目の大事。

小稻　なんと、不義でござんせうがな。

半十　いかにも、不義ぢや。附け文ぢや。

彌源　さてこそな。

ト内藏之進、これを見て

内藏　ハテ、サテ、妙なる二人が戀路、水の出花といひながら、云ひ譯のならぬ文章、蟇目の口傳、不義に落ち入る兩人は、流石は濱田逸當が娘小稲、稲野谷半十郎。よくも不義を致したなア。

修理　憎くい奴とはいひながら、我が難病も本復の、蟇目の役を恙なく、勤めし功に二人が越度。

先次　どうぞお赦し下さるやう。

典膳　イヽヤ、そりやアならねえ。不義は屋敷の大御法度。

彌源　その上、二人は大それた、不義も不義、間男密通でございまする。

内藏　ムウ、密夫と申す男は何者

彌源　イヤ、外でもございませぬ。小稲が云ひ號けの男と申すは、この岩城彌源次でございまする

内藏　ヤヽ、なんと。

彌源　憚りながら、お聞きなされて下さりませ。私しが未だ幼少の砌り、親彌次兵衞と、これなる小稲が父親逸當どのと、互ひに子供成人の後、嫁にもらはう、聟にせうと、度々の文通。ところに、程なく我が親も、逸當どのも果てられて、今は後家の磯町どの。内々話した形見の手紙、逸當どのゝ自筆を、末に小稲と夫婦となる、慥かな證據がございまする。

典膳　證據とあれば慥かな事、早く見せい〳〵。

彌源　成る程、お目にかけませう。證據と申すは、この一通。

ト出して見せる

先次　ムウ。すりや、それが逸當の手跡とか。

彌源　左樣でございまする。お聞き下さりませ。……一御状拜見致し候ふ、然れば我れら娘儀、貴殿御子息の嫁にお取り下され度きよし、仲人原清庵を以て御懇望の段、忝なく存じ奉り候ふ、併しながら、我れらの方にては女子ばかりにて御座候へば、他家へ遣はし候ふては、家名相續いたす者御座なく候ふまゝ、委細は清庵口上に申し入れ候ふに附き、右詳かならず、先づは御報かたがた斯くの如くに御座候ふ、以上、月日、岩城彌次兵衞どの、濱田逸當」なんと、斯うといふ慥かな證據がござれば、云ひ號けの男と申すが、誤まりではございますまい。

修理　ドレ。

ト取つて、よく〳〵見て

稀れに見えし逸當が手跡、文面定かならねども、縁談のこの書面

内蔵　すりや、両人の科は遁がれぬ。身より出だせる錆な
　から、ハテ、不便の有様ぢやなア。
　ト半十郎、小稲顔見合せ、ヂッとこなし。この時、奥
　より勘解由、出て
勘解　まだ／＼、科人が外にあるぞ。
内蔵　これは／＼、勘解由どの。外に科人ござるとはな。
勘解　外でもない、先次郎。縄ぶつて足利の御前へ引く。
先次　ヘ、
内蔵　そりや又、なぜた。
勘解　最前の仕儀といひ、松蔭の硯は紛失と見え、この通
　り箱ばかりになつてござる。
　ト見せる。
皆々　ヤア。
典膳　ナニ、寳が紛失とや。
修理　アノ、松蔭の硯が。
　ト先次郎と顔見合せ
　ホイ。
　ト當惑。
勘解　なれども、詮議の手がゝりは、この空き箱の片隅に、
　殘りあつたは、銀菊散らしのこの小柄。
　ト地へ出す。半十郎、恟りして、手に取上げ
半十　これや、覺えの紋が小柄。
　ト彌源次、ツカ／＼と寄つて、半十郎をグッと引附け
　る。小稲、こなし。
彌源　動きやアがるな。こりやアなんだ。大切なお家の重
　寳、松蔭の硯は、半十郎、うぬが盗んだな。
半十　アイヤ、全く以て。
彌源　それに又、われが小柄が、どうして寳の箱にあつた。
半十　イヤサ、それは。
彌源　うぬ、大それた奴だわえ。おれが大事の云ひ號け、
　小稲と不義を働くのみか、お家の寳を盗みし、不忠不義
　の腹癒せ。硯の盗賊、同類遁がれぬ、小稲と兩人。
小稲　サア、それはな。
彌源　但し、盗まぬ云ひ譯あるか。
半十　サア、それは。
彌源　不義であらうか。
小稲　サア、
彌源　サア、
三人　サア／＼／＼、
彌源　いつその事に

内藏 ト脇差を引拔き、兩人を背打ちにする。この時、内藏之進、ツカ〳〵と寄つて、彌源次が刀の手を止め

彌源 こりや長尾さま、盜人といひ、不義闇男、糺明いたすを、なぜお留めなさるな。

内藏 止めたは、其方が身の爲サ。

彌源 すりや又、なんで。どうしてな。

内藏 なんでとは慮外千萬。たとへ不義でも、盜賊でも、未だ實否も糺さぬうち、現在主の修理どのといひ、先次郎御親子に、足利の使者勘解由との、横目役の内藏之進、並み居る中で無禮の振舞ひ。矢數に負けた意趣を、臆病神で敵を取る氣か。

彌源 イヤ、全く以て。

内藏 さなくば又、何者の指圖を以て、歷々を差措き、尾籠の狼藉。

彌源 イヤサ、それは。

内藏 返答あるか。

彌源 サア、

内藏 サア、

兩人 サア〳〵〳〵、

内藏 止めたは、其方が爲め。お祟りのかゝらぬうち、方寄つて扣へて居らう。

ト突き放す。彌源次、勘解由と顔見合せ、こなしあつて

彌源 段々あやまり奉つてござりまする。

ト扣へる。

勘解 して又、寶の落着は、

修理 思ひがけなき紛失の、盜賊詮議のその間、御兩所のお情にて、足利の御前へ日延べの儀

先次 偏へに願ひ、奉りまする。

内藏 尤もの願ひ、日延べの執成し致すでござらう

修理 すりや日延べの儀を

先次 有り難う存じまする。

勘解 ハテ、御内緣とござつて、得手勝手な儀でござるな

内藏 惣じて罪を輕く致すは、公けの御政道。殊に盜賊に奪はれし寶は、桃の井家の所持ならずや。詮議の日延べ執成しを、よも身勝手とは御意あるまじ。それよりはこの盜賊、詮議し拔かば十が九つ、イヤ、マア、御不請ながら、御猶豫なされて遣はされい。

勘解 成る程、猶豫いたしくれうが、紛失なせし寶の盜賊、

眼前證據は、半十郎がその小柄。
内藏　アイヤ、科の疑ひさる事ながら、盜み取る程の者、後日の證據になるべき品を、箱に殘す不機轉では、なかなか寶は盜まれまい。勘解由どの、なんと、左樣ではござるまいか。
勘解　イヤ、モウ、どうござるやら。
内藏　ム、、ハ、、、、
ト兩人こなし
彌源　然れば又、眼前に、身動きならぬ不義の兩人。
内藏　その糺明は親がよからう。
彌源　親とはな。
内藏　ハテ、寶の紛失、證據となつた半十郎が小柄、なりや、盜賊詮議のその間は、親々へ預け、とくと實否を糺し、云ひ譯なくば、不義の政道。
先次　すりや、半十郎とあの小稻とを
修理　稻野谷、濱田の親々へ
内藏　イヤ、そりや惡からう。
修理　とは又、なぜな。
内藏　ハテ、その親々へ預けなば、武士を磨く半左衞門、後家ながらも磯町が、男勝りと噂に聞く、逸當流の家柄なれば、早まつて兩人が、一命にも及びなば、寶の盜賊、手がゝりを失ふ道理。さやによつて、濱田が娘小稻をば、半左衞門方に預け、稻野谷の悴半十郎は、濱田が後家、磯町方へ、悴と云ふを親々へ、取替へて預けなば、恩愛のいたはりなく、互ひに勵む心の詮議。一つには、不義の政道。なんと合點が參つたか。
修理　御賢慮、逐一承知いたす。殘りの役は喜藤太、平馬、取逃さぬやう、心得たか。
喜平　畏まつてござりまする。
半十　すりや、我れ／＼が身の上
彌源　兩家の親へ、引分けて、
先次　半左衞門へ、小稻を預け
典膳　後家磯町へ、半十郎を
内藏　預けのうちが日延べの日限。もしそれまでに寶の硯、行くへの知れぬその時は
勘解　桃の井一家、大事、小悴ごもが命の寂滅。
彌源　ハテ、いゝ氣味な。
源吾　そんなら、二人は
平喜　キリ／＼うせう。
ト十手を振り上げる。半十郎、小稻、顏見合せ

小稲　そんなら、これが
ト立ちかゝる。
半十　ハテ
ト押へる。
先修　御兩所樣。
典膳　ムウ。
ト抜きかける典膳を勘解由・彌源次を内藏之進さゝへてキッとこなし。
内勘　お別れ申す。
ト皆々よろしく見得、引ッ張りにて

幕

## 一番目大詰

### 稲野屋敷の場

役名　濱田逸當後家、磯町。同娘、小稲。腰元、小はや。同、お龜。同、みふね。同、おとも。荒川伴作。岩城彌源次。半左衛門娘、お品。久利勘解由。若黨、友次。稲野谷半左衛門倅、半十郎。稲野谷半左衛門。

造り物、平舞臺、組み屋敷の體にて、上の方に、生け垣。木戸に、稲野谷半左衛門、同半十郎と記したる表札を打ち、下の方、隣り屋敷、板塀。同じく木戸に、濱田逸當と記したる表札。右、隣り同士の表がゝり、見せ。幕の内より、太神樂の仕出し二人、獅子を冠り、舞うて居る。太鼓打ち、笛吹き、いづれも太神樂にて、よろしく、右の囃子にて幕開く
ト四人、暫らく獅子舞うて居る。よき所にて
太甲　コリヤ〳〵、待て〳〵。最前から二段ほど舞うてゐるに、十二銅も、初穗も持つて出ぬは、さては二軒ながら、明き屋敷ではないかよ。
太丁　イヤ〳〵、明き屋敷ではあるまい。二軒ながら、キッと表札が打つてある。
太丙　ほんに、此方の表札には、濱田逸當と出てある。
太乙　此方は親子かして、稲野谷半左衛門、同半十郎としてあるが、面妖な、二軒ともに、屋敷もヒッソリと、物靜かなは、どういふものぢや。
太甲　爰は桃の井の家中でも歴々。それに、女子どもゝ獅子を見ず

太丙　ひそまり返つてゐるは、なんでも碌な事ではあるまい。それを知らずに、最前から、餘ツぽど身を入れて舞うたのに。

皆々　こりや無駄骨折つたわいの

ト此うち向うより友次、小侍ひあがりの拵らへにて、脇差ばかり差して、着流しにて、提げ籃に青物を入れ、提げて出て、この樣子を聞いて、こなしあつて

友次　ア、いつもなら、御講料の太神樂、お初穗も、米も、錢も、ズッシリと入れようもの。其方達の手前も、ハテ、氣の毒な。

ト小首をかたげ、本舞臺へ來るな

皆々　ヤア・そんならお前は此お屋敷の

友次　若黨ぢやが、ツイ買物に出るといふても、世間を憚かりて、この通り。ましてお屋敷うちは猶の事。

太丙　ハ、ア、そんなら、この二軒のお屋敷は

友次　ちつと仔細あつて、御遠慮ぢや。

皆々　道理で、錢にならぬと思うたてや

友次　即ち身共は、この濱田の家來。隣りの糸野谷も同じ御遠慮。それを知らずに、其方達が、最前からの無駄働らき。せめては、コレ。

ト出した錢を出し

爰に、買ひ物の剰りがある。僅なれど、これで兩家の御祈禱料。

ト出す　太神樂取つて

太丁　これは忝ない。皆の者。

ト錢を見て

太甲　ハテ、實體なお人ぢや。その志しが有り難い

太丙　それ〳〵。樣子は知らねど、當方のお屋敷の濟むやうに

皆々　また今度、めでたう舞ひに參じませう

友次　それは吉左右、忝ない。その時、祝ひ事に、獅を振舞ふぞ。

太丙　必らず振舞はれませう、ハ、、、、サア、皆の者、

皆々　これから上の町へ行かうワ。

ト皆々捨ぜりふあつて、太鼓、笛にて囃し、向うへ入る。

友次　僅かな錢で、繼喜視うて歸つた太神樂、あれも矢ツ讙り繹謙め。兎角御主人方の、お身の上も神佛のお力、お頼み申すに如才はなけれど、何を云うても、兩方へ引分けてお預け。それで通路はならず、申し上げるも



と思ひ入れあつて

斯ういふ手間で、御膳の刻限、後室様のお待ちかね。ドリヤ、屋敷へ歸らうか。

ト琴唄にて、友次、籃を提げて、こちらの濱田の屋敷へ入る。右の道具建て、左右へ引いて取る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺。見附けに一間、綺麗なる唐紙を建て、下の方に、大納戸口、暖簾掛け。平舞臺、上の方、塀にて見切り、この屋根に、一面に夕顔の蔓。花は莟みにて、後に開く仕掛け。橋がかりの方、枝折戸。總じてこの場の道具に誂らへの好みあり。平舞臺、よき所に、竹床几直し、半左衛門、下着やうの着つけ、着流し、脇差ばかりにて駒下駄を穿き、木鋏を持つて、夕顔の葉を透かして居る。この見得、琴唄にて道具とまる。

ト奥より、お品、振り袖にて、茶臺に茶碗を載せ、持つて出て來て

しな　モシ、父さん、あなたはマア先程から、たつたお一人、この庭に、何をなされて、お出でなさんすぞいなア。

半左　オヽ、お品か。閑居の身の上、あまり退屈さに、慰みながら、夕顔の葉を透かして居たが、年の加減か、立ちすくみて居れば、どうか腰骨が痛んでやく、、、、、

トこなしあつて、竹床几へ腰を掛ける

しな　幸ひ、あなたにあげようと、こしらへた煎じ茶。マア、お一つ。

ト茶を出す。半左衛門取つて

半左　こりやよく氣が付いたが、お品、身共よりは、大事の預かりものに、隨分心を附けてくれよ。

しな　アイ、それに如才にござりませぬ。腰元ともに云ひ付けて、琴、三味線でお諫め申しても、頭も肯きなさらず。殊に、先程御膳をあげても、只兄さんの事ばかり、お兄様に申し譯がないと、わたしらへも御遠慮がち、それでクヨクヨ、泣いてばつかり。ほんに又、思ひがけない、小袖さんと兄さんとの、不義の越度。互ひに親御へお預けの、お二人のお身の上は

ト此うち半左衛門、煙管に煙草つぎながら、夕顔棚を見い見い

半左　アヽ……むね〳〵しからぬ軒の褄などに、這ひまつはれたるを、口をしの花の契りや、一房折りて參れと宣へば、この押しあけたる門に入りて折る―ムウ

ト莨をのむ、お品、摺り寄つて

しな　モシ、父さん、よりや、鶴か「源氏」夕顔の巻の、詞ではござりませぬかえ。

半左　いかにも。彼の「源氏」に謂ふ一口ぐしの花の契りぞ」とは、よき人の家には植ゑずして、かゝるいぶせき所にのみある事をいふ。エヽ、これに附けても、憎い倅め。幼き時より武道は元より、物読み教へしに、文武の道より好色を、誰が教へねど、その身のいたづら、隣り屋敷の娘と、義密通、殊に、盗賊の悪名、コレ、この親まで一家中に後指を……さすが恩愛、頭はくは、コレ、善光寺参り致せし、奥が歸らぬ其うちに、早く落着が、附けばよいがと思へど、任せぬ下命

しな　ほんに、母さんは兄さんの、お身の上の事は知らずに、信濃の善光寺様への御参詣、明日にも御下向なされたら、さぞ悔りでござりませう

半左　それ、不義の徒は輕うて切腹、重うて縛り首。

しな　エヽ、そんなら、兄さんも、小稲さんも

半左　どうでごねる命なら、母様が歸らぬうちにと思うて居るわえ。

しな　そりや お胴慾な。

ト半左衛門が顔を見て

ハヽア。

ト思ひ入れあつて泣く　これをキッカケにバッタリと塀の外より、小石を括り附けた結び文を投げ込む
半左衛門、ヂッと取上げ見て

半左　こりや隣り屋敷からの投げ文。宛名は記さず「御披露」とは。エヽ、さては、預かりの娘が身の上、後家が願ひか。何にもせよ。

ト封切り、押開き

「心あてに、それかとぞ見る白露の、光り添へたる夕顔の花」

しな　ムウ、その歌は

半左　矢張り源氏の惟光が、取次ぎせし扇の歌、そことなき方を光る君と推量の歌とも、又、頭の中将と見たると、この説にさま〴〵、あれど、差當りて隣りの壁越より投げ込みしは、倅や小稲が身の上に

しな　お前のお情、光り添へたる夕顔の花

半左　イヤ、その光りは身共より、御主人の御威光。

しな　サア、お二人のお身の上。隣り屋敷の義町さまと諸ともに、大殿様へお願ひなされたら、兄さんや小稲さん

を、お助け申す筋もあらうかと、その心當てに、それのみ頼む夕顏の花。

半左　イヽヤ、身共は白露。

しな　エヽ、

半左　不義の相手の小稻が親は、夫逸當に別れた後家の磯町、未練は女の常。また半左衞門とは心が違ふ。不所存なる伜の命、なんの庇はう。最期を早く待ちかねるは、武士の氣質。

しな　そんなら、兄さんを

半左　縛り首に打たれやうが、牛裂きの刑に行はれやうが何ともない。コレ、あの夕顏の蕾み同然、我れのみひとり快げなる笑みの眉。ヘヽ、ムヽ。ハテ、蠶の眉に似たとは、よく云つたなア。

ト夕顏の蕾みに餘念なく見惚れて居る。お品、右の投げ文を取上げ、ヂッと見る思ひ入れあると、向うにて

呼び　御上使。

半左　ムウ。

トこなし、思ひ入れあり。

しな　アレ、思ひがけない御上使とは。

半左　嬉しや。伜が落着。

しな　エヽ。

トはつと悧り。

半左　コリヤ、お出迎ひ申せ。

ト唄になり、半左衞門、お品へこなしあつて、羽織刀を取寄せ、よろしくあつて、お品を連れ、出迎ふ。

閉居の身の上かへりみて、お出迎ひも御遠慮。御上使とあれば、イザ、これへ

ト辭儀する、向うバタ〳〵にて、凜々しき捕り手四人、十手持つて、ツカ〳〵と出て

捕四　半左衞門、腕廻せ。

半左　これは。

ト立ちあがる。此うち向うより彌源次、着付け、上下、股立ちにて、捕り繩を持ち出て

彌源　稻野谷半左衞門。御上意。

半左　ハツ。

トお品も下に居る。

岩城彌源次どの、閉居の拙者に、御上意とは。

彌源　改め云ふには及ばねども、其方が伜半十郎と、濱田逸當が娘小稻と、不義密通の科顯はれ、殊に、寶の盜賊とのお疑ひ　ところを卽ち、大殿の御賢慮を以て、その

親々に悴と娘を、取替へてお預け。然るに、囚人たる小稲こそ、この屋敷にて馳走たつぷり、琴三味線にて晝夜の遊興。年に似合はぬ半左衛門、老耄せしか。但し、小稲をいたはるは、濱田が屋敷に預けある、我が悴が身の上をいたはらさうといふ、子に迷うての計らひか。何にもせよ、お上を輕しめると上聞に達し、憎くい半左衛門、縄打つて召捕り、きつと吟味を掛けよとの、上意を請けた岩城彌源次。

トきつと縄裁きする。

捕手　サア、半左衛門。腕廻せ

ト十手を振りあげる。

しな　そんなら、預かりの小稲さんを、いたはるといふお咎めで。

半左　コリヤ、お品。苦しうない。扣へい。

トお品を押しとめ

ハテ、仰々しい。悴が越度の上、拙者にも又、何事かお咎めと存じましたが、様子承つて、先づは安堵。

彌源　何が安堵。ソリヤ

捕手　腕、廻せ

ト二人づゝ、左右よりかゝるを、半左衛門、屈みながら、千鳥に取つて投げる。彌源次、ーうぬーとかゝるを、引廻して、シヤンと止める。

彌源　こりや、手向ひか。

半左　イヤ、手向ひは致さぬ。申し譯を仕る。

彌源　なんと。

トきつとなるを、半左衛門、こなしあつて

半左　年寄りたれど稲野谷半左衛門、若輩なお手には合はぬ。理不盡な事召されたら、却つて、お體が痛み申すぞ。

彌源　イヤサ、云ひ譯あらば聞いてくれんが、サヽ、なんと。

ト少し恐れるこなし

半左　ハヽヽヽ。蟹は甲に似せて穴を掘ると、わが横しまに引比べ、人もさうかと岩城彌源次　よく〳〵、お聞きやれ。現在の悴なれども、科極まれば殿様へ、早くお仕置を願ひし身共が魂ひ。それに何ぞや。隣りの屋敷に預けある、我が子の爲に、人の子をいたはり、介抱なぞとは、左様な未練な半左衛門ではないぞ。

彌源　ムウ、すりや、預かりの科人小稲を

半左　露ほどもいたはらぬ。

彌源　それに又

半左　男子なれば、假の牢屋をしつらへ、もつと警固に油斷はなけれども、たかゞ女子。ハテ、女なれば流し者小稻は即ち八丈島へ流罪。

彌源　ムヽハヽヽヽ。

　　ト大いに笑ひ

半左衞門、そちやいよ〳〵老耄いたして居るな。なんおや、小稻を八丈島へ流人とは、さまゞゝのたは言。コヽヤ、八丈島とは伊豆の沖。浪風荒く往來にも、二月三月かゝるわえ。それに小稻を。

半左　ハテ、疑はしくば預かりの小稻、八丈島に居る體を、今、目前に見せうか

彌源　こりや面白い。遙かあなたの八丈島に居る體を見せうとは。すりや、半左衞門、身共にキッと見せるか。

半左　いかにも。お品、一間の唐紙、開きやれ。

しな　エヽ。それでは

半左　ハテ、苦しうない。早く〳〵。

しな　アイ。

　　トこれをキッカケに、一名殘りは盡きじ吹きとちよ」と「一花の香」を唄ふ。お品、こなしあつて、見附けの襖を殘らず開く　内に小稻。八丈の蒲團の上に猜むし居る側に腰元、おとも、小けや、琴三味線にみふれ、おかち、右四人、二人づゝ、小稻を取廻して、琴、三味線、唄よろしく、合ひ方になる。小稻こなしあつて、ボッと顏を上げ

小稻「長かれと、何思ひけん世の中の、憂きを見するは命なりけり」と、歌の唱歌もこの身の上。親の許さぬ夫婦び、お家の御法度背きし浮名。我が身は覺悟をしながらも、只おいとしいは半十郎さま。盜賊の惡名まで、思はぬ難儀、親々に、御苦勞見する悲しさ。わしや早う死にたいわいなア。

　　ト泣く〳〵唄へとめてかひなき花の香を」と、後なズッと唄ふ。此うち彌源次、小稻を見て、いろ〳〵こなしあつて、唄とまると、彌源次、いろ〳〵思ひ入れあつて

彌源　そりやこそ〳〵、紺子の者、あれ見たか。矢ッ張りこの屋敷に置きながら、大それた蒲團の上。琴三味線で慰ませ、ぬつくりとさせながら、なんおや、流し者は八丈島なぞとは、こりや身共を盲目にするのか。半左衞門、推量の通り、小稻をいたはる其方も重罪、遁がれぬ遁がれぬ。サア、繩かゝれ。

半左　これほど慥かな八丈島。彌源次、お身が眼にはかからぬか。

彌源　かゝらぬかとは、その島どこに。

半左　外でもなし、小稻が坐したる蒲團に、心を附けてお見やれ。八丈も八丈、しかも大縞の八丈。すりや、預かりの囚人に、微塵いたはらぬ、嚴しくもてなす流し者

彌源　イヤ、さうは拔けさせぬ。國の政道は下の掟になる。八丈縞の蒲團を直ぐに八丈ヶ島とは、昔流行つた段々附け。もじりの擬め句は止せ。それとも又、郡内でも、紬でも、流し者といふ例しがあらば、その通りにしてくれんが、半左衛門、なんと。

半左　ハテ、例しはなけれど、こりや身共が潔白、即ち世の掟。沖の大島、鬼界ヶ島、八丈島ばかりがコレ、流罪とは云ふまい／＼。殿の御上意重ければ、門戸を閉ぢて、青竹、釘附けの、その遠慮にあふ時は、たとへ宮殿樓閣でも、忽ち鬼界八丈島。浮世の事も見ず聞かず、流罪同然の苦勞を見る。この理を考へ、この如く、八丈縞の蒲團の上、僅か八尺か一丈四方を島になぞらへ、一寸も動かせず、青き疊は青き海。側に附け置く女まで、その名を小はや、みふね、おかぢと改め、それに渡海の度毎に、島の住居の悲しさ辛さ。琴の音色は松吹く風利、法、權の三つは、三味線で心を慰ます二上り、三下り。調子の狂ふ苦しみは、その身の科より小稻をば、いたはらぬ半左衛門、見事、繩打ち、禁獄するか。

彌源　イヤサ、それは。

半左　殿の御前でこの樣子、一々申し開くが身共の潔白。これでも吟味を遂げるか、彌源次、どうぢや。

彌源　サア、それは。

兩人　サア／＼／＼、

半左　なんと。

彌源　イヤサ、一通りは聞えたが、さほど潔白な半左衛門、たとへ殿樣より仰せなくとも、寶の盜賊、不義の密通、極まつた我が悴半十郎。武士らしう、なぜ切腹さするか、首打たぬ。

半左　それを、お身に習はうか。小癪な事を。

彌源　でも、殿の仰せを、べん／＼だらりと待つて居るは、一日なりとも我が子の命、助けたいといふ未練な性根。

半左　イ、ヤ、未練か、卑怯か知らねども、小稻は格別、悴が身の上、明日とも云はず、即ち今日、暮れ六つまでに、首打つて御前へ推參する。

彌源　こりや新らしい　いつも此方から首打てと云ふに、其方から、暮れ六つまでに、首打つて持參とは、流石は半左衞門、一番、出來た。
しな　イエ／＼、申し、父さん。御前より仰せもないに、今宵暮れ六つに、兄さんの首を打つとは。
半左　ハテ、罪科極まりし悴なれば
小稲　その科はわたしも同罪。コレ、申し。
　　ト半左衞門の側へ下りて行つて
半十郎さまよりお先へ、
　　ト半左衞門の刀に手を掛け、死なうとするを
半左　イヤ、大事な囚人、預かりの小稲、そちや滅多に殺さぬ。
小稲　お恥かしながら、惚れたが因果。元の起りは皆わたしから。
半左　ハテ、死にたくば其方が屋敷で。
小稲　エヽ。
半左　我が子の首を親々が、持參するが殿への申し譯。殊に、今は後家なれど、故人になられし父御は卽ち、桃の井家に於て濱田逸當殿へ師範の劍術の達人。世を早くされても、一刀流と呼ばれし名家。それゆゑ男子はなけれども、後家娘にて家を立て、男まさりの磯町どのが、小稲、其方が首を持參されねば、笑止や、濱田の苗字が退轉するがや。
小稲　さうぢや
　　トこなしあつて、ツカ／＼と向うへ行かうとするを
しな　待つた、小稲さん、お前はどこへ。
小稲　死なば一緒。半十郎さんが最期なれば、わたしも屋敷へ歸つて、母さんにお願ひ申して。
半左　イエ／＼、預かりの囚人、滅多にはやらぬぞ。
小稲　エヽ。
半左　これに彌源次も見聞きしておゐやれば、猶以て屋敷へは、歸さぬ／＼。
　　トこれにて小稲、思ひ入れあつて立戻り、また半左衞門が側へ來り
小稲　そんなら、どうぞあなたの
　　ト首さしのべて、合掌する。
半左　イヤ、他人の娘は猶殺さぬ。
半稲　エヽ、こりやマア、どう致しませうぞいなア
　　ト泣き落す。彌源次こなしあつて
彌源　イヤ、半左衞門、心底一々見屆けた上は、これより

直さま引ッ返し、取次を以て殿へ申し上げ、濱田家へも上使を立て、兩方ともに今日の暮れ六つ。首をコロリとうまい手番ひ。御前へよろしく、親戚は哀れ／＼親子。

半左　如何やうとも御勝手次第。

彌源　然らばお暇。半左衛門どの。

半左　無駄骨御苦勞。

彌源　おさらば。組子ども、參れ。

ト合ひ方になり、彌源次、こなしあつて、捕り手階々連れ、向うへ入る。お品、思ひ入れあつて、跡見送り

しな　モシ、父さん。お前に眞實、今日の暮れ六つまでに。

半左　武士の詞になんの僞はり。檜山の火、身の錆。その身の科ゆゑ、親に先立つ不孝者。目は掛けぬ。お品。必らず其方も吠えな。

ト お品、思ひ入れ。泣き／＼

しな　ぢやと云うても、現在の、サア、兄さんとの別れ。

半左　ハテ、詞多きに品少なし。イエナニ、小稻。

小稻　エヽ。

半左　コレサ、顏を上げやれ。

小稻　アイ。

トしやくり上げる。半左衛門も思ひ入れ、小稻をヂッと見て

半左　ア、丁度似合ひの年恰好。疾よりそれと思うたが、何を云うても任せぬ浮世。イヤ、お品、先程の投げ文を

しな　アイ。爰に。

ト泣く／＼差出す。半左衛門、取つて

半左　小稻。コレ、其方が屋敷より、身共が方への投げ文歌は、「源氏」の夕顏。この心を得よ。勘辨して最期が遂げたくば、阿母への願ひ。その返事は、コレ、あの塀越し。礫の小石は戀ひし。ナ、名殘りをとくと。まだ開かぬ夕顏の、盛りは惜し、倅が最期。

しな　そんなら、いよ／＼、暮れ六つに。

ト左右より取りつく

半左　居所の羊が西の刻。

ト振り切り、こなしあつて、枝折り門へ出て、ピンと錠を鎖ろす。

しな　それは。

半左　大事の科人。油斷はならぬ。

ト小稻、右の文を見て

小稻　「心あてに、それかとぞ見る白露の、光り添へたる夕顏の花。」

半左　花が開けば、忰が最期。

しな　蕾のうちに

小稲　わたしが思案も

半左　小稲、とくと。お品、奥へ。

　ト唄になり、半左衛門こなしあつて、お品が手を取り、奥へ連れて入る。あと合ひ方。小稲、殘り、思ひ入れあつて

小稲　一源氏一夕顔の歌を其まゝに、母さんの自筆。なんぼう半左衛門さまが、あのやうに仰しやつても、母さんは女子の事。二人が身の上、助けたいと、思うてござるお心で、コレ、この歌一心當てに、それかとぞ見る白露の、光り添へたる夕顔の一……どうぞ不義の科、盗賊の惡名もさらりと濟んで、半十郎さんは此方の花聟。わたしは又、此お屋敷の花嫁に

　ト塀を見て

さうなつたら、嬉しい事であらうのに、眞實に半十郎さんが、死なしやんすれば、わたしも生きてなに樂しみ。死んで未來で、必らず女夫になつて下さんせえ。

　ト塀の方へ向うて、いろ／＼思ひ入れあつて

ア、どうぞ、ま一度、御無事なうちに、お顔が見たい。見たいわいなア。

　トいろ／＼こなしあつて、泣き落す　此うち半十郎、塀の彼方より、夕顔棚の上へ延び上がり出て、塀の上より

半十　コレ、小稲々々

小稲　ヤア、半十郎さん。よう顔見せて下さんしたなア。

　トいろ／＼思ひ入れある。

半十　コレ／＼、たとへどんな事があつても、おれは滅多に死にはせぬ。其方も必らず短氣な心を出しやるな

小稲　イエ／＼、それでは最前父御樣の

　ト駈け寄るうち、彼方の塀の内より、大バタ／＼にて、引ドろされた心にて、引込み、入る。小稲惘り

ヤア／＼、半十郎さま

　トつか／＼と塀の際へ寄り、こなしあつて、塀に耳を附け、聞き耳の思ひ入れよろしく、チヨン／＼にて道具廻る　臆病口にある夕顔棚。塀ともに附いて廻る。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、見附け一面の塗り骨障子。臆病口の方、鬮ひ。にじり上りを正面に見て、よき處につくばひの手水鉢。かゞみの石、刀掛けな

ぞ取り繕ひ、風雅なる體。以前の夕顔棚の塀へ、裏表兩面にて、隣り同志の境になる、濱田屋敷の模様。道具について平舞臺に、伴作、着附け、上下。若黨友次の兩人、竹梯子を引き合ひ、この立廻りにて、道具とまる。

ト兩人よろしく見得。

友次　こりや、荒川伴作さま。御上使の權柄で、なぜ理不盡な事さつしやります。

伴作　何を下郎めが小癪な。身共は只今來りし上使の役目。この屋敷に預かりゐる、不義の相手の半十郎が身の上、見屆けといひ、殊に親の半左衞門が、今日暮れ六つまでに、首打つて差出すとあれば、この家の娘小稲も同罪。その儀を後室礒町に、申し渡さん爲。それに、今ちよつと見たが、預かりの半十郎、アレ、あの塀に梯子を懸け、隣り屋敷へ何やら通路。引下ろして詮議と思ひの外、うぬが出て詮議の妨げ。半十郎をいづくへ隱した。お預かりの身を以て、親の屋敷へ通路する不屆き。キツと事を糺す。サア、早く半十郎を出せ。出さぬと、うぬ。

ト切りかけるを、梯子を小楯に、身を躱し、よろしくミヤンと止め

友次　こりやア御無體な。いま梯子をあの塀に掛け、登つてゐたはこの友次。私しを半十郎さまとは、麁相千萬な伴作さま。アレ、御覧じませ。隣り屋敷の夕顔の蔓が、此方へもはびこつて、黄金蟲が散らばふゆゑ、後室様の仰せにて、家根裏の蟲を取らうと存じまして。

伴作　イヤ、吐かすまい。うぬは野郎。半十郎は若衆。どうして見違へやう。身共に向つて惡口慮外。手は見せぬぞ。

友次　手は見せいでも、足元の明るいうち、御上使なら御上使のやうに、チヤツと座敷にござりませ。御仁體に似合はぬ見苦しい、庭先で下郎と口論。あまりお人柄がよく見えますまい、伴作さま。

伴作　うぬ。重々の過言慮外。もうこの上は。

ト切つてかゝる。友次もよろしく、これより兩人、烈しき梯子のタテ、さま〳〵面白くあつて、トヾ兩方へ引き別れ、見得よく留まると、正面の障子の内より

礒町　慮外な友次、扣へい。伴作さまにも、お待ち下さりませう。

ト障子を開き、礒町、裲襠、後室の拵らへにて、すつと出る。

友次　ヤア、後室様。

伴作　磯町どの。

磯町　上下を辨まへぬか、下郎。武骨な友次が慮外の段々、残らず承りましたが、御立腹御尤も。何事も私しに免ぜられ、憚りながら御上使様には、あれへ。

伴作　イヤサ、あの下郎めは。

磯町　家来の不調法は、幾重にも主の詫び。爰は端近。マアノヽ、平にあれへ。

ト無理に伴作を上へ直す。伴作、不請々々に、上へ通り、下に居る　友次もこなしあり。磯町、頭にて押へ、両人も下に居る。

伴作　磯町どの、この荒川伴作、今日俄に斯く上使に立ちし趣きを

磯町　逐一に承りましたが、御上使の仰せ、御尤も千萬。

伴作　ムウ。そりや、こなたにも娘小稲を

磯町　何がさて、不義は同罪。彌源次どのへ申し譯。隣り屋敷の半左衛門どのが、御所存の通り、私しも娘が首を。女でこそあれ、遠當が後家。更に未練は、ホヽヽヽ、

伴作　ハテ、丈夫な阿母。

友次　イヤノヽ、モシ、後室様。すりや、あなたには小稲さまを。

磯町　ハテ、不義の科ある娘。不便には思へども、是非もないわいやい。

友次　イヤ、さうはなりますまい。なぜと御意なされ。なんぼ彌源次どのが云ひ號けと云はつしやれても、親旦那の御返事に、しつかりと、娘小稲を女房に、遣はさうとは書いてはござりませぬ。詳しき事は仲人の口上とあれば、親旦那には御承知やら、不承知やら、そこはあやふや。それを名たてがましう、不義密通と申し上げたは、矢數の意趣。殊に以て、拙者も小倅の時分より、お家に育つて、聞き傳へて居りますが、隣り屋敷の稲野谷と此方は、桃の井家に於て、御先祖より代々、御舊功のお家とやら。又、御病死あつた親旦那遠當さまは、殿様の御師範。それゆゑ、女儀で跡目をお勤め。お上にも、外ならず御贔屓のお家なれば、なぜ密夫でない申し譯の、お願ひをなされませぬ。エヽ、齒がゆい後室様。お願ひあつたら、お免しは知れた事。ハテ、その上にて、半十郎さまを此方へ申し請け、濱田の跡目を。それに何ぞや、お嬢様、小稲さまを、殺すノヽ、首切ると、立派に仰し

やつて、表向きは立派に立ちませうが、數代傳はる濱田の苗字、今に一刀流と世に鳴り響く、血筋を絶やして、此お家が潰れたら、後室樣、御先祖よりは、去年御病死なされた親旦那樣へ、どう云ひ譯がござりませうぞいの。

ト舞臺を叩いて、憂ひのこなし　磯町も此うち、思ひ入れあつて

磯町　オヽ、しほらしい其方が志し。譜代の友次、一徹な正直者。コリヤ、其方が思ふは皆私し事。先祖より今日まで、血筋を引いた濱田の苗字相續も、これ皆、桃の井のお家の御恩、代々殿樣のお惠み。たとへ逆さまな御上意でも、ハッとお請け申すが忠義の道、家來の役にて、娘が身の上は、不義の科極まれば、たとへ血筋は絶え、濱田の苗字退轉しても、殺さにやならぬ。首打つて汚名を雪がずば、殿樣始め、過ぎ行かれし夫逸當どのへ、却つて申し譯が立たぬわいやい。

友次　エヽ、すりやどうあつても

磯町　其方が志しは嬉しう思へど

友次　是非小稻さまを

磯町　今日の暮れ六つ限り

友次　エヽ。こりやなんたる惡日ぢやぞいやい。

ト體を叩いて大泣き。作作もこなし。

作作　ハヽヽヽ。下郎めが役にも立たぬよまひ事。阿母の立派な、イヤモ、よい慰み。上使の退屈打忘れた。それに附き、磯町どの、改めての御上意。伯父御典膳さまのお指圖にて、半左衞門が潔白。いよ／＼今日の暮れ六つに、兩家の悴と娘が首、打たうといへど、親々の手に掛けさせては、餘り潔くて心得ぬ。矢ッ張りこれまで、取替へ預けた通り、濱田の後室は半十郎が首、又、隣りの稻野谷は、預かりの小稻が首を、打つて出せとある、改めての御上意。

磯町　ムウ。すりや、この磯町には半十郎どの。

友次　隣り屋敷にては此方の娘御、小稻さまを。

作作　いかにも。キッと首打つて差上げ召されい。

磯町　ハヽ、ハッ。

ト思ひ入れあつて、ちよつと氣を變へ

キッと承知いたしました。

友次　南無三。それではちつと。

ト塀の方へ思ひ入れあり。

作作　イヤ、滅多に思ふやうにはさゝぬ。見る目、嗅ぐ鼻、御上使と檢使を兼ねたる荒川作作。身動きさせずに暮れ六

つまでは、この屋敷に相待ちを居ぞ。
磯町　重ね〲の御苦勞、如何やうとも。コレ、友次。
ト此うち友次は、降り屋敷の方を見て、心遣ひして居る。磯町は、伴作が手前へこなしあつて
ハテ、コリヤ、友次
ト友次、悔り、此方を向いて
友次　エヽ、御用でござりまするか。
磯町　暮れ六つまではまだ間もあれば、御上使樣を奥へお伴ない申し、女どもに申し附けて、御馳走を。
友次　なんの御馳走。打ッちやつてお置きなされませう。
磯町　コリヤ〱、慮外な。大切なお役目、麁相があつては、お上のお咎め。ナ。
トこなし。
友次　イヤ、遠慮の屋敷。出入りの肴屋、八百屋も參らず。何も馳走の品が、
伴作　イヤ、苦しうない。旨い物は喰ひ飽きてゐる拙者、心遣ひは御無用。首切る縁起に鯷のぬたが、友次相應奴豆腐で、一つたべませう。
友次　エヽ、うぬを。
トきつとなる。

磯町　ハテ、心を附けて、早う。
友次　伴作さま。
伴作　下郎め、案内いたせ。
ト唄になり、伴作、友次、睨み合ひ、こなしあつて、奥へ入る。跡に磯町、一人殘り、合ひ方になり、磯町、思ひ入れあつて
磯町　ハテ、思ひ掛けない、今、荒川が上意の趣き。互ひの子供を、矢ツ張り預かりの儘にて首打てとは、元々へ取返せば、血を分けしゆゑ、未練に打ちかねるか、但し、身贔りでも立てうかとの疑ひか。これも思へば、心よからぬ伯父御、典膳どのが計らひ、お家に古き忠臣を皆退け、兎角桃の井家を横領せんと、サア、思へど此方が娘の不義は、伯父御の業ならず、その身のいたづら。殊に、女子は母に依ると、世の諺。これを思へば、わしの身の上まで、恥かしや。
ト獨吟になる。
〽山吹や、契情に子はありながら、子は契情にありながら、いはぬ色なる、淵とも瀬とも、網代木や、問へど答へも底深き、井出の柵みせきとめかねて。
ト此うち磯町、いろ〱思ひ入れあつて、立ちあがり、

奥より大小を携へ來て、幸ひと、數寄屋の刀掛けへ二腰とも掛け置き、遙か下がつて手を突く。これまでに、濁吟一ぱいに切れると、あと、好みの合ひ方

磯町　この兩腰は、過ぎ行かれし夫、濱田逸當どの〻魂ひ。せめては娘より、わしが心のお詫び。……コレ、堪忍して下さんせ、逸當どの。これまで數代續きし濱田の苗字に、瑕を附けるは、これ皆わしが誤まり。その古へは吉原で、吾妻路といふた傾城の、浮き川竹の流れの身。縁でがな、お前と互ひに云ひ交し、末の約束。起證は愚か末の世まで、眞實誠を盡した甲斐あつて、願ひ叶うて身請けせられ、假親とつて表向きとより、この屋敷へ嫁入りして、奥樣となつたその嬉しさ。程なう娘小稻を儲け、二人が仲の樂しみに、女子のする業何一つ、習はぬといふ事もなく、隨分大事に育て上げ、成人すれば、好い聟取つて、家相續と夫婦が思ひ、とつおいつ、誠に、滿つれば缺くると、思はずも去年の秋の頃、お前は、ツイ風の心地と思ひの外、萬死一生。その病中にも末を思うて、娘が身の上、一刀流の奥儀口傳をとつくりと教へ、遂には御病死。わたしも共々と思へども、任せぬ娘が可愛さ跡に殘つてあの子の養育。有り難や殿樣のお見出しにて、御前勤めの其うちに、隣り屋敷の半十郎どのと、人知れず不義密通。その科顯はれ、今の難儀。今日一日に命も迫り、殺さねばならぬといふ、辛い悲しい手詰めの場所。どうしてよいやら、問ひ相談もわたし一人。ほんに氏より育ちといへど、娘の不義も、母が卑しい傾城ゆゑ、血筋を引いたいたづらかと、世の人々や、草葉の蔭のお前にまで、なんと云ひ譯せうぞと、わしや途方に暮れて居るわいなア。

ト思ひ入れあつて泣き落す。バツタリと橋がゝりの塀のうちより、小石を附けた疊紙を投げ込む。磯町、悧りして、それを取上げ

誰かに隣り屋敷から。見れば、こりや、疊紙。エヽ、さては最前、娘や半十郎どのを助けたさに、半左衛門どのへ、詫びをかけたる夕顏の一首。すりや、その返事か。

ト拔き見て

何にもせよ、

―寄りてこそ、それかとも見め黄昏に、ほの〴〵見ゆる花の夕顏。―こりやコレ、娘が手跡にて、最前送りし「源氏」の返歌。殊に、疊紙に書きしも―源氏―の通りに

ト裏返し、表を見て

「必らず未來は女夫に、半十郎さまへ、小稻より。」こりや、母への返事ではなく、半十郎さまへ未來の事を賴むこの歌。エヽ、出かした、娘。さては死ぬる覺悟を極めたな。それで、半十郎どのへこの賴みは、今日の暮れ六つ、「黄昏にほの／＼見ゆる花の夕顏。」尤も、「源氏」と詞、心は違へども、黄昏に見ゆるは、死ぬる花の娘が潔い心根。オヽ、よく覺悟極めてくれた。出かした小稻。さうとは知らず、もしも色に迷うて、卑怯未練な心を持たば、産んだこの親は恥の恥。娘が潔いので世間へ云ひ譯。未來の夫も

ト疊紙を持ち、刀掛けの側へ行つて

コレ／＼、娘は潔う死にまする覺悟を極めました。なんぼう母が傾城でも、娘はお前の胤、武士の子ほどある。よう覺悟極めてたもつた。小稻、オヽ、出かしやつた出かしやつた。母はどのやうに嬉しからうぞ。エヽ、嬉しいわいの／＼、

ト思ひ入れあつて、疊紙を抱きしめ

嬉しいわいなう

ト泣き落す。此うち始終合ひ方、よき所にて、右數寄屋の、にじり上りの戸を内より開き、半十郎、丸腰、着流しにて、ソッと忍び出て、右刀掛けの大小をソッと取つて、腰にぼツ込み、さし足して奥へ行かうとするを、磯町、これを見付け

磯町　ヤア、半十郎どの。

半十　エヽ、

ト恟り、立ちどまる。

磯町　見れば、夫の大小を挾さみ、こなたは何れへ。

半十　イヤ、私しは。

ト奥へ駈けて入らうとする。

磯町　合點がゆかぬ。マア、待つた。

トつか／＼と行つて、半十郎に取りつくを

半十　危ない。お離しなされ。

ト振り離し、又取りつくを

磯町　待つた。やる事ならぬ。

半十　イヤ、それでも。

磯町　コレ、

ト立廻りよろしくあつて、磯町、トヾ半十郎を引止め

半十郎どの、こなたは大事の預かり者。譯も云はずに、どこへ行くぞ。殊に奥には荒川伴作、最前の御上使の趣き。

半十　サア、その上使の趣きを、殘らず承りましたるゆゑ、この半十郎は

磯町　死ぬる覺悟か。腹切るのか。

半十　イエ／＼、命が惜しさに、此お屋敷を立退きまする。

ト また立ちあがるを、磯町、キッと留め

磯町　ヤア／＼、なんと云はつしやる

ト 半十郎、慇懃に居直つて

半十　モシ、磯町さま、娘御のよしみによつて、これまでは段々とお世話つお志し。その御恩は仇おろそかに存じませぬが、とてものお情に、どうぞ私しを見遁がして、お助けなされて下さりませ。

磯町　そりや、どうして。

半十　死にともなうござりまする。

磯町　ヤ。

半十　サア、死にともなうて、モウ／＼、命が惜しうて惜しうて、どうもなりませぬ。

磯町　イヤ、そりや僞はり。嘘であらう。

半十　エ、

磯町　こなたも誰れあらう、桃の井家には名におふ、武道に熟しい稻野谷半左衞門さまの御子息。なんの命が惜しからう。死にともなからうぞ。武士の家に育つた一德、義によりては塵芥より輕しとやら。最前の上意の趣き、聞いたとあれば、この磯町は女の事、もしもこなたの首を切りかねようかと、思しての空事か。ホヽヽヽヽ、そりやこなたに似合はぬ。こりやちつと、わしを侮つて下さつたの。

半十　イエ／＼、勿體ない。なんの僞はり申しませう。たとへ人に卑怯未練と笑はれましても、生き長らへたいが本心。この度の身の難儀も、ほんの無實の災難。お上より仰せ出されもないのに、親人様が一存の、義を立て通して、今日の暮れ六つに首切るとは、あんまりの無得心。いとしや、小稻どのまで同罪とは、ほんにお前のお心も思ひ遣らずに、一徹な親人樣。私しが爰を立退けば、品によつて小稻どのが又、助かる筋があるまいものでもござりませぬ。見遁がして下さりませ。この大小も暫らくのうち借用。隨分人目にかゝらぬやう。密かにお屋敷は立退きまする。おさらば。

ト 又立ちあがる裾を捉へて

磯町　そりや、こなた眞實に。

半十　死ぬる心は、毛頭ござりませぬ。

磯町　親子の名をくだし、跡の難儀も思はずに、

半十　うろたへて居て時刻が移ると、最前の刻限ぢやによつて、

ト振り切るを、磯町、入れ代つて

磯町　コレ、娘は潔よ。

ト向うへ廻つて、疊紙を見せる

半十　その樣子も聞いた上は、見るに及ばぬ。心が急きまする。

ト引きのける

磯町　ならぬ。

ト立廻りにて、無理に引きとめ、髮を取つて引附け、右の疊紙にて、さん／＼に叩き据ゑる　半十郎、振り放し

半十　こりや、なんとなされまする

磯町　なんとするとは、見下げ果てた半十郎どの。こなたはなら。

ト合ひ方になり、半十郎が胸倉を取つて

コレ、わしが娘の小稱は、女でも、潔う、この通り、覺悟を極めて居るわいの。

ト疊紙を投げ附け

それに引きかへ、こなたは、卑怯未練に命を惜しみ、逃げ隱れして、跡に殘つたわたしが云ひ譯より、父御半左衞門どのには、お上へ何と申し譯があらうぞ。たとへ腹めされても、死後の恥辱はいかばかり。矢數や蟇目の手柄に引きかへ、日頃に似合はぬ半十郎どの、命が惜しいの立退くのと、淺ましい性根をさげずとも、潔う腹切つて死なつしやれ。娘も死ぬる。可哀やあれが願ひの通り、未來で夫婦に。コレ、合點がいたか。得心か。こりや返答のないは、矢ッ張り命が惜しいか。よい／＼。この上は、半左衞門どのへの云ひ譯に、わしが手に掛け

ト半十郎が差してゐる刀を拔いて、切りかける。半十郎、かい潜つて刀を打ち落し、その手をずッと捉へて

半十　磯町どの、この半十郎が命を惜しむに、大功は細瑾を顧ず、親の恥辱もお前の難儀も、心に掛けては大切なお家のお爲、御主人へ、忠義が立てられませぬ。

磯町　ヤ、なんと。

半十　その本心は、コレ。

ト合ひ方になり、半十郎、右の拔き身を持つて行つて、臆病口の井戸館の栗の柱を、ポンと斜切りに切り放す、

磯町　これは

半十　この柱は栗の、ナ、くり、ナ、サア、栗の名、栗をすツぱりと、切り離さねば、桃の井のお家の滅亡

磯町　ムウ。栗の柱を切り離さねば、お家の滅亡とは。ムウ、栗は、さては久利勘解由を。

半十　コレ。シイ

磯町　誠に。

ト兩人、思ひ入れ、こなしあつて半十郎、シヤンと刀を納め、下に居て、兩手を突き

半十　どうぞお情に見遁がして、お助けなされて下さりませう。

磯町　成る程、その心なら命が惜しからうが、切り離さうとの栗の柱は、足利の執權、寶改めの役目なれば

半十　ざやによつて、暫らく命を延べて、拙者が存念。若殿樣には傾城の戀の意趣、又、伯父御典膳どのを始め、家中に荷擔人多く、お家の重寶松陰の硯も、慥かに彼奴が所持いたし、足利どのへ申し上げ、兎角に桃の井家を拒み、只滅亡と事を謀るは眼前。役目の權威を以て、手出しのならぬ久利勘解由を、この半十郎が討つて捨てなば、一本立ち。どうで死ぬれば、行きがけの駄賃とやら、厚き御恩を戴きしお家、御主人へ忠義そと、心を固めし若輩者の拙者が所存。磯町さま、どうぞ汲み分けられて、暫しの命を

磯町　助けて進ぜう。

半十　すりや、御承知あつて。

磯町　併し、勘解由は足利の使者。日蔭のこなたが、容易く本意は遂げられまい

半十　イヤ、その儀はお氣遣ひ下されな。天の與へと、今宵勘解由は出立。

磯町　そんなら都へ。して／＼、その刻限は

半十　即ち暮れ六つ。城中より直ぐに出立。

磯町　二人が最期も暮れ六つなれば。

半十　暫しのお暇。

磯町　暮れ六つまでにはまだ間もあれば

半十　おそと申して

磯町　女でこそあれ、濱田逸當が後家、後の思案に、わしが心に。

半十　エヽ、忝ない。

トこなしあつて、ドン／＼と六の太鼓鳴る　半十郎、指を折り

ありやもう六ツの刻限。

磯町　心靜かに、最期の用意。

半十　イヤ、用意は此まゝ。

磯町　ハテ、めでたう元服

半十　エヽ。

磯町　不義の科にて死罪の身の上。前髪落して、賽の河原へ行かぬやう、娘が頼み。

　ト疊紙を取つて半十郎に渡す。半十郎、これを取つて

半十　「寄りてこそ、それかとも見ぬ黄昏に、ほの〴〵見ゆる花の夕顏。」

磯町　その夕顏の形を變へて

半十　未來の夫婦

　ト懷中する。磯町、こなしあつて

磯町　娘が喜び

　トちよつと二重舞臺へ行つて、鏡臺を直し、鋏と剃刀を取出し

　サア、半十郎どの。

半十　ハア。

　ト半十郎、鏡臺に直る。磯町　前髪をヂッと取つて、剃刀を構へ

磯町　たらちねの、かゝれとてしも烏羽玉の

半十　我が黑髮は

磯町　後の形見に

　ト「髪梳き」の唄になり、兩人よろしく、チョン〳〵にて、また道具廻る。

　元の稻野谷の屋敷になる。右、夕顏棚の塀、初手の聽病口へ直る　矢張り「髪梳き」の唄にて、道具とまると矢張り、右の唄の内に、みふね、お友、小早、お梶、てんでに紺の糸卷きと鋏を持つて、小早、お梶は踏み臺に乘り、夕顏棚の莟みを糸にて括るこなし。みふね、お友は下の莟みを括つてゐる。これに皆々心得あるべし。此うち向うより、最前の捕り手のうち、一人忍び出て、そつと枝折り門の内へ入り橋がゝりの柴垣に隱れる。

小早　お梶どの、お前はどうぢや。大方括らしやんしたか

えこ　わしやとんと、よう括らぬわいなア。

かぢ　サア、なんぼ括らうと思うても、糸が拔けて、どうも括られるものぢやござんせぬわいなア。

とも　こりや、みふねどのが上手ぢやわいなア。

みふ　なんのマア、わしやまた一つもよう括らぬわいなア。

蕾みを一つづゝ面倒に括らうよりは、矢ツ張り針に糸を附けて、縫ひ附ける方がよからうわいなア

三人　ほんに、こりやよい思ひ附きぢやわいなア

ト此うち奥より、お品、小首傾げ、悄れて出て来る。

ヤア、御寮人様。

みふ　ほんに、お品さま。

しな　みふね、皆の衆、わしが頼んだ事はどうぢや。

みふ　サア、あなたの仰せ、この夕顔の棚の蕾みを一つ一つ、糸で括れと仰しやつたが、いろ〳〵致して見ても、糸がすべつて、どうも括られませぬわいなア。

しな　そりや、ひよんな事ぢやの。

ト矢張り悄れて居る。

みふ　モシ〳〵、御寮人様。蕾みを糸で括らうより、皆引きちぎつて、捨てたらどうでござりませう。

小早　イヤ〳〵、滅相な。親旦那様の御秘蔵の夕顔。さうしては悪いわいの。

かぢ　一體、どういふ事で、蕾みを糸で括つて置くのでござりまするえ。

しな　ハテ、夕顔の花は、暮れ方に段々開くものゆゑ、あの花が開くと、兄さんのお命がないわいの。

みふ　エヽ、そんなら小稲さんも御一緒に

三人　不義の成敗に。

しな　サア、今日の暮れ六つ限り。

皆々　そりやお道理。

しな　ア、どうぞ仕様は無い事か。

トこなしあり。向うより友次、首桶を携へ、ツカ〳〵と出て来り、枝折り門より立寄り

友次　誰そお頼み申しまする。お隣り屋敷、濱田逸當の後室より、至急のお使ひ。半左衛門さまへお取次ぎ、お頼み申しまする。

しな　ナニ、お隣り屋敷よりのお使ひとは

四人　何にもせよ、親旦那様へ。

ト奥にて

半左　知らせに及ばぬ。聞いた〳〵。

ト云ひ〳〵、半左衛門出て来る。

しな　そんなら、父さん。

半左　隣り屋敷のお使ひ、直ぐに逢はう。腰元どもは先づ次へ。

四人　畏まりました

ト皆々、奥へ入る。よき所へ半左衛門、坐り

半左　お品、使ひをこれへ。

しな　アイ。

　ト枝折り門へ立寄り

濱田家のお使ひ。これへ。

友次　御免下さりませう。

　トずつと入り、半左衛門を見て、ハッと扣へる。

半左　若黨友次、大儀〳〵。

友次　これは〳〵、半左衛門さま。有り難いお詞。恐れ入りましてござりまする。思ひ掛けなくお互ひに、この度の御遠慮ゆゑ、お上を恐れ、萬事御疎遠。拙者によろしく申し上げよと、主人磯町、申し附けましてござりまする。

半左　そりや此方も同じ事。心は變らぬこれまでの懇意。あの塀一つ隔たれど、掟を守れば、百里も同然にして、友次、磯町どのより使ひの樣子は。

友次　イヤ、外の儀ではござりませぬ。此方屋敷に預かりの、御子息半十郎さまの御身の上、今日俄に御上使のお入り。當稻野谷へも申し附けあれば、めい〳〵預かりの不義の科人、首打つて出せよと、退引ならぬ御上意ゆゑ、主人磯町取りあへず、お預かりの半十郎さまの御首を打つて、御覽に入れまする間、此方娘小稻儀、急ぎ其方にて死罪仰せ付けられ、御尤もに存じまする。

しな　エ。そんなら、アノ、兄さんの首切つたとに、胴慾な磯町さま。

　ト泣く

半左　コリヤ、お品。見苦しい。扣へぬか。

しな　ぢやと云うても

半左　ハテ

　ト引据ゑる思ひ入れあつて

此方より申し上げし刻限は暮れ六つ。それには、や悴半十郎を。

友次　即ち首桶持參仕りました。御首級へ御對面下されませう。

　ト半左衛門が前へ直す。所へ、奥より小稻、走り出て

小稻　樣子は聞きました。胴慾な母さん。半十郎さまのお首を。

　ト首桶の蓋を明けようとするを、友次、小稻を突き廻して、蓋を押へ

友次　小稻さま、お麁相な。未だ御實檢に備へぬ大切なお首。殊に、半左衛門さまの御内見も濟まぬうち、お前が

見ようとは、なりませぬぞ。

ト ぢつと押へて居る。小稻、こなしあつて

小稻　何を、友次めが。おのれが利口らしう。日頃に似合はぬ、母さんも母さんぢやわいなア。死なば一緒と思ひ詰めてゐるわたしを、跡に殘して半十郎さんを、お先へ殺すと云ふやうな、胴慾な事が、あるものかいなア〳〵。わたしも疾から死ぬる覺悟を極めて、最前あげた夕顏の返歌。未來で添はうと樂しみに、たとへ最期の場所は變るとも、死ぬるは一緒、嬉しやと、待ちかねて居るうちに、コレ、此やうに半十郎さんは、先へ死なしやんして、わしや後から死んで、死出の山や三途の川も、遲れて行て、もしも逢はぬ時には、なんとせう。どうせうぞいなア〳〵。

ト友次を振り廻して大泣き。友次、思ひ入れあつて

友次　ハテ、お前樣も、逸當さまのお娘御のやうにもない。なぜそれ程に思し召さば、めろ〳〵と、役にも立たぬ、繰り言を仰せられずに、その手間で、半左衞門さまへお願ひなされて、御最期はなされませぬぞ。

小稻　ムウ。成る程、さうぢや。よう心を附けてくれたなア。

ト半左衞門が側へ行き

申し、半左衞門さま、他人の子は切らぬと仰しやられましても、お上の仰せ、取替へて首を切れとの事なれば、母さんはあの通り、半十郎さまのお首を切らしやんしたれば、お前は早うわたしが首を。

ト此うち半左衞門、最前より、首桶に心を附け、思ひ入れある。お品、起きあがり

しな　さうでござんす、小稻さん。死ぬるお前は羨ましい。せめて御最期の暇乞ひに、兄さんのお首を

ト首桶へかゝるを、友次、突き廻し

友次　ハテ、半左衞門さまより外に、滅多に見せぬこの首桶。

しな　イヤ、それでも、ちよつと

友次　ならぬ。なりませぬ。

小稻　サア、半左衞門さま、どうぞ。

半左　ハテ、死に急ぎをしやるな、小稻。一旦云ひ出した暮れ六つの刻限、否でも應でも手にかける。最早落日、餘り間もあるまい。

友次　イヤ〳〵、モシ、半左衞門さま。刻限よりは小早く、半十郎さまのお首打つて、主人磯町、首桶持參いたせし

は、その小稻さまも、此お屋敷にて、早く首打たさう爲
の御思案。

ト半左衞門こなしあつて

半左　惣じて人の五運六氣は、五臟六腑より出づる息、引
く息、聲なくして自然と現はれ、また最期を遂ぐれば、
絕背、本土に返す。最前より心を附けるに、悴が首と持
參せし、ソレ、その器に、未だ陽氣の立ち去らぬは

友次　エ、。

ト恟り。

半左　小稻、許す。悴が首へ暇乞ひ。

小稻　そんなら。

ト首桶へ手をやる

友次　ハテ、見せる事はなりませぬ。

しな　でも、父さんのお免し。小稻さんに、ちよつと。

友次　それでも、どうも

半左　友次、悴が首をなぜ見せぬ。

友次　サ、それは。

小稻　サア。

しな　サア。

皆々　サア／＼／＼。

ト皆々、詰め寄る。バツタリと音して、下座の塀のう
ちより拔き身を差出す。皆々恟り。半左衞門こなし。すつ
手早く内より切り破り、半十郎、頰かぶりにて、
と出ようとするを

小稻　ヤア、半十郎さま

しな　ほんに、兄さん。

ト兩人、近寄らうとする。友次、ちやつとお品を引廻
す。半左衞門、小稻が裙を刀にてしつかりと押へ

半左　コリヤ、うろたへ者。面出しひろぐと、討ち果すぞ。

ト半十郎を睨みつける。これにてちやつと引ッ込む。

小稻　エ、

トこなし

半左　友次、今のは何ぢや

友次　イヤサ、あれは。

半左　黑犬であらう。憎い畜生め。白晝に塀を破つて、こ
の屋敷へうろたへ廻り、のめり込まうと。エ、、なに
か、女犬どもが澤山なゆゑ、それでこの庭へ四つ這ひに。
イヤモ、見下げ果てたる四つ足めが。コリヤ、友次、其
方が持參のその首、見るに及ばぬ。キリ／＼持つて立歸
れ。

友次　イヤ〳〵、モシ、半左衞門さま。義を金鐵に思し召し、その御立腹は御尤もなれど、此方主人磯町は、女でこそあれ、お家へ忠義。男まさりの健氣に、すつぱり切つた半十郎さまの御首。此お二人にはお目に掛けねど、あなたばかりは、とくと御覽下さりませう。
半左　見るに及ばぬ。その器
友次　半十郎さまのお首。
稻品　それでも、今のは。
友次　コレ。
ト二人を引寄せ
コレ、最期は遂げても、魂魄殘り、世に幽靈といふ事がござるぞや。
小稻　エヽ、合點の行かぬ。なんぢややら、ドキ〳〵と。マア、この首桶を。
友次　イヤ、それは。
ト留めるを、お品、友次を支へて
しな　ソレ。ちやつと、小稻さん。
小稻　さうぢや。
ト蓋を取る。中に前髮入れてあるを取上げ
ヤア、この黑髮は。
半左　慥かに忰は元服。
ト塀の方へ行かうとするを、友次、ちよつと留めて
友次　イヤ、半十郎さまの前髮首、切り落したは、後室樣のお手際。お家のお爲、とくと御賢慮めぐらされ、コレ、この首の御内見下さりませう。
稻品　そんなら、この切り髮は、
半左　血を分けた忰が首。ハテ、よく打つた。ムウ。この上は此方も、この小稻が首を。
ト半左衞門、首桶を取上げ、小稻を引立てるを、
しな　イヤ、それでは
ト寄るを振り切り、思ひ入れあつて
半左　小稻、來い。
ト小稻を引立て、半左衞門、奧へツイと入る。
しな　ヤア、アレ、父さんが、小稻さんを。
ト行かうとするを、友次とめて
友次　大事ない、お品さま。半十郎さまをお助け申し、此方の娘御は不義の越度、殺さねば、半左衞門さまの云ひ譯が立ちませぬ。
しな　イエ〳〵、助かる筋ならば、お二人ともに。
友次　ハテ、殺す思案で後室樣が、拙者をお使ひ

しな　ぢやというて。
友次　待つた。待たつしやりませ。
　トお品は奥へ行かうとするを、友次、引留める。兩人立廻りのうちへ、捕り手、柴垣の内より出で。
捕手　樣子は殘らず聞いた。濱田、稻野谷兩家の奴等、引ッ括つて御前へ引く。兩人ともに動きやアがるな
友次　ヤ、其方は
捕手　彌源次さまの組下、石原團八。斯ういふ事もあらうかと、忍び込んだに思ふ壺。一々に繩かける。腕廻せ
友次　樣子を聞いた汝が不運。蛙は口ゆゑ、此方から生けては置かぬ
しな　大事を聞いた其方を。
　ト友次、お品、兩方よりかゝる。捕手「何を」とこれより烈しき立廻りになり、ドッコイと三人ちよつと留まる。暮れ六つの鐘打出す。
三人　ヤア〳〵　ありや暮れ六つ。
　トお品、悧くり。友次もこなし。合ひ方烈しくなり、始終三人立廻りのうちにて、夕顏の蕾み五六輪、仕掛けにて開く。
しな　コレ〳〵。夕顏の蕾みが
友次　ほんに、段々開いて來るワ。
捕手　兩家の身の上、
　ト段々立廻りのうちより、夕顏、見る〳〵開く。始終合ひ方。暮れ六つの鐘。
しな　いとしや、小稻さんのお命は蕾みが殘らず開いた上は
友次　兩人、うぬを。
捕手　ト引附けるうち、奥にて「エイ」と半左衞門首討つ。
しな　ハア
　ト思ひ入れ。友次、團八を取つて捕へる。「ムウ」と憂ひの心。これにて、チヨン〳〵にて道具廻る。
　元の濱田の屋敷へ廻ると、二重舞臺に、伴作、最前の形にて、刀を拔きかけ、數ヶ所の手負ひにて、拔き身、振上げて居る。磯町、同じく手負ひにて、長刀を構へ、打ち合つて居る見得。矢張り烈しき合ひ方にて、道具とまる。
伴作　女と思ひ侮つて、不覺を取つたか。エヽ、口惜しや。
磯町　年は寄つても濱田逸當が妻。伴作、其方が相手になりかねやうか。愚かな事を。

伴作　最早首討つ刻限。それに婆めが、よくも半十郎を落し、逃がしたなア。

磯町　その申し譯は、この磯町が、いま其方を打ち果すのぢやわやい。

伴作　何を、猪口才な。

ト兩人よろぼひ、靜かなる手負ひの立廻りになり、よろしくあつて、トヾ磯町、長刀にて伴作を薙ぎ倒し、こなしあつて息をつく所へ、奥バタ〳〵にて、友次、首桶を持つて走り出て

友次　ヤア〳〵。すりや御後室様は

磯町　ア、コリヤ〳〵、友次。半十郎どのを助けたからは、この最期はわしが覺悟ぢや。して、娘小稻が身の上は。

ト首桶の蓋を取つて見せる。內に、小稻が振り袖入れてある。磯町、思ひ入れあつて、袖を取上げ見、

磯町　こりやコレ、娘小稻が振りの兩袖。

友次　サ、切つて送られし半十郎どのは、ソレ、最前の前髮。ナ、首の返禮に。

ト手燭を取つて來て差出す

磯町　エ、、、。

ト兩袖を見い〳〵、ザツと思ひ入れあつて

忝ない、と思へども、おいとしや、半左衞門どのにも。

ト塀の彼方より

半左　磯町どの、その申し譯は斯くの通り。

ト、チョン〳〵にて、道具ザツと廻りかけ、橋がゝりの隔ての塀、夕顏棚ともに廻り戻り、舞臺の正面になると、西の方に、半左衞門、捨石に腰を掛け、刀を腹へ突ッ込み、お品を踏まへ附け、片手に手燭をかゝげて居る。最前切り破りし塀の穴越しに兩方見る心。東の方は、磯町、長刀を突ッ張り、袖を見て居る。兩方自然の見得。友次心得、塀の方へ立廻つて、手燭を差出す。半左衞門を磯町見て

磯町　ヤア〳〵、そんなら娘が代りに

半左　倅が代りに、磯町どの。過分〳〵。

磯町　イヤ〳〵、それも忠義に、侫人久利勘解由を

半左　イヤサ、それは隱密。矢張り我が子に迷うて、親々は

磯町　成る程、互ひに云はず語らず

半左　エ、、出かした子供ら。

磯町　死んで行く身の樂しみは

半左　夕顏棚の下蔭、

ト お品、起きあがり

お品　父さんは御切腹。

友次　後室様は御自害。

磯半　これも忠義と恩愛。

ト皆々思ひ入れ。この時、伴作起きあがり「うぬ」と磯町にかゝる。此方は捕り手、半左衛門にかゝるを、兩方一時に、半左衛門、捕り手をポンと切る。磯町は長刀にて伴作を切り、兩人、刀と長刀を取直し、最期を遂げ、バッタリとこける　友次、お品、大泣きに泣き落す。これをキッカケに、　よろしく幕

トこの幕は好みにて、土手並木の松の模樣染め好み、幕のうち行列三重にて、

引　返　し

本舞臺、一面の黑幕にて、板松、正面に稻村などあり、矢張り、行列三重の合ひ方にて、幕明く。

ト向うより勘解由、紋付きの箱提灯一張、徒士三人、乘り物六尺、供廻り、大勢。皆々静かに本舞臺へ來て、下座の方へ行きかゝる　よき所にて、右稻村より、元服したる半十郎出て、直ぐに箱提灯を切り落し、供の人数を切り殺す。供廻り皆々、向うと臆病口へ逃げて入る。半十郎、追ひ散らすうち、乘り物より勘解由、追ッ取り刀にて出で、闇がりの心にて

勘解　何者なれば路次の狼藉。身は久利勘解由。この度足利家の嚴命を蒙り、諸家の重器を檢分の役目を蒙りし某、意趣を受ける覺えはない。エヽ、聞えた。さては盜賊か。なぜ名乘りかけぬ。卑怯な奴の。

半十　名乘るに及ばぬ。桃の井家の忠臣、稻野谷半十郎。今宵の出立幸ひと、疾よりこれに相待ち居つた。

勘解　ヤア、不義者の半十郎。その半十郎に、意趣を受ける覺えはないぞ。

盜賊と聞き及ぶ。その半十郎に、意趣を受ける覺えはないぞ。

半十　覺えないとは、云はさぬ〳〵。惡逆無道の伯父典膳どのと頷き合ひ、紛失なしたる松蔭の硯は、竊かに受取り、桃の井家を、覆へさんと謀るお家の禍ひ。直參とて容赦はならぬ。サア、勘解由どの、紛失なしたる松蔭の硯、所持して居るに極まつた。

ト云ひ〳〵立寄つて、勘解由が懷中へ手を突ッ込む。勘解由・振り切り、ヒラリと拔き放す。半十郎、見得

半十　よく受け止め
年寄つても流石は勘解由。まだしもの心掛け。

ト切り込む。〽何を〽とこれより忍び三重になり、半十郎、勘解由、烈しくタテ。トゞ半十郎、勘解由を殺し、乗りかゝつて止めを差し、懷中を搜し、紙入れを取出し、書き物どもを改め、分らぬゆゑ、一緒に振り、懷中して、ト懷中を見て

南無三。こりや實は。ムウ。實は無けれど、この書き物。慥かに密書。これにて詮議をとくと

ト思ひ入れあり。向うバタ〳〵にて小稻、着付けの雨袖切つた形にて走り出て、本舞臺にて半十郎に行き當り

半十　何者ぢや。

ト身構へする。小稻、思ひ入れあつて

小稻　ヤア、さう云はしやんすは、慥かに半十郎さんか。
半十　さういふ其方や小稻。どうして爰へ。
小稻　父御のお情、命助かり、お前の跡を。
半十　おれとても、母御、幾町どののお志し。
小稻　互ひに無事で
半十　思ひ掛けなう
小稻　オヽ、嬉し。

ト半十郎に取り附き、よろしくこなし。　ひやうし幕

# 二番目序幕

淨瑠璃の場
大津石場の場

淨瑠璃　道行紛思荷（富本豐前太夫連中）

役名――濱田逸當娘、小稻。八景組男達、唐崎松兵衞。同、片田雁助。同、比良暮太郎。同、粟津晴九郎。同、瀨田長四郎。同、石山丸七。同、矢橋喜太八。同、三井伴藏。書藝、東小僧鉦八。柴賣り、半兵衞、實ハ稻野谷半十郎。

本舞臺、三間の間、萩、薄の摺ゑもの。正面の高土手に淨瑠璃の仕掛けあり。幕の内、鉦八、汚き形にて、息杖を振り上げ、打たうとしてゐる。松兵衞、小揚げの形にて、腰に編笠を附け、留めてゐる。駕籠舁き三人、立ちかゝつてゐる。この見得、ワヤ〳〵喧ましく、在郷唄にて幕明く。

駕舁　料簡ならぬぞ〳〵。
鉦八　その顋をとめてやるべえ。
　ト立ちかゝるを、松兵衛、いろ〳〵留めて
松兵　マア〳〵、双方ともに待たつせい〳〵。おれもこの大津に知られた、小揚げ仲間の頭分。通りかゝつたこの場の出入り、見捨てもならぬゆゑ、中へ入つたのだほどに、マア〳〵急かずと、譯を云はつせい〳〵。
駕甲　ハイ〳〵。成る程、上り下りの道中筋、お顏は見知つて居りまする。マア〳〵、お聞きなされて下さりませ。あらう事か、あるめえ事か、石部よりの戻り駕籠、ツイ通りなら、やみ、げんこ位は取る筈を、見た所がさんすゐな形といひ
駕乙　草臥れた樣子ゆゑ、下駄に負けて、乘せて來た大津の立て場。茶碗で一杯やらかすうち、物をも云はず、錢も拂はず、乘り逃げにするゆゑの出入りでごんす。なんと、親方、
兩人　わしらが無理ぢやアごんすめえがの。
鉦八　おきやアがれ、雲助野郎め。江戸に居ちやア、二つも三つも名を取つた男だ。ちつとこの大津近所に、尋ねる人があつて、登つて來た道中筋。五十三次の馬でも駕籠でも、錢を出した事のねえおれだ。それに駕籠賃を取らうとは、太い奴等ぢやアねえか。金輪際、遣る事はならねえワ。
駕甲　コレエ、〳〵。太いとはうぬが事だ。駕籠の乘り逃げ、大泥坊。
駕乙　大騙りめ。
鉦八　さう吐かしやア、うぬらをおれが。
　ト息杖にて打つてかゝる。此方も立ちかゝる。これを松兵衛留めて、捨ぜりふにてなだめてゐる。てんつゝになる。向うより男一人、金棒を引いて出て來る。跡より、ぶッ裂き羽織、股引きの役人出て來て、騷ぎの中へ入る。
男　お役人樣だが、鎭まらぬか〳〵。
役人　見れば、口論と見えるが、何事だ。
松兵　ヘイ〳〵。イヤモウ、ついした通りがゝりの詞爭ひ。通りかゝりましたゆゑ、挨拶を致して居りまする所、あなた方のお耳へ入れまする儀ではござりませぬ。
役人　ムウ。其方が姿を見れば、此あたりの小揚げと見えるな。
松兵　左樣でござりまする。憚りながら、この大津七浦に

隱れの無い、八景組の小揚げ頭、唐崎の松兵衞と申す者。
以後はお立寄り下さりませう。

鉦八　ヤア、そんならこなたが、唐崎の松兵衞どのか。

松兵　いかにも、松兵衞でごんす。

鉦八　さうとは知らず、尋ねてゐた。コレ、江戸の岩城彌源次さまから

ト云はうとするを

松兵　ア、コレ／＼。ヅカ／＼物を云ふまいぞ。ムウ、聞えた。そんなら貴樣は、その使ひに

鉦八　わざ／＼上つた東小僧。

松兵　ヤ。

鉦八　イヤサ、東からわざ／＼登つて來たも、こなたに用があつて。ハテ、いゝ所で逢ひましたなう。

ト兩人こなし。

役人　何は格別、小揚げ頭とあれば、この大津近邊は、案内は詳しくあらん。殊に、江戸上りの者も近づきとあれば、定めし噂にも聞きつらん。先達て關東の桃の井家、實改めのお使者として、足利家の昵近たる久利勘解由どの、下りの折柄は、桃の井家を御旅館と定められ、御逗留のうち、家の重寶松蔭の硯紛失といひ、剩さへ勘解由どの御發足の路次に於て、何者とも知らず、討ち捨てたるとの注進にて、足利家の騷動大方ならず。にゞ詮議を遂げたるところ、その殺し手は桃の井家の舊臣、稻野谷半左衞門が悴、半十郎なる由、この程より詮議最中。もしこの大津近邊まで、逃げ隱れ致さんも相知れねば、組子どもに申し附け、心を附けて詮議いたし、召捕つてあげるならば、一廉の御褒美を下さるゝ。この旨キッと心得てよからう。

ト此せりふのうち、松兵衞、鉦八、心得し思ひ入れ。

松兵　委細畏まりました。自慢ではござりませぬが、八景組を子分に持ち、大津八丁柴屋町に、隱れのないこの松兵衞。其お尋ねの人殺し、ちつと心當りござりますれば、とくと實否を糺した上、御注進いたしまするでござりませう。

鉦八　その噂もかねて知る。紛失の松蔭、イヤ、サア、松兵衞どのの手先になつて、共に詮議の金儲け。

駕甲　道中筋は得手のもの。おいらが仕事。ナア、棒組み。

駕乙　オ、、それ／＼。頑張つての錢儲け。

松兵　マア、差當つて、挨拶の仲を結んでさしとさし、持ち合せの小遣ひ錢、駕籠賃の立替へ・受取つて置かつせ

え。

ト懷中より錢二百投げ出す。

兩人　これは〳〵、有り難うござります。

役人　必らずともに今の詮議、わいらも隨分油斷いたすな。これより次の宿まで申し渡さん。

皆々　お役人樣。

役人　案內いたせ。

トてんつゝになり、鐵棒先に役人、駕籠舁き、駕籠を持ち、捨ぜりふにて皆々下座の方へ入る。跡に松兵衞、鉦八殘り、こなし。

鉦八　さて〳〵、よい所で逢ひました。わしは東小僧鉦八といつて、かねて江戸表の岩城彌源次さまとは同腹中で、桃の井家を無きものにせんと云ひ合せ。

松兵　成る程、かねて一味のこの松兵衞、久利勘解由さまと云ひ合せ、東海道の咽喉首、この大津に巢を張つて、桃の井家の落人の奴等を詮議するうち、この頃見馴れぬ柴舟人、小稻・半兵衞といふ夫婦連れ、慥かにゆかりの奴等と思ひ、ごた附くにも盜人の晝寢の、當といふは女房小稻なり、ちつとほの字の筋だ。

鉦八　待たつせえ。その小稻といふは、正しく濱田逸富の娘。半兵衞と云ふは半十郎に極まつた。

松兵　かねて彌源次さまより文通にて、知つて居れど、逢ふは初めて。勘解由さまをおッ殺した詮議、證據となる一品とあつて、先達て送り置かれし、コレ、この香包み。

鉦八　それこそ小稻、半十郎が、不義の科にて預けのうち、取交したる香包み。

松兵　サア、これが勘解由どのゝ最期の場に、落ちてあつたが、證據の種。

鉦八　その半十郎に面を知られたこの鉦八、隱れ忍んで詮議は半兵衞。先づ何よりは大切な、彌源次どのより送られし、桃の井家の重寶、松蔭の硯。サア、受取つて置かつせえ。

ト懷中より、服紗に包みし硯を出して、松兵衞に渡す。

松兵　すりや、これが松蔭の硯とな。

鉦八　いかにも。それゆゑに桃の井家の越度といひ、半十郎が身の誤まり、盜賊の疑ひ受けしも、深川の八幡にて、禍ひとなつた鈍菊の小柄、役に立つたも時の幸ひ。なんでもその硯を金にして、彌源次さまへ。

松兵　そこは拔からぬこの松兵衞、賣り拂つて金儲け。

鉦八　念の爲、彌源次さまへの受取り書。

松兵　イカサマ。

ト腰の矢立を出し、鼻紙にさら〳〵と書いて

「一つ、桃の井家の重寶松蔭の硯、東小僧鉦八より慥かに受取り申し候ふ、お頼み通り賣り拂ひ、追つて金子差上げ申すべく候ふ、以上、月日、岩城彌源次さまへ、唐崎松兵衛。」途中なれば書き判。これでようごんすか。

ト渡す。鉦八取つて

鉦八　これでよし〳〵。

ト懷中して

まだ詳しい密談は

松兵　石場の茶屋で。

ト云ひながら、向うを見る。

アレ〳〵、向うへ見えるのが、慥かに夫婦の柴商人。

鉦八　もしも半十郎に極まりなば、おれが居てはむづかしい。

松兵　それもこれも、仲間の奴等と云ひ合せ、香包みを囮にして、人殺しの詮議、二つには、小稻を口說く戀と慾。

鉦八。

鉦八　松兵衛どの。

松兵　マア、來やれ。

---

ト松兵衛、鉦八こなしあつて、下座へ入る。ト直ぐに頭取出て、淨瑠璃名題役割太夫連名觸れ濟み、後の土手幕切れると、直ぐ前彈き。

〽世の中の、人をふくみの盛りのと、花に譬へていひ散らす、詞の嵐憂や辛や、春を重ねて育ちたる、國を離れて二人連れ、憂を近江の隱れ里。

トこの淨瑠璃にて、花道より小稻、練りの浴衣、手甲、脚絆にて、褄からげ、頭に黑木を載せ、出て來る。後より、半兵衛、これも練りの浴衣、おちよぼからげ、鉢卷にて、柴の荷をさし擔ひ、提げ煙草入れを持ち、煙管に煙草吸ひ付けながら出て來る。

〽小いな半兵衛と變る名に、世渡る業も濡れ柴の、こりとしたる女夫連れ、黑木召せ〳〵黑木賣り、ひろうて戀のつなぐ繩、牛の角文字、うしろ帶、見惚れてうねる女郎花、萩や薄は秋の色、妻戀ふ鹿の寄るとだに、菊の下露、下心、長い浮世を心から、みじか煙草のせきれいは、鳥の中でも情知り、戀の手本のいろは文字、ういのおく山けふこえて、得意廻りの里通ひ、かくは可愛や柴賣りかね、しんきさうに見ゆる、爰へござれと呼ばれて男、谷の細道、くどりにくい道を、くどりくどつて松の

枯れ枝、あいたしこ、何とした、あいたい見たい、苦しみも、今は身儘の樂しみに、戀の道草なまめかし。

卜兩人よろしく振りあつて、柴や黑木を舞臺に置くこなし。

半兵　なんと、小稻。ちと爰で、休んで行かうではあるまいか。

小稻　ほんに、それがようござんす。お前も、わたしも、心柄とはいひながら、不義の科とて親々へ預けられ、逢ひ見る事もあるまいと、案じ暮らす其うちに、舅御、半左衞門さまのお情にて、國を離れて、今の憂き身。

半兵　そりや、半十郎も同じ事。其方の母御、礒町さまの情にて、お家のお爲と思ふゆゑ、人知れず、久利勘解由を。

小稻　アヽ、コレ。モシ。

卜兩人こなし。

半兵　サア、これも皆お主の爲。この上は、紛失せし桃の井家の重寶、松蔭の硯を尋ね出し、二人が身の明りを立てれば、お主へ忠義、二つには、我れ／＼ゆゑにお果こなされた、養人といひ、礒町さまへ、せめては不孝の申し譯と、半兵衞と名を變へて、姿をやつすも實に詮議。おれよりは其方まで、仕馴れもせぬ薪木賣り。堪へてくれ、小稻。

小稻　又、そんな事云はしやんす。元の起りは、皆わたしから起つた事。思ひ出だせば、その時の、その馴れそめは。オヽ、それよ。

〽緣の深川、二軒茶屋、お顏は常に宮本の、思ひの矢數射通して、弓も蟇目の口傳より、戀の傳授を請け初めて、わけも白齒の振り袖に、包む色香の若衆振り、屋敷育ちのきつとした、振分け髮の筒井筒、昔男は知らねども、外に二人はないわいな、願ひ叶うて添ふからは、賤の手業もなんのその、厭はぬものを其やうな、隔て心は聞えぬと、袖はとめても懷の、氏をあらはす娘氣の、今に變らで可愛らし。

半兵　サア／＼、さういふ氣なら、嬉しい／＼。辛氣辛苦も忘れ草。

小稻　そんなら、わたしも吸ひ付けて

半兵　さらば一服いたさうか。

卜薪に腰掛け、摺火打ちにて莨をのむ。

〽話しに憂さを忘れ草、千草刈り／＼草刈りの、招けば招くうない兒の、友呼ぶ姿愛らしく、浮かれ狂うて來り

ける。
トこの浄瑠璃にて向うより、草刈りの童四人。おちよぼからげ、誂らへの草籠を背負ひ、熊手、鎌などを持ち出て來て、本舞臺へ來り、小稻を見て

童一　ア、〳〵、あそこに、この頃柴を賣る、若い小父樣と、小母樣が休んでぢや。

童二　いつものやうに、あの姐樣を相手に、踊ろぢやあるまいか。

童三　こりや面白い〳〵。

四人　サア、姐樣、ござれ〳〵。

ト皆々立寄り、小稻を引摺つて來る。

小稻　オヽ、この子達はいなう。此方は柴賣り、こなさん達は草刈りゆゑ、いつも出合ふ度毎に、甘やかしたが癖になり、わしを見ると、踊らう〳〵と、マア、愛らしいものぢやないかいなア。

半兵　イヤモウ、子供といふものは、憎うないもの。何も慰み、遊ばしてやつたがよい。おれも爰で見物せうか。

小稻　それぢやといふて。

皆々　サア、早う。

小稻　オヽ、笑止。

〽子供遊びに取り交ぜて、扇で招く、手で招く、商ひ草の戀の種、戀の市人多かる中に、大原木可愛い〳〵、大原女可愛い〳〵、沈や麝香は持たねども、匂うて來るは焚きもの、移り香深きうつり氣の、その肌附きにあらねども、堅い心のついなりさうで、奈良坂や、この手かの手の女子から、文の數が三萬三千、三百三十三通なり、なんと嘘ではあるまいか、わしやさう思うてゐるわいな、さうだんべい〳〵、その古へは武士の、梅は匂ひよ、櫻花、人は眉目より只心。

四人　チトクハン。

小稻　オヽ、をかし。

〽こゝな小比丘尼、伊勢比丘尼、伊勢の荒布とこの君樣は、見れば見る程、なアしほらしや、降りみ降らずみ、よし降らば降れ、どうでこの身は、ア、濡れに來た濡れに來た、濡れた同士の染め浴衣、裾に若松千代松阪、越えたえ、サツサ、踊りは、アリヤ〳〵、ヨイヤサ、足も輕げに拔け參り、笠にお祓ひ笠の笛、お土産召せ〳〵、二見せゝ貝、伊勢若布、若い女中の伊達參り、戀の櫛田の眞中で、深き思ひは宮川に、あら有り難や天地と、ともにあれます神體、三おやの神德まし〳〵て、夫婦妹

脊の痴話始め、だきつく夜着の内外の神も、もたれ合はせし葦原國の、戀の世界に生れ來て、二人添ひ寐の常闇も、明くれば戀の關晴れて、おもしろ〱の睦び事、契りは千木の片そぎや、直ぐな心で相の山、お杉、お玉が彈く三味線の、嶋さん、おくさん、中乘りさん、お江戸さん、鉢卷さん、さゝらの竹のひとふしに、雁々三つ口、あとのがさいたら笄とらそ、雁々三たり、四人連れ、あとや先と爭ひて、ちん〱もんがら、ちんちんちんがら、走り行く。

ト子供四人、下座へ入る。半十郎、小稻、見て

半兵　ハヽヽ。ハテサテ、子供といふものは。思はぬ興を催ふした。殘りの柴を、早う賣つて歸らうか。

小稻　ほんに、それ〱。サア、早うござんせ。

〽仲よい同志の打連れて、日足も西へ入り船の、港も遠き大津の町、黑木召せ召せ、柴黑木、薪に花のやさ商ひ、賣りひろめてぞ歸りける。

ト淨瑠璃のうち、いろ〱振りあつて、トヾ半兵衞、小稻、黑木と柴を取上げ、道行きの模樣にて、淨瑠璃、三重にて　　よろしく幕

チヨンチヨンのツナギにて　　引返し

本舞臺、三間の間、石垣の高土手。向ふ奥深に浪幕。所々に開帳の立て札。すべて大津石場の道具よろしく。小揚げ二人、俵に腰を掛け、莨のんでゐる。この見得、てんつゝにて幕明く。

ト直ぐに向うより、小揚げ三人、編笠を腰に附け、出て來る。

晴九　オヽ、皆、大儀々々。米は殘らず、屋敷の藏へ、納めたか〱。

長四　やつと納めてしまつたが、イヤ又、あの屋敷ほど、吝い屋敷はねえ。

幕太　それ〱、酒を一つ飲ましやがらねえ。あたじけねえ奴等ぢやアねえか。

丸七　そりやアさうと、親分の松兵衞どのは、どこへ行かれた。

喜太　ハテ、知れた事。この頃色事の筋で目はねえよ。

丸七　エヽ、あの柴賣りの小稻の事か。

晴九　仲間の者も頼まれて、間がな隙がな口說けども、一

向に得心しねえよ。
丸七　聞けば、男の半兵衞といふ奴は、桃の井の家來、稻野谷半左衞門が悴、半十郎だといふ話し。
暮太　女房小稻といふは、劍術の達人、濱田逸富が娘との事。
長四　それもこれも、桃の井家の伯父、典膳とのと云ひ合せ、彌源次どのとは同腹中の頭といひ、それに隨ふおいらが仲間、
喜太　八景組が寄つて掛つて、どうぞ小稻を口說き落し、親分の氣を休めてえものだ。
晴九　なんでも、今にも來たら、今日は是非々々、ナア、皆の者。
皆々　オヽ、サ、合點だ〳〵。
ト皆々捨ぜりふにて、ワヤ〳〵云うてゐる。此うち下座にて
雁助　半兵衞。マア〳〵、待ちやれな〳〵。
ト呼び掛けながら、半兵衞先に、雁助、伴藏、同じく小揚けの形にて出て來る。
半兵　これは〳〵、何の御用か存じませぬが、ちつと急ぎの
ト行かうとするを、舞臺の五人、立ち塞がつて
五人　やる事は、ならねえぞ〳〵。
半兵　これは八景組のお衆達。
小甲　雁助。伴藏。して、女房小稻とやらは
皆々　どうした〳〵。
雁助　聞きやれ。親分松兵衞どのに賴まれた彼の事を、云ひ出さうと思ふうち、女房小稻を卷きするめにした半兵衞ゆゑ
伴藏　直ぐに云ひ出さうと思つて、呼びかけるを聞く耳潰し、なぜ小稻を逃がしたのだ〳〵。
半兵　なんのマア、逃がすの、まくのといふ事がござりますか。商ひの柴、薪は、賣りしまひます。母の眼病案じられ、それで先へ歸しましたが、女房小稻に、なんぞ御用でもござりまするか。
皆々　オヽ、用があるワ。
半兵　そりやアノ、黑木のお入用か。左様なら、私しに。
皆々　イヽヤ、柴や薪の用がやねえワ。
半兵　して又、外に、なんの御用。
皆々　サア、その用といふは。
ト皆々云ひ惜がるこなし。

雁助　ハテサテ、皆の者。何も隱す事はねえ。幸ひな出合ひだ。半兵衞、おらが頭、唐崎の松兵衞どのが、われが女房小稻に惚れて、口說いてくれと賴まれた。仲間の顏、一番立てゝもらひたい。

半兵　ムウ。すりや、半兵衞と云ふ男のある

雁助　小稻にしつぽり夜の雨、濡れて見たがる唐崎の、思案の外に色よい返事。松兵衞どのゝ戀女房、取持つ心でこれまでも、文の使ひは堅田の雁助。

暮太　積る思ひは雪よりも、打ちとけさせる比良の暮太郎。

晴九　粟津といへど、晴九郞が、會はす積りで留めたのだ。

長四　氣も夕照とこの瀨田の、長四郞が渡す橋。

丸七　堅い心の石山でも、この丸九が角もなく。

喜太　當つて見たる矢橋の喜太八。

作藏　三井のかね事、作藏始め、貰ひかゝつた小稻が出入り。

雁助　緣を切つて三行半、半兵衞、ツイさら／＼と

皆々　書いてもらはう／＼。

半兵　ハテ、強く出られたな。なんぼ八景組の賴みでも、この事はなるまいわい。

皆々　なんと吐かす。

半兵　サア、よく積つても見さつせえ。國を離れてはるばると、この大津へ來てゐるも、ちつと身に望みがあつて、夫婦となつた小稻といひ、母人の御眼病、朝夕の煙りさへ、細い元手の柴黑木、一通りの譯とは違うてゐる女夫の仲。

雁助　サア、その譯も知つてゐる。元は侍ひ、江戶生れ、稻野谷半左衞門が悴、半十郞であらうがな。

半兵　ヤ、なんと。

皆々　なんと、違ひはあるめえがな。

作藏　小稻といふは逸當が娘、

半兵　アイヤ、全く以て覺えのない。小稻といふも、廣い世界に似た名もあるもの。元より武士でも、侍ひでもない證據には、柴商ひの半兵衞といふ、腹からの町人。

雁助　面白い。町人ならば、腕づくで、半兵衞、小稻を貰ふワ。

半兵　すりや、どうあつても女房を

皆々　松兵衞どのに取持つのだ。

半兵　イヽヤ、そりやなるまい。

作藏　半兵衞　小稻を

皆々　貰ふワ

半兵　そりや又、どうして。

丸七　斯うして貰ふワ。

ト両方より半兵衛が胸倉を取り、立廻りよろしく、丸七、晴九郎を左右へ見事に取つて投げる。長四郎、伴蔵掛かるを、足を搔いて抛る。暮太郎、立ちかゝる。當てるうち、雁助、開帳の建て札を取つて打つて、かかるを、半兵衛、搔い潜つて、しつかと留め

半兵　アイヤ、滅多に手には合ひますまい。

雁助　ハテ、天晴れな今の手のうち。町人の半兵衛には似合はぬ振舞ひ。

半兵　イヤサ、これは。

ト手を離す。雁助、こなしあつて

雁助　先つ頃江戸表へ、桃の井家の重寶、松蔭の硯とやらを改めのお使者として、久利勘解由さまの御發足。

伴蔵　その折から、松蔭の硯紛失。剰さへ、勘解由さまを手に掛けた大罪人、

晴九　道中筋はいふに及ばず、配符の廻つたお尋ね者。

喜太　その時は京から江戸、櫛の歯を引く注進訴人

暮太　桃の井家へお祟りと云ひ

長四　松蔭の硯の盗賊。

丸七　勘解由さまを殺した奴。

雁助　その疑ひのかゝつた稲野谷半十郎。かねて濱田が弟子といひ、娘小稲と不義密通、國を立退き、この近江に、隠れ忍ぶ詮議者。今の働らき、手のうちは、慥かに覚えの一刀流。代官所へ訴人せうか。

半兵　アイヤ、全く覚えのないこの半兵衛。

雁助　知らねば高が柴賣りの、半兵衛が女房小稲。

伴蔵　親方にスッパリと、遣ると遣らぬの生死の境。

雁助　返事が聞きたい。

皆々　半兵衛、どうだ。

半兵　イヤサ、それは、

雁助　半十郎なら、訴人せうか。

半兵　サア、

伴蔵　半兵衛なら、小稲をくれるか。

半兵　サア

皆々　サア

双方　サア〳〵〳〵。

半兵　手詰めとなつたこの場と云ひ、たとへどうでも人殺し、盗賊の疑ひ受けし半十郎でないからは、何に恐れて女房小稲、遣らうと云はう筈がない　腕づくならば半兵

衞が、力と根の續くだけ、八景組の相手にならうワ。

雁助　さう吐かしやア、破れかぶれ、皆の者。たゝんでしまへ。

皆々　合點だ。

ト伴藏、丸七、そこにある建て札にて、兩方より打つてかゝる。半兵衞、搔い潜つて建て札を捥ぎ取り、立廻りに、皆々を打ち据ゑる。これにて暮太郎先に、伴藏、喜太八、晴九郎、花道へ逃げて入る。半兵衞、追ひかけようとするを、雁助引戻し、丸七、長四郎かゝる。これをも酷く打ち据ゑるゆゑ、この三人も這々に逃げて下座へ入る。半兵衞、追ひかけようとして立ちどまり、思ひ入れあつて

半兵　ハ、、、、、八景組と大勢かゝつて、口程にもない弱い奴等。ひがひすな半兵衞が、多勢に無勢を凌いだも師匠の蔭、一刀流。小稻も待ちかね、母人のお案じ。一時も早う内へ。さうぢや。

ト塵打ち拂ひ、行かうとする。これにて向うバタ／＼にて、鉦八、幕明きの形にて、走り出て來て、半兵衞に行き當り、愕りして

鉦八　松兵衞どのか。

ト顔を見合せ、半兵衞、キツと見て

半兵　ヤア、うぬは江戸の深川で

鉦八　難儀に遭つた小柄の主。

半兵　すりや、その時の

鉦八　こりや堪らぬ。

ト逃げようとするを引留め

半兵　ハテ、よい所で

ト鉦八が胸ぐらを取つて、グツと引据ゑ、立ち身にて

逢つたなア。

トきつと睨んで、突き据ゑる。この途端、木のキザミよろしく、

ひやうし幕

## 二番目大切

半兵衞隱れ家の場
柴屋町踊りの場

役名――半兵衞女房、小稻。柴屋町練り子、お仙。八景組、比良の暮太郎　柴屋町おじやれ、お此。三井寺の所化。八景組、瀬田の長四郎。貸本屋、

儀八。八景組、栗津の晴九郎。同、矢橋の喜太八。柴屋町練り子、お七、同、お國、同、お美代、八景組、三井の伴藏。柴屋町練り子、お詠。書嶌、東小僧、鉦八。八景組、片田雁助。柴屋町練り子、お米。同、お濤。八景組、唐崎松兵衞。半兵衞母、お幸。藤島主計。柴賣り、半兵衞稻野谷半十郎。

造り物　二重舞臺。見附け押入れ。納戸口。上の方に佛檀。いつもの所に門口。臆病口の方に戒名の書いてある高燈籠を吊り、すべて貧家世話場の體。幕の内より小稻、手習ひ机に掛かり、寫し物をしてゐる。側に、貸本屋儀八、風呂敷包みを背負ひ、右の寫し物を急いて居る。この見得、在郷唄にて幕明く。

儀八　コレ〳〵、小稻どの、こなさんに頼んだ「伊勢物語」の大意、早う寫して貰ひたい。また段々、敵討ち物を、皆こなさんに頼まにやなりませぬ。

小稻　サア、わたしも、この山科へ關東から來て、女夫連れの柴商ひ、仕附けぬ事ゆゑ思ふ程はかも行かず、どうせう斯うせうと思うて居たところに、お前の深切、遊んで居やうより、本を寫して見いと、寄越して下さんした「伊勢物語」、それで寫しかけては居れど、書入れぢやの、頭書きぢやのと、よう細かしう書いてあるによつて、どうでちつとは暇が入らうわいな。

儀八　イヤモウ、近年は版行本より寫し物が流行るゆゑ、それで何處の本屋でも、我れ勝ちに拵らへる。ちつと見たところが、こなさん達は柴商人に似合はぬ、第一能書、手が好いによつて、わしが頼んだ「伊勢物語」、どうぞならう事なら、御亭主の半兵衞どのにも「漢楚軍談」や、「前太平記」を、假名本に寫してもらひたい。何か、不自由にごんせう。マア、これをそこへ。

ト金壹分出して渡す。小稻、取つて

小稻　まだお頼みの本も出來ませぬうちに、こりや金子。これを取りましては

儀八　ハテ、段々後を頼めば、大事ない。また外に用があるなら、何時なりと遠慮なしに。

小稻　お志し、忝なう存じまする。

儀八　これから得意廻りをせにやならぬ。

ト立ちあがり

ハテ、器量といひ、悪う育たぬ小稻どの、柴賣りにして

置くは、惜しいものぢや。ア、イヤ、お暇申さう」

小稻　ようござんしたえ。

ト在郷唄にて儀八、しか〴〵あつて、向うへ入る　小稻、右の金子を戴き、本を寫しにかゝる所へ、向うより三井寺の所化、黑衣、同宿の形にて出て、ズッと內へ入る。

所化　これは小稻どの、內に居さつしやるか。この間、折角愚僧が賴んだ事を、こなた、よう酷い目に會はせたの。

小稻　お前は三井寺の御出家」この間のお賴みは、隨分如才なう、殊勝に書いて上げました。

所化　イヤ、殊勝らしいも凄まじい。殊勝に書いたどころか、お師匠へ打ちつけに云うて、いつそ亂ちきでござるわいの。

ト此うち、又向うより、お此、走り出て

この　コレ〳〵、小稻さん　お前は〳〵。折角わしが賴んだ大事の文に、ようあんな事を書いて遣つて下さんしたなア。それでわしや、濟まぬわいな〳〵。

小稻　コレ〳〵、二人ながら、何を云はしやんすぞ。わたしも、この間柴商ひをやめて、寫し物をしてゐるゆゑ、お前方に賴まれて、狀を書いて上げたが、どうして。

この　サイナア。わたしもこの大津の八丁で、おじやれの浮き勤め。その中での樂しみ、深う云ひ交した殿御が五人ござんすが、その五人を相替りに廻つて、其方此方の情の固まりが、コレ、此やうにお腹に云ひ分」三月、四月は袖にも隱す、最早七月、閏ふ七月も過ぎて、この間、風呂の仕舞ひ場に、親方のかみさんに見附けられ、コリヤお此、さう父なし子を孕んでは、此方の內には使はれぬ、給金立てゝ早うせうと、目玉を剝いてのお腹立ち。それで仕やうもやうも、五人の內、いつち年嵩な、駕籠舁きの太郎助どのへ云うてやる文を、お前に賴んで書いてもらうたのに、此やうな、とつけもない無心を云うて遣らしやんしたなア。

ト泣く。

所化　イヤ、コレ、小稻どの、愚僧が在所の親類へ、據ろない無心云うて遣つたのに、心中して死ぬるといふ文句。それで一家……一文にもならず、揚句の果には、去年のむかはりはしたいに懲りもせず、不埒坊主とさんざんのお叱り。

小稻　待ちなさんせや。二人の狀を見せなんせ」

ト出して渡す。小稻、狀を開き見て

オ、、をかしやのう。あんまりお前方が忙しう云ひなさんしたゆゑ、こりやわたしが上書きを、取違へて書いたのぢや。

この　エ、。そんなら、それが、わたしが文でござんすかえ。

小稻　封じ違へて、そこで兩方、狀が間違うたのぢやわいなア。

所化　ハテ、粗忽な小稻どの。

小稻　サア、大事ござんせぬ。今わたしがよいやうに。

ト云ひ〳〵、右の狀を封じ直し、上書きをして

ソレ、坊さんは今の無心の狀。こちらのお此どのは今の心中の濡れ文。

ト取りかへ渡し

こなさんの賴みゆゑ、斯う書いては遣るものゝ、心中するとは無分別であらうぞえ。

この　小稻さん、愚かな事をいうて下さんすな。わたしも命が惜しいもの。なんの死なうぞ。斯う書いて遣るのは、男を強請るのぢやわいなア。

所化　ハテ、玉子の四角と、おじやれの誠は無いものな。時に愚僧は、押返してこの狀を、早う在所へ持たして遣らう。

小稻　そんなら、お二人ともに。

この　サア、坊さん。お前と一緒に。

ト所化の手を取るを、振り切つて

所化　イヤ、強請りに會うては恐ろしい。愚僧は先へ。

ト先へ向うへ走り入る。

この　エ、、坊主に物は聞かされぬ。こちや、いや〳〵。

トこなしあつて、追ひかけ、走り入る。小稻、こなしあつて、

小稻　テモ、マア、をかしい人達ではあるぞ。

ト跡を見送り

ア、、思へば、人の身の上ほど、行く末知れぬものはない。望みある身のそこ爰と、知らぬ上方三界へ、姑御もろとも、夫婦が身過ぎ、柴商ひも仕つけぬ業。僅かな價の寫し物、狀文までも賴まれて、繋ぎかねたる筆の命毛。まだその上に、姑御のお目の病、搗てゝ加へて、此方のマア、何事も。

ト机にかゝり本を見て

「在原なりける男の、いまだいと若くありけるを」

ト合ひ方になり、小稻、本を寫す。向うより、お幸、

世話母の拵らへ、目の惡い體にて、杖を突き、半兵衞
手を引き、介抱しい〳〵、兩人出て、花道にて

半兵　モシ〳〵、母者人。其方は石高な。もちつと此方へ。

さち　オイ〳〵。半兵衞、嬉しうござる。假盲目のわしが身の上。嫁女の小稻もろともに、それは〳〵、日頃の孝行。昔に變つて不自由な暮しのその中で、目醫者の、藥のと、二人が心遣ひ、わしやそれが却つて氣の毒でならぬわいの。

半兵　ハテ、勿體もない。孝行するは悴の役。お前のお目も當分の事と思ひの外、内障とやら。どうぞ元の通りに御本腹なさるやうにと、朝夕夫婦がその事ばかりを。

さち　サア、其やうに苦勞にしてたもるが、わしや心の内では

半兵　これはしたり。爰は門中。もう歸りました。ちやつと、マア、内へお入りなされませ。

ト内へ連れて入る。

女房ども今戻つた。

小稻　オヽ、こちの人。母さん。さぞお草臥れでござりませう。サア〳〵。

ト手を取つて上へ連れて行く。お幸、こなしあつて

さち　嫁女。半兵衞があんまり勸めやるによつて、醫者どのへ行たが、さのみ草臥れはせぬ。案じやるな案じやるな。

ト云ひ〳〵、下に居る。此うち小稻、莨盆取つて來て

小稻　サア、お莨。

ト吸ひ付けて出す。

さち　これは〳〵。

ト煙管を戴きのむ。小稻、半兵衞が側へ寄り

小稻　半兵衞どの。して、お醫者さんは、なんと云うてゞあつたえ。

半兵　サア、どうでも催ふした病、内障ぢやによつて、急には。イヤ、急にようして見えるやうに療治する、氣遣ひすなとて、コレ。

トちよつと囁く。

小稻　ムウ、そんなら、アノ、眞珠を澤山に。

半兵　アヽ、コレ。心氣の疲れで逆上せ、惡うなつたお目ぢやといの。

トお幸に聞えぬやうにこなし。

小稻　エヽ。ほんにあのお醫者さんは、功者なゆゑ、ツイようおなりなさるであらう。母さん、必らず何もお案じ

なされまするなえ。
さち　眞珠といふは目の藥で、價も高直な藥種ぢやげな。それを澤山に。コレ、わしや目が見えいでも大事ない、必らずそんなもの用ひてたもるなや。
半兵　何を云はつしやりますやら。眞珠はたかゞ鮑の玉。隨分澤山な、廉いものでござりまする。
小稻　イエ〳〵、それも澤山あれど、皆似せもの。實の眞珠といふは。
半兵　ハテ、コリヤ、似せも實もない。ありや皆伊勢から出て、ツイ、ソレ、輕い藥種ぢやわいなう。
小稻　ほんに、それ〳〵。江戸とは違うて、この上方には、三勝ぢやの、お染、久松ぢやのというて、澤山ござんすわいなア。
半兵　何を云ふやら。そりや眞珠ぢやない、心中ぢや。
小稻　ホヽヽヽ。ほんに、わたしとした事が、眞珠と心中と取違へた。それはさうと、モシ、母さん、お飯をおあがりなされませぬかえ。
さち　イヤ〳〵、まだ欲しうはござらぬ。半兵衞、もう何時ぢやの。
半兵　もう八ツ時分にもござりませう。

さち　嫁女。日が暮れたら、高燈籠へ灯を上げて下されや。
小稻　ハイ〳〵、お氣遣ひなされますな。高燈籠と佛壇へは、お御燈火を缺かす事ぢやござりませぬわいなア。
さち　オヽ、そりや忝ない。こなたの爲にも、外ならぬ今年の新客、新精靈。十六日に送りたれど、せめてはこの月中とぼす。あの高燈籠に記してある、二つの戒名。閑月一意居士といふは、わしが連合ひ、半兵衞が父御、稻野谷半左衞門どの。
小稻　常譽妙圓大姉とは、わたしが母さんの戒名。
さち　濱田の後家、磯町どの。
半兵　勿體ない。小稻やわしが、命に代つての御最期。
さち　わしやその時、善光寺樣へ參詣して留守のうち、二人が身の上、家の騷動。
小稻　母さんの御最期も知らず
半兵　親人の御切腹と
さち　後にて聞いて、悔り悲しさ。
半兵　不孝の罪。
小稻　果敢ないお別れ。
ト燈籠を見て、思ひ入れあつて
以前に變るあの高燈籠の

ト指さしする。
半兵　閑月一窓居士。
小稻　當譽妙圓大姉。
兩人　お免しなされて下さりませ。
ト三人、心意氣あつて
三人　南無阿彌陀佛々々々々々々。
ト高燈籠へ手を合せ拜む。向うより主計、羽織、野袴にて、家來三人連れ、出で來て「案內な」とこなし。
家來心得、門口へ來て
家來　頼みませう〳〵。
ト三人、こなしあつて
小稻　アレ、どなたやら。こちの人。
半兵　女房、母者人をつれて、マア、奥へ。
小稻　アイ〳〵。サア、母さん。
ト合ひ方になり、小稻、お幸の手を引き、奥へ入る。
半兵衞、こなしあつて
半兵　御案內とは、どなたでござりまするな。
主計　イヤ、この山科に柴商人、半兵衞とはこの家かな。
半兵　成る程、さうして、あなた樣はな。
主計　然らば。

ト扇にて家來に「行け」と向うを敎へる。家來皆々引返し、向うへ入る。半兵衞、見て
半兵　これは、思ひ掛けない。あなたは御家門、藤島主計さま。
主計　半十郞。一別以來、先づは無事で、重疊。
半兵　まづ〳〵、あれへ。
トずつと上座へすゝめ
憚りながら、主計さまには、何用の儀にて當所へお上り。
主計　稻野谷半十郞、其方に繩ぶつて、國元へ連れ歸らん其ために、はる〴〵上京。
半兵　なんと仰せられまするな。
主計　尤も、不義の科は親々が、最期を遂げて償ひしかど、先達て使者の役目、足利家の直勘たる、久利勘解由を、其方が手に掛けし科、遁がれはあるまい。
半兵　いかにも、この身の科の申し譯、國を立退き、今この山科の侘び住居。大切なお家の重寶、紛失の松蔭の硯、詮議の爲、この儀は先達て、御文通にて申し上げし通り、右の硯詮議仕出さねば、桃の井の家は沒落。
主計　して、その硯は手に入つたか。
半兵　束の間忘れぬ硯の詮議、少しも油斷は致しませねど、

何をいうても。サア、ちつと詮議の綱に、取付いた事もござりますれど、たとへこの身はひしびしほとなるとても、お家の大事、この半十郎が、きつと貰ふ。

主計　イヤ〳〵。コリヤ、半十郎。今日を何日と思ふぞ。

半兵　ハテ、今日は、七月二十四日ではござりませぬか。

主計　寶日延べの日限は、當月限り。

半兵　ムウ。來月までは六日のゆとり。すりや、今宵中に寶の詮議仕出さたねば、お家の申し譯立たぬ、六日の道中。

主計　さやによつて、其方に繩打つて、直ぐに都へ引渡し、寶詮議の追ひ日延べ、お願ひ申さんと、主計が所存なれど、願はくば今宵中に

半兵　お氣遣ひなされまするな。寶詮議仕出しまして、お目に掛けませう。

主計　ヤ、なんと。

半兵　晝夜の早打ち、六日の日取りに確かに江戸着。

主計　すりや、今宵中に。

半兵　松蔭の硯、きつと詮議仕出だし、差上げませう間、主計さまには長途のお疲れ、見苦しけれど奥の間にて、暫らくお休息をお願ひ申し上げまする。

主計　忠義の魂ひ、見屆け置きし、半十郎が心遣ひ。必らず、百日に刈つた萱、一日に滅びぬやう。

半兵　日延べの日數は五十日。

主計　それも當月

半兵　今宵のうちに。

主計　半十郎。

半兵　主計さま。

主計　暫らくこの家で返事を待たう。

ト唄になり、主計、こなしあつて、奥へ入る。あと合ひ方になり、半兵衞殘り、さまざま思案してゐる所へ奥より小稻、鯛の燒き物の附いた膳を持つて出て

小稻　申し、こちの人、いま尋ねてお出でなされたは、ありや確かに

半兵　御家門、主計さま。寶詮議の御催促。

小稻　サア、さう聞いたによつて、わたしも急いで拵らへたこの膳を

半兵　あなたにか。

小稻　イ、エ、彼の大事のお客人に。

半兵　ムウ、こりやよう氣が附いた。ソレ、あたりに心を附けやれ。

小稻　アイ〳〵。

ト兩人こなしあつて、小稻、膳を下に置き、門の戸を締める。此うち半兵衞、疊を上げ

半兵　さぞ窮屈であらう。サア〳〵、爰へ出て、ゆるりと食事を。

ト炭櫃の穴より鉦八

鉦八　ヤレ〳〵、窮屈や〳〵。

ト伸びをしい〳〵出て

これまで度々牢へ入つたが、中には友達が大勢ゐるゆゑ、さのみ退屈にも思はなんだ、この下家住居、流石のおれも困つたものぢやて。

トいひ〳〵、下に座る。小稻、こなしあつて

小稻　サア、さう思うてわたしが拵らへた此お膳、ちやつと食べさしやんせいなア。

ト右の腰を据ゑる。半兵衞も側へ寄つて

半兵　鉦八。加減の損はぬうちに、箸を取つた〳〵。女房ども、そこへ隨分勤めて、何は無くとも打寛ろいで、ゆるりつと。

ト半十郎、小稻、しか〴〵あり、鉦八、菜を一々見て

鉦八　ムウ。見りやア、はや腐つて死んだやうな小鯛の燒き物。平は何ぢや。冬瓜に五位鷺ぢやさうなが。

ト嗅いで見て

ムウ。イヤモ、腐つた鳥といふものは、いけるものではない。こんな物を食はして、こりや又云うてくれいと、女夫して頼むのか。

小稻　ほんに、江戸と違うて、この山科は在郷なれば、分けて肴が不自由なによつて、定めてお前のお氣には入るまいけれど

半兵　夫婦の者の給仕が馳走。

小稻　サア、鉦八どの、これを食べて、こちの人がこの間からの頼み、寶の在所を、どうぞ云うて上げて下さんせいなア。

鉦八　エヽ、アタやかましい。硯とやらは、おらア知らぬと云ふのに。しつこい和郎達ぢや。

半兵　イヤ、滅多に知らぬとは云はさぬ。鉦八、江戸では巾着切りを渡世にして居た其方。いつぞや深川の八幡で、おれが携げてゐる印籠を切りかけた時に、この半十郎が志しで、遣はした定紋の小柄が、紛失の松蔭の硯の箱に、入れてあつたが詮議の種。定めて外に頼み手もあらう。それも大方推量したれど、肝心の寶はこの上方へ、

勘解由が手筋で渡したと、聞いて取つた我れ〳〵夫婦。いろ〳〵詮議に心を盡す其うちに、この間、石場で、フト出會うた其方、これ幸ひと内へ連れ歸り、人目を忍ばす下家の住居。密かに隱まひ、如才なう、夫婦がもてなすも、彼の紛失の硯の在所、知らして欲しさ。

小稻　コレ、銈八どの。どこぞこの誰れが持つてゐると、ツイ云うて下さんせ。又、お前の身の上も、こちの人がなア。

半兵　ハテ、なにさ、銈八ぢやというて、夫婦の者が、この間からの心遣ひ、馳走たつぱいするも、とつくりと承知してゐれば、なんの隱さう、知らしてくれるであらうの、銈八。

ト銈八の方を見る。銈八は脇見して居る。

エ、、コレ、女房ども。汁が冷めたであらう。ちやつと盛り替へて。

小稻　アイ〳〵。ドレ、わたしが盛り替へて。

ト汁椀を取らうとするを

銈八　コレ〳〵、お内儀、おりやもう飯は喰はぬ。否ぢや。

小稻　ハテ、マア、さう云はずとも、せめて一膳でも。

銈八　否だ。こんな腐つた物は食ひたうないぞ。

ト足で膳を蹴倒す。

小稻　エ、、こりや慮外な。母さんと同じやうに、こちの人が大事に掛けさしやんすも、どうぞ寶の在所を聞かう爲。それにマア、勿體ない、足に掛けて。

半兵　ハテサテ、女房ども。銈八が飯が否なら、酒にしや。おれも合ひせう。コレ、酒はどうぢや〳〵。

銈八　上方の酒は甘口で、おれが口には合はぬわい。

小稻　エ、。アレ又、慮外な。現在盜賊の

半兵　サア、その盜賊、泥坊も人の子なれば、よもや義理といふ事は知らぬ事もあるまい。

小稻　イ、エ、その心があれば

銈八　巾着切り、盜賊はせぬこの銈八。半十郎、小稻。わいらも當推な。寶の在所知らぬといふに、あまりよくも暮らさぬこの内へ、連れて歸つて、祿でもない物を食はして、馳走々々と仰山さうに、寶の在所、云うてくれいと騙しすかすは、惡皆子に灸をするやうに、アタかしましい。川流れの土左衛門ぢやアあるめえし、食ひにかかつて寶の在所を云ふやうな、おれぢやと思ふのか。ハテ、あざとい女夫の者ではあるぞ。

ト莨盆引寄せ、長煙管を取つて莨をのまうとする。半

兵衛こなしあつて

半兵　アレ、女房ども、莨盆に火がないさうな。

鉦八　イヤ、火はあるが、莨がないわえ。

小稻　エヽ、ソレ。

ト袂から莨入れを出して、抛り附ける。鉦八、それを取つて、長煙管につぎ、外らさぬ顔にて莨をのむ、半兵衛も立寄り

半兵　イヤ、鉦八。この半兵衛が心あつて、木折に詮議せぬ寶の在所。今宵中に取返さねば、日延への切れで、桃の井家は滅亡。盗賊の其方でも、爰を聞分けて、寶の在所云うてくれ。サア、紛失の松蔭の硯は、どこにある、有やうに云うてくれ。

鉦八　ハテ、知らぬといふのが有やう。それより外、何にも云ふ事はないわえ。

小稻　エヽ、こちの人が折入つての頼み。情の硬い盗賊め。いつそ火水の拷問とやら、きつい目に合はせて、云はせるがようござんす。

鉦八　そりやおれが望むところ。なんぼ旨い物食つても、斯う窮屈では氣が詰まつて堪へられぬ。いつそ責めて責めて、責め殺してもらはう。おれもこの世に飽き果てた。わざつと未來へ行つて見たい。

半兵　殺しては物が無いぢやによつて

小稻　コレ。もうよい加減に云うたがよいわいなア。

ト奥にて

さち　嫁女々々。伜はどこに居る。二人ともに、ちよつと來て下され。

ト忙しう呼ぶ。小稻、こなしあつて

小稻　アイ／＼、それへ參じまする。こちの人、アレ、母さんがお呼びなさるゝわいな。

半兵　サア／＼、奥へ行かうが、鉦八。今宵の手詰め。もう下家住居はさゝぬ。こちの内を放し飼ひ。とつくり思案して、今日中に寶の在所、云うてくれ。頼んだぞよ。

小稻　滅相な、こちの人。あの儘に置いては、ツイ逃げ出さうぞえ。

半兵　イヤ、表にはしつかりと錠前。身動きならぬ、生洲の魚同様、氣遣ひない。

小稻　それでも。

半兵　ハテ、近江の名物、源五郎鮒で一つ飲まさう。鉦八、待つて居い。女房ども、おぢや。

ト唄になり、半兵衛、小稻奥へ入る。跡にて鉦八、

こなしあつて

鉦八　あの半十郎も強い奴ぢや。おれをこの家へ取込んで、松陰の硯を。ても、怖ろしい。よう松兵衛どのに出會うて、渡してゐて仕合せ。イヤ〳〵。なんぼう硯は渡しても、肝心のコレ

ト懐中より書附けを出し

こりや彌源次さまへ渡す硯の受取り。これを見附けられては亂痴氣騒ぎ。持つてゐるは危いもの。どこへ隠したものぢや。

トいろ〳〵思ひ入れある。フツと高燈籠を見て頷き

どうで逃げらにやならぬ身の上。マア、それまでには滅多に氣の附かぬ高燈籠へ、

トこなしあつて、高燈籠の紐をほどき、燈籠をおろし、その内へ受取りを隠し、元の通り燈籠を引上げ、此方へ來て下に居り、燈籠を見上げ

よし〳〵。なんぼう目の鞘の外れた半十郎でも、よもやあいつには氣が附くまい。

トこなしある。此うち始終合ひ方にて、向うより雁助、作藏、先に立ち、後より松兵衛出て

作藏　雁助、お頭を尻に、この間の仕返し。なんでも半兵衛めを、グツと締め上げてこまさう。

雁助　イヤ、そればかりぢやない、頭が云ひ條立てゝ、小稲が事を。

作藏　オヽ、さうぢや、貰はにやならぬ。

松兵　コリヤ〳〵、二人とも、さうザワ〳〵云はずと、おれ次第にして、サア、行け〳〵。

ト三人本舞臺へ來て、門口へかゝり

半兵衛、内に居るか。八景組の頭、唐崎の松兵衛が、用があつて逢ひに來たぞ。

雁助　半兵衛、内に居るか。爰、明けぬか〳〵。

トやかましく戸を叩く。鉦八これを聞いて

鉦八　嬉しや、松兵衛どのか。おれが逢ひたうてならなんだ。

ト門口へ走り來て、戸を明けようとして、錠がおりてあるゆゑ、内より戸を叩く。

コレ〳〵、松兵衛どの。ちよつと明けてもらひませう。鉦八ぢや〳〵。

松兵　イヤ、鉦八ぢやない、半兵衛に逢はう〳〵。

ト内外より戸を叩くうち、奥より半兵衛出て

半兵　鉦八、さては。

ト引廻し取つて投げ、直ぐに荒縄にて縛る。

鉦八　ヤア、こりやどうするのぢや。

ト云ふを、猿轡を嵌め

半兵　詮議はとつくり。マア、うぬは。

ト障子屋體へ打込み、障子を閉てる。外より

兩人　どうぢや、半兵衛、明けぬか／＼。

トやかましく云ふ。半兵衛、こなしあつて、表の錠を外し、戸を明けて

半兵　これは、八景組の衆達。なんと思うて。

伴雁　半兵衛。この間の仕返しに來たぞ。

半兵　ヤ。

松兵　イヤ、この間、石場の濱で、この松兵衛が出合はさぬを幸ひ、コリヤ、半兵衛、仲間の者を手ひどい目に合はせ居つたな。

半兵　ムウ。すりや、その仕返しに。

松兵　イヤ、そればかりぢやない。かねて惚れてゐる小稻が身の上、貰ひかゝつたこの松兵衛、一旦云ひ出しては後へ引かぬ。否か應か、返事次第で男の意氣地。

雁助　半兵衛、思案極めてとつくりと

三人　返事はどうぢや。

半兵　ハテ、かしましい。奥には母人もござる。殊にお客もある。マヽ、靜かに。

伴藏　イヤ、靜かに云はぬ。大きな聲は生れ附き。われが返事次第で三井の伴藏が、お頭を尻に爰へ來た。

雁助　半兵衛、この間の返報に、わざ／＼尋ねて來たこの山科、せう事がないと思うて、お頭が惚れてゐらるゝ小稻へ熨斗つけて、ナウ、松兵衛どの。

松兵　くれるか、くれぬか、唐崎の夜の雨より、節くれ立つたる濡れ事ぢや。命が惜しくば、半兵衛

三人　小稻を貰はう。

ト此うち半兵衛、がツとも云はず、構はぬこなし。奥より、小稻、ツカ／＼と出て、半兵衛に取附き

小稻　コレ、この人、樣子は殘らず聞きました。ほんに、これまで商ひに出る度毎に、アタ嫌らしい、附けつ廻しつ、冗談する八景組。それに今又、この内へ、尋ねてまで無法の段々。現在主あるわたしを

松兵　惚れる事はならぬか。小稻、なぜ其やうに美しう、コリヤ、生れ附いたぞいやい。

ト云ひ／＼抱くな

小稻　エヽ、コレ、アタ穢らはしい。もうこの上は。

ト松兵衛が顔を殴る。松兵衛「ムウ」と顔を押へる。
小稲、松兵衛が足を取つて投げる。

雁作　ヤア、お頭を。

ト兩人かゝるを見事に投げる。松兵衛、起きあがるを
小稲、捕り方にて胸を抑へ

小稲　これが父さんの一刀流。

ト寄らうとするを、半兵衛、ちやつと小稲を引き退け

半兵　コレ、女房ども、必らずともに。

小稲　イヽエ、常には出さねど、あんまりと思うて、こんな時に。

半兵　ハテ、大事の流儀、人に知られては。サア、奥へ知れては、主計さま、また母者人のお案じ。マア／＼、チツとして居い。

トこなしあり。小稲もろとも下に居る。松兵衛、起きあがり

松兵　ハテ、見事。雁助。伴藏。見たか。

雁伴　何の苦もなく二人をコロリ。

松兵　あれが聞き傳へてゐる一刀流とやら。イヤ／＼、けうといものぢや。恐れ入つた手のうち。アヽ、感心々々。その感心は股を潜る。この松兵衛は、人を潜つて早う訴人。

ト行かうとするを、半兵衛、引廻して

半兵　コリヤ、どこへ。

松兵　代官所へ。

半兵　ヤ。

松兵　配符の廻つたお尋ね者、稲野谷半十郎。女房小稲は、濱田逸當と言ふ劍術の師匠の娘。いま小稲が手のうち。一刀流と云ふが慥かな證據。半兵衛といふわれも、稲野谷半十郎に極まつた。コリヤ。

ト香包みを出し

この香包み、覺えがあらう。

半兵　ヤア、それは。

トちよつと寄るを、松兵衛、持ち替へ

松兵　「よりてこそ、それかとも見め、たそがれに、ほの／＼見ゆる花の夕顔。半十郎さまへ、小稲より。」

小稲　イエ。この香包みは、わたしがお前に。

半兵　コリヤ／＼、女房。こちに覺えのない香包み。何にも云はずと默つてゐい。

ト兩人こなし。

松兵　コレ、この香包みが、久利勘解由どのを殺した、そ

の場にあつたゆゑ、半十郎小稻は、人殺しの科人。お尋ね者ぢやによつて訴人を。

ト行かうとするを又、立廻つて

半兵　イヤ、此方の夫婦に覺えはない。世に落ちぶれた柴商人の半兵衞。

小稻　ほんに、小稻といふ名は同じ事でも、覺えのないわたしが身の上。

松兵　ムウ。すりや、女夫ながら、人殺しの覺えはないか。

半兵　なんのあらう。只の商人。

小稻　半兵衞が女房小稻。

松兵　その商人の女房なら、おれが貰ふ。

小稻　エヽ。

松兵　ハテ、男の意地づく、相對づくで、貰ひ引きは町人の忝なさ。ぞつこん惚れてゐるこの松兵衞、わりない無心ぢやが、半兵衞、小稻をおれにくれぬか。

半兵　イヤ、それは。

小稻　たとへこちの人が得心さしやんしても、わたしが女の操が立ちませぬ。

松兵　さう折り目高に云ふは、矢ツ張り人殺しの科人か。

半兵　イヤ、稻野谷半十郎ではない。

雁助　柴賣りの半兵衞なら、おいらが石場の仕返し。

伴藏　それが否なら小稻を頭に。

松兵　但し、人殺しの訴人をせうか。

雁助　仕返しせうか。

伴藏　小稻を寄越すか。

三人　サア〳〵〳〵。

松兵　サア、夫婦の奴等。

三人　返事はどうぢや。

ト奧にて

さち　悴、半兵衞。必らず返事はならぬぞ。

ト脇差を持ち、探り〳〵出る。

半兵　ヤア、母者人。

小稻　そんなら、あなたは最前からの

さち　樣子はあらまし聞きました。どういふ譯か、詳しうは知らねども、マア、關東では聞かぬ事。たとへ悴半兵衞が得心しても、この母がならぬ。オヽ、なりませぬぞ。なんぼう目界は見えねども、以前は武士の妻。コレ〳〵、嫁女。何も案じる事はない。マヽ、落ちついて居やしやれさ。

小稻　申し、こちの人、アレ、母さんがあのやうに

半兵　ハテ、隠すよりは顯はるゝぢやなア。
松兵　半兵衛、婆アが出ても、此方に頓着はせぬ。最前から云ふ通り、小稻が身の上。今の返事を
雁伴　サア、どうするのぢや。
さち　コリヤ、悴、半兵衛。其方も生れからの柴商人ではないぞよ。元は歴きとした武士、侍ひではないか。それに、所の悪黨どもに無體を云はれ、おし默つてゐては、コレ、アノ、高燈籠の手前、この母にも立つまい／＼。コリヤ、以前を思うて慮外があらば、切つて捨てい。なんぼう今、落ちぶれても、町人風情にあやまつて、嫁女を人にオメ／＼と遣らうか。慮外の段々、母はどうも堪へられぬ。サア／＼／＼。手討ちにせい。ソレ。
ト脇差を抛つて遣る。
半兵衛、未練な心を出すと、母がキッと思案があるぞ。
ト半兵衛、こなしあつて、脇差を取上げ
半兵　おいとしや。何にも御存じなく
ト思ひ入れ。小稻も、こなしあつて
小稻　こちの人。お前は大切な實の、イヤ、大切な阿母樣のある身、何事もナ、サア、掛替へのない、コリヤ、わたしがいつそ。
ト半兵衛が側にある脇差を取上げ、拔く。竹身ゆゑ悄りして
ヤア、これは。
ト半兵衛、ちやつと引ッたくり
半兵　コリヤ。
トちよんと鞘に納める。合ひ方になり
小稻　ムウ。さては。
トこなし。此うち皆々思ひ入れ。半兵衛、尻ひッからげ、右の脇差を差し、前へ出て差し、居合ひ腰になり、わざとお幸に聞えるやうに
半兵　この間、石場で打ち据ゑた八景組の奴等。その仕返しに來た。ヤイ、頭の松兵衛。その出入りは外にして、女房小稻をくれないなどゝ、さま／＼の無法。この半兵衛、どうも堪へられぬ。たとへ母人の仰せがなくとも、うぬら一々、其まゝに歸さうか。わいらも男ぢやな。石場の仕返しに、おれを存分に、イヤサ、おれが存分にする程に、三人ともさう思へ。
ト顔見る。爰へ來て「おれを存分にせい」トこなし。
松兵衛始め皆々、氣味の惡きこなし。
松兵　何をしやらくさい、以前は武士といや、猶の事。コ

レ。

ト又香包みを出す。

斯ういふ物を持つてゐれば、小稲をくれぬと、これを持つて、何時でも。

半兵　ハテ、その代りに存分に、イヤ、存分にするのぢや。

作藏　頭。彼奴の手のうちは、石場の濱でとつくりと覺えてゐる。殊に仲間の者も五人の不足。それに脇差持つてゐれば、ナア、雁助。

雁助　さうぢや。腕づくなら格別。眞劍では流石のイキもどうやら。

ト皆尻込みする。

半兵　ハテ、この一腰は。

小稲　どうして、今の

半兵　母者人の御眼病に、イヤサ、親の譲りの業物、手の内にきつと覺えが、サア、覺えがあらう。女房ども。

小稲　ほんに、さうでござんす。國を立退き、爰へ來て、何にも知らぬわたしら。殊に、母さんの御眼病。その上に、ソレ、彼の奴を、イヤサ、寶は身の差合せと。

ト彼の奴とは錐八をさして云ふ也。

半兵　イヤ、身は相州正宗、

雁助　サア、それぢやによつて、

作藏　滅多に側へは寄られぬ。

半兵　ハテ。

ト下げ緒にて柄をグル／＼と卷く。

母者人の手前、うぬらを存分に、サア、存分に。

ト「おれをどうなとせい」と仕方する。

松兵　そりや、半兵衛。いよ／＼、おいらを

半兵　エヽ。悪い呑み込みな。イヤ、皆の奴等、小稲をやらぬ腹癒せに、手出しはせぬ。イヤ、手出しはさゝぬぞ。

トいろ／＼呑み込ます。松兵衛、やうやく合點して、お幸を指し、これへ知られぬやうに存分になるかと、仕方する。半兵衛、頷く。

松兵　ムウ、呑み込んだ。そんなら、おいらが存分に、イヤサ、存分にするなら、なんと二人の者、腹癒せに、イヤサ、存分に。ナア。

雁作　面白い。存分にならうわい。

松兵　半兵衛、マヽ、兩手を組んで、ヂッとして居い。

ト半兵衛、兩手を組んで、手向ひせぬと仕方。松兵衛ツカ／＼と出て、半兵衛が襟髪を摑んで、引附ける。

小稲　マア、こちの人を。
　ト寄るを、半兵衞、引寄せ
半兵　コリヤ／＼、女房小稲。いま此奴等をおれが存分にナ、サア、存分にするも實詮議、イヤサ、高が町人、思ふ儘に。
松兵　ヤア。
　トちよつと離す。
半兵　ハテ　コレ、手向ひはあるまいな。
　トこなし。小稲も「エヽ」と思ひ入れ　松兵衞、怖々
松兵　いよ／＼手向ひせぬか。
　トまた引附ける。
雁伴　そんなら、おいらも、ドリヤ。
　ト皆々蹴る。
小稲　コレ、それでは。
　ト立寄るを、半兵衞、押へる、三人、引附ける。半兵衞、引附けられながら
半兵　滅多に手向ひしてよいものかい。ヤイ／＼。
　ト松兵衞・半兵衞を振り廻す。さん／＼に蹴る。お幸、こなしあつて
さち　オ、　半兵衞。出かす／＼。憎い奴等ぢや程に、もつときつい目に合はしやれ／＼。ナウ、嫁女。
小稲　エヽ、母さんの何にも知らずに
半兵　コリヤ／＼、女房……小稲をよくくれいと吐かしたなア。
　ト松兵衞、半兵衞を摺りつけ
松兵　ハテ、こりや大分面白い仕組みぢやわい。
　ト半兵衞、起きて
半兵　うぬら、云ひ分はあるまいがな。
松兵　云ひ分はなけれど、斯うして見よう。
　ト半兵衞を蹴る。
小稲　こりやあんまりぢや。
　トきつとなる。半兵衞「ハテ」と抱きとめて居る。
松兵　皆の者。ナア。
雁助　ドレ、雁助もちよつと。
伴藏　この伴藏も。
　ト皆々蹴る。半兵衞、始終、ヂツとしてゐる。
半兵　以前は武士のこの半兵衞、相手は嫌はぬ、幾人なりと。
三人　それなら、カウ／＼。
　ト三人寄つて、いろ／＼蹴る。半兵衞、小稲を抱きし

めてみて
半兵　モシ、母者人、大方苛なみました。
さち　オヽ、嬉しい〱。
ト喜ぶこなし。
三人　エヽ、張合ひのない奴ぢや。
ト三人一所に蹴る。
半兵　三人の奴等。なんと腰骨にこたへたか。
松兵　イヤ、まだこたへぬ。とても事に。
ト火入れを持ち、半兵衛の額を打つ。小稲、悑りして
小稲　こちの人。ソレ、お前の顔へ。
半兵　サヽ、兎角血を見ねば蟲が得心せぬて。ハヽヽヽヽ。
さち　オヽ、わしも腹が癒えました。
ト皆々こなし。此うち一間の障子を、鉦八、足にて明け、松兵衛を見て、ツカ〱と側へ來て、猿轡と繩を解いてくれひとこなし。
松兵　思ひ掛けない。コリヤ、鉦八。
ト云ひ〱、猿轡と繩を解く。
どうしてこの家に。
鉦八　コレ、こなたに別れて
ト云はうとするを、松兵衛「コリヤ」と思ひ入れ。半兵衛、鉦八を引き分け、眞中へ入つて
半兵　さては、鉦八、コリヤ、松兵衛に近附きか。
鉦八　ヤア。それは。
トぎよつとする。松兵衛もちやつと
松兵　イヤサ、知らぬぞ。コリヤ、近附きではないぞ。
トぎよつとする。
鉦八　ほんに、知らぬ松兵衛どのぢや。
半兵　松兵衛、コレ、小稲が代りに。
ト鉦八を突き廻し、松兵衛方へ突きやる。松兵衛、鉦八と入れ替つて
松兵　小稲が代りに、この鉦八を。
半兵　サ、その鉦八をよく知つてゐる松兵衛。定めて懇意であらう。詳しう云はねど、此奴の素性は、其方に覺えの仲間と睨んだゆゑに、返して遣るぞ。
鉦八　こりや忝ない。コレ、松兵衛どの、イヤ、松兵衛どのとやら。おりや、東小僧鉦八といふ、以前は巾着切り、今はしがな身の上なれど、舊惡ゆゑに、半兵衛が手籠めに逢ひ、心ならずもこの家に隱まはれてゐた。聞き傳へてゐる八景組のお頭、おれが身の上を、どうぞよろしく頼みまする。

松兵　ムウ。頼むとあれば、引かぬが男。弱い者の肩を持ち、強いをいがめる松兵衛が氣性。殊に、近附きではなけれども、頼みとあれば、ナア、雁助。

雁助　さうぢや。八景組と名に立つたおいら。たとへ泥坊であらうが、人殺しであらうが、見込んでさへ來りやア、金輪際世話してやる。

鉦八　そんなら、おれも仲間に入つて

松兵　八景組を九人組なとせうわい。

雁助　時に、お頭、この場の納まりは、此まゝで。

松兵　ハテ、こりや人殺しの證據。

ト香包みを出して

この香包みさへありや、どうせうとおれが儘サ。

トひけらかす。半十郎「それを」と引ッたくろ。松兵衞「ヤア」と立寄るを、小稻引廻し

小稻　コレ、たとへ泥坊でも、人殺しでも、見込んでさへ來りや、金輪際世話するといふ、八景組ぢやござんせぬか。

松兵　ヤア。

小稻　それでアノ、人殺しの證據の

半兵　この香包みはこの通り。

トずた／＼に引き破り、捨てる。松兵衛こなしあつて

松兵　ハテ、蛙は口ゆゑ。

半兵　これで出入りは、マア、濟んだ。

ト向うバタ／＼にて、暮太郎、走り出て

暮太　お頭、仲間の者、爰に居るか。急用ぢや。

松兵　急用とは、ぼんた。慌たゞしい。なんぢや。

作藏　なんぞ氣遣ひな事か。

暮太　氣遣ひな事どころか、この間から頼みに來た、晩には柴屋町の仕組み、踊りの拵へして、柴屋町へ行かうと思うて、それで息を切つて知らせに來た。

松兵　ハテ、きつい馬鹿ではある。踊りに行くのを、なんぞ事でもあるやうに、皆の者。

雁助　今に始めぬ比良のぼん太郎。

作藏　仲間の内のあん助ではある、

暮太　コリヤ／＼。なんぼあん助でも、晩の踊りは、おれがいつち上手ぢや。見て置け。

雁作　アレ、まだ馬鹿を盡し居る。

松兵　彼奴が知らせを幸ひに、そろ／＼踊りの拵らへして、柴屋町へ、出掛けうか。

鉦八　コレ／＼、松兵衛どの、おれが身の上は。

松兵　ハテ、見ず知らずなれど、受け込んだ。われも一緒に柴屋町へ。

　トこなしある。

鉦八　ムウ。よし〳〵。

雁助　頭、此まゝ去んでは、小稻が事も

松兵　ハテ、何事も、一旦見入つた松兵衞は、どうせうと儘ぢや。ナア、半兵衞。

半兵　すりや、松兵衞、そちや

松兵　用があるなら、柴屋町、胸の踊りを押し鎭め、とつくりと思案して逢ひに來い。

半兵　成る程、行かうが、必らずともに

松兵　待つて居るぞよ。

半兵　ムウ。

　トこなし。

松兵　ドリヤ、踊りの場へ

皆々　行かうか。

　ト唄になり、こなしあつて、松兵衞、雁助、作藏、暮太郎、鉦八を連れ、皆々向うへ靜かに入る。跡に三人殘り、こなし。

さち　コレ〳〵、嫁女。今の惡者どもは皆歸つたか。

小稻　アイ、たつた今、歸りましたわいなア。

　トこれを聞いてお幸、半兵衞が側へ探り出で、體を撫で廻し

さち　コリヤ〳〵、悴、半兵衞、どこも痛みはせぬかや。

半兵　エヽ。

さち　サア、今この母が詞に氣がねして、可哀や、惡者どもに打擲され、さぞ口惜しからう。

小稻　エヽ、それなら、母さん、お前はそれを

半兵　よう御存じでござりますなア。

さち　兩の眼は內障で見えねど、我が子を思ふ心は明らかに、打擲にあふ事、よう知つて居る。寶を無事に取返さうと、お家へ忠義を思へばこそ、可哀や、今の辛抱とひ、殊に又、盜賊まで隱まひ、この母が眼病、何かの手づかへに……これ〳〵。

　トそこらを探り廻り、脇差を取り

コレ、この身を代なし、貧苦を凌ぐその志し、幸ひこの竹光と知つて、惡者どもを切つてしまへと、我強う云うて渡したも、奧にはお家の御家門、藤島主計さま、寶の催促、お入りなされてござるゆゑ、あなたへ氣がね、いま町人と成り下がつた半兵衞、腰が拔けて後れを取つた

と思はれては、寶の詮議の請合ひも、心元なう思はれうかと、主計さまの手前を憚かり、母が計らひ、今の仕儀ぢやわいなう。

小稲　さうとは知らず、勿體ない、お目の悪いを幸ひ、何もかも隠し包んだ、二人の不孝。

半兵　いま松兵衛を無事に歸せしは、鉦八、様子にて、大方知れた硯の在所。

さち　その寶が出ずば、桃の井家は沒收。

小稲　殊に、日延べも今宵限り。

半兵　ぢやによつて、今宵中に、寶を奪ひ返し、きつと差上げまする。

主計　イヽヤ、半兵衛、心元ない。

ト云ひ〳〵、奥より出る。

小稲　ヤア、主計さま。

主計　コリヤ、小稲を枷に爰へ來りし八景組、寶を詮議と云へば、人殺しの科人、其方が身の上。

半兵　イヤ、紛失の寶さへ取返せば、この身の事はかねての覺悟。

主計　イヽヤ、餘人の手に掛けようより、この主計が召捕つて、日延べのお願ひ。

小稲　エヽ、そんな……主計さま。

主計　いかにも。

ト合ひ方になり、こなしあつて、下座の方の高燈籠の側へ行つて、高燈籠を下ろし、眞中へ出て、下に置く。

不義の科ある身を以て、屋敷を立退き、剰さへ、足利の直勤、久利勘解由を手に掛けし稲野谷半十郎、濱田の娘、小稲。いま繩掛ける、イヤ、捕つた。

ト高燈籠へ繩を掛ける。

小稲　これは。

主計　子を思ふ親の心は、闇にはあらねど

小稲　まだ灯を見せぬその燈籠は、さては、二人が身代りに。

さち　そんなら、夫半左衛門どのや、家町さまの

主計　二人の戒名に繩打つて、子の罪、親にかゝれば、寶の詮議の暫しの人質。

さち　忰と小稲が代りに

主計　今宵一夜さ構ひはない。この燈籠、イヤ、科人に。

さち　エヽ、忝ない。

ト燈籠を探り取る。この時、最前鉦八が隠し置いたる書附け落ちる。半兵衛、取上げ

半兵　ナニ〳〵、一桃の井家の重寶、松陰の硯、東小僧鉦八より慥かに受取り申し候ふ、お頼みの通り賣り拂ひ候はば、金子差上げ申すべく候ふ以上。岩城獺源次さまへ、唐崎の松兵衞より―

ト讀み上げる。

三人　ヤア、そりや、寶の受取り。

半兵　嬉しや、在所が知れました。

ト喜ぶこなし。暮れ六つの鐘打つ。

小稻　ありやもう、暮れ六つ。

半兵　踊りの刻限。柴屋町へ。

トこなしある。

さち　コレ　大事の詮議に慥かに無腰。

小稻　氣遣ひござりませぬ。コレ〳〵。

ト澁紙包みの大小を取つて來て

屋敷を立退く時、母さんが、お前へ讓りのこの大小。

ト半兵衞へ渡す。取つて

半兵　逸當どのの魂ひ、又も手挾み、寶の詮議。

主計　時刻が延びると

小稻　日延べの今宵。

さち　この燈籠に灯を見せぬは

半兵　不孝の第一、忠義ともろとも

トきつとなる。この時、丸七、清九郎出かゝり、窺ひあて

清九　半兵衞、小稻。

ト半兵衞、小稻にかゝるを、半兵衞あてる。小稻、兩人を相手に少し立廻りありて、兩人を見事にかへし、ポンと當てる。

主計　天晴れ、小稻。

小稻　一刀流の眞の當。

半兵　出かした、女房。

小稻　お前は早う。

半兵　合點だ。

ト半兵衞向うへ走り入る。跡にて小稻、主計、お幸よろしく見得。チョン〳〵と道具廻ると直ぐに、踊りのシヤギリ。

本舞臺、平舞臺、見附け一面の葭簾、軒に、切り子燈籠、紅摺りの揃ひ提灯に火を點し、殘らず、懸け、右葭簀の内に囃子方皆々並び、よきところにてシヤギリ打切ると

音頭〽ヤア、千代の始めの壽に、さらばこゝらで、仕出し踊りが、所望ぢや〳〵、合點か。

ト揚げ幕の内より、女形皆々

皆々　オヽ、サテ、合點だ。

トこれより踊り地になり、向うより踊り子の女大勢、いづれも一樣の花笠、揃ひの形にて出て來て、本舞臺へ直り、これより所作踊り面白く、振りあつて

皆々　いたした。

ト臆病口へ入る　矢張り踊り三味線にて、向うより半兵衞、前の形にて、ツカ〳〵と本舞臺へ來るうち、東の花道より、小稻、出て來て、直ぐに本舞臺にて行き當り、こなしあつて

半兵　女房、小稻。

小稻　こちの人。お前の身の上案じて、氣が濟まぬゆゑ。わたしも諸ともお家のお爲。

半兵　でかした〳〵。未だ踊りの最中、八景組の奴等はまだ。何にもせい、女房來い。

ト小稻を連れ、臆病口の方へ行きかゝると、雁助先に、喜太八、伴藏、丸七、右四人、揃ひ踊りの形にて、ツカ〳〵と出て、兩人が向うへ出て、踊りの掛け聲にてとめる。半兵衞、小稻と入れ替り、こなしあつて、兩人向うへ行かうとする。向うより松兵衞先に、幕太郎、清九郎、押へに鉦八、同じく踊りの形にて、ツカ〳〵と出て、半兵衞、小稻を眞中に立て、挾んで、踊りの掛け聲にて、ヂリ〳〵と本舞臺へ押し戻す。半兵衞、小稻、本舞臺へ立戻る。皆々

松兵　半兵衞、よもや踊りのこの場へ、來まいと思うたが、小稻を連れてよう來たな。

半兵　最前の約束、來にやならぬ。打擲の返禮といひ、仲間入りの鉦八が身の上、その祝儀も一緒に。

小稻　夫婦連れにて踊りの見物、それも此方に望みがあつて。

雁助　コリヤ〳〵、小稻。そんな間抜けを云はずとも、惚れてゐる頭に靡け。

伴藏　半兵衞も、松兵衞どのへ、もう小稻を渡した。

喜太　それをこだはると、松坂よりは死出の坂。

丸七　八景組が手拍子揃へて

雁助　無駄口きかずと、グッと一しめ。

皆々　雀踊りが、所望だ〳〵。

半兵　イヤ、こちら二人は關東生れ、音頭も踊りも大不調

法。併し、一刀流の太刀捌き、望みなら、ナア、小稻。

小稻　サア、父さんの流儀の奥の手、踊りの振りより又格別。

松兵　そりや面白い、自慢の劍術。此方は踊りの身按排。仕込んだ手際を、皆の者。

皆々　オ、サテ、合點だ。

松兵　ソレ〳〵、そこらでせい。

皆々　アリヤサ。

ト二人づゝ、半兵衞、小稻へ掛かる。これより立別れ、小稻、半兵衞、皆々を相手に踊りのダテ、拍子よく、さま〴〵面白く振りあつて、トゞ半兵衞、刀を拔き、皆々を切り拂ひ、松兵衞、小稻を引ッ立るを、半兵衞、引き分け、切り拂ひ、松兵衞をポンと切る。立廻りにて、トゞ押し伏せ、止めを刺す。松兵衞が懷中より、小稻、袱紗包みの硯を取出し

小稻　コレ、お家の重寶、松陰の硯は、此奴が

半兵　さては推量の通り。エ、、忝ない。

ト戴く所へ、主計、臆病口よりツカ〳〵と出て

主計　半兵衞夫婦、でかした〳〵。その硯、手に入る上は、お家の納まり、二人が科を免じて、先知に歸る歸參の手土產。

小稻　エ、、有り難い。小稻半兵衞と浮名は却つて時の幸ひ。

半兵　穐の世話事、入りはます〳〵

ト敵役のうち二人起きあがり、兩方へ掛かるを、よろしく取つて投げ

めでたい、めでたい。この場は出立。……先づ今日はこれぎり。

よろしく打出し

# 月武藏野穐狂言（終り）

しめろやれ往古の娘音頭に訥子巾
早緒に仇名辰巳の闇と寐て聞く猪牙の八幡觀音

四季の花
四幕

# 富岡戀山開

玉屋新兵衛
三國小女郎
出村新兵衛

ちよいと來なさい當世の奴島田に路考髷
手板に浮む橋屋の替紋見出す仕掛文庫

表のカタリは、「富岡戀山開」初演の時のである。

下掲の寫眞は、大正十二年一月、明治座で、この狂言を上演した時の「猪の堀」の場の舞臺で、市川中車の玉屋新兵衛に、阪東壽三郎の鵜飼九十郎であつた。

本文に挿入した二個の銅版は、いづれも初演の時に發行された錦繪である。豐國の筆がまだ墮落しない全盛時代であるから、筆緻に雅致のある點、線に特殊な面白味のある點で、後期の物と比べて非常に價値が違ふ。



# 富岡戀山開

## 發端

### 仲町梅本の場

役名――玉屋新兵衞。三國屋小女郎。同抱へ、おせん。女中、おみよ。同、おたね。梅本女房、おかね。茨の藤兵衞。船頭、桐の家三ぶ。玉屋丁稚傳吉。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、蹴込み石垣、見附け黑の板塀にて、舞臺前殘らず花道兩側、少し小高き浪板、すべて深川摩利支天横町の模樣、好き所に棧橋あつて、騷ぎ唄にて幕明く。

ト向うより藤兵衞、町人の粹な形にて、火繩箱を扣へ、煙草をのんで猪牙に乘つて居る。船頭三ぶ、艫を押して出る、始終右の騷ぎなり。

藤兵　三ぶ、今揩れ違つた船は、ありやア土橋だの。

三ぶ　アイ、付いて居たが鶴屋の娘分サ。

ト艫を押し／＼船は本舞臺へ來る。此うち臆病口より又猪牙一艘、手代らしき仕出し二人、船に乘つて、船頭、艫を押して出て、船の行き違ひに

船頭　オヽ、桐の屋の伯父さん、どこへ行きなんす。

三ぶ　仲町だ。おぬしやア歸りか。

船頭　アイ。

三ぶ　お店だな。

船頭　さうサ。

ト艫を押して船頭は向うへ入る。三ぶは船を棧橋へ著け

三ぶ　サア、藤兵衞さん、危なうござりやす。

藤兵　合點だ。三ぶ、おらア直ぐに梅本へ行くから、てめえ、船をしまつて早く來やよ。

三ぶ　アイ／＼。わしやア昨夜い、い、くよしで借りた、この行火を返して跡から參りやす。

藤兵　コレ、早く來やよ。おれを又てらすまいよ。

ト始終騷ぎにて藤兵衞、二重舞臺へ上がり新道へ入る三ぶ、船を片付けて居る。又向うより猪牙一艘、船頭押して出る、茶屋女おみき、客を送り歸りの模樣にて乘つて出て、

三ぶを見て

みき　オヤ、桐の屋の伯父さん、仲町だね。わつちらが方へはきついもんだね。

三ぶ　おみきどん、送り歸りか。

みき　アイ、ちつとお出でなんしな。

三ぶ　好く云つてくりや。

みき　アイ〳〵。

トこの船も臆病口へ入る。三ぶ、船を繫ぎ、纜を擔ぎ、火繩箱を提げて

三ぶ　藤兵衛さんが待つてござらう。ドレ、早く行つてやりませうか。

ト騷ぎにて三ぶ、路地へ入る。チヨン〳〵〳〵にて道具替る。

本舞臺、正面、平舞臺にて、見附けまいら戸。上の方、障子屋體。この障子に覗き穴明きあり、飾りつけ手違ひに、橋がゝりの柱の下の方に正面向きの門口潜り戸立寄せ、すべて仲町梅本のかゝりよろしく、矢張り騷ぎ唄にて道具とまる。

ト右平舞臺に藤兵衛、以前の形にて腹立て喚いて居る。女中おみよ、おたね、女房おかね、これを宥めて居る。側におせん、氣の毒な體、藝者これを宥めて居る。

藤兵　イヤ〳〵、留めるな〳〵、否だぞ〳〵、聞かないぞ聞かないぞ。

かね　ふぢさん、お前も通に似合はぬ。

皆々　マア〳〵、ようござりイすわいなア。

藤兵　イヤよくない。初午の晩の狸を見るやうに、氣ばつかり味にさしやアがつて、出ぼんや店者とは違ふぞ。神田の通り者、金遣ふ茶屋で大概に自由になる野暮な男だやア無いぞ。

せん　モシエ、マア、靜かにしておくんなんし。わつちが惡くばあやまりやんせう。あんまりでござんす、怪しからない。

藤兵　なんだ怪しからねえ。コレ、芥子が辛けりやア唐辛子や山葵は、株を賣つて裏店へ引込むわえ。べら坊め。

かね　コレ、藤さんが彼のやうに腹立ちぢやが、おみよ、おたね、こりや、マア〳〵、どうせうの。

トこなし。奧より三ぶ出て來て

三ぶ　ふぢさん、恰好の惡い、何を其やうに小言を仰しやりますぞえ。

みよ　オヤ、桐の屋の伯父さんがござんした。

藤兵　三ぶ、來たか。どうも濟まぬぞ〳〵。

三ぶ　モシ、おかねさん、こりやマア、どういふ事でござりますえ。

かれ　三ぶさん、聞きなさい。いつもふぢさんには、お鶴さんがお馴染ゆゑ、おみきを寄せ場へ板を見せに遣つたが、餘所へ出て居なさんすと、サ、それでこの新子のおせんさんを、おみきが働らいて出しましたのに、あのやうに、

藤兵　コリヤ〳〵、おかね、その出しましたといふ彼のおせんが、なんで何の彼のと小言を吐かす。

みよ　可哀さうにおせんは、まだ杯も濟まぬうちでござんすもの。

せん　エヽ、自烈てえ、わつちやア早く下がりたうござんす。

藤兵　この通り者の藤兵衞が、まだ新子の女郎に振られたと云つては、三ぶ、なんと濟まぬではないか。

三ぶ　一體お前は、この梅本へ、わしが連れ申して來た客人、濟まぬ事がありやア、お前に構はず船宿の、この三ぶが切りもりをすれど、樣子を聞いたところが、こりやアモウ、すべて女郎が氣障がる行き方なれば。

トもぢ〳〵云うて頭を掻く。おかれ引取つて

かれ　サア〳〵、こりやアわたしが貰うて、ふぢさんも御機嫌直しに、わつさりと酒にして、その上では、ハテ、この子がお氣に入らにやア下げて、また餘のお子を

藤兵　イヤ、さのみおせんを歸したくはないが。

かれ　それ〳〵、折角出したおせんさん、ふぢさんも乘り心なれば、矢ッ張り此お子を直して遣つて下さい。

せん　イエ〳〵、わつちやア大事ない。矢ッ張り下げておくんなんしえ。

かれ　それでは惡い。ナア、ふぢさん。

藤兵　さうサ、男は當つて碎けろぢや。いつもの通り泊りを付けてやれ。

藝者　アレ、御機嫌が直つたれば、おせんさん、お前もナ。

せん　どうともそこへ好いやうに。

かれ　サア〳〵、これから仲直りのお杯。幸ひ二階が明いてある。所を替へて、ふぢさん、モシエ。

藤兵　よし〳〵〳〵。二階へ行つて一騷ぎ騷ぎかけうか。

三ぶ　おみよどん、もつと羽織を呼んで來なよ。

みよ　男藝者衆もよからうぞえ。
藤兵　イヤ／＼、あまり其やうに。
三ぶ　ハテ、ようござりますわえ。
皆々　サア、二階へ。
　ト潮來節になり、藤兵衞を、おかれ皆々浮して奧へ一まき入る。また騷ぎになり、向うより傳吉、笹龍膽の紋付きの小さい箱提灯を提げ出る。後より玉屋新兵衞、着付け羽織の形にて出て、花道にて
新兵　コリヤ、傳吉、おりや梅本にちよつと用があつて行く程に、てまへは先へ歸つて、後方その提灯を持つて迎ひに來い。
傳吉　若旦那、道理で味な方へお出でなされると思ひましたが、てつきりとこの仲町へ。
新兵　何を叉、內で口を利くなよ。
傳吉　合點でござります。そんなら私しは。
新兵　オヽ、早く歸れ。
傳吉　ハア。
　ト提灯を持ち引返して向うへ入る。新兵衞、本舞臺へ來て、門の口にて
新兵　どうだな、大分忙がしさうだの。

　ト云ひ／＼スツと潜りを入り、暫らくあつて內にて、
みよ　お客だよ。
　ト大きな聲にて云ふ。新兵衞、正面の障子屋體より出て
新兵　イヤ、つい歸るぞ／＼。
　ト云ひ／＼本舞臺へ出る。おみよ、跡より茶と莨盆持つて出る。
みよ　新さん、追つけ二階が明きますから、マア爰へ。
新兵　イヤ、どこでも大事ない／＼。
　ト下に居る。
みよ　お茶をおあがりなされませ。
　ト新兵衞、茶碗を取つて
新兵　おみよ、大分賑かだの。
みよ　この頃は相應でござります。
　ト此うちおかれ、杯を持つて出て
かれ　この頃は新さん、ようお出でなせえしたね。
新兵　おかねさん、いつでも浮き／＼と華やかだね。
かれ　なにサ、コレ、おみよ、お肴をちやつと。
みよ　アイ／＼。
　ト奧へ入る。

かれ　モシ、新さん、お前、いつの儘やら、きついものでございんすなア。
新兵　イヤモウ、近年はどこへも出やせぬのサ。
かれ　嘘ばつかり、町へはお通ひでござりませう。
新兵　ほんにサ、町へも去年の燈籠のまゝサ。
かれ　どうか。
新兵　おかねさん、久しぶりだ、一つ呑みやせう。
ト杯を取上げる。
かれ　ほんに。
ト酒をつぐ。
誰れぞ羽織を呼びにやらうかえ。
新兵　イヤ〳〵、羽織よりはわしは、ちつと呼びたい女郎があるが、ならうか知らぬ。
かれ　お前の注文は誰れぢやの。
新兵　まだ一度も買つた事はないが、おつな女郎と噂を聞いて來たが、名は何とやら、ア、、ソレ、唄に唄ふやうな名であつた。
かれ　むづかしい名ぢやな。誰れさんぢやな。
新兵　深川には珍らしい名であつたが、オ、ソレ、岡崎女郎衆……オ、、ア、、何とか小女郎々々々、小女郎といふ女郎があるか。
かれ　ムウ、そりや三國屋の抱へ、可愛らしい愛のある女郎衆で、根が遠い所の屋敷出とやら。
新兵　さうぢや〳〵。それ〳〵。違ひは無い。その女郎を、どうぞ働らいてもらひたいが、どうぢや。
かれ　マア、寄せ場へ見せにやつて。コレ、おみよ〳〵。
ト手を叩く。
みよ　アイ〳〵。
ト鉢肴を持つて出る。
かれ　コレ、小女郎さんを聞いて來や。
みよ　小女郎さんは流行りッ子。出來ればよいが。
新兵　そこをてまへが働らきで。
みよ　モシ、餘所なら借りて見やうナ。
新兵　コレ、急ぎぢや〳〵。
みよ　きついせつかちではあるぞ、ドレ、聞いて來ようか。
ト奥へ入る。此うち騒ぎになる。おかれ、杯取上げ
かれ　申し新さん、もう來月は顔見せぢやナ。
新兵　ほんに、この月は十月、亥の子ももうしまうたナ。
かれ　アノ葺屋町へ、上から好い下りがあるげなね。

ト此うち新兵衛、思案しろ　おかれに構はず
新兵　なんでも小女郎に逢つたら前の樣子を……併しさうか、また逢ふか。今は女郎の事、よもや誠に、マア〱、馴染になる顔で、又してとつくりと尋ねて見て。
かれ　何を。
新兵　ヤ。
ト顔を見合せ
かれ　サア、好くしてくれゝばよいがと云ふ事よ。小女郎さんも、お前の男振りでは、まんざらでもあるまいぞえ。
新兵　有り難い。
ト唄になり、新兵衛、おかれ、しか〴〵ある。この唄のうち向うより小女郎、廻し男、裲襠文庫を持ち、提灯を提げ、おみよも附添ひ出て、門口にて
みよ　サア、小女郎さん。
小女　おみよどん、今の事を賴んだぞえ。
みよ　承知サ。サア、お入り。
ト小女郎おみよ。廻し男、裲襠文庫を置き、駒下駄を持ち、向うへ取つて返す。此うち始終唄にて好い加減にとまる。おみよ出て
みよ　新さん、モシエ、いま小女郎さんは明けて來たを、直ぐにお連れ申しやした。
新兵　有り難い。諸事はおみよでなけりやア分らないといふものだ。
みよ　又あんなだんごを。
かれ　コレ、無駄を云はずと、早く小女郎さんを爰へ。
みよ　小女郎さん、モシエ。
ト此うち屋體の障子の覗穴より小女郎、新兵衛を見て、ズツと出て來て
小女　おかねさん。
かれ　サア〱、爰へ。
ト新兵衛が側へ座らせる。こなしあつて、おかれ、小女郎へ莨をつけてやるうち、新兵衛杯取上げ
新兵　おみよ、銚子はよいか。
みよ　アイ、一つあがつて小女郎さんえ。
トつぐ。新兵衛呑んで
新兵　モシ。
ト小女郎へ献す。小女郎「ハイ」と杯取上げ、おみよ、ちよつとつぐ眞似をする。それよりおかれ献す。おかれ、杯取上げ

かれ　小女郎さん、ちよつと後を向いてお見せ……お前の髮は、とんだ好いた恰好だよ。なう、おみよ。
みよ　ほんに髷が好く出來やした。
小女　ナニ、今日は手が變つた所爲か、どうも氣味が惡くて。
　ト簪にて頭を搔く。
新兵　髮の噂も久しいものだ。
小女　モシ、あなたのお所はえ。
新兵　わつちかえ、京橋の東の方、白魚屋敷サ。
かれ　ありや噓、新さんは三十間堀の、ソレ、紀伊國橋の側ぢやわいの。
小女　紀伊國橋といふは、遠い山の手とやらの方ではないかえ。
みよ　そりや紀伊國坂ぢやわいなア。
かれ　但し新さんは紀伊國屋と兄弟か。
小女　ハテ、紀伊國といふ名がたんとあるなア。
新兵　なに、蜜柑ぢやアあるまいし。
みよ　ほんに小女郎さんは、丸明きで口がかゝつてあるぞえ。
かれ　そんなら新さん、ちつとの間。

---

新兵　どうとも／＼。
　ト合ひ方になり、新兵衛、煙管を筒へしまふ。小女郎ズッと立てて奥へ入る。おみよ、取散らしたる物を持つて入る。おみれはそこらを片付ける。
みれ　申し、二階はまだ塞がつて居れば、どうぞ爰で。
新兵　どこでも大事ないのサ。
みれ　そんなら爰へ。サア、お寐みなさんせ。
新兵　コレ、隙を入れては居られぬぞや。
みれ　それでも九ツまでは。
新兵　イヤ、早く歸らにやならぬ。
　トこなしあつて、おかれ此方へ出る。奥よりおみよ、莨盆を持ちて出て
みよ　申し、ふぢさんも爰へ。
みれ　さうせずばなるまい。
　ト舞臺上下へ屛風を立て
サア、おみよ、來よ。
　ト兩人奥へ入る。始終此うち合ひ方。小女郎奥より出て來て、上の方の新兵衛が方へ行き、よろしくあつて
小女　モシ、もうお寐るかいなア。
新兵　大分草臥れやした。

小女　おかみさんと御精が出るに依つて。
新兵　なにサ、おらア女房は無いのサ。
小女　どうぢややら。
ト小女郎心意氣あつて、新兵衛が顔を見て思ひ入れある。所へ奥より藤兵衛、生醉の體にて、ひよろ〳〵出て
藤兵　おれがのは爰だな。
ト下の方の蒲團の上に坐つて居る。上の方にて。
小女　コレサ、ちつと起きなさんせいなア。
新兵　イヤ、これでよい。
小女　エヽ、自烈たいなう。
ト此方にて藤兵衛、こなしあつて羽織を脱ぎ、疊んで片脇へ置かうとして、又着んとして、羽織取つて、むしやくしやにして
藤兵　もう來さうなものだ。
ト奥にて足音する。藤兵衛、ちやつと横になり、寐た振りして、居る所へ、おみよ、盆に角茶碗を二つ載せ、上の方へ行て
みよ　小女郎さん、お茶をあげやせう。
ト莨盆の上へ二つの茶碗を載せ、奥へ入る。

小女　モシ、お茶はえ。
新兵　氣が無いぢや。
小女　お前、どうぞなさんしたかえ。
新兵　なぜえ。
小女　それでも默つてさうして居やしやんすゆゑ、心持ちが悪いのかえ。
新兵　イエヽ。
小女　それに何ぢややら、きつう鬱いで。
新兵　エ。
小女　どうでお馴染のやうで無いゆゑ。
新兵　わつちやア女郎に、つひに馴染を拵らへた事は無いのサ。
小女　そんならはきか、但し羽織さんかえ。
新兵　さうでもないが。
小女　今宵ぎりと諦らめて居やうなア。
新兵　益體もない。
ト起きて居直り
コレ、お前、おれを呼んでくれる心か。
小女　呼んでくれるとは勿體ない。
新兵　イヤ、洒落ぢやア無い。ほんに。

小女　お前なら、かゝれても大事ないわいなア。

新兵　ナニかくもので、おりやコレ、三十間堀で玉屋新兵衛といふ者。兩親はあれど女房は無い。お前の心次第で屬魂身を入れて相談するが、なんと、おれが尋ねる事を、隱さずと云つて聞かせる氣か。

小女　そんな事はお客の常。

新兵　イヤ〳〵、生れから嘘を云はぬ男。そりやモウ、初會からこんな事云ふは味なものぢやが、逢うた上では互ひの心底も知れうけれど、そりやマア後の事よ。時にお前の兄さんがあらうがの。

小女　エヽ。

　ト悄りして思ひ入れあつて

　何の事やら。

　トこなしある。此うち藤兵衛聞き耳して居る。

新兵　イヤ、隱すまい〳〵。殊にお前の親御は下總で歴々。

小女　アノ、そんな事まで。

新兵　なんと詳しからうがの。

小女　知らぬわいなア。

新兵　イヤサ、それなればさうと樣子を聞けば、ちつとわしは大事にかけねばならぬ譯。それでわざ〳〵今夜來たのは。

小女　これいなア。無駄を云はずと、ちやつと此方へ。

新兵　ムウ、すりや、おれとか。

　ト思ひ入れある。

小女　お前、お否かえ。

新兵　どうして。

　トわざと乘つて居るこなし。

小女　爰へ來て最前見るから

　ト心意氣あつて

　オヽ、馬鹿らしい。

　ト思ひ入れ。

新兵　お前、強勢に手があるの。

小女　そんな女郎ぢやないわいなア。

　ト此方に藤兵衛、始終聞いて居て、いろ〳〵こなしあるべし。

藤兵　もう來さうなものだ。

　ト奥の方を見る。おせん出て來る。藤兵衛、ちやつと空寐入りして居る。おせん、屏風の側へ來て藤兵衛を見て

せん　オヽ、よう寐てぢやさうな。勝手へ行て遊んで來よ

う。

ト逸散に奧へ走り入る。藤兵衞、悄りして

藤兵　ア、コレ、起きて居るよ〳〵。

ト招いてもおせん來ぬゆゑ

とんだ目に逢はしやアがつた。

ト呆れる。

藤兵　儘になる身か何ぞのやうに。

ト鼻唄うたうて紙入れよりさすがを出し、鼻紙の皺を伸し、此方の屛風を右のさすがにて、そろ〳〵切り破る。此うち好みの合ひ方になり、よろしくあつて、トド新兵衞が紙入れをそつと引出し、中を改めて、印形を出し、右の鼻紙へ二つ三つ捺して、又元のやうにソッと屛風の內へ入れ、此方の屛風の內へ入る。向うより傳吉、最前の提灯を提げ、出て來て門口にて

傳吉　モシ〳〵、內方に、三十間堀の玉屋新兵衞さんは來てござりませうな。

下男　アイ〳〵、新兵衞さまはお出でなされておぢやっマア、此方へ入らつしやりませ。

傳吉　アイ〳〵。

ト內へ入る。本舞臺にて

新兵　ありや慥か、おれを迎ひに來たのぢやが。

ト云ひ〳〵立上がる。小女郎、羽織鼻紙など以つて一緒に出て

小女　ヤ、お前、是非歸らねばならぬかいなア。

新兵　サア、急に呼びに來たゆゑ。

トおかれ出て來て

かれ　新さん、內方からお迎ひが

新兵　承知々々。コレ申し……イヤ、小女郎、今ちよつと云うた事、合點か。

小女　明日の晚待つて居る程に、必らずえ。

新兵　まだとつくりと話さねばならぬ事があるゆゑ、來にやならぬえ。

ト云ひ〳〵莨入れ鼻紙など取る。小女郎、羽織を着せる。おかれ、こなしあつて

かれ　新さん、もう小女郎さんを手に入れて

新兵　何だか知れてか。

小女　こちやほんまに。

新兵　もう一遍逢はにや互ひの

ト奧より

みよ　新さん〳〵、お迎ひが待つて

新兵　オイ〳〵、おさらばよ。

ト奥へツイと入る。小女郎、名殘り惜しさうに

小女　ア、コレ、申し、ちよつとマア。

ト行かうとするを、おかれ留めて

かれ　小女郎さん、さてはお前は。

ト思はず知らず。

小女　嫌味の無いすつぱりと、好い男ぢやなア。

ト惚れたこなし。此うち藤兵衛、屏風の上より覗いて居る。

藤兵　小女郎といふは慥かに。

ト小女郎と顏見合せ。

小女　エ、。

ト恟り、藤兵衛「われは」と出る。小女郎、ちやつと行燈を吹き消す。おかれ、屏風を轉し、藤兵衛を押へる。新兵衛、傳吉を連れて潜り戸より出て

新兵　また阿母が

傳吉　エ。

新兵　行け〳〵。

ト傳吉を先へ新兵衛、向うへ走り入る。この途端、双方拍子よろしく、　ひやうし幕

# 序幕　芝神明の場

役名――玉屋新兵衛。玉屋嫁、おえん。同下女、お竹。同丁稚、傳吉。鳶の者、犛毛の金太郎。茨の藤兵衛。船頭、桐の家三ぶ。玉屋手代、三四郎。見世物師、桃九郎。惡者、蛇之助。同、たゞ六。耳切おばアお鹿。いろは茶屋のお篠。八百屋伊三郎。鵜飼九十郎。下郎、有介。氏原勇藏。

本舞臺、三間の間、芝神明社内の體にて、三間の間に吹矢店、下の方、十二支の見世物小屋、看板木戸口、詳しくあつて、臆病口の方に水茶屋の横の方を見せ、すべてこの道具に好みあつて、親仁の侍ひ、孫に吹矢を吹かして居る。親仁の町人、子供二人を連れこれも吹矢を吹かして居る。辻打にて幕明く。

ト仕出し大勢行き違ひ、若い者三人、出て來るうち

侍ひ　コリヤ、孫よ、見越し入道か大蛇を出して見せろ見せろ。

孫　合點ぢや〳〵。

　卜矢張り吹矢を吹いて居る。
町人　ソリヤコソ、此方の坊主めが、手水鉢の化け物を出し居つた。
子供　父さん、おいらはなんと、上手ぢや〳〵。
若一　なんと、この神明様は、いつでも賑やかな事ではござらぬか。
若二　常さへ參詣がござるのに、今日は正月十六日、増上寺の三門の開く日ぢやに依つて、それで猶群集しますてや。
若三　この神明様の吹矢の化物も久しいものぢや。
若一　此方は何ぢや。羊と女が角力を取る見世物ぢや。
若二　そりや見たいものぢやが、まだ始まらぬさうな。
若三　わしはその間に、増上寺の黒本尊様の御開帳を拜んで來ませう。
若一　おいらは下りの業事、輕業を一切り見て來よう。
侍　コリヤ〳〵、孫よ、さう面白がつては、いくら錢がいらうやら。もう〳〵、よしにせい〳〵。
町人　サア、子供、これから増上寺へ參らうぢやないか。
侍　そんなら身共も増上寺へ。
町人　サア、お侍ひ様。

皆々　ござれ〳〵。
　卜矢張り辻打にて、思ひ〳〵に下座へ入る。ト向うより藤兵衞、着付け羽織にて、三ぶ、矢張り船頭にて連れ出ちて出て來て
三ぶ　モシ〳〵、藤兵衞さん、お前わしが所へござつて、無理に歩べと引摺つてござりましたから、さては品川かと思ひの外、爰は芝の神明。こりやアなんぞ思ひ入れでもござりまするか。
藤兵　ある段では無い。三ぶ、おぬしを爰へ連れ立つて來たは、マア、去年だが、あの深川の梅本で、思ひがけなうしてやつた印形。それを役に立てようと思うて。
三ぶ　ムウ、そんならお前の話し、彼の三十間堀の藍問屋玉屋新兵衞に。
藤兵　ハテ、目論見かけた仕事、即ち玉屋の手代三四郎も今日爰へ來る筈ぢや。
三ぶ　そりやア大分話せるワ。面白いわいの。
藤兵　時に三四郎は、もう來さうなものぢやが。
三ぶ　但し三四郎さんは先へ來て、社内の水茶屋しがらきかいろはに、待つて居ると云ふのではあるまいか。
藤兵　されば、それも知れぬ。

ト また辻打になり、向うより三四郎出て來て

三四 船宿の三ぶか。でも珍らしい。これは神田の親方、早うごんしたの。

三ぶ 三四郎さん、たつた今お前の噂を。

藤兵 イヤモウ、貴樣を待ち兼ね出〳〵。話さねばならぬ事が有馬の火の見、高うは云はれぬ事ゆゑに、今日は神明にて出合ふ約束。

三四 サア、その約束も色氣の無い出合ひに、早く來ようと思うたれど、例の息子は内に居ず。伯母御は小言八百。親仁の腑拔けがそれを宥める。また嫁のおえんが下女を連れてどこへか行くし、見世の用事彼れこれで、やうやう今になりましたよ。

藤兵 イヤ〳〵、有り難い。ちつと色事の意趣のある玉屋新兵衞、その手代の貴樣に懇ろになつたのは、この藤兵衞が仕合せ。

三ぶ 玉屋新兵衞に意趣があるとは、彼の深川の三國屋の、小女郎が事からでごんせうの。

藤兵 日頃連れ歩く三ぶ、貴樣は知つて居る筈ぢやが、三四郎にはツイ掻摘んで話さう。

三四 そんなら、マアこの床几へ。

三ぶ かけ奉る神明の社內、輕業の囃子を合ひ方に、サア、お二人ともに。

ト 三人、腰を掛ける。これより靜かなる綱渡りの　味線太鼓を掠めて打つ。三四郎、こなしあつて

三四 時に藤兵衞さん、その樣子はどうでござります。

藤兵 サア、味噌ではないがおれが身の上、今でこそ町人なれ、以前は下總結城の家中で

三四 すりや、歷々のお侍ひでござりましたか。

藤兵 イヤ、あまり歷々ではないが、マア、中位な侍ひであつたが、同じ家中に鵜飼兵太夫といふ者の娘、小菊といふ奴に、ぞつこん惚れて、手入れ足入れ口說いても、いつかな得心しをらぬ。又思うて見れば、しをらぬも無理ではない。色と酒とにふざけ拔いたおれ、たうとうそれで失敗つてこの江戸へ來て、今では神田では、茨の藤兵衞と云はるゝ道樂商賣。

三ぶ その兵太夫が娘の小菊が、いま深川仲町の三國屋の小女郎といふ、全盛の女郎ぢやないかえ。

藤兵 サア、その鵜飼兵太夫が惣領に、九十郎といふて、イヤモウ、おれに上を越す大の惡黨者があつたが、しつかりと樣子は知らねど、その九十郎が仕業で、親の兵太夫

も殿の勘當受け、浪人して、慥かに兄の惡者が、妹の小菊をこの江戸で、勤め奉公に賣つたといふ噂ゆゑ。

三四　オット待つたり。その鵜飼九十郎とやらは、此方の息子の新兵衞が、慥かに以前の主とやら云うて、世話をするとやら云ふ事を、ちらりと聞いたが、さうかな。

藤兵　さうだ〳〵、違ひ無し〳〵。新兵衞が爲に九十郎が主なれば、妹の小菊めも矢ツ張り主筋ぢやに依つて、去年十月仲町の梅本へ新兵衞が、尋ねに來て買つた女郎が、九十郎が妹の小菊よ、卽ち三國屋の小女郎。

三四　ムウ。そんなら主の娘を、此方の息子が色にして居るのか。

三ぶ　今ではちん〳〵三國屋、小女郎玉屋新兵衞と、浮名が立つてある。

藤兵　それが業腹だ。おれが侍ひの時から惚れて居る小菊を、小女郎とは知らず、なんでも九十郎が妹を女郎に賣つたと聞いたゆゑ、江戸の岡場所品川吉原深川を、如才なく尋ねたが、因果と新兵衞めが初めて逢つたその晩に、小菊を小女郎といふ事を、やう〳〵知つたその時の殘り多さ。

二人　ハテ、そりやア埋らない詮議だ。

藤兵　サア、そこを埋めるこの藤兵衞は通り者、その晩新兵衞と割り床の隔ての屛風。それを幸ひと懷のさすがで屛風を切り破り、新兵衞が鼻紙袋を、そつと取つて、中の印形をおれが鼻紙に、滅多無性に押して置いたが強請りの種。コレ、この通りぢや。

ト紙入れより半紙の證文を出して見せる。三四郎取つて

三ぶ　金子百兩確かに預かり申す所實正なり、來る正月十六日までに急度返濟申すべく候ふ、宛名は茨木屋藤兵衞どの玉屋新兵衞……こりや申し、息子の判に違ひない、ワ。

三ぶ　違ひの無い筈だ。矢ツ張り新兵衞が判を盜んで捺したのだもの。

藤兵　コレ、三ぶ、無駄を云ふな。コレ、三四、これで新兵衞を強請つて、小女郎を手に入れる目論見だがどうだ。

ト三四郎、手を打つて

三四　妙々、面白い。こなさんが此方の息子を強請つて小女郎を手に入れ、それをもくにして息子を抛り出して、惚れて居る嫁のおえんを取つてしめて、玉屋の跡式を丸取りにする心。

三ぶ　そんなら三四郎さんは、新兵衞が內の嫁

藤兵　この藤兵衛は深川の小女郎。

三四　両方手を切らして

三ぶ　二人が思ふ通り、おれには祝儀をずつしりと

三四　さう鹽梅好うゆけばよいが。ハヽヽヽハヽヽヽ。

藤兵　ゆかいでよいものか。ゆくやうにして置いた今日の相談。

三ぶ　これから裏門の茶屋で

三四　一杯飲んでとつくりと

藤兵　三四郎。

三四　藤兵衛さん。

三ぶ　サア、ござりませ。

ト輕業の入れ替りのシヤギリになり、三人こなしあつて下座へ入る。ト華やかなる出の唄になり、向うよりおえん、振り袖娘の拵らへにて、おたけ傳吉、供に付き出る。後より伊三郎、紺の前垂れにて手籠に青物を入れ出て、花道にて

伊三　モシ〳〵、あなたは三十間堀の、玉屋の御新造様おやござりませぬか。

傳吉　ヤア、こなたは店へ出入りの、新橋の八百屋の息子。

たけ　ほんに評判の色男さんぢやわいなア。

伊三　何を又お竹どのが……イヤ申し、御新造様、よう御參詣なされましたな。

えん　アイ、伊三郎どの、思ひがけない所で逢ひましたわいなア。

傳吉　八百屋の息子が利いた風な。此方の御新造様を、生姜市ぢやアあるまいし、神明參りもよい。今日爰へお供したは、宇田川町の木綿問屋は、おえんさまの兄御ぢやに依つて、それで内を隠れて出て

たけ　コレ〳〵、傳吉どの、そりや何を云ふのぢや。おえんさまが宇田川町へ、お出でなされた事を、伊三郎さんは大事ないが、必らず内で云ふ事はならぬぞや。

傳吉　ハテ、合點ぢや。その代りに神明の輕業や、羊の見世物を見せるであらうの。

伊三　様子は何か知らねども、ハテ、ひどい所へ付込んで強請るのぢやの。

えん　イヤ、伊三郎どの、ちつと様子があつて、わたしが兄さんが宇田川町に居やしやんす事を、新兵衛さん、御両親にも隠してあれば、爰で逢うた様子を、此方の内へござんしても、必らず沙汰して下さんすなえ。

伊三　畏まりました。なんの申しませう。わたしも増上寺

の地中は、皆得意でござります。それで毎日ここらへ來て居りますれど、お前樣にお目にかゝつた事は、內方へ參りましても、とんと知らぬ顏。

えん　そりや忝なうござんす。そんならお竹、傳吉には輕業を見せて、わしと其方は、どこぞ茶店に待つて居やうわいな。

傳吉　有り難い。ても氣の好い御新造さんだ。善は急げと云へば、どこぞ茶屋へお供して、おらア輕業と出かけませう。

たけ　申し、思ひ出した事がござりまする。此方の仕事師金太郎どのゝ妹お梅どのが、慥かこの神明樣の內に、茶屋を出して居やしやんすと聞きましたが、それへ參りませうかえ。

伊三　ア、イヤ／＼滅相な、お梅が見世へアノ御新造樣を連れまして行てはわしが

ト恟りする。

たけ　エヽ、何と云はしやんすえ。

伊三　イヤサア、お梅さんの茶屋は、いろはというて、彼方の正面。それで、オヽ、いつでも人が大勢、茶を呑んで居れば、そこへ御新造樣を連れ申して行くは、お惡からうと、ハイ、存じます。

傳吉　ハヽア、さてはお梅を皆張るのぢやな。

伊三　張る段ではない。神前でいろはのお梅というては、淺草の銀杏娘、難波屋が呆れますよ。

えん　お竹、そんな所へは、わしやよしにせうわいなア。

たけ　そんなら伊三郎さん、お前、案內を知つて居やしやんす事なれば

伊三　密かな所へお供いたしませう。

傳吉　おれは輕業へ。

たけ　コレ、早う戾らんせや。

傳吉　たつた一切り。

伊三　サア、御新造樣。

えん　伊三郎どの、おたけも來や。

ト辻打になり、おえん皆々下座へ入る。矢張り辻打にて、向うより金太郎、半纏股引にて、羊を引いて出て來る。桃九郎、右の羊をせり合ひながら出て來る。

桃九　ハテ、どう云はつしやつても、こなさんが無理だ。無理でごんすよ。

金太　なんだ無理だ。飛んだ奴ぢやアないか。コレ、おれも三十間堀の玉屋の抱への仕事師、産毛の金太郎と人に

知られた男だ。それをうぬが潰すのか。途方も無い奴ぢやアないか。

桃九　コレ、物をよく合點して見たがよい。この羊はおれが米櫃。こなたに貸してやると、今日から咽喉が干上がる大事の代物でごんす。

金太　なんだ代物だ。白もんだの黒もんだのと、上野ぢやアあるまいし、なんでもこの羊はおれが借りたよ。

桃九　コレ／＼、わしがなんぼ見世物師ぢやと云うて、其やうに無理を云ふものではごんせぬわいの。

金太　無理を云つたらどうする。コリヤ、無理は男の常ぢやものと、豐後にさへ語るぢやアないか。高でわりやア見世物の木戸番だ。この金太郎は辱くも、三十間堀では箔の付いた男だワ。オヽよ、通り者だわえ、

桃九　通り者もすさまじいわえ。通り者がそんな無法な事を云ふものかえ。

金太　此奴が／＼／＼。産毛の金太郎を凹ましやアがつたな／＼。さうわれに潰されちやア、金太郎が男が立たぬ。オヽ、立たぬ／＼。中氣病の夜這ぢやアないが、立たないぞ／＼。

ト仰山にやかましく云ふ。また辻打になり、向うより新兵衞、着付け羽織にて出て來て

新兵　アイ／＼、金太郎ではないか。この人中で何を其やうに小言を云ふのぢや。

ト金太郎、新兵衞を見て

金太　ヤア、こりやアおらが若旦那、ようお出でなされました。

トちよつと辭儀をして、

ヤア、旦那が見えたからは千人力だ。オヽ、剛氣だ、恐しいぞ。誰れだと思ふ、三十間堀で藍問屋の玉屋新兵衞さまだぞ。新さんだわえ／＼／＼。

新兵　ハテ、騷々しい。そりや何を云ふのぢや。

金太　イヤ、旦那、聞いて下さいまし。あの野郎めが、わしを凹ますゆゑ、どうも立ちませぬ。

桃九　エヽ、さてはお前樣が、聞き及んで居ります三十間堀の、玉屋の新兵衞さまでござりますか。

新兵　アイ、わしが新兵衞でござるが、こなさんは、この神明や淺草で、よく見る顏ぢやが、此方の金太郎と、何をせり合ふのでござんす。

桃九　イヤ、何も競合ひは致しませぬが、わしも引ッ張り物で人に知られた、桂川屋の桃九郎といふ者でござりま

す。今日の物日をきッかけに、この間兩國で見せて居りました、羊と女の角力取り、それをこの神明へ持つて來て、今日初日を出さうと、この羊を引いて來る道で、あの人が、わしに貸してくれとの事なれど、肝心のこの羊を貸しては、跡の評判が惡うなりますゆゑ、貸す事はならぬと云へば、立つのイヤ立たぬのと、無理ばつかり云はるゝのでござりまする。

新兵　ハテ、わしは何ぞ、もそつとした事かと思へば埒もない。コリヤ、金太郎、てまへも見世物の羊を借りて何にするぞ。馬鹿な者ではあるぞ。

金太　イヤ申し、旦那、馬鹿ぢやアない、聞いて下さいまし。わしも始終お前のお世話になつて居れど、どういふ事か工面が惡うて彼れこれぢやゆゑ、さる物知りに尋ねたところが、そりやア運の惡いのぢや、運の強うなるやうに、前方も專ら流行つたやうに、生れ年より七ッ目の干支を、紋に付けるなりと、また内に額にしてかけて置くなりとしろ、さうすると開運というて、運が強くなると教へてくれたれど、紋に付けやうにも著物は拵らへず、額をかけやうにも、お前樣の所の居候ふなれば内は無し。ア、どうせうなアと思ふうち、今日この神明へ來る道で、あの見世物師が引いて來るこの羊、これ幸ひと、おれは丑の年なれば七ッ目は羊、こりやア縮に着くよりは、生の者を引いて歩いたら、運が強うなる事もあらうかと思うて、それで羊を貸してくれいと頼むのでごんすわいの。

桃九　イヤ、この節澤山な家なら貸しませうが、羊はどうも貸されませぬ。

新兵　そりやア商賣物だから、貸されぬは、尤もぢや。コレ、金太郎、われも樣々の無理を云はずと、羊を借りる事は、よしにしろ／＼。

金太　でも、斯う借りかゝつては。

桃九　ハテ、その代りおぬしが七ッ目の羊を、額にでも懸地にでも、おれがさう云うて、鳥居清長に書かせて遣らうわサ。

金太　鳥居なれば生寫しであらう。そりや有り難い。

桃九　そんなら此方のこの羊は。

金太　大事の旦那の挨拶ゆゑ、折角借りかゝつた羊なれど、もう／＼免してやるワ。

桃九　ヤレ、嬉しや／＼、それで此方も落ち付きました。ア、どうでも通と呼ばれる玉屋の新兵衞さま、筋道の

分つたものでござります。

金太　コリヤ、この產毛の金太郎はどうだ。

桃九　イヤ、その產毛がこぐらかつて、筋道が分り兼ねまする。

金太　べら坊め。

桃九　ハヽヽヽ。ドリヤ、見世を出しかけようか。

ト また辻打になり、桃九郎は羊を引いて見世物小屋へ入る。

新兵　ハテ、騷々しい輕業の囃子ではある。

金太　イヤ、面白い〳〵。大方可愛らしい小しんめが綱渡りをヨウ。

ト 綱渡りの眞似をして居る。

新兵　コリヤ、金太郎、馬鹿を盡さずと、用がある、爰へ來い。

金太　ハヽア、東西々々。

ト 下座の鳴り物とまる。金太郎、新兵衞が側へ行き。

何でござりまする。

ト 新兵衞こなしあつて

新兵　おぬしが爰へ來る道で、彼のお人を見かけはせなんだか。

金太　彼のとは、エヽ、仲町の小女郎さんかえ。

新兵　イヤ、小女郎が事ではない。九十郎さまを見かけはせなんだかと云ふ事よ。

金太　九十の銅脈には、とんと逢ひませぬ。

新兵　面妖な。旁々今日爰へござりませいと、云うて置いたのにどうして。イヤ、金太郎、おぬしを賴む程に、是非九十郎さまはござる筈なれば、この社內の茶屋から門前の居酒屋を、一々尋ねて來てくりやれ。

金太　アイ〳〵、合點でござりまする。わしも妹が見世へ用もあれば、その次手に尋ねて見ませう。

新兵　コリヤ〳〵、お目にかゝつても、いつものやうに又醉うてござらう程に、必らず詞を荒う云ふなよ。

金太　承知々々。

新兵　早く行け〳〵。

金太　アイ〳〵、迷子の九十郎ヤアイ。どん〳〵しやんしやん。

新兵　これはしたり、また馬鹿を。

金太　それでも張合ひがござりませぬ。

新兵　默つて行け。

金太　オツトセウ。

トロに手を當て、ツイと下座へ入る。合ひ方になり、
新兵衛一人殘り、こなしあつて、

新兵　ア、、どう思うて見ても、つまらぬは九十郎さまのお身の上、お國へ御歸參の事は思はずに、只酒が好きで道樂ばつかり、又お妹御の小菊さまは辛い勤めに……それをこの新兵衛が、ア、、思ひ廻せば廻す程……こりや九十郎さまより、おれが身の上。さりとてはつまらぬものぢや。

ト思ひ入れある。向う揚げ幕の内にて

蛇之　サア／＼旦那、ようごんす／＼。

たゞ　此ただ六が呑み込んで居ますよ。

トこの聲にて、新兵衛こなしあつて、ちよつと片蔭へ隱れる。ト向うより蛇之助、たゞ六、道樂者の拵らへ。九十郎、隨分汚なき、黑羽二重の着流し、大だらの壹本差し好みの形にて、蛇之助たゞ六に手を引かれ、生醉の體にて

九十　二人ともよいか。

蛇之　ハテ、ようごんす。

九十　彼奴、ぶッ放してしまはうと思ふのに、わいらが留めるゆゑ、マア、その分に赦してくれるぞ。命冥加な野郎でござるわえ。

ト云ひ／＼出て、三人本舞臺へ來る。

たゞ　イヤ、旦那、昨夜からお前におぶさつて、猿子橋で居續けして、面白く騷いで居たのに、俄に思ひ出したやうに、この神明へ用がある、二人ともに歩べと、無理に連れてござりましたゆゑ、ナア、蛇之助。

蛇之　それでおりや、食ひかゝつた鮪の刺身を打ッちやつて來たが、旦那、これから直ぐに三田の三角か、麻布の藪下へでも出かけるのでごんすか。

九十　サア、わいらを爰へ連れて來たは、女郎買ひではない。今日この神明で身共が逢ふ者があつて、馴染のおぎんが、マア／＼と、留めたを無理に振り切つて爰へ來たが、どうだ、彼のおぎんめは、兎角おれを好くしをるが、彼奴よりは又伏見町のちくさめも、捨てられぬわえ。

蛇之　その筈サ。ちくさめは、あそこのお職でごんすわいの。

たゞ　ほんに、その伏見町から、この帳の下がりを、若い者めが度々取りに來ますが、蛇之助やわしが顏で下がつて來た勤め、この間の居續け、晝夜の仕まひが壹貫、三人で三貫なれど、居續けを籠めずに三分寄越せと迫み立

てをるを、コリヤ、氣遣ひするな、鵜飼九十郎さまだ、壹文でも麁相のある旦那ぢやアないと、太平樂を云うて置いた。あいつも遣つて置きやア又引けますわナ。そればかりぢやアない。伏見町が塞がるとお前も、折角馴染んだ花魁に逢はれませぬぞえ。

九十　サア〳〵、いゝて〳〵〳〵。伏見町の下がりも猿子橋の昨日からのも、承知だ〳〵。

蛇之　モシ〳〵、旦那、そればかりぢやアない。おれが顏で借りてある夜鷹蕎麥と、夜明かし屋の酒代、兩方で四貫八百、こいつも一緒に拂つてもらはぬと、蛇之助の顏が利きませぬ。

九十　ハテ、そんなに迫り込むなえ。身共は誰れだ、鵜飼九十郎さまだ。貳朱や三朱の事で、世間を塞げてよいものか。くわつとコレ、拂つてくれるワ。

蛇之　でも先からわしらをせたげるに依つて。

九十　サア〳〵、お拂ひを遣はすわえ、

たゞ　吉原が三分、

蛇之　蕎麥と酒代が四貫八百。

九十　氣遣ひ致すな。ソリヤ。

ト懷より紙に包んだ簪を貳本出して、兩人に壹本づゝ渡す。此うち新兵衛、見て居る。

たゞ　ヤア、こりやア鼈甲の簪。

蛇之　しかも二本。

兩人　これは。

九十　仲町に勤めして居る、おれが妹めをいたぶつて、差して居たこの簪を、無理に引たくつて來た。なんと面白いか。

トこれを聞いて新兵衛、思ひ入れ。

兩人　ムウ、そんならこの簪を。

九十　ぶツ殺してなりと賣るなりと、よいやうにして勘定してやつてくれろ。コリヤ、剩つたら直ぐに伏見町へ出かける。

蛇之　この簪がどの位にならうかの。

九十　ハテ、素人目に見てさへ鼈甲、呑み込ませたら二兩は貸し居るであらう。

蛇之　そんならちぎりへぶツくらはせて見よう。

たゞ　晩には、大橋と奢らうわえ。

蛇之　モシ、旦那、お前も用をしまつたら

たゞ　いつもの耳切おばアが所に待つて居ますよ。

九十　オヽ、サ、山鯨を買つて置けよ。

兩人　そんなら旦那。
九十　コリヤ、酒はこの中のは呑めぬぞよ。
兩人　合點でごんす。
ト辻打にて兩人、引返して入る。新兵衞、見送りながら前へ出る。九十郎こなしあつて振り返り、新兵衞と顏見合せ
九十　ヤア、新兵衞か。
新兵　九十郎さま。エヽ、
トきつと云はうとして思ひ入れあつて
これまでいろ／＼樣々申しても、お聞き入れのない糠に釘。
九十　豆腐に鎹打つ同然ぢや。新兵衞、意見も古臭い。よしにせい。
新兵　サア、これまでのしだら、申さぬとても、よう御承知でござりませうが、それに云ふのは無益。併し九十郎さま、お前樣にはお國にござる御兩親樣の事は、何とも思し召さぬか。
九十　親仁や母者人が、好い事して拵らへたおれが身の上。誰れも賴みもせぬのに產んでもらうて、いま浪々する事を思へば、却つて恨めしい。僅か五百石か七百石の親を持つたが口惜しい。あの衆達がおれを產んでくれずば、どこぞ好い大名の腹へ宿つて、生れ落ちると若殿樣、榮耀榮華に育てられ、したい事はし次第。それを思へば、僅かな陪臣の腹へ宿つたが、口惜しうて／＼ならぬ。
新兵　すりや、親御へ孝行といふ事は、御存じござりませぬか。
九十　孝行とは雷干か澤庵、もう奈良漬は酒臭うて、もういけぬ／＼。
新兵　ソレ、其やうに何を申しても、茶になさるお心ゆゑ。
九十　ハテしつこい。新兵衞、もう何も云やんないの。
新兵　イヤ、云ふまいと存じて居てもあんまりな。申さにやなりませぬ。コレ、九十郎さま。
ト合ひ方へ取る。
お前樣は誰れあらう、下總結城の御家中で、物頭もお勤めなさるゝ、鵜飼兵太夫さまの御子息。私し親が爲には大恩ある古主でござりまするぞえ。思ひ出せば私しが十五歲の時、傍輩の悴と、かけ的の勝負が云ひ募り、口論になつて、互ひに年のゆかぬ悲しさ、相手の悴を、手にかけ、既に下手人に極まりしを、御主人兵太夫さまのお情にて、命助かり、親子ともにお國を追放、私しゆゑ親

新右衞門も浪人いたし、この江戸へ來て樣々と流浪の其うちに、母に後れたを勿怪の幸ひ、せう事なしに三十間堀の藍問屋、今の玉屋へ私しを連れての入り聟。光陰矢の如しと、もう十年跡、次第に寄る年波どもには、頼しい後匠の氣兼ねして、町人なれど人となつたるこの新兵衞。ところに思はず去年、兩國の橋詰めにて、フトお前にお目にかゝり、互ひに幼な顔を見覺えて、名乘り合うたるお主の若旦那、お身の上の樣子、又お妹御の事も、とつくりと承り、親どもにも申し聞かせ、それから此方へ及ばずながら、私しがお前をお世話申すと、云ふも仰山なれど、隔てた母や内外の者の手前を憚め、いろ〳〵との心盡し、こりや恩に被せまするのではござりませぬ。お主ぢやもの、家來の役。まだ〳〵この上に、どのやうな苦勞を致しても、私しが身は厭ひませぬ。何卒一日も早くあなたのお身の上。妹御御兄弟ともに御歸參させ元の鵜飼の若旦那と、以前のお身の上に致さうと、思ひ詰めたる新兵衞が、心の内でその事ばつかり。ほんに寸の間もあなたの事を、思はぬ日とてはござりませぬわいの。それにあなたは晝夜の酒浸し、人がましい所でもある事か、居酒屋ぢやの切り店ぢやのと、附合ふ友達も人柄の悪い細帯仲間、悪黨者に唆されて、世間も構はずお姿と云へば、忠臣藏の定九郎を見るやうな、コレこの形が……結城の御家中、鵜飼兵太夫さまの御子息九十郎さま、若旦那樣と云はれますか。それに又、好いかと思うて、お前が貰つてやらつしやりました、可哀さうに勤めしてござる、妹御に度々の金の無心、剰さへ簪まで引拔いて最前の仕儀、頭の道具は苦海の飾り、面を作る女郎の身の上、内證は火の車、貧乏な世帶より苦しい事を思ひ遣りも無く、妹御の難義も構はず、たゞどぶろく酒に身を忘れ、親御の事も妹御、家來の事も思はずに、その揚句は泥坊仲間へ引込まれ、お先に使はれ捕へられ、千住か鈴ヶ森、もしも江戸の土にならつしやりましたなら、お國の御兩親の御歎き、いま御浪人でも鵜飼の兵太夫さまの武士は、どこで立ちませうぞ。ちつとは御思案あつて、侍ひらしいお心になり、お身持ちを改めて下さりませ。今日爰でお目にかゝるも、この御意見を申さう爲。斯う申したら、さぞお腹が立ちませうが、御料簡なされて、御行跡をお改めなされて下さりませ。新兵衞めが一生のお願ひ、どうぞ聞入れて下さりませいの。

ト新兵衞、いろ〳〵よろしくある。九十郎もこなしあ

つて

九十　ハハア、誤まつた／＼。新兵衞、忝ない。古主なればこそ、この惡黨なおれを、誰れが世話したり、其やうに意見してくれうぞ。思ひ廻せば廻す程、我が身ながらも愛想の盡きた身の持崩しやう。今おぬしが深切を、いろいろ聞いて發起した。妹をせがみ其方をいぢり、せびり取つた金は湯水の如く、パツ／＼と使ひ捨てし、その冥加に盡きた九十郎、フツ／＼ともう酒も廢めて、今日から禁酒、心も改め、おぬしが世話で歸參して、元の侍ひになつて、親人に孝行盡さう程に、新兵衞、必らず見捨てずに、今までの通りに世話燒いてたも、其方に見放されたら、誠に木から落ちた、さりとては便りの無い身の上ぢやわいの。

トほろりと思ひ入れ。

新兵　すりや、いま私しが申した事を御承知あつて、お身持ちを改めさつしやりまするか。

九十　ハテ、綿蠻たる黄鳥丘隅に止まる。人として止まる時に止まらずんば、鳥にだもしかず。

新兵　流石は兵太夫さまの御子息。

九十　コレ、誠の鵜飼九十郎になつて見せう。

新兵　さうなれば私しが喜び、この上やござりませうか、

九十　新兵衞が志し、過分なと思うたら、醉がさつぱりと醒めてしまうた。アヽ、どうぞ熱燗でグツと一杯。

新兵　申し、いま禁酒と仰しやつたぢやござりませぬか。

九十　サア、禁酒堅めに、ならう事ならたつた一杯、茶碗で引つかけたい。

新兵　いま意見の下から、さう酒がお好きでは困つたものぢや。

トこなし。向うよりお鹿、惡女形、身持の拵らへ。前垂かけにて走り出て、九十郎を見付け

しか　ヤア、九十さん、そこにお出でかいなア。コレ、逢ひたかつた／＼。

ト九十郎に取りつく。こなしあつて。

九十　エヽ、いま／＼しい。様々な奴が出てうせるワ。

ト蹴飛し新兵衞へ氣兼ねのこなし。お鹿、蹴られてその形に舞臺を叩き、

しか　コレ、胴慾な男づら、只ならぬわしが身を、さう酷う蹴飛ばすといふ事があるものかいなア／＼。

九十　エヽ、いやな。又おのれは。

ト又かゝる。新兵衞ちよつと留めて

新兵　マア、待たつしやりませ。見れば高が女の事、さう剛氣にせずと、マア樣子を。
九十　新兵衞、ひよんな事をして、外聞が悪いわいの。
しか　たんの外聞、九十さん、濟まぬぞえ／＼。
　ト猛り立つて云ふ。
新兵　コレ／＼、其やうに仰山に云ふまい。マア、譯はどうぢや。それを靜かに云うたがよい。
しか　コレ申し、聞いてくんなさい。わしや永代の橋詰めで、名代の茶見世。
新兵　ムウ、さては高尾と云ふのか。
しか　イヽエ、その隣の紅葉茶屋、わしや、お鹿というて主ある身の上、稼ぎの爲の水茶屋の、誘ふ水あらば去にたう思ふ下心の所へ、あの九十さんが毎日々々わしを張りに來て、茶代は無しに煙草のみ、雪の朝の股火の火、時雨にちよつと傘を、貸しても返さぬ道樂男、此方に思へば彼方にも、重たい尻を床几に据ゑ、太つた體の逞しさに、あのゝものゝとじやらくらが嵩じて、高尾の宮の柳の木蔭で、忍び逢うたは幾度か、阿漕が過ぎて度重なり其おどもりが折れ込んで、コレ見な、わしや此やうにぼてれんになつたわいなア。
　ト腹を見せる。新兵衞、九十郎を見て呆れし思ひ入れ。
新兵　アノ、こなさんをか……ても物喰ひのよい。
九十　ほんの寒さの内の藥喰ひ。一人で樂しまうよりは增ぢやと、ツイ据ゑ膳を喰ひ過して、あの通り身持になつたと、彼奴の亭主が、首代に七兩二分渡すか、但しは首を渡すかと、毎日々々の催促。元より金は無し、と云うて首も又渡されず、イヤモウ、ほつと困つて居るわいの。
新兵　こりやお前も、餘ッぽど虫の好いお方ぢやわえ。
九十　おぬしが手前、面目ない／＼。
　トこなし。
しか　サア、九十さん、どうして下さんす。お前の返事次第で、主ある者を此やうに、身持にしては濟みませぬ。キッと思案がござんす程に、どうなりとも譯を立てゝ下さんせいなア。
九十　新兵衞、其方に云ふも近頃氣の毒ながら、とてもの世話次手に、どうぞ彼れを。
新兵　ようござります。
　ト紙入れより拾兩包みを出し
　コレ、爰に紺屋町で取つた藍の仕切りが拾兩ある。これを遣るから、この後若旦那に云ひ分はあるまい。これが

即ち手切れ金、拾兩は過ぎるけれども、せう事がない。
トお鹿に金を渡す。
しか　ヤレ／＼、嬉しや。さてはお前は聞傳へて居る、アノ九十さんを世話さしやんす、玉屋の新兵衞さまぢやな。これを此方の男に遣つたら、さぞ喜びませう。わしもこんな嬉しい事は無いわいなう。
新兵　ハテ、無駄言云はずと、早く歸つたがよい。
しか　ヤレ／＼、早うこの金を男に渡し、譯立つて、お腹の嬰兒も産落し、九十さんと女夫になるを樂しみに。コレ申し、産んでしまうたら、青田八反の初物を上げうぞえ。
九十　エヽ、情ない……キリ／＼うしやアがれ。
しか　エヽ、こちや否いなア。申し、新さん、いかいお世話でござんした。忝なうござんす。
トお鹿、いろ／＼こなしあり、向うへ走り入る。ト新兵衞見送り
新兵　申し、旦那、お前樣も、さま／＼な事をして、畢竟あれも酒の上の事でござりませう。これまでの事は是非がないが、この上キッとお身持ちを。
九十　ハテ、改めて見せうワ。
新兵　それに違ひが無くば、私しも嬉しうござりますが。
ト云ひ／＼九十郎が形を見て、氣の毒さうに袖を明けて見て
新兵　なんぼ春になつても、まだ餘寒の強いに、見苦しいこれ一つでは。
九十　寒うて堪らぬ。この著物の汚れ鹽梅、苔の乘つた所は、手水鉢にしたら値がするであらう。
新兵　幸ひこの近所の日蔭町に、私しが念頃な古着屋があれば、それへお供して上下を召替へさせませう程に、少との間、爰に待つてござりませ。
九十　新兵衞、おぬしはどこへ行きやる。
新兵　わざとも參らねばならぬ神明樣、せめてはあなたの御歸參の事を。
九十　なんの神明を頼んだとて、
新兵　ハテ、勿體ない、信あれば德あり、兎角神佛のお力で元のお身の上。
ト思ひ入れあつて
ドリヤ、詣つて參じませう。
ト唄になり、新兵衞こなしあつて、下座へ入る。ト合ひ方になり、九十郎こなしあつて向うを見て招く。お鹿、そろ／＼立戻つて來て

しか　申し、旦那。
九十　耳切お婆ア。
しか　コレ。
ト懷より風呂敷包みを出し
深川から來たこの衣裳。
九十　妹めに質の入れ替へに取りにやつた、その衣裳の風呂敷を。
しか　身持と見せてコレ拾兩。
ト最前の金を出す。九十郎取つて
九十　骨折り賃は、今夜ぬしが內で。
しか　そんなら、みんな呼んで置きませう。
九十　なんぼ利口に見えても、新兵衞は正直者。
しか　まんまと首尾よう。
九十　コリヤ。シイ。早く行きや。
しか　アイ。
トこなしあつて、お鹿は向うへ走り入る。九十郎、以前の金を出し、數へながら
九十　大分拍子がよいわいの。
ト思ひ入れある。これにてチヨン〳〵と道具廻る。

本舞臺、同じ社內の茶屋の體にて、いろ〳〵と掛け行燈、葭簀かけ、茶棚茶釜、奇麗に、これも好みの道具にて、この見世の床几の端に勇藏、着付け羽織、旅侍ひの拵らへにて腰を掛け、煙草のんで居る。お梅、娘の形にて茶を汲んで居る。この見得、宮神樂にて道具とまる。
うめ　申し、お侍ひ樣、も一つおあがりなされませぬか。
勇藏　イヤ〳〵、先程より餘程茶を喫べたれば、もうよしに致さう。
ト此うち下座より伊三郎、矢張り最前の籠を提げ、ツカツヽと出て勇藏を見て、ヂツと後へ扣へる　お梅も邪魔な勇藏早く歸したきこなしいろ〳〵あるべし。
うめ　ほんに申し、あなたは最前からたつたお一人、お莨ばかりあがつて、往來の通りを眺めてお出でなされまするが、どなたぞお連れでもお待ちなされまするのかえ。
勇藏　いかにも、身共は近國者、ちつと用事あつて、家來を使ひに遣はしたが、その歸りを待ち合せて居るが、聞いたに勝る繁昌の土地、いづれへ參つても、賑はしい事ではあるの。

ト此うちお梅、伊三郎に、云ひたい事がある待つて居ろと仕方する。伊三郎は勇藏を早く歸せと、兩人手先でいろ〳〵と仕方。勇藏これを見て

勇藏　コレサ……コレサ、そりや何をしやるぞ。

うめ　エヽ、これかえ。

勇藏　手でこれ〳〵は。

ト　お梅がしたやうにする。

うめ　アノこれは。ほんに、蜘蛛の巣を取らうと思うて。

勇藏　ムウ、我が脊子が來べき宵なりさゝがにの

ト伊三郎が方を見て

まだ暮れぬうちから蜘蛛の巣を取らうとは、ハテ、いづくも變らぬ色の世界ぢやなア。

トこなしある。これにて伊三郎ちよつと隱れる。お梅も辛氣の思ひ入れにて

うめ　申し。

ト茶臺を突付け

まだお茶を上げませうかえ。

勇藏　ハテサテ、よしに致さうと云ふのに。

うめ　このまた御家來さんは、遲い事でござりまするな。

ト始終伊三郎の方へこなしある所へ、向うより有介、ツカ〳〵と出て來る。

有介　お旦那これに。

ト勇藏が床几の側に蹲ふ。

有藏　家來有介、待ち兼ねて居た。して彼の一儀は。

有介　慥かに鵜飼九十郎さまは。

勇藏　コリヤ。

トあたりへこなし、有介心得、ちよつと囁く。

勇藏　ムウ、して、いよ〳〵、身に引受け世話いたす者は。

有介　三十間堀の藍問屋玉屋。

ト云はうとするを

勇藏　もうよい〳〵。大方は解つた。また所を變へて通りな眺めう。有介、其方も心を付けて供いたせ。

うめ　もうお歸りなされまするかえ。

勇藏　いかい世話になり申した。

ト合ひ方になり、有介を連れ、花道の角まで靜かに來て立ちどまり、羽織の後より十手を前に廻し、有介に目くばせして思ひ入れあつて、有介を連れ、向うへツィと入る。最前より伊三郎、勇藏の樣子を見て、合點の行かぬ思ひ入れあつて、向うを見い〳〵、ソロ〳〵前へ出る。お梅も右の通りにて互ひに顏を見合せ

うめ　申し、伊三郎さん。
伊三　今の侍ひの樣子。
うめ　家來が云うた三十間堀の藍問屋、玉屋といふを打消し
伊三　腰から前へ廻したは慥かに十手。もしも又新兵衛さまのお身の上に。
　ト思案する。
うめ　コレイナア、何を其やうに思案顏。三十間堀に玉屋ばかりが藍問屋ではあるまいし、まだ外になんぼも同じ問屋があれば、お前が其やうに案じる事はござんせぬわいなア。
伊三　成る程、それもさうぢや。
　トこれより右の合ひ方になり、揚弓の音始終とも聞える。
うめ　それよりは、わたしやお前に何や彼や、たんと用があるわいなア。
伊三　さうであらうと思うて、おれも得意廻りの次手に、ほんに爰へ來る道で、玉屋の御新造樣にお目にかゝつて既にこの店へお出でなさるゝのところ、ちよぼくさ騙して、北の角の茶屋へ連れ申して行つたわいの。
うめ　ムウ、そりやおきよさんの所ぢやの。
伊三　おきよか知らぬけれど、爰へ連れ申しては、おれがおぬしに話しがならぬに依つて。
うめ　なんの大事ござんせぬ。兄さんの世話にならしやんす、お出入りの玉屋の御新造樣なら、こちや引ッとつても構やせぬ。それにお前はおきよさんの所へ連れ申して行かしやんすは、常からの素振り、ハテ、お前は強いおきよさんが贔屓ぢやなア。
　トびんとして腹立てるを、伊三郎こなしあつて
伊三　こりや又をかしい事を云ひかけるな。
うめ　をかしけりやお笑ひなされませ。
伊三　オヽ、笑はう／＼。申しお梅さん、この伊三郎はお前ゆゑ、芝口中で笑ひ物になつて居ますぞ。業腹なべら坊め。
　トむつとするを、お梅こなしあつて
うめ　コレ、伊三郎さん、なんでわしゆゑに人に笑はれしやんすのぢやえ。
伊三　笑はれいで。何も知らぬかと思うて馬鹿らしい。
うめ　そりやマア何をいなア。
伊三　コレ……この注文の通り、三葉か蕨の子供から互ひ

に法蓮草、末は芽獨活と約束したに太慈姑な、餘所の嫁菜とツイとゆでてしまうた。跡で一人がどう松露、くづくづと思うて居るわえ。

うめ　コレ、芥子ほども覺えは無いわいなア、

伊三　イヤ、この耳に少ときくらげな事があるゆゑ、思案椎茸する程、今までおれをようつまみ菜、それで思ひきり蕪、もう〳〵これから、ふッつり物を岩茸々々。

うめ　ムウ、聞えた。そりや餘所からわしを嫁にくれいと、云うて來た事を聞かしやんして。

伊三　サア、其わけぎが立たぬうちは、滅多に青海苔にもならぬ。

うめ　氣遣ひして下さんすな。お前より外、殿御は持ちませぬ。たとへ兄さんがどう云はんしても、外へ縁付は麩海苔ぢやわいな。

伊三　イヽヤ、寒天が行かぬ

うめ　アレ又、片栗うたぐりな。

伊三　ハテ、餘所の女房、九年母になる氣であるのか。

うめ　さうしさうなわたしと思うてかいなア。

伊三　サア、それでも。

ト籠の内をいろ〳〵尋ね

もう、コレ、何にも云ひさうな青物が無い。エヽ、なんぞ云ひたうても云はれぬ。ア、コレ、一つ殘つた、柚ない事ぢや。

ト柚を見せる。お梅こなし。

うめ　オヤ〳〵馬鹿らしい。

ト笑ふ。

伊三　嬉しや、機嫌が直つたぞ。

うめ　わたしよりお前が。

伊三　今のは洒落。これからほんまに、お梅、其方に話さねばならぬ事がある。

うめ　そんならちよつと。

ト伊三郎の手を執る。

伊三　コレ、宵中にどこへ行くのぢや。

うめ　アノ裏門の、いつもの所へ行つて、とつくりと。

伊三　おやと云うても。

うめ　大事ないわいなア。

ト無理に連れて行かうとする。伊三郎向うを見て

伊三　ヤア、ありや兄貴、金太郎どのが爰へ見える。

うめ　ほんに兄さま、幸ひな所へ、いつそさう云うて。

伊三　イヽヤ、今云うては悪い。

うめ　そんならマア揚弓場へ。
伊三　イヤ、金太郎どのに用があるて。
うめ　ハテ、ツイ來て下さんせいなア。
ト宮神樂になり、お梅、無理やりに伊三郎を連れて下座へ入る。矢張り宮神樂にて、向うより金太郎、ウソウソ出て來て
金太　ハテ面妖な。社内は殘らず、表門から裏門の居酒屋蕎麥屋まで尋ねて見ても知れぬのは、九十は去なれたさうな……チャン父よ母よと。
トめりやすな唄ひながら
お梅や〳〵、どこへうせた。見世を明けて置いて……これもソレ、手水に行き居つたさうな。
ト呟いて居る所へ、奥より三ぶ、ツカ〳〵と出て
三ぶ　コリヤ、金太郎。
金太　ワア、。
ト飛退き、三ぶを見て
船宿の三ぶめ、なんだ、恟りさしやアがつた。
三ぶ　コレ、われが親方の玉屋新兵衞さんはどこに居る。先刻から方々尋ねたが、どうも知れぬ。
金太　ハテ、よく似た事があるな。おれも人を尋ねて居るが今に知れぬ。
三ぶ　面妖な。どうして逢はぬしらん。
金太　どうでもおぬしは大佛か。
三ぶ　何をべら坊め。
金太　サア、前は逢うたれど、近年はとんと逢はぬ。
三ぶ　此奴人を茶にしをるな。
トきつとなる所へ、向うよりバタ〳〵にて、傳吉、息を切つて走り出て來、
傳吉　コレ〳〵、金太郎どん爰にか。いま宮の後で侍ひが此方の若旦那新兵衞さまを、十手で打つて居るわいの。それで知らせに來た。おらア御新造樣を尋ねにやならぬ。
ト云ひ捨て下座へ走り入る。
金太　ヤア〳〵、なんだ。若旦那新兵衞さまを、侍ひが十手で。
ト駈出すを三ぶ、引廻して
三ぶ　イヤ、新兵衞が打たれて居れば、次手におれも。
ト駈け出す。金太郎、引留め
金太　われより先へおれが行く。
三ぶ　何を小癪な。

ト面白き神樂になり、兩人さま〴〵可笑しき立廻りよろしくあつて、トヾ金太郎、三ぶを突き倒し、向うへ走り入る。三ぶも跡より追ひ駈け入る。始終右の神樂バタ〳〵にて向うより九十郎走り出て、いろ〳〵して茶屋の床几の下へ隱れたり、また屋根へ駈けあがらうとしたり、いろ〳〵慌て狼狽へ居る所へ、向うより蛇之助、走り出て九十郎を見て

蛇之　コレ〳〵旦那、先刻の辯は、たゞ六が働きで都合よくやりました。サア、これから大橋へ出かけませう。

九十　イヤ、そこどころぢやない。捕り手ぢや〳〵〳〵。國元から身共を召捕りに來て居るわい 。

蛇之　ヤア、。

ト愕りする。九十郎、始終慌て狼狽へるこなし。

九十　アヽ、羽が欲しい。飛んで逃げたい。蛇之助、どうせう〳〵。

ト狼狽へ騷ぐ。蛇之助、同じやうに、うろ〳〵して

蛇之　どうせうと云うて譯が知れない。

九十　エヽ、コレ、早く逃げたい〳〵。

トいろ〳〵騷ぎ廻りて、フトこなしあつて、蛇之助が帶をクル〳〵と解き

こりや何するのぢや。

ト蛇之助もこなしある。九十郎、無理に蛇之助の半纏を引剝ぐ。蛇之助、裸になつて

蛇之　こりやア旦那、どうさつしやります。

九十　どうのかうのと頓著はない。姿を變へて身共は逃げるのぢや。

ト云ひ〳〵半纏を着て尻をからげる。

蛇之　それではわしがつまらない。

九十　ハテ、この場に及んで、われに構ふものか。

ト蛇之助の手拭を取つて頰冠りにして

さうぢや。

ト下座へ入る。

蛇之　コレ、旦那、コレ〳〵〳〵〳〵。

ト云ひ〳〵蛇之助も追ひ駈けて入る。これまで始終右の神樂にて、靜めた、好みの合ひ方になり、向うより勇藏、十手振上げ、跡すさりに出る。新兵衞、中腰にて、後より有介、新兵衞を中へ引ッ挾み、三人、靜かにチョ〳〵と、出て來て、花道にて、勇藏キッと擬勢新兵衞まづトこなしにて本舞臺へ勇藏有介、付け廻しツカ〳〵と來て

勇藏　當所の町人、玉屋新兵衛とは其方か。
新兵　ハッ。
勇藏　然らば結城の家中、鵜飼兵太夫が家來、堤新右衛門が忰、慥かに新十郎、そちや身共をよく存じて居るか。
ト新兵衛こなしあつて、勇藏が顏を、つく〴〵と見上げ
新兵　成る程、同じ御家中、氏原の若旦那勇藏さまと、よく見覺えて居ります。
勇藏　國元にては互ひに前髮立ち、一別以來、ハテ、よく見知り居るな。して、新右衛門は無事なるか。
新兵　ハッ、有り難う存じまする。親共儀、隨分息災にはござりますれど、餘程老衰仕りましてござりまする。
有介　さては古主の縁を以て、科人の九十郎を。
勇藏　サア、ぢやに依つて、彼れを捕へて一詮議。
有介　新兵衛、繩かかれ。
ト新兵衛にかゝるを、これはト立廻り。勇藏キッとなつて
勇藏　新兵衛、手向ひ致すか。手向ひか〳〵。
新兵　ハッ〳〵ハッ、
ト跡ずさりにて蹲る。

全く以て手向ひは致しませぬが勇藏さま、先程より承りますれば、古主九十郎さまはお國元で科人、それゆゑお世話仕る、私しを捕へ御詮議と、サア、その樣子を憚りながら、とくと承りたう存じまする。
有介　科人九十郎が住所定まりぬゆゑ、其方を囮に、お旦那樣の御詮議だ。
新兵　名に立つた惡黨ゆゑ、若旦那兵太夫さま諸とも、殿樣より御勘當と承る。その浪人の九十郎が、大それた科人とは。
勇藏　その仔細は、有介、持參の品、新兵衛にとくと。
有介　ハッ。
ト腰に卷きたる風呂敷包みを解き、一軸の箱を出し、新兵衛の側へ持つて行く。
勇藏　新兵衛、それをとくと拜見いたせ。
新兵　ハッ。
ト箱を開き、懸地を出し、廣げて見てこりやコレ鯉の一軸。
勇藏　結城の重寶、鯉の一軸は、梁の武帝が筆の跡、それゆゑにお家代々、世に稀れなる御寶物なれど、先祖の模規に依つて、鵜飼兵太夫に御預け。然るに九十郎が惡黨に

て、親子ともお暇の砌り、差上げたるその一軸、受取りの役人不念にて、改めず寶藏に納めしところ、この度武將家より御懇望に依つて奉らんと、或る時に寶藏より取出し、御内見ありしところ、ソレその如くに、まつかいな似せ物、早速浪人の兵太夫を召捕り、段々御詮議その上にて、悴九十郎が仕業と、僞筆の畫師よりの白狀。それゆゑ兵太夫は禁獄申し付け、上意を蒙むり、この勇藏が當所へ立越え、九十郎を召捕り、誠の一軸の所在を白狀させ奪ひ返し、科人九十郎諸とも國元へ立歸る

トこれを聞いて新兵衞、懸地を取上げ、キツと見て

新兵　すりや、殿樣の御重寶、鯉の一軸も、アノ九十郎さまがこの如くの。エ、エ、、、。

ト思ひ入れ。

勇藏　武將の上覽とある一軸、九十郎が仕業は即ち殿の越度、親兵太夫を死罪の成敗、それゆゑ召捕つて禁獄。

新兵　アノ親旦那には牢舍とな。

勇藏　いかにも。

有介　九十郎をお國へ引くか、兵太夫どのを死罪に行はせるか。

勇藏　一方ならぬ大罪人、九十郎を庇ふと、新兵衞、其方が身の上。

ト新兵衞、思ひ入れあつて

新兵　大恩受けた鵜飼の御親子、その代りになる事なら、この新兵衞が、逆磔はおろか、一分だめしになるとても、さらさら命は惜しみませぬ。九十郎どのを殿樣の御威光でお召捕りあつても、肝心の鯉の一軸が出ませねば、憚りながら殿樣が、武將家へ仰せ分けられが、相立たぬかでござりまする。

勇藏　ぢやに依つて、寸の間も猶豫はならぬ。

新兵　サア、そこが私しがお願ひ、重罪の九十郎どのなれど、少しの間の御宥免なされ下さらば、騙して賺して問ひ落し、誠の鯉の一軸を尋ね出して差上げねば、たとへ纏かゝり、お國へ引かれる九十郎どのなれど、一軸さへ無難に差上げなば、その規模にせめて、磔刑を獄門、獄門を追放と、こりやお馴染の勇藏さまのお情にて、何卒輕う。

勇藏　ウム、すりや其方が働らきにて、誠の鯉の一軸を差上げ、科人九十郎を突出し渡すか。

新兵　左樣いたさねば、お國にござる親旦那樣の御身の上。

勇藏　ハテ、そちや以前を忘れぬ神妙な願ひ。

新兵　どうぞお聞届け下されませうや。
勇藏　國元にては竹馬の其方、心底とくと存じ居れば、餘儀無き願ひ。よいワ。聞届けくれう。
新兵　チエヽ、有り難うござりまする。
勇藏　併し長うは叶はぬ。今日より十日が間、猶豫いたしくれうワ。
ト新兵衞、指を折り
郎兵　ムウ、すりや二十五日までに。
勇藏　誠の鯉の一軸。
有介　九十郎めを。
新兵　きつと私しが。
勇藏　相違ないか。
新兵　お渡し申すでござりませう。
勇藏　新兵衞、詞をしかと番つたぞ。
ト新兵衞、見得よく、兩人キッとなる。これにてチョンチョン／＼道具廻る。
ト元の吹矢の道具に納まる。辻打になり下座より、バタ／＼にて、おえん逃げて出る。三四郎、追ひ駈けて出る。

えん　コレ／＼、お竹は居やらぬかいなう。アノ三四郎が
三四　コレ、ドッコイ／＼／＼。
ト彼方此方おえんを追ひ廻し、やう／＼に追ひ付き
三四　これはしたり、おえんさん、お前、御新造に似合はぬ端ない、何の事でござりますぞいなア。
えん　それでも、わがみがいたづらばつかりしやるに依つて、わしやアノお竹に。
三四　イヤ、コレ、申し、その下女よりは、おれが心がお竹なら、割つて見せたいわいなア。おえんさん／＼。
トいろ／＼あり、おえん振り放し
えん　コレ、そんな惡い事しやると、内へ歸つて父さんや母さんに告げるぞや。
三四　ハテ、告げるとは曲が無い。申し、おえんさん、一體お前が此方の内へ、嫁ぢやというて見えたれども、息子が嫌うて、今だに祝言も披露目も無ければ、嫁御では無い、コレ、娘分ぢやに依つて、おれが惚れたワ。たかで玉屋の阿母は、この三四郎が爲には現在の伯母、親仁の新右衞門は根が入り聟、お前が女夫にならうといふ新兵衞は連れ子、殊に深川に小女郎といふ色があつて、毎晩毎晩はまり込んで内に居ず。ア、いとしやお前は巣

守り、何ぼう思ひ詰めて居ても、父親は入り聟の悲しさ。親子とも何時抛り出さうと儘の事、そこでお前さへ得心なら、おれと夫婦になつて玉屋の跡取り、なんとよいか。さうなつたら物見遊山は女夫連れ、芝居の初日茅場町・薬師参りや薬研堀、不動様へも一緒に行き、目黒目白は云ふに及ばず、淺草上野湯島の天神、夏は兩國凉み舟、龜井戸妙見三圍の、稲荷は王子の果までも、冬は雪見に轉ぶ心は無いかいな。コレ、どうぢやぞいの〳〵。

ト又いろ〳〵としなだれるを

えん　エヽ、コレ〳〵、三四郎、マア〳〵、どうぞ爰を放してたもいなう。

三四　イヤ〳〵、放さぬ〳〵〳〵。お前が得心したといふ、證據の返事聞かぬうちは、わしや何ぼうでも、放さぬ放さぬ。コレナア〳〵、放しやせぬ〳〵。

ト捕へて居るを、おえんこなしあつて

えん　サア〳〵、その返事をする程に、早う爰を放してたもいなう。

三四　返事をするとは忝ない。そんなら放してゆるりつと。

ト放す。おえん、ちやつと逃げうとするを、三四郎、振り袖をしつかと捕へる。

三四　ソレ、その通りぢや。滅多に逃がしはせぬわいナア。

えん　エヽ、コレ、逃げはせぬけれど、コレ〳〵見や、參詣の人がたんと、見て居るに依つての。

三四　返事するに悪いかえ。

えん　サア、わしや恥かしいわいな。

三四　いうても生娘のお前、そこもあるわえ。

えん　それぢやに依つて、三四郎、斯うしてたも。マア、わしと内へ連立つて、歸つたその上で返事を。

三四　イエ〳〵〳〵滅相な、折角寶の山へ入りながら、さう手延びにはならぬ〳〵。人目があつて恥かしくば、おれが、

トあたりを見て

幸ひ〳〵、おれが思ひ付がある。コレ〳〵コレ。

ト吹矢の筒を取つて來るうち、おえん、逃げうとするを、三四郎、おえんが腰帯へ我が帶を括り付け

コレ、兎角お前は逃げたがる。しつこい事ぢやが返事を聞かねば、滅多に手放しはせぬわいな。

えん　サア、その返事はの。

三四　コレ、この吹矢の筒……これをおれが耳へ當てゝ居るワ。お前が此方へ口を寄せて、囁いて云ふと、おれが方へ聞える。これが即座の囁き竹、なんとよいかえ。

えん　わしやそんな事はようせぬわいなア、

三四　ようせぬわいのも凄じい。お前から見ては何でも無い事ぢや。サア／＼、早う返事をお聞かせなさい。

ト云ひ／＼おえんが腰帯を引ッ張り、片手にて吹矢筒を左の耳へ當てる。

えん　こりや何しやるぞいの。

三四　お前を逃がさぬ扣へ綱。なんと、サア／＼お返事は

ト目を塞いで居る。

えん　サア、その返事は。

トうぢ／＼こなしある。この前より金太郎、下座より出かけ、様子を見て居て、この時、ちやつとおえんが側へ寄り、腰帯を解かし、その端を引ッ張り、おえんと入代り、筒に口を寄せ、三四郎さんと呼ぶ。

三四　ヤア、なんぢや三四郎さん、さんとは有り難い。もう詞を直すとは、氣の利いたおえんさん。して／＼、跡はどう／＼やな。

ト此うち、おえん金太郎、こなしあつて、おえんは差足して、ちやつと見世物小屋の内へ逃げて入る。金太郎囁く。三四郎、おえんと思ひ

何ぢや、薩摩芋が喰ひたい……ても、さもしい事を。併し、お望みならば何ぼなりと、買つて喰はせませうが、さうして御返事は／＼。

トまた金太郎囁く。

イヤ、薩摩芋ばかりぢやない、三國無類の甘酒が呑みたい。エヽ、さてはお前は下戸ぢやに依つて……尾張町の双六煎餅……アノ土屋の蕎麥も……それに七色茶漬もかいな……ハテ、道理で恥かしいと云ひなさつた。それではその筈／＼。

ト此うち金太郎、さま／＼の事を囁く。トゞ吹矢を取つて筒へ入れ、三四郎が耳へ吹込む。

アイタヽヽヽヽヽヽヽ。

ト惘り飛び退き。耳へ吹矢を立てながら、二三遍クルクルと廻り、いろ／＼と苦しみ氣を失ふ。パッタリ倒れる。金太郎、これを見て喜び、見世物小屋へ隠れる。下座よりバタ／＼にて三ぶ、走り出て

三ぶ　慥か藤兵衛さんが新兵衛を。

トうろ／＼して、三四郎に躓き、惘りして

ヤア、こりやア誰れだ……南無三、三四郎さま。コレコレ。

ト引起し

三四郎さん〳〵。

ト介抱して呼び生ける。三四郎、やう〳〵心付き

三四　ア、苦しや〳〵。頭がぐわん〳〵じやら〳〵。ヤレ、堪え難や〳〵。

三ぶ　コレ、三四郎さん、最前云うた證文の事を、藤兵衛さんの

三四　なんぢや、聞えぬ〳〵。耳が痛い〳〵。

三ぶ　ハテ、コレ、新兵衛めを捕へて

三四　これは酷い目に逢はせた。おえんさん。

ト片息になつて三ぶを見て

ヤア、紺宿、三ぶか。

三四　ハテ、先刻からものを云うて居るのに、お前は聞えぬのか。

三四　なんぞ好い膏薬か油薬は無いか。

三ぶ　なんのこつた。ソレ、お前の耳に紙が。

ト吹矢の立つたる矢を捕へる。三三郎、耳を抱へ飛び退き

三四　ア、痛い〳〵。堪えられぬ堪えられぬ。こりや死ぬやうな。幸ひ通り町の象の油へ此まゝ直ぐに。

三ぶ　コレ、三四郎さん。

ト引留めるを振り切つて

三四　イヤ〳〵、そこどころぢやない。アイタ、、、、、。

ト苦しき息遣ひにて耳を抱へ、よろめき〳〵向うへ入る。三ぶ、合點のゆかぬこなしにて、

三ぶ　とつくりと云ひ合せた三四郎どの、今の様はマアなんであらう。

ト呆れて見送つて居る。下座の方バタ〳〵にて、藤兵衛、新兵衛を引立て出る。お梅伊三郎も付いて出て

藤兵　サア、新兵衛、金の出入りは、どうするのだ〳〵。

新兵　覺えも無い事を云ひかける神田の藤兵衛とやら。この新兵衛は近付ではないぞ。

三ぶ　ヤア、藤兵衛さん、そんなら新兵衛を。

藤兵　今その事を調べて居る所だ。

伊三　コレ、藤兵衛どのとやら。最前から様子を聞いて居るが、覺えもない新兵衛さまに金を貸したとは。

うめ　それ〳〵、マア、どういふ譯でござんすぞいな。

新兵　ハテ、お梅、伊三郎、大事ない。此方に知らぬ金の

催促、相手になるが無駄。打ッちやつて置きやれ。
藤兵　イヤ、打ッちやつて置かれぬ。男づくで貸した大枚の百兩、日限は正月十六日、卽ち今日、それに覺えの無いの知らぬのと、しらを切つても、さうはさせぬ。でんとへ出て取る。取る所で取つて見せう。ナア、三ぶ。
三ぶ　さうだ〳〵、こりやア恐れながらとくらはせずばなるまいワ。
うめ　新兵衞さん、アレ、矢ッ張りあのやうに云ふわいなア。
新兵　どう云うても氣遣ひない。恐らく三十間堀で名の知れた玉屋の新兵衞、人に鐚ひらなか借りた覺えは、マアない。
藤兵　その覺えのない新兵衞が、どうして又おれに證文書いて、首代りの印形は押したぞ。
新兵　ヤ、なんと。
三ぶ　新兵衞、貸したとある藤兵衞さんは、慥かな證文を持つてござるのに、男に似合はぬ、借りぬとは、後暗い事を云ふな。
伊三　ムウ、そんなら新兵衞さまが、借りたといふ、證文を持つて居るか。
藤兵　知れた事だワ。大枚の百兩、貸した證據の預かり手形。
　ト紙入れより出して半紙の證文を取出す。
新兵　覺えがあるか。ないか。ドレ。
　ト取らうとするを、ちやつと持ち替へ、兩手にて廣げて突きつける。新兵衞、立寄り
金子百兩慥かに預り申すところ實正なり、來る正月十六日までに屹度返濟申すべく候ふ、跡は知れた文言、宛名は茨木屋藤兵衞どの玉屋新兵衞。
　トとつくり見て
ヤア〳〵、ほんにおれが印形に違ひない。
梅伊　エヽ、そんなら新兵衞さん。
藤兵　なんと違ひはあるまいがな。
新兵　ハテ、面妖な。
　ト懷より紙入れを出し、袱紗に包みし印形を出して見て
コレ此やうに、おれが印形は、大事にかけて鼻紙入れに入れて、年中肌身離さず持つて居るに、とんと覺えのないあの證文。
藤兵　コレ、謀判ぢやないぞよ。

三ぶ　動きの取れぬわれが印形。
梅伊　コレ申し、覺えがあるかえ。
新兵　イヤ、覺えはない。
梅伊　それにアノ證文に。
新兵　サ、それは合點がゆかぬ。
ト思ひ入れあつてヂツと下に居る。藤兵衞、首筋を取つて
藤兵　新兵衞、われを。
ト引付ける。その手を取つて見事に投げる。
三ぶ　ヤア、藤兵衞さんを。
トかゝるを拂ひ退け、直ぐに立廻り
新兵　こりや、何をしやアがる。
ト藤兵衞、起上がり、大胡坐にて
藤兵　何をするとは、新兵衞の大騙りめ。
新兵　ナニ騙りとは。
藤兵　うぬは騙りだワ。騙りであるまいか。コレ、ペツタりと牡丹餅ほどな判を捺したこの證文。男づくで貸した百兩の金、返さぬのみか、覺えないなぞと、物云ひを付けて砂にするのだな。コリヤヤイ、三十間堀で人の知つた玉屋の新兵衞だと、太平樂を吐かしたが、この證文はどうだ。われが判に違ひはないぞよ。サア、金を返すか、返さにやア町役へ屆けて代官所へ。
ト立上がるを新兵衞、引廻して
新兵　それを町役へ屆けて堪るものか。
藤兵　そんなら金を返すか。
新兵　ぢやと云うて、みす〱覺えのないのに。
三ぶ　それに又、どうして首代りの判を捺しやアがつた。
藤三　金を返さにや、うぬを。
ト兩方より薪ざつぱにて打たうとするを、伊三郎お梅兩人を支へ
梅伊　こりやお前方、あんまり。
藤兵　うぬ等も騙りの同樣。
ト兩人を打つを新兵衞、それはト兩人を引廻す。
藤三　新兵衞、金を返すか。
新兵　サア、その金は。
皆々　サア〱〱〱〱。
藤兵　こりや慥かなこの證文、書いた物が物を云ふワ。
ト片手に持つて證文をひけらかす。伊三郎お梅、思ひ入れ。新兵衞こなし。此うち見世物小屋より最前の羊ノタ〱出て來て、藤兵衞が持つて居る證文を啣へ、

三ぶ　ヤア、それ〳〵、藤兵衛さん、大事の證文を羊めが。

ムシヤ〳〵と喰ふ。三ぶ、見つけて

藤兵　ヤア。

ト悔り、羊を見る。證文を喰つてしまふ。

こりやアどうせう〳〵。

ト羊を三ぶ諸とも追ひ廻す。羊あちこちと逃げ歩き、トヾ向うへ走り入る。兩人追ひ駈けるを、新兵衛、薪ざつぱにて兩人が足を撲り、散々に打つ。

藤兵　コリヤ新兵衛、金も返さず、なんでおいらを。

新兵　その金返さうから證文見せろ。

藤兵　ヤア、その證文は

三ぶ　今の羊めが

新兵　大騙りめが。どう思案しても覺えのない今の證文。でも、おれが印形をベツタリ捺してあるは、未だに不思議、合點がゆかぬ。

伊三　そこが見通し、神は正直。

うめ　思ひがけない羊が證文。

藤三　みす〳〵取れる百兩を。

伊梅　云ひかけの算用、もそつと強う。

新兵　これで十兩二十兩、

ト疊みかけて打つ。兩人、壕へかれて逃げ廻るを追ひ廻しながら

五十六十……八十九十、丁度百兩。

伊梅　算用濟んだ。

藤三　ても酷い、……あの羊めが。

トこけつ轉びつ兩人、向うへ入る。

伊梅　モシ、新兵衛さん。

新兵　思ひがけない程好い所へ、今の羊は。

ト合ひ方になり、見世物小屋より金太郎先に、おえんお竹を連れて

金太　間に合せたはこの文珠、ではない御新造樣の思ひ付き、新兵衛さんの、難儀を救はう爲。

えん　コレ、あられもない。そんな事をわしがマア

新兵　さてはおえん。

皆々　新兵衛さん、とつくりお禮を。

ト心意氣あつて、無理におえんを新兵衛の側へ突きやる。

新兵　忝なうござる。

トひんと身を背向ける。

金太　ても愛想のない。

トおえん、心意氣あつて

えん　エヽ……つんともう。

トこなし、よろしくあつて、　　ひやうし幕

## 二幕目

深川八幡の場
二軒茶屋の場
夷の宮麥飯屋の場
猪の堀の場

役名＝＝玉屋新兵衞。三國屋小女郎。茨の藤兵衞。船頭、桐の家三ぶ。惡者、蛇之助。同、たゞ六。鳶の者、產毛の金太郎。女郎、おせん。鵜飼九十郎。三國屋才兵衞。下郎、有介。八百屋伊三郎。出村新兵衞。

本舞臺、見附け板塀にて、柱より上に出入りの門。すべて深川八幡境內の模樣よろしく、騷ぎにて幕明く。

ト向うより金太郎、以前の形にて、たゞ六、蛇之助が胸倉を取つて、曳摺り〳〵出て

金太　なんでも二人の奴等に用がある。うしやアがれ〳〵。

蛇之　ヤイ〳〵、うぬア三十間堀で、よく見かける仕事師

たゞ　おいらに用があると仰山に、此マアほでぶしを

兩人　放しやアがれ。

ト兩方一度に突き放す。金太郎、ヒヨロ〳〵〳〵と轉けさうにして

金太　ドツコイ〳〵。

トとまり

コレヤイ、手荒くするな。すんでの事にのめる所を止まつたは、日頃習ひ込んだ兵法のお庇。なんと產毛の金太郎が、心がけの程をとくと見たか。

蛇之　ムウ、產毛の金太郎と吐かすからは、さてはうぬは

たゞ　三十間堀の藍問屋、玉屋新兵衞が所の

金太　オヽ、慮外ながら、居候ふの仕事師ぢや。

たゞ　棒鱈め、蛇之助、こんな馬鹿に相手にならずと、爰へ來たを幸ひに、山へ行つて洒落れて來よう。

蛇之　オヽ、それがよい〳〵。たゞ六、來いよ。

ト行かうとするを、金太郎こなしあつて

金太　用がある。待ちやアがれ。

兩人　なんだ。おいらに用があるとは。

金太　いかにも。おらが旦那新兵衞さまが、尋ねてござる九十泥坊が居る所を、わいらが知らぬといふ事はあるまい。サア、それを尋常に吐かしやアがれ。

蛇之　九十泥坊とは誰れが事だ。

金太　エヽ、俠ひに似合はない呑み込みの悪い奴等だ。鵜飼九十郎どのを洒落て云ふのだ。

たゞ　ムウ、さてはおいらが付き歩く、九十どのに、うぬが逢ひたいのか。

金太　イヤ、おれぢやアない。おらが旦那の新兵衞さんぢや。何やら大事の用があつて、尋ねてござるけれど、天竺浪人の無宿、どこに居るといふ事が知れぬ。ところでわい等二人を見付けたは天の與へ、日頃九十どのに付き歩く貧乏神ども。わい等が知らぬといふ事はあるまい。出合つた所が三條小橋、では無い汐見橋から、爰まで曳摺つて來たのだ。なんと恐しいか。

蛇之　こいつは飛んだ才六ぢやアないか。人に物を尋ねるのに、馬鹿の癖に、滅多無性に力みやアがるが、そしてマアおいらを、貧乏神と吐かしやアがつたな。

たゞ　ハテ、むづかしい事はない。蛇之助、叩きのめせ。

金太　叩きのめすも凄まじいわえ。九十に逢つてなら逢はせろと云ふのだ。それを隱しやアがると、この産毛の金太郎が、二人の奴等を取ツ摑まへて、九十どのの居所を、知つても云はせる、知らいでも云はせるが、コレ、どうぞ云つてくれろヤイ。

兩人　否だ、知らない。

金太　ヤ、なんと

ト思ひ入れ。

たゞ　面白い、うぬが腕立て。見事おいらと楯を突いて見るか。

蛇之　われに打ちのめされたその上で、九十どのの居所を云つて聞かさうわえ。

金太　此奴が〳〵、言葉の甘いうち吐かさないとナ、おツつけ雨が降つて來る。キリ〳〵吐かさないかエ、

ト云ひ〳〵、身づくろひする。

蛇之　雨が降らうが槍が降らうが、腕づくで聞かうと吐かしたからは、おいらも腕づくで云つて聞かせべいワ。

金太　すりや、どうでも

兩人　うぬと出入りをして見やうわえ。

金太　ハテ、不便や、わい等が命は寐腐つたな。

ト手拭を鉢巻にして、草履を脱ぎ、土をよく〳〵はたき、しつかりと腰に挟み、思ひ入れする。此うちたゞ六蛇之助も、これを見て身拵らへして

兩人　サア、馬鹿め、どういふ出入りをする。

金太　エヽ、忙しない。サア、二人ともに上方流で、ちよつと向うへ出てもらはうかえ。

ト云ひ〳〵向うへ出て、中腰に蹲つて居る。蛇之助ただ六、こなしあつて、ズツと前に出て、金太郎を引ッ挟み

兩人　サア、出たが何の用だ。

金太　ハテ、野方途もない奴等だ。マア、下に居てもらはう。

二人　ムウ。

ト蹲ふ。

サア、下に居たが、なんだ。

ト金太郎、髭を撫で〳〵

金太　ハテ、わい等に出入りと云ふは、此方の旦那新兵衛さんが尋ねてござる。九十泥坊が居所を教へてもらふ爲。それに意地悪く云はぬに依つて、この産毛の金太郎が

兩人　おいらを取ッ摑へて云はせる氣か

金太　知れた事、コレ見ろ、空の鹽梅が、もう今雨が降つて來る。傘は無し、下駄は無し。そこで斯う凛々しく身拵らへして

兩人　おいらと出入りをするのか。

金太　イヽヤ、逃げるのだ。

ト逸散に下座の門の内へ逃げて入る

蛇之　べら坊め。あれ見や、おいらを出し抜きやアがつて

たゞ　いま〳〵しい野郎めだ。取ッ摑まへてぶちのめさう。蛇之助來い。

ト兩人も門の内へ追ひかけ走り入る。これより雨車、しつぽりとしたる合ひ方になり、門の内より新兵衛、下駄がけ、梅本の番傘をさして出で來り

新兵　情ない、又降つて來たか。九十さまは慥かにこの八幡樣へと聞いたが、先刻から社内を殘らず尋ねて見たところが、どこにござるか知らん。よもや洲崎の大門屋へでもあるまいし。こりや黒江町の居酒屋か。翁蕎麥あた

りを、もう一遍尋ねて來ようか。
ト唄になり、新兵衞、傘をさし花道へかかる。向うより出村新兵衞、半合羽、高足駄、蛇の目の傘をさして出て、花道にて新兵衞と行き違ひ、こなし。兩人ともによろしくあつて、新兵衞はツイと向うへ走り入る。
出新　出村新兵衞、本舞臺へ來て向うを見送り
今のが慥か玉屋の新兵衞、此方は知つても彼方は知らぬ。それを幸ひに今日の伊勢講の次手に。
ト思ひ入れあつて
ハテ、好い格幅な男ぢやなア
トこなしある所へ、下座より伊勢講中二人、羽織袴、女郎おせん、藝者、下女、皆々下駄、貸し傘を相合ひにさして出て來り
講中　これは〳〵出村新兵衞さま、先程から餘程待ち兼ねました
出新　講頭のお二人、見れば色どもをお連れなされて、早うあがりましたの。
講中　今朝から餘程たべました。さて新兵衞さま、お前のお誂らへの彼の君も召捕つて、宮本の座敷に置きましたよ。
出新　それは〳〵段々のお世話。
せん　モシエ、そんならあなたが小女郎さんのお客さんかえ。
講中　宇田川町で出村新兵衞さんといふ、太物屋の旦那どのぢや。
出新　三國屋の小女郎は、ちよつと附合ひに呼んで、この間からの近付き。それで今日の參會を幸ひに。
講中　宮本まで呼寄せて、取つてしめるとは、ヨウ〳〵、出村さま〳〵
出新　これは迷惑。必らず內の山の神には。
講中　諸事は沙汰無し〳〵。
出新　時にお二人、三月の太々の極めに、宮本へ寄つて今日の鬮取り、伊勢へ參る人は極りましたか
講中　イヤ〳〵、肝心のお前、お見えなされぬゆゑ、鬮も取らずに待つて居りまする。
出新　ハテ、大事ない事を。
講中　イヤ、さうぢやござりませぬ。云うても江戸の通り町、宇田川町の太々なれば、參り手を隨分派手にせねばなりませぬ。それでお前のござるのを待つて、マア、鬮を取つてしまひませう。

講中　君が待つて居ると思うて、新兵衞さんのせつかちに。
出新　イヤ〱、さうではないか。
藝者　ほんに可哀さうに、小女郎さんが宮本になつた一人、さぞ待つてであらうわいなア。
講中　それ〱、申しお二人さん、お早うあなたをお連れ申して。
講中　成る程〱。サア、新兵衞さま。
出新　御一緒に參りませう
講中　今度の伊勢講は大分華やかな。
講中　今日はもてるわいの。
皆々　サア〱〱、ござりませい。
ト騷ぎ唄になり、雨車にて、出村新兵衞　皆々、下座の門の内へ入る。チョン〱にて道具引返す。
本舞臺二重、見附け一面壁、骨障子にて、上の方、柴垣、石燈籠、よき所に手水鉢、橋がかりに枝折り門、宮本の横。行燈かけ、すべて、二軒茶屋の模様よろしく、矢張り騷ぎ唄にて雨車そへ、道具とまる。
ト奥にて手を叩く。内にて返事などして、隨分忙しき體にて、向うより九十郎、序幕の着替へた形にて、矢張り頰冠り尻からげ、草履を手に持ち、雨に濡れて居る心にて出て來て、行燈を見て
九十　よし〱、爰が宮本の座敷口ぢやさうな
トうそ〱方々見廻し、内へ入り
こりや強う騷がしいワ。誰ぞちよつと頼まう。オイ〱。
ト奥を見て呼ぶ。
藝者　アイ〱。
ト藝者出て來て
申し、お前は宇田川町の伊勢講か。
九十　イヤ、伊勢講ぢや無い、居候ふぢや、今日爰へ、仲町の三國屋の小女郎が來て居やうの。
藝者　アイ、小女郎さんは、いま奥座敷へ出てぢやわいなア。
九十　そんならどうぞ……イヤ〱、おれぢやと云うたら流し居らう。どうぞ直に逢ひたいものぢやが。
藝者　エ、、聞えた。アノお前は、新さんからのお使ひにござんしたのかえ。
九十　オ、、さうぢや〱。玉屋の新兵衞の使ひぢや。どこぞ小座敷で待つて居よう。

ト云ひ／＼二重舞臺へ上がるを

藝者　アヽコレ申し、お前は泥足で座敷へ。

九十　なんの大事ない事を。

ト二重舞臺、上より手水鉢へ足を突ッ込み、ゆすいで、縁側へ摺りつけ／＼

サア、これでよいか。酒と肴も出してもらはう。小女郎が代は拂ふであらう。

藝者　ほんに呆れるわいなア。

九十　ドレ、小座敷へ行て待つて居るぞよ。

ト唄になり、九十郎、藝者を連れ、奥へ入る。この唄のうち、横の襖を明け、小女郎、深川呼出しの拵らへにて

小女　アイサ、そこへ雛吉さん富さん、よく頼んだぞえ。

ト云ひ／＼、少し醉ひたる體にて出てこなし。

今日この宮本へ付合ひに來て居る樣子を、新さんも知つてござんすのに、なぜ來てくれなんせぬぞしらぬ。エヽ、此方で思ふやうにもない。自烈たいなう。

ト此うち始終合ひ方にて、奥よりおせん、ツッと出て來て、

せん　小女郎さん、爰にお出でなさんすかえ。

小女　おせんさん、何だえ。

せん　これをお前に慥かにお渡し申してくれいと、いま勝手へ髪結ひのおいねさんが、この金を

ト財布入りの金を出す。

小女　オヤ／＼、おいねさんとした事が、大枚の金をこの子に。イヤ、おせんさん、お世話でござんした。

せん　慥かに五十兩あるとやら。

小女　アイ、わたしが頼んだ通り丁度五十兩、都合よう調うて、マア、落ちついたわいなア。

ト思ひ入れあつて懷へシッカリと入れる。おせん、小女郎が顏をヂッと眺め

せん　小女郎さん、樣子は知らねどその金も、大方新さんゆゑに。お前、苦勞だなう。

小女　可愛い男の爲にする、苦勞は却つて樂み。お前も追ッつけ年を取らしやんすと、合點が行くわいなア。

トこなしある所へ、奥よりおみき、風呂敷包みを持つて來て

みき　小女郎さん、今お前に渡してくれいと、夷屋の男衆が、この包みを。

小女　とんだ事を。それを爰へ持つて來るとは、夷屋も氣

が利かない。

ト此うちおせん、風呂敷包みを開き

せん　オヤ／＼、小女郎さんの着替へかと思うたら、こりや男の羽織。

みき　胴裏には菊蝶と笹龍膽の比翼紋。

せん　そんならこれも新さんに。

小女　羽織や金は愚かな事、命でも。

兩人　ても可愛らしいこの羽織。

小女　よう縫うたなア。

ト羽織を取つて抱きしめる。ト奥にて

大勢　小女郎さん／＼／＼。

ト呼び立てる。

みき　アレ、皆が呼ぶぞえ

せん　奥のお客も同じ名の新さん、必らずその羽織を見付けられやぬように。

小女　褂文庫へ藏つて置かう。サア、二人とも來ておくれ。

ト深川騷ぎになり、小女郎、羽織を持ち、兩人を連れ、奥へ入る　ト矢張り右の騷ぎにて、奥より金太郎出て

金太　なんだい／＼。この金太郎が錢は遣はれないが、忙がしいの、さしだのと斷わり云うて相手にならないが、いま／＼しいぞ／＼。忙がしくば閑になるまで待つて居て、膳拵らへをさせて食はにやならない。

ト無性にやかましく云つて

と云つたものよ。

ト合ひ方になり、あたりをウソ／＼窺ひ、矢張り懐手にて舞臺前へ出て、股倉より銚子を出し、鉢を出し

いま奥にしてやつた、蛸の櫻煮に一銚子、彼の亭主めが、あんまり安くしやアがるのは、おれをば錢が無いと見くびつたゆゑか。イヤ、その手は喰はぬ。コリヤ、この足を喰ふわえ。

ト蛸の足を噛り、茶碗を取つて來り、手酌にていくらも引ツかける。此うち始終合ひ方、向うより玉屋新兵衞、傘をすぼめ、提げて來て

新兵　やう／＼雨もやんだ。マア、宮本へ行て小女郎に。

ト云ひ／＼内へ入り

そこに居るは金太郎か。

金太　コレ、シイ。

ト仰山にこなし。

新兵　べら坊め、何を云ふのぢや。

金太　イヤ、若旦那、お前に彼のが傳言があるぞえ。

新兵　小女郎は爰へ來て居やうかな。
金太　アイ、奥座敷に、いつもの團子で一座丸めてぢや。
どうでも賢い子だわいの。
新兵　そして金太郎、おぬしは爰へ、今來たか。
金太　先刻來たれど、ちつと凹んだ事があるゆゑ、小隅へ寄つて寐て居やした。
新兵　いつでもキヨロ／＼と、もう小女郎が傳言では、聞かいでも知つて居る。奥に居れば、間を見合せて爰へ、ちよつとナ。
金太　オツト皆まで宣ふな。吞み込み姿、ちつともすかぬ産毛の金太郎、よろしく手管をもつて、あの子を爰へ寄越しませう。
新兵　また人に知られぬやうに、合點か。
金太　ハテ、承知々々。せうし紅葉の染め浴衣、ドレ、知らせてやらうか。
ト此うち始終合ひ方にて、金太郎、奥へ入る。新兵衛殘り、こなしいろ／＼あつて
新兵　氏原勇藏さまに、芝の神明にて請合ひし、十日の日延も今日限り、それでこの間から、いろ／＼苦勞屈托して居るに、九十郎さまは何とも思はず、只平氣でござるが、ア、どうぞ彼の鯉の一軸を今日中に……エ、コレ心ならぬ事ではある。
ト煙草盆を取つて來て思案する。これより誂らへの合ひ方になり、奥より小女郎、しどけなう出て來て、新兵衛を見てこなしあつて
小女　新さん、暖いかえ。
ト後より抱く。ト新兵衛ちよつと顔を見て
新兵　エ、をかしくもない
ト扇にて振り拂ふ。
小女　でも、素氣ない男ぢやなア。
新兵　ちつと思案せにやならぬ。氣が揉めて居るよ。
小女　きが揉めて居るとは、坪の内の大風ぢやあるまいし。
新兵　風傷寒か知らない。
ト煙草盆を持つて此方へ來る。小女郎付いて居て　新兵衛を引廻し
小女　オ、きつう首尾が悪いなア。
新兵　イヤ、首尾は好過ぎてある。宇田川町の木綿問屋とやらは、今日この宮本へ伊勢講で。へ、、、。終ひには念佛講であらうぞえ。

小女　サア／＼、どうとも云うてくんなんし。そんな事を聞かうとて、今日知らせはせぬぞえ。

新兵　なにサ、六日ならしに行く三國屋の板頭、流行ッ子の小女郎、つい逢はうと思うても自由に逢はれぬ。お盛んだの。

小女　そりや、ねつから埋らない。申し、苦界とやらと思うて居れど、主より外にちよつと附合ひで、外の客へ出るのも、しみ／＼否でござんすわいなア。

新兵　そりや嘘、附合ひ／＼と云うて出る客に、却つて情があるものだよ。

小女　じやうが有つても鍵が無しサ。

新兵　こりやあやまる。

小女　何をえ。

新兵　てまへの心意氣が。

小女　どうしたえ。

新兵　イヤ小女郎……とサア、澤山さうに云ふも覺えがあろ。去年の十月、九十郎さまに樣子を聞いたお前のお身の上、勤め奉公に賣つてやらつしやりました詳しいその譯。あゝおいとしや、古主の娘御が女郎とは、ても情ない、せめては少しのお力になつてと、この仲町の梅本へ行て、客の顏してお前を呼出し、樣子を聞いてもそれとも明かさず、どうぞお身の上が聞きたいばつかりに、退引ならず時の張合ひに、つい枕を交したゆゑ、互ひに心安う、今更取返しはならず、色ぢやの客ぢやのと云うては居れど、誰れあらう元はお主の娘御、九十郎さまの妹御なれば。

小女　アヽコレ、又かいなア。わしやそんな事は、聞かぬ聞かぬ。

　ト耳を押へて身を背ける。新兵衞こなしあつて

新兵　ハテ、聞きともなくと、たつた一言。

小女　主ぢやの家來ぢやのといふ事は、否でござんす。わしや追ッつけお前の女房にならうと、辛い勤めを辛抱して樂しんで居るものを。

新兵　サア、そこが浮世の義理。よしにせう。

小女　ムウ、そんならわたしが不請して、

新兵　斷れてしまはう。

小女　エヽ。

新兵　ハテ、退けば長者が二人出來るとやら。いつがいつまでも、お主の娘御と斯うして居られず、また九十郎さまの御身の上、今日中に彼の一軸を尋ね出し、お國より

來てござる勇藏さまにお渡し申さねば、親旦那兵太夫さまには……サア、お命に係る手詰めの大事。たとへどうなつても、この新兵衞が心は、矢竹に思うて居る所へ、お前の身の上、薄々樣子を聞けば、身請けとやら立て金とやらの相談があるげな。すりや、願うてもない、幸ひおれが事はフツツリと思ひ切つて、外へ片付くが上分別と申すもの。ナ、申し小ぎくさま、イヤ、小女郎、さうではないか。

小女　馬鹿らしい。否ぢやわいなア。

新兵　ヤ。

小女　さう云はしやんすは、主從ではない內方の、おえんさんと夫婦になりたいのかえ。

新兵　又おえんが事を。久しいものぢや。

小女　イヽエ、さうであらうがな。

新兵　ハテ、この間の文の返事にも、とつくりと書いて寄越した通り、なんぼ親仁樣が女夫にせうと、貰うて置かしやれた娘のおえんでも、どうしておれが。

小女　イヽヤ、さうぢや。さうでござんす。お前の文に、否ぢやの女夫とはならぬのと書いて寄越さんしても、どうでも、おえんさんと添ひたかろ。エヽ、憎い。コレ、よう思うても見て下さんせ。わしも、以前の身の上、鵜飼兵太夫が娘の小ぎくなら、成る程お前とは主從なれど、今は何ぢやえ。この深川の仲町で、三國屋の小女郎といふ勤めの身、思ふ男に添ひ遂げるが、淫奔でも惡性でもござんせぬ。四角な卵よりは女郎の誠と、人さんに褒められこそすれ笑はれはせぬわいなア。それにマア胴慾な。逢ふ度每に、切れるの退けのと愛想づかしばつかり。一旦かうと思ひ詰めたりや、わしや死んでもお前に離りやせぬ、拜みまする。コレ、新兵衞さん、惚れられたが因果ぢやと諦めて、必らず見捨てゝ下さんすないなア。

ト取付きいろ〳〵あつて、泣く。新兵衞、溜息吐き

新兵　さう云はれては、まんざらでもない。

小女　そんなら、主從事はとんと取措いて、

新兵　馴染みの小女郎。

小女　いつまでも變つて下さんすなえ。

新兵　エヽ、惡緣契り深しぢやなア。

ト兩人思ひ入れある所へ、奥よりおせん出る。

せん　申し、新さん。

新兵　おせんばう、お出でか。

せん　アイ、小女郎さん、お前、樣子を知らしやんせぬ

か、コレ、今奥へ、親方さんがござんして、宇田川町の新さんと、慥かに身請けの相談して居やしやんすぞえ。

新兵　小女郎、すりや今のが

小女　こりや大騷ぎぢやわいなア。モシ、おせんさん、お前御苦勞ながら、ま一遍とつくりと樣子を聞いて、知らせて下さんせ、後生ぢやによ。

せん　アイ／＼、如才はござんせぬ。ドレ、樣子をとつくりと聞いて來う。

ト引返し、奥へ走り入る。新兵衛こなしあつて

新兵　エヽコレ、搗てゝ加へて小女郎が身の上。

小女　イヤ、新さん、氣遣ひして下さんすな。コレ。

ト懐より最前の財布を出して、新兵衛が前に置き、新兵衛これを見て

新兵　こりやこれ五十兩。

小女　それを手附けと親方へ、お前の手から渡して下さんせ。後金は又心當てが有る程に、とつくりと相談してな。

新兵　そんならこの金は、どこぞの客に貰うたのか。

小女　なに今時の客が、心安うなんの。

新兵　それに又どうして。

小女　サア、何でも構ひはない。それを早う親方へ。

ト此うち新兵衛、小女郎が頭髮方々を心を着けて見て

新兵　昨夜までは立派に揃うてあつたが、今日ればゞ宮本へ出るに、ソレ、木櫛一枚、金の簪一本とは。

小女　ほんに、鶴が粟を拾ふやうに、いろ／＼の物を取集めて、コレ、やう／＼都合した五十兩。

新兵　イヤ／＼、さうしては又。

小女　ハテ、明日から用事を付けて、引込んで居ると濟むわいなア

新兵　それ程までに

小女　これもわたしが醉興。必らず叱つておくれなえ。

ト心意氣ある。新兵衛も思ひ入れして

新兵　エヽ、どうとも云ひやうのない。

ト額を外け、ホロリとする所へ、九十郎、奥よりツカツカと出て來て

九十　この金身共が借りたぞ

ト金に兩手をかける。

小女　ヤア、兄さん

新兵　若旦那か。

ト九十郎を此方へ振り廻す。

九十　イヤ、その金を、

九十　ト寄らうとする、小女郎、ちやつと取上げ、しつかりと懐へ入れる。これにて九十郎、ムツとして

九十　新兵衛の人外めが。

ト新兵衛を引付ける。小女郎、こなしあつて

小女　ア、コレそれは。

九十　妹め、寄りやアがるな〳〵。

新兵　こりや若旦那、なんで手籠めにさつしやりまする。どうして又わたしが人外ぢやな。

九十　うぬ、人外であるまいか。今まで身共が知らぬ顔すりやよいかと思うて、現在主の娘と乳繰つて、アタ舌たるい。常からといひ、今の五十兩の金、身請けの手附けに渡して下さんせ、イヤそれではとふざけ過ぎた、女郎めといひ、おのれがどこへ身請け、それよりはあの五十兩をおれに寄越せ。いつもひつてんなれど、この節分けて金が入用だ。サア、あの五十兩を取つて、おれに渡すか。不義して居るおのれを、カウ〳〵〳〵。

トいろ〳〵して打つ。小女郎、立寄るを新兵衛、押へて

新兵　コレ、たとへどうしられても、お主の打擲、手向ひはしませぬ。

九十　手向ひしてよいものか。金を貸さにや、うぬをいつそ。

トまた振り上げる。その手に小女郎、縋り付くな

妹め、こりや、うぬが間夫ゆゑ庇ひ居るのか。放しやアがれ、退きやアがれ。

トいろ〳〵揉合ひて

小女　イヤ、放さぬ〳〵。お前を

ト九十郎が手を咬ひつく。

九十　アイタ、、、、、、、。

トこれにて新兵衛を振り放し

喰ひつくとは、病犬のやうな女めだ。

小女　コレ兄さん。

ト兩手にて胸倉を取り、無理に下に置き

エ、お前はなア。お前はなア〳〵。

ト矢張り兩手にて胸倉取つて振り廻す。

九十　エ、コリヤ〳〵〳〵、さう振り廻すとナ、奥で呑んだ、酒が皆こみあげるわえ。エ、イ。

トえづく。

小女　それ〳〵、其やうに晝夜ともに酒浸し。ほんに國に居る時よりも、一家中で有名の悪黨、遂には殿様のお聞

きに達し、コレ、お前ゆゑに父さんも御浪人、その折柄お前がわたしに何と云はしやんした。コリヤ妹、脊丈伸びて浪人の、貧しい親の内に居るものではない。江戸へ出て屋敷方へ奉公に行たがよい、その又蔓で殿様へ御歸參、おれが好い手筋がある、親への孝行ぢやと、わたしを騙して、この江戸へ連れて來て、お屋敷どころか、コレ、悲しい深川の勤め奉公、その身の代も國へ貢ぎと云うてお前が横取り、それから勤めの其うちも、金は固より頭髮の道具衣裳まで、晩の翌る日のと借りては戻さず、傍輩衆や親方にも外聞思はず、度々うるさい無心。ほんにこの身を切らるゝより、人目の切なさ推量なく、アタ胴慾な兄さんを、持つた因果と諦らめても、果敢ないわたしが身の上なれば、せめては便りとあの新兵衞さん、以前のよしみの深切に、否ぢや／＼と得心ないのを、無理やりに此方から頼んで云ひ交したを、それに何ぢやえ、不義ぢやの人外ぢやのと、いとしにたげに、なぜ打たしやんした／＼。これまでの事を思ひやり、お前ゆゑに種々樣々の苦勞をする新兵衞さん、忝ないとも、思はずに、却つて此やうに。コレ、なんぼ以前の家來ぢやとて、仇に思へば、罰が當るわいな／＼。ちつとは又、國にござる父さんや、わたしが事を思うて見て、心を改めて下さんせ。兄さん、エヽ、お前は酷い人ぢやわいなア。

ト腹立てゝ大泣き、新兵衞、氣の毒なるこなし。九十郎思ひ入れあつて

九十　アヽ、尤もぢや／＼。妹、忝ない／＼。よう云うてくれた、兄弟なりやこそ、思ひ廻せば廻す程、生れ付いたるおれが惡黨、どう心で取直して見ても直らぬ因果、殊に國元では、おれゆゑ親仁樣の御難儀の樣子を、聞けば聞く程どうも生きては居られぬ。死んでしまへば却つて親兄弟の爲。さうぢや。

ト脇差に手をかけ、腹切らうとする。小女郎、悔りして取付き

小女　コレ、待つて下さんせ、兄さん、そんならお前は今の面當に、死なしやんすかいな。

九十　イヤ／＼、なんの面當、この身に愛想が盡きたに依つて、死んでしまふのぢや。妹、放せ／＼。

小女　そりや短氣な。マア／＼。待つて下さんせ。

九十　イヤ／＼、放せ／＼。

ト兩人いろ／＼揉合ふ、此うち新兵衞、構はずヂッと見て居て、よき所にて小女郎を引分け

新兵　九十郎さま、流石は以前を忘れぬ侍ひ氣質。お前はいよ〳〵死なしやりまするのか。

九十　浪人なれど鵜飼九十郎、腹切つて死ぬる。

新兵　ア、、その脇差で。

九十　いかにも十文字に……さうぢや。

ト仰山に拔かうとする。

新兵　コレ、竹篦で滅多に腹は切られますまいぞえ。

九十　ヤ、、、、、

トぎよつとする。新兵衛、拔いて見て

新兵　この竹篦で滅多に腹は切られますまいぞえ。

九十　イヤサそれは。

ト小女郎もこなしあつて

小女　ほんにそりや竹。そんなら兄さんは。

新兵　人目晦し、どうして死なれるものか。

九十　すりや新兵衛、われが。

新兵　知るまいと思うてござるか。コレ、九十郎さま、お前の差添は關の孫六、樣子を聞いたが殿樣より、親旦那の御拜領あつたを、お前にお讓りなされた大切の一腰も、僅かな金子に賣り代なして馬鹿遣ひ。この間まで差してござつたが、まだしもと喜んで居る間もなく、最前お前を尋ねに行く通りがけ、黑江町の古道具屋で、關の孫六を三兩で買うたは、旨い旨い掘出しとの噂に、立寄り樣子を聞けば、賣り手の人柄斯う〳〵と、聞けば聞くほど違ひのない關の孫六。亭主を賴んで二分の利付で買ひ戻し、その脇差の身はコレ爰に。

トすぼめた傘を取つて、中より手拭に卷きたる身ばかりを取出し

コレ、なんと覺えござりませうか。

九十　成る程それは。

ト取りにかかるを引廻し、この身にて散々に脊打ちに打ち据ゑる。

コリヤ新兵衛、なんでおれを。

新兵　イヤ、新兵衛は打たぬ。こりや親旦那兵太夫さまの御折檻。

ト又打ちすゑ、下に居て

コレ申し、いま小女郎が意見といひ、この新兵衛も、これまで度々、お前も聞飽かしつたでござらうが、しつかう外の事は云はぬ、今日につづまる一軸の在所。サア、それを聞きませう。この間からいろ〳〵と、騙し賺して尋ねても、誠を云はぬいかみ根性、十日の日延べも今日

限り、こなたが摺替へた誠の一軸を、勇蔵さまへお渡し申さねば、お國にござる親旦那は、逆磔刑のお仕置。

小女　ヤア／＼、そんなら父さんのお身の上は。

新兵　案じさすまいと、今まで隠して居たれど、此のらくらどの、仕業にて

小女　アノ、鯉の一軸を今日中に。

新兵　差上げねばならぬ手詰め。

小女　さういふ事ならコレ、兄さん。

九十　もうこの上は。

ト落ちてある抜き身を取上げ、新兵衛に切つてかゝる。立廻りあつて

いつその事、妹めも

トまた小女郎に切つてかゝるを新兵衛、枷になり、抜き身を引ッたくり脛を撲り、散々に打ち据ゑて、思ひ入れある。

小女　なんぼ云うても聞分けのない兄さん。

新兵　もつと性根を入れませうか。カウ／＼／＼。

ト打ち据ゑるを九十郎こなしあつて

九十　ア、コレ、待つてくれ。心得違ひぢや／＼。

新兵　イヤナニ、心得違ひとは。

ト振上ぐるを九十郎、ちやつと起きあがり

九十　サア、この間から新兵衛が尋ねる、眞の鯉の一軸、大金に賣り拂はうと、疾より國で摺替へ置き、この江戸へ持つて來たれど、今の身の上、表立つては賣られぬ、結構の重寶ぢやによつて、マア當分、さる所へ預けてあるが、樣子を聞けば國元から、氏原勇藏が詮議に來て、眞の鯉の一軸と、おれにも繩かけ連れ歸るといふ事、さすれば、この九十郎、しまひつけらるゝが否さに、それでいつそ新兵衛を、サア、殺してと思うたは、なんとおれが心得違ひであるまいか。

新兵　コレサ、その勇藏さまに請合つたは、鯉の一軸をお渡し申して、こなたの身の上を安穏で置かう爲でござるわいの。

小女　新兵衛さんに、なんの如才があらうぞいなア。

九十　それぢやによつて、もう料簡してくれ。誤まつた誤まつた。

ト起き直り、しいをりとなる。新兵衛小女郎もこなしある。

新兵　そんなら、とつくりと合點して下されたか。合點が行きましたか。

小女　これ皆、お前の爲おや程に、その鯉の一軸を早う。

九十　成る程、今日中と請合つたからは、これから直ぐに預けた所へ行てナ、受取つて來よう。

新兵　その御返事を、キッと待つて居りまするぞえ。

小女　大事の事ぢや。また流さずに。

九十　妹とした事が、おれが命にかゝはつて居る事を、どうして流すものかえ。

新兵　その得心がいてなればよい。サア／＼、一時も早う。

九十　合點ぢや。

ト身體の痛いこなしにて立ちあがる。新兵衞、思ひ入れあつて

新兵　ハテ、ごんする その形。せめて

ト我が上着と羽織を脱いで渡す。小女郎取上げ、戴きて

小女　これではお前。

新兵　大事ない。早う着せ換へて、

ト小女郎戴き、九十郎に着せる。此うち新兵衞、竹篦と本身を、目釘を取つて篏め替へ、鞘へ納める。竹篦を押折り、脇へ捨てゝしまふ。此うち九十郎、着物羽織を着る。

小女　新さんがこれ程にまで、思うての志し、必らず／＼仇に思うて下さんすなえ。

九十　なんの如才に思ふものか。忝ない／＼。

ト云ひ／＼小女郎が懷を搜して最前の金を取らうとする。小女郎、懷を抱へて、ちやつと此方へ來る。

ハヽヽ、ハヽヽ、

ト紛らかす

妹、おりや早う一軸のせいりやくをして來ようわいの。

小女　それ／＼、それがようござんす。

新兵　九十郎さま、形はそれでようござりますか。

九十　お陰で人柄が好くなつた。妹や、國を出てから始めて羽織を着た。ハヽヽ、ハヽヽヽ。

新兵　とてもの事に、腰が明いて見苦しい。これを差してござりませ。

ト九十郎、取つて腰に差し

九十　どうでも馴染みの一腰。

小女　父さんのお讓り、大事にさしやんせ。

九十　ムウ、心得た／＼。

新兵　早く行てござりませ。

ト唄になり、九十郎、衣紋繕ひ、咳拂ひして向うへツ

イと入る。跡見送り、兩人、こなしあつて

新兵　アヽ、どうぞ一軸を無難に。

小女　今のやうに云うたれば、よもや如才はござんすまい。

新兵　ハテ、さうは思うて居れども。

ト始終心ならぬ思ひ入れ。小女郎、新兵衞が形を見て

小女　ほんにお前は、薄着で寒うござんせう。幸ひ〳〵この羽織

ト最前の羽織を取りに行かうとするを、新兵衞留めて

新兵　ハテ、心遣ひには及ばぬ。寒うはないよ。

トこなしある所へ、バタ〳〵にて出村新兵衞、才兵衞を引立て出て來て

出新　宇田川町で人も知つた出村新兵衞を、わりや、なんで騙し居つた。

才兵　イヤ〳〵申し、新兵衞さま、どうして、わたしがあなたに、僞はりを申しませうぞ。

小女　申し、新さん、見ればお前は、わたしが親方さんを捕へて。

出新　オヽ、存分にせにや措かぬ。コリヤ、三國屋の才兵衞、この小女郎を二三度呼んで、直ぐに內證で立て金の相談、年季の短かいを取得に、百五十兩との相對ゆゑ、コレ見ろ、今日伊勢講の次手に、埒明けうと思うて、耳を揃へて持つて來たぞよ。

小女　エヽ、何と云はしやんす新さん、アノわたしをお前が、百五十兩で身請けの相談を。

新兵　コレ〳〵、小女郎、マア默つて居や。コレ、親方、こなさん、どうしてあれを、百五十兩で立て金させるとは。

才兵　ハテ、親方の習ひ、望み手がありやいくらでも、おれが心任せにするのサ。

新兵　ヤ。

出新　百五十兩で立て金するこの新兵衞を、親方、われも同腹になつて、虫付きの者を被せうとは、あて事もない。ようもいかさまにかけようとしたな。

才兵　エヽ、成る程、合點がゆきました。あれを見ては、お前のお腹が立つのが御尤もでござりまする。

出新　一旦の約束、譯さへ立てば今でも金渡す。サア、この出村が立つやうに、方を付けてもらはう。

才兵　サア〳〵、ようござります。コリヤ小女郎、あの新兵衞どのを、さつぱりと切れてしまへ。退いたといふ事



をお目にかけにやア、此方のあの新兵衞さまの方へ、われを遣られぬ。

小女　否でござんす。馬鹿らしい、出村さんは、やう／＼この間から附合ひに出たお客、この新兵衞さん、、疾から云ひ交した可愛い男、末は女房と思うて居れば、なんぼ親方さんの高下でも、滅多に切れてよいものかいなア。

才兵　イヤ、此奴が／＼、親方に口を明かせぬな。

出新　コリヤ、才兵衞、小女郎は、いよ／＼おれに立て金させるのか。イヤサ、どうぢや。

才兵　ハテ、ようござります。お前のお顔は立てまする。

出新　そんな事ぢや立たぬ。すべて女郎は金づく。この出村より好い客があつて、百五十兩が貳百兩で立て金せうと云へば、一文でも高い方へ遣る心であらうがの。

才兵　左樣でござりまする。

ト小女郎、こなしあつて

小女　親方さん、この金取つて下さんせ。

ト最前の金を出して前に置く。

才兵　なんだ、この金を取れとは、

小女　五十兩ござんす。後金は何ぼなりと、わたしが身體をわたしに、身請けさせて下さんせ。

才兵　イヤ、そりやならぬ。いま出村さまの詞を何と聞いた。斯うなつたからは、金づく、壹文でも値の高い方へ、相談せいとある。後金も極らず、只五十兩の手附けばかりではマアならぬ。

小女　そんなら百五十兩の上でなければ。

出新　おれが承知せぬ。動きの取れぬはこの證文。

ト出して

一つ、私し抱への奉公人小女郎儀、貴殿と相對の上、金子百五十兩お渡しなされ候はゞ、早速小女郎を遣はし申すべく候ふ段、御懸合ひ申し候ふ所、實正なり。

小女　エヽ、あの證文は、

出新　相談にかゝるより、後で彼れこれ云はさぬやうに、念の爲に取つて置いたこの證文。この出村新兵衞は金で相談する。オヽ、小判で氣に入つた女郎を買ふ。それになんだ、形もないざまをして、隱れ忍んで盜み食ひ。親方が金出した代物を、只せしめやうとは。アノ太いいけずりめ、盜人め、巾着切り同然なれば、打ちのめさうが撲き殺さうが、云ひ分はあるまい。ナア親方、出村新兵衞は金で小女郎を女房にするぞ。

新兵　ト此うち玉屋の新兵衞、さま〴〵こなしあつて
小女郎、最前も云うた通り、思ひ切つてたも。

小女　エヽ、又かいなア。

新兵　ハテ、どうあつても、この新兵衞は退いたぞや。

小女　なんと云はしやんす。

新兵　エヽ、おれも三十間堀で藍問屋はして居れど、兩親を持つて居れば、云はゞ部屋住み、金が無い。サ、百五十兩の立て金、それに張合つて物も云ひたい、男の顏も立てたいが、この身に替へて大事にかけねばならぬお人。ナ、コリヤ、云はいでも知つて居やる道理、尤も云ひ交した義理も濟まねど、ハテ、勤めの習ひ、例へば一年で明く年を、二年三年と思へば、請け出されうが立て金しられうが、心が濟みさうなものぢやぞや……マア、どのやうにあらうぞ。日頃の氣質、おれが心を推量して……サア、さつぱりと退いてたも。

小女　ムウ、そんならアノお前と切れて、出村さんの方へ行けかえ。

出新　金といふ色男にやア、たとへ業平でも叶ふまい。

新兵　おやに依つて、ナ、小女郎。

ト思ひ入れ。

小女　成る程、尤もでござんす、得心しました。云ひ憎い事を、よう云うて下さんした、頼もしい、志し、ふッつりと思ひ切りました。申し親方さん、新兵衞さんを離れて、出村さんの方へ行きませうわいなア。

才兵　イヤ、その手は食はぬ。おれでさへ合點がいてあるものを、出村さまは大通ぢや。いま百五十兩の金が無いに依つて、一年の年を二年三年ぢやと思うて退いてくれ、合點でござんすなぞと、太い事を。二人が馴れ合つてこの場を濟まし、跡での思案とは云はいでも知れた仕組み。コリヤ、大勢の女郎を遣ふ親方ぢや。そんなではゆかぬ。甘い狂言取措け。出村さまへの面晴れに、誠に新兵衞どのを退くか退かぬか。親方の強意見、斯うだワ。

ト薪さつぱを、振り上げる。出村新兵衞、ツカ〳〵と寄つて、しつかりと留めて

出新　コリヤ待て。

才兵　イヤ、彼奴を。

出新　ハテサテ、疵が付いては矢ッ張りてまへの損ぢやがの。

才兵　それでもお前。

出新　大事ない。出村が心はコレ。

ト合ひ方になり、傘と下駄を取つて來て

才兵　エヽ。

　ト出村新兵衞、傘を廣げ

出新　ハテ、どのやうな大雨でも、この傘を差せば、一滴も身にはかゝらず、小女郎といふ大車軸が、身に降りかかつても、この傘で防ぐ。また斯うすぼめると、その雨が下へ落ちて下の泥と馴れ合ふ。その泥めが身にかゝつて、汚さう／＼と撥ね上がつても、そこでこの下駄ぢや、これを穿けば泥を凌ぎ、傘をさせば身にかゝる雨を防ぐ。なんと、よく〳〵したものか。また泥めがどう捏ね返しても、この下駄で踏み躙るヷ。アノ泥めを。

　ト新兵衞、キッとこなしあつて

新兵　いま始めて逢うた出村新兵衞とやら。おぬしが下駄で踏み躙る、泥とは誰れが事だ。

出新　オヽ、玉屋の新兵衞、われが事だ。

新兵　最前から怺へて居たが、もう料簡が。

　ト下駄を持つて飛びかゝる、皆々支へるを、よろしく立廻りにて、新兵衞、出村新兵衞が下駄にて額へ疵をつける。奥より金太郎、出て來て

金太　ヤア、こりや何事ぢや／＼。

才兵　ヤヽ、出村さまの頭を新兵衞が割つたな割つたな。

金太　ほんに割れた。こりやア旦那、ひよんな事を。

　トうろ／＼、皆々も立騷ぐ。

出新　コリヤ／＼、ザワ／＼と騷ぐな。新兵衞、われやおれが頭を割つたぞよ。

新兵　泥に譬へられた上は、下駄の撥ねが上がると思へ。

才兵　飛んだ事を爲出した。玉屋新兵衞、濟まぬぞ／＼。

出新　ハテ、やかましい。そこにおれが莨入れがあるだらう。

金太　オヽ、さうぢや／＼。マア、莨でも付けて血を止めたがえゝ。

　ト尋ね

大方これであらう。

　ト渡す。出村新兵衞、莨を疵に付け、手拭を鉢巻にする。小女郎皆々、心遣ひの所へ、向うバタ／＼にて有介、走り出て

有介　玉屋新兵衞は、これにお居やるか。

新兵　勇藏さまの御家來、これへは何御用。

有介　外でも無い、其方が請合ひし今日限りの彼の一軸、いよ／＼差上げ召され。さなくば、先達て申せし通り、兵太夫さまの仕置、九十郎どのゝ身の上。とくと承知では

ござらうが、最早暮れに間も無ければ、念の爲にわざわざ拙者お使ひ、
新兵　委細畏まりました。今宵五ツまでには、キッと右の一軸差上げませうと、勇藏さまへ憚りながらよろしく。
有介　すりや、相違ござらぬな。大切な儀、必らずともに。
新兵　心得ました。
有介　然らば拙者は。
新兵　お使ひ御苦勞。
有介　御主人へ右の樣子を。
ト引返し、有介、向うへ走り入る。小女郎金太郎、こなしある。
小女　そんならいよ／＼最前の
新兵　サア、此方の手詰め、それゆゑこの場の立て金は。
ト心意氣ある。
金太　兎角九十泥坊が枷になつて、いとしや新兵衞さんに氣を揉ませる。アノ生醉づらめが。
ト小女郎と顔見合せ
イヤ、九十さんは如才の無いお方。
ト紛らかす所へ、向うバタ／＼にて伊三郎、走り出て來る。

伊三　ヤア／＼新兵衞さん、今爰へ來る道で、九十さんに出會つたら、わざ／＼お前に傳言。
新兵　それ待つて居た。どうぢや／＼／＼。
金太　伊三郎、早く云へ／＼。
小女　コレ／＼、兄さんが何と／＼。
伊三　サア、鯉の一軸を預けて置いた先の者に、ちつと譯が有つて、金を二百兩渡さねば、此方へ取返されぬ程に、小女郎さんや新兵衞さんに、二百兩の金を早く拵へて持つて來い、夷の宮の麥飯茶屋に待つて居るとの事。
新兵　ヤア／＼、すりや鯉の一軸を受取るには、金を持つて行かねば。
小女　思ひがけない大枚の事。
金太　藪から棒と云はうか、寐耳に泥鼈
伊三　大層な事ぢやが、新兵衞さん、小女郎さん。
小女　金が無ければ一軸は取返されず
新兵　お國にござる親旦那の御身の上。
小女　今のお使ひ。
新兵　勇藏さまへ請合つた
小女　新兵衞さん。
新兵　小女郎。

小女　こりやマア、どうぞ爲やうは。

新兵　エ、コレ、何を云うても今云うて今の事……どうせうなア。

ト當惑のこなし。小女郎こなしあつて

小女　親方さん、わたしを鞍替へにやつて下さんせ。

才兵　アノ、年の短かいおぬしを。

小女　年短ければ、二年なりと三年なりと切り増して、金拵らへまする。

才兵　なんぼ切り増しても、そんな面倒な相談はようせぬわえ。

出新　イヤ、その相談はおれがせう。

小女　エ、。

出新　ソレ、百五十兩。

ト金を抛り出す。

皆々　ヤ、この金は。

出新　小女郎はおれが抱へる。

小女　否でござんす。お前の方へ行ては義理が濟まぬ。それぢやに依つて、矢ツ張り辛い勤めをしても、新さんのお爲なりや、たとへ女郎で朽ち果てゝも、いつまでも勤めをするわいなア。

出新　イヤ、おれが女房にやせぬ。矢ツ張り三國屋の内に置く。

小女　エ。

出新　小女郎、おぬしが身體は抱へぬ、心を抱へた。二年でも三年でも、そりや勝手次第、身の代の百五十兩

才兵　イヤ、あの金は立て金の相談。

出新　みすみす知れた虫付きの女郎を、立て金する馬鹿があらうか。才兵衞、われから取つた證文も斯う。

ト寸々に引裂き

破つてしまへば、約束變替へ常の習ひぢや。

才兵　何のこつた。立て金は小田原相談になつてしまつた。

ト小女郎こなしあつて、出村新兵衞が金を取り上げ

出村さん、忝なうござんす。

ト五十兩の金と一つにして

サア、新さん、都合二百兩。

ト新兵衞に渡す。

新兵　最前の惡口、こりやコレ小女郎を立て金する戀の意地と思ひの外、今この新兵衞が

出新　難儀を見かね、小女郎を抱へてやる。

新兵　アノ現在の
出新　おれが面へ疵を付けた玉屋の新兵衛なれど、この場の手詰め、おぬしが難儀をするのを見て喜ぶやうな、小さな根性の出村でもないのサ。
新兵　ヤ。
出新　情は情。
新兵　出入りは出入り。
出新　氣兼ねをせずと遣やれな
新兵　エヽ、忝ない。
　トこなしあつて懐へ金を入れる。雨車になる。出村新兵衛こなしあつて
出新　コレ、また降つて來たさうな。太々の鬮取りは濟み連中も先へ歸つたれば、ドレ、おれも歸らうか。
　ト立ちあがり、身拵らへする。小女郎こなし
新兵　出村さん、今のお前のお志し、お禮は追つて
出新　抱へた奉公人、禮受ける事はない。隨分大事に勤めてもらはう。……おれが下駄や傘が
小女　ドレ、わたしが見ませう
出新　イヤ／＼、それは。
小女　ハテ、わたしは奉公人、お前は旦那様。
　ト下駄や傘を尋ね
　爰にたんとあるが、お前のはどれぢやえ。
出新　アヽ、ほんに、下駄の齒に、おれが額の血の付いてあるのがさうぢやて。
小女　そんならこれが。
　ト下駄の齒を見て心意氣ある。
出新　コレサ、ちやつと爰へ。
小女　アイ／＼。
　ト下駄を直す。此うち新兵衛、思ひ入れあつてツカツカと行て右の下駄を取上げ、我が額へ疵を付ける。金太郎、伊三郎立寄り
伊三　ヤヽ、新兵衛さん、それは。
金太　旦那、我が手に頭を割るとは。
新兵　ハテ
　ト兩人を引退け、出村新兵衛へこなしあつて
　出村新兵衛どのとやら。小女郎が身の代百五十兩は、この新兵衛が額の疵の癒らぬうちに。
　ト下駄を直す。出村新兵衛思ひ入れ。
出新　ハテ……慮外でごんす。
　ト下駄を穿き、傘を持ち、門口へ出かけるを

小女　申し、出村さん、アノお前の所は、いよ／＼宇田川町でござんすか。
新兵　それ／＼金が調うた時には
出新　イヤ、御持參には及ばぬ。
兩人　それでも。
出新　ハテ、野暮な。茶屋での事は内へは沙汰無し。しつかりと所を云はぬも客の癖。
小女　ほんに頼もしい。
新兵　意趣のあるこの新兵衛に。
出新　出村は男……其うち逢ひませう。
ト唄になり、出村新兵衛、傘をさして向うへ入る。跡にて皆々、こなしあつて
新兵　エヽ、馬鹿らしい、見世物はおれ一人、いま／＼しい。これから奥へ行て、自腹で酒でも呑まうわえ。
ト奥へ入る。
伊三　申し、新兵衛さま、金が調うた上は、お前は一時も早う爽の宮へ。
金太　こりや八百屋の伊三が云ふ通りだわえ。向島には澤山にあれど、こちらには大事の鯉の一軸とやらを
小女　御苦勞ながらお前、直ぐに行て、受取つて、國元のナ。
新兵　ハテ、お主のお爲、苦勞は厭はぬ。
伊三　幸ひ雨も止んであれば
金太　降つたり照つたり氣違ひ日和。
新兵　この間に一走り。
ト行かうとするを
小女　ア、コレ、ちよつと待つて下さんせ。
新兵　ヤ。
ト立ちどまるうち小女郎、最前の羽織を取つて來て
小女　肌薄な。これを着て。
ト羽織を渡す。
新兵　ハテ、大事ない事を。
ト云ひ／＼着やうとして胴裏を見て
ヤ、これは。
ト伊三郎金太郎、立寄り見て
伊三　こりや新兵衛さんと小女郎さんの
金太　比翼紋とは畜生め。エヽ、有り難い。
小女　ほんの風ふさぎぢやわいなア。どうぞ申し
伊三　小女郎さんの志し、否とは云はれまい。
金太　旦那、承知して。

新兵　アヽ、これを着るとは
ト羽織を着て下駄を穿き
エヽ、嫌味な奴の。
ト騒ぎになり、新兵衞、羽織の紐を結び／＼、こなしあつて向うへ走り入る。跡に小女郎、伊三郎金太郎殘り心意氣の見得、暮れ六ツの鐘にて、チヨンチヨンチヨンチヨンチヨン道具替る。

本舞臺、正面二重、見附け、受張りの襖にて、麥飯茶屋座敷の體。下座の方、生垣植込み見越しの夷の宮を見せ、この模樣よろしく、方々に朝顏付きの燭臺を灯しあり、右二重舞臺に九十郎、藤兵衞、酒を呑んでふざけて居る。下の方、蛇之助たゞ六、大胡坐にて膳を扣へ、麥飯をかつこんで居る。眞中に三ぶ、浮れて踊つて居る。何なりと好みの所作の鳴り物入りの唄にて道具とまる。
ト三ぶ、よろしくあつて辷り轉ける。
九十　ヨウ／＼、絲宿の三ぶ、踊りは天晴れ／＼。
たゞ　旨い／＼、麥飯が。
三ぶ　我れら濱村屋の直傳の所作事、奥の囃子を幸ひに、隱し藝を現はしたも、旦那や此方の親方が、何やらめでたいとある喜びの鯲。さらば息つぎに一杯のみのてうなごん、すみかねとは大工の狂歌連。爰にもソレ、額がかかつてある。御覽じませ。
藤兵　イヤ、狂歌の額も、あまり方々にかかつて鬱陶しいそれよりは九十公、いよ／＼お前のお賴み通り、この藤兵衞が彼の一軸の、預かり主になつて新兵衞めに。
九十　ハテ、以前は國元にて傍輩のてまへ、今この江戸でも道樂友達、先程より云ひ合せた通り、新兵衞めが爰へ二百兩の金を持つて來ると、その金を引ッ奪りさへすりやよいのサ。
藤兵　ぢやと云うても新兵衞もさる者、おれが預かつたといふ肝心の、一軸の換玉が無くては、金を引ッ奪る種が無い。
ト九十郎、懷中より袱紗包みの一軸を取出し、藤兵衞に渡す。
そんならこれが鯉の一軸の
九十　似せ物ぢや。身共が國元で畫師に書かせて、摺替、た時のを、今度氏原勇藏が、詮議の種に持つて來たを、馬鹿者の新兵衞が受取つて、おれに渡したを、また今日

役に立てる。なんと諸葛孔明か。
藤兵　成る程、似せ物は知れてあるが、して又、眞の一軸は。
九十　そこらはぬからぬ。爰に在る。
ト懐中より袱紗の小風呂敷に包んだる質屋の通帳を出して見せる。
藤兵　そりやア質屋の通ぢやないかえ。
九十　いかにも、宛名は耳切おばア、彼奴が通で眞の一軸は。
ト通をひろげ
コレ、金二百兩、梁の武帝の正筆の懸け地一軸……人知れず斯う質に置いてあれば、いつ取出して貰らうと儘。質屋は石町三丁目大黒屋徳右衛門と、判の据つたこの通。これを持つて請けに行けば、誰れにでも渡す相對。それを大切なこの通。滅多に人手に渡されぬゆゑ、爰へ來しなに、耳切おばアが所へ寄つて取つて來たのサ。
藤兵　そりやア一軸代りぢや。その通を大事にかけたがよい。
九十　それぢやに依つて肌身にしつかりと
ト懐へ入れ、腹へ括り付けるこなし。この時最前の小女郎が狀を落す。藤兵衛取上げ
藤兵　コレ、この狀は何だ。
九十　それも何ぞの玉にならうと、新兵衛が方から小女郎へ遣つた濡れ文。
三ぶ　濡れ文とは、ドレ。
ト取つて開き
夕々の御文ひらく間おそしと詠めより、夷講の歸りにちよと立寄りたく存じ候へども、連れの手前首尾惡しく、殊に夜ふけ候へば直ぐに歸りし事を、そもじには內へ急ぐ心いきの憎さとは、おえんが事に氣うるさき仰せをかしく、さりとは野暮なる御事、あるは厭なり思ふはならずと、味ない者のにへぶとりと、おえんと女夫にならうと思ふほど、身しんにたへて嫌にて候ふ……エヽ、面白くもないこの文。
藤兵　ハテ、その文をこの間摑んだ、三四郎が方へ廻してやると、新兵衛を抛り出す種になるワ。
ト狀を懷へ入れる。
三ぶ　この上は新兵衛めに一軸の目論見。
蛇た　イヤモウ、惡い事には如才のあるお人ぢやない。
三ぶ　此方の親方藤兵衛さんも、この十六日に芝の神明で

彼の新兵衞めに、おれまで側杖をくらつて酷い目に逢うた。その意趣もあり、今日九十さまのお頼みを幸ひに。

藤兵　折角目論見かけた百兩の證文、思ひがけない見世物の羊めに食はれしてまうて亂騒ぎよ。自體おれと新兵衞が火をするも、根が戀の意趣サ。

九十　その戀とは、おれが妹に

藤兵　コレサ、お前の前では、さと面伏せぢやて。

九十　そりやア氣遣ひせぬがよい。新兵衞めさへ片付けたらば、妹はおぬしに遣るワ。この兄が云ひつけるに、妹めも否と云ふ事はならないワ。よいか。

藤兵　そりやア有り難い。何をするのも彼奴めゆゑ。

三ぶ　神田親方と九十旦那は聟舅。

蛇之　おいらはその時仲人役。

皆々　こりや、めでたい〳〵。祝うて一つ打たうか。ヨイヨイ〳〵〳〵。

九十　これから又、酒ぢや〳〵。

ト手を打つ。

皆々　こりやよいわえ、

ト騒ぎになり、皆々、ワヤ〳〵云うて酒を呑む。向うより新兵衞、空を見い〳〵出て來て

新兵　いま日が暮れたが、よもやまだ五ツにはなるまい。

ト舞臺を見て

あの人聲は慥かに旦那、早くお目にかかつて。

トつか〳〵と本舞臺へ來る。

皆々　そりやこそ新兵衞ぢや。

ト皆々慌てる。新兵衞、藤兵衞始め、いろ〳〵と顔を見て

新兵　こりや變つた一座。

トこなしある、九十郎俄に生醉のこなし。

九十　コリヤ〳〵、新兵衞、一座も二座もない、われを待ちかねて居る、おれが云うてやつた貳百兩の金、持つて來たか。

新兵　ハイ、成る程、義理の悪い事をしても、拵らへた貳百兩、持つて參りました。いよ〳〵右の鯉の一軸は

藤兵　おれが預かつて居る。

新兵　ヤ。

藤兵　イヤサ、神田の通り者、茨の藤兵衞が、その一軸の預かり主だ。

新兵　ムウ、おぬしやア神明で、初めて出合うた茨の藤兵衞、大切な一軸を預かつて居るとは。

藤兵　オヽ、九十どのとは以前の傍輩、おぬしは知るまいが、ずんと親しい念頃中、そこで九十どのが段々と、おれを頼みてコレこの

ト最前の袱紗包みを出して見せ

鯉の一軸を預けて、貳百兩貸してくれいとの事、まんざら否とも云はれず、よんどころ無く貸したは友達づくなり、金を貸すはマアおれが商賣。

新兵　そりや商賣づく、友達づくなら、貸借りは有うち。外の事は云はずと、此方に急ぐはその一軸、早く請け戻したい。貳百兩の金もコレ、持つて來た。

藤兵　イヤ／＼、コレ、新兵衞、大切な鯉の一軸、僅か貳百兩では請け戻されまい。

新兵　ハテ、貳百兩貸したといふではないか。

藤兵　エヽ、素人らしい、貸した金には利足がつく。

新兵　ヤ。

藤兵　それも九十どのとの相對で、拾兩壹分といふ金はあれど、おれがのは拾兩で月に五兩宛、それが三月滯つてあるゆゑ、貳百兩で利足が三百兩、元利合せて五百兩だ。

新兵　とんだ事を云ひ出すが、藤兵衞、さういふ利足が世界に

藤兵　有らうが有るまいが、借り主の九十どのとの相對だ

三ぶ　新兵衞、一軸が請け戻したくば、五百兩、耳を揃へて持つて來い。

蛇た　よもや持つては來られまい。

新兵　ムウ、わいらにやア構はぬ。

トこなしあつて、九十郎が側へ行きて

申し若旦那、今の樣子を聞かつしやりましたか。ありやアマア、どういふ相對でござりまするぞ。

ト此うち九十郎、醉ひ倒れたる體にて、狸寐入りして居る。

コレ／＼、申し、九十郎さま。エヽ、コレ若旦那。

トいろ／＼と氣を揉み、無理に引起す。九十郎、わざと他愛のないこなしにて

九十　オイ／＼、何だよ／＼。

新兵　イヤサ、お前が借りさつしやりました金の事を。

九十　サア／＼、金の事か。承知だ／＼。

新兵　ハテサテ、大切なる鯉の一軸。

九十　イヤ、斯う呑んだ上は、鯉の吸物は、もう／＼いけぬいけぬ。

ト云ひ／＼倒れる。新兵衞、さま／＼こなしあつて、

新兵　エ、コレ、さういふ所に性根をつけて下さりませ。コレ、もう五ッというても聞かない。それにマア此やうに。

トまた引起す。九十郎、鼾をかいてグニヤ／＼と轉げる。新兵衞、思ひ入れあつて、是非なく又、藤兵衞が側へ行き

茨の藤兵衞。

トきつとなつて膝を突ッかけ、また氣を取直し、こなしあつて

イヤ、藤兵衞や、おぬしも神田の通り者、野暮ではない旦那の友達、念頃づくなら一番砕けて、この新兵衞をいぢめずとも、借りたが定なら元金で、どうぞ一軸をナ、コレサ、おれも新兵衞だ。まんざら白痴でも無い。ソレ、十日跡にも、おれに貸附けの百兩の證文、折好く羊が喰つてしまうたりやこそナ、サア、證文の筋も、今また一軸の預かり主も、とつくりと根を洗つたら同じ狂言の仕組み。サア、手を替へ品を替への思ひ付きであらうが、事を糺さず、なんにも云はぬ。ヤ、藤兵衞、この貳百兩で、彼の一軸を返してもらへば事は濟む。

ト金を出して見せる。此うち九十郎、首を上げ、これを見て、舌を出して笑ふ。

藤兵　新兵衞、どうか氣味の悪い物の云ひやうするが、そんなら、おれが九十どのに金貸して、一軸預かつて居るを、おぬしやアいかさまと思つて居るか。

新兵　なんの、さう思うてよいものか。おれが頼むは利足のところを、どうぞ元金貳百兩で

藤兵　そりや三百兩の違ひだ。

ト九十郎が方を見る。九十郎、早く金を取れと仕方なして見せる。

新兵　サア、そこを新兵衞が折入つての頼み。

藤兵　ハテ、どうせうなア。

ト脂下がりに莨をのむ。

「時しも今は」

ト石橋の唄の切れになる。

たゞ　ヤア、ありやア屋根舟で騒ぎ居るワ。

蛇之　エヽ、面白からうなア。

ト此うち三ぶは片脇へ寄つて麥飯を喰うて居る。九十郎も寐たり起きたり、いろ／＼こなしある。新兵衞こなし、いろ／＼あつて

新兵　ムウ。

ト九十郎が方へ行く、九十郎、ちやつと胡坐をかいて居る。

新兵　コレ、申し、斯う手間取つて時刻が延びると、お國にござる親旦那にはナ。

九十　ム、、、、。

ト寐返りする。

新兵　エ、コレ、今日の日限、今宵の手詰めに、それ程に酒を吞ますとも。

ト又ムッとして藤兵衛が側へ行く。

コレ、藤兵衛、アレ、段々夜が更ける。おれも氣が急く。新兵衛があやまる。どうぞ料簡して早く一軸を。

藤兵　おれが利足を負けてやれば三百兩、新兵衛、われが神明で、おいらを打つたは、百兩だけだぞよ。

新兵　ヤ。

三ぶ　その時打たれた疵が、いまだに背中に痕がある。

蛇た　おいらも手傳つて。

ト薪ざつぱにて兩方より打つてかゝる。新兵衛、左右へ見事に取つて投げる

藤三　それは。

ト兩方より寄るをよろしく引廻し

新兵　殊に寄つたら藤兵衛、神明で打つた仕返し、おれが存分にならうか、そりやアあんまり古臭い。これまでいくらもある格だ。そこを又新らしく、一軸を受取つたその上で。

藤兵　イヤ、算用づくだ。先へ仕舞はう。

三ぶ　われを存分にして。

ト又かゝるを新兵衛、立廻りになり、石橋の切れの鳴り物になる　ト此うち九十郎起上がり、金を取らうとして、新兵衛が見ると、ちやつと寐たり、後にてさまざま跪くこなし、この立廻りのうち向うバタ〳〵にて、金太郎走り出て

金太　コレ、若旦那新兵衛さん。

新兵　金太郎、何しに爰へは。

金太　イヤ、小女郎さんがお前を案じて、おれに見て來てくれいと、それで尋ねに來たが、そして彼の一軸はえ。

新兵　この藤兵衛が持つて居る。

ト藤兵衛が懐より引出すを、藤兵衛、滅多にト始終立廻りのうちにて、新兵衛引ッ奪り、

大事の一軸。コリヤ、早う

ト投げてやる。金太郎、取上げる。

金太　合點だ。

ト一軸を持つて向うへ行かうとするを、たゞ六蛇之助金太郎を後より引留める。その次へ三ぶ藤兵衛も引留めると、押へに新兵衛、藤兵衛を留める。皆々蛇のおどろになり花道へ行く。これより萬歳の合ひ方になり、金太郎、一軸を差上げる。たゞ六、後より引ッ奪くる。それを蛇之助取る。また三ぶ取るを藤兵衛引取る。段々手繰りに取つて、トゞ新兵衛引ッ奪り、一人舞臺へ立戻り、藤兵衛四人、それはト振り返るを、金太郎跡より引留める。これにて皆々跡へ戻る。此うち始終有の合ひ方、九十郎一人本舞臺にて、いろ／＼焦つて居る。新兵衛この間に袱紗を開き、一軸をとくと改め見て

新兵　ヤア／＼、こりやコレ、眞赤な似せ物。

トこの時皆々、バラ／＼と舞臺へ立戻りて

皆々　ナ、なんと。

トこれにて合ひ方納まる。新兵衛、キッとこなしあつて

新兵　勇藏さまより預かつたこの一軸、心覺えの印を付けて、旦那九十郎さまへお渡し申したを、今また貳百兩でこの似せ物を渡さうとは、ハテ、恐ろしい惡黨ども。

金太　こりや勇藏さまへ、よう差上げなんだわえ。

ト尻を引ッ褰げる。

藤兵　手目をあげられたからは、ソリヤ。

三ぶ　新兵衛、うぬを。

ト三ぶ藤兵衛は新兵衛にかかる。たゞ六蛇之助は金太郎にかゝる。兩方立廻りにて投げ退けるうち、九十郎いろ／＼と身を揉みあせり、好き所にてツカ／＼と寄つて

九十　もう自棄だ。この金を

ト新兵衛が金を引ッ奪るを、よろしく留めて

新兵　若旦那、醉が醒めましたか。

九十　オヽ、醒めたに依つてこの金を。

新兵　滅多に渡さぬ、眞の一軸は。

九十　サア、それは。

新兵　どこにござる。

九十　一軸よりはこの金を。ソリヤ。

ト無理に財布を引取る。新兵衛それはト引合ふ。藤兵衛三ぶかゝるを立廻りにて、九十郎、財布を解き、金を方々へ蒔き散らす。たゞ六蛇之助三ぶ藤兵衛も拾ひ

上げるを、金太郎、拾はさぬ立廻り。此うち皆々よろしく心得あつて、ト、九十郎向うへ逃げるを、新兵衞抱き留める。九十郎、羽織を脱いで走り入る。藤兵衞新兵衞を抱き留める。新兵衞も羽織を脱いで追ひ駈けて入る。藤兵衞、新兵衞が羽織をひん抱へ、跡を慕うてこれも走り入る。此うち本舞臺にて金太郎、三ぶただ六蛇之助を相手に、金を拾ふをかしみの立廻り、さまざまあつて、ト、金太郎、三人を押へ、よろしく見得になる。これにてチヨン／＼／＼道具廻る。

本舞臺、正面黑幕、一面の枳殼の生垣、上の柱、柳の木、吊り枝見事に猪の堀の景色になり、雨車にて、九十郎菰を被り、立ち身にて逃げうとして居るを、新兵衞、尻を褰げ、腕捲りにて中腰になり引留めて居る。こゝ見得、凄き合ひ方、割り竹、拍子木の音にて道具とまる。

新兵　若旦那九十郎さま、こりやどこへござりまするぞ。

九十　どこというたら、われがあんまり氣を揉むが笑止さに、眞の一軸を取返して來てやらうと思うて。

新兵　そりやどこで。

九十　ヤ。

新兵　茨の藤兵衞に預けたと、貳百兩拵らへさせ、その金も散り／＼ばら／＼に巻き散らして、既の事に似せ物を突付けられ、もし勇藏さまに差上げたら、この新兵衞、請合うた男の面より、お國にござる親旦那のお身の上。又お前も召捕られて逆磔刑、それが悲しさ／＼と、宥めつ賺しつ、一軸の在所、今宵の手詰めになつても明さぬとは、どういふ曲つた御所存でござるぞ。コレ、新兵衞が心を砕いて、その一軸を差上げやうといふも、皆お前のお爲。百萬陀羅云うてお聞かせ申すに、イヤハヤ、御合點のゆかぬと申すは。

ト引廻し引据ゑ、胸倉を取つて思はず

九十　コリヤ、うぬは主を、なぜ手籠めにしをる。

新兵　ヤア。

エヽ、こなたはなう。

トちやつと手を放し

なんの、さうでは無けれども

九十　無けれども凄まじい。ヤイ、新兵衞、これまでは、おのれや妹めに、大分金もせたげ取つたれど、もうこの上は、おれもちつと思案がある。その思案といふは、この江

戸には居らぬ。すりや、金をせびり取るも一世一代、新兵衞、もうさらば。

ト新兵衞を引退け、行かうとするを、また取付き

新兵　待つた。こなたには、さては爰を立退き

九十　オヽ、上方へ行て氣樂に暮らす。その用意に賣り代なすは眞の一軸、うぬらに在所を滅多に云はうか。アノ馬鹿な面わえ。

ト振り切つて行くを

新兵　イヤヽヽやらぬ。先づ待たつしやい。

ト取付くを

九十　べら坊め。

ト叩き拂ふを

新兵　イヤサ、滅多にはやられぬ。

九十　エヽ、退きやアがれ。

ト蹴退けるを新兵衞構はず、兩人いろ／＼しか／＼あつて、トヾ新兵衞、向うへしやんと立廻り

新兵　コレ、ちよつともやらぬ九十郎どの、マア、待つて下さい。

九十　此奴は俄に横紙に吐かすな。

新兵　大それた科のあるその身の上、天下の御威光天の網、たとへ上方へ行ても安穩で居られうか。愚な事を。

九十　ハア、安穩で居られまいかの。

トきよくつて云ふ。

新兵　現在お主のこなた、家來のこの新兵衞が、お爲にならぬ事を何の云はうぞ。それよりは無難に、その一軸を差上げ、こなたの命乞ひは勇藏さまに只管お願ひ申して、金輪際おれが命を取られても、こなたを助けて見せませう。さすれば親旦那樣にも牢舍を免れて御無事なお顏。御親子めでたう御對面あるならば、この上の御孝行、これに上越す喜びがござりませうか。

九十　ムウ、成る程、さうぢや。コリヤ、新兵衞、われが云ふ通りに隱してある眞の一軸を取出して

新兵　オヽ、すりや、御合點がいて、その一軸を

九十　オヽ、渡してやらうが、その金は。

新兵　エ。

九十　ハテ、貳百兩の金はどうした。

新兵　サア、そりや最前散り／＼ばら／＼に。

九十　金が無いか。金も渡さず、一軸を渡せとは。マア、成らぬ。

新兵　ヤア。

九十　コリヤ、親仁が國で牢へは入つて居やうが、ありやア死損ひの娑婆ふさげだ。たとへ助けても餘命は無い。すりや、永々としたおれが代りに、磔刑にかゝるのが親仁の仕合せ。また勇蔵めが、この江戸にまごついて居るうち、一時も早く逃げらにやアならぬ。そこ退け。

ト引退けるを、此うち新兵衛、いろ〳〵こなしあつて

新兵　さう聞けば、もう。

ト九十郎が首筋取つて引擔ぎ、見事に取つて投げる。

九十　アイタヽヽヽ、コリヤ、おのれ、主を手酷く取つて投げたぞよ。

新兵　オヽ投げた。茲な人外め。今までは、どうぞ〳〵どうぞと思うて居たが、親旦那を我が身の代りに磔刑に上げさす所存で、愛想もこそも盡き果てた。

九十　エヽ忝ない。愛想が盡きたとは新兵衛、よく云うた。忝ない〳〵。現在うぬが命を助けられた大恩あるお主様の、その御子息様を、手酷く見事によく投げた。イヤ、出來したわえ。おれよりもわれが惡黨な。この九十郎をどうで助けては置くまい。サア〳〵、殺せ〳〵。

ト身體をこすり付ける。

コリヤ、おれが死んだら結城の重寳、彼の鯉の一軸の在所が知れまいが。

新兵　サア、それぢやに依つて。

九十　サア〳〵、殺せ〳〵、早く殺してくれ。新兵衛、どうだ……ハア、さては、刃物が無いか。われよりおれが太つて居れば、よう締め殺しもなるまい。

ト鞘ごと脇差を抜いて

こりや最前貴公がお持たせの關の孫六。サア〳〵、これで殺しなさいよ。

ト脇差を新兵衛に突きつける。

ハテ、切れと云ふのになぜ切らぬ……これで斯うして、サア、斯う切れよ。

ト抜身にて新兵衛に切りつける。立廻りにて見得よく留める。ト五ツの鐘鳴る。新兵衛、キツとこなし。

新兵　南無三、ありやもう五ツの鐘。

九十　新兵衛、おのれを。

トまた切りつけるを突き廻し、

新兵　エヽコレ、これまで種々樣々の心盡しも、千日に刈つた萱、もう是非に及ばぬわえ。

ト脇差を引たくり九十郎を一太刀切る。ほんの雨一面に降り、好みの合ひ方、新兵衛こなしある。九十郎、

九十　起き上がつて
おのれ大膽な、主を殺すな。主殺しだわえ〳〵。
ト大聲上げる。よろしく新兵衞抱へ、突く。これより新兵衞、九十郎と蘇袍のダテある。トヾ新兵衞、九十郎に止めを刺す所へ、向うより出村新兵衞、以前の形にて提灯を灯し、出て、ツカ〳〵と本舞臺へ來て、この體を見て提灯を差出す。新兵衞、バッタリと提灯を切り落す。出村新兵衞恟り、傘をすぼめる。新兵衞、拔身をひらりと構へる。兩方、途端の見得よろしく、カチ〳〵〳〵カチ。

ひやうし幕

# 大切

玉屋内の場
江戸橋の場

役名 ―― 玉屋新兵衞、玉屋新右衞門。玉屋嫁、おえん。三國屋小女郎。丁稚、傳吉。下女、お竹。新右衞門女房、お大。玉屋手代、三四郎。鳶の者、鳶毛の金太郎。茨の藤兵衞。氏原勇藏。出村新兵衞。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、見附けまいら戸、押入れ納戸口。上の方、障子屋體。いつもの所に門口橋がかりに納屋藏、藍玉吉田炭といふ書付けあり、同じく門口に用水桶、三十間堀二丁目といふ書付け、すべて世話場の模樣にて、幕の内より右二重舞臺に、おえん、振り袖娘の拵らへ。お竹、傳吉、片肌脱ぎ鉢卷にて、仰山に、めい〳〵毬を突いて居る。この見得、てんつゝ、通り神樂にて幕明く。

傳吉　一つとやア、ひイと夜明くれば賑やかで〳〵、お飾り立てたる松飾り〳〵、
たけ　コレ〳〵傳吉どん。こなさんが洒落れるので、わしが毬が落ちるわいなア。
傳吉　それをわしが知つた事か。てまへの下手で落すのだ。アレ〳〵、御新造樣はあの通りに、どうしても上手ぢや。
えん　何を云やるやら。わしや小さい折と違うて今はどうか。ソレソレソレ。此やうに毬が突かれぬわいなア。
傳吉　なんぼその毬は突かれいでも、追つけお前の毬は、若旦那新兵衞さんが、毎晩々々、ついてぢやわいなア。

たけ　ほんに若旦那は、昨日からまだお歸りなされず
傳吉　大方深川の毬をついてござらう。
えん　どうであらうと儘、所詮不束なわしなれば、疾から
　諦めて……矢ッ張り毬を突かうわいなア。
たけ　コレまた、戯はしやんな。
傳吉　なにを……二つとやア二葉の松は色好うて〳〵、三
　蓋松のかづさ山〳〵
　ト　めい〳〵に毬を突いて居る所へ、奥よりお大、婆の
　拵らへにて、煙管莨盆を持つて出て
だい　これはしたり、アタやかましい。毬はもう措きをら
　うぞ。
えん　エ、、お母さん。
たけ　ほんに、おかみさん。
だい　いかに正月ぢやといふて、おえんも嗜みや。まだ
　新兵衞と祝言さゝぬけれど、此方の内の嫁ぢやないか。
　それに子供のやうに馬鹿らしい。
えん　アイ〳〵、お母さん、わたしが惡うございました。
　御堪忍なされて下さりませいなア。
だい　昨日の日和、昨夜の雨で、持病の頭痛がして來た。
　お竹、爰へ來て肩を揉んでくれ。
えん　お母さんとした事が、わたしが揉みませうわいな
　ア。
だい　イヤ〳〵、肩をかこつけに、日頃の意趣に、わしを
　打のめすのであらう。こりやよしにしませう。
傳吉　エ、、根性の惡い事を。
だい　何だえと。
　ト　睨みつける。
傳吉　エ、
　ト　小さくなる。
えん　ほんに、晩には二十六夜待ではございませぬかえ。
たけ　正月の二十六夜待には、どこでも藝者を呼んで騷
　ぎますが、おかみさん、晩には此方も。
だい　ハテ、内で騷がいでも、野良息子の新兵衞が、高い
　藝者や女郎を買つて騷いで居れば、内で二十六夜待にも
　及ばぬ。ナウ、おえん。
えん　ハイ、頭痛がなされますなら、煮花を拵らへて、か
　きあもでも燒きませうかえ。
だい　イヤ、かきあもよりは燒餅やく術も知らず、新兵衞
　が事云や紛らかす。面の憎い。エ、。
　ト　煙管にておえんが顏を突く。おえん、こなしある。通

り神樂になる、向うより金太郎、思案しい〳〵出て來る。後より三四郎、耳へ膏藥を貼つて手を當て出て來り

三四　コリヤ〳〵、金太郎。

ト呼び〳〵後より背中を叩き

待てと云ふに、どうだ。

金太　新兵衞さんの事を、思案しい〳〵歩いて居るのに、手代の三四郎めだな。

三四　連れ立つて歸らうと思うて、最前から呼んで居るのに、さてはおぬしも耳が聞えぬか。

金太　べら坊め、何を吐かしやアがる。おれはよく聞えるわえ。ほんに、うぬが耳は、先度芝の神明で吹矢を射込んでやつたゆゑ、その通りの聾になり居つたな。

三四　忝ない忝ない。大分よいが、兎角左の方が悪い。どうかすると右の方は聞えるやうだ。

金太　そりやア殘念な。とてもの事に右も一緒に潰してやつたらよかつたに。

ト辭儀をする。

三四　忝ない〳〵。誰れが其やうに云うてくれう。ても親切な金太郎だ。

金太　何も聞えず、馬鹿な面ではある。

三四　サア、連れ立つて歸らう。

金太　べら坊め、勝手にしやアがれ。

ト辭儀をする。

三四　ハテ、大事ないのに、マア〳〵、先へ。

金太　おれが供をしやアがれ。

三四　これはしたり、遠慮深い男ではあるぞ。

ト始終間違つた挨拶を金太郎こなしあつて、三四郎を連れ舞臺へ來て

金太　おれが先へ入つたら、また婆アめが苛め居るであらう。コリヤ、聾よ、おのれ先へうせろ。

ト仕方をする。

三四　ハテ、大事ないもの、叮嚀な男だ。

ト入代り、内へ入る。

傳吉　これは三四郎さん、歸らしやりましたか。

ト耳の側で大きく云ふ。

三四　傳吉、今ぢや〳〵。

だい　三四郎か、待つて居た。醫者どのは何と云はつしやる。どうぢや。

三四　今日は膏藥が變つたので、歸りにも痛うて〳〵なり

ませぬ。

たい　可哀さうに、十日ほど前に不時な怪我して歸つたが、生れもつかぬ不具になるとは、ハテ、珍事ちうようぢやなア。

金太　申し、おかみさん、三四郎どのは、わしが供をして歸りました。

たい　仕事師の金太郎、手代分なれど、おれが甥の三四郎、供をして歸らいではサ。

金太　そりやこそ、凹ましかけるワ。久しいものだ。

えん　ほんに、思ひがけない三四郎、怪我しやつたで母さんのお心遣ひ。わしや氣の毒でならぬわいな。金太郎、

金太　なんの大事ない。打ツちやつて置きなさい。

ト婆が顔を見て

左様でござりまする。ア、、氣の毒なものサ。

ト外らす。三四郎、おえんをヂッと見て居て

三四　おえんさん、エ、、恨めしい。ようおれをこんな目に逢はせて、思へば／＼聾にして、これがほんにお前、聞えませぬぞえ

トこなしある。おえん、ヒッと顔を背ける

たい　イヤ、おえんばかりぢやない。おれが云ふ事さへ、聞かぬものを。

金太　ハテ、聾といふものは、不自由なものぢやなア。

ト順禮唄になり、向うより觀音の勸化三人出る。この中へ新右衛門、杖をつき、珠數を持ち、彳々一緒に出て花道中程にとまり

勸化　新右衛門どの、もうこなたの内へ歸りました。

勸化　今日の勸化はこれぎりにして、また明日の朝、早うから出ませう。

新右　オ、、それがようござる。昨日の雨あがりで今日は道も惡し、また明日から出ませうわいの。

勸化　今度淺草の駒形で、接待を建てる寄進の勸化、同行云ひ合せて此やうに毎日々々。

新右　觀音樣へ御奉公。マア、同行衆にも、此方の内へ入つて、茶でもと云ひたいけれど、御存じの通りの婆なれば

勸化　イヤ、早う内へ戻つて休むが勝手。

勸化　それ／＼。新右衛門どの、内儀は、名代の慳貪な和郎。

勸化　もう爰で別れませう。

新右　そんなら、もうござりまするか。御苦勞でござりま

した。

勸化　また明日一緒に行きませう。サア、皆の衆

新右　これはしたり、途中ゆゑ茶さへ

三人　なんのいなう。

新右　皆ようござりました。
　　ト合ひ方になり、皆々しかじかあつて引返し入る。新右衛門、跡を見送りこなしあつて
ア、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。
　　ト云ひ云ひ舞臺へ來り
皆の者、婆、いま戻りました。
　　トずつと内へ入る。

金太　オヽ、親旦那のお歸りぢや。

えん　ほんに父さん、ようお歸りなされましたなア。

新右　おえん。アヽ、草臥れたたた。婆、さぞ待ちかねたであらうの。

だい　なんの、こなたを誰れが待つものでコレ、親仁どの、向うも知れぬ佛なぶり、後生も大概にして、ちつと内に居て、商賣の方へ性根を入れさつしやれ。アヽ、親子とて、よう似た野良者ではあるぞ。

新右　イヤ婆、觀音樣をお願ひ申すも、こなたを始め家内安全商賣繁昌と、死んで行く未來の事、これ現當二世安樂の爲でござるわいの。

だい　安樂やら道樂やら、ナア三四郎……コリヤ。
　　ト云うても三四郎、ウツカリとして居るゆゑ
エヽ、いまいましい聾ではあるぞ。

新右　ほんに三四郎、どうぢや。ちつとはよいか。耳が聞えるか。

三四　今日は好い天氣になりました。

だい　エヽ、何を云ふやら、張合ひのないものぢや。
　　ト此うちおえん、お竹にこなしあつて、煮花を茶碗に汲んで新右衛門の側へ持つて行て

えん　申し、いま出來ました煮花、一つおあがりなされませ。

新右　オヽ、こりや煮花か。
　　ト戴いて吞む。

だい　アヽ、おれには家内の奴等が侮つて、茶さへ汲み居らぬ。

えん　ほんにお母さんにも。
　　ト立ちあがる。

だい　コレコレおえん、わしに吞まさうと茶を汲みに行か

んすのか。

えん　マア、父さんに上げてからお前にと思うて。ハイ、不調法いたしましてござんす。

トまた行かうとする。

だい　イヤ〳〵、コレ、人に教へられて汲みに行く茶なら、わしや呑まぬ。よしにしや。

えん　アイ、。

トもぢ〳〵こなし。チツと下に居る。此うち三四郎、あたりをキヨロ〳〵見廻し

三四　お竹、傳吉よ、最前から見りや、若旦那新兵衛さまはござらぬが、奥にかつ

傳吉　イ、エ。

ト頭を振る。

三四　ムツ、そんなら昨日から今に歸らしやらぬのか。

だい　なんの歸らう。コリヤ

ト舞臺を叩いて

息子どのは深川に夜泊り日泊り。

ト向うを教へ、寢て居る眞似をする。

三四　さうであらう。すりや、奕の藤兵衛が……イヤ、今頃まで歸らぬとは、結構な身の上ぢやなア。

トお大へこなしある。おえん、氣の毒なるこなしにて

えん　コレ、金太郎、其方、大儀ながら、新兵衛さんのお迎ひに行つてたもらぬか。

金太　サア、昨夜の仕儀、新兵衛さんが未だに歸らしやれぬは、噂に違ひなく、もしや

ト思ひ入れ。

えん　ヤ。

金太　イヤ、追ッつけお歸りでござりませう。

新右　南無大慈大悲の觀世音菩薩〳〵

ト目を塞ぎ向うを拜む。ト合ひ方になる、向うより新兵衛、着流し頰冠りにて、前幕の關の孫六の脇差を差し、ツカ〳〵と出て、花道にて跡を見返り、思ひ入れあつて、頰冠りを取りて舞臺へ來て、内へ入らうとして、フト脇差を見て、鞘とも拔いて手拭に卷き、納屋の内へ隱す心にて、ズツと内へ入る。金太郎、恟りして

金太　ヤア、新兵衛さま。

ト門の戸ピツシヤリ締める。

新兵　あわて者。晝中に戸を閉てるは。

金太　サア、折角お歸りなされたお前、また外へ出すまい

と思うて。

新兵　ハテ、斯う歸る上は大事ない。

　トこなし、おえん喜び

えん　オヽ、新兵衞さん、好い所へ。

　ト側へ寄らうとして、ちやつと

ようお歸りなされましたなア。

　トこなしある。

新兵　親仁さま、母者人、御免なされませ。

　トずつと眞中へ行きて下に居る。お大貢のんで顔を外けて居る。三四郎、新兵衞を見て、こなしある。新右衞門、思ひ入れあつて

新右　倅、歸つたか。エヽ、忝ない。南無觀世音菩薩〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵。

　トまた拜み

てもマア、よう戻つてくれたなア。

　ト新兵衞が顔を見て

ソレ、顔に疵が付いてあるが

新兵　エ、これは。

えん　ほんに餘ツぽどな。

　ト側へ寄る。

だい　ハテ、案じる事はない。どこぞで打たれて來たのであらう。

新兵　イヤ、こりやソレなんだ。オヽ、用心時分で、方々で木戸を立てる。それで歸る道で、木戸の柱へ行き當つて、打ち破したのでござりまする。

新右　ハテ、危ない事の。

えん　そんならわたしがろこう湯を。

新右　ろこう湯よからう。ちやつと持つておぢや。

えん　アイ〳〵。

　ト云うて立たうとする。

新兵　イヤ〳〵、それには及ばぬ。

　トちやつと思ひ入れあつて

昨日からの流連で、アヽ、強う醉うた〳〵。お竹や、鹽茶を一つ汲んでくれ。

たけ　アイ〳〵。

　ト奥へ入る。

だい　なんぢや太平樂な。おのれが色狂ひ、遊びたい程遊んで來て、晝狐追出したやうに、今頃にノウ〳〵と歸つてうせて、湯ぢやの水ぢやのと、新兵衞、わりや何を功に來て、其やうにふざけるのぢや。親仁どの、こなたの子

ぢやないか。ちつと云はつしやれ。エヽ、のろい人ぢやの。

新右　ハテ、いま歸つたもの。マア／＼、ようござるわいの。

だい　イヤ、ようないぞや。爰の内は誰れが内ぢやと思うてぢや。皆わしが身上ぢやぞや。こなたは入り聟、新兵衛は連れ子。コレ、おれが現在の甥のあの三四郎は、手代にして追ひ使ひ、根が他人の新兵衛に、この玉屋の家を潰してもらふ事は否でござる。オヽ、成りませぬぞ。エヽ、馬鹿々々しい。

ト睨みつける。皆々こなしある所へ、奥よりお竹、茶碗に白湯を汲み、持つて出るを、おえん取つて

えん　お竹。この湯は綺麗なかや。

たけ　アイ、圍ひに沸つてあるを、汲んで參りましたわいの。

えん　オヽ、よし／＼。

ト新兵衛が側へ持つて行て

申し、鹽湯を。

ト差出す。

新兵　こりや有り難い。

ト取つて呑む。三四郎これを見て、ムツとして立ち上がり、新兵衛が側へ行て、おえんを引退け

三四　新兵衛さん、お前の歸らしやるのを、この三四郎に待つて／＼居りました。

新兵　そりや又なぜ。

三四　お前、生醉かえ。コレ、なんぼ酒に醉つても、今日は正月の二十六日、追ッつけ晦日、多からの勘定、店卸しをせにやならぬ。

トずつと立つて店の帳を持つて來て廣げ

コレ、この十六日に紺屋町へやつた藍の仕切り。拾兩の金を持つて出さつしやりましたが、どうぢやえ。

ト此うち新兵衛醉うたる顏して居る。

それに又二十日の日五兩、また一昨日五兩、コレ／＼、三口〆て貳拾兩、その金を返してもらはにや、この帳面が合ひませぬ。新兵衛さん、その金今わたしに、サア、渡しなされ。勘定立てにやならぬぞ。

新兵　店卸しまで内證で借りたのを、爰で云ふとは三四郎、てまへも餘ッぽど胸氣たの。

三四　なんぢや、返されぬと云ふのかいな。

新兵　コリヤ、やかましく云ふな。晦日には間に合せるワ。

だい　新兵衞、云うても貳拾兩の金、さうぶん流しては可哀さうに、店を預かるあの三四郎が難儀ぢや。なんぼあれは聾でも、おれが耳へ入つたらば、その金辨まへさせにや置かぬぞ。

新兵　ぢやと云うて今その金が

だい　深川の賣女に遣つたのであらうが。

新兵　イヤ、それはナ

三四　サア、どうするのぢや。新兵衞さん、金が無けりやこの帳面が濟まぬ。店を預かるわしが云ひ譯が無い。コレサ、どうして下さいます。

ト新兵衞が顏を見て

さう口をつぐんで居るのは、さては默つて居るのぢやな。さうしられてはおれが難儀ぢや。今こそ耳が聞えね、店を預かる三四郎、譯立てさせにやならぬ。お前もコレ、内の息子、イヤ、若旦那樣ぢやないか。おりや召仕ひの手代、オヽ、この三四郎は家來、家來の物を借りて女郎を買つたり、イヤ、古主で候ふなどと、見事これまで人をお世話なさるぢやないか。それに僅かな金でおれに難儀さすとは、若旦那新兵衞さま、イヤ、新兵衞どの、コレコレ、どうするのぢや／＼。

ト新兵衞が胸倉を執つてこづく。

新兵　見苦しい。こりや何をする。

ト横面を撲る。

三四　アイタヽヽヽ。

ト胸倉を放し耳を抱へる。

新兵　大べら坊め。

ト坐りながら足をかいて投げる。お大、棕櫚箒を取上げ

だい　新兵衞、うぬを。

ト打つてかゝる。かい潜り、箒の柄を執へ

新兵　母者人、これは。

だい　これはとは、見世の金を借りて返しもせず、剩さへ病人の三四郎を、なんであのやうにひろいだ。

ト振り放し又打つてかゝるを、金太郎、ツカ／＼と出て箒を引ッ奪る。此うち三四郎起きあがる。

三四　退きやアがれ。

ト金太郎を引退け、新兵衞が方へ行かうとするを突き退ける。お大また寄るを、兩人をよろしく隔て

金太　ソレ、新兵衞さまに貸しました貳拾兩。

ト懷より出して前に置く。新兵衞こなし。

新兵　ヤア、この金は。
金太　おれがお前に借りました、ソレ、十六日に拾兩、又ソレ五兩々々と、〆めて三度に貳拾兩。
新兵　イヤ、それでは金太郎。
金太　コレ、出入りの仕事師、居候ふのこの金太郎が、つまらぬ事があつて、旦那の事なりお前を頼んで、無理やりに借りた貳拾兩、今日お前の、サア、お前に返さうと、妹お梅を、イヤ妹と相談して、やう〳〵拵らへたこの金どちらへどう廻つても、これまでお世話になつた新兵衞さま、お前のお爲、お前に返す。返しまする、これを受取つてこの場の勘定、氣兼ねなしに立つて下さりませ。
新兵　ムウ、すりや、この金を。
ト こなしある。お大、引ッ奪り
だい　ソレ、三四郎、帳面消せ。
ト 三四郎へ拋つて遣る。
三四　何ぢや、譯は聞えねど、てつきり、この金は金太郎めが
ト 金太郎新兵衞を見て、又お大にこなしあつて
マア、貸したものだから、受取つて置かうわえ。
ト こなしある。通り神樂になる、向うより出村新兵衞着付け羽織頭巾にて出て來る。用水桶の書付け藏の印を見て
出新　ムウ、三十間堀二丁目……藏の印といひ、慥かに爰ぢやさうなわえ。
ト 門口より
玉屋新兵衞さまはお宿かな……御免なされませ。
ト 頭巾を取る。
金太　ヤア、お前は出村新兵衞さま。
ト 新兵衞、出村新兵衞を見て
新兵　ほんに出村どの、すりや昨日の金を
出新　ア、コレ〳〵、新兵衞との。こなさんの額の疵は、まだ〳〵癒りはしますまいが。
新兵　ムウ、それに又
出新　エ、外にちつと用があつて、わざ〳〵尋ねて來ました。
えん　申し、ありや宇田川町の、わたしが兄さんでござんすわいなア。
新兵　ヤア。
ト 膽を潰す。
そんならおえんが

金太　兄御樣なら、昨日のあの宮本の
出新　コレ、それは互ひに。
新兵　知らぬ事とて。ムウ、ハテナア。
　ト ちつとこなし。
出新　妹、して新右衞門さま御夫婦は。
新右　爰に居りまする。申し、おえんが親御は本郷で、山田養節といふ御醫者。そんなら矢ッ張りお前も
出新　養節が忰なれど、宇田川町へ養子に參つたゆゑ、妹へも申しつけて、これまで隱して居りましたは、嫁の親里に一家の多いは、却つて御面倒と存じまして、わざとこれまでの御無沙汰。さてはあなたが父御新右衞門さま、あちらにござるが阿母樣でござりまするか。
えん　アイ、お母さんでござんすわいなア。
出新　これはノヽ、初めてお目にかかりまする。萬事足らはぬ妹め、さぞ御兩親樣のお世話でござりませう。
だい　アイ、大抵の世話ぢやござんせぬ。お轉婆な妹御。その兄御さん、ようござりましたなア。
　ト新右衞門、氣の毒なるこなし。三四郎、出村新兵衞を見て
三四　コレノヽ、伯母御、此お人は此方の息子どのの友達かえ。
だい　イヤ、おえんが兄ぢや。
　ト大きな聲にて云ふ。
三四　相手にならずと、キリノヽ歸してしまふがようごんす。
金太　何をこの聾め。
だい　コリヤ。
　ト睨みつける。
金太　お竹どん、お茶を上げなさい。
新右　時に、思ひがけないおえんが兄御が、お尋ねなされてお出でなされたは。
出新　妹が儀に付きまして。
だい　コレノヽ、壹文も無心は聞きませぬぞ。
出新　イヤ、お氣遣ひ下されますな。親どもは山田養節と申して、輕うても相應にお屋敷方から御扶持頂戴いたして居る。私しも宇田川町で、少しの木綿商ひいたします出村新兵衞、憚りながら、金銀の御無心なぞとは、滅多に申しには參らぬ。
新右　エヽ、女子のツカノヽと向う見ずに、初めてお出でなされた兄御。イヤ、御免なされて下さりませ。

出新　ハテ、それでは却つて

新右　連れそふ女房のまゝしきも、日頃からあのおえんがよう知つて居りまする。年寄つても男の私し、セカ／＼云はれても、むつと辛抱黙つて居るも、有やうは悴新兵衞めが。

だい　何を入り聟だてに。

新右　コレ、あの通り小糠三合の喩へ、新兵衞さまの手前も、お恥しうござりまする。

えん　申し兄さん、様子は知らねど、わたしが身の上の事について、お出でなさんしたと聞くはどうやら。

出新　ハテ、その様子は新右衞門さま、新兵衞どの、どうぞ密かにお話し申したい。

新兵　成る程、出村新兵衞どのを、おえんが兄御と始めて聞いて、思ひ當る御深切、その俠氣を見て、この新兵衞が折入つて

出新　サア、それも密かに。

新兵　これは端近、何かはマア奥で

出新　阿母も御一緒に。

だい　お邪魔になつては悪い。としに致しませう。

新右　ハテ、たんの其方が

だい　そんなら三四郎も一緒に。

ト三四郎に仕方する。

三四　ムウ、奥へ行きませう。

新右　おえん、御案内申しや。

えん　サア、兄さん

出新　左様ならお先へ。

ト唄になり、皆々奥へ入る。新兵衞金太郎殘る。こなしあつて

新兵　金太郎、いま思ひがけなう、三四郎へ立替へてくれた貳拾兩の金は。

金太　エ、あの金はナ。

新兵　小女郎や出村どのの志し、やう／＼拵らへた貳百兩、一軸を受取らうと思ひの外、夷の宮の仕儀、跡に殘つた其方、今のは九十郎どのゝ蒔き散らした貳百兩の内の金か。

金太　イヤ、その貳百兩は、悪者どもが手取り奪ひ取り、拾はせぬと爭うても多勢に無勢、船宿の三ぶめが頭取で引ツたくつて逃げるを追ッ駈け廻り、見失うたる今日の曉方……貳百兩の金よりは、若旦那、お前、其やうに平氣では居られまいがの。

ト仰山に云ふ。

新兵　そりやなぜ。

金太　アノ今朝からの噂を聞かずか。お前のお主九十郎どのは、深川の猪の堀に、殺されて居ますわいの。

新兵　ムウ。

トこなしある。金太郎、顔をヂロ〳〵見て

金太　ハア、そんならお前は、ほんに知らつしやりませぬか。

新兵　とんと知らぬ。其方も知つて居る通り、あのお人の日頃の身持ち、猪の堀で殺されたとは。

ト手を組み、ヂツと思案する。

ハテ、天命、是非がない。

金太　おりや又お前が……サア、お前がよもや九十郎どのを、イヤ、切られて居た事を……イヤ〳〵、こりや矢ッ張りお前が。ちやつと爰を。

ト立退けと、いろ〳〵仕方する。

新兵　ハテ、金太郎、そちや何をするのぢや。

金太　エヽ、コレ、さう云ふ間も心元ない……早う立退いて下さりませ。その路銀の心當で、拵らへた最前の金、エヽ。とんとそれも。

新兵　ほんに、思ひ廻せば浮世の手詰め。この身の下り坂は是非ないもの。貳百兩の金も、何の役にも立たぬ。惡者どもに……金太郎、それに今の貳拾兩は、どうして拵らへた。その譯は。

金太　サア、あの金は。

新兵　どうして。

金太　サア……妹のお梅を藝者に。

新兵　ヤ。

ト立あがりて奥へ行かうとする。

金太　申し、新兵衞さま、待つた〳〵。こりやお前、奥へ行て

新兵　オヽ、三四郎に渡した貳拾兩の金、取返すのぢや。放せ。

金太　イヤ〳〵、放さぬ〳〵。そりやお前、どうして取返すのぢや。

新兵　ハテ、今の一言、最前の貳拾兩は、おぬしが妹のお梅を、藝者に賣つて拵らへた金。それをおれが、どうノメ〳〵と。

金太　サヽヽヽヽ。男氣なお前、さう聞いては遣ふまい、遣つては下さるまいが、コレ、新兵衞さま、なんぼこの

金太郎でも、おれが義理も、ちつとは立てさせて下さりませいの。

ト新兵衞を無理に下に置き、思ひ入れあつて

昨夜の騷動、今朝の噂、よもやと思へど、云ひやうの無い惡黨な九十郎どの。こりや愛想盡かしてお前が、猪の堀でバッサリ……とサア、思ひ詰めて妹めに、新兵衞さまのお身の上に急に金が入る、どうせう斯うせうと云うても、ひつてんな兄弟、詮方盡きて妹が、さる所を賴んで來て、藝者に身を賣つた貳拾兩、これを路銀にと志したは、侍ひなれば忠義の道、それを最前の手詰めに、これも遁がれぬお前の難儀。これまでさま〲お世話になつた新兵衞さま、妹が志しのあの金を取返さず、どうぞ役に立てゝ下さりませ。さうすれば妹の女子の一分も立ちおれも男の一分が立つ。産毛の金太郎が一生の賴みぢや若旦那樣、こりや一番立てゝ下さりませ。

ト此うちおえん、上の障子屋體より出かけ、聞いて居る。新兵衞も、ホロリとしてこなしある。

新兵　忝ない。金太郎、其方が志し。また不便なはお梅が身の上。

金太　ハテ、あれも得心づく。

新兵　ぢやと云うても。

ト障子屋體より

えん　コレ、金太郎。

金太　ヤ。おえんさん、

えん　ソレ、貳拾兩の金。

ト抛つてやる。金太郎、取上げ

金太　この金は

えん　わしが用意に親里から。

金太　エ、

えん　好いやうに賴むぞや。

ト障子ピッシャリ閉す。金太郎こなし。

金太　申し、思ひがけない、この金を

新兵　どうぞお梅を取返す

金太　イヽエ、それでは

新兵　こりやモウどうも。

ト立ちあがり、金太郎の顏を見て

金太郎、そちやマア奥へ。

金太　エ。

新兵　ハテ。

金太　ムウ。

ト唄になり、こなしあつて、金太郎、ツイと奥へ入る。新兵衞殘り、思ひ入れある所へ、向うバタ〳〵にて小女郎、走り出て、門口より

小女　ヤア、新兵衞さんか。

新兵　思ひがけない小女郎。

小女　エヽ、嬉しや〳〵。ウヽヽ。

ト癪にて反るを、新兵衞、ちやつと抱き寄せ

新兵　こりや積か。道理ぢや〳〵。

トいろ〳〵介抱する。

小女郎。

ト呼び生け、ちやつと思ひ入れあつて耳へ口を寄せ

小女郎々々。

トこなしある。小女郎心付き、こなし。

どうぢや〳〵、氣が付いたか〳〵。

小女　もう〳〵、ようござんす。氣遣ひして下さんすな。

新兵　爰へ來たのは、大方九十郎どのの噂を。

小女　アイ、その事で今朝から、死なしやんした兄さんよりは、お前の身の上を案じて。

新兵　どうも其方に云ひ譯もない。

小女　イエ〳〵、わたしや何も樣子は知らねど、コレコレ、どうしても、新兵衞さん、死なば一緒でござんすぞえ。

新兵　ヤ。

小女　必らず詞を番ひましたぞえ。

新兵　ムウ、それは。

ト兩人思ひ入れある。

傳吉　若旦那さん〳〵。

新兵　ヤア、ありや……マア〳〵、見付けられては。

ト囁く。

小女　そんならわたしは

新兵　マア〳〵、あの押入れへ。

ト小女郎を無理に押入れへ入れて戸を閉て、火箸をさして

必らず合ひ圖をするまで出まいぞ。コレ、合點か〳〵。

トいろ〳〵こなしある。

傳吉　モシ〳〵、若旦那、新兵衞さま〳〵。

ト無性に呼ぶ。

新兵　オイ〳〵。

傳吉　ちやつとお出でなされませ。新兵衞さま〳〵。

新兵　ハテ、せはしない奴ではある。

ト唄になり、新兵衞、押入れへこなしあつて、奥へ入る。ト三四郎出て來る。

三四　何ぢややら伯母御が仕方して見せても一つも解らぬいま／＼しい聾にはなつた。なんぼ聾になつても、最前新兵衞めを苛めて取つた貳拾兩

トちよつと出して見て

いつ見ても憎からぬ。先づは着服。時に茨の藤印に賴んで置いた事はどうぢや知らぬ。

ト思案する。向うより男一人、風呂敷に前幕の羽織を包み、持つて出て

男　モシ／＼、物が尋ねたうござります。玉屋とは爰かな。

ト三四郎これを知らずに

三四　なんでも新兵衞を突出し、おえんを女房に持つて、この跡式をしてやつて、おれが玉屋の三四郎、玉三と、イヤ、小玉三四郎、こいつは好いわえ。

ト男これを聞いて

男　エヽ、さてはあの人が三四郎と云ふのぢやな。慥か聾ぢやと云ふ事ぢや。よし／＼。

ト内へ入り、懷より手紙を出し

コレ。

ト手紙を突き付ける。三四郎、恟りして

三四　エヽ、なんぢやいの。思ひがけない。

ト手紙を見て

ムヽ、玉三四郎どの、い印のと[illegible]。エヽ、お前は神田から。

ト男頷く。

神田から……これは御苦勞でござります。サア、お爰あがりませ。

ト手紙を披き見る。

男　申し、風呂敷包みも爰へ置きましたぞえ。エヽ、聾にこんな事を云ふも無駄、申し、渡しましたぞえ。

ト云ひ放して向うへ走り入る。

三四　この間はゆる／＼御意得、互ひに話しあひ致し候ふ。その節おん賴みなされ候ふにつき、いろ／＼工夫いたし、厄病神にて敵と存じ遣はし申し候ふ。この羽織貳拾兩に御買ひなされべく候ふ、尤も外に卷添へ御座候ふ間、とくと御覽の上、御思案もあるべき事に候ふ、我れら殊の外骨折り申し候ふも……そんならお使ひの人。

ト此方を向き

お使ひの人／＼／＼。エヽ、らつちもない……マア／＼、

何にもせよ、羽織とは。
ト風呂敷を解き、羽織を出し
こりや誰れの羽織ぢや……。これが貳拾兩とは高い物ぢや……アヽ、この胴裏の比翼紋、笹龍膽と菊蝶。すりやこれで。
トまた手紙を見る。
尤も外に巻添へ御座候ふ間とくと御覽の上、御思案もあるべき事に候ふ。
トそこらを尋ね
巻添へとは何ぢや知らぬ。
トまた手紙を見て
外に巻添へ御座候ふ……どこにある知らぬ。
トいろ〳〵尋ねて居る所へ、奥より金太郎々々と云ひ云ひ、おえん出て、三四郎を見て
えん　ヤア、其方は三四郎。
ト三四郎は聞えぬこなしにて方々を捜し尋ね。
三四　面妖な。外に何も無いが、巻添へとは何だ知らぬ。
トそこらを又さがし廻る。此うちおえん、羽織を見て
えん　こ　羽織には、可愛らしい紋が付いてあるなア。
三四　但しは使ひが道で落したか。
えん　笹龍膽と菊蝶ぢやの。
三四　ハテ、面妖な。
ト羽織の袖を見うとして
ヤア、お前はおえんさん、いつの間に。
ト恟りする。
えん　こちや、この羽織をお竹に見せて來よう。
ト羽織を抱へ、奥へツイと入る
三四　アヽ、コレ〳〵、おえんさん、まだ買ひもせぬものを。コレ〳〵〳〵、おえんさん、それを。
トこなしある。奥へ追うて入る。直ぐに奥バタ〳〵にて
新右　ハテ、新兵衞どの、マア〳〵、待つて下され。おえん、ちやつと逃げやいなう。
えん　イエ〳〵、たとへ殺されても見せる事はなりませぬわいなア。
出新　何ぢや、殺されても出さぬ。憎い奴の。
新右　ハテ、マア〳〵、其やうにせずとも。ソレ、おえん、逃げてたも〳〵。
出新　これはしたり、退かつしやりませ〳〵。
トこれにて奥よりおえん、逃げて出て來る。出村新兵

衞追へ出ろ。新右衞門、今の羽織を持ち、留めながら出ろ。新兵衞もこの時、暖簾口より出て驚く。

出新　どこへ逃げをる。新兵衞どの、ちやつと捕へて下され。

新兵　これはしたり、出村どの、思ひがけない。おえんもどういふ譯、どういふ仕落をしたのぢや。

えん　アイ、皆わたしが悪うございますわいなア。

出新　コリヤ、コレヤイ、たつた二人の同胞、この兒には、どのやうな不屆きをしても構はねど、餘所人の手前、現在、新兵衞どのゝ父御、この新右衞門どのへ、どうもこの兒が男が立たぬ。

新兵　申し、親仁樣、こりやどういふ事でございまする。

新右　サア、奥で新兵衞どのと話し合ひをして居る所へ、おえんがこの羽織を持つて來て、なんと派手な、變つた紋の付いてある胴裏と見せた時、此うちにあつたのか、但し懐にあつたのか、何やら書いた物を落したわいの。

ト新兵衞見て

新兵　ヤア、その羽織は、どうして爰へ……ハテ、思ひがけもない。

ト思ひ入れ、こなしある。出村新兵衞、おえんを引寄せ

出新　ヤイ、妹め、おのれが落したは慥かに濡れ文、又ちやつと懐へ隠したを出さぬが幸ひ、新兵衞どのゝ前、御親子ともに讀んで聞かさぬか。

えん　イエ〳〵、こりや讀むに及ばぬ。この羽織の註文でございますわいなア。

出新　なんぢや、註文ぢや。

ト胸倉を取つて

思ひまゐらせ候の、懐しく存じまゐらせ候のといふ註文は、この新兵衞、見た事も聞いた事もないわえ。ほんに面目ない。有やうは親の懐子、悋氣する術も知らぬおぼこな妹めを踏つけて、新兵衞どのゝ深川通ひ。エヽ、聞えぬ仕方ぞと蔭ながら恨んで居たも、鼻そげが笑靨とやら、この兒が贔屓目か知らぬが、姿形も十人並、その癖まんざら馬鹿でもないものを、さりとては酷いと思うたゆゑ、この十六日に密かに此奴を此方の内へ呼び寄せ、コリヤ、氣遣ひするな、親達も案じて居らるれば、われが思ふ通り新兵衞どのと女夫にする思案があると云ひ聞かし、それから二三度、おれが仲町のいゝよしへ行つて、小女郎を呼出し、附合ひの客になり、揚句の果には昨日の仕儀。

立て金の相談、こりや新兵衛どのが承知なれば、愚図愚圖云はねど、高が云ひ交してござる小女郎と手を切らし早う祝言させたいばかり、それに今日初めて來て今の仕儀。こりや新兵衛どのが深川へ嵌り込み、女郎買ひは尤もぢや。女房の悪性を隠さう爲の放埒。男の身持ちが悪いゆゑ、思はぬ悪性、いたづらと浮名の立つも、妹へ道理を付けさゝう爲と合點がいたわえ。新兵衛どの、エヽ、忝ない。

ト思ひ入れある。新兵衛、始終合點のゆかぬ心にて

新兵 イヤ、出村どの、こなさんの今の詞では、どうかおえんが不義をしたやうな。

出新 やうなではない、して居まずわいの

えん コレ〳〵申し、兄さん、姫御前の作法行儀は、嫁入りすれば舅姑へ孝行、殿御大事に不義いたづらが第一の嗜みと、小さい時から兩親の教へさんした事を、わたしやよう覺えて居りますわいなア。

出新 ソレ、その覺えて居る者が、なぜ不義いたづらをひろぐのだぞ。

えん わたしがいつ不義いたづらを

出新 今この懐へ隠した、最前の文をなぜ見せぬ。コリヤヤイ、二人差向ひなりや同胞のよしみ。殊に依つたら見ぬ顔もして遣らうが、指が汚ないとて切つては捨てられぬ。この新右衛門さまは誰れぢや。聟どのゝ親御、現在の舅の手前、この兄がどうも立たぬわやい。

新右 イヤ〳〵、新兵衛どのえ、最前も奥で申しました通り、悴新兵衛が身持ち、これまで御存じの通り、まだ祝言をせぬを幸ひ、可哀さうに娘盛りを袖にさすが悲しさに、いつそ外へ相談をと云うたは、全くおえんが事を知つてではござりませぬ。すりや、何事も内證で

出新 イヤ〳〵申し、新右衛門さま、お前はどなたでござりまするぞ。

新右 ハテ、新兵衛が親、すりや内證で

出新 新兵衛どのが妹と、離縁いたされましたれば。

新右 エヽ。

出新 なんと、赤の他人ぢやござりませぬか。ぢやに依つてこの兄が、どうも済みませぬ。親共も長袖、屋敷より御扶持頂戴いたせば武士も同然。サア、妹め、出せ、不義の男を聞いて、この兄が見て居る前で、新兵衛どのに存分にさせにやア男が立たぬ。サア、出せ。イヤ、出さぬか〳〵。

えん　イエ／＼、なんぼうでもこの文は、爰へは出されませぬわいなア。

出新　それ／＼、さう出さぬほど猶罪が重い。猶憎い。

ト無理に懐より引出し

ソレ、新兵衞どの、讀んで見さつしやれ。

ト新兵衞が方へ抛つて遣る。新兵衞、取上げるを

えん　コレ申し、それを讀んで下さんしては。

ト取りに行くを出村新兵衞引付け

出新　ハテ、讀まさにやならぬ。新兵衞どの、此奴に構はずと早う。

出新　常に似合はぬおえんが不義、よもやと思へど……どうでおれが身の上も

ト心意氣、思ひ入れあつて

ドリヤ、讀んで見ませう。

ト状を披く。

えん　イエ／＼申し、そりやわたしが死んだ跡で讀んで下さんせいなア。

出新　ドッコイ、動くな。新兵衞どの、わしへ遠慮は無い。隨分高う讀んで、新右衞門さまへも聞かして下され。ササ、、、、どうぢや／＼。

新兵　なんでもマア

ト幸ひ縁切らうと思ふこなしあつて、讀む。

夕々の御文、開く間遲しと詠めまゐらせ……ヤア。

ト悔りする。

出新　サア、その跡を／＼。

ト新兵衞、我が手跡ゆゑ思ひ入れあつて

新兵　思ひがけない、こりやコレ。

出新　それでは知れぬ。マ、、、、、とつくりと。

新兵　ぢやと云うても、これは

出新　ハテ、大事ない。妹を庇うては互ひに男が

新兵　すりや是非とも

出新　サ、、なんと／＼。

ト新兵衞、いろ／＼こなしあつて是非なく

夷講の歸りにちよと立寄りたく存じ候へども、連れの手前首尾惡しく、殊に夜更け候へば、直ぐさま歸りまゐらせ事を、そもじには内へ急ぐ心意氣の憎さとは、おえんが事にて候はん、又々うるさき

ト段々と小聲になる。

出新　ヤア、おえんとは、どのおえん。

えん　コレ、跡は讀ましやんせいでも



新右　コリヤ〳〵伜、その跡をとつくりと讀んで聞かせい。
新兵　エ。
新右　讀まぬか。
新兵　ハイ。
新右　サア、跡はどうぢや〳〵。
新兵　サア、この跡は……おえんが事にて候はん、うるさき仰せをかしく、さりとは野暮なる御事、あるは否なり思ふはならず、味ないものにえとぶりと、おえんが女夫にならうと思ふ程、身しんにたへて否にて候ふ。
新右　おえんが女夫にならうと思ふ程
新兵　こりやモウどうも。
新右　なぜ讀まぬ。讀まねばおえんが惡名、新兵衞どのへこの親が
新兵　サ、それでも
新右　武士にまさつた男氣の新兵衞どの、今の詞を何と聞いた。
出新　イヤ〳〵、新兵衞どの、もう讀むには及びませぬ。
新右　イヤ〳〵、讀まさにやなりませぬ。
えん　コレ、必らず讀んで下さんすな。
新右　そんならせめて、宛名ばかりを讀んで聞かせい。

ト新兵衞こなしあつて
新兵　小女郎どのへ參る。
新右　下の名は、なんと〳〵。
ト新兵衞、いろ〳〵思ひ入れあつて
新兵　ハイ、私しでござります。
ト文を打ちつけ俯向く。新右衞門立ちあがり、右の文を取つて心の内にて讀み、出村新兵衞へ思ひ入れあつて
新右　面の皮の厚い……コレ、この奉書に書きざまわえ。
ト打ちつけ手を組み下に居る。おえんこなしあつて
えん　申し兄さん。
出新　ヤ。
えん　父さん母さんへ好いやうに、南無
ト剃刀を出し、死なうとする。
出新　コリヤ妹、兄が誤まつた。これぢや〳〵
ト片手にて留め、片手にて拜む
えん　サア、わたしやお前に疑はれ死に……死んでもどうも新兵衞さんを、憎ましともないわいなア。申し、新兵衞さん、お前のお心の内は、エヽ、憎いおえんめがこの文を、どう手を廻して取寄せ、兄さんや父さんのお目にか

け、斯うなるやうにしをつたと思うて居やしやんせうが、それが悲しい、恥かしいゆゑ、死んだ跡でと云うたのでござんす。思ひがけないコレ、この羽織の袖にあつたこの文、わたしが工んでした事ではござんせぬ。斯う云うても矢ッ張り疑ひは霽れますまい。どうでわたしは添はれぬと、疾から諦らめて居りますれど、不義いたづらの悪名受け、死ぬればお前へ心中立てど、却つてお前の難儀を顯して、死ぬるが悲しうござんすわいなア。

ト大泣き。出村新兵衛こなしあつて

出新　出來した妹。斯ういふ心な者を、可哀さうに、味ないものにえぶとりとは……さりとは通に似合はぬ

ト新兵衛が方へ心意氣あつて

不洒落ではある。

トおえんを引寄せ、ちよつと泣く。新兵衛、兩人が側へ行て

新兵　新兵衛どの、さぞお腹が立ちませう。おえん、其方の志しキッと忘れぬ。忝ない。申し、親仁様、おえんと祝言の杯をさせて下さりませ。

新右　ムウ、これまでなんぼ勸めても嫌うた祝言

新兵　改めて私しが願ひは即ち

ト羽織を取上げると、おえん、端を引ッ張り、胴裏を見物の方へ見せ、

えん　馬鹿を盡したこの羽織。

思ひ合うたる比翼紋。

新兵　それを斯う。

ト剃刀を取上げ脊筋より切る。片身づつ分る。新兵衛おえん、二つに分け持つて

えん　そんならこれは。

新兵　今までの料簡違ひ、おえんが不義の悪名も

出新　そでない羽織の比翼紋。

新右　切つて離れた悴が心底。

出新　妹が喜び。

えん　イヤ、それではこの

ト菊之丞が菊蝶の紋を見せる。

新右　二人か祝言結綿と、付け替へさせる家の紋。

出新　妹、聞いたか。

えん　エヽ、忝なうござんす。

ト新兵衛新右衛門を拜む。押入れの内バタ／＼する。

新兵衛ハッとこなし。

出新　ハテ、强う鼠が騷ぎ居るワ。

新兵　サア、その鼠が枡落しに、かゝらぬうちと暫しの辛抱。イヤ、新兵衞が女房のおえん。
新右　小舅の出村どの。
出新　また改めて、祝言の
新右　千箱の玉屋の嫁御寮。
　トおえんを新兵衞が側へつれて行く。出村新兵衞、こなしいろ〳〵あつて
出新　三國一の妹聟……夫婦の中は差向ひ、氣を利かして
サア、新右衞門どの。
新右　ほんにそれ。
出新　奥へ參りませう。
　ト唄になり、出村新兵衞思ひ入れあつて、新右衞門を連れ、奥へ入る。跡に新兵衞おえん殘り、これよりしつぽりとしたる合ひ方になり、新兵衞こなしあつて
新兵　昨日宮本での仕儀といひ、同胞思ひの出村どの、段段の志し、忝ないと思ふにつけてこの身の上、どうで追つつけ……イヤ、潔う
えん　エ、、新兵衞さん、お前、潔うとは死ぬる覺悟かえ。
新兵　益體もない、潔う祝言して、早う女夫にならうと云ふ事ぢやわいの。

えん　そりや、ほんまにかえ。
新兵　ハテ、いま羽織を破つて見せたでないか。ありや小女郎と緣を切つた證據ぢや。
　トまた押入れの内バタ〳〵する。
えん　オヽけうと、あの鼠わいなう。
　ト思ひ入れある。
申し新兵衞さん、これまで深う思ひ合うてござんす中ぢやもの、なんの眞實緣を切らしやんせう。嘘ばつかり。
新兵　ハテ、嘘か誠か、祝言したら知れるであらう。
えん　エ、アノ……オ、嬉し。
　ト恥かしきこなしにて無性に嬉しがる。新兵衞、手を組み、憂ひの思ひ入れ。また押入れの内バタ〳〵するおえんもこなし。
アレ、よう騷ぐ鼠ぢやぞ……申し新兵衞さん、アノナ、鼠が女夫事する時は、あの樣にタバ〳〵するけれど、嬰兒を產む時は、ソツと隱れて產むといなア。それで人とは反對ぢやと云うて、鼠が笑ふといなア。
新兵　鼠も笑へば、江戸中の人も笑ふであらう。
えん　そんならお前は、鼠に笑はれても大事ないかえ。わたしも大事ないわいなア。

ト、こなしあつて云ふ。新兵衞、いろ〳〵思ひ入れあつて

新兵　もうこりや、一時も早う。

トすつと立ちあがる。

えん　申し、一時も早う祝言をするのかえ。

新兵　イヤ、祝言は晩の事ぢや。

えん　ほんに、早う日の暮れぬ事かいなア。

新兵　次第に縮まるおれが身の上、誠に屠所の羊の歩み同然。

えん　エ。

新兵　まだ八ツ過ぎ、七ツでもあらうか。

えん　エヽ、今日に限つて日の長い事ではある。

ト新兵衞、おえんを見て、こなしあつて

新兵　コレ〳〵おえん、晩に祝言を其方とすると云うても知りやる通りの母者人や三四郎、また岡燒餅で何の彼のと云へば邪魔ぢや。晩にはソッと奥の二階へ行くほどに、今からその用意をちやつと。

えん　アイ〳〵。そんなら二階を片付けて、用意をして置かうなア。

新兵　ハテ、そりやどうとも。マア〳〵、早う。

えん　アイ〳〵、わしや日の暮れるを樂しみに。

ト新兵衞を見て、ちよつとこなしあつて

ドレ、二階を片付けて來ようか。

ト唄になり、おえん、イソ〳〵して奥へ走り入る。新兵衞跡見送り、ホロリと思ひ入れある所へ、向うより勇藏、羽織着流しにて一人ノサ〳〵と出て來り、門口より窺ひ、新兵衞を見てツカ〳〵と入る。

勇藏　新兵衞、來い。

ト腕を捕へる、新兵衞、勇藏を見て

新兵　ハツ……申し、勇藏さま

勇藏　最早遁がれぬ。尋常に繩かかれ。

ト繩さばきする。新兵衞こなしあつて小聲になり

新兵　疾より覺悟は極めて居りまする。勇藏さま、あなたには、夜前の仕儀、よく御存じでござりまするか。

勇藏　いかにも。深川猪之堀にて九十郎が横死、それゆゑ新兵衞、其方に。

新兵　ア、コレ。

ト奥へ聞える、靜かに云うてくれいといふこなしにて

左樣なら勇藏さま、まだ外に申し上げまする儀もござりますれば。

勇藏　ムウ。然らばあれへ。

新兵　御案内申し上げませう。

勇藏　早う。

ト始終合ひ方にて、新兵衛勇藏こなしあつて、ヒソヒソ障子屋體へ兩人入る所へ、向うより藤兵衛、これも一人、着流し尻褰げ、ばつち紺の足袋・眞鍮の矢立を差し出て來て內を窺ふ。奥より三四郎出て

三四　何の事ぢや。藤兵衛が寄越した羽織で、一山あげようと思つたら、おえんが方へ引ッ奪つて行つたが、どうなつたやら譯が知れぬ。これも聾の悲しさ、新兵衛めが越度に、また好い事を案じにやならぬわえ。

ト此うち表より藤兵衛手を叩き、三四郎を呼んでも聞えぬこなし。藤兵衛、こなしあつて內へ入り

藤兵　最前から呼んで居るのに……エヽ、こゝな聾め。

ト脊中を叩く。これにて三四郎、悄りして

三四　ヤ、藤兵衛か。コリヤ、最前の羽織の卷添へは

藤兵　あれほど袖に入れて置いた新兵衛が濡れ文。

三四　いくら尋ねてもとんと知れぬ。

藤兵　エヽ、コレ。

ト舞臺へ書いて見せる。三四郎こなしあつて

三四　ハア、。そんならその文で兄の出村が……南無三寶後變ぢや。

藤兵　ほんに、その羽織の代りを、コリヤ。

ト書いて見せる。

三四　サア、貳拾兩は爰にあれど。

ト最前の金を出して見せ

なんの役に立たぬ羽織、貳拾兩とは、あんまり高いぢやないかえ。

藤兵　ハテ、いぢむぢ云はずと、寄越しやアがれ。

ト引ッ奪る。

三四　イヤ、その金を

藤兵　羽織の代りに、コリヤ、まだ

三四　せめて五兩取つて、跡を此方へ返してくれんかえ。

ト手を出す。藤兵衛、腰の矢立の筆にて三四郎が手の平へ、新兵衛は人殺しの科があると書いて見せる。

三四　ヤ、そんなら新兵衛は。

藤兵　コリヤ。昨夜

ト段々手平へ書いて見せる。三四郎、段々と讀むこなし。此うち納戸より金太郎、ツカ／＼と出て、これを見て小蔭へ隱れる。

三四　こりや巧い。なんでも新兵衛めが身の上、骨折らずにしまひ付けて。

藤兵　さうして又

ト書かうとする。

ドレ、其方の手ぢや。

三四　合點ぢや。

ト左の手を出す。又手の平へ書き、始終これよりこの心の仕組み。

ムウ、そんなら貴様は納屋藏に忍んで新兵衛めを……ムウ、よいワ。おれは又伯母御に兩手を見せて、云ひ合せをして置かう。

藤兵　必らずぬかるな。

三四　心得た。そんなら藤兵衛。

新兵　三四郎。

ト始終いろ／＼書いて見せる。

サア、行け。

三四　さうぢや。

トこなしあつて奥へ走り入る。藤兵衛、ガツクリして

藤兵　云ふよりは書く方が、餘ッぽど草臥れるわえ……時に、納屋藏に隱れて居て、スワと云ふ時、新兵衛めも强勢者、どうで働らかねばならぬ。その時この金を落してはならぬ。

ト方々見廻し／＼表へ出て、用水桶を見て幸ひと頷き、繩ぎれを拾ひ、金をクル／＼と卷いて、こなしあつて用水桶へソッと沈める。此うち金太郎、ソロ／＼出て覗いて見て居る。藤兵衛、繩を浮の心によろしくあつて

斯うして置けば、マア、丈夫だの。ソレ。

ト藏の内へ忍び込む。此うち始終合ひ方にて、藤兵衛が入るを金太郎、トックリと見て、ソロ／＼表へ出て、片肌脱ぎにて用水桶より金を取出し、繩を持つて提げながら、差足して又内へ入り、こなしあつて

金太　最前の貳拾兩にこの貳拾兩、合せて四拾兩。始終仕合せ新兵衛さんの……イヤ、しめたぞ。

ト右の金を持ち、ツイと入る。跡合ひ方。

新右　悴、新兵衛々々々。

ト尋ね／＼出て

これはしたり。どこに居る知らん。

トこなしある。障子屋體より新兵衛、懷手にて、ツカツカと出て來る。

新兵　親仁樣、何ぞ御用でござりますか。

新右　イヤ、さして用は無けれど、爰に居ぬゆゑ又出て行たかと、ハッと思うたてや。

新兵　なんのマアわたしが。

新右　新兵衞、今おえんに樣子を聞いたが、いよ〳〵晩に祝言をするとは、おれも嬉しい〳〵常々の素振り氣には入るまいが、さうしてくれると、新兵衞どのゝ手前、おれも安堵、これが即ち孝行、ほんにその孝行で思ひ出した。コレ〳〵。

ト納戸口より石の孝行臼を取つて來て

この臼はソレ、わがみが去年の冬、本材木町の石屋にあつたと云うて貰うて來てたもつた、上方でも流行る孝行臼、さて年寄りには重寶な物ぢや。オヽ、朝夕の野菜の堅い物を、これで搗いて喰ふはこの親の助け、孝行臼とは好う名を付けたものぢや。

ト此うち新兵衞、いろ〳〵思ひ入れあつて懐手ながら摺寄り

新兵　申し、親仁樣、おえんと祝言する事は否でござります。

新右　ヤ。

新兵　あんな者を一生女房に持つてどうなるもので。初めから嫌うて居るは、よう知つてござりませうがな。

新右　ムウ、それに最前新兵衞どのゝ前で、羽織まで破つたではないか。

新兵　そりやその場を繕めるほんの間に合せ。嫌ひな女房持つて内に居やうより、この家を出て生れた故郷、下總へ行きまする　アイ、下總へ立歸り、元の侍ひになりまするぞえ。

新右　ムウ、北國の馬は北風に嘶き、故郷忘じ難しと云へば、本國下總へ行て、侍ひになりたくばなつたがよい。オヽ、そりや好い心がけぢや。

新兵　そんならこれから下總へ行て、以前の通り侍ひになつて、槍を突かして歩きます。アノ拔き身の槍を

新右　ヤ。

新兵　コレ、親仁樣、おれをいつそ勘當して下さりませぬか。

新右　なんの、日頃孝行な其方、どうして勘當。

新兵　エヽ、それでは、

ト思ひ切つて新右衞門を足にて突き飛ばす。ちよつと轉ける。ハッと思ふこなし。

新右　新兵衞、こりや、どうしやる〳〵。
新兵　ハテ、此やうな不孝な私しでござりまするぞえ。
新右　どういふ事やら、強う機嫌が悪いの。
新兵　アイ、ぐつと逆上つて居ります。
新右　さうかして顔色も悪い。常から餘り酒を過すなと云ふのに、それに最前も矢ッ張り酒に酔うて、一體マア身持ちが悪い。それでおれが月々服まさうと思うて、傳手を頼んで津輕のお屋敷で所望した一粒金丹
ト云ひ〳〵紙入れより丸藥を出し
サア〳〵、これを服んで、暫らく氣を鎭めて、物をも云はずに居たがよい。幸ひ白湯も爰に。
ト云ひ〳〵茶碗を取つて來て
サア〳〵、これをマア。
ト差出す。
新兵　勿體ない、身體髪膚を父母に受け、孔子の敎へも……
……それ程までに。
ト思ひ入れ。
新右　ドリヤ〳〵、脊中を撫つてやらうか。
新兵　エヽ、知りませぬわえ。
ト茶碗を袖で打ち落す。

新右　コレ〳〵、それが矢ッ張り病ぢや。幼少い時の癇の虫、灸でなけりや治りませぬ。これからちつと内に居て、養生第一に灸を据ゑてたもれ。
新兵　親仁樣、これ程不孝に致しても、勘當はなされませぬか。
新右　ハテ、益體もない。十五の時よりこの家へ連れて來て、それから今までの苦勞をし盡し、せめては其方が手足を伸したいばつかりに、おりやこの年まで辛抱して居るわやい。
新兵　サア、その御苦勞を……イヤ、勘當なされずば此方から勘當して、親子の縁を切りました。
新右　ヤ。
新兵　これからは、おれが身は立てたいがい。必らず子ぢや親と思つて下されますな。親だとは思ひませぬ。サッと親子の縁を切りました。さらばでござりまする。
ト行かうとする。
新右　新兵衞、コレ、待ちや
新兵　縁切つたからは、もう詞も交しませぬ。
新右　イヤ、それで暇乞ひは濟んだか。
新兵　エ

新右　イヤサ、親の顔の見納めぢやが、コリヤ、とつくりと見て行かぬか。

新兵　何と仰しやります

新右　エヽ、わりや胴慾な者ぢやなア。

ト取付いて泣く。新兵衛こなしあつて

新兵　ムヽ、親仁様、そんなら私しが身の上を

新右　現在血を分けた親子ぢやもの。知らいで何とせうぞいやい。

新兵　ハア、

ト互ひに泣く。

新右　昨夜深川の猪の堀で、九十郎どのが殺されて居た様子、聞いて南無三寶、この間から心遣ひの、一軸も在所が知れず、日頃の惡黨ゆゑ、退引ならいで大方其方が

トあたりを見て心遣ひの思ひ入れ。

サア、古主を殺すは、矢ッ張り古主へ忠義と親は思へど、主殺しの噂が立てば、捕へられはせぬか、首尾よう落ちのびたかと、今朝勸化に出しなに、その事を聞くよりも胸は板、只お願ひ申すは觀音様、心の內でとつおいつ、老を養ふコレこの孝行臼も、今朝休み所の茶も水も、一向咽喉へは通らぬわやい。所詮かゝつた天の網、もし捕へられたらおれも一緒。今でこそよぼけたる町人なれ、以前は侍ひ、なんの未練を起さうぞ。覺悟は疾より極めて居る。それに聞えぬ、親子の緣を切つて親へ難儀をかけまいとは子の義理、おれにも又親の義理を立てさせてくれ。コリヤ、折角くれたこの臼も、孝行返つて不孝臼、死ぬるとも生きるとも、親子一緒にゴチヤ〳〵に、搗き碎いてはくれぬぞやい。

ト泣き倒れる。新兵衛、介抱したうても手の叶はぬこなし、さま〴〵あつて

新兵　申し、親の御慈悲とは常體の事。この新兵衛を思うて下さるお志しは、有り難うて〳〵、譬へる詞も、涙が咽喉へ詰つて申されませぬわいの。

ト新兵衛も大泣き。新右衛門正體なく

新右　新兵衛々々々。この上はモウ〳〵、もうどうあつても親子の緣は。

新兵　でも私しは大それた科人。

新右　磔刑ならば並んで突かれ、獄門ならば同じ板。

新兵　そりや又あんまり

新右　天にも地にもたつた一人の

新兵　親仁様。

新右　子は三界の首枷ぢやわいやい

ト大泣き。新兵衛も身を顫はして泣入る。また押入れバタ／＼と、内より戸を叩き毀して小女郎出て

小女　新兵衛さん、様子は残らず聞きましたわいなア。

ト新兵衛に取付き泣く。

新兵　南無三、小女郎。

ト振り切り駈け出さうとする。小女郎新右衛門よろしく立廻りにて引留め

新右　コリヤ、悴、矢ツ張り其方は

小女　最前番うた詞を反古にして、お前一人名乗つて出るお心かいなア。

新兵　お主の片割れ。せめてはお前をお助け申さう其ために。

新右　そんならこれが九十郎どののお妹御

新兵　幼名は小萩さま。

新右　ドレ

ト入れ代り、小女郎、顔をよく／＼見て

誠に幼な顔、見覚えて居る。様子を聞きましたが、お前も悪黨な兄御ゆゑ、いかい御苦労なされますな。

小女　イエ／＼、わたしが苦労より新兵衛さん、以前のよしみの深切に、家来とは思はぬ、大事の殿御と思ひ詰めては居れど、最前から押入れの内で様子を聞けば、云ひ號けのおえんさまと、女夫にならねばならぬ新兵衛さん、わしやフッツリと思ひ切つて、せめては新兵衛さんの代りに、兄さんを殺したは、妹のこの小女郎と名乗つて出て、死ぬる覚悟でござんすわいなア。

新兵　イヤ、そりやならぬ。御兄弟ともに江戸にて御最期あつて、お國の親旦那へ、なんと申し譯がござりませうぞ。

新右　さうぢやと親子は一體、悴が代りにこの新右衛門、

新兵　そりや猶なりませぬ。お主を殺した大罪人と、名乗らいでも知れてあるこの新兵衛。

小女　イヤ、この小女郎

新右　イヤ、この親仁を。

新兵　ハテ、聞分けの無い。

小女　そんなら一緒に

新右　親子夫婦

新兵　三人ともに

小女　三途の道連れ

新兵　イヤ、死出の山へは獨り旅

ト父駈け出すを、新右衛門、小女郎取付き留める。立廻りに小女郎、新右衛門、左右より縋りつき

兩人　コレ、マア待つて。

ト兩人して無理に中に從く。この時新兵衛が兩肌脱ぐと繩がかゝつて居る。

兩人　ヤア、これは。

ト愕り、新兵衛居直つて

新兵　勇藏さまのお情にて、小手を寬めた羽がいじめ。

兩人　そんならモウ

新兵　陽炎の朝を待たぬこの身の上。

ト新右衛門、小女郎と顏見合せ、思ひ入れあつて

兩人　、、是非に及ばぬ。

トどつと下に居て大泣き、此うち奥よりお大、三四郎出かける。納屋藏より藤兵衛、新兵衛が隱した脇差を提げて出かけ、右の三人よろしく窺ひ居る。この時一緒に

三人　新兵衛は主殺し。

藤兵　繩かかつた上は

ト三人一度にかゝる。立廻りにて

新右　婆め。さてはおのれは

だい　様子を聞いた。科人なればこなたも一緒に。

藤兵　おればこの小女郎。

三人　なんでも新兵衛。

ト始終立廻りよろしく

新右　コリヤ、悪企みひろぐと、行きがけの駄賃、どん腹を抉るぞよ。

ト大を押へ付けて居る。此うち藤兵衛三四郎は小女郎新兵衛と立廻り、よき所にて奥より出村新兵衛、ツカ〱と出て、三四郎藤兵衛を引廻し、見事に投げる。

小女　ヤア、お前は出村新兵衛さん、

新兵　これまでのよしみに跡の事を。

出新　氣遣ひせまい。こなたの身の上、助かる筋はこの新兵衛が

三四　何を小癪な

トかゝるを引据ゑる　三四郎、新兵衛にかゝるを引廻して、引敷き踏へ付ける。お大かゝるを新右衛門引付ける。

たれ　コリヤ〱、入り聟だてら女房を臀に敷くのか。

新右　エヽ、やかましい。物を吐かすな。

小女　エヽ、憎らしい藤兵衛め。

出新　身動きひろぐと、ぶち据ゑるぞ。
新兵　此奴は聾、氣遣ひはない。
藤兵　エ、コレ阿哥、所詮爰では思ふやうに。
だい　いつそ代官所へ注進して。
藤兵　それが近道。
三四　新兵衛、おのれを

トお大、新右衛門を捌れ返し、藤兵衛は出村新兵衛を振り放し、三四郎、新兵衛を捌れかへすうち、お大藤兵衛は行かうとするを、皆々それはト支へ、立廻り。藤兵衛は新右衛門、三四郎は出村新兵衛と入り代り、又立廻りの所へ、勇藏、一間よりツカ〳〵と出て、三人を一々突き廻し、始終立廻りにて皆々ミヤンととまる。勇藏きつとなつて

勇藏　町人の分として、慮外な奴等の。
藤兵　邪魔する勇藏。
三四　ありや誰れぢや。

トお大に聞く。

だい　おりや知らぬ。
勇藏　結城の家中丘原勇藏。汝の藤兵衛、うぬは同じお國の足輕、追放に逢うてさては當所に、いま町家の住ひの其方が、科人の差配、殊にわれが持つて居るは、そりや何ぢや。
藤兵　エヽ、こりやコレ眞鍮の矢立。
勇藏　矢立は即ち途中の硯、物書くばかりに用ひる物、寸に過ぎたるその拵らへ。こりや新兵衛より、うぬに溷打ち、事を糺さねばならぬわえ。
藤兵　サ、それは。
新右　次手にこの婆めも。

ト婆を前へ突出す。

だい　ヤア、わたしは姫御前の事、お免しなされて下さりませ。

ト三四郎これを見て

三四　さてはあなたは御役人樣ぢやな。
だい　コリヤ、滅多な事を。
小女　勇藏さま、お恥かしいわたしが身の上。
勇藏　兵太夫どのの御息女、樣子は承つてござる。
新右　すりや、勇藏さまには件新兵衛を
勇藏　國元へ召連れ歸る。
新小　エヽ。

トこなし。

勇藏　新兵衞、未だ右の一軸相分らぬか。
新兵　悪黨者の九十郎どのゝ是非もなく。せめてはお國で牢舍の、親旦那兵太夫さまへ。
勇藏　おやに依つて眞の一軸。
　ト出村新兵衞こなしあつて
出新　サア、憚かりながら勇藏さまとやら、私しは當所の町人、出村新兵衞と申す者。この玉屋へはゆかりの者。科極まつた新兵衞なれど、鯉の一軸を差上げなば、彼れが一命は。
勇藏　九十郎が存命なれば、召捕つて逆磔、云はゞ横死は彼れが仕合せ。
小女　そんなら兄さんの悪黨ゆゑ
勇藏　品に依つては死損、殺し徳。
藤六　ヤア、そんなら新兵衞は。
出新　嬉しや助けた。
　ト立廻り、新兵衞が繩を解く。皆々こなし。
新兵　出村どの、この縛めを解いては。
出新　ソレ、鯉の一軸。
　ト懷より前幕の九十郎が持つて居た、小風呂敷に包んだ質屋の通を取出し、新兵衞が前に置く。新兵衞、取上げて見て
新兵　こりや通帳……耳切お婆アお兜どの、大黒屋德右衞門。
皆々　アノ、これが鯉の一軸とは。
出新　とつくりと中の色品讀み上げて
　ト新兵衞、通を開き
新兵　金三分藍小紋……五百文、半纏。
　ト段々繰出すうち、小女郎も見て
小女　金壹分二朱、龍門の
新右　その次を早う／＼。
新兵　金貳百兩、梁の武帝の正筆、鯉の掛け地一幅。ヤアこれは。
出新　昨夜猪の堀で拾うた通。
新兵　すりや、その時の
藤兵　九十郎が懷中に。
　トつか／＼とかゝるを引廻して
出新　コレサ、何も知らぬ暗がりに、探り當つて拾うたは、命代りの大事の通。
藤兵　それを。
　ト又かゝる。立廻りに押へ付ける。

出新　なんと云ひ譯の種になりさうなものぢやないか。

ト新兵衛こなしあつて

新兵　エヽ忝ない。眞の一軸、在所はこれに勇藏さま。

勇藏　質屋は即ち大黒屋德右衛門。

新右　慥かに石町三丁目。

小女　置き主耳切お婆アとやら。

新兵　其お鹿は、よつく存じて居ります。

藤兵　もうこの上は。

ト脇差を拔いて新兵衛に切つてかゝる。三四郎これを見て、箒にて打つてかゝるを、出村新兵衛、入り代り藤兵衛と立廻り、新兵衛、三四郎を捕つて押へる。出村新兵衛は藤兵衛が拔き身を持ち添へ、しつかり留める。勇藏この拔き身に目をつける。お大いろ／＼あせるこなし。

勇藏　ヤア／＼、この脇差にしたふ血は。

ト勇藏、ツカ／＼行きて藤兵衛を引廻し

こりや慥かに關もの亂れ燒。

新兵　孫六の一腰は、九十郎へ親御のお讓り

小女　それを所持するその藤兵衛は。

勇藏　人殺しの科人、腕廻せ

トきつとなるを

藤兵　ア、コレ滅相な。何も覺えは無いぞ。

出新　覺えも無いものが、この脇差に、どうして血が。

藤兵　イヤサ、それは。オヽソレ、この脇差は向うの納屋藏に、手拭に卷いて隱してあるを、これ幸ひと取つて來たこの藤兵衛、人殺しといふは矢ツ張り新兵衛。

ト振り切りかゝるを出村新兵衛付け廻し、脇差を引ッ奪り、勇藏が側へ投げる。勇藏直ぐに

勇藏　サア、捕つた。

ト解いたる新兵衛が繩をかける。三四郎これを見て

三四　ヤア／＼／＼、アレ、藤兵衛が繩にかかつたワ。

ト立騷ぎ慌てるをお大抱き留め

だい　コリヤ、側杖に逢うたら惡い。三四郎ちやつと。

三四　どういふ譯やら、とんと解らぬ。

だい　ハテ、來いと云ふのに。

ト立騷ぐ三四郎を、お大無理に引立て、奥へ逃げて入る。藤兵衛、繩かゝりながら

藤兵　何の事だ。呆れて物が云はれない。

勇藏　何にもせよ、胡亂なおのれ、連れ歸つて一詮議。

藤兵　いまいましい。どうなりと。

ト新兵衛こなしあつて

新兵　申し勇藏さま、私しが身の上は

勇藏　新兵衛、其方を即ち新兵衛に預け置く。

新兵　エ

勇藏　出村に玉屋は遁かれぬ中と聞く。ソレ、その一腰と諸ともに、其方に預け置くは、未だ事の分らぬ科人なれば。

出新　ムウ。しつかりと預かりました。

新右　質の一軸請け戻さば

小女　お國にござる父さんのお身の上。

勇藏　兄の最期は深川猪の堀。

出新　水に流しても流されぬ質の品。

新兵　追ッつけ持參。

勇藏　裁許はその上……マア、藤兵衛め。立て。

ト唄になり、勇藏、藤兵衛を引立て、こなしあつて向うへ入る。ト暮れ六ッの鐘打つ。

小女　ありやもう暮れ六ツ。

新右　忝ない。勇藏さまのお情にて

出新　新兵衛どのはこの出村に。

小女　どうぞ質の一軸を。

ト此うち新兵衛思案して居る。

新兵　請け戻すには……又貳百兩。

ト此うち金太郎出かけて居る。

金太　コレ、その金は爰に、と立派に云つたが、やう／＼四拾兩。

ト財布に入れた最前の金を出して見せ

あと百六拾兩足らぬとは、ア、口惜しいなア。

新右　ヤア／＼、金太郎、其方が親切忝ない。氣遣ひするな。足らずの金はこの親が

新兵　イヤ、それでは申し

出新　ハテ、何事も奥にて相談。

小女　おえんさんの手前、わたしは遠慮。

新右　イヤ、お主の娘御、大事あるまい。

金太　小女郎さんなら晝夜の仕舞ひ。

出新　妹にも付合はせて

小女　新兵衛さんの段々のお情。

新兵　義理といふ、その義理こそは義理ならめ。

出新　義理に上越す

皆々　義理はあるまじ。

ト唄になり、めい／＼心意氣思ひ入れこなし。これに

て、チョン〳〵〳〵〳〵〳〵　道具廻る

本舞臺、奥座敷の體にて、この二重舞臺に三四郎一人行燈を引寄せ、膏薬を延して居る。合ひ方にて道具とまる

ト三四郎、右の膏薬を延してしまひ

三四　先刻から強勢に骨折つたゆゑ、また耳がガン〳〵ぜウ〳〵、挨句の果には膏薬も落してしまつた。やゝともするとあの新兵衛めが、おれが耳を摸り居るには、贈玉に徹へて痛い。

ト云ひ〳〵膏薬を耳へ付ける。

又どうで働らかにやならぬ。

ト手拭を四つに疊み、鉢卷にして

先づよいワ。さてこれからはおれが思案。なんでも惚れて居る娘のおえんを、委細構はず引ツ擔げて連れて退き、淺草邊に世帶を持ち、おえんと女夫になるか、但し鬮といふ札を首にかけて、はつち坊主になるか。二つに一つ……コリヤ、シテコイおえんめ。

ト尻を引ツからげる。奥にて

たけ　申し、おえんさま、もうようござりまする。ちやつとお出でなされませいな。

トこれに構はず三四郎、こなしあつて

三四　幸ひ日が暮れた。

ト葛籠を出して

この葛籠へ打込んで、爰をツイと……うまい〳〵。

ト一人呑み込んで居る所へ、奥よりお竹、留め袖の衣裳を持ち、おえんと連れ立つて出る、三四郎これを見て、ちやつと葛籠の蔭へ隠れる。おえんこなしあつて

えん　コレ、お竹、日暮れ紛れに俄に結うたこの髪。髷はよいか、とつくりと見て。

たけ　平常のお髪よりは、分けてよう出來ましたわいなア。

えん　そんなら嬉しい。わしや新兵衛さんと今宵祝言すれば、何も彼も常とは改めて。ほんに云ひつけた物を、藏から出して來てたもつたか。

たけ　ハイ、留め袖のお小袖を出して持つて參じました。これをお着替へなされまするのかえ。

ト下へ置く。

えん　着替へするわいなア。もうコレこの振り袖を取置いて留め袖を着るは、もう、わしや新兵衛さんの

たけ　おかみさんかえ。
えん　オヽ笑止。わしや否いの。
トこなしあつて帶を解き、衣裳を着替へる。お竹手傳ひよろしくあつて、おえん、留め袖になり、振り袖は脱捨てゝ其まゝに置く。
どうぢや。似合うたか、見てたもや。
ト帶を前へ結んで見る。
たけ　ほんに今までの振り袖と違うて、老くろしう見えますわいなア。それでは新兵衞さまが
えん　コレ、また嬲りやるかいなア
たけ　モシ〳〵、わたしや氣を急いて藏の口を明けて置きましたが、ちよつと行て閉てゝ參じませうわいなア。
ト行かうとする。
えん　アヽコレ、コレ、お竹〳〵。
ト呼び戻して
そんならの。
ト囁く
たけ　エ、アノ
えん　エヽ、氣の利かぬ、人が聞くわいなア。
たけ　ほんに、それが肝心ぢやわいなア、

ト云ひ〳〵奥へ入る。おえん、こなしあつて
えん　父さんや兄さんのお庇で、思ひがけない今宵の祝言新兵衞さんも得心して、最前の樣に晩にと
ト跡を云はうとして思ひ入れあつて
どうやら恥かしいやら嬉しいやら、いつそ氣が急くわいな。
ト一人喜んでこなしある。此うち三四郎、ソロ〳〵とおえんを覘ひ、ツカ〳〵と、そこへ出て
三四　コリヤ、おえん。
ト後より捕へる。恟りして
えん　ヤア、三四郎か。こりや、何をしやるぞいの〳〵。
ト振り切らうとするを、委細構はずして
三四　アヽモシ、どう踠いても、おれが見込んだら河童に見込まれたより強い。おれがする通りにせにや置かぬ。
ト有り合ふ細引にて、クル〳〵巻に縛るうち
えん　コレ〳〵、三四郎がわしをナア、コレ。
トいろ〳〵あせるを
三四　まだしも聲を立てぬが取得ぢや。
ト云ひ〳〵無理に葛籠へ捻ぢ込む。此うち奥より
金太　誰かおえんさんの聲ぢやが。

ト云ひ〳〵出て、これを見て
ヤア、また三四郎めが。こりやおえんさんを。
トこなしある。三四郎、葛籠をシツカリと縛り、此方へ來る。金太郎ちやつと彼方へ隱れる。
三四　マア、あゝして置けばよいぢや。
金太　よいも凄まじいわえ。
三四　時に、連れて退くには金が入る。
金太　連れて退くとは、とんだ奴だ。
三四　こりや伯母御を强請つて、さうぢや。
ト奥へツイと入る。金太郎こなしあつて
金太　マア、可哀さうに、おえんさんを。
ト葛籠の紐を解き、おえんを出して細引を解く。
えん　コレ、金太郎、三四郎めがの。
金太　サア〳〵、ようござります。彼奴は聞えねど、わたしは聞いて居りました。
トこの時奥よりお大出て來て
だい　馬鹿め、其おえんを。
ト引退けるを
金太　婆め、おのれを。
ト立廻りになる。
えん　コレ、金太郎、お母さんを。
金太　大事ござりませぬ。お前はマア奥へ。
えん　そんなら。
トこなしあつて奥へ入る。
だい　ヤア、あれを。
ト行くのを金太郎引戻し、これより兩人をかしみの立廻り、いろ〳〵よろしくあつて、トヾ婆を取つて押へ、クル〳〵卷に縛り上げる。
コリヤ、どうする〳〵。
金太　何を。
ト手拭にて猿轡を箝め、葛籠へ打込み、蓋をして、いろ〳〵よろしくあつて、シツカリと縛り、此方へ來て、三四郎が云うた通りに云ふ。
金太　先づ、あゝして置けばよいぢや。時に連れて退くには金がいる。おれもいる。こりや婆アめを打込んで置いて。
ト身振りにて、ハヽヽヽと笑ひ、奥へ走り入る。始終此うち合ひ方。奥バタ〳〵にて、小女郎、剃刀にて自害せうとするを新右衛門とめながら
新右　マア〳〵、待たつしやりませ〳〵

小女　放して殺して〳〵。
　ト兩人せり合ひながら出て
新右　コレ、申し、お前を殺す程なら、可哀さうに悴新兵衛は、人殺しにはなりませぬわいの。
小女　サア〳〵、それでも出村新兵衛さんへの義理、おえんさんと新兵衛さんを女夫にして、わしが死ぬれば、事は穩う納まるわいなア。
新右　ちやと云うてお前もお主。さうさせて親子が見て居られませうか。
小女　それでもわたしは。
新右　危ない。マア、この剃刀を。
　ト引奪るうち、小女郎、癪の差込むこなし。
コレ、最前悴新兵衛が云うた通り、兄御は惡黨ゆゑあゝいふ死やう、せめてお前はお國へ。
ト此うち小女郎、段々癪が差込み、身を顫はせ、切なきこなし。新右衛門驚き
サア、こりや何とさつしやりました〳〵。
小女　最前から兎角持病の癪が。
　トこなしあつて顫ふ。新右衛門、ウロ〳〵して
新右　幸ひこりやおえんが着物。マア〳〵これなりと。

　ト無理に着せる。
積なれば何ぞ藥を。
小女　ハテ、其やうに年寄りの苦勞を
新右　それでもお前、積には熊の膽が。ドレ、わたしが。
　ト慌て奥へ行かうとして行燈に行き當り、うち轉す。
南無三、こりや暗がり。ちつとの間待つてござりませ。
　トこなしあつて、探り〳〵奥へ入る。これより暗がりにて小女郎、思ひ入れあつて
小女　ア、コレ、折惡い、持病とはいひながら、この積もよう發る事ではあるぞ。
　トこなしあつて
幸ひのこの暗がり。殊に新右衛門は奥へ。兎角親子ともに割つ口說いつ、わしを殺すまいと思へども
ト此うち奥より出村新兵衛、フツと出て、暗がりにて窺ひ居る。
所詮新兵衛さんに添はれねば、早う死んで、せめて未來の。
　トちつと泣く。出村新兵衛、耳を欹てこれを聞き思ひ入れ。小女郎こなし。
いま剃刀に、慥か爰らに。

トそこらを探り尋ねる。此うち出村新兵衞窺ひ寄り、振り袖を探り見る。此うち

嬉しや剃刀。さうぢや。

ト死なうとする。出村新兵衞探り留め

出新　ドッコイ、滅多に殺さぬ〳〵。待て〳〵〳〵。コリヤ、妹おえん。

小女　エ、、

ト恟りこなし。

出新　ハテ、短氣な。われを殺す程ならば、この兄はこれ程心を盡さぬわいやい。尤も新兵衞どのに添はれねば、死ぬるとは尤もぢやが、爰をよう聞けよ。奥へ來た小女郎は、新兵衞とはツイ一通りの色ではない。樣子を聞けば古主の娘、兄の悪黨で勤め奉公に賣られ、便りの無いその身ゆゑ、云ひ交した主從の義理、この世界に澤山あれど、又お染久松や本町二丁目の糸屋とは譯が違ふ。新兵衞も男、この兄に義理立つて、小女郎と手を切らうと思うても、退けば不便や彼方も死ぬる覺悟ぢや。と云うて思ひ込んで居る妹、其方に添はさぬと云ふのではない。矢ッ張り添はす、兄が料簡は、マア、馴染みのあの小女郎を、新兵衞が本妻と一番立てて、不承ながらおえん、そちや二番と下がつて、否でもあらうが妾と思うて添うてくれ。ハテ、さうすれば二人も無事に新兵衞に添はれるぢやないか。此方に義理を立てれば、彼方にも世事に賢い勤めの身。まんざら其方を袖には思ふまい。ナ、合點がいたか、得心か。

ト小女郎、始終聞いて齒をくひしばり泣く。

オ、、悲しいは、道理ぢや〳〵。折角嫁入りして來たものを、今日の今まで祝言もせず最前の仕儀。やう〳〵今宵祝言と思ふ所へ、小女郎が來たゆゑ、娘心に突詰めて死なうとは尤もなれど、いよ〳〵おれが云うた通り、たとへ妾になつても、悋氣嫉みを沖津白浪立田山、伊勢物語のこの歌を、とつくりと心得て、この兄が賴みぢや。コリヤ、妹、どうぞ得心してくれ。

ト此うち小女郎、いろ〳〵こなしあつて、上着の振り袖をツツと脱ぎ、差足して、表の方へ探り行く。出村新兵衞こなしあつて

兄が斯う云ふも、二人三人の命づく。どうぞ無事にと思ふから、ナ、おえん、妹。

ト思はず上着を探り取り、ヤアとそこらを尋ねるうち、小女郎、枝折り門を探り廻し、戸を開き外へ出て

小女　さうぢや。
ト向うへバタ〳〵と走り入る。出村新兵衞、悄りして
ト門口へ探り出て
出新　ヤア、今の足音は。
慥かに妹、あれほど云うても得心せず、矢ッ張り死ぬる
覺悟で……あれを殺しては親達へ。
ト向うへ走り行かうとする所へ、バタ〳〵にて藤兵衞
逸散に走り出て
藤兵　コレ、出村新兵衞。
出新　うぬは最前の
藤兵　繩を引ッ切り逃げて來たも、おのれらを。
トかゝる。
出新　エヽ、面倒な。
ト内へ見事に投げ込む。片手にて尻をちよいと褰げ
コリヤ、おえんやアい。
ト呼び〳〵向うへ走り入る。藤兵衞、起きあがり、こ
なしあつて
藤兵　ヤア、こりやア眞暗だ。とんと方角が知れない。
トうろ〳〵する。奥バタ〳〵にて、おえん走り出て
えん　今奥で聞いた新兵衞さんのお身の上、所詮添はれぬ
わたしなれば、こりやいつそ覺悟極めて。
ト藤兵衞、探り寄りて
藤兵　コリヤ小女郎。
ト捕へる
えん　エヽ、
ト悄くり。此うち新兵衞、奥より探り出て窺うて居る
藤兵　國元から惚れて居るこの藤兵衞、これから連れて行
て女房にする。サア來い。
ト引立つるを
えん　コレ、滅相な。
藤兵　なにを。
ト暗がりの立廻り。新兵衞、探り寄つて、藤兵衞を引
廻し、ポンと當てる。藤兵衞、ウンと倒れる。おえん
こなしあつて、新兵衞、ちやつと抱き寄せて
新兵　コレ〳〵小女郎。
えん　エヽ。
ト又、悄りする
新兵　ハテ、其やうに驚ろく事はない。最前も云ふ通り、其
方が死ぬとおれがお國元へ、申し譯が無いと云ふに、聞分
けずに。エヽ、こりや何か、おえんと祝言すると思うて、

さうか／＼、さうであらう。
ト此うちおえん、いろ／＼思ひ入れ
ハテ、疑ひ深い。今夜祝言すると云うたは、親仁様や彼れが兄の出村への義理で、心に思はぬ偽はり、粹のやうでもない。コレ、小女郎、必らずそれを氣に懸けて、短氣を出すまいぞ。
トおえん、袖を振り、イヤ／＼死ぬるといふこなし。
ハテサテ片意地な。もう斯うなる上は、死ぬるとも生きるとも二人一緒に。マア／＼おれ次第に。
ト云うて後手に手拭にて縛る。おえん思ひ入れ。
コレ、暫しのうちを過ちさゝぬ情の縛しめ。
ト探り／＼連れて行つて
マア、この内へ。
ト障子屋體の内へ無理に入れる。此うち藤兵衛、起きあがり、窺ひ寄つて新兵衛にかゝる。ちよつと立廻りの所へ、奥バタ／＼にて、三四郎金太郎、財布をせり合ひ／＼出て來る。
金太　ヤア、こりや眞暗だ。
新兵　さう云ふは金太郎か。
金太　コレ、新兵衛さん、この聾めが親旦那の、お志しの百六拾兩の金を、引ッ奪つて爰へ。
新兵　大事の質請け。その金此方へ。
金太　そりや合點だ。
三四　面妖、おのれは邪魔ひろぐ金太郎め。
藤兵　新兵衛め。
ト兩方探り合ひ立廻りになり、トゞ金太郎、金を引ッ奪り突き倒す。三四郎、ヒヨロ／＼として葛籠へ行き當る。探つて見て、直ぐに葛籠を背負ひ、表へ探り出る。此のち
金太　新兵衛さん、金を取返しました。
新兵　出來した金太郎。また藤兵衛めが立戻つて居るぞ。
金太　そりや滅多に油斷は成らぬわえ。
ト金を懐へ捻込む。三四郎、門口へ出て
三四　金は取られても此おえんを。エヽ、忝ない。
ト葛籠を曳摺り／＼向うへ走り入る。内には三人とも探り寄つて、眞中に藤兵衛、兩方より取つて投げる。藤兵衛はずみに見事にかへる。新兵衛直ぐに取つて押へる。奥より新右衛門、手燭を持つて出て
新右　悴新兵衛、小菊さまは。
新兵　その一間に。

新右　エ。

ト押開き、障子の内よりおえん出る。

こりやおえん。

えん　父さん、新兵衛さん。

新兵　そんなら今のは……オ、

金太　コリヤ、金は揃うた、一軸の質請けに。

ト最前の金と一緒に出す。

新右　それが肝心。おえんはおれが。

ト手拭を解いてやる。

えん　コレ、新兵衛さん、聞えませぬ。

金太　ハテ、怨みは跡で。

新兵　それ、マア、一軸を。

ト金を受取り行かうとする。藤兵衛それをトかゝるを、新兵衛よろしく、金太郎引廻し

三人　コレ、早う。

新兵　合點ぢや。

ト向うへ走り入る。ト跡にて新右衛門、おえん、金太郎三人、藤兵衛、相手に又々立廻りよろしくあつて、トヾ藤兵衛を取つて押へる。この見得にて、チョンチョンチョンチョンチョンと引返し。

---

本舞臺、江戸橋の上にて、新兵衛、肌脱ぎにて掛け地の箱を背負ひ、中通りの者殘らず、凛々しき捕り手大勢相手にて、抜き身を構へ、見得をして居る、好みの鳴り物にて幕明く

ト三四郎、お六、藤兵衛を、出村新兵衛、金太郎追うて出て落合ひ

出新　先づ今日はこれぎり。

打出し幕

# 富岡戀山開（終り）

貞享年中に

湯島お勘は名取の藝者
仇な一節世に傳ふ情は今に錦繪風俗

二人椀久
二人松山

# 江戸紫由緣十德（えどむらさきゆかりのじつとく）

三冊物

其頃の噂に

藻屑三平は手取の力者
左右二腰白柄組と浮名を殘す丹前姿

表のカタリは、「江戶紫由緣十德」初演の時のそれである。

本卷の卷頭に入れたコロタイプ版は、「大雲寺前」の舞臺面で、初演當時發行された錦繪である。

下揭の寫眞は、本狂言を改作して、故市川齋入が獨得の出し物にしてゐた「盟約誓十德」大切、櫻の宮狂亂の場で、三つ面の踊がある。大體原作に近い行き方である。

本文中に挿入したのは、初演の時の繪本番附全部である。享和頃は大體に番附の印刷が非常に惡いので、稍鮮明を缺く憾があるが、是非もない。



# 江戸紫由縁十德

## 序幕

柳原の場
湯島の場
伊豫屋の場

役名――安宅の甚平、藻屑の三平。椀屋久五郎。蔦の者、音次。植木屋文藏。田川壽德。小泉大藏。八谷三五右衛門。八谷五郎四郎。番頭、清九郎、會津屋作兵衛。太鼓持ち、傳吉。植木屋義兵衛。中間、七內。同權助。非人、權。久兵衛女房、おまつ。傾城、松山。同、波の戸。藝者おさき。同、おたき。下女、おとよ。壽德娘、おしづ。藝者、湯島のおかん。

東西々々　二番目始まりの、知らせを打つて、幕の內より室町二丁目、椀屋久五郎さま、木戸まで急用急用。

ト返して呼ぶと、東の通ひ路より、久五郎、羽織袴、町人の形にて、供男に風呂敷包みを持たせ、供につれ、本舞臺へ上がり、花道へ行きながら

供男　モシ、若旦那樣、今の急用は慥か、あなたでござりますぞえ。

久五　サア、さう聞いたゆゑ、おれも歸らねばなるまいが、面妖な、今日はこの芝居へ、八谷三五右衛門さまが、御見物に、お出でなされてござるとの事。それゆゑお屋敷より、わざ／＼お使ひ、先き達て仰せ付けられた、菅家の色紙持參せよとあるゆゑ、取揃へて持參したが、肝心の三五右衛門さまの茶屋も知れず、最前から狂言も見ずに三五右衛門さまばかりを尋ねて居るが、どうぢや其方はお見受け申したか。

供男　この大勢の中でも、棧敷から土間舞臺までも、氣を付けて見ましたが、三五右衛門さまは、どうもお出でなされぬやうにござります。

久五　ハテ、困つたものぢやな。早くお目にかゝつて、大切の色紙を……今の急用の呼出しは、もしや三五右衛門さまではないかしらん。

供男　それも知れませぬ、早うお出でなされませ。

久五　成る程、こりや表へ出たら、樣子が知れやう。其方も來い。

ト久五郎、供男を連れ、花道の揚げ幕へ入る。ト直ぐに口上觸れあつて、キザミ込み。

本舞臺、向う黑幕、一面に柳原土手の景色。雪降り、しつぽりとしたる合ひ方、時の鐘にて幕明く。

ト雪チラ〳〵と降る。向うより甚平、半合羽、一本差し、小提灯を提げて出て來る。東の花道より、三平、尻をからげ、中月代、黑羽二重の一つ着、吹拔き大小、傘にて、これも小提灯を提げて出で、舞臺にて、行き合ひ、摺れ違ひよろしく、氣味合ひにて兩方へ別れる三平、爪づき、提灯の火を消し、下駄の鼻緒を踏み切りしこなしあつて

三平　ア、コレ〳〵、それへござる若いお人。ちよつと待たしやいましな。ちと御無心がござる。

甚平　手前の儀でござるか、

三平　左やう。別の儀でもござらぬが、少しの間、その灯を御無心申したい。

甚平　お易い事。こなた樣には、なんとなされましたな。

ト提灯を出す

三平　イヤモウ、石高な道ゆゑ、踏み挫き、下駄の鼻緒を切りました。少しの間、その提灯を、お借り申したい。

手前の提灯の灯を消し、甚だ迷惑いたす。

甚平　イヤモウ、途中で履物の鼻緒の切れましたは、難儀なものでござりまする。暇どれましても、苦しうござらぬ。ゆつくりとなされたがようござりまする。

三平　これは〳〵、忝ない。お急ぎかも存せぬに、自由がましき御無心。御免下されい。

ト鼻紙を出し、紙撚りを撚り、甚平、提灯を差出し見せる。此うち始終合ひ方。

甚平　見ますれば、こなた樣のお鼻紙は、小杉のやうにござる。小杉では、お歸りの道にて、又切れませう。手前の懷中いたすは、小半紙でござる。サア〳〵、これでお立てなされたがようござりませう。

ト鼻紙を出す。

三平　重ね〳〵忝なうござる。然らば一枚申し受けませう。

ト三平、紙を頂き一枚取り、鼻緒を立てる。甚平、捨ぜりふにて提灯を見せて居る。フト、三平が鼻紙の間

より、手紙出でかゝりあるを、何氣なく、開き讀み、三平をヂロ／＼見て、手紙を引合せて、思ひ入れあつて、右の手紙をソツと懐中する。三平、知らずに、鼻紙を取り、鼻緒を立てしまひ

三平　お庇で鼻緒が出來ました。思はぬお世話にあづかり忝なう存じます。お鼻紙も返進。イヤ／＼、俗說に申すには、一枚紙は貰はぬものと申せば、ちよつと買う致して、お返し申しませう。ハ、、、、。

ト鼻紙を引裂き、返す。甚平取る。三平、我が鼻紙を懐中する。

甚平　ハテ、どうでも武家方は正直な。サア／＼、灯をお灯しなされたがよい。

ト三平、提灯をともし

三平　何事も調ひましてござる。

甚平　然らば、お別れ申しませう。

三平　御緣もあらば、又重ねて。

甚平　おさらばでござりまする。

ト矢張り合ひ方にて、兩人、こなしあつて、甚平は、東の方へ、三平は、花道へ行く。フト手紙の事を思ひ出して無いゆゑ、提灯にて、見い／＼、舞臺へ立ち戻り、尋ねて無いゆゑ甚平を見て、さてはと心附き

三平　コレ／＼、若い者、待たつしやい、

甚平　また鼻緒が切れましたか、

三平　イヤ、さうではござらぬ。ちよつとこれへ。

甚平　何ぞ用がござりまするか。

ト思ひ入れあつて、立戻り、兩人、舞臺先へ出る。

三平　返して下さい。

甚平　何をな、

三平　イヤサ、鼻紙の間に入れて置いた手紙を。知らぬとは云はれまい。今この所にて、外へ行き場のない手紙、お前が取つたに違ひはあるまい。

甚平　ムウ、さう云ひ掛けられては男の不肖。此方に覺えは無けれども、取つたにならうが、して、その手紙の文言は。

三平　ヤ。

トぎつくり。

甚平　噂に聞いた藻屑の三平とは、こなたの事か。

三平　すりや、いよ／＼手紙にて。

甚平　此方にちつと入用だ。コレ、この手紙。

ト出して見せる。

三平　それを。

ト取りにかゝるを、突き廻し、傘にて隔て、手紙を開き

甚平「先達て、諜し合せ候ふ通り、いよ／＼葺屋町芝居へ誘き出し候ふ間、彼の色紙の儀よろしく賴み入り候ふ、藻屑の三平どのへ、やする。」

ト讀みて

サア、この色紙とは、何の色紙。

三平　イヤサ、そりやア。

甚平　葺屋町へ誘き出し候ふとは、大方、椀屋久五郎どの芝居にて喧嘩に事よせ、奪ひ取つた菅家有明の色紙、行くへを云はさにゃ置かぬ。

三平　知らぬわえ。菅家やら、奉加やら、色紙の事なら、經師屋に聞け。先づその手紙を。

甚平　イヤ、詮議の種のこの手紙、滅多にやア渡さぬ。

三平　して又、色紙を詮議するわれは。

甚平　安宅甚平。

三平　ヤ、なんと。

甚平　椀久どのへゆかりの人に、ちつと縁ある、江戸で知られた、この甚平。

三平　面白い。聞き傳へた、本所の親分、甚平と聞けば、相手になつて、手紙の達引。

甚平　いままでの惡、藻屑の三平。

三平　安宅の甚平。

兩人　出會うた不肖。

ト兩方ともに尻をからげ、これより雪、頻りに降り出し、兩方烈しき、傘のタテ、よろしくあつて、トヾとつこいト見得になり、チョン／＼にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、見附け、本社の横を見せ、玉垣の仕切り、上の方、水茶屋、眞中、男坂の體にて、その外好み通り、すべて湯島天神境內の模樣よろしく、輕業に辻打にて、道具納まる。

ト仕出し大勢、表方打交ぜ、下座花道に行きちがふ。この鳴り物にて、花道より松山、波の戶、傾城、他所行きの形、後ろ帶にて、おさき、おたき、藝者。傳吉太鼓持ち。若い者一人附き添ひ出て、皆々直ぐに本舞臺へ來る。

傳吉　コレ／＼、爰が彼の湯島の天神さま、なんと賑やかな、面白い所でござりませうが。

波の　ほんに、松山さんも、わたしらも、五丁町より外知らねば、どこへ行つても物珍らしいゆゑ、それで駕籠を空で、歩んで來たのぢやわいな。

さき　波の戸さんも松山さんも、今日は久さんのお頼みでこの湯島の伊勢屋とやらへのお出で。わたしらもお供したわいなア。

さき　久さんのお振舞ひは、この間から廓へ見える、八谷さんや、大藏さんを、もてなしの爲ぢやといなア。

傳吉　イヤモウ、二人ながら氣障な侍ひで、花魁はその中でも。

松山　ア、コレ、その噂は。およしなんし。御贔屓しても好きんせん。今日この伊豫屋とやらへ來る事も、嫌でならねど、可愛い久さんの頼みゆゑ、それでこの松山も

たき　サア、久さんと、花魁は、深い仲と謳れしらぬ者もない。

傳吉　久さんといふ、卽ち椀屋の久さま。登りつめける末の松山さま。波の戸さまが、仰しやる通り、離れぬ中は石漆。おツつけ久さまは見えませう。マア、それまでは伊豫屋より、あの茶屋へ行て、上野淺草築地の門跡まで見晴らしたがようござりまする。

松山　ほんに、嫌なお方の側へ行くより

さき　あの茶屋で、待ち合せてござんせ。

傳吉　それがようござりませう。サア、お出でなされまし。

ト矢張り辻打にて、皆々茶屋の床几へ腰をかける。向うより大藏、着附け羽織、侍ひにて、非人の權が手を捻ぢ上げて出る。後より七内、中間にて附いて出る。花道よき所にて、大藏、權を柔術の鹽梅にて、取つて投げる。

七内　これはお旦那、なか／＼見事でござりまする。

大藏　イヤ、此やうな奴は、なんでもない事ぢや。

ト權、起きあがり、大藏が胸ぐらを取り

權　なんだ、人を投げて、なんでもない事だ。コレ、一文貰はずに、投げられたり、しめられたりしたんぢやア埋らねえ。たんぼ侍ひでも、きかぬ／＼。

トこづく。大藏「おのれ」と又投げやうとすれど、權自由にならぬゆゑ、大藏、困るこなしにて、舞臺の方を見て、わざと强い振りをして

大藏　ハテサテ、やかましい。その腮骨を。

ト七内へ思ひ入れ、七内、呑み込み、二朱銀を出して

權　そつと權へやる。
ア、、こりやア
ト戴くところを見事に投げる。
アイタ、、、今のは手ひどくも堪へた。
大藏　所を又。
ト投げる。權、堪へ兼ねて
權　もう／＼、御免だ／＼。
ト腰を抱へながら、向うへ逃げて入る。大藏始終舞臺の方を、見い／＼、見よがしに嫌味のこなし。
大藏　ハ、、、。ても强い奴である。
ト云ひ／＼、七内を突きのけ、舞臺へ來る。此うち始終辻打、生け殺しあるべし。大藏皆々を見て
大藏　これは、花魁達、皆の者、早く來てゐるの。
傳吉　來て居るとは、どうでござりまする。大さま、お前のお出での遲いも道理、今のヤツトウなぞで、道々のお慰み。
たき　大さん、强いものぢやわいな。
トロ々に云ふ。大藏、こなしあつて
大藏　そんなら、其方達、今のを見て居たか。これは面目次第もない。

波の　今の强い所を、誰れやらに見せたいなア。
大藏　サア、身共も、有やうはその心ぢや。
トあたりを見廻し
肝心の藝者のおかんが
皆々　まだ見えぬわいなア。
大藏　南無三、當ての槌が違つた。
七内　一朱二本、棒にお振りなされた。
大藏　一體あのおかんは、藝者に似合はぬ、ベタ／＼と嫌らしい事が嫌ひで、男のやうな氣象に惚れて居る大藏、彼奴を取つて〆めたさに、今のエイヤツトウ、强い事をするも、靡かさんと思ふのに、これを思へば皆無駄事。
七内　時にお旦那、今日は槌屋の久五郎が振舞ひで、この湯島の伊豫屋まで、お出でとあれば、色達を連れて、早うお越しあられませぬか。
大藏　さては、おかんは、伊豫屋へ、先に行つて居るな。
たき　ほんに、おかんさんは、もう伊豫屋へ行てゞあらうわたしらも、行かうぢやあるまいかいなア。花魁。
波の　おかんさんが、行てゐやしやんしても、まだ肝心の久さんが見えぬゆゑ、松山さんと。
松山　アイ、わたしはこの天神様は、未だ始めてなれば、

方々を見歩きたいわいなア。
傳吉　そりや、ようござりませう。次手に女の淨瑠璃や、
輕業芝居をお目に掛けませう。
皆々　オヽ、そんならわたし等も、行かうわいなア。
大藏　オヽ、行かう〳〵。身共も君達を連れて、この地內
をそゝりかけよう。七內、其方も供せい。
七內　これは、吝なお旦那。
大藏　なんの吝な。兎角、湯島といへば、我が戀人の住む
所。
傳吉　そこで今の流行り唄に。
大藏　湯島のおかんは名取りの藝者。
ト下座へ取り
〽仇と情の二重帶、〆めてしつかと伊達姿、誰れもほの
字のヨホンホへ、
ト騷ぎにて浮かれ、松山へ抱きつくを、突き飛ばし、
下座へ入る。また波の戸へ抱きつくを、右の通り。お
たきおさきを連れて、下座へ入る。大藏、傳吉に抱き
つき顏を見て
大藏　エ、おきやアがれ。
ト突き飛ばし、七內を連れ下座へ入る。傳吉、起き上
がり
傳吉　誰れもほの字のヨホンホへ。
ト踊りながら、下座へ入る。宮神樂になり、向うより
三五右衞門、羽織袴にて、家來一人連れて出て來る。
家來　モシ〳〵、お旦那、こりや何れへお出でなされます
るな。
三五　身共は、天滿宮へ參詣いたし、歸りには爰に寄れば
本所まで廻らねばならぬ用事あれば……イヤナニ、家來、
苦しうない、其方は先へ旅宿へ立歸り、今暫らく、手間
どるであらうと申して置け。
家來　ホイ〳〵。左樣なれば、お先へ。
三五　いかにも、早く。
家來　畏まりました。
ト引返して入る。三五右衞門、後にこなしあつて
三五　國元にて、劍術の師匠、正木兵太夫どのゝ娘のおか
つの身の上、當所と聞いて驚ろきしが、何卒安宅甚平に
對面いたさんと、本所へ立寄りしが、この邊との噂。ど
うぞ彼れに……イヤ、參詣いたして。
ト矢張り、宮神樂にて、三五右衞門、こなしあつて、
下座へ入る。向うより作兵衞、肴附け羽織、町人の形

にて出る。後よりおまつ、女房の拵らへにて、下男を連れ出て來る。後より清九郎、着附け袴、手代の拵らへにて、一緒に出て來り、花道にて

清九　これは〳〵、思ひがけない、御新造樣には、この天神さまへ、御參詣でござりまするか。

まつ　番頭の清九郎、其方と久五郎さまは、今日伊豫屋にて、お出入りのお屋敷の御家中樣方を、お振舞ひ申すので、今朝から來て居やる。大儀ぢやの。

清九　イヤ、何を致しまするも御奉公、大儀な事はござりませぬが、見れば會津屋作兵衞さまと、御同道でござりまするな。

まつ　ほんに、其方にはまだ話さぬが、今度こちの人、久兵衞どのと、この作兵衞さまと御相談で、めでたい事があるゆゑ、それで御同道申したわいの。

清九　先づ、めでたいとは何よりの事。して、その樣子はナ。

作兵　我れら、そつくりと話して聞かさう。幸ひあの花屋の床几で、清九郎、おまつさまも、サア、ござらぬか。

まつ　成る程、左樣いたしませう。

トまた神樂にて、三人、舞臺へ來て、茶屋の床几に腰を掛ける。

作兵　時に、清九郎、めでたいと云ふは、外の事でもない久兵衞どのと、我れら話し會ひして、舍弟久五郎どのへ嫁を呼ぶつもりぢや。

清九　ヘイ、それは、どこからナ。

作兵　即ち、在鄕お七ではない、おしづというて、田川壽德といふ、さる浪人醫師の娘。それを久五郎どのへ、嫁に、この作兵衞が仲人するぢやわいの。

清九　ハテナア。して、御新造さま、若旦那久五郎さまは嫁御を御承知でござりまするかえ。

まつ　サア、ちよつとこちの人と話しがあるさうなが、まだ久五郎さまはしつかりと、得心の樣子でもないやうなゆゑ、マア見せた上で、是非得心させませうと、こちの人のお指圖で、それで今日、この天神さまで、先の娘御と、久五郎さまと、マア、見合ひさせう爲に。

清九　そんなら、まだしつかりと、極つたといふでもないが、若旦那久五郎さまの日頃のお身持ち、旦那久兵衞さまや、作兵衞さまが折角お世話なされても、どうぞよくゆけばよいが。

まつ　サア、それはわしが意見ではない、主の弟御、とつく

りと何かの話しも、せうと思うて。
作兵　イヤ又、先の娘の器量を見せたら、いかな久五郎どのも、まんざらでもあるまい。さて、彼の壽德どのが、堅く今日の約束なれば、娘御連れて、どこぞへ來て居られるか。おりやちよつと、この社内を尋ねて來ませう。
まつ　そりや、御苦勞でござりまする。その間に久五郎さまも、伊豫屋へ來てござれば、呼び寄せて置きませう。
作兵　それがようござらう。こんな事は兩方都合よくせねばならぬ。ドリヤ、社内を尋ねてこうか。
　トこれより合ひ方、揚弓の音になり、作兵衛は下座へ入る。おまつ、しか〴〵捨ぜりふあつて
清九　モシ〳〵、御新造さま、あんまり其やうに、御苦勞になされますな。
まつ　清九郎とした事が、主の云ひつけ、大事の弟御の緣組みなれば
清九　ハテ、その弟御の久五郎さまは、そんな頓着はござりませぬ。
まつ　ヤ。
清九　お前も知つての通り、久五郎さまは、吉原の傾城、松山に登りつめてぢや。釋迦孔子の意見も用ひず、色と酒との有頂天。あれでは、椀屋の財産も潰れて、五器下げになりません。それに嫁ぢやの、女房ぢやのと、へへ、これも凄まじい。
　トこれにておまつこなしあつて
まつ　清九郎、其方は何ぢや。内の番頭ではないか。そんな久五郎さまのお身持ちを、しつかりと取鎭める
清九　意見は愚か、打ちくらはした上でもと思へど、何をいうても、お前樣のお連れ合ひ、久兵衛さまは、どういふ事やら、弟御を大切に、甘う育てゝ云ひ次第。現在の兄御が、甘やかしてござるゆゑ、家來の云ふ事、なんの聞入れがござりませう。殊に又、お出入りのお屋敷、金澤のお家へ差上げねばならぬ、大切な菅家の色紙も、葺屋町の芝居で
まつ　サア、その色紙を尋ねるうち、受取りの役人八谷三五右衛門さまへ、お頼みして、暫しの猶豫。それゆゑ三五右衛門さまを、お振舞ひぢやの、吉原のと、物いりいとはぬ、主が心遣ひ。
清九　番頭の身で、その物いりが、氣の毒でなりませぬ。
　ト頭を掻き〳〵、思ひ入れあつて
現在のお主の事を、此やうに申すのも、兎角椀屋のお家

が大切。今日も伊豫屋へ三五右衛門さまを、おだらかして置いて、久五郎さまは、この湯島の蔭間狂ひ、大酒をあがつて、さる茶屋で、寄つてござりますわい。

まつ　そんなら、伊豫屋に、久五郎さまはござらぬかや、

清九　大事の振舞ひは、この清九郎に振り向けて、爰の蔭間を惣揚げでござります。

まつ　それでも、もし今にも作兵衛さまが、先の娘御を連れてござつた時は。

清九　幸ひ御新造さま、久五郎さまを呼びよせる、思案がござりまする、

まつ　その思案とは。

清九　たとへ、閻魔大王が七度半の使ひでも、滅多に歸る若旦那ではござりませぬ。そこを、この番頭が思案にて今日のおもてなしに吉原から、彼の深間の松山が來て居れば、幸ひ似せ文を書いて持たせてやつたら、なんぼ蔭間にござつても、そこが裏門、表門、マア、勝手のよい馴染みの方へ入らにやならぬ。すりや久五郎さまは、歸つて見えます。

まつ　成る程、そんなら、その文、松山どのへ。

清九　イヤ／＼、滅相な。この事を松山に聞かしたら、今日の見合ひどころか、却つて見えた若旦那をひッ挾んで騷動かしはしますまいわいの。

まつ　おやと云うて、肝心の久五郎さまの文。

清九　御新造さま、御苦勞ながら、お前、お書きなされまし。

まつ　何を云やる。わしが惡筆と云ひ、誠に松山どのの手は、よう覺えこゞござんせう。

清九　そこが生醉ひ。あなたも、今でこそ椀屋久兵衛の奧樣なれど、以前はソレ、吉原の、先の松山さま。それは格別、すべて花魁の手は、大概松花堂で大事ござりませう。ツイ一筆。

ト茶屋より、硯箱を取つて來てあてがふ。おまつ、こなしあつて

まつ　それでは、どうやらわしが。

清九　ハテ、どうなりとして、今日の見合ひさへ首尾よう濟めば、旦那の手前、あなたもよい事ぢやござりませぬか。

まつ　そんなら、いかみなりに書かうかいの。

清九　文句に少し悋氣を交せて、疾から來て待つて居る程に、今歸つてくれと、隨分、嫌らしい方がようござりま

する。
まつ　これは又、迷惑な事ぢや。
　ト筆を取り、サラ〳〵と書くうち、清九郎、細々、云ひ〳〵、見て居て、宛名の所にて
清九　オツト、宛名は、久さま參る、ツイ松より。
まつ　ヤ、松とは。
清九　ハテ、松山を洒落て、松よりでござります。
　トおまつ、右の通り書きしまひ
まつ　これでよいかや。
　ト取つて
清九　ちよつと申しあげまゐらせ候。まづとや今日しは、御約束の事ゆゑ、わが身先ほどより此方へ參り、待ちわびまゐらせ候。御許樣には其方に何か面白い世界にや、未だ此方へ御入らせなく、御なつかしく御おもても如何なりしや、就いては御入らせの御樣子も定かならず、兼ねての御しん、お逢ひなう候はゞ、早く此方へ御運ひの事、しみ〴〵願ひ參らせ候ふ、待たるゝ身より待つ身になるなとやら、御推量下され、積る御物語りは叶ふ御見と先づは御迎ひいそ〳〵、逢ひたい〳〵、めで度かしく、
　　　松より
　　　　久さままゐる。
まつ　それでよいかや。
清九　妙々。また爭はれぬ、流石は商賣人の果ほどあつて
　ト顏を見合せ、ちやつと
　イヤ、これは云はぬ事。ハヽア。先づ、これは早う持たせてやつて、久五郎さまを呼び寄せるぢや。
　ト云ひ〳〵文を卷き納める。
まつ　その間に、わしや天神樣へ參つて來ようわいなア。
清九　左樣がようござりまする。
まつ　そんなら、清九郎。
清九　御新造さま。
まつ　必らず早う、頼んだぞや。
　ト唄になる。おまつ、こなしあつて、下座へ入る。
清九　呆れたものだなア。
　ト清九郎、獨り殘つて
　まんまと騙して、書かせたこの文。内の旦那に見せて、久五郎と御新造、疾から色事ぢやといふ後の證據、又、馬鹿者の久五郎には、豫ねて兄嫁のお松が、旦那を嫌うて、ぞつこん惚れてゐると云うて、置いたれば、それを眞受けして居るべら坊。殊に五郎四郎を、三五右衞門に

して、色紙を何もかも手都合よう。おツつけこの淸九郎椀屋の跡式してこます。うまい仕組みの書き狂言、なんでもしめたぞ。當り振舞ひはドリヤ、伊豫屋へ行つて呑みかけよう。

ト辻打になり、淸九郎、こなしあつて、向うへ入る。これより、鳴り物入りにて、伊達な唄になり、向うより甚平、着付け羽織にて、出て來る。後より權助、中間にて、頰かむり、生酔ひのこなしにて、ヒヨロ〳〵と出て來る。

權助　コレ〳〵、若い者、最前から、待て〳〵と呼んで居るに、なぜ待たない。

甚平　ハテナ、先刻から呼ばしやつたのは、わしが事でござりますか。

權助　オヽサ、見りやア、いゝ恰幅の若い者だが、わりやア何の用があつて、どこへ行くのだ。

甚平　妙な事を尋ねる折助どの。わしやア天神へ參詣する。それか何とぞしましたか。

權助　しましたか……しましたかとは、此奴イケぞんざいな。エヽ、いま〳〵しい男だな。

甚平　生酔ひの相手になるは、此方が馬鹿者。ドレ、天神樣へ參詣せうか。

ト構はず。本舞臺へ來ると、權助、待て〳〵と、云ひながら、ヒヨロ〳〵付いて來る。

權助　待て、野郎。身が道連れにしてやらうと呼ぶに、生酔ひとな。生酔ひと云へば、馬鹿にしやアがつて、うぬ、憎い奴め。コリや、手は見せぬぞ。

トひよろ〳〵として、反りを打つ。

甚平　ハヽヽヽ。此奴は飛んだべら坊だ。うぬが酒を喰つて面白いと云つて、おれが相手になるものか。殊にその赤鰯を捻くり廻して、何をしやアがるのだ。

ト突きのける拍子に權助、見事に中返りをして

權助　アイタヽヽ。こりやア武士を、投げたな〳〵。

甚平　なんだ、武士だ。鰹節が聞いて呆れるわえ。

ト構はずに、行かうとするを、「うぬを」と拔いて、切りかけるを、かい潜つて、襟首を捕へ、

甚平　こりやア危ない。すつぱ拔きでも、惡い酒だ。

ト又投げる。

權助　此奴、骨があつて面白い。

トかゝる。甚平あしらひ、鐺を返して、權助、動かれぬこなしあつて

權助　こりやアどうしやアがる。
ト あせる所に、下座より七內、これも生醉のこなしにて、出て來り、權助、動かれぬ體を見て
七內　やア、こりやア、おらが朋輩の權助を手籠めにする憎い奴。
ト 突き廻す。
權助　七內か。いゝ所へ來た。手傳つてくれ。もう生けては置かれぬ。
ト 跳ね返す。
七內　合點だ。
ト 双方より拔いてかゝるを、甚平、身をかはし
甚平　これはしたり、生醉ひが分じて來た。
ト ちよつと立廻りにて　脇差を引ツたくり、兩人を、さん〴〵に、打ち据ゑ
甚平　惡くそばへ居ると、兩人ともに物相の喰ひ上げだぞ。キリ〳〵うしやアがれ、
ト 脇差を抛り出し、兩人を突きのける。
七內　權助、敵はない。
權助　七內來い。
ト 手ばしこく、脇差を取つて、兩人向うへ逃げて入る。

甚平、こなしあつて
甚平　ハテ、何の役にもならぬ奴に、手間取つて
ト 揚弓の音になり、甚平、座うち拂ひ、行かうとする處へ、下座より三五右衞門、出て來り甚平と顏見合せ
三五　そちや、安宅の甚平ではないか。
甚平　さう仰しやるは八谷三五右衞門さま。思ひがけない、マア〳〵。これへ〳〵。
ト 茶屋の床几へ腰を掛けさせる。
三五　イヤ〳〵、心遣ひしやるな。其方に逢ひたく、樣子を聞いて、本所へ尋ねて參つたところ、この邊とあるゆゑ、幸ひ天神へ參詣がてら、後を慕うて參つた。先づは逢うて大慶々々。
甚平　誠に、一別以來と申しませうか、まだあなた樣が、御本國にお出でなされた時、お目に掛つた儘。して、矢張り只今にも、武州金澤のお家に。
三五　如何にも、運に叶ひ、段々立身いたし、この度殿の御用に付き、この江戸表へ參つたも、出入りの町人、槐屋久兵衞方より、卽ち菅家の色紙受取りの役目なれど、延引ゆゑに思はず逗留。
甚平　そんなら色紙は、あなたが受取りのお役目。ムウ。

ハテナア。

三五　それにつき、甚平、其方が古主、身共が爲には劍術軍學の師範なる、豆州三島の家中、正木兵太夫どの、息女おかつどのゝ儀につき、ちと密々に其方に。

甚平　ヤア、古主の嫡御、おかつさまの儀につき

三五　イヤ、苦しうない人に誘拐かされ、今は吉原の傾城と落ちぶれし樣子、存じ罷りあるかな、

甚平　御存じなれば、隱しませうやうはござりませぬ。兵太夫さまの御病死の後は、國元は益體。おかつさまも人に騙され、埒もなき御身の上。

三五　恩を忘れず、古主の息女、今に見捨てず世話いたす段、神妙なる其方、その儀もとくと承知して。

甚平　あなたも御存じの通り、以前は正木兵太夫さまの御家來。お國許のお城下にて、お供先の大喧嘩、相手三人を仕留め、直ぐにお仕置ともなるべき所を、御主人のお情にて、御知行に更へての御訴訟、不思議にも命助かり、お國を追放、それよりこの江戸へ出て、今は本所にて船方の請負ひ、安宅の甚平と人に知られ、渡世いたすもこれ全く、御主人のお庇ゆゑ。

三五　その兵太夫さまと、師弟のよしみある身共、この度の御用を幸ひ、折を得て其方に對面と、わざ／＼尋ねしも、コレ。

ト、懷中より財布へ入れし金を出し

甚平、役に立てゝくりやれ。

ト投げ出す。甚平、不思議さうに取上げ

甚平　こりや聢かに……この百兩の金は。

三五　サア、兵太夫どのゝ息女を、世話いたす其方、樣子を聞いて、貢ぎのその金。

甚平　こりや、あなたが。

三五　イヤ／＼、甚平、其方への志し。

甚平　それでは。

三五　ハテ、役に立つれば身共も喜び、仕合せと運に叶ひて、高知をも戴く三五右衞門、幸ひの金子、この後とても、遠慮に及ばぬ。

甚平　エヽ、有り難うござりまする。

三六　爰で逢うたは時の幸ひ、その志しを達せし上は、身共は旅宿へ。

甚平　して、あなたの御舍弟、五郎四郎どのは。

三五　存じの通りの惡黨ゆゑ、兄弟の緣を切り、勘當。一門とても久離の弟。江戸に居ると聞けば、出合ふとも、

必らず其方も。

甚平　ハテ、惜しい人柄。お心ゆゑに。

三五　イヤ、どうでろくでは果てまい。甚平、また重ねて。

甚平　左様ならば、三五右衛門さま。

三五　先づは、さらば。

ト唄になり、三五右衛門、こなしあつて、向うへ入ると、甚平、跡見送り

甚平　てゝ、思ひ掛けない、誠ある、三五右衛門さま、この金を。

ト戴き

あなたの弟御は大の悪黨、勘當受けてこの江戸に、徘徊するとあれば、ムウ……この程三平に出合ひ、取つた手紙の宛名は、やつよりとしてあるが、色紙の詮議と、心を附くるに、いま三五右衛門さまの苗字は八谷。その弟の五郎四郎、矢張り八谷の八の字はやつ。ムウ。そんなれば、あなたへの義理、おれが手柄は、色紙の詮議より、こりやとつくりと思案して。

ト思ひ入れあつて

それよりはマア、今日來てござる松山さまに、この金の様子を云うて……イヤ／＼、三五右衛門さまと、いうても、小さい時の事、知つてはござるまい。それと云はずに、ドレ、喜ばせませう。

ト宮神樂になり、甚平、こなしあつて、下座へ入る。向うより、三平、着附け羽織、大小にて、箱入りの茶碗を持ち、義兵衛、道具屋にて後より附いて出る。

義兵　三平さま／＼、雪の下の茶入れを、お拂ひなされますか。

三平　いかにも、身共所持のこの茶入れ、惜しくは思へども、浪人の活計に迫り、その上、この頃より瘧を煩らひ何かに不都合、誠に寶は身の差合せ、是非なく其方に、賣り拂ふつもりで、これへ持つて來たて。

義兵　ほんに、あなたは瘧を病んで、ござると聞きました。さぞ御難儀でござりませう。時に、茶入れは此方に望み手もござりますれば、一先づ、とつくり改めて見ませう。

三平　正眞正銘に違ひない、この雪の下の茶入れ。とくと改めて、急に金を渡してもらひたい。

義兵　成る程、世に稀れなる雪の下。捨賣りにして百兩道具。

ト云ひ／＼、紐を解き、茶入れを出して、とつくりと見て

義兵　成る程、世に稀れなる茶入れ、この藥のあんばい、下繪の面白さ。こりや、誰れが見ても正眞に違ひござりませぬ。

三平　いよ〳〵、百兩にならうか。

義兵　なる段ぢやアござりませぬ。望み手は、武州金澤の御家中、この湯島に來てござるとの事なれば、お目に掛つてとつくりと、相談いたしませう。

三平　然らば茶入れは、義兵衞、其方に、しつかりと預け置くぞ。

義兵　大事の代物、慥かに預かりました。

三平　ア、コレ、今日は瘧り日ぢやが、どうか影がさすやうだ。幸ひ、身が、かゝり居る醫者は池の端。ちよつと行つて見てもらはう。

義兵　そんなら、私しは、この茶屋に待つて居ります。

三平　ムウ。……さうし召され。さらば行つて來よう。

ト唄になり、三平、下座へ入る。義兵衞、茶入れの箱を持つて、茶屋の内を覗き

義兵　どうだな。變る事もないか。イヤ、植木屋の義兵衞ぢや。

ト云ひ〳〵茶屋の内へ入る。てんつゝになり、文藏、植木屋にて、鉢植、石臺の荷を擔げ出て來る。荷を下ろして、あたりを見て

文藏　嬉しや、まだ、おしづさまは見えぬさうだ。今日この天神へ、親子連れで來るとの事。それで商ひもそぞろ早うして、顏を見ようと來たゆゑ、ヤレ〳〵草臥れた。次手に、跡の緣日に約束した石臺の梅、奧の茶屋、千代本へ持つて行かずばなるまい。花を爰に置いて、云ひ交したおしづさまに、逢ふ緣も千代本、まつさきかけて梅の石臺。やがて明かし會ふ心の奧の……ドリヤ、茶屋へ持つて行てこうか。

ト宮神樂になり、文藏、石臺を持ち下座へ入ると、向うより、久五郎、羽織袴、音次、鳶の者の形にて連れ立つて來る。

音次　若旦那、お前は、どれへお出でなされます。

久五　どこと云うたら、色紙の事で、大方江戸中を駈け歩いて居るわいの。

音次　ほんに、その色紙とやらは、葺屋町の芝居で、喧嘩を仕掛けられ、取られてしまはつしやりましたとやら。エ、殘念な。其お供に、わしが行つたら、何奴も、此奴も毆り廻して、ムザ〳〵と取らせはしまいものを。そ

れを聞いて今にこの腕が、ブル〳〵致しますわい。

久五　日頃出入りの仕事師の音次、さう思うてくれるは嬉しい。さうしてわが身、何の用があつて、この湯島へ。

音次　イヤ、御新造様が來てござるゆゑ、お迎ひがてらに參りましてござります。

久五　そんなら、兄嫁御のお松どの、そりやマア何の用で。

音次　何の用か、わたしは、存じませぬ。

久五　アノ知らぬか。

ト心にて思ひ當る事ありて

今日この湯島の伊豫屋で、金澤の御家中を振舞ふ事は、兄久兵衞どのも御存じ。それに思ひ掛けなう、兄嫁御が爰へ出て見えるは、こりや淸九郎が、日頃云うたに違ひない、この久五郎には、と思ふもどうやら自惚らしいが又氣を附けて見れば、その氣がないでもないやうに見える。

音次　申し、そりやア何が見えます。

久五　ヤ、この湯島の化け銀杏が、此方の方から見えるといふ事イなう。

ト合ひ方になり、濟まぬこなしにて、音次を連れ、舞臺へ來る。下座より、おまつ、作兵衞を連れて來る。

まつ　久五郎さん、今お出でなさんしたかえ。

久五　ホ、これは兄嫁御。

トつんと云ふ。

音次　御新造樣、お迎ひに私しが、參りましてござりまする。

作兵　コレ〳〵、久五郎さま、最前から待ち兼ねて居たがなぜ隙を入れて來たぞいの。

久五　會津屋作兵衞との、待ち兼ねて居たとは、私しに何の用がござりまする。

作兵　御用どころか、兄御久兵衞どのと相談して、わしが仲人で、こなたの嫁と呼ぶ、その嫁と、今日見合ひをささうと、この天神さまへ來て居るのぢやわい。

久五　そんな事は存じませぬ。見合ひよりは居合ひを拔いて、齒磨でも賣つたがようござります。馬鹿らしい。

トむつとする。

作兵　コレ〳〵、お松どの、ありやどうしたものぢや。あれでは、濟まぬぞや。

まつ　サア〳〵、ようござります。わたしがとつくりと申しまする。

作兵　申さにや、この作兵衞が、先樣へ立ちませぬわいの。

まつ　ハテマア、わたしに任せて、默つてお出でなせんせいな。

ト作兵衛をなだめ久五郎に向ひ

申し、久五郎さま、そりやどうしたものでござりまする、こちの人と、作兵衛さまの御相談で、本郷の田川壽德といふお醫者樣の娘御を、お前の嫁に極める爲の、今日の見合ひ、この事もこちの人が、お前にお話しもあつたぢやござりませぬか。兎角、松山どのゝ事ばつかり思はずと、ちつとは又内の事や、世間の義理を思うても御覽じませいなア。

久五　どうでも、淸九郎が云つたに違ひはないわいの。

まつ　マア、淸九郎始め、わたしが云うたに、なんの違ひはあるものか。皆あなたのお爲。

久五　ア、、悋氣なら、よしにして下さりませ。

まつ　アレ、なんのわしが、悋氣。こりや、あなたへ意見ね。

久五　イヤ、女子の意見は矢ッ張り悋氣。たとへ、にさへ、兄嫁水に溺るゝとも、手を取るなといふ事もござりまする。それにマア

まつ　マア、松山どのゝ事を云ふと、兎角其やうに。

ト作兵衛や、音次の手前、氣の毒なこなし、神樂になる。

まつ　蔭間の大寄せ。人が知らぬかと思うても、何もかも、よう知つて居りますぞえ。

ト此うち作兵衛、向うを見て

作兵　アレ〳〵、向うへ壽德どのや、娘御が、爰へござるわいの。

まつ　ナニ、壽德さまが。

作兵　見える〳〵。爰へござる程に、マア、久五郎どのもお松どのもその床几に。音次、てまへも共々。

音次　作兵衛さまが、氣を揉んでござる。マア〳〵お二人樣。

久五　なにを。人に合點もさゝず、見合ひどころか。

まつ　コレ、作兵衛さまの、手前もあり。さう云はずと。

ト久五郎の手を取る。

久五　エ、、嫌らしい。

ト振り切る。

まつ　なんの、わたしが。

ト少しムッとする。

作兵　アレ、もう爰へござつたぞ。



作音　サア〳〵、マア、床几へ。

ト作兵衛、音次、無理に、久五郎、おまつを下の腰掛けへかけさせる。三味線入りの神樂になる。向うより壽德、括り頭巾、十德にて、杖を突き、おしづ、振り袖娘の形り。おとよ、下女にて供に附き、三人出て來る。花道にて、壽德、作兵衛と顔見合せ、おしづ、こなしある。おしづ、不承知のこなしにて、おとよと顔見合せ、おとよ、宥めるこなし。壽德、おしづが手を取り無理に舞臺へ來て、作兵衛にこなしあり、上の床几へ腰を掛ける。此うち久五郎、ムッとして居る。おまつ、マアおしづを見よと仕方をする。久五郎構はず、脇を見て居る。壽德はおしづに、久五郎を見いと教へる。おしづ、扇にて顔を隱して、これも脇見する。おまつ、壽德、氣の毒なるこなし。作兵衛も兩方へ心遣ひあつて

作兵　ハ、、、、、。ア、今日はよい天氣でござります。

まつ　左樣でござりまする。

壽德　この湯島は、いつでも賑はしうござります。

ト思ひ〳〵極まらぬ心意氣よろしくある所へ、下座より、文藏、出て、眞中へズッと出て、おしづを見て

文藏　ヤア、おしづさま。

しづ　文藏さん、お前に。

ト、床几を立たうとして

サア、お前も天神樣へ參らしやんしたか。

文藏　アイ、參りました。最前から、もしや遅しと參つてほんに首の長うなる程

ト、壽德を見て

旦那、鷺草をお召しなされませぬか。

壽德　オヽ、誰れぢやと思うたら、出入りの植木屋、文藏か

文藏　ハイ、よう御參詣なされましたなア。

ト始終、おしづへこなしある。おしづ、文藏、心意氣あつて

しづ　わたしもどうか斯うかと、それは〳〵案じたが、マア、顔見て落ちついた。ナウ、おとよ。

とよ　左樣でござりまする。今日この天神樣へお出でなさるゝ樣子を、先達て、イヤ、先樣へお知らせなされたでござりませうな。

壽德　オヽ、知らせいでならうか。諸事はアノ作兵衛どのの媒介。いま顔見て落ちついた。さては娘が

ト久五郎が方を見て

氣に入つたさうで、おれも嬉しい。
ト喜ぶ。おしづ、エ、さうではないと、こなし。久五郎もこなし。
久五　申し、お松さま、伊豫屋で皆待つてござれば、わたしはもう、行つてもようござりませうな。
まつ　ハテ、さう素氣なう云はずと、爰でマア一服、ナア皆樣と一緒に。
壽徳　コレ〳〵、さう急かちにせまい。なんというても大事の事ぢや。マア〳〵、とつくりとな。
トおしづの方を教へ
見たがよい。
久五　これは又、迷惑な事ではある。
ト不承々々に又、莨をのみかける。此うち文藏、兩方へ、心を附け、手を打つて
久藏　ハヽア、聞えた。こりやアこの間から噂のある、おしづさまの御緣組み、今日爰で見合ひといふやうな事でござりまするかな。
トむつとする。
とよ　アイ、それでおしづさま、お前も。イヤ、お前方から、ソレ、知れてある事ぢやわいな。

久藏　そりやマア、アタおめでたい事でござりますな。
壽徳　出入りの文藏、今度娘が緣組出來れば、重疊々々。
久藏　なんの喜ぶどころか、腹が立ちます。
壽徳　ヤ。
久藏　イヤサ、鉢植を御覽じませ。
ト植木荷を前へ持つて來る。下座へ、松山出て、久五郎を見て、こなしあつて、後の茶屋へ上がり、手を叩く仕方して招ぐ。久五郎、後を見て振りむき松山を見て
久五　ヤア、松山か。
ト立ちあがる。
音次　コレ、若旦那。
ト引留める。
まつ　申し、久さん、松山とは。
久五　イヤ、松山ではござりませぬ。ソレ、あの松な。松の鉢植、なんと見事ぢやござりませぬか。
まつ　ほんに、松も見事ぢやが。
トおしづへかけて
また可愛らしい、梅の鉢植。いゝ匂ひ。こりや根曳の松より、内で眺めるは、石臺の梅より外はござりますま

い。ナア、作兵衛さん、なんとよからうぢやござりませぬか。

作兵　オヽ、成る程、よしの〳〵。

音次　ハテ、こりや梅の事でござりまする。

作兵　そんなら、松田々々。

文藏　マア、その松田の梅を接木にして、この鉢植、一つは愚か、八重に咲かさうと、それは〳〵、いろ〳〵と手入れしたのに、こりやマア、枝が枯れかゝつたわいの。

しづ　イヤ〳〵、どこに枯れかゝつてある。とつくりと見やしやんせ。まだ蕾のうちから、いつ咲いたやら咲かぬやら、知れぬこの石臺。たとへ仇な嵐が吹いて散るとも外へ靡かぬ、只一重との花の心。

文藏　それが幹なら、曲げてもらひたい。

壽德　イヤ、此方の文藏、防風はいくらするぞ。

文藏　こりや、鉢植へ植ゑる、餘所の誂らへでござりまする。

壽德　ハテ、殘り多い。防風は、俳諧にさいたつまといふ。親のさいたつまのその眞中に。コレ〳〵、玉椿の八千代までと變らぬ娘が縁組み、こりや幸先がよくて面白いわいの。

ト腮を枝にもたせて見る。

しづ　イエ〳〵、なんぼ父さんがよいと云はしやんしても、わしやさいたつまより、此方の東菊がよい。ナウ、おとよ。

とよ　何にも云はぬ色なる、山吹になされませいなア。

ト此うち、久五郎、松山、仕方こなしあるを、おまつ松山を見て、わざと知らぬ振りして

まつ　モシ、久五郎さま、そりや何をなされますぞいなア。

久五　サア、これは。

ト手を振り廻はしてゐる。

まつ　何を葵の花の、アノ葉隠れより、美人草が咲きかゝるゆゑ、此方の藤が、その松に、よれつもつれつ、アヽ見苦しい。爰はコレ海棠同然、人目もあれば、マア、チツとしてござんせいなア。

久五　南無三、鬼薊に角が生えた。

文藏　角ぢやござりませぬ、こりや躑躅。

しづ　岩手の山の、エヽ、わたしや何にも岩つゝじ。

音次　諸事は、コレ、すみれ〳〵。

ト胸を敎へ

爰にある。

　ト菫を見せる。
久五　ハテ、其方は菫でも、此方は肝心の櫻草が。
まつ　ハテ、彼岸には咲きまするわいなア。
　トとめる。
久五　ちよつと雪の下も叶はぬか。
壽德　娘と連理、相生の。
文藏　イヤ、この鉢植より兎角、庭木の
しづ　必らず八重九重に
壽德　ア、その梢とは見えねども
まつ　どうやら、櫻は花に。
　ト此うち、松山、いろ／＼あつて、紙を丸めて久五郎へ當てる心にて抛りつけ、下座へヒンと入る。
作兵　アイタ、、、。
　ト皆々恟くり。
まつ　作兵衞さま。
とよ　なんとなされました。
　ト作兵衞、右の紙を摘みあげ
作兵　イヤ、これは紙礫であつた。
音次　仁王と間違へたのか。
まつ　先づ、當るとはめでたい。

壽德　奥の茶屋で互ひにお近附に、ナウ、作兵衞との。
作兵　それが肝心。お引合せ申されい。
壽德　左樣ならば
まつ　先づ、あなたから
壽德　そんなら娘
　ト此うち、おしづ、文藏、こなしある。互ひに仕方してゐる。
　コレ、おしづ。
　ト高う云ふ。
しづ　エ、。
　ト恟りして
　父さん、なんぢやぞいなア。
壽德　奥の茶屋へ行かう。サア、おぢや。
しづ　イエ／＼、わたしや、矢ッ張り爰に
壽德　ハテ、お近附きにせにやならぬ。マア、おぢやいの。
　ト手を取る。
まつ　サア、久五郎さんも。
久五　ハイ／＼、お先へ參りまする。
　トちよつと唄になり、久五郎、構はず先へツイと入る。
まつ　ホ、、、。あれ御覽じませ。

壽徳　イヤ、どこも面伏せゆゑ
三人　恥かしいもお道理。
　ト始終この間おしづ、文蔵へこなしあるた
壽徳　サア、おぢや。
しづ　エ、ゝつんとモウ。
　ト唄になり皆々こなしあつて下座へ入る。文蔵一人殘り、うつとり跡を見送る。
文蔵　なんのこつた。鳶に油揚を渫はれたやうだ。併し、おしづさまの心が、今の様子では、あながち嫁入りする心でもないが、ぢやと云うても、父御の壽徳さまが、侍ひの果て、大の堅造。もうこの事が知れては、おれが手討ち……なんの、戀ゆゑ殺されたら本望。こりや覺悟せにやならぬわいの。
　トこなしある所へ、おとよ、走り出て
とよ　申し／＼、文蔵さん、まだ爰に居やしやんすか。
文蔵　おとよさま、コレ、待ち兼ねて居た。様子はどうぢや。嫁入りの話しは、破れたか／＼。
とよ　イエ／＼、本極りに極まつた。この月二月十日に、おしづさまは、いよ／＼椀屋の内へ嫁入りぢやわいなア。
文蔵　ヤア／＼、そんなら、この月の十日の晩に、嫁入りと極まつたか。
とよ　旦那さんもその心意氣。先の女中も、仲人の作兵衞さまも、みんな承知して、しつかりと極まつたわいなア。
文蔵　極まつたとは、こりや大變。
とよ　わしやこの様子を、ちよつとお前に知らせに來た。また後の様子を聞いて來る程に、爰に待つて居やしやんせい。必らずどこへも行かしやんすなえ。
　ト下座へ入る。跡にて文蔵、いろ／＼こなしあつて
文蔵　嫁入りはこの月の十日と、日まで極まつた上は、どう跪いても焦つても、もう叶はぬ。こりやマア、どうしたらよからうしらぬ。
　ト合ひ方になり、投げ首してヂッと下に居る。下座バタ／＼にて、おしづ、走り出て
しづ　嬉しや、文蔵さん、そこに居やしやんすか。コレ、わしや、どうせうぞいなア。
　ト取り附き泣く。
文蔵　おしづさま、様子は聞きました。椀屋へ嫁入り、この月の十日と極まつた上は、この文蔵は今さら、どうも仕様がござりませぬわいの。
しづ　仕様がないと云うて、お前、濟むかいな。

文藏　澄むか、濁るか、胸は眞ッ暗闇の
しづ　それでは、これまで、物堅い父さんの目顏を忍び、云ひ交したは皆無駄事。殊に二世まで變らぬといふ、起證まで書いて、取交した仲ぢやないかいなア。
文藏　サア〳〵、それぢやによつて、この文藏は、覺悟極めて居りまする。
しづ　わしもその通り。なんのお前を退けて、外へ嫁入りを。
文藏　マア〳〵、それでも最前見た椀屋の息子は、わしらと違つて色男。お前、矢ッ張り嫁入りしたからうがな。
しづ　さういふ氣なら、わしや苦勞はせぬわいなア。
文藏　そんなら、どうする氣ぢや。
しづ　サア、連れて退いて下さんせ。
ト立ちあがり、手を取る。
文藏　エ。
しづ　ハテ、どこへなりとも行て、添はれるだけは添ひ通し、叶はぬ時は、死ぬが高。
文藏　それに違ひはないか。
しづ　斯ういふ間も、人が來れば惡い。サア〳〵、早う早う。

文藏　駈落ちとは面白い。いつちいゝ料簡。承知しました。
おしづさま、爰から直ぐに
しづ　駈落ちするのかえ。
文藏　サア、駈落ちぢやが、駈落ちするに、さうゾベ〳〵とした形ではいかぬ。サア〳〵、斯う裾を端折つて
トおしづが上着をグッとからげて
幸ひ、爰に杖も二本あり
ト一本渡し、また手拭を出し
この手拭を斯う冠り、顏の見えぬやうにするのぢや。
トおしづ、不器用にかぶり、杖を突き
しづ　サア、どこへ行かうぞいなア。
文藏　どこというて當はないが、サア〳〵、そこらの方へ。
しづ　斯う、行くのかえ。
トこれより三味線入りの神樂になり、おしづ、先に文藏、東の花道へ行く。
文藏　斯う二人連れで、俄に駈落ちせうといふ事は、この湯島の天神樣も御存じあるまい。
しづ　なんの愚痴な。わしやお前と二人連れで駈落ちするのは嬉しいわいなア。
文藏　なにを。とても駈落ちするなら、二人ともに、形も

立派で揃ひにして、柳橋に語つてもらふもの。
しづ　ほんに、昔からの淨瑠璃にあるは、こんな事であらうわいなア。
文藏　お前も本郷の娘御の方ぢや。
しづ　こちや、どんな浮名が立つても構やせぬぞえ。
ト兩人歩き〱此せりふにて、中の間を一遍廻り、西の花道に上がり
文藏　もう爰まで來れば、追手の氣遣ひはあるまい。
しづ　さぞ父さんやおとよが、尋ねて居るであらうわいなア。
ト本舞臺へ來て
文藏　もう爰は、どこだしらぬ。
しづ　ほんに、餘ツぽど歩いたわいな。
トそこらを見廻はし
しづ　申し、文藏さん、爰は矢ツ張り、湯島の天神樣ぢやわいなア。
文藏　何を滅相な。天神樣であらう。
トそこらを見て
ほんに、矢ツ張りこりや湯島ぢや。
しづ　そんなら、今歩いて來たのは

文藏　さては裏門を、グルリと廻つて來たのぢやさうな。
しづ　エヽ、なんのこつちやぞいなア。よい〱。いつそこれから上方の方へ駈落ちせう。サア、ござんせ〱。
文藏　サア〱、そりや惡い。女子は滅多に上方へは行かれぬ。コレ、關があるぞいなア。
しづ　氣遣ひさしやんすな。咳には父さんが調合の、ツイ攄る練り薬が
文藏　馬鹿らしい。その咳ではない。箱根の關所があるわいの。
しづ　イヽエ、石菖は、慥かお前の荷にあつたわいなア。
文藏　これは情ない懐子ではあるぞ。
しづ　お前と駈落ちして、晩の泊りが樂しみぢや。サア、ござんせいなア。
文藏　サア〱、思案して見れば、路銀の當てもなし。こりや何もかも、とつくりと用意してから、駈落ちせうではあるまいか。
しづ　エヽ、男に似合はぬ、未練な事を。路銀がなうても大事ないわいなア。マア〱、ござんせいなア。
文藏　お前と上方へ行くのに、肝心の切手が無ければ、關所で留められて、また後へ戻つて、江戸へ歸らねばなら

ぬわえ。
しづ　そんな事ばかり。そりや道中双六の事かえ。
文藏　さういふ事ばかり云うて。こりや心元ない。もう駈落ちはやめぢや。
しづ　それでは、わしや嫁入りをせにやならぬぞえ。
文藏　成る程、さうぢや。矢ッ張り駈落ちせにやならぬわいの。
しづ　サア、ちやつとござんせいなア。
文藏　マア、待つたり〳〵。幸ひ〳〵。
ト我が杖を立てゝ見る。下座の方へ轉ける。
文藏　コレ〳〵。この道へ行けと、杖の知らせの占方。
しづ　そんなら、この道へ早う。
文藏　合點ぢや。此方へ。
ト合ひ方になり、おしづが手を引き、文藏、下座へツイと走り入る。下座バタ〳〵にて、松山、久五郎を引立て出る。これを波の戸、おたきおさき傳吉、皆々止めながら出て
波の　松山さん、道理ぢやが、マア〳〵、待たしやんせいなア。
松山　イエ〳〵、わたしや、もう〳〵腹が立つて腹が立つて、どうもかうもならぬわいな〳〵。
久五　これはしたり、皆が止めるではないか。殊に今日の見合ひも、おりや思ひ掛けない事、たとへ兄貴がどのやうに云はうとも、兄嫁が勧めやうが、どうマア其方を退けて、外に女房を持つ、久五郎ではないわいの。
松山　マア〳〵、口では其やうに立派に云はしやんしても美しい最前の娘御、矢ッ張り女房に持つ心であらうがな。
久五　ハテ、疑ひ深い。おれも男だ。たとへ天人が楊貴妃に化けて來ても、びくともせぬ心ぢや。
松山　さう云うて、わしを騙すのぢや。
久五　なにを……騙すは其方の商賣。此方は騙される方ぢや。
松山　そりやどうして。
ト胸倉を取るを、何をト振り放す。松山、また取りつくを、久五郎逃げ歩く。皆々、ドヤ〳〵にて、ト久五郎、下座へ逃げて入る。松山、追ひかけて入る。皆皆、申し〳〵ト付いて入る。三味線入りの神樂になり、下座より、文藏おしづ、杖に縋り、せい〳〵と片息になつて出て、草臥れし體にて
文藏　マア、モウ〳〵堪へられぬ。休まねばならぬ〳〵。

しづ　わたしや息が切れる。アノマア坂は、大さうな坂ぢやが、なんといふ坂ぢやぞいなア。
文藏　なんといふ坂か知らぬが、怪しからぬ難所ぢや。
しづ　さうして、爰は峠とやらいふ所か。マア〳〵、向うに茶屋があるわいなア。
文藏　茶屋があるとは嬉しや。そこへいて一休み。
トあたりを見て
ヤア〳〵、茶屋がある筈ぢや。矢ッ張り爰は元の湯島ぢやもの。
しづ　エ、そんなら今登つた坂は。
文藏　エヽ、さては女坂から男坂へ廻つて來たのぢや。
しづ　そんなら矢ッ張り、湯島のうちぢやなア。
文藏　こりや馬鹿らしい。
ト兩人こなしあつて、ベツタリと下に居る。此うち、久五郎、下座より逃げて出て、ちよつと様子を聞いて居て、此うち
久五　間男、見付けたぞ。
ト兩人「エヽ」と恟りして
しづ　お前は久五郎さん。
文藏　そんなら、二人が様子を。
久五　最前の、植木盡しでも、合點がいかぬと思ひしが、果して二人、不義してゐた。
文藏　イヤ、それは。
しづ　大事ござんせぬ。文藏さん、斯うなつた上は隱す事もないわいなア。申し、久五郎さん、わたしや文藏さんと云ひ交したは、まだ嫁入りの相談のない先からの事でござんすわいなア。
文藏　成る程、さうぢや。爰が腰の据ゑどころ。申し、久五郎さま、なんぼ相談はあつても、あの子はお前へ嫁入りは嫌ぢやさうな。お前も聞けば、吉原に松山といふ、深い色のある事。こりやいつそ變替へして、去つて下さりませ。さうすると、わしは首が落ちても添ひ遂げます。それが不承知、嫌なら、間男にして、どうなりと勝手次第にさつしやりまし。
しづ　わたしとても、覺悟極めて居るわいなア。
久五　さう二人ともに手強く云へば、おれも椀屋久五郎、男が立たぬ。間男の成敗、二人を重ねて置いて、引け四ツに名代取つたと思うて、いゝワ、料簡してやらう。
兩人　エヽ。
久五　おしづさま、文藏さま、よう色事してくれたなア。

しづ　そんならお前、堪忍して
文藏　此おしづさまの事を
久五　思ひ切つた……おれはサラ〳〵初めから、女房に持つ氣はないが、今日見合ひして、この二月十日に嫁入りと、しつかりと極まつた上は、今さら壽德さまや、こちの兄貴が、得心せまいが、そこはどうせう。
文藏　成る程、そこもあるわいなう。
しづ　どうぞ、父さんや兄貴さんが得心さしやんすやう
三人　こりや好い思案がありさうなものぢやが。
トめい〳〵、こなしあつて思案する。この前より、後へ大藏出かけ、樣子を聞いて居て、この時
大藏　その思案貸してやらう。
ト前へ出る。三人「エヽ」とこなし。
久五　お前は小泉大藏さまよ。
しづ　いゝ思案を貸さうとて、
大藏　身が屋敷へ出入りの久五郎、殊に今日の振舞ひ、常常の懇意といひ、樣子を聞いたが、兩方互ひに不承知の緣組み。それに又、女房持つては、松山へも、濟むまい濟むまい。文藏とやらも、この娘が死ぬる程思ひ詰めて居るうち、無理に引分けても殺生。そこで身共が料簡に。

三人　どうでござりまするな。
大藏　ハテ、その嫁入りの晩に、文藏、其方が侍ひになつて、梳屋の內へねだり込む。
文藏　わたしが侍ひになつて、梳屋の內へねだり込むとは。
大藏　そこぢやて。先づわれが云はうには、身共は何の何某といふもの、卽ちあの娘のおしづとは、二世までも云ひ交はして居るに、その男のあるものを嫁にとるとは、不義間男ぢやとねだりかけるぢや。
しづ　さうして、どうするのぢやえ。
大藏　そこで久五郎が、そんな淫らな者を女房に持つては世間へ濟まぬ、さつぱりと去ると云ふワ。
久五　去らにやならぬ〳〵。
大藏　なにか、かゝかせ物をせられたゆゑ、なんぼう堅い兄の久兵衞も、グウとも云ひ分は無い。去つてしまうたその跡は、娘の親に詫び事して、ツイそれなりにヅル〳〵ベツタリ。なんと夫婦になられやうがの。
久五　そこで、おれは松山を身請けして女房にする。
しづ　わたしは世間晴れて、文藏さまに添はれるなア。
文藏　兩方よしの上思案。
大藏　なんと、生きた文珠であらうが。

三人　南無文珠大菩薩。

ト拝む。おしづ、こなしあつて

しづ　ほんに、此やうな嬉しい事はないわいなア。

久五　文蔵、嫁入りの晩に、いよ〳〵侍ひになつて来るか。

大蔵　とつくりと侍ひになつて行かざなるまい。

しづ　文蔵さん、お前、合點かえ。

文蔵　そんな事は、やるものではない。先づ……この家の舍弟久五郎に逢うて、對面せうかいなぞと、くらはすぢや。

久五　これは〳〵、見馴れぬお侍ひ。お前は、どなたでござります。

文蔵　拙者は、てれ突天五右衛門と申す浪人者でござる。

ト皆々顔見合せて

四人　ハヽヽヽヽ

ト笑ふ。向うより、七内、走り出て

七内　お旦那、これにござりまするか。先程より、三五右衛門さまか、何やら御内談があると、伊豫屋にお待ち兼ね。ハイ、只今お越しなされますか。

大蔵　ナニ、内談とあらば、行かずばなるまい。

久五　ほんに、清九郎番頭に任せて置いて、まだ顔出しも致しませねば、私しも伊豫屋に。

大蔵　イヤ〳〵、身共が行けば苦しうない。久五郎、お身は跡から、何か文蔵と云ひ合はせもあらう程に、とつくりと片付けて、ゆるりと来やれサ。

久五　そんなら、左やう致しませう。

しづ　ほんに、あなたのお庇、有り難うござりまする。

大蔵　なにサ、まだ智恵がいるなら、何時なりとも。ハヽヽ。サ、七内、參れ。

ト唄になり、大蔵、七内を連れ向うへ入る。

久五　マア〳〵、これから、松山が一件、身請けもせねばならず、女房に持たねばならぬ。こりや、いかう忙しうなつて来たわいなう。

しづ　そして、わたしや、いよ〳〵この月の十日に、嫁入りして行くのかえ。

大蔵　ハテ、その晩に、おれが侍ひになつて行て、連れて戻るわいの。

久五　まだ五七日間があれば、とつくりと云ひ合せて

しづ　マア、それまでは。

文蔵　何事も人に知られぬやうに。

しづ　父様のお側へ。

文藏　送つてやりませう。

ト手を引く。

久五　エ、睦まじい仲ぢやなア。

しづ　オ、恥かし。

ト唄になり、おしづ、こなしあつて、文藏、手を引き合うて下座へ入る。久五郎、殘り居る所へ、松山、しどけなく走り出て

松山　久さん、お前、そこに居やしやんしたな。

久五　南無三、又來たか。

ト逃げようとするを、引止める。

松山　イヤ／＼、どこへもやりはせぬぞえ／＼。

久五　狂人の相手になる事は嫌ぢやわいの。

松山　どうしてわたしが狂人ぢやえ。

久五　狂人であるまいか。おりや女房は持たぬと云ふに、矢ツ張り疑うて、おれを苛める。狂人ではあるまいか。

松山　そりや嘘ぢや。わしを騙すのぢや。

久五　エ、これ程云ふのに聞分けのないどう畜生。おりや、われゆゑ大抵心遣ひをしてゐる事ではない。それを思ひやらぬ、なま傾城め。

ト腹を立ち、側にある莨盆を、抛りつける。

松山　こりや、お前の惡性を紛らす、いつもの癇積ぢやなア。

久五　オ、癇積ぢや／＼。腹を立てりや、どうしようやら、知れぬぞ。

ト滅多無性に手に障る物を抛りつける。

松山　さうさしやんすりや、わたしも負けて居ぬわいなア。

トこれより互ひに投げ打ちになる。此うち、上の茶屋より義兵衛出掛け、これを見て、最前の茶入れの箱より茶入れを出し別々にソツと置く。久五郎、松山、拍子にかゝつて右の茶入れの箱に掛り。合ひ、トゞ茶入れを取つて打ちつける。微塵に割れる。この時、義兵衛ズツと出て

義兵　面妖な。こりや預かりの大切な茶入れの箱、爰にどうして

ト云ひ／＼割れし茶入れを見付け

義兵　ヤア／＼、こりや雪の下の茶入れ。ヤア、粉微塵になつた。

ト大きに愕りうろたへ

サア／＼、大事ぢや／＼。オ、こりやどうぢや。

ト呆れて下に居る。久五郎松山心付き、顏見合せ、ひ

よんな事をしたと氣の毒なるこなし。神樂になり、下座より、三平、出て來て

三平　ヤレ〱、義兵衛、さぞ待ち兼ねてお居やるであらう。ツイ一服話しが長くなつて、思はず手間が取れた。して、いよ〱雪の下の茶入れを、百兩に賣り拂ひ、代金を受取り召されたか。

義兵　ヤア、三平さま。あなたに預かりの大切な茶入れは。

三平　どうだ、氣に入つたか。身共も火急な金子の入用。早く〱安否が聞きたい。

義兵　サア、その雪の下の茶入れは、コレ、この通り。

ト割れたを見せる。三平、恟りして

三平　ヤア〱、大切な茶入れ。

義兵　この通りに毀れました。

三平　ドレ〱。

ト取つて見る。

素町人めが。

ト義兵衛が首筋を取つて引附け

ヤイ、コリヤ、身が命にも更へぬ大切な所持の品なれども、金子の手支へ是非なくも、其方へ頼み、今日百兩に賣り拂ひくれと約束、最前其方に、しつかりと預け置いたぞよ。

義兵　サア〱、御尤も、お道理でござりまする

三平　ナニ御尤も、道理。コリヤ、身共は今日中に金子百兩。無ければならぬ義理づめ。それゆゑ賣り拂ふ命の綱のこの茶入れ、毀れた上は、うぬを手に掛け、身共も腹切る。エヽうぬ。

ト義兵衛を突き放し

サア〱、それへ直れ。眞ツ二つだ。

トきつとなり反り打つ。此うち久五郎松山、いろ〱思ひ入れ、こなしあつて堪へかね

久五　申し、お侍ひさま、マア〱、お待ちなされて下さりまし。

ト留める。

三平　若い者、そちやなぜ留める。

久五　サア、最前から段々樣子を承りましたが、あんまり氣の毒さに申しまするが、あの茶入れは私しが、毀しましたのでござりまする。

三平　ヤ、ヽヽ。なんと。

ト義兵衛、立ちあがり

義兵　若い者、そんならこの茶入れにて。

久五　ハイ爰にあつたを思はず知らず、ツイ怪我の張合ひで
松山　わたしが麁相、もう堪忍して上げて下さんせいな。
義兵　申し、三平さま、お聞きなされましたか。
三平　いかにも聞き届けた。
義兵　それで、この義兵衛も、身晴れは立ちました。
　ト三平、こなしあつて
三平　ムウ。見れば傾城を連れた大盡さうなが、ツイ怪我の張合ひで、大切な茶入れを打毀した、堪忍してくれいか。
久五　サア、麁相と云うて、この上の麁相はござりませぬ。
三平　成る程、堪忍いたさう。
久五　そりや有り難うござりまする。
三平　サア、金。
　ト手を出す。
久五　金とはナ。
三平　イヤサ、百兩受取らう。
久五　エ、、。
　ト悔りこなしある。

三平　サア、身共が命に更へる金の才覺に、今日賣り拂ふ百兩の、茶入れを打毀したからは、金出す氣であらう……ぢやによつて、料簡して金受取らう。
義兵　こりや、三平さまの仰しやる通り、百兩の代物をぶち毀したからは、金出さにやなるまい。殊に見りや、百兩二百兩出しかねぬ大盡風。
久五　サア、爰は途中、その金が。
三平　無ければ、毀した茶入れを、元の通りにして返すか。
久五　サア、それは。
三平　但し、金を渡すか。
久五　サア。
三人　サア／＼／＼。
三平　エ、面倒な。いつそ、うぬを剝いで
　ト久五郎を引きつける。それはト寄るを、義兵衛、隔てゝ立廻る。此うち下座より甚平ツカ／＼と出て、義兵衛を取つて投げ、三平を突き廻し、久五郎を圍ひ
甚平　ソレ百兩。
　ト投げ出す。
皆々　ヤア、これは。

甚平　久五郎さま、何にも云はず、その金渡してしまはつしやりませ。
松山　そんなら甚平、この金は最前ちよつと。
甚平　ハテ。
　ト顔にて教へる。松山、さうぢやと取上げ
松山　久さん、この金をちやつと。
久五　イヤ〳〵、その金使うては。
松山　大事ござんせぬ。甚平が心づくし。早う渡して下さんせいな。
久五　それでも。
　ト甚平を見る。甚平、こなしある。
久五　エ、忝ない。
　ト金を持つて、三平が側へ行く。
コレ、お侍ひ、毀れた茶入れの代金百兩、ソレ、受取らつしやれ。
　ト前に置き、此方へ來る。此うち甚平、毀れた茶入れの缺けを取集め、見て、ニコ〳〵笑つて居る。三平は義兵衞と顔を見合せ
義兵　どうでも大盡、ほつかりと百兩出た。
三平　百兩に賣る雪の下の茶入れ、どちらから取るも同じ金。
　ト取上げ、懷へしつかりと入れる。
甚平　世に稀れな雪の下の茶入れとは聞いたれど、毀れた形に見るが初めて。ハテ、結構な茶入れ。
　ト三平を尻目に掛け
みす〳〵知れた事なれど、云うても江戸の指折りの町人、相手が椀久さま。人がようて、ム、、、ハ、、、、。ハテ、仕合せ〳〵。
　ト思ひ入れある所へ、下座より波の戸、おさき、傳吉、出て來て
波戸　モシ〳〵松山さま。久さんと口舌が濟んだら
女三　なんと伊豫屋へ。
傳吉　旦那諸とも、押しかけようではござりませぬか。
松山　イエ〳〵、久さんもわたしも爰にちつと。
久五　オ、用がある。皆先へ行きやれ〳〵。
甚平　サア〳〵、久五郎さま、聞きや今日お侍ひさまを、伊豫屋であなたのお振舞ひぢやござりませぬか。茶入れの事は、金さへ渡しやア何も云ひ分はござりませぬ。それをあると云やア。甚平が居ります。お前は構はずと、松山さまを連れて、ちやつとお出でなされませ。

久五　そんなら松山、甚平どのが、あゝ云うておやよつて伊豫屋へ行かうか。
松山　お前が行かしやんすりや、わたしも行くわいなア。
傳吉　お前が行かやんすりや、わたしも行くわいナアとはソレ、笑ひ本に書いてあるせりふのやうだね。
皆々　ホヽヽヽ、オヽをかし。
松山　傳吉さん、皆さん、きついお洒落おやなア。よい機嫌らしい。
久五　どうやらおれも鬱いで來た。
甚平　そこを打ッちやつて、伊豫屋へ行て、一つあがりませ。
松山　そんなら甚平。
久五　また後に。
皆々　サア／＼、お出でなされませ。
ト神樂になり久五郎松山、皆々付き添ひ、ワヤ／＼云うて向うへ入る。神樂打あがる。三平、こなしあつて、
三平　なんと義兵衛、其方に約束した茶入れを求めようと云うた侍ひに、氣の毒ながら斷わりや云はねばなるまい。
義兵　外へ賣れたと云うては御立腹。毀れた樣子を有り體に云うて、詫び致して見ませう。
三平　身共も共々挨拶してくれよう。サア、義兵衛、來やれ。
ト大拍子になり、三平こなしあつて、義兵衛を連れ、花道へツカ／＼とゆく。甚平これまで貰ひのんでゐてよき所にて
甚平　藻屑の三平、マア、待ちやれ。
三平　ヤ。
ト立ちどまる。
甚平　この間、柳原の通りすがり、雪の夜に出會うた安宅の甚平だが、なぜ見ぬ顏をしてぞい。
三平　誠に。
ト振り返へり、甚平をキッと見て
夜目遠目、さう云やア成る程、安宅の甚平、覺えて居る。
甚平　コリヤ、その時、仕返しといひ、コレこの
ト以前の狀を出し
其方が爲には大事の手紙、取返さずばなるまいが。
三平　その手紙を。
ト舞臺へツカ／＼と來る。甚平こなしあつて
甚平　イヤ、滅多には取返されまい。

ト此うち下座より、おまつ、謙徳、音次、附いて出掛け、様子を聞いて居る。三平こなしあつて

三平　ハヽヽヽ、大さうらしくひねくり廻す、その手紙は、何の役にも立たぬ反古同然。紙屑籠へ打ち込む同様甚平、欲しくばわれに遣らうわい。

義兵　イヤ、コレ〳〵彼の手紙は、慥か色紙の事を

三平　何を小癪な。義兵衛、扣へて居ろ。

義兵　でも、

三平　ハテ、

ト顔で教へ

手紙よりは、先づ仕返しすりや何もかも。柳原の出入りの落着、なんと爰で、仕舞ひを付けて見ようかい。

ト羽織を脱ぐ。義兵衛、ちやつと取つて持つて居る。

甚平　イヤ、片付けられぬうちに聞ひかゝつたこの手紙の宛名、やつよりといふは、こりや慥かに、八谷氏の浪人者であらうかな。

三平　ハテ、しつこい甚平、一旦知らぬと云ひ出した藻屑の三平、武士だ。オヽ、侍ひだ。たとへ知つても、オヽさうぢやと云はうか。馬鹿つくせ。

甚平　ハヽヽヽ。ハテ、立派なお侍ひ。見事な武士。掏摸を渡世の泥坊商間、知れてある目算を、引ッ捕へてコレこの手紙の文言、色紙の行き端、サア、あらはにそれと詮議しられぬ義理合ひあれば、こりや云うても合點がゆくまい。そこで改めて甚平が頼み。美しずくで、あの色紙を買ひ戻すやうな相談は、三平、どうだ、おぬしもその方が承知であらう。

三平　イヤ、不承知。おりや道具屋ぢやアないぞ。

甚平　それにたつた今、雪の下の茶入れ、ありや誰れに見せても、サア、打割つて云へば物が無い。そこで角菱なく、只丸う相談づくで。

三平　相談づく、腕づく、力づく、この男の仕返し。こま言云ふな。われを。

ト抜きかけるを甚平、とめて

甚平　これサ、此方に手出しのならぬ義理がありやアこそ、素手で頼めば、付けあがり、無法の腕だて、もうこの上は。

ト突き廻す。又かゝるを立廻りになる中へ

義兵　三平さまに手出しをすりや、おれが。

トかゝる。

甚平　何を相摺りめ。

ト義兵衛を取つて投げる。三平、甚平へ切つてかゝる。此うち、おまつ壽徳、前へ出て分ける

壽徳　コレ、マア、待たつしやれ。

まつ　マア、待つて下さんせ。

ト兩方とめるうち、義兵衛かゝるを、音次立廻りにて

音次　コリヤ、貴樣はおれが動かさぬ。

ト双方立廻り。

三平　危ない老人。

甚平　女中といひ

兩人　退いた／＼。

壽徳　イヤ／＼、マア、待つた。

ト三平におまつ、甚平に壽徳、無理に枷になつて兩方をなだめる。

甚平　ついに見馴れぬ二人の衆。

三平　こりや、なぜ留めるのだ。

まつ　女子の身であられもない、殿達のせり合ひを、留めるも譯ある、椀久が、わたしや女房の、まつと云ふ者。

壽徳　その椀久と縁を組んだ、おりや本郷の醫者、田川壽徳。

まつ　マア、姫同士。

甚平　ハテ、思ひがけない。

ト思ひ入れあつて、ヂッとなる。三平、人そばへのこなしにて、おまつを引退け

三平　イヤ／＼、女子に留められて引取つては、武士が缺ける。もう絶體絶命、釼原と云ひ、この湯島、一度ならず二度の晴れ。サア、片付けるか、甚平、わりやア留めるを幸ひ、尻込みするか。なぜ立合はぬ。サア、どうだえ。

ト仰山に立廻り騷ぐを、壽徳とめる。

甚平　椀久さまのゆかりの目の前、腕立てよりは色紙の行き場、尋ねて無事に取返さねば甚平の男が立たぬ。

ト立廻るをおまつ入れ變つて、甚平を留める。

まつ　サア、その深切なお前の志ざし。樣子は聞かねど、大方それと松山さんの、イヤサア、此まつが推量。久五郎さまのお行め、思うて下さんす、色紙の詮議。相手は、あゝいふ無法者、イヤサア、無法にわたしが留めるのも相手がお侍ひ樣なれば、これまでの心盡しも水の泡。殊には色紙の行き場も、イヤ、大方知れた上からは、マア、穩かに。ナア、壽徳さま。

壽徳　成る程、兎角短氣は損氣。お前もお侍ひとあれば、

猶の事。親仁も以前は兩腰も挾んだ者。そりや武士の意氣地で、打ち果す場もあれど、様子を聞けば、何やら曲つた噂。サア、腹も立たうが、頭に免じて、何事も丸うこの場を相談づくで。

三平　おきやアがれ。アタ面倒な。様子も知らぬで挨拶に、丸う濟ませば金づくと、見縊られたが否だ。萬兩積んでも料簡はならない。

義兵　さうでござります。斯うなつては強請り次第……イヤ、強請りと思はれちやア、三平さま、濟みますまい。

三平　こりや知れた事。身共が胸にあるて。

甚平　その胸にある色紙の行き場。

トきつとなるを

まつ　アヽ、コレ、それでは又。

ト留めるを

甚平　ハテ、氣遣ひさつしやるな。

トおまつを退ける。三平かされかゝつて

三平　サア／＼、來い／＼。

ト刀を拔いて仰山に構へる。

壽徳　コレ、危ない。待たつしやれ／＼。

三平　エヽ、親仁、退け／＼。

ト壽徳を引退げる。よろ／＼して甚平に取りつく。おまつ、三平を留める。義兵衛を音次とめる。この仕組み、入れ替り／＼千鳥にとめる。よろしく立廻り。甚平へ三平、切つてかゝるを引廻し見得よくとめる。三平、危ふきこなし。

三平　ハヽヽヽヽ。

ト慄へ出す。皆々驚ろき

皆々　ヤア、これは。

義兵　三平さま、なんとなされました。

三平　エヽ口惜しい。今日は瘧り日ゆゑに、此やうに。ハアヽ。

ト刀を持ちながら慄ふ。甚平、こなしあつて

甚平　ナニ、すりや三平は瘧か。

ト引起し、顔を見る。矢張り慄うて居る。甚平、こなし。壽徳、立寄り、三平が顔を見て、脈を見る、こなしあつて

壽徳　成る程、こりや瘧に極まつた。

まつ　そんなら瘧に違ひござんせんかえ。

壽徳　こりや又、熱が出やう。

ト三平、刀を取り直し。

三平　サア、甚平、われを
　トきつとなり、ハアヽ、とまた慄へる。
甚平　コリヤ、三平、あまり身悶えせずと、あの茶屋へなと行つて、養生せい。熱の覺めるまで、この出入りは待つてやらうわサ。
壽德　オヽ、それがよからう。暫らく寐たら、熱も覺めやう。
義兵　その介抱は義兵衞がする。マア／＼、あの茶屋へ。
甚平　ハテ、歸らずに待つて居るから、何時でも。
まつ　マア、とつくりと養生を。
三平　ハテ、滅多に負けぬ三平。病なりやこそ、口惜しいわえ。ハア、、。
　ト又慄うて居る。合ひ方になり、義兵衞、三平を介抱して茶屋の内へ入る　跡に四人、顔見合せ
甚平　壽德さま、三平が瘧は。
壽德　ありや虚病、僞まり。
まつ　エヽ、そんなら作病起して。
甚平　この場の逃げは、瘧といふのも、かねての拵らへ目算、事の尻割れては、瘧で遁がれる。チヨン／＼幕。
音次　それを知りつゝ、免さつしやりましたは。

甚平　ちつと詮議の利合ひがあつて、先づ婉久さまのおかみ樣とあれば、詳しい樣子も。
まつ　サア、聞くもどうやら松山さまの。
　ト壽德へこなし。
壽德　イヤ、娘のおしづは、切通しから、先へ歸したれば遠慮にや及ばぬ。
甚平　ハテ、何かはゆるりと。
壽德　それよりは肝心の
まつ　色紙の行き場。
甚平　コレ、慥かな證據のこの手紙を、久五郎さまに。
　ト手紙を出す。
まつ　ソレ、音次、しつかりと。
音次　お屆け申しませう。
　ト受取る。此うち義兵衞出かゝり
義兵　その手紙を。
　トかゝるを甚平、引廻し押へる。茶屋の障子を三平明けて出かゝる。おまつ、壽德、三平を見て
三人　ヤア、三平、瘧は。
甚平　まだ覺めまい。
　ト義兵衞を投げる。三平と顔見合せ、障子ピツシヤリ

義兵　うぬ。

　ト始終立廻りにて

甚平　大事の病人。

　ト兩人へかけて、義兵衛を押し付ける。音次、壽德、おまつ、よろしくこなし。暮れ六ツの鐘ゴンと鳴る。この拍子にて、チョン〳〵、道具廻る。

本舞臺、一面の二重舞臺、見附き交ぜ貼りの襖。上の方筋違ひに障子屋體、橋がゝり枝折り戸。柴垣庭のかゝり、伊豫屋座敷の模樣。門臺數多並べ、久五郎、おかん、清九郎、振り袖の女形人形を遣つて居る。三五右衛門・松山、波の戸、眞中に酒を飲んで居る。大藏、鉢を叩き、拍子を取つて居る。傳吉酌をして居る。おたき、おさき、この人數にて松風の所作の切にて、道具とまる。

皆々　ヨウ〳〵〳〵。

　ト皆々ほめる。

三五　なか〳〵、久五郎、おかん、淸九郎が木偶の使ひ方面白い見物事であつた。

大藏　なんと三五右衛門どの、我れらが素人の藝者のおかん、多藝な事でござらうがの。

かん　イエ〳〵、わたしより久さまや、淸九郎さまの隱し藝。恐らく土佐座の人形さへ、裸足ぢやわいなア。

淸九　サア、その裸足の足の鹽梅、この淸九郎が、やるものぢやござりませぬぞ。

久五　おかんと淸九郎と、おれが三人の出使ひの受けがよければ、今度、吉原で、菅原か忠臣藏の通し、座操りをお目にかけませう。

波戸　その時わたしらも

皆々　見物しようわいなア。

傳吉　イヤ、久さまより、この傳吉が小人形も、又お目にかけますぞや。

松山　なんと波の戸さん、今日は湯島の天神さまや、この座敷でお三人の今の人形、何を見ても、わたしや、ほんに、面白いわいなア。

三五　面白い筈ぢや。色を側へ置いての樂しみ。

久五　これは又、三五右衛門さまの惡口を。

大藏　おれも惡口を云はれた此おかんと。

　ト寄り添ふ。

かん　オツト待つたり。わたしや此方へ。

ト ちやつと三五右衛門が側へ寄る。

大藏　ハテ、氣の利いた女ではあるわいな。

ト奥より男一人、走り出て

男　申し〳〵、藝者のおかんさま、お前に逢ひたい、ちよつと呼び申してくれいと、使ひが參りました。

かん　わたしに逢ひたいとは、どこからの使ひぢやえ。

男　誰か室町からぢやと申しました。

清九　イヤ〳〵、そりやおかんぢやあるまい、この清九郎に、内からなんぞ云うて來たのであらう。ドレ、おれが。

かん　イヽエ、思ひ出した。矢ッ張りわたしぢやわいなア。

清九　おかん、どうして又、其方に室町から。

かん　ハテ、わたしぢやというて藝者、お前さんばかりぢやあるまいし、外にまた室町のお客があるわいなア。

清九　成る程、これは誤まつた。そんならちよつと行て逢うておぢや。

かん　左樣なら、ツイ、ちよつと三五右衛門さま、皆さん

三五　おかん、怪しいぞや。

かん　何を仰しやるやら。

大藏　こりや何事ぢやい。

ト引とめる。

エヽ、知らぬわいなア。

ト騷ぎになり、振り切つてツイと奥へ入る。大藏、こなしあつて

大藏　エヽ、おのれ見居らう。身がきく事ではないぞ

三五　ハテ、よいわいの。兎角貴殿は、おかんを附けつ廻しつ。

皆々　其方思ひの彼方思はず。

久五　鮑の水貝が出ました。一つおあがりなされまし。

清九　それ〳〵、若旦那、三五右衛門さまには、御酒が足らぬ。そこへお勸めなされまし。

三五　イヤ、今日の御馳走、甚だ酩酊〳〵。

大藏　兎角、おかんが居ぬと、座敷が淋しい。

清九　騷ぎもあまり騷々しい。これからなんと三五右衛門さまへお慰みに。

三五　誠に、聞けば久五郎には、繪がなるといふ事ぢやが大藏も英もどき、日頃自慢召さるゝが、まだ身共も少しは行くぢやて。幸ひ爰で席畫きはどうであらう。

皆々　こりや、ようござんせう。

久五　益體もない、わたしの繪が、どう致しまして。

清九　ハテ、大事ござりませぬ。何もお慰み。ナア申し、三五右衛門さま。
三五　松山始め皆の者、望み次第に畫いてやらう。清九郎、ソレ、硯々
清九　ハイ〳〵。
ト硯を取つて來るうち、傳吉心得、前へ毛氈を敷く。清九郎硯を直し
清九　サア〳〵、席畫きぢや〳〵。紙も爰にござりまする。
三五　サア〳〵。
ト三五右衛門、毛氈の上へあがる。
身共は何を畫かう。人物にしようか。艸花にせうか。
大藏　アヽ、迷惑な。わしも畫いて見ませう。
三五　松山に何を畫いてやらうな。アヽ、オツトよし〳〵。
ト筆を取つて山水天狗を書いてやる。
松山　ホヽヽ、ヽ。三五右衛門さん、そりや何でござんすえ。
三五　山水天狗。コリヤコレ、山といふ字と、水といふ字を、天狗の面に畫いたのぢや。なんとよからう。欲しいか欲しいか。

松山　イヽエ、そりや禿の子供までが、よく畫くわいなア。皆さん、見やしやんせ、馬鹿らしい。
女皆　ほんになア。ホヽヽ、ヽ、ヽ。
ト皆々笑ふ。
三五　氣に入らぬか……そんなら傳吉、其方に遣らう。掛け地に致せ。
傳吉　私しどもには畫かず白紙、花がようござります。
三五　エヽ、名畫を知らぬ馬鹿者ぢやな。
ト筆を捨てヽ此方へ來る。大藏、馬を畫いて居るのを波の戸見て
波戸　松山さん、皆さん、見やしやんせ。ありや狐か、兎かいな。
女皆　ほんに、譯の知れぬ物ぢやわいなア。
大藏　ハテ、こりや馬ぢや。古への巨勢の金岡にも負けぬ。なんと、見事か〳〵。
清九　成る程、馬とは見にくい。兩國の河岸の友丸へやつたら、よい見せ物でござる。
大藏　なにを清九郎、其方までが。
清九　でも、こりや、あんまり。
ト笑ふ。

大藏　物の試しに、これを淺草へ繪馬に揚げて見い。夜な夜な拔けて出るわえ。

トむつとする。此うち久五郎、梅を畫きしまひ

久五　こりや、どうぢや〳〵。

さき　オヽ、可愛らしい梅主やなア。こりや、わたしに下さんせえ。

たき　申し、久さん、わたしにも何ぞ畫いて下さんせいなア。

久五　オヽ、畫いてやらう〳〵。

トさら〳〵と輕く一枚畫いて遣る。

波の　こりや、よう出來た。オヽ、嬉し。

たき　わたしも、大事にかけて持つて居るわいなア。

波戸　わたしや、誰れにもやりやせぬぞえ。

ト皆々喜ぶこなし。松山もこなしあつて、三人の畫を引ッたくる。

三人　申し、松山さん、大事のその畫を。

松山　やる事はならぬわいなア。アタ嫌らしい。可愛らしいの嬉しいのと、久さま、お前も、畫を畫いてやらしやんしたら、きかぬぞえ。

ト筆を取つて打ちつける。三五右衛門、最前よりムカムカして

三五　いかう座敷が滅入つて來たワ。亭主方はどうだ。大藏、酒でも飲まうか。

大藏　こりやようござりませう。身共もあれを見ては、ムカ〳〵致す。一つ食べよう。淸九郎々々、三五右衛門どのが御酒とある。どうだ〳〵。

淸九　申し若旦那、ちやつと向うへ行て御酒を。

久五　オイ〳〵、合點ぢや。

ト三五右衛門が側へ行き

サア、一つ召上がられませう。

三五　いかにも、たべよう〳〵。

ト杯を取上げる。

久五　ソレ、女子ども、淸九郎、お酌を。

三五　イヤ〳〵、久五郎、人の酌は面白うない。御身、酌をしやれ。

久五　エ。

三五　ハテ、今日の亭主方ではないか。亭主方なら、客の云ふ通り、なぜ酌をせぬ。今日の振舞ひは、なんといふのだ。お國元の殿へ差上げろ當家の色紙、即ち受取りの役目は、この八谷三五右衛門。サア、八谷三五右衛門。

ト大藏、清九郎へこなしある。

なんと、大切な色紙を、取られたとやら、失うたとやら、その吟味のうち猶豫さす、追從輕薄の振舞ひでないか。すりや、身共が云ふ通り

ト松山へ掛けて

得心して、ナ、得心して、サア、酌を致さにやなるまい。ナウ、大藏、清九郎。

大藏　さうでござるとも。三五右衛門どのゝ猶豫で、色紙吟味の其うちは、どのやうに奢らしやつても、恩にもひらにも着ぬ。其方の爲でないか。

清久　コレ、申し、若旦那、何でもない事に御機嫌を損なうては、色紙のナ、まだ知れぬぢやござりませぬか。それに何でもない事で、ナ、ソレ、色紙の知れるまでは、何事であらうと。とつくりと申して置いたのに、どうしたものでござりまする。

久五　イヤ、おりや何にも御機嫌、損なうた覺えはない。それに三五右衛門さまが、

清九　そんならマア、仰しやる通りにお酌を。

久五　ハテ、せいとありやお酌するわい。

トこなしあつて銚子を取上げる。

三五　すりや、久五郎、酌いたすか。

久五　一つお上がりなされませ。

三五　久五郎が酌とあれば、忝ない。然らば杯を替へて

ト大杯を取り

サア、これへ

久五　ハイ／＼。

ト注ぐ。三五右衛門請けて

三五　こりや、辛い酌な。ナニ松山、身が望んだれど、餘り大杯。ちよつと助けてくりやれ。

松山　わたしや酒は嫌ひでござんす。

三五　ハテ、さう云はずと、嫌ひならば、口を添へてくりやれ。

松山　堪忍して下さんせいなア。

トぴんとする。

大藏　コレ、松山、三五右衛門どのが、あのやうに云はつしやる、ツイちよつと。

松山　否ぢやわいなア。

清九　そりや花魁、情が剛い。

三五　イヤ／＼、淸九郎・大藏、もうよい／＼。ハテ、助けてくれねば是非がない。

　トぐつと呑み干し
久五　久五郎、亭主方なれば、てまへに献さう。
久五　アノ、このお杯を。
　ト思ひ入れ。
清九　三五右衛門さまのお杯。若旦那、こりや一つ上から
　ずばなりますまい。
大藏　その代りに、身共か酌せう。サア〳〵、一つ〳〵。
　ト清九郎、大藏、無理に杯を持たせて酒を注ぐ。久五
　郎、いろ〳〵あつて
清大　見事々々。サア、ぐつと〳〵。
　ト矢ツ張り勸める。久五郎、よう呑まれぬこなし。
久五　こりや又、迷惑な。
　ト松山、始終こなしあつて
松山　久さん、わたしが助けうかえ。
久五　そんなら松山、助けてたもるか。
　ト杯を渡さうとして、三五右衛門を見て、ちやつと思
　ひ入れあつて
　イヤ、助けてはもらはぬ。
　ト自棄にグツと呑む。
三五　イヤ、見事々々。先づ忝ない。久五郎、肴をせう。

　取れ〳〵。
　ト蒲鉾を挿み、差出す。久五郎「ハツ」と片手を出す。
　三五右衛門、あちこちと、挾み廻し、トゞ久五郎が額
　へ打ちつける。
久五　エヽ、これは。
　トむつとする。
三五　べら坊め、うぬはなんだ。たかゞ町人、身はコレ、
　金澤の家中、大祿を頂く武士だぞ。イヤサ、侍ひだぞ。
　その身共が挾む肴を、受けやう知らぬ、法外者めが。
　ト久五郎ムッとする。清九郎こなしあつて袖を曳き
清九　コレ〳〵、若旦那、ソレ、色紙、ナ、今失敗つては
　椀屋の家の破滅になりまする。エヽ、コレ、もどかしいも
　どかしい。
　トお爲の額にて突つく。久五郎、こなしあつて
久五　段々あやまり入りましてござりまする。
　ト辭儀をして、額を隱し泣く。
三五　あやまつたとあれば、身共おやとて、今まで心安う
　した久五郎、なんの根葉は持たぬ。併し、若い者の事、
　又どうして座敷へ出ようも知れぬ。とてもの事に大藏、
　肴の受けやう、敎へてやらつしやい。

大藏　ト大藏立ち上がり
コレ、久五郎、大身に肴を戴くには、コレ、この頭を斯う下げて、この兩手をグッと斯う上げて
トむごく押へつける。三五右衞門もこなしあつて
三五　それ〳〵、まだ頭が高い。清九郎もとくと敎へい。
清九　ハイ〳〵、斯うでござうまするか。
ト久五郎が頭を押へつける。
大藏　この兩手を、グッと斯う上げる。
ト兩人、むごくして
兩人　斯う受けるのだ。
三五　そこで肴を挾んでやる。
ト硯蓋を頭へ冠せる。久五郎、キッとこなしあつて、又思ひ入れ、ヂッとなる。松山、始終思ひ入れあつて泣いて居る。
大藏　三五右衞門どの、どうでござる。
三五　イヤ、少しは胸が晴れた。これを肴に一つ呑まう。
清九　ソレ、若旦那、お酌〳〵。
ト久五郎、不承々々に銚子を取上げる。
三五　イヤ、久五郎、その銚子、もう酒はあるまいぞや。
大藏　ソレ、替へ銚子〳〵。

久五　そんなら。
ト手を叩く。
三五　コレサ、久五郎、人を呼ぶには及ばぬワ。てまへが勝手で、燗をつけて持つて來やれ。
久五　エ。
大藏　三五右衞門どのの云ひつけぢや。キリ〳〵と立たつしやれ。
ト久五郎を引立てる。久五郎、銚子を提げながら立ちあがる。
清九　早う燗をつけてござりませ。
ト突きやる。
大藏　ハテ、行からてや。
ト兩人して突き飛ばす。久五郎、泣く〳〵銚子を持つてそれなりに奧へ入る。女形皆々傳吉も、續いて入る
清九郎大藏顏見合せて笑ふ。松山、ムッとこなし。
三五　イヤモウ、馬鹿者も悧巧に遣へば、なか〳〵面白いものぢや。
ト松山を尻目に掛ける。松山、思ひ入れあつて、スッと立ちあがり
松山　その面白い次手に、わたしもお前方に、面白い物を

聞かせますわいなア。

大藏　ムウ、松山、面白いもの聞かすとは。

清九　花魁、何ぢやな。

　ト松山、懐より文を出し

松山　サア、この文は、餘所のさるお客から、わたしへ下さんした面白い文の文體、三五右衛門さんのお慰みに、爰で讀んで見やんせいなア。

大藏　そりやよからう。三五右衛門どのも、慰みがてら、とつくりと聞かつしやい。

清九　餘所の客の文なら大事ない。隨分と高く〳〵。

大藏　合點ぢや〳〵。

　ト文を取つて開き

なんだ、嫌らしい、初手から歌が書いてある。なんだ。「床は海、枕は山となりぬべし、涙も塵も積もる恨みに

清九　ハテ、歌とは嫌味な奴。

松山　マア、默つて聞かしやんせいなア

大藏　斯くこそよめる古歌の心は、我が身に毒とあたりの人目も恥かしく、又もや筆に云はせり〻、過ぎし夕べ仲の町にてソト御見いたせしより、お姿のやる方なう思ひに堪へかね、玉章に只一筆と千度百度、心の丈を書き送りしも、甲斐もなく〳〵、細谷川の丸木橋、ふみかへさるゝ涙の袖なみわびしく。

清九　振られる筈だ。氣障な文句だ。

　ト三五右衛門、こなしあつて

三五　コレサ〳〵、大藏、その狀讀まずと、もうよしやれ。

大藏　イヤ、何も慰み。どんな事が書いてあるやら知れぬ。

松山　それに又、奥に面白い事がある程に、ちやつと讀ましやんせいなア。

大藏　ドレ、誠に干さぬ袖にて今ぞ知し、君は繋がぬ沖の船、我れは磯邊の海女小舟と、叫べども辛い浮世の山颪、よその浦曲へ吹く風の、晝夜わかたぬ我が思ひ、少しは不便とお察し下されかし。

　ト此うち三五右衛門、いろ〳〵術なきこなしあつて

三五　コレ〳〵、大藏どの、面白うもないその文、措かつしやいと云ふのに、アタしつこい。なぜ措かつしやらぬ。

松山　イヤ、あまり馬鹿らしいゆゑ、お聞かせ申します。もう〳〵讀まずと、よしに致して、せめて宛名を。

清九　なんと書いてあるやら、早く〳〵。

大藏　なんぢや松を時雨の山の君さま參る、焦るゝ身より……この焦るゝ身よりとは、愚痴な奴ぢやが。

兩人　マア、何奴が事ぢや。

松山　アイ、その焦るゝ身よりとは、外でもない、あの三五右衞門さんの事ぢやわいなア。

兩人　ヤア〳〵〳〵。

ト恟りして、狀を前にちやつと置く。

大藏　でも、よい手ぢやなア。

清九　とんと逆上せて耳が聞えぬ

ト耳の穴を掻く。松山、こなしあつて、その文を取り上げ、三四右衞門が側へ行て

松山　三五右衞門さん、お前の心に覺えがござんせう。深いと知れた久さまと、わたしが仲、それに横合ひから嫌らしい、惚れたと云うて、いろ〳〵と口說かしやんして、振り通したを根に持つて、いとしほなげに今のやうに、久さんを……わたしや、これまでこの事を、露ほども云はぬは、久さんが、大事に掛けさしやんすお前ゆゑ、それに侍ひだてら卑怯な、ようも〳〵、つれなく久さんを苛めさしやんしたなア。

ト文を打ちつけ、泣く。三五右衞門、莨のみ、空嘯いて居る所へ傳吉走り出て

傳吉　申し〳〵、花魁、いま奥で久さまが、癪が起りました。ちやつとお出でなされませ〳〵。

ト云ひ捨て、走り入る。

エヽ。小氣な久さん、今ので。

トこなしあつて奥へ行かうとするを、三五右衞門、裲襠をとらへ

三五　それ程までに、久五郎を。

松山　アイ、可愛いわいなア。

ト裲襠を刎れる。三五右衞門、それなりに轉ける。唄になり、松山、奥へツイと走り入る。三五右衞門、矢張り轉けた形で居る。清九郎、大藏、最前より氣の毒なるこなしにて、ソッと側へ來て

大藏　三五右衞門どの。

ト三五右衞門、面目なきこなしにて、ヂッと起きあがり

三五　大藏どの、清九郎……戀は心の外ぢやて。

ト塵をひねるこなし。

兩人　ハテ、愚痴な五郎四郎どの。

三五　アヽ、コレ。

ト合ひ方になり、三五右衞門、實は弟の五郎四郎こなしあつて

五郎　コレ、本名を云ふまい。
大藏　こなたも元は三五右衞門どのゝ弟、侍ひなれど惡黨ゆゑ、勘當受けて浪人し、
清九　この江戸で近付きになつたお前。鐵火賣つて歩いてござるを幸ひ、樣子を聞いて今度の目論見、
大藏　兄弟とてよく似たゆゑ、兄の三五右衞門にして、久五郎を煽て、彼の色紙を此方へ捲き上げて、天氣に入らずに吉原通ひ。
五郎　ごつこん惚れて居る松山、抱いて寐る、戀と慾とで、兄貴になつて立役をして居たが、皮を剝けば、矢ッ張り鐵火の五郎四郎。
大藏　同じ仲間の藻屑の三平。目算事の四人組
五郎　しこ貯めた金は四つ割り、兼ねては謀し合せ、いつまで兄の三五右衞門になつて、傍に見入られたあの松山
大藏　色紙も此方の手より差上げて、こなたの身の上。
五郎　元の侍ひになられるか、賣り拂つて金にするか。
清九　おれは椀屋の跡式を。
大藏　おれの望みは、藝者のおかん。
兩人　マア、それまでは、
三五　コリヤ、秘すべし／＼。

ト三人こなしある。障子の内にて
松山　久さん、斯う撫つて居るが、ちつと心よいかえ。
久五　大分心よい。もう脊中を撫らずと、此方へおぢやいなう。
松山　斯うかいなア。
久五　ても冷たい手ぢやの。
松山　温めて下さんせ。
久五　エヽ、もつと此方へ寄れと云ふのに。
松山　オヽ、嬉し。
トこれを聞いて五郎四郎、思ひ入れ、兩人ともこなしあつて
五郎　段々重なる戀の意趣、もうこの上は、久五郎め。
ト立ちかゝるうち、おかん出かけ、樣子を聞いて出て
かん　氣遣ひさしやんすな。その戀、わたしが取持つわいなア。
大藏　ヤ、嬉しやおかんか。
清九　三五右衞門さまの戀の取持ちとは。
五郎　おかん、すりや、松山を口說き落して。
かん　蛇の道は蛇、色の道は藝者のおかん、たとへ松山さんは、なんと云はしやんしても、久さんとさつぱり切ら

してしまふ。ヱヽ五右衛門さん、わたしが、きつと

五郎　取持つてくれるとは忝ないが、そりや、どういふ心
でぞ。

かん　ハテ、大事の、イヤ、大概知れた事。でも野暮らしい。

清九　ハテ、そんなら、おかんも、此方の若旦那に。

大藏　惚れて居ると、身共が聞かぬ。濟まぬぞ〳〵。

かん　オヽ、嫌ひ。

大藏　イヤ、それでも。

ト焦るを、五郎四郎、引退け

五郎　コレサ、野暮を云はずと、マア、身共が事から。

大藏　イヤサ、此方より。

ト五郎四郎を引退けるを清九郎、兩人を止めて

清九　まだ何をやら譯も知れぬに、さう騒がずと、マアとつくりと。

大藏　成る程、おかん。

かん　たとへ、金盡くで口說かれても、色男は拵らへぬ心の誓ひ。それは格別、松山さまと、久さまの仲を割かねばなア、ちつと濟まぬ事もあれば、これ幸ひ。ヱヽ五右衛門さんに嫌でも應でも取持つて、コレ、抱かして寐さす。

マアさう思うて、大舟ではない、女子の事なら、豬牙舟に乘つたと思うて、居やしやんせいなア

五郎　こりや忝ない。それに違ひがなければ

清九　身共も安堵

五郎　マア、一ツ〆めよう

四人　よい〳〵〳〵〳〵。

ト手を打つ。向うより甚平出て來り、木戸より内を覗つて居る。フッと五郎四郎と顏見合せ

甚平　ヤア、こなたは。

五郎　南無三。

ト顏を隱す　大藏清九郎、燭臺の灯を吹き消す。おかんさてはトこなし、甚平、ハテと思ひ入れ　この途端

幕

## 二幕目

西尾屋の場
大雲寺前の場
金澤稻荷の場

役名——安宅の甚平。藻屑の三平。六谷五郎四郎

桃屋久五郎。瀧法印。やり手、お辰。中間、七内。同、權助。小泉大藏。傾城、松山。同、波の戸。番頭、清九郎。茶屋女、おうめ。藝者、湯島のおかん。

本舞臺、西尾屋にて、座敷に簾かゝり、左に、西尾屋と云ふ暖簾かゝり、右、大門半分出て　おうめ、紺縮緬、丁子車の模様の前垂れ、白縮緬の前垂れに緋縮緬の湯もじ、黒朱子帶、煙草をのみ居る　床几に禿二人出て、毬を突いて居る。騷ぎにて、幕明く。

トおうめ　立つて二人の禿の持ちし毬を取つて

うめ　よう騷ぐ禿衆ではあるわいなア。

ト毬を奥へ投げる。禿二人、引ッ込む。

今日は湯島のおかんさんが、參ると云ふ話しがあつたがもう見えさうなものぢやわいなう。

ト云ひながら銚子、杯を持つて出て、床几に腰をかける。通り神樂にて、花道より五郎四郎、八丈の小袖に柿色の毛ゝろめんの羽織、鮫鞘の大小、大髻に髪を結ひ、薄赤面にて、五右衛門、實は弟の五郎四郎なり、跡に縞縮緬の着物、黒朱子の帶、駒下駄を穫き、手に頭巾を持つて、湯島のおかん。小泉大藏、八丈の小袖黒綸の羽織大小、髪は奴にて出る。跡より、天神下の取上げ婆ア、實は遣り手おたつ、柿の木綿の着物、ふとりの帶、肩へ手拭を掛けて、徳利引ッ提げて出る。跡より駕籠をかつぎ、中に權助、黒き看板の上へ伊勢縞の袷を着て、髪は奴、鉢卷をして、首を出して居る後より七内、同じ形にて出て、花道の眞中へとまつて

かん　西尾屋はこれでござんすかえ。

ト本舞臺へ行く

うめ　これは〳〵、皆さん。ようこそお出でなさいまし

たつ　マア、お掛けなされいまし。

ト皆々床几へかける。おうめ、杯を持つて出て、五郎四郎、おかんへさす。おかん、杯を手に取つて飲む。

五郎　時に阿母、その駕籠の中は、又いゝ玉か。

たつ　イエ〳〵、玉どころではござりませぬ。

トおかんが側へ寄つて

あなたが、湯島のおかんさんでござりますかえ。

かん　アイ、かんはわたしでござんす。

たつ　ヤレ〳〵、嬉しや。お前さんに逢ひたくて、いから苦勞を致しました。どうぞ、その杯をさして下さりまし。

その代りに私しが、酒屋でよい御酒を買うて參りました

ト德利を出して、おかんが持つて居る杯へつぐ

かん　これは〳〵、ついぞ見た事もないに、マア、馴れ馴れしい。

たつ　左樣でござります　さう思し召すも御尤も。その杯をさしておもらひ申したいものが、コレ、爰に居ります

ト駕籠をあげる。權助、鉢卷をして唸つて居る。

かん　そんなら、お前ではないかえ

たつ　左樣でござります。私しは湯島の天神下の取上げ婆アでござりまするが、お前樣が山下の寶來屋や、松坂屋へ往來を見て、私しの忰が戀病ひ、せめて夢になりとも見たいと、互にこの寶舟を持つて居りまする。醫者衆は見放す。せめて一日二日の命、なんにも云はずと、その杯を飲んで、さしてやつたその上で、戀を叶へてやらうといふ印を遣つて下さりませうものならば、嬉しう成佛いたしまするでござりませうわいなう。

ト泣いて居る。

五郎　すりや、阿母。なんとお云やる。このおかんに戀病とな。大藏、お聞きやつたか。

大藏　イヤモウ、大藏、おかんにはぞつこん惚れては居れど、その戀病とまでは行かぬ。おかん、早く杯をさして印を遣りやいなう。

かん　でも、わたしやどうも。

大藏　ハテ、今にも知れぬ、病人だワ

七内　それ〳〵、色になつて抱かれて寐やうと云ふのではなし、印を下されば濟みまするわな。

たつ　さうとも〳〵

ト駕籠を開けて

コリヤ忰、あなたのお顏が、そこから見えるかえ

ト權助　首を出して

權助　母さんや。たとへこの世はならずとも、未來はどうぞ色になるやうに、それを力に、嬉しう成佛いたしまするでござりませう。

たつ　道理ぢや。尤もぢや

權助　早く、色にならうと云ふ證據の印を、取つて下さりまし。

たつ　オヽヨ〳〵。

ト泣く

大藏　アレ、あのやうに云ふのに、それでも證據は遣られぬか。

かん　して、その證據とはえ。
五郎　ハテ、色にならうと、一筆書きやれ。
かん　でもマア。
　ト此うち禿出て、おかんに向ひ
禿　花魁が御用があるよ。
たつ　エヽ、うぬ等はなア。
禿　でも、遣り手衆を呼んで來いと云ひなんしたよ。
　トおかん、立つて
かん　そんならお前は
五郎　コリヤ〳〵、おかん、一體この狂言は、おれが作つた狂言、よう哀れな事から引出して、口說き落して大藏に、抱いて寐させうと思ひの外
大藏　餓兒どもにかゝつて散々。
たつ　大藏さまに頼まれて、うまい最中、花魁の御用で、無茶苦茶に
うめ　もう、最前から、何も云ふなと先觸れが有つたゆゑ何にも云はずに居りましたが、おたつどんの空々しい。して、その駕籠の御病人さんはえ。
權助　オウ、駕籠の病人は爰に居ります。
　ト駕籠から出て、袷を脱いで、下の看板になつて、鉢卷を取つて
イヤモウ、主命とはいひながら、ついぞ乘つた事もない駕籠へ乘つて、肩も腰も痛くてなりやアしねえ。
たつ　シタガ、大藏さま、そのお顏で色事とは、あんまり押しが强うて、座敷の禿にやらうと思ひまして、仲見世で買つて參りました、この鍾馗の面。
　ト鍾馗の面を出して、大藏が顏の側へ出して
お腹を立てなされますな。お前さまのお顏に生寫し。
大藏　べら坊め。
　ト面を扇にて打つ。
たつ　そのお顏で色事とは。
〽かぶつたえ鍾馗が面目ない。
　ト唄にて、面を投げて
たつ　禿來や。いつそ自烈てえよう。
　トおたつ、禿、奥へ行く。後より七內、權助、二人とも奥へ行く。おかん、立つて行かうとするを、大藏、押へて
大源　コリヤ、どこへ行くのぢや。
かん　アイ、わたしやお前に口說かるゝが、うるさいゆゑ。
大藏　コリヤ、おかん、昔の少將は、九十九夜通つたと云

ふ。おりやア、それと云ふ事はないぞえ。もう好い加減に、色よい返事をしてたもいの

五郎　コリヤ、おかん、身共が松山を思ふも、大藏がお身を思ふも、道理は同じ事。もう好い加減に返事をしてやりやいなう

かん　お前さんまでが、矢ツ張り、ハテ、松山さんは勤めの身。わたしは藝者、マ、譯が違ふからなう

大藏　コレ、さうヒンと云ひ放した詞の端、どこやらに色氣があつて、どうも堪へられない。

ト抱きつく、

かん　お前もお侍ひに似合はぬ、大藏さん。

ト煙管にて顔を突き放す。

大藏　おかん、そりやあまり胴慾ぢやぞよ。

トまた抱き付くを、煙管にて顔を喰はしながら突き放す。

かん　ハテ、わたしや木竹の身ぢやわいなう

ト奥へ入る。跡よりおうめも奥へ行く。大藏、突き放されて、仰向いて居る所へ、椀屋久五郎、袷縮緬の羽織小袖にて出る、供男、酒肴を持つて、本舞臺へ行つて、

久五　これは〳〵、八谷三五右衞門さま、小泉大藏さま御兩所樣には、ようこそお早うお出でござります。コリヤ、てまへはいつもの所で待つて居ろ。

ト供を返す。大藏、立つて

大藏　イヤモウ、おかんにかゝつて、大藏が日頃の勇氣、どこへやら。これは久五郎どの、イヤモウ、面目次第もない。

五郎　時に久五郎、お身に頼みたい事があるが、マア〳〵、いろ〳〵用も有るから、これへ掛けたがよい。

久五　ヘエ〳〵、左樣なれば、御免下さりまし。

ト掛ける

五郎　時に大藏。お身はいつもの所に待ち合せて

大藏　承知々々。いつもの所に三五右衞門どの、後刻御意得ませう。

ト入る。

久五　さて、その頼みたいといふ御用は

五郎　アイヤ、外の事でもないが、なんと、この三五右衞門を立てゝはくれまいか。

久五　そりや、マア、なぜでござります。

五郎　アノ、松山をくりやれ。

久五　そりや、どうも

五郎　ハテ、先達て湯島の伊豫屋で、身共に耻を與へたも矢ッ張りおてまへが云ひ付けたのだ。それは兎もあれ、どうぞ身共を立てゝ、松山をくりやれ。武士が手を突き、頭を下げて、お頼み申す。

久五　どうも、こればつかりは。

五郎　ハテ、そんなら色紙はどうぢや。

久五　サア、その色紙も二三日、お待ちなされて下さりまし。

五郎　ハテ、松山さへくれゝば、色紙も五六日は待つてやらう。松山をくれるか、否なら色紙を出せ。いま色紙が無ければ松山をくれるか。コリヤ久五郎、但しは又、廓通ひの金に迫つて賣り拂うたか。この事を國元へ云つてやれば、兄久兵衛がどんな難儀にならうも知れぬ。久五郎、返答はどうぢやぞ。

久五　イエ、全く色紙の事は、兄に存じませぬ。

五郎　それ知れぬ兄貴へ、難儀をかけても、松山が事は思ひ切られぬか。

久五　ハイ、松山が事は、どうも。

五郎　よし〳〵、そんならこの事を國元へ。ちつとも早く、

ト立つて行かうとするを留めると、甚平・上田の羽織・納縮緬小袖・ばッちを穿き、鮫鞘の脇差、肩へ手拭をかけて・本舞臺へ行つて、久五郎を見て立つて居る

久五　マア〳〵、お待ちなされて下さりませ。その色紙の事も、ちつと此方に、當りもござります。また松山が事も、マア〳〵、もそつとお待ちなされて下さりませ。

ト甚平、側へ寄りて

甚平　モシ、若旦那、そりや何を仰しやります。

久五　イヤ、この三五右衛門さまが、色紙を今受取らう、その色紙が無ければ、松山をくれろ、松山をくれるか否なら、色紙を今出せと仰しやるわな

甚平　それは〳〵、この間ちよつと湯島でお目にかゝつたまんまさ

ト五郎四郎が顔を見て、懐手して

甚平　アノ、こなさんが

五郎　アイヤ、コリヤ、甚平、何も云やるな。コレ、この三五右衛門が爲にならぬと云へば

甚平　とんだ、マア。

五郎　コリヤ、お身がこの色紙の事に、口をきいてくれては、この三五右衛門が爲にならんと云へば、お身も野暮

ではあるまい。
甚平　よもや／＼と思ひの外、でもマア、どうだ。
五郎　コリヤ、甚平。
甚平　こりやマア、どうだ、三五右衛門さまでござりま
するな。
五郎　さう／＼、それに違ひなし。
久五　そんなら、お身も、この三五右衛門さまと、お近附
きかえ。
五郎　イヤ、近付きどころではない、この事に口をきいて
くれては悪い。コリヤ、三五右衛門だぞ。
甚平　ヘイ。
久五　そんなら、甚平、色紙の日延べのお願ひを、共々に
甚平　そりや、わたしがさう云つては、待たねえでサ。ま
た待たねえと云へば、わたしが
五郎　コリヤ、誰れも待つまいとも云はぬに
甚平　一體、この三五右衛門さまは、お心よしサ。
五郎　左やう／＼
久五　そんなら、色紙の日延べを。
五郎　もう四五日待つてやらうよ。
甚平　アレ、あゝ云ふお心よしサ。
久五　そんなら、松山が事も、
五郎　オヽ、四五日待つてやらうよ。
甚平　アレ、あゝ云ふお心よしサ。
久五　そんなら私しは、ちよつと行つて參りませう。
甚平　ちつとも早くお出でなさい。
久五　そんなら、三五右衛門さま、また後に。甚平、さら
ば。
ト奥へ行く
五郎　アイヤ、久五郎に、まだ云ひ殘した事がある。
ト行きさうにする。
甚平　アイヤ、三五右衛門さまの弟御、五郎四郎どの、先
づお前もお達者で。
五郎　甚平、お身も無事でめでたいの。又この間に
ト行きさうにする。甚平、留めて
甚平　アイヤ、お前にや、ちつと云ふ事がある。マア、お
下にござりませ。
五郎　アイ／＼。
ト二人、下に坐る。五郎四郎、目をしかめて居る。
甚平　お前、まだ直らつしやれないの。今も聞けば、色紙
を出せ、色紙を今出さねえきやア、松山をくれろとは、

そりやマア、お前、なんの事だ。この間もちよつと湯島で、お前の兄三五右衞門さまに、お目にかゝつたに、色紙の受取りのお役人は、三五右衞門さまだげな。椀屋に少し揉めた事があつて、まだ顏出しもさつしやりましねえで、只文通の取りやりばかりだと云ふ話し。それには引更へて、お前のその騙り。なんぼ兄樣に顏がよく似て居ても、肝心の根性骨は違つてゐるワ。オヽ、根性骨が雲泥の違えだわえ。その色紙を取つて金にする氣だらうが、みす〳〵兄さまを、失敗じらせるお前。そんな事をなすつちやア、ろくな死はさつしやりましねえ。昨日も三五右衞門さまが仰しやるにや、勘當はしたが、まだ心にかゝつて居ると仰しやつたは、いろ〳〵お前が惡い事をしても、滿ざら憎かれとは思はつしやらねえに、それにマア、お前は兄を失敗らせうといふ事があるものかな。モウ、あんまりな仕業。早くお心を切りかへて、本當の人間にならつせいまし。又この事を兄御樣へも申します。また大勢の人中でも、この事を話しますぞえ。モシ、五郎四郎さま、えらい見下げ果てたお心ぢやなう。

五郎　甚平、誤まつた〳〵。おぬしも知つての通り、兄貴から勘當を受け、居所無さにたゝずまひ、寄つて居る所を彼の色紙の事、〆めた、身共は兄貴生き寫し、似たを幸ひと、色紙を取り、金にしようと思つて、今まで兄貴の名を騙り、三五右衞門にて、惡事をして來た所を、おぬしが氣を付けてくれた。誠に命の親、モウ、これからは、まツ正直の眞人間だ。ほんに疑ひを晴らしてたも。

甚平　イエ〳〵、あんまり早呑み込みで、嘘でござりませう。

五郎　疑ひ尤も

ト大小を抜いて金打をして

身共も武士の端くれぢやわい。

甚平　これは〳〵、私しどもの意見をお用ひなされて、お心が直り、また只今のやうな事も、お氣にも當りませうが、御堪忍なされませ。

五郎　コリヤ、甚平、勿體無い事を云ふものかな。お身は我が爲には、善知識と云ふものだ。

甚平　さうお心が直りますれば、私しも共々に、勘氣お詫び。

五郎　それは千萬忝ない、が、この事を必らず人に云うてくりやるな。

甚平　ハテ、さうお心だに直りますれば、申しませうやう

もござりませぬ。
五郎　そんなら、甚平。
甚平　五郎四郎さま。
五郎　エリヤ、今の事を。
甚平　ハテ、男が詞を番ひました
ト奥へ入る。五郎四郎、舌を出して笑つて居る。後より、大藏、七内、權助、出て
三人　五郎四郎どの、ひよんな事になりましたな。
五郎　オット、その名を云ふめえ。矢張り兄の三五右衞門時に、今の奴は赤木甚平といつて、何か仔細らしいやうだヮ。彼奴が事を破らうとした所を、おれが方から並べ立て、マア、一杯喰はせてやつた。時に藻屑の三平に、もうあの色紙は持たせちやア置かれねえわえ。
大藏　それノ、、身共もあのおかんが事を、頼まにやならぬ。
七内　丁度三平さまは、この吉原へ來てござるといふ事。
ト後より三平、茶縮緬の小袖、淺黃縮緬、紅絹の模樣の襦袢、大髻百日にて、青髭をつけ、朱鞘の大小、晒しの手拭を首に卷き、柾の下駄を穿いて出て
三平　何かの事を頼まれてやらうか。
大藏　こりやア三平か。
三平　兩先生、お早いお出で。
五郎　時に、先達つての色紙
三平　この間仕事をしてくれろと、頼んだ色紙か。サア、金と引替へに致さう
ト色紙を出す。
五郎　アイヤ、おてまへに今日爰で、逢はうとは夢聊か存ぜず、それゆゑ持參いたさぬ。
三平　金が無けりや、おらア否だ。
大藏　至極尤も、今日掛合ひ申させたれば、間違ひはあるまいが、念の爲、三五右衞門どの、印形御持參なら、ちよつと手前へお渡し下されまし。
五郎　アイヤ、この印形は殿の御名代、公用に使ふ印形なれば
大藏　アイヤ、お爲に惡しうは計らひますまい。
ト五郎四郎が印形を取つて
三平、右聞きやる通り、大切なる印形、金子調達までは、お身にしかと預けたぞよ
ト三平に印形を渡し、三平、色紙を出して
三平　サア、色紙。

ト色紙を五郎四郎に遣り、包みし袱紗を殘し、色紙は
かり遣る。印形を取り懷中する。五郎四郎、色紙を取
つて

五郎　大藏、お見やれ。虫干しの砌り、折々拜見いたした
が、未だ變らず、見事なものではないか。時に三平、袱
紗を。

三平　これか。これは又、斯うやつて置いて、又なんぞの
品玉に使ふのよ。

五郎　成る程、さう心がければ、惡い事の手柄は出來ぬ。
なんと大藏、花は三吉野、人は惡黨。アハヽヽヽ。

大藏　ヤ、天晴れ末頼もしい。その心がけを見て、大藏が
お身に折入つて頼みたい事がある。なんと頼まれてくれ
まいか。

三平　藝者のおかんを、口說いてくれろか。

大藏　ナニ、もう知つて居るか。

三平　ハテ、そんな事の流れ寄るを待つから、藻屑よ。シ
タガ、貴樣のその顏で色事とは、アハヽヽヽ。
ト頭を押へて笑ふ。

大藏　イヤサ、戀は思案の外とやら。さまざま口說けど、
いつかな聞かぬ。意地張りな女めぢやてなう。

三平　喧嘩や打ち毀しなら、やつたやうぢやアねえが、色
事とは、ちつと宗旨違ひだ。金をくれるか。

大藏　望み次第。

三平　金をくれるなら、頼まれてやらう。

大藏　それは忝ない。
ト三平を大藏、扇にて煽ぐ。

五郎　コリヤ、大藏。
ト呼び、耳こすりをして
亭主に掛合つて、松山が身請けの相談。

大藏　先生、これに拔けがけ合點。
ト奥へ入る。

五郎　そんなら三平。何かの事を頼んだぞよ。
ト入る。三平、七內、權助、三人にて莨のんで居る所
へ、久五郎、供を連れて出て、酒肴を三平が前へ出し
て、供を返す。

久五　これは〳〵、藻屑の三平さまには、これに居らせら
れまするか。

三平　これは、誰れだと思つたら、椀屋の久ぼうか。見り
やアなんだ。酒肴。ア、こりやア又、甚平の野郎が、
巢を皆へに寄越したのだらう。

久五　イエ〳〵、そんな事ではござりませぬ。先達て葺屋町の芝居で、惡者に喧嘩を仕掛けられ、懷中の紙入れを取られましてござります。その金子はようござりますれど、大事のお屋敷へ差上げねばならぬ、菅家の有明の色紙、紙の間へ挾み置きましたが、紛失しましたゆゑ、甚だ困り入ります。

三平　コレ〳〵、滅法な事を云ふものではねえ。そりや、泥坊に取られたのだ。それをおれが取つたと云ふかえ。

久五　アイヤ、左樣ではござりませんが、そこが聞かぬ氣のあなた、金づくなら、いくらでも。

權助　そして、その酒は

久五　この酒肴は先達て湯島のお詫びやら、また近付きの印、どうぞ色紙をお返し、イヤ、お取返し下さりませうなれば、有り難う存じます。

ト此うち三平、知らぬ顏。

三平　カウ、てめえまだ、三ヶ月長家のおせんにはまつて居るか。

權助　まだはまつて居る。内の小指がせくゆゑに、どうもかうもならねえわな。

三平　ハテ、氣が弱い。屋臺骨を叩き毀してやれ。

七内　そんなら、お前が尻を持つてなら、一番ぶつかつてやりてえの。

三平　そこは、惡玉サ。また仲直りの酒でも飲みてえなア。

久五　左樣ゆゑ、酒肴をお納めあつて

三平　イヤ、知らねえ。三平さまは、酒が飲みたけりやア、酒屋も魚屋もお出入りがあるゆゑ、こんな腐れ肴は犬にでも喰はしてしまへ。

ト足にて酒肴を蹴る。

久五　すりや、どのやうに賴んでも

三平　この三平が知るものか。

ト立つて行きさうにする。

久五　どうぞ待つて。

三平　何がなんと。

久五　サア、譯の知れた色紙の盜人、喧嘩仕掛けの荒稼ぎ證據となつたこの手紙、藻屑の三平どのへ、やつより。

ト三平、膽を潰し、手を出して

三平　それを。

トかゝるを突き退けて

久五　サア、なんと覺えはあらうがの。

三平　ドレ、證據と云へば改めよう。
　ト手紙を取つて讀む振りにて、火入れの火にて燒く
エ、イ、なんだ。先達て諜し合せし通り、葺屋町の芝居へ誘き出し、成る程、色紙を盜んだ手紙だが、肝心の宛名がねえワ。
　ト久五郎、肝を潰し、手紙を見て
久五　證據になる手紙、なんで燒いたのぢや。
三平　コレ、ヤイ、宛名が無けりやア役に立たねえワ。ヤイ、わりやア太い野郎めだ。コレ、人に知られた三平さまを、盜人仲間と吐かしやアがつたな。
　ト下駄にて踏む。
この三平さまは、涙脆いから、一度は料簡するが、今度吐かすと、この首が飛ぶぞよ。
　ト蹴飛ばして睨む。
權助　イ、ワ、もう堪忍してやりなせえな。
　ト留める。三平、久五郎が襟を持ち、引摺り上げて
三平　これ見や。なまけた面な野郎だなう
　ト突き放し、唾をしかけて、せゝら笑ひ、三人、入る。久五郎、泣き居る。おかん、奧より出て
かん　久五郎さま、どう遊ばしました。

久五　おかんか。よい所へ來てたもつた。思案してたも。
かん　思案とは、なんでござんすえ。
久五　外の事ではないが、あの藻屑の三平に、いま逢うて證據の手紙を燒き捨てられ、却つて此方が逆捻ぢに。腹が立つて〱ならぬわえ。
　トおかんも氣を揉み、坐る
かん　どうで噂の惡黨、お前さんの手際に行かぬ筈、憎いは松山さんばつかり。
久五　コリヤ、おかん。其方とわしとは、乳兄弟の仲でもない。心があるならあるやうに。
かん　わたしや、そんな事は嫌ひでござんす。
久五　それでも妙に、松山との仲を裂きたがる。
かん　その事はナ、もう今に突き出されなさるは見るやらで、わたしや、お前さんの世話にもなつたこつちやからそれでその事を申すのでござります。
久五　そりや、眞實かや。
かん　アイ、誠でござんす。それより早いは、三五右衛門さんに請け出されなさんす。一體、松山さんは、あの三五右衛門さんに惚れてぢやわいなう。
久五　イ、ヤ、あれに於て、さういふ事はない筈。矢ッ張

り其方の心に、一物があるのであらう。
かん　イヽエイナア、松山さんは、さつぱり實が無いわいなア。
久五　實があるか無いか、長い目で見て居るがいゝ。
　ト花道より、瀧法印、鼠の小袖にて、手に緣切りのお札を持ちて出る。舞臺へ行き、おかんを見て
法印　おかんさん　お前、爰に來てかえ。
かん　アイ、今日は三五右衞門さんに呼ばれて來たのぢやわいなう。
法印　そんなら、どうぞこれを、三五右衞門さんにでも、松山さんにでも、お遣りなすつて下さりまし。
かん　でも、どんな物だか知れぬものを。
法印　ハテ、誰れか松山さんへ、久しく通つて來るお客の緣切りの御祈禱のお札でござります。
　ト久五郎立つて、瀧法印が側へ寄り
久五　ナニ、緣切りの御祈禱だ　して、そのお客の名は、何といふた。
かん　お前さん、出ずとようござります
久五　イヽヤ、聞かにやならぬ。サア／＼、早く云つたり云つたり。

法印　お客の名か、さつぱり忘れました。そして、此お札は、緣結びの御祈禱のお札でござります
久五　コリヤ、緣切りの御祈禱をするも、矢ッ張り金を取りたいであらう。サ、先が一兩なら、此方は五兩。
法印　アノ、先が十兩なら、お前は二十兩。
久五　先が五十兩ならば、此方は七十兩。
法印　そんなら、先が八十兩なら、お前は百兩か。アハアハアハヽ、ヘヽ／＼／＼／＼、ホヽ／＼／＼／＼。
　ト久しく笑つて
申しませう／＼。
　ト行きさうにするを、おかん
かん　モシ、法印さん。
　ト目で知らせる。
法印　ナニ、ようござります　お前だから來たが、これもみんな、金儲けでござります。アノ、その客の名は、旅屋久五郎が事でござります。
久五　エヽ／＼。
　ト膽を潰す。
かん　モシ、久五郎さんは、あなたでござります。
法印　エヽ、これは氣の毒な事を申しましたが、モウ、そ


二幕

れならば申しませう。モシ、斯うでござります。

ト下に坐つて

アノ、松山さんがわたしに云ふには、椀屋久五郎という て居る、古く通ふ客がある。モウ、どうした事やら、この節は、その久五郎が否で〳〵ならぬ。もう、顔を見ると身の毛がよだつて、飯は食へぬと申します。モウ、腹さんざ遣はせてしまつたから、懐が淋しくなつて來たから、一番三五右衛門さんに型を變へて、モシ、樂をする氣でござります。どうぞ緣切りの御祈禱をして下されと賴みましてナ、コレ、御祈禱を致しました。この札は二十一歳の男、椀屋久五郎、これ御覽なされ。

ト御祈禱の札を取出す。後の簾巻き上げると、松山、茶縮緬の小袖、緋縮緬の菊を金絲で縫はせ、紫縮緬の扱帯にて、莨のんで居る。法印が云ふ事を聞いて、膽を潰して居る。甚平、並んで居る。

久五　さういふ心と知らず、今まで鼻毛をよまれたか。口惜しいわえ。

法印　そりや、口惜しい段ぢやござりませぬ。それで、そこが女の心と秋の空、まして勤めの身ぢやものを、氣が寄らいでなんと致しませう。それにマア、べん〳〵と、あんまり薄のろい事でござります。

久五　モウ〳〵、先から突出されぬうち、此方から、さつぱりと退き状を書いてやる。

法印　左やう〳〵。

かん　思ひ切りの早いも男。硯箱は無し、紙はあれど、わたしがのは延べ紙。

法印　紙も矢立も、これにござります。

ト紙と矢立を出し、久五郎、書きさうにして

久五　今日の今までも退き状を書かうとは。

ト松山、飛んで出て久五郎が手を取つて

松山　思はぬ筈。心は變らぬ。緣切りの御祈禱のと、ありや、みんなあの人の、嘘ぢやわいなア。

法印　南無三寶。

ト逃げさうにするを、甚平、首筋を捕へ。

甚平　待ちやアがれ、法印め。サア、誰れに頼まれた有やうに吐かせ。云はぬと本山にも行つて、錫杖とめるぞよ。

法印　アイ〳〵、申します〳〵。あのネ、こりやアナ、情ない事を賴まれましたなア。おかんさん、こりや、あまり胴慾といふものでござりますぞえ。こりやア、みんな

お前が頼んだ事。
　ト甚平、久五郎、松山、膽を潰し
久五　そんなら、其方が。
かん　アイ、法印さんには、科はござりません。こりや、みんな此方の拵らへ事ぢやわいなう。
　ト おかん、下に坐る。
法印　そんなら、ちよつと行つて參じませう。
甚平　われにやアまだ用がある。すッ込んで居ろ。
法印　ハイ、アイ／＼。
　ト後へ退さつて居る。甚平、坐ると寶船落ちて居る。
甚平　これは何だ。時ならぬ時分に、寶船がある。この寶舟も、正月二日の晩に、いゝ夢を見ようと思つて、枕の下へ敷いて寐るも、寢返りをすりや、直ぐに忘れてしまふ。そして見りやア、七人居る中に、辨天が立つて、しかも琵琶を彈いて居るは、これもマア、譬へて云はゞ、町藝者といふものだ。器量はいゝが、根性骨は恐ろしいものだ。大勢の人中へ一人入つて、六人の男をちよろまかす、慾と色とで我が心、鏡にうつる物ならば、さぞかし顔の、エ、イ、見下げ果てた根性骨。
　ト久五郎、立つて側へ寄り
久五　イヤモウ、當てつけてばかり居ては腹が癒ぬ。コレ、おかんのろくでなし。三五右衛門と大藏と三つ鼎になつて、松山を彼方へ遣り、金にしようといふ慾心か。
　ト松山、立つて、おかんが側へ寄り、胸倉を取つて
松山　モシ、あんまり腹が立つわいなア。大方、久さんに惚れて居て、縁切つて彼方へやり、お前の色にせうといふのか。
久五　それ／＼、二つの中より譯はあるまい。
　ト松山、おかんが胸倉を取り、突き廻すうちに、おかんが懐より文落ちる。甚平、取つて
甚平　ア、なんだ、文が落ちた。
かん　オヽ、その文は。
　ト取りさうにする。
甚平　見せともながるは、曲文だ。
かん　イエ／＼、そんな文ではござりません。
松山　大方、久さんへ附け文か。
甚平　マア、何にしろ、讀んで見よう。なんだ。御直々にては人目を憚るゆゑ、文にて申し入れ候ふ。兼ねてこそもじに頼み候ふ……
　ト久五郎、立つて文を取り、讀む。

久五　弟久五郎さま、段々の身持ち不埒にて、宿には一向に居り申さず、困り入り候ふ。こりや、おかしな文言。

ト松山、立つて文を取つて

松山　跡はわたしが……なんと、そもじが働らきにて、松山との仲を裂き、縁の切れるやうに頼み入り候ふ。こりや、味なお文の文言でござります。

ト文を甚平に渡す。甚平、取つて

甚平　待ちなせえ、大分勝手が違つて來た。「されば一家親類、我れにも本望これに過ぎず、何卒譯ある久五郎の身の上を、第一に頼み入り候ふ。おかんどの、椀屋久兵衞」

ト久五郎、膽を潰し

久五　こりや、贋ひもない、兄者人の自筆。

松山　そんなら。

かん　その文を見られては、もう、心盡しも水の泡。云ふも憂し、云はねばならぬ仕儀となり、もう、是非なう樣子を

トおかん立つて、松山、久五郎が仲へ坐り、文を取つて

かん　申します。

トその文を持つて、愁嘆のこなしあり

暮にもお歳暮に參りましたら、かんか、よう來た、マアマア、此方へ通れと、居間へお招きなさんして、段々の弟が身持ち、親類は寄つて勘當、是非久離切れと云へど、義理ある弟、どうした事やら、可愛ゆうて、蔭になり日向になつて防いだが、モウ、あゝ募つては防がれぬ、どうぞ其方の才覺で、松山どのと縁切つてはくれまいか、ハテ、さうすりやア双方浪風なく、弟が身持ちも直り、一生の恩に着ると、家來のわたしに手を合せて、頼まれた時の切なさ辛さ、久兵衞さんのお心は、マア、どのやうであらうかと、又こんな事云うたら、よう噓をつく女子ぢやとも思ひなさんせうが、互ひに思ひ合うた仲、それを無理に引離さうのなんのとは、わたしや微塵さら〳〵そんな心はないわいなう。納まるやうにと、請合うて來たその日より、心は鬼に內證の、苦勞もお前が大切さ、此方は弟を思ひ、また此方は命を掛けた戀路、恩と戀とを身一つに、包むところはお主の爲、只、月に五度か三度か、一度になりさへすれば、ようござんす。今の誠は末の仇、細う長う逢はしやんすが、互ひの心中、誠の戀路。甚平さん、マア、そんなものではないかいなア。

甚平　甚平が凹んだは、これぼつかり。
かん　又、わたしおやというて色戀こそ嫌ひなれ、木から生れた身ではなし、さうまんざらの、また野暮でもないわいなう。
久五　おかんや、兄貴の心遣ひを見ては、どんな松山でも思ひ切らねばならぬ。
松山　それ〳〵、末の事さへ承知して下さんすりや、當分逢はいでも
甚平　また立派な口を開いて、煩らはうと思つて。
　ト瀧法印、泣きながら出て
法印　モシ、悪い事なら、頭でわたしや頼まれは致しませぬ。聞けば、大勢の難儀になる事、悪い事と思ひながら頼まれました。こんな事は本山からの、きつい戒めでござります。おかんさん、もう歸つてもようござりますか。
かん　これは〳〵、大きに御苦勞様。
法印　アイ〳〵。とんだ目にあうて、いま〳〵しい。
　ト奥へ入る。
かん　互ひに想ひ合うた仲、そこを無理に引分ける、その時は

甚平　思案の外のこれも又。
　ト甚平、立つてあたりを見て、蛤貝の落ちて居るを取つて
コレ、爰にいゝ物がある。この蛤の片割れを、松山さん、お前持つて居なせえ。おかんさん、時々貴様、旦那の所へ見舞ひに行くだらう。その時旦那の首尾を見てソツとこの蛤を久五郎さんに渡さつせえ、久五郎さん、この蛤を持つて、松山さんの所へ行くのだ。松山さん、久五郎さんがこの蛤を持つて來た晩は、いつでも貝合せをする晩だと思ひなさい。又この蛤が無い晩は、いつでも拔けかけだと思ひなせえ。
　ト蛤をおかんと松山へやる。
松山　氣遣ひなさんすな。この蛤の無い時は、顔も合せる事ぢやないわいなう。
甚平　それ〳〵、おかんどんえ、お前が證人だ。
かん　シタガ、松山さん。よう念を入れて置いて下さんせ。また蛤の似せ物を持つて來やうも知れぬ。
甚平　なにサ〳〵、此方に斯ういふ手本があるから、そりやならぬ。
久五　とんとおれを、悪金遣ひか何ぞのやうに。

甚平　ト甚平、手紙を拾ひ上げ、見て
若旦那、こりや、斯うして置く手紙がやあるめえが
ト宛所を見て膽を潰し
こりや又、彼奴等が仕業にかゝつて……ドリヤ、行つて一詮議して來よう。
かん　お前が行つては、跡がむづかしい。こりや、矢ッ張りわたしが。
甚平　無理に行くのも大人氣ねえ。そんなら、おかんどん、何かの事を頼みましたぜ。時に、若旦那、お前、もう、歸りなさい。
久五　歸るは歸るが、その蛤を今日の分にしてたも。
甚平　もう貝合せをする積りか。
かん　此まゝでは、事が濟むまい。そんなら、この蛤を、今日の分に
ト松山を久五郎が側へやる。
松山　でも、おかんさんの手前、どうも面目ないわいなう。
久五　なにサ、構ふ事はない／＼。
ト久五郎、松山が側へよろしく坐る。
甚平　若旦那が、あの蛤が欲しがるも、誠はあの赤貝が喰ひたいばつかり。何事もあつさりとして、早くこの場を去る方が、御勝手でござりやせう。
かん　それ／＼、その蛤も、あんまり長うはたもたぬぞえ。
甚平　それ／＼、おいらは脇を向きみにして居よう。思へば馬鹿々々しい。
ト甚平、入る。久五郎、松山、後より暖簾の内へ入る。
おかん一人、舞臺へ殘る。
かん　なんぼお若いといつても、マア、人の事も思はずに……あの睦まじさを見るにつけても、湯治場で母さんと二人連れ、塔の澤の諏訪の御社、しかもその夜はお祭で夜參りに行た戻りがけ、大勢の人込みに、ツイ、母さんを見失ひ、宿を尋ねて歸りの道連れ、知らぬお方が、アノ暗まぎれ、恐い半分ツイ
トあたりを見廻して、懷中より印籠を取り出し
また逢ふまでの印にと、下さんしたこの印籠、男嫌ひの藝者の身も、お前に立てる心の操、縁さへあつたら、エエ、まゝよ。
ト、チヤン／＼チヤンと唄になり、奥より三平、出て、おかんと顏見合せ、仕打ちあり、三平、花道の眞中へ行く
申し、藻府さん。

三平　おれが事かえ。
かん　爰らあたりに人は居ず、マア、お前の事であらうかいなう。
　ト三平、本舞臺へ來て
三平　と呼びかけたのは、何ぞ用かえ。
かん　互ひに顔は見知り合つて居ても、まだお近付きにならぬのは、マ、どうやらわたしの耻のやうに思はれて。
三平　アノ、この三平を。
かん　昔の白柄神祇組とやらは知らねども、マア、今の世でお前と。
三平　ヘヽヽ、さう立てころばされちやア、おれも又江戸藝者でも、一と云つて二とない湯島のおかんと、碎けた遊びをしねえも、おれが苦になつて居たて。
かん　また、世辭かいなう。
三平　イヽヤ、冗談ぢやねえ、おぬしにちつと折入つて
かん　わたしもお前に折入つて
三平　頼みたい事もあり
かん　話しもあり
三平　幸ひ丁度
かん　藻屑さん
三平　おかん。
かん　マア、とつくりと
三平　話さうか。
　ト仕打あつて二人坐る。おかん、莨吸ひつけて出して、
かん　もてるかえ。
三平　イヽヤ、根ッからもてねえ。
かん　いづくも同じ秋の夕暮れ。
三平　おかん、色を一人、取持つてくれ。
かん　悪性な。マア、その上に、幾人欲しいのぢやぞえ。
三平　おらア色事と土用干しは、ツイ干した事がねえ。
かん　嘘ばつかり。
　ト膝を抓る。
三平　アイタ〳〵。
かん　アノマア、仰山な。
三平　おかん、おぬしに折入つて頼みたいといふ事は、退引きならねえ戀の取持ち。茶屋女や、太鼓持ちがするやうな事だが、男と見かけられて頼まれたら、せう事がねえ。馬鹿なとは思はうが、爰は一番、藻屑を立てゝ
かん　そりや、爰のお客の大藏さん。
三平　オヽ、ヨ。

かん　高が藝者のわたしでも、一旦斯うと云ひ出したら、後へ引かぬが、逢引とやらおやわいなア。
三平　すりや、どのやうに頼んでも。
かん　わたしが片意地にナ、大藏さんが、よう知つてござんす。
三平　おきやアがれ、駄藝者め。下から出りやア付けあがつて、爰なはツつけ女め この三平さまは癇積持ちだぞ。物柔らかに云つて聞れはいゝ事にして、これからは又自棄だえ。おぬしが否と云つても、應と云うても、抱かせて寢させにやならねえものを。吐かせ〳〵。
ト立つて、また大肌脱ぎになつて
女め、どうだえ。駄藝者め。ふんばりや、ヤイ、物を吐かせ吐かせ。
トおかん、知らぬ振りにて莨をのんで居る。三平、呆れて、手を組んで思案して、あたりを見て
三平　コレ〳〵、おかん、泥水を呑むやうでもねえ。さうとは、堅えぞえ〳〵。
トあたりを見て、肌を入れて下に坐る。手を突いて
コリヤ、おかん、武士が手を突いて、首を下げて頼み申す。なんと、一番器量を立てゝくれ。てめえが男嫌ひな所へ、こんな事を云うたは、おれが悪かつた。人の噂に小町だの、穴無しだのと、ろくな噂のねえおぬし、世間で云ふにも、湯島のおかんは誠に堅い、外の藝者は相對づくで、轉ぶの寢るのといふ事もあつたが、おぬしに限つて、履物がいゝかして、轉ぶ事はさておき、けつまづいた事もねえおぬしに、こんな事を云つたが、悪かつた。男と見かけられて、頼まれたら仕方がねえわサ。
かん　思ひ廻せば湯治場で、今まで堪へた辛棒も水の泡。大藏といふ名の通り、好かねえ　な野郎だが
三平　何事もお主の爲。アノ、久五郎さん
かん　とたつた一度、抱かれて寢てえか。
三平　大藏は否。わたしやお前に惚れたわいなう。
かん　おかん、そりやア、何の事だ〳〵。
三平　今日が日延べの切れとやら。
かん　エ、イ。
三平　三平さん、エ、モウ、氣が急　わいな。
かん　よ、妙々。
三平　三平さん、どうで一度は破らねばならぬ操なら、好かねえ人に解くよりも、好いたお前に解いたら、ツイ知れさうな事。

ト三平、頷づいて、側にありし寶船を見て、懷中より色紙を包んだ袱紗を取出し、寶船を包み、懷中し、おかんに倚りかゝり

三平　おかん、そりや本當かえ〳〵。いつそ女の方から据ゑ膳とは、あんまり呆れて。マア、茶を飲んでから、思案して見よう。

ト三平、茶を飲む。おかん、取つて

かん　エ、モウ、何ぢやぞいなう。

三平　もう一遍、妙々。

かん　お氣に入るまいが、ちよつと奥へ來て下さんせ。

三平　アイヤ、義を見てせざるは勇なし。

ト二人立つて

折角奥へ入つても、何の話しの小町とやら、それこそほんの情のないのか。

かん　阿房ばつかり。

三平　そんなにあるか。

かん　知らぬわいなう。

ト抱き付くを三平、おかんが脊中を撫で

三平　アヽマア、可愛い者やな〳〵。

トおかんを突き放して、懷中より似せの色紙を取り

オツト、その色仕掛けは、これが欲しいか。菅家の色紙を取らうばつかり。色で仕掛ける古い仕組みの

かん　なんのマア、わたしがさうではなけれども、

三平　イヽヤ、おぬしが主筋、久五郎が難儀になる、菅家の色紙、不思議におれが手にあるが、おぬしが心の不便さに、おれに遣らうワ。

かん　そんなら、わたしが云ふ通り。

三平　イヽヤ、遣いちやア寢ねえ、金にする。色に迷つて色紙を遣つたと云へば、あんまりおれも薄のろいて。どこまでも金にする。金で買やれ。

かん　して、その金高はえ。

三平　づッと負けて二百兩。

かん　二百兩が三百兩でも、そりやどうなりと。でも、今というては

三平　ないは承知だ。證文書きやれ。

かん　證文とはえ。

三平　ハテ、二百兩濟まねえ時にや、女房にならうと云ふ證文よ。

かん　そりや、いとより易い事。

ト證文を書くうち、三平、權助を呼んで耳こすりなし

て、權助、奥へ行く、おかん、證文を書いて
して、宛名はえ。
三平　小泉大藏よ。
かん　そりや、どうも。
三平　そんなら、色紙はいらねえか。
ト色紙を頭の上へのせる。
かん　何事もお主の爲。
ト小泉大藏と書く。
三平　サア、取替へよう。
ト色紙を遣つて證文を取ると、奥より權助、七内、喧嘩をして出る。若い者大勢、抑へる。おかん、三平、奥に入る。
皆々　どうしたのだ。譯を聞かう。
權助　譯はねえ。いま誂らへの喧嘩だから、譯はねえや。矢鱈に腹が立つて〱ならん。合點しねえ〱。
ト立騒いで居る所へ、三平、鼻紙袋を持つて出る。
オヽ、剛勢に胸が痛かつた。
三平　さう〱、これから褒美の一卷きだ。
ト紙入れより金子を取出し
サア、てめえ達は一兩づゝ、
ト權助、七内、二人へ一兩づゝやる、若い者を見て
大分大勢だらう。サア、一分づゝ。
トやる。
皆々　こりやア有り難うございます。
ト七内、權助、若い者入る。
三平　今年は有卦に入つた覺えは無いが、無性にいゝ事ばかり。
ト久五郎、刀を拔いて出て
久五　三平、急に色紙が無けりや、この久五郎、絶體絶命、觀念しろ。
ト切りさうにするを、三平、留めて
三平　コレ〱、滅多な事を云ふな。色紙は先刻おかんに遣つた。瓜や茄子ぢやあるめえし、滅多に人が切られるものか。大べら坊め。
ト手に下駄を持つて花道へ行く。奥よりおかん、色紙を持つて出る。後より松山、出て
かん　モシ、久さん、色紙が手に入りました。
久五　ナニ、色紙が出た。アヽ、有り難い。わしが爲にはそなたは命の親。
松山　久さん、こんな嬉しい事はないわいなア。

ト色紙を出し見ると寶船。膽を潰して
久五　こりや、寶船。
かん　そんなら、矢ッ張り
久五　騙されたか。
かん　して、三平めは。
久五　もう、歸つた。
かん　往來の道は
久五　大雲寺前。
かん　さうぢや。
ト行きさうにするを、久五郎、刀を出して、おかんにやる。
久五　假にも武士ぢや。ソレ。
かん　そんなら、旦那を頼んだぞえ。
ト刀差して行く。
松山　合點ぢや。
かん　ちつとも早く、さうぢや。
ト久五郎松山は、おかんを見ると、チョン／＼にてぶん廻し。
本舞臺、大雲寺前にて、右に地藏堂あつて、左に筵藪、眞中に小さき松あり。時の鐘、大雨、蛙の聲にてとまる。花道より三平、傘をさして出て、花道の眞中にとまつて
三平　雨もやんだ。
ト傘をつぼめて本舞臺へ行く。切り幕より、おかん
かん　オ、イ／＼。
ト飛んで出て、三平に突きあたる。
三平　誰れだ。
かん　アイ、わたしでござります。かんでござりますわいなア。
三平　おかんか。おりやア又、切り幕の内から、オ、イオオイと云つたから、また定九郎かと思つて、悔りした。夜る夜中、なんだ。
かん　悪いぞえ／＼、お前も人に知られた三平さん、わたしも人に知られた藝者のおかん、お前に騙されては、どうも立たぬ、この顔が。今日色紙が無ければ、お主へどんな難儀と、お前と計つてあのやうに、證文まで上げたぢやござんせんか。それにマア、ようも／＼、あのやうな。
三平　コレ／＼、おかん、おらアそんな悪氣のある男ぢや

ねえの、見た通りの正直者だワ。本當の色紙が遣つたの
だワ。
かん　どうで、一筋繩では行かぬお前。覺悟極めて、この
一腰、男になつて
ト刀に反りを打たせる。
三平　それで、おれを切るのか。
かん　直ぐに行かずば、此方も横、云ふも矢ツ張り、色紙
が欲しいゆゑ。もう奪うなるからは、大藏は愚か、たと
へ乞食非人でも、この身を汚して濟む事なら、色紙ゆゑ
なら命はいらぬ。慈悲ぢや、情ぢや、三平さん。物の哀
れを知るも武士、難儀を見捨てぬが男達ぢやないかいな
ア。
三平　成る程、よくこんな事は芝居で敵役がする事だ。お
れも又、人樣に、憎まれてえ事もねえ。そこが男は當つ
て碎けろぢや。ほんの、この野郎は。
かん　そりや、忝ない。
ト三平、提灯を松の木へ掛けて、棒にておかんをぶつ
こりや、騙し打ちに
三平　邪魔になるうぬだから、叩き殺してやらう。
かん　さう云はしやんすりや此方も意地。さう手輕うは行
かぬぞよ。
三平　さう吐かしやア、斯う。
ト立ち身になり、提灯を拂ひ落し、闇仕合ひになつて、
互ひの懷中へ手を入れて、二人ながら包みを取出し、
ホツと息をつくと、振つて見て、簪と印籠を取出す。
かん　こりや簪。
三平　こりやア印籠。
ト蕎麥賣り出る。
蕎麥　ト出て、膽を潰して
蕎麥よう〳〵、大平、しつぽこ。
拔いた〳〵。
ト引ツ込む。三平、おかん、蕎麥賣りの行燈にて、簪
と印籠を見て
かん　この簪の丁子車は、わたしが定紋。
三平　この印籠の模樣は紅葉。これはおれが紋所。
かん　桑といふ字は、この身の幼な名。
三平　こりやア覺えあるおれが印籠。
かん　これも慥かに、わたしが簪。
三平　これを所持する、わりやア。
かん　お前は。

中幕



三平　すりや、久しい跡、箱根の湯本で
かん　その湯治場の暗まぎれ
三平　一杯機嫌のおやらつきに
かん　顔も知らず
三平　姿も見えず
かん　枕交した
三平　女はわれか。
かん　男はお前でござんしたか。
三平　斯ういふ事と
かん　知らず
三平　知らずに
かん　危ないこの場で
三平　思ひがけねえ
かん　證據と
三平　證據の
かん　しつくり合ふも
三平　盡きせぬ縁で
かん　あつたなア。
　ト　おかん、三平に縋りついて
わたしが男嫌ひの藝者の身も、お前に立てる心の操、お前に逢ひたいばつかりぢやわいなう。
三平　おれとてもその通り、箸にもかゝらぬ身持の内にも、色ばかりに迷はぬは、この簪へ立てた義理。して、久五郎どのゝお身の上は。
かん　サア、それは。
　ト雨頻りに降る。三平、おかんを抱いて傘をさす。ぶん廻し
本舞臺、金杉の稲荷前にて、稲荷宮、木影に見える。初午の體にて幟立ち、馬鹿囃子にてとまる。花道より五郎四郎、傘をさし、後より清九郎、唐棧の袷、絞りの襦袢、尻を端折つて、跡より駕籠舁き八助、五助出て、本舞臺に行つて
五郎　雨も大きにやんだ。
　ト傘をつぼめる。三平、花道より、緋縮緬の襦袢の肌を脱ぎて、尻端折りに、本舞臺に來て
三平　三五右衛門か。
五郎　三平か。
三平　オヽ、嬉しかつた。
五郎　おれも、おぬしに逢つて氣が落ちついた。時に、お

かんの事は。
三平　イヽヤ、もう變替つたワ。この三平は魂が引ツくり返つたぞ。三五右衛門、色紙を出せ。
清九　コレ、エイ、さう物事を變替へするは。
三平　知れた事だワ。口說いてくれろと頼まれた、湯島のおかんはおれが女房。それに繋がる久五郎どのの身の上は、金澤の大殿、お手廻りの女中に手が附き、産み落したは久五郎どの、椀屋久兵衛の先の妻に下された。何もかもおかんが話し。
清九　それにわれは、ゆかりはねえ筈。
三平　オヽ、おれも金澤の血筋。
五郎　何がなんと。
三平　御祕藏の御太刀を折りし科にて、縛り首にもあふべき所を、大殿のお情にて、追放仰せ付けられた、藻屑三左衛門が子の三平だワ。惡心非道の夢の覺め口、なんと膽が潰れたか。
五郎　われがさう立役に、引ツくり返ればおれも又、元の五郎兵衛だワ。おれが命で、金の代し手があるものか。それをウカ／＼貸すは、われが全體のろまだわえ。おれが手に入つたものだ。乞食へやつた強飯同然、お返しはねえワ。馬鹿な面だワ。
三平　ちつと此方に入用だえ。否でも應でも出さにやならぬワ。キリ／＼色紙を渡せエ。
ト五郎四郎、色紙をソツと清九郎へ渡す。清九郎、懷中して知らぬ振りにて居る。
五郎　遣らざア、どうする。
三平　斯うだワ。
ト五郎四郎が眉間を切る。
五郎　コリヤ。
ト木蔭へ入る。八助、五助、棒を持つて
兩人　三平、覺悟はいゝか。
三平　糞を喰やアがれ。
トたてになる。樂屋にて面白き囃子ある。
清九　其うちおいらは
ト逃げて行く。三平、五助を殺す。八助へ當身を打、花道より大藏、晒の手拭にて頰冠りをして、尻を端折り、朱鞘の大小にて、本舞臺へ行つて、三平に突き當る。
大藏　三平か。
ト三平、刀にて

三平　三五右衛門。
　ト切り殺す。
ヤアく、最早人は居ぬか。
　ト刀を提げてあたりを見る。後より五郎四郎出る。
五郎　觀念しろ。
　ト出て切つてかゝる。立廻つて直ぐに切り殺し、三平懐中を捜すに色紙は見えず。
三平　死身になつて大勢をばらしたも、色紙を無事に取戻してえ爲ばかり。此奴等が手に無けりやア、三平が運も盡きた。さうぢやく。
　ト腹を切りさうにする。花道よりおかん出て、本舞臺へ來て
かん　アヽ、モシく、すりや、三五右衛門を手にかけ、色紙が無いゆゑ死なうとは、お前に似合はぬ。急く所ではない。マアとつくりと、思案して下さんせいなア。
三平　心がゝりは、椀屋の手代、もしや彼奴が
かん　お主へ手渡しするまでは
三平　おれが命は、おれに預けて
かん　この人殺しは、わたしが。
三平　でも、科無き其方が。
かん　ハテ、鬼の女房にや
三平　鬼神がなるか。
　ト八助、出て
八助　三平、捕つた。
　トおかん、八助を刺し殺し
三平　毒を喰はゞ
かん　皿まで。
　ト甚平出て、二人の中へ提灯を出す。三平、提灯を叩き落し、おかん、顔を隠す。甚平、三平、見合つて、尻を端折つて、チョンくくく。　ひやうし幕

## 三幕目　椀屋の場

役名――椀屋久五郎。植木屋文藏。番頭、清九郎田川壽德、八谷三五右衛門。會津屋作兵衛。手代、伊八。同又七。下女、おきよ。座頭、當利。同、門彌、同、虎彌、蔦の者、吾次。代官、元右衛門。下女、おきよ。久兵衛女房、おまつ。傾城、松山。

久兵衛妾、おさん。椀屋久兵衛。

本舞臺、正面二重舞臺。見附け赤壁、帳面、納戸口いつもの所に門口。すべて椀屋の體。幕の内より、清九郎、風呂敷を前垂れにして、鰹節を搔きながら、獻立を見て居る。おきよ、下女にて、膳を拭き居る。音次、鳶の者、又七、手代。擂り鉢を擂つて居る。當利。門彌、虎彌、座頭にて喚いて居る。てんつゝにて幕明く。

三人　どうでござる。祝儀は遣らつしやらぬか〳〵。

清九　さて、取合せのよい獻立、花鰹は上置きになるなア。

又七　目も見えぬ癖に、口は達者な奴だ。

當利　ハテ、目の見えぬ者には、口が達者なものサ。

音次　醬油樽の呑み口で、得て廻るものサ。

門彌　官人の弟子、長袖の自分どもを

三人　なんと云ふのぢや〳〵。

音次　コレ、何をやかましく云やアがる。若旦那さまへ嫁御も取らぬのに、祝儀寄越せも凄まじい。

當利　云うたらどうぢや、取る筋があつて取る。

音次　取る筋が凄まじいわえ。

門彌　イヤ、この男は、えらい事を云ふわいの。

虎彌　この日が明いて、おれどもの面が見たい。

當利　亭主に逢うて、祝儀を貰はう。

三人　亭主に逢はう〳〵。

ト三人、立ちかゝる。皆々支へる。音次、又七、座頭を相手に摑み合ふ。清九郎、おきよ、捨ぜりふにて支へる。

トおすめたる通り神樂になり、奥よりおまつ、若衆しにて、盆に祝儀包みを持つて出て、この中へ入り

まつ　マア〳〵、待たしやんせ〳〵。

きよ　ヤア、あなたは御新造さま。

まつ　何を騒がしい。今日はめでたい日ぢやぞ。静かにしやいの。

當利　其めでたい祝儀を取りに來た者を、ねだり者のやうに云ふわいの。

門彌　聞けば、御内儀さうなが、此方は官のある者だ。

虎彌　此やうに惡口されては

三人　料簡ならぬ〳〵。

まつ　イヤモウ、これに居る者の不調法、今晩は婚禮、取

込んで居れば、腹の立つ所は、料簡なされて下さりまし。
當利　其やうに、温なしく云はしやる事ならば、なんの此方も聲高に云ひませう。
音次　エヽ、御新造様、捨てゝ置きなされませ。
まつ　これサ、音次、默つて居されな。
三人　さうして、祝儀はナ。
まつ　わざと祝うて上げます。
　ト祝儀の包み錢を出す。當利、取つて
當利　これは、忝なうござりまする。コレ、門彌、祝儀祝儀。
門彌　ヘヽヽハヽヽヽ。
　ト取つて
これは、御新造様の御祝儀、めでたう申し受けまする……
しかも、五百ぢや〳〵。
虎彌　へイ〳〵、忝なうござりまする。
當利　祝儀さへ取れば、此方どもは
虎彌　そんなら、モウ
門彌　ニリヤ。
　トになしあつて
開きませう。

　ト杖を振ると、通り神樂にて、捨ぜりふ云ひ〳〵向うへ入る。
音次　イヤ、太いどう盲目どもだ。
清九　彼奴等に構ふは、かつたいに棒打ち、盲目に杖ぢや。
音次　役にも立たぬ事に、手を明けた。
まつ　さうして、清九郎、料理はどうぢや。拵らへはもうよいかや。
清九　この通りでござります。これから揩り身にかゝりませう。
音次　ドレ〳〵、おいらは草臥れた。一服のまう。
まつ　イヤモウ、譬へにさへ、近所に事なかれと云ふではないか。めでたい今宵。何事も内證に、愼しむがよいわいなう。
又七　イヤ〳〵、申し御新造さま、この五日の晩、金杉の人殺しの事を、お聞きなされましたか。
まつ　なんの〳〵、わしがそんな事を聞かうぞいの。
又七　アノ、この月の五日の晩、金杉の稲荷前で、侍ひが切り殺されたとの噂。その又、殺し手は
清九　そりやおれが……イヤ、おりや知らぬが、どうで吉原歸りの喧嘩であらう。

トこなし。

まつ　モウ〳〵、そんな氣味の悪い話しは、今日のやうな日には、云はぬものぢやわいなう。

清九　時に、若旦那さま久五郎さまは、お歸りなさらぬかな。

まつ　それで、方々。尋ねにやつてあれど、もうおッつけ歸つて見えるわいの。

清九　イヤ、心元ない。もう日が暮れるのに、今に歸らつしやらぬは、ちよつと様子を聞いたが、彼の松山と逃げ退く〳〵とやら、引上げたとやら。あの賣女に憂身をやつして、肝心の金澤のお家へ差上げる、菅家の色紙の事は。

オヽ、昨日、八谷三九右衛門さまが、私しを呼び付けて、色紙が延引ゆゑ、お國の首尾が悪いと、それは〳〵大抵詰められた事ぢやアござりませぬ。延引しては、久五郎は元より、兄久兵衛も、きつと曲事に申し付けると、何か目の出る程、きめ付けられました。

ト云ひ〳〵、無性に擂り鉢を擂る。擂り鉢、あちこちと動く。

オツト、擂り鉢も辛いかして、逃げ歩き居るワ。

まつ　ドレ〳〵、わしが押へてやらうわいの。

清九　モシ、御新造様、一體こちの旦那は、いつぞやからブラ〳〵と、あの御病氣は、何ぢやと思つてござります え。

まつ　こちの人の御病氣は、鬱性と云ふ、お氣のもつれから出た病サ。それに順氣劑を盛つてござれば、大分御氣分がよいと、旦那どのも云うてござるわいの。

清九　イエ〳〵、あの御病氣は、元はお氣のもつれではござりませぬ。あの妾のおさんからでござりまする。

まつ　そりやどうして。

清九　ハテ、おさんは初手が奉公人、それを旦那が摘んで今では世間晴れて妾づら。肝心の御本妻は尻に敷き、なんでも内の事をおッ張つて、この番頭を始め家内の者をちよつかに見くだし、旦那の鼻毛を讀み拔いて居るからでござります。

まつ　それはしたり、おさんどのゝ事を、悪う云やるないの。

清九　イヤ、悪う云ふではござりませぬ。旦那のお為でござりまする。この擂粉木もナ、擂粉木のやうに稼ぐ旦那に引ッ付く擂り鉢。ここで彼の擂鉢が、常々云ふには、なんぼ可愛いと仰しやしても、みんな嘘、矢ッ張り御本

妾のお前さんが、可愛からうがなんぞと、身知らずのこの擂粉木が、涎を流して、お松のまの字を聞くも嬉しおさんの、さの字でさつぱりと去りこくると、妾のおさんに旦那が足を撫らせながらのお話しを、この清九郎は、とつくりと聞きました。

ト此うち上の障子屋體の障子を引抜く。久兵衛、中月代、鬘卷の形、おさんに髮を結はせ、聞いて居る。

久兵 清九郎、そりやどこで。

清九 ハテ、御病床で。

ト おまつ、久兵衛を見て

まつ これはしたり、お前はいつの間に。

清九 ほんに旦那。

久兵 イヤ、擂粉木ぢや。

清九 エヽ。

さん この擂り鉢も、とつくと聞いて居たわいなア。

清九 南無三、又七も來い。

ト擂り鉢を抱へ、又七も奥へ入る。久兵衛向うへ出る。

久兵 生れ付きとは云ひながら、ても蔭口の惡い番頭どの。

さん 常から、憎てらしうてたりませぬわいなア。

吾次 思ひがけない所へ、旦那がお出でなされたゆゑ、コソレ〳〵逃げて行つた態は。

きよ よい氣味でござりましたわいなア。

ト此うちおまつ、久兵衛を見て

まつ 申し、お前は髮を結うてぢやあつたが、大事ないかえ。

久兵 あんまり、むしやくしやするによつて、殊に晩には久五郎、大事の婚禮、それで月代は剃らずとも、おさんに髮をばかり、取上げさせたわいの。

まつ そんなら、幸ひ奥にお薬がかけて、溫まつてある程に、おきよ、ちよつと持つて來てたもいなう。

きよ ハイ〳〵、畏まりました。

ト奥へ入る。

久兵 イヤ〳〵、髮結うて、氣遣ひな事はない。この間まで胸先が痛んでならなんだが、墨庵さまのお薬のお庇で痰も鎮まつたれば、心持ちもずんとようて、平常の通りぢや。

まつ それでも、養安さまのお見立は鬱症とあれば、氣を開く方がようござんすわいなア。

ト奥よりおきよ、盆に薬を載せて持つて來る。

きよ 申し、御新造さま。

トおまつに出す。取つて茶碗を見て

まつ　オイ〳〵、よう澁まつた。サア、お藥。

久兵　オイ〳〵。

ト取つて戴いて服み

弟久五郎に、まだ歸らぬか。

まつ　おツつけ歸つて見えませうわいなア。

久兵　見りやア、手代の伊八も居ぬが、アノ伊八はどこへ行た。

さん　今朝、わたしが頼んで、堀の内へ護符を受けに、行てもらひましたわいなア。

まつ　ほんに、おさんどの、堀の内の護符とは、よう氣が付いた。わたしもさう思うて居たわいなア。

さん　サア、わたしも堀の内の祖師さまは、常から信心なれば、代參がてらに護符を受けに、伊八どのを頼んだわいなア。

吾次　イヤモウ、堀の内の張り護符は、きつと驗が見えます。旦那は本腹に、いよ〳〵違ひはござりませぬ。其お禮參りには、私しどももお供いたしたうござります。

久兵　オヽ、今夜の祝言さへ、めでたう仕舞うたら、お禮參りに家内の者、殘らず連れて參らう。

松三　それは嬉しうございますわいなア。

トてんつゝになり、向うより作兵衞、袴羽織にて出て來る

作兵　これは久兵衞どの、おまつどの、今晩はおめでたうござりまする。

まつ　これは仲人の作兵衞さま。

久兵　段々御苦勞、先づ首尾よう、今宵いよ〳〵。

作兵　嫁入りの祝言、もう日が暮るゝに間もあるまい。支度がよければ、先へそろ〳〵迎ひに行かうと思つて出かけました。

久兵　成る程、本鄕五丁目、道が遠いから、迎ひにござつたならよい時分。女房ども、こちの迎ひには誰れをやる。

まつ　又七に云ひ付けてござりまする。又七や〳〵、ちよつとおぢや。

又七　ハイ〳〵、もうお迎ひに參るのでござりますか。

ト云ひ〳〵羽織を着て、袴を持つて出る。

まつ　コレ、云ひ付けて置いた通り、嫁の迎ひに吾次を連れて、作兵衞さまも御一緒に。

又七　畏まりました。吾次、提灯の用意はよいか。

吾次　そりやア、さすものぢやない。

ト提灯を見せる。

作兵　何も彼もよけりやア、サア、行きませう。

久兵　段々と御苦勞でござりまする。

作兵　なんの御苦勞、云はゞこれも金儲け。

ト皆々を見て

ハヽヽ。サア行きませう。

又七　音次、供せい。

音次　おきやアがれ。

ト通り神樂になり、作兵衛、又七、音次、向うへ入る。

さん　申し、旦那さま、お松さま、あのやうに仲人さまの作兵衛さまが、お迎ひに行かしやんしても、肝心の久五郎さまが、まだ歸らずおやが、大事ござんせぬかいなア。

久兵　ハテ、知れてある今夜の祝言、暮れまでには弟も歸るであらう。それよりは女房とも、奧座敷を片付けて、島臺床飾りもとつくりと。

まつ　アイ〳〵、合點でござんすが、いよ〳〵久五郎さまが、歸つて見えませうかいなア。

久兵　ハテ、歸らいで堪るものか。マア〳〵、おれが云ひ付けて置いた通りに。

さん　旦那さんが、あゝ云うておやゝ、お前にもそやうと

まつ　そんなら、わが身も來て、手傳うてたもれ。

ト合ひ方になり、おまつ、こなしあつて、おきよを連れて奧へ入る。

久兵　今日、床を上げたれば、どうか逆上せて惡いわいなう。

さん　ちつと撫りませうかいなア。

久兵　イカサマ、撫り下ろして、もらうたらよからうか。

トこなしあつて

ア、そんならさうと、ドレ枕

さん　ハイ〳〵。

ト取つて來てあてがふ、久兵衛、寢轉び、おさん、腰をさする。

久兵　思へば、おれが鬱症の病の元と云ふは、弟久五郎が身持ち、色紙の事、また女房の

さん　お松さまが、なんでござりますえ。

久兵　イヤサ、女房が才覺で、この度巷へた養安さまの藥で、大分快うなつたと云ふ事。

ト此うち始終、合ひ方になり、向うより伊八、羽織、手代の形にて出て來て、内へ入らうとして、おさんと

顔見合せ、互ひに思ひ入れあつて、伊八、招く。久兵衞ちよつとこれを見て、わざと寢入るこなし。

さん　申し、旦那さま、お休みなさるゝかいなア。

ト久兵衞現に寢入つた體。おさん思ひ入れあつて、久兵衞に蒲團を着せ、枕屛風を立て、ソッと表へ出て

伊八どの、お前、遲う戻らしやんしたなア。こりやアノ、新宿へでも寄らしやんしたか。

伊八　滅相な、なんの新宿へ行くどころか、早々歸つて、お前の顏を見ようと、樂んでとつかわと。ほんにこれまで旦那のお目を忍んで、云ひ交した現在お前には、お主のお妾、思ひ廻せば、斯う云ふうちも、ひよつとお目が覺めて見付けられては、この首と生き別れ、恐ろしや恐ろしや。モウ〳〵この後は、互ひにてんがうも云はずに、切れてしまはうぢやござりませぬか。

さん　イエノ〳〵、お前に切れる氣でも、わしやどこまでも離りやせぬわいなア。コレ。

ト起請文を出してやる。伊八、取つて

伊八　こりやコレ、わしが書いた起請文。

さん　嘘にこれが書かれるものかいなア。

伊八　エヽ、忝ない。この上は未來までも

さん　變らぬ夫婦に

伊八　違ひはござりませぬ。

さん　エヽ、嬉しうござんす。

ト取付いてこなし。内にて久兵衞「ウン」と寢返り、これにて屛風に爪づき轉ける。久兵衞、惘りして

久兵　アイタヽヽヽ。誰れぢや〳〵。

ト起きる。おさん、思ひ入れあつて

さん　これはしたり、伊八どのとした事が、麁相な。嗜なましやんせい。

伊八　ほんに不調法、どこもお怪我はござりませぬか。

久兵　イヤ、怪我はせぬ。慥か肋の骨が二三枚

兩人　エヽ。

久兵　折れて堪るものか。時に伊八、遲かつたなア。

さん　それ見やしやんせなア。

伊八　アイヤ、堀の内は餘ッほどござりまする。殊に旦那の御病氣の御代參、念を入れて拜みましてござりまする。張り護符とお洗米を受けて歸りました。

ト紙入れより出して久兵衞へ渡す。

久兵　それが張り護符とお洗米か。

伊八　左樣でござります。

久兵　心願成就、南無妙法蓮華經。
　ト三度戴き、懐中する。
さん　信あれば徳とやら、何もかもお心の儘になりませうわいなア。
久兵　サア、それを力に思うて居る……イヤナニ、伊八、晩には、嫁入りもあれば、何かと用もあらう。今のうちに、奥へ行て休め／＼。
伊八　ハイ／＼。
　トおさん、こなし。
久兵　これはしたり、なぜ行かぬ。
伊八　ハイ／＼、畏まりましてござりまする。
　ト時の鐘にて合ひ方になる、伊八奥へ入る。向うより三五右衛門、駕籠を吊らせ、家來を連れ出て、門口へ駕籠を立てさせ、こなしあつて
三五　久兵衛どのは在宿か。ちと御意得たい。
さん　ハイ／＼、どちらでござります。
　ト出迎ふ。
三五　イヤ、武州金澤の家來、八谷三五右衛門でござる。
さん　申し、三五右衛門さまが、お出でなされました。
久兵　これは／＼、思ひがけない……羽織々々。
　トおさん、羽織を出して着せる。久兵衛、こなしあつてこれへお通り下されませう。
三五　然らば、許しやれ。
　トずつと上へ通り
　久兵衛、病氣と聞いたが、快氣の體。先づは重畳。
久兵　まだしつかりとではござりませぬゆゑ、御覧の通り長髪を、御免下さりませう。
三五　イヤ／＼、苦しうない／＼。
　ト奥より
清九　慥かに三五右衛門さまのお出でなされたは、大方色紙の事であらう。
　ト云ひ／＼、茶臺で茶を載せ出す。
三五　これは構ひやるな。
　ト茶碗を取る。
清九　モシ、五日の晩の事で、この清九郎が逢はうと、思うて
　ト云ひ／＼、三五右衛門を、よく／＼見る。
　ヤア、お前は
　ト恟りする
三五　八谷三五右衛門。


三幕目

清九　成る程、てもよく
久兵　コリヤ〳〵、清九郎、扣へて先づ居い。
清九　へ、、
　トこなしあつて、後へ寄る。
久兵　して、三五右衞門さまの、入らしやりましたは。
三五　延引の色紙、受取りに。
久兵　左やう存じましてござります。
　ト當惑のこなし。
さん　申し、その色紙の事についても、弟御久五郎さまは、お宿にござらねば、便りも知らず、マア、久五郎さまのお歸りまでは、三五右衞門さまには。
三五　イヤ〳〵、この家の弟久五郎、滅多には宿へ。
久兵　エ、、なんと仰せられます。弟久五郎に、宿へは歸らぬとは。
三五　家來ども、四人これへ。
家來　ハア。
　ト駕籠の内より久五郎を出し、連れて入る。
清九　ヤア、久五郎さま。
三五　立ち寄つて、久五郎に肌を脱がせ見よ。
久兵　ソレ、おさん。
さん　ハイ。
　ト立ち寄り、上着を脱がせる。久五郎、手錠打つて居る
　エ、、これは。
　ト恟りする。久兵衞「ムウ」と兩手を組み、思案して居る。
久五　兄貴を始め、おさんどの、清九郎が手前、面目ないこの身の上。
清九　ハ、ア、若旦那の手錠は、色紙延引ゆゑ、そのお咎めで。
三五　如何にも。この家へ預け置かれし、菅家の色紙を先達て差上げよと、仰せあるところ、遊所に於て奪ひ取られしとある、久五郎が越度。即ち受取りの役目は、この三五右衞門、なれどその樣子、わざと知らぬ顏にて、身共は病氣と云ひ立て、今日まで暇どりしは、其うち吟味いたし方あつて、差上げると催促も致さず、相待ちゐるも、數代お出入りの椀屋久兵衞ゆゑ、心あつての猶豫。然るに昨日お國許より、早脚到來して、右の色紙を鎌倉へ獻上、最早明日殿の御出立、すりや今明日に、色紙受取り立ち歸らねば、椀屋より金澤家の大事。それゆゑ久

五郎を密かに召捕り、お國に引渡し、事に依つては死罪・
身共は切腹。

さん　エヽ、そんない久五郎さまを。

久五　色紙を取られた越度にて、死罪にあふは覺悟。ハテ、
惡事千里ぢやなア。

ト此うち久兵衛、矢張り思案して居る。三五右衛門、
こなしあつて

三五　久兵衛、して、其方が返答は。

久兵　弟が取られし色紙、これまで樣々、吟味に如才にご
ざりませねど、今日まで知れぬ上に、今明日差上げねば、
久五郎、死罪との御一言は、兄の身には百千萬の嶮を登
る思ひ。それゆゑかゝる御返答、當惑いたし居ります。

三五　ムウ、尤も。

ト合ひ方になり、三五右衛門、立ちあがり、懷中より
鍵を出し、久五郎の手錠を外す。

久五　これは。

ト三五右衛門、右の手錠と、又懷中より久五郎が守り
袋を出し、二種を久兵衛が側へ置く。

三五　久兵衛、弟久五郎に、この二品を相添へ、其方へし
つかと預けたぞ。

久兵　エヽ。

ト手錠を見て、守を取り上げ改めて

こりや弟久五郎が、產れ月日を記せし臍の緒の書付け。

三五　久五郎を召捕り、改め見しその守の書付け、殊にそ
れは金澤家の。イヤサ、金澤家出入りの其方、久五郎が
素性、現在……ナ、其方の弟、サ、兄弟なれば、守と手
錠もろともに。

久兵　成る程、しつかりと預かりました。弟が、サア、身
の上、その御返事は今宵中に。

三五　すりや、今宵中に返答を。ムウ、少しにても手がゝ
りあらば、召捕るは此方の役目。

ト思ひ入れあつて、懷より時計を出し、ちよつと見て、
時を計るに、はや申の刻。

トまた指にて時を繰り

色紙に心をかける胡亂の奴は、捕へて詮議の、ナ、身が
手がゝり、詮議仕出し差上げれば、矢張り久五郎が越度
もなく

トこなしあつて

サア、明らさまに打明けなば、今宵短かき春の夜。サア、
心を付けて、夜半を限りに。

清九　アノ、色紙の安否を

三五　九ツの

久兵　鐘を合圖に

三五　必らず久兵衞、旅宿で返答。

久兵　三五右衞門さま。

三五　相待ち居るぞよ。

ト唄になり、三五右衞門こなしあつて、家來を連れ、向うへ入る。

清九　でも、思ひがけない、今の三五右衞門さま。

さん　行くへの知れぬ色紙を、今宵九ツまでに。

久五　もし出ぬ時は、お國へ行て死ぬるこの身。それより先へ、いつそと思へど

ト腰を見て、脇差が無いゆゑ

肝心の刄物が。

ト投げ首する。久兵衞、これにて心付き

久兵　弟、其方が刄物は。

久五　エヽ。

久兵　イヤ、親仁樣のお讓り、銕鍔の三所拵らへ、平常差しの、その脇差は。

久五　サア、それは……オヽ、ソレ、預けました。

久兵　ヤ。

久五　しかも、湯島のおかんに。

久兵　おかんは女子。殊に以前召使ひし乳母が娘、滅多に人手に渡すものではないぞ。

久五　ツイ、心付きませなんだ。後にでも取りに遣はしませう。

トごんと暮れ六ツの鐘鳴る。

さん　ありや。もう暮れ六ツ。

久兵　弟、祝言の支度をしやれ。

久五　エヽ、支度とは。

さん　ハテ、この間湯島で見合ひのあつた、嫁入りでござんすわいなア。

久五　ほんに、今日は二月十日。

さん　それぢやによつて、早うお支度をなされまし。

さん　色紙の事で、兄貴の屈託。それに心もなく、祝言とは。

久兵　ハテ、大事ない。色紙の事は、今日明日に探し出して、差上げる先は思案がある。何も案じる事はない。一旦約束した縁談、今さら延ばされぬ。構はずと今夜の祝言。

久五　おやというても。

久兵　案じる事はないと云ふのに。それよりはマア、この守、肌身離さず、大事にかけて、矢張り其方が。

ト右の守を久五郎に掛けさせる。此うち久兵衞いろいろ思案してゐる。

清九　申し、旦那さま、今まで知れぬ色紙が、今明日にあなたが。

久兵　ハテ、差上げる。

清九　そりや、どうして。

久兵　代々續く糀屋の身上、地面から家屋敷も打込んで、百萬兩の金の力で探したら、そりや知れぬといふ事もあるまい。

清九　すりや、この身上を打込んで、色紙を買ひ戻すお心でござりますか。

久五　アノ、それ程までに。

久兵　金銀財寶は、世の寶なれば、こりや世界の廻り物。天にも地にも、たつた一人の弟の、命に替へる寶があらうか。

ト唄になり、久兵衞、久五郎おさんを連れ、奥へ入る。清九郎殘り、こなしあつて

清九　最前の三五右衞門が詞の端、少しの手がゝり知れたら、此方の人數にて召捕るとは、どうやら不氣味。殊に五日の晩に、しまひ付けられた五郎四郎、滅多に油斷はならぬわい。

ト思案のこなしあつて

こりや暗い。灯りをともさうか。

ト奥へズツと入ると、駕籠の合ひ方になり、向うより丁字車の箱提灯、跡より御駕籠二挺、これにおとよ。後より晉次、笹龍膽の紋付きの箱提灯をともし、作兵衞又七、付添ひ、油單掛けの挾み箱、その外、この人數皆々本舞臺へ來る。切り戸より若い衆二人、袴羽織、取持ちにて出迎ひ、挨拶あつて、皆々切り戸口へ入る。始終此うち好みの合ひ方、清九郎、奥より行燈をともし、出て來てあたりを見廻し、中幕の色紙を懐中より取出し

五日の晩に金杉の稲荷前で、五郎四郎から受取つた、大事のこの代物。

トちよつと思ひ入れ、改める。此うち一間より、おまつ、襖を開き、見て居る。清九郎、フト顏を見合せ、おまつ、ちやつと襖を締める。清九郎、思ひ入れ。わ

ざと

これを、どこぞへ隠したいものだ。

トあたりを見廻し、見世の戸棚を明け、内より賣り物の重箱を出して來て

幸ひ、滅多に人に氣の付かぬ、この重箱の内へ。ソレ。

ト色紙と眞入れを摺り替へ、重箱の中へ隱し、元のやうにして戸棚へ入れ、戸を締める。此うち、おまつ、又襖を明け、これを窺ひ見て居る。清九郎こなしあつて

あゝして置けば大丈夫。これで落ちついた。

ト奧にて謠になり、清九郎、こなしあつて、奧へ入る。あと合ひ方にて、おまつ、いろ／＼あつて、一間をそろそろ出て、戸棚にかゝらうとする。此うち向うより文藏、袖頭巾、浪人者の形にて出て來て、スッと内へ入り

文藏　この内の久五郎に逢はう／＼。マア、久五郎を出しやれ／＼。

ト仰山に云ふ。おまつ、恟り、文藏を見て

まつ　どうやら、見たやうなお侍ひさま。久五郎さまに逢はうとは、何の御用でござりますかえ。

文藏　何の御用でも、久五郎に逢へば知れる。早く久五郎に、逢はう／＼。

まつ　様子が知れるとあれば、お逢はせ申しませうが、今宵はちつと取込みの儀があつて。

文藏　サア、その取込みの事について、逢ひたいのぢやて。

久五　慥か久五郎に逢はうと云ふは。

ト云ひ／＼着付け麻上下にて、伊八、又七を連れて出て來て、文藏を見て

ヤア／＼、來たか／＼。約束違へず。

ト云はうとして、ちやつと知らぬ顔する。

文藏　エヘン／＼。

ト咳拂ひにて紛らかす。

久五　あなた樣には、ツイにお目にかゝりました事もない、お侍ひぢやが、即ち私しが久五郎でござりまする。

文藏　さてはおてまへ久五郎か。ツイに逢うた事がなければ、近付きであらう筈もなし、近頃法外無念、殘念の對面を仕る。

久五　して、御用とはナ。

文藏　如何にも用がある。ちやつとそれへお出やれ。

久五　私しにナ。
文藏　オヽサ。
　ト兩人、こなしあつて、向うへ出る。文藏、不器用に繩捌きして
久五郎、捕つた。
　トちよつとかゝるな、久五郎、振り拂ひ
久五　こりや、なんで繩掛けるのぢや。
文藏　イヤサ、久五郎、そちや不義者ぢや。
久五　ナニ、不義者とは。
文藏　イヤ、白々しい。身共ことは、淺草邊に圍はれては居ぬ、オヽソレ、蟄居し居る、久米の平内左衞門といふ浪人者だ。
久五　オヽ、その久米の平内左衞門が、何ゆゑに繩掛けやうとは云はつしやるのだ。
文藏　オヽ、そりや今宵この内へ嫁入りして來る、田川壽德が娘のおしづは、先達て身共が夫婦の約束し置いたれば、歷とした主のあるおしづを、嫁に取るとは、即ち不義者、間男と云ふが誤まりか。返答はあるまい／＼。サア／＼サア、なんと、菖蒲がようならうが。
久五　さては嫁入りして來たおしづは、こなたと懇ろして居るとな。
文藏　如何にも、その通り。
久五　それには何ぞ、慥かな證據があるかの。
文藏　オヽ、證據といふは、云ひ交した本人のおしづを出して、身共に逢はして見れば知れる。それが慥かな證據ぢや。
久五　面白い。そんならおしづを、爰へ呼び出して吟味するぞ。ソレ、伊八、又七、おしづを爰へ、連れて來い連れて來い。
兩人　畏まりました。
　ト立たうとするな
まつ　イヤ／＼、申し、久五郎さま、おしづさまを爰へ出して、もし覺えがないと云はしやんすと、いかう事がむづかしうござりますぞえ。
久五　ナンノ、むづかしい事、大事ござりませぬ。又七、ソレ、行て早う呼んで。
又七　左樣ならば、おしづさまを。
まつ　是非とあれば、又七　この通りを壽德さまへ申してこれへお出でなされましと云や。
兩人　合點でござりまする。

ト奥へ入る。

まつ　申し、お侍ひさま、大事の事を云うてゞござんした
が、いよ／＼それに違ひござりませぬか。

文藏　粂の平内左衞門、武士でござる。

ト奥より松山、綿帽子、白無垢。壽德、矢張り十德に
括り頭巾、作兵衞附いて

壽德　ハテ、それは合點のゆかぬ。

作兵　さういふ事があつては、仲人のこの作兵衞が濟まぬ
とくと吟味いたしませう。

ト云ひ／＼、皆々出て來る。

まつ　これは壽德さま。

壽德　今晩は重ね／＼の御馳走、久兵衞どのには二度とな
い御喜び。こなたにも別してお取持ち、忝なう存じます
る。時に、いま奥で承はれば、平内左衞門といふ浪人が、
娘のおしづと譯があると云ふのは。

作兵　して、その浪人は。

文藏　粂の平内左衞門といふは、拙者でえす。

ト袖頭巾を少し前へ被る。

まつ　覺えがござりまするかえ。

壽德　ハテ、益體もない。田川壽德が娘に、左樣な事があ
つてよいものでござるか。

作兵　イヤ／＼、申し、壽德さま、それでも私しは、どう
も心が濟みませぬ。こりや、あのお侍ひに、おしづどの
をお逢はせなされて下さりませ。

文藏　オヽ、逢はう／＼。

壽德　ハテ、こなたの顏晴れ、逢ひたくば逢はせてもやら
う。娘のおしづ、あの侍ひに逢へ。

松山　アイ。

ト久五郎が側へ行く。

久五　コレ、おれではない、あの侍ひの、サア、何もかも
よいやうに、してやる程に、ちよつと側へ行てナ、ずつ
ぱりと。

ト文藏が方へ突きやる。

文藏　おしづ、ソレ、合點か。何おやあらうと、余の筋は
いらぬ。云ひ交して居る事を、ソレ、云ひさへすればよ
い。

ト松山、文藏を振り切り、久五郎の側へ行く。

久五　ハテ、おれではない、あちらへ行てとつくりと。

ト文藏が側へ突きやるを振り切り、また久五郎が側へ
來る。

文藏　諸事は、ソレ、云うた通りに。
ト松山を連れて出る。松山、矢張り久五郎が方へ來る。
久五　これはしたり、其方ぢ　と云ふに。
文藏　怖い事はない程に
ト又此方へ連れて來るを振り切り、兎角、久五郎が側へ寄る。
久五　ハテ、面妖な。
文藏　その筈ではないが。
久五　マア、この綿帽子を取つて。
ト綿を取る。
松山　申し、久さん。
久五　ヤア、わが身は。
ト恟りする。文藏も恟り。
文藏　ヤア／＼、こりや違うた。
壽徳　壽徳が娘おしづ、何が違うた。曇り霞みもないおしづでござるぞ。
文藏　こりやどうぢや。
ト呆れる。久五郎もこなしあつて
久五　ハテ、思ひがけない。
松山　久さん、マア、お前、聞いて下さんせ。わたしや壽徳さんの娘でござんす。嫁入りして來たれば、お前の女房、可愛がつて下さんせえ。
久五　可愛がらいでならうか。夢ではないか。申し、壽徳さま、こりやマア、どういふ事で。
壽徳　コレ／＼、久五郎どの、御舍兄久兵衞どの、縁組みいたした、おしづはこれでござる。根が不調法者なれば、兎角こなたを戀ひ焦れて、それゆゑ取急いで、この仲人作兵衞どのを頼み、今宵の嫁入り。すりや、世間晴れて夫婦仲、必らず見捨てぬやうに頼みまする。
久五　これは痛み入つたる御挨拶でござりまする。
文藏　とんとおりやア、合點がゆかねえ。
まつ　久五郎さま、但し、その嫁御が御不承知でござりますか。
久五　滅相な事。これが不承知でよいものでござりまするか。
壽徳　然らば添うて下さるか。
久五　添はいで、なんと致しませう。
文藏　こりやマア、なんの事ぢや。
まつ　お侍ひさま、サア、おしづさまに逢はしやんしたからは、不義者の吟味を。

文藏　イヤ、こりやおしづぢやない。ほんまのおしづを爰へ出してもらはう。

松山　イエ〳〵、わたしや、壽德さんの娘おしづでござんす。

文藏　なんのてまへは、おしづぢやない。

松山　イヤ、おしづでござんす。

ト　せり合ふ。

壽德　コリヤ〳〵、娘、何をせりあふ事がある。扣へて居い。お侍ひ、こなた、おしづと云ひ交して居さつしやるか。

文藏　イヤ、それはモシ、こりやどうぢやぞい。

久五　どうのかうのと云ふ事はない。おりや嬉しうてならぬ。

文藏　なんの、面々ばつかり嬉しがつて。

作兵　コレサ、お侍ひ、おれが仲人だ。おしづは不義者か。

文藏　イヤ、ちよつと歸つて參りませう。

ト　逃げようとする。音次、文藏を引廻し、門口をしやんと締め

音次　待て。湯島の植木屋め、今夜の祝言聞きかぢり、似せ侍ひの騙り事、滅多に歸す事はならぬぞ。

文藏　そんなら、わたしを。

壽德　植木屋文藏と知れてはあれど、今宵の嫁入り、めでたい折柄、何にも云はぬ。

まつ　ほんに、戀は曲者、騙りといふも色ゆゑに

松山　身を捨てゝこそわたしは

久五　浮む瀨。

文藏　おれは沈む瀨、こりや、一人突出し者になつたわい。

ト　奥より清九郎、出かけて

清九　イヤ、突出し者ではない。貴樣のが尤もぢや。

文藏　ヤ、そんならおれが。

清九　この清九郎が肩を持つてやる。氣遣ひはない。

まつ　事濟んだおしづさんの身の上、清九郎、其方が、あの人の肩を持つは。

清九　イヤ、あんまり人を盲目にしたこの嫁入り、旦那を始め皆御承知でも、そこが番頭、椀屋の白鼠、喰ひ探したる今宵の祝言、清九郎が、呑み込みませぬぞ。

壽德　そんなら、娘のおしづを

清九　知れた事、傾城松山。

久五　コレ、それを云うては。

松山　折角わしが身の上を。

清九　云はにやならぬ。オヽ、グツと云ふのぢや。自體今度の縁組、仲人した猿松さん。

ト作兵衛、怖がることなし。

うぬが、馬鹿の始まりだ。なぜと云へ。アレあの

ト文藏に指さし

あゝいふ男のある、藪醫者の娘を、嫁で候ふの、見合ひで候ふのと、さうして今宵の嫁入り、差支へた所で、どうして引摺り出して來たやら、この傾城賣女を嫁で候ふ。祝言の杯をおれが見出せば、三々くどうは云はぬ。面々に覺えがあらう。人を呆痴にした馬鹿の成敗。こりや椀屋の内を地獄同然、その玉に使つた、この傾城めから拋り出して。

ト松山を引立てる。久五郎、留めて

久五　コレ、清九郎、なんぼ家の爲でも、納まつてあるを……われ一人が

清九　呑み込まねば、番頭ぢやによつて。

久五　イヤ、さうはならぬ。

ト引立てるを留める。立廻り。

清九　コレ、色紙の越度で、おツつけ仕置に遭ふ身すがら女房詮索でもあるまい。馬鹿つくせ。

ト箒を取つて久五郎松山へ打ちかゝる。作兵衛音次、留めるを、引退け、共に打つ所を、奥より久兵衛、ツカツカと出て、箒を引ツたくり、足を掻く、清九郎、中返り。

久五　イヤ、兄者人。

皆々　久兵衛どの。

ト清九郎、起きあがり、胡坐をかいて

清九　旦那、こりやなんで、この清九郎を投げたのぢや。

久兵　奉公人の分で、なぜ我まゝ無禮をする、

清九　イヤ、我まゝではない、旦那のお爲に。侍ひで云はば忠義者。

久兵　おれが爲を思ふなら、すツ込んで居い。

清九　イヤ、すツ込んで居ますまい。現在若旦那の嫁といふは、吉原の賣女傾城ゆゑ。

久兵　ハテ、何であらうが、嫁に貰うた久五郎が得心、下さる舅の壽德どのも承知なれば、以前は何でも身元は慥か。すべてお大名方でも町人でも、代々何の守さま、何屋の誰れと、先祖の通り名を受けつげば、その身の規模。コレ、此方の内も、數代椀屋の何と云ふ。

清九　知れた事、久兵衞。それで悦久。
久兵　サア、其やうなもので、壽徳どのゝ娘御に、おしづといふがあつて、おしづといへば、たとへ人が代つても、いつまでも娘はおしづ。殊に現在、父御が連れてござつたれば、おしづに違ひない。それに清九郎、ハヽ、わりやめでた酒に醉うての痴言。
清九　イヤサ、あんな無理な理窟を。
久兵　理窟を云ふぢやない、筋道。主の云ひ付けもせぬにおのれが騷ぎ立て、扣へて居らう。
ト腹の立つこなし。おまつ、心遣ひのこなし。
清九　あんまりで呆れるワ。こりや舞臺一面に馬鹿ぢや。
久兵　なんと。
清九　ハテ、結構は阿房のからなしやなア。
ト詰るこなしにて、此方へ寄る所へ、奥よりおさん、藥茶碗を持つて出る。
久兵　なんぢや。
さん　旦那さま、お藥を煎じて參りました。
久兵　ア、よく氣が付いた。今やつと息を張つたら、逆上せるやうな。イヤ、伊八、今日其方が受けて來た、堀の内の張り護符お洗米を、次手に戴かうわいの。

伊八　ハイ〳〵。
ト前へ出て來て
それは最前あなたへ、お渡し申してござりまする。
久兵　イヤ、いつおれが受取つた。
伊八　ハテ、お渡し申しました。ナア、おさんさま。
さん　アイ、そりや最前、お前にお渡し申しましたが、わたしも側で見て居りましたわいなア。
久兵　そりや、覺え違ひであらう。伊八、マア、われが懷中を尋ねて見たがよい。
伊八　面妖な。慥かにお渡し申したに、私しが懷には。
ト云ひ〳〵紙入れを出し、その中を探し
伊八　ほんに、ござりました。
久兵　あらうが。
伊八　ござりました。
ト張り護符とお洗米を持つて行く、おさん、こなしあつて
さん　そんなら、先刻上げさんしたは。
久兵　これぢや。
ト起證を出す。
さん　エヽ、それは。

ト兩人、取りにかゝる。久兵衞、よろしくあつつて、皆おさんの胸倉を取つて引据ゑ、伊八の襟髪を取る。皆皆、思ひ入れあるべし。

壽德　これサ、久兵衞との、何の事でござる。

まつ　定めて樣子もござんせうけれど、御病氣のうち

久五　マアノヽ、お心を

まつ　お鎭めなされませいなア。

ト めいノヽ口々にとめろ。久兵衞、思ひ入れあつて、腹の痛いこなしにて、兩人を突き放し

久兵　弟、ソレ、讀み上げい。

ト書き物を抛る。久五郎取上げ

久五　天罰起請文の事、一つ、其許樣と二世かけて、夫婦の契約いたし申すところ實正なり……ヤア、伊八どのへ、さんより。

まつ　エヽ、そんならおさんどのは。

久五　アノ、伊八と。

皆々　ヤアノヽノヽ。

ト呆れる。

久兵　ヤイ伊八、最前取違へて渡せし時、ひッつらまへてと思うたれど、人中で畜生めらに恥かゝせ、主の目をくらませし、天罰思ひ知らせうと、今まで堪へて居たわい。コレ、この堀の內の張り護符、お洗米から顯はるゝといふは、取りも直さず祖師の御利生、これがほんに、飼ひ犬に手を喰はれるといふ譬へ。よもやおのれに、斯うした不義があらうとは、外の者は氣が付くまいが、おれはよく見付けて居る。わりや、それを知らぬと思うて、今までこの久兵衞が鼻毛をよくも數へたな。コリヤ、妾といへば女房も同然。それにマア不義をひろいだなア。定めしおのれが料簡は、おれがこの度の病氣を幸ひに、死ねかし死ねかしと思うたであらう。コリヤ、七人の子はなすとも、女に心ゆるすなとあるを、忘れはせねど、盜人に暇あれど、守り手の暇ない。これが畢竟、本妻のお松が身になつて見よ。その不義の男女をどうするぞ。

ト久五郎、おまつへ當てる思ひ入れ。

まだしも、本妻でないが仕合せ。片時も叶はぬ。出て行け。それも世間の面目あれば、コリヤ、二人連れで參宮せい。

兩人　エヽ。

久兵　ハテ、おさん伊八が見えぬとあらば、拔け參り致したと云へば、まだしもおれが慈悲、伊勢から直ぐに熊野

へと、近附きの者に吹聽すれば、其方達が身柄も立つ道理。昔の大經師が好い手本。

ト伊八おさんを引立て

合點がいたか。エヽ、形は人なれど、獸にも劣つた奴等。コレ、この世の物の云ひ納めに、キリ／＼立つてうせ居らう。

ト兩人を突き倒し、腕の痛むこなし。おまつ、久五郎介抱する。久兵衛、此せりふを二人にかけて云ふ心あるべし。おさん伊八、面目なき思ひ入れあつて

さん　御恩のお方の、目を掠める事ぢや。どうで一度は斯うなる覺悟。

伊八　その時には互ひにと、云ひ交したは爰の事。

さん　そんなら早う。

伊八　南無。

ト文藏が脇差を拔き放し、おさんの胸倉を取り、突かうとする。音次留めるを、突き退け、死なうとする。久兵衛、仲へ入り、脇差を叩き落し。

久兵　待て。

兩人　お慈悲に見遁がし。

久兵　サア、殺すまい爲の參宮。

兩人　エヽ。

久兵　殺せば、この久兵衛、世間へ面が出されぬわい。

伊八　左樣なら、おさんを連れて。

久兵　拔け參りの道行き。

まつ　二人が、その行く先で死んだ時は。

久兵　ハテ、知らぬが佛。

兩人　エヽ、忝ない。

ト拜む。

久兵　ハテ、禮受ける覺えはないわい。

トきつと云ふ。

さん　そんなら、伊八さま。

伊八　おさんさま、ござりませ。

トちよつとした合ひ方になる。伊八、おさんを連れ走り入る。久兵衛、こなしあつて

久兵　壽德どのには、先程より御退屈。さて／＼、面目次第もない。

壽德　近頃御笑止に存じまする。

文藏　イヤモウ、通な御料簡ぢやな。腹の立つ所を腹も立てず、命助けて參宮とは、通なお捌き。とてもの事に私しも、お歸しなされて下さりませぬか。

壽德　イヤ〳〵、娘に疵付けた植木屋文藏、其方には、この壽德が云ひ分がある。もそつと扣へて居い。
文藏　この退屈な上に、また扣へて居るのかな。
音次　コリヤ、小言吐かすと、この音次が腦天を毆り碎くぞ。
文藏　これは迷惑な。
久兵　先づ祝言は濟んだが、これから奥へ行て、嫁御の色直し。仲人は宵の内、ドリヤ、行きませう
ト立つ。
とよ　おしづさん、お小袖を召替へなされませ。
久五　そんなら又改めて。
松山　閨の杯を。
ト兩人こなしあつて、片脇より清九郎。
清九　イヤ〳〵、若旦那、お前は奥へ行て、杯よりは、御新造のおまつさまを連れて、參宮なされませ。
久五　ヤア。
清九　旦那、さうぢやアござりませぬか。
久兵　ムウ。
ト思ひ入れ。おまつ、これを聞いて立ち上がり、清九郎を前へ連れて出て。

まつ　コレ、清九郎。どうして、わたしと久五郎さまと、參宮するのぢや。
清九　どうしてか、そりやお前の心に問うて御覽じませ。
まつ　わしが心は水晶、微塵芥子ほども、いたづらがましい事はないわいの。それにマア、あらう事か、あるまい事か、旦那どのゝ前や皆樣の手前、おしや金輪際、その事を糺さにや置かぬ。
清九　そりや、どうなりと。
ト久五郎も清九郎が側へキッと出て
久五　清九郎、兄御の事は格別、この久五郎が、どうして參宮をするぢや。サア、それは〳〵。
ト振り廻す。
まつ　これが、洒落冗談ではない。云うても大事の事。
久五　サア、どうぢや。
まつ　清九郎。
久五　云はぬか。
まつ　サア、云へ。
ト兩人、兩方より、いろ〳〵振り廻す。
清九　ア、コレ〳〵、お二人とも、如何にお前方の身に火が付いたとて、この清九郎を、さう苛めるものではご

ざりませぬ。不義密通してござるといふ事は、疾に旦那の耳に入つてあるわいの。

久五　そんなら兄貴の耳へ。

ト久兵衛を見て、「ハア」とこなし。おまつも思ひ入れあつて

まつ　エ、、コレ、腹が立つ程、根つから物が云はれぬ。どうしてマアわしが、久五郎さまと。

トこれも久兵衛の手前にこなしあつて。

清九　不義をして居るぞいやい。

兩人　その證據、お目にかけませう。

清九　證據とは。コレ。

ト序幕におまつに書かせし文を出し、サッと開き

ちよつと申し上げまゐらせ候。さてとや今日し御約束の事ゆゑ、我が身先刻より、こなたへ逢ひ待ち侘び參らせ候ふ、御許樣には其方に、何か面白き世界にて、未だ此方へは入らせもなく、お懐かしく如何なりしや、就ては御入らせ樣子も、定かならず、兼ねての御縁に逢ひなう候はゞ、早く此方にお運びの事、しみ〴〵願ひ申し候ふ、待たる身より待つ身になるなとやら、御推もじ下され。積るお物語りに必らず御見と、先づはお迎ひ、いつそ〳〵、逢ひたい〳〵、めでたくかしこ、松より、久さま參る。」ナコレ。

ト久兵衛に見せる。

見知りある、御新造の自筆。久さま參るは、久五郎さまの久の字、松よりはお松どの。なんと、これでも爭はれぬ、不義の證據。

久五　ヤア〳〵、そんならその文は。

まつ　イエ〳〵、あの文は、お前を呼びにあげる、松山どのゝわたしが代筆。これも清九郎に……皆おのれが指圖で、書かせたではないかいやい。

清九　イヽヤ、おりや知らぬ。覺えはない〳〵。

まつ　エ、、覺えないとは、そんならわたしが久五郎さまと

清九　不義して居るに違ひはない。嫌らしい文句といひ、自筆の文の名宛は、久さま參る。松より。

ト此うち松山こなしあつて、この時、ツカ〳〵と出て文を取つて

松山　コレ、宛名はお松さんではござりませぬ。松山の松わたしが久さまに上げた文ぢやわいなア。

清九　ヤ、なんと。
松山　サア、この間湯島の伊豫屋で、久さまを呼びに上げた、わたしが文。
清九　ハヽヽヽ。そんなら、この久さまへ參る松よりは。
松山　アイ、わたしでござりますわいなア。
久五　オヽ、出かした松山、それで兄貴へおれが潔白。
まつ　ほんに、わたしが云ひ譯も、エヽ忝なうござんす。
ト壽徳もこなしあつて
壽徳　ホヽオ、面白い文の云ひ譯。流石はまた
ト思ひ入れあつて
おれが娘程ある。
ト清九郎、こなしあつて
清九　ハヽア……壽徳さま、お前の娘御、此方の嫁御は、松山と申しますか。
壽徳　ヤア。
清九　イヤサ、おしづといふぢやござりませぬか。
壽徳　サア、それは。
清九　最前旦那のお詞、お大名でも町人でも代々續く家の通り名、慥かにおしづと聞いたが、それに又、松山とは。
松山　エヽ、それは。

清九　おしづでないか。
松山　サア、それは。
清九　それに、お松のまつではない、松山のまつ、わしが文ぢやと、どうした事で云うたやい。
松山　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
清九　ヘヽ、おしづさまえ。扣へてござりませ、ハヽヽヽ。
まつ　そんなら、矢ッ張り
清九　二人は不義者。
ト久五郎とおまつを引立てる。久兵衛、立ち上がり、清九郎を突き廻す。壽徳、清九郎をポンと當てると、倒れる。
久五　これは。
壽徳　昔忘れぬ壽徳が當て身。
清九　ダア、。
ト久兵衛、倒れて居る清九郎へ、最前の手錠を嵌め、ピンと錠を卸ろす。
壽徳　これは。
久兵　又しても、差出る清九郎、少しのうちも、手錠の身替り。

壽徳 ムウ、成る程。

久兵 ソレ。

ト硯箱を取つて來て、去り狀を書きかける。壽徳、見て居る。久兵衞、さら〳〵と書く。名前の所を書かうとするを、その手を留めて

壽徳 待つた、久兵衞どの。

久兵 壽徳どの、こりや、なんで留めさつしやります。

壽徳 サア、この去り狀の、宛名にちつと望みがござる。

ト合ひ方になる。久兵衞、筆を下に置き、直る。此う ら向うよりおさん伊八、そろ〳〵立戻り、門口へ來て、樣子を聞いて居る。

久兵 なんと面目ないが、最前からお聞きの通り、女房おまつと、弟の久五郎と、兼ねて不義して居ると、病中の私しへ、淸九郎が密かに知らせ。よもやと思へども、サ、心の外、さういふ事があつては、この久兵衞が外聞より若い久五郎が惡名、江戸中へ知れては、彼れが身の恥。殊に又、云ふに云はれぬ義理ある仲の大事の弟、女房まつにも、打てば響くの意見のために、おさん伊八にとつくりと云ひ付けて、不義と見せたる護符の間違ひも、有やうは

ト兩人、內へ入る。

久兵 二人ともに、大儀であつた。

さん 如何に云ひ合せとはいひながら。

伊八 不義に見せたる面目なさ。

壽徳 それも何ゆゑ。

松山 お二人の不義と思うて。

久五 イヤ、不義ではない。これも淸九郎めが、告げ口に兄嫁御お松どのが、旦那を嫌うて、眞實に惚れてござる、ハテ、世間にない事でなし、どうぞ色よい返事を直ぐに云うてやれと、度々勸めても、現在の兄嫁、假にもそんな事の恐ろしさ。それゆゑ隨分內に居ぬやうに吉原通ひ。今ではそれが嵩じて、松山とは深い仲。內へ歸れば、おまつどのゝ廓通ひの、意見も悋氣と心得違ひ。惚れられたと思ひしは、矢ツ張りおれが阿房から。

まつ イヽエ、お前よりは、わたしが云ひ譯。口でまだまだ云はうより、さうぢやし

壽徳 コレ、短氣な、こりや何事。

まつ サア、大事の主の弟御、隨分心を付けて、大切に思ふのが、脇から惚れたと見え、不義と思はるゝ旦那さまへの云ひ譯より、恥かしいはおさんどの、下げすんで

ござんせうと思へば、片時も生きて居る心はござりませ
ぬわいなア。

壽徳　それもこれも、清九郎が仕業なれば、心底現はれ、
この上にて久兵衛どのに、なんの疑ひ。

三人　さうでござります。必らず短氣な。

まつ　ぢやというても。

久兵　コリヤ、女房、其方が死ぬれば、いよ／＼不義の悪
名、椀屋の内へ疵がつくぞ。

まつ　エヽ。

久兵　ハテ、疑ひ晴れし不義の詮索、雪ぎたる其方と弟が
心底、とつくりと聞いて、久兵衛も安心した。

久五　そんなら、兄貴。

まつ　旦那どの。

久兵　今までよりは、夫婦兄弟猶睦ましう。

兩人　エヽ、忝ない。

久兵　この上はこの去り狀。

ト取上げる。

壽徳　壽徳が望みの通り。

久兵　さては宛名は、おしづ。ソレ。弟。

ト去り狀を渡す。久五郎、思ひ入れあつて

久五　ムウ、成る程。

ト宛名を書く。

壽徳さま。

ト渡す。壽徳、取つて宛名を見て

壽徳　おしづどの、久五郎……そんなら、親仁が心を察し
て、宛名は弟が自筆。エヽ、忝ない。

皆々　して、その去り狀は。

壽徳　植木屋文藏、ソレ。

ト抛つてやる。文藏、取上げ

文藏　そんなら、この去り狀を

壽徳　娘おしづと、其方と參宮

文藏　エヽ、忝ない、が肝心の。

とよ　おしづさまのござる所へ、わたしが案内。

壽徳　お豐を連れて早う。

文藏　お禮は跡で。さらばぢや。

ト早三重になり、文藏、お豐を連れ、向うへ走り入る。

久五　おしづどのゝ身の上、片付いた上は、松山が身の上
は。

まつ　安宅甚平どのゝ指圖で、壽徳さまの娘御にして、今
宵の嫁入り。

壽德　松山が素性を聞けば、甚平が主人、正木兵太夫といふ武士の娘おかつどの。
久五　身請けも濟めば
久兵　世間晴れて、久五郎が嫁。
ト清九郎、心付き、起きあがり、手錠を見て
清九　イヤ、その久五郎は。
トこなしあつて
ヤア〳〵、こりやいつの間に、この手錠。
久兵　在所の知れぬ色紙の行くへ。慥かにそれと、其方を吟味の爲の手錠。
清九　イヽヤ、知らぬ。色紙よりは、仕置に遭ふ久五郎を
ト久五郎にかゝらうとして、いろ〳〵藻搔き
こりや、手錠ゆゑ自由にならぬ。アヽ、いま〳〵しい。
トこなしある。おまつもこなしあつて
まつ　行くへの知れぬ色紙に、慥かあの戸棚。
ト行かうとするを、清九郎、肩にて突き廻し
清九　そりや、何を。
まつ　イヤ、最前とつくり、見屆けたれば。
トまた行くを、清九郎、右の通り立廻り。久兵衛清九郎を引廻す。おまつ、戸棚へかゝる。所へ向うバタバタにて、町役三人、走り出て、皆々を引退け〳〵、手早く戸棚と道具へ封印を付ける。皆々驚き
皆々　これは。
ト此うち元右衛門、代官にて、捕り手大勢連れて出て來る。
元右　御上意。
ト云ふ「ハア」と久兵衛初め、皆々下に居る。
町役　見世の間は斯くの如く、封印を付けましてござります。
町人ども。して、封印は。
元右　この上は、奥座敷土藏、殘らず封印を。
町役　畏まりました
トばら〳〵と奥へ入る。
久兵　これは、思ひ掛けないお代官樣。何ゆゑ斯く御封印を。
元右　さては、其方が主久兵衛か。
久兵　左樣でござりまする。
元右　然らば、其方を召連れ、代官所へ罷り出で、お尋ねなさるゝ仔細がある。
久兵　すりや、私しに縄。

皆々　それも矢ッ張り色紙。
まつ　その色紙は。
清九　手出しはならぬ、あの封印。
元右　こりや、封印に凶事があると、死罪に行ふ。随分大切に。
皆々　エヽ。
トこなし。奥より町役三人出て
町役　残らず封印付けましてござりまする。
元右　サア、久兵衛、早く代官所へ。
捕人　歩め。
ト十手を振り上げる。久兵衛、立廻り。
久兵　ハイ、。
トこなしある　皆々も心遣ひあつて
皆々　御病氣のお身の上に、
久兵　ハテ、案じる事はない。おツつけ歸る。それまでは心を付けて。
元右　サア、歩め。
久兵　ハイ。
元右　サア。
久兵　サア。

---

皆々　サア〱〱。
久兵　先づお先へ。
ト付け廻しにて、久兵衛を圍つて、元右衛門、町人、皆々向うへ入る。
壽徳　様子は詳しく知らねども、急に召されし久兵衛どの。
久五　それが色紙の事なら、この久五郎が
ト駈け出しさうにするを、女形三人留めて
まつ　何ぢややら様子も知れぬに、お前がござんしては。
松山　却つてわたしが。
伊八　それ〱、なんと云うても代官所沙汰。
音次　案じて居るより、こりや一走り行て、様子を聞いて参りませう。
壽徳　出かした音次。そんなら早う。
音次　合點でござりまする。
ト音次、尻をからげ、向うへ走り入る。清九郎、此うちこなしあつて
清九　ハテ、藻掻くワ〱。どうで兄も弟も、碌な事ではあるまい。椀屋の沒落、そこでおれが。
ト自由にならぬゆゑ
エヽ、いま〱しい手錠ぢやなア。

まつ　エヽ、憎てらしい清九郎。
壽徳　コレ、構はずと、音次が吉左右聞くまでは
伊八　皆樣もマア奥へ。
久五　おやというても。
皆々　マア〳〵、ござりませ。
ト合ひ方になり、皆々奥へ入る。跡に清九郎、殘る所へ、又七出て來て
又七　清九郎どの、こなさんが思ふ通りに、何もかも。
清九　イヤ、鹽梅よう行きさうで、行かなんだ。
又七　エヽ、馬鹿な。なんの事ぢや。
清九　併し又七。コリヤ。
ト眞似事する。手が叶はぬゆゑ
これも又不自由な事だ。
又七　見りやア、手錠を打たれたの。
清九　サア、これも久兵衞めが仕業。なんぼ手錠でも、又七、耳持つて來い。
又七　合點ぢや。
ト耳を付けかける。清九郎、囁く。
又七　ムウ、そんなら久五郎松山諸とも。
清九　シイ。コリヤ。
ト片手にて起きようとして、焦れるこなしあつて、兩手を上げて
マア、來い。
ト兩手を上げて招き、又七兩人奥へ入る。唄獨吟になる。
〽思ひ川、底の心は柵みの、かけし夜空も朧月夜に、月は出ぬこそ胸の闇。
ト此うち向うより久兵衞、思案しい〳〵出て來る。奥よりおまつ、出て、兩方こなしよろしくあつて、久兵衞は花道にて。
久兵　もう、何時ぢや知らぬ。三五右衞門さまに請合ひし色紙の返答は九ツまで。これも弟が命づく。それに又。
ト思ひ入れあつて、本舞臺にて
まつ　思へば思ひ廻す程、憎くい奴は、あの清九郎。せめては彼奴を。ア、イヤ〳〵、それよりは、主の屈託休める思案か。
ト思案する。花道にて
久兵　殊に金杉の人殺し、その場所に落ちてあつた、この鐵菊の小柄は、弟の差し料。
ト小柄を出し

それゆゑに、疑ひかかりし代官所へのお召し、家内に封印あの封印。

まつ　最前、見す〳〵淸九郎が、隱した色紙と思へども、

久兵　どちらの道にも、云ひ譯立たぬ、弟は料人死罪。

まつ　命を捨てゝ封印切つて

久兵　云ひ譯立たねば、いつそおれが。

ト兩人一時に

兩人　ハテ。

ト思ひ入れよろしく

〽糸による物ならなくに、仇に咲く櫻一枝、つらや散り行く春の風。

ト久兵衞、心愁ひにて、そろ〳〵舞臺へ來るうち、おまつは硯を取つて、書置を書く、唄のうちに久兵衞内へ入る。これをちよつと見る。唄切れる。合ひ方になる。

久兵　女房お松、その書置は。

まつ　エ、。

ト悄り、ちやつと隱して

久兵　お前、いま歸らしやんしたかいなア。

久兵　案じるよりは產むが易いと、代官所へ行たが、なんでもない事であつた。

まつ　そりや、案じさせまいと思うての噓。

久兵　ヤ。

まつ　なんでもない事に、家內殘らず封印の付くものかえ。

久兵　イヤサ、それは。

まつ　ツイ、斯う〳〵と、なぜ有やうに、云うて下さんせぬ。

久兵　イヤ、その樣子より、其方の書置。

まつ　これは。

久兵　命を捨てゝ戶棚の封印切つて、色紙を取出し、渡さうといふ書置。

まつ　お前のお爲、この封印。

ト行かうとする。

久兵　そりや、女の淺墓、天下の掟は、コリヤ、背かれぬわいやい。

まつ　命を捨てれば構ひござんせぬ。

ト振り切り行かうとするを

久兵　待て。

まつ　イヽエ、放して下さんせ。

ト行かうとするを、立廻りのうち、奧よりおさん出て

さん　様子は殘らず聞きました。コレマア、待つて下さりませ。これまでの御恩報じに、命を捨てるは此おさん、お二人は御無用。この封印はわたしが。

ト戸棚を明けにかゝる。

久兵　ハテ、それには及ばぬ。

トおさんを留める。

まつ　イヽエ、わたしが。

久兵　待て〳〵。

さん　わたしが。

まつ　わたしが。

久兵　待て〳〵。

ト兩方、立廻りよろしく留めて

コリヤ、たとへ二人が封印を切つても、越度があるワ、久五郎は死罪に遭はねばならぬわやい。

ト左右をキツと留める。

兩人　エヽ、そんなら。

久兵　コリヤ、色紙の事より弟は

ト奥へ思ひ入れあつて、小聲にて

人殺しで科がある。

兩人　エヽ。

ト大きに惘りし。

兩人　そりや、どうしていなア。

久兵　コレ、この小柄。

ト出して見せる。これより胡弓入りの合ひ方になる。

鐶菊の紋散らし、椀久が差し料と世に知られたが因果。アレ、あの如く家内に封印付け、代官所へ召されて、五日の夜、金杉稻荷前で、殺されし侍ひは、即ち三五右衛門さまの弟なれど、惡黨ゆゑに勘當受けし五郎四郎とやら、その殺し手は久五郎と、證據の小柄、云ひ譯の筋もなく、段々願うて、暫しの猶豫。今宵のうちに人殺しの詮議、色紙の行くへどうかかうかと心の散亂、たとへこの身は、磔刑、獄門にかかるとも、助けにやならぬ久五郎、弟といへど實は金澤の殿の落胤。大切に育てよと、親仁さまへの御遺言といひ、お主筋の事なれば、小さい時から、氣儘に育て、年たける程、榮耀にあまる色狂ひ金は場外に使へども、これ又つひに人の目に餘る程、意見もせぬ久兵衛が、心の内はお主あしらひ。大事に思ふ久五郎が身の上、案じてのこの病氣、色紙の越度が病ぢやわい。

ト思ひ入れ。

さん　お松さん。
まつ　おさんどの。
兩人　切らねばならぬ、あの封印。
ト兩人立ち上がり行くを、久兵衞留めて引据ゑ
久兵　これ程までに、事分けて云ふに、矢ッ張り大事の封切を。
兩人　サア、切つて色紙を出さねば、お前の越度。
久兵　現在の夫を仕置にあはすか。
兩人　サア、それでも。
久兵　封印切るか。
兩人　サア、それは。
久兵　サア。
兩人　サア。
三人　サア〳〵。
久兵　外に思案もあらうわサ。
ト九ッの鐘鳴る。久兵衞、こなしあつて。
三人　ヤア〳〵、ありやモウ九ッ。
兩人　約束の刻限。
久兵　チエ、、
ト久兵衞、思ひ入れあつて兩手を組み、下に坐る。向うよりバタ〳〵にて、三五右衞門、弓張りを持ち、走り出て。
三五　久兵衞、最前九ッの色紙の返答。
久兵　もう、是非に及ばぬ。
ト戸棚の封印を引きめくりて明ける。
まつ　色紙は慥か、その重箱。
久兵　心得た。
ト重箱を前へ持ち出して、覆ひを引きあくり、重箱をひッくり返し、袱紗包みの色紙を取出し
やう〳〵手に入る、菅家の色紙、イザ。
ト三五右衞門に渡す。取つて披き見て
三五　久兵衞、これが色紙か、馬鹿を云へ。
ト打ち付ける、久兵衞、取上げ見て
久兵　ヤア〳〵、こりや色紙と思ひの外。
まつ　面妖な。紙莨入れ。
久兵　ホイ。
ト當惑のこなし。此うち切り戸より久五郎、松山出て
久五　人殺しと色紙の科人はこの久五郎。
松山　わたしも諸とも。
久五　死ぬる覺悟の、この書置。

ト書置を投げ込み、松山を連れ、向うへ走り入る。
まつ　ヤア〳〵、そんなら久五郎さまは。
　トおさん、書置を取上げ見て
さん　松山さま諸とも死ぬるといふ書置。
三五　ヤヤ。
　ト三五右衛門も吃り、久兵衛、書置を取上げ
久兵　ヤア〳〵、色紙といひ、弟が書置。こりやマア
オ、、、。
　トいろ〳〵こなしあつて
エ、。ハア、。
　トどつと下に居る。奥バタ〳〵にて壽徳、伊八、音次
走り出て
壽徳　コレ〳〵、様子は聞いた。
伊八　久五郎さまのお身の上。
壽徳　死ぬといふ書置を殘して、松山諸とも。
三五　程は行くまい。早う〳〵。
壽徳　さうぢや。
　ト十徳頭巾を脱ぎ捨て、尻を端折り。
久五郎さまイ、なう〳〵。
　ト呼び〳〵向うへ入る。又七、窺ひ出て

又七　久五郎は科人なれば、滅多に殺さぬ。ぼッかけて。
伊音　さうはさせぬ。
　ト門口にて三人、立廻りちよつとあつて、又七を見事
に投げ、音次、伊八、向うへ走り入る。おまつ、こな
しあつて
まつ　コレ〳〵、久兵衛どの、俯向いて居ては濟まぬ、こ
の騒動。
さん　久五郎さまを、お助け申す思案は。
　ト三五右衛門、立ちあがり
三五　これサ久兵衛、當惑は尤もなれど、かゝる場所に、
猶豫はなるまい、其方が爲には大事の弟、なぜぼッかけ
て助けぬぞ。
まつ　コレ、申し。
　トこれにて久兵衛、ムツクリと顔を上げる。
久兵　ヤア、なんぢや、歡久が坊主になつて、鉢を叩くと
は、ソリヤ、瓢簞ばしであらう。
　ト狂氣のこなしにて起きあがる。おまつ、おさん取り
つき
兩人　情ない。そりや何云はんすぞいなア。
久兵　何を云ふとは斜子織、黒絽なんどのかきがね、戸棚

の封印、破つて切つたが、空恐ろしや。斯うしては居られぬ。

ト駈け出すを、三人、よろしく留めて

三五　さては久兵衞、そちや任氣いたしたな。

まつ　エヽ、そんならお心が亂れて。

久兵　悲しや、弟が身の上。

トちつと泣き、又キヨロ〱と

ハヽヽ、なんぢや、嫁入りに色直し。

ト脱ぎ捨ててある十德を取上げ

こりや、舅壽德どのではない、十德、忝ない。我れらが申し受けて、さらば、はつち〱。

ト表へ駈けて行かうとする。前より清九郎、手錠を外し出かけて窺ふ。

清九　狂人の久兵衞、滅多にやらぬ。封印切つた其方も科人。

久兵　イヤ、世捨て人。

清九　イヽヤ、大事の囚人。

久兵　ハテ、世を捨てゝ浮世の花を。

清九　何がどうした。

トこれより大小入りになる。

久兵　花を見よとて、柳が招く、駕籠で押せ〱。

ト清九郎かゝるを久兵衞、立廻りにて取つて引退け、

飛んで廓へ入込む客も、粹が嵩じて格子で逢へば、野暮や不粹が、金で榮耀をするがの富士も、蒲團のとが〱、雪の肌も自由に廻す。

清九　このドウ狂人ひめ。

久兵　花車や仲居が、さらばと送れば、禿も走る大鼓末者が、跡から追うて、犬も尾を振る全盛世界、悟れば粹もなかりけり。

ト始終右の鳴り物にて、よろしくあつて、清九郎を引廻す。清九郎「なんと」とかゝる。立廻りにおまつおさん隔てる。久兵衞、十德をかたげ、椽はず向うへ走り入る。清九郎、三人を相手に立廻り。トゞ三五右衞門、清九郎を押へ、おまつおさんとよろしく見得。

幕

## 大切　淨瑠璃の場

淨瑠璃「亂候柳黒髮」　（富本連中）

役名――鳥さし、目白の九八。椀屋久五郎。傾城松山。田舎娘、おとめ。椀屋久兵衞。

瓢箪かしく

〽世の中の、人をつぼみの盛りとて、花にたとへて吹き散らす、嵐を今は身の上に、松山と椀久は

ト この所、久五郎、松山出る。

〽忍び廓の戀仲の、愚痴と未練が嵩じては、死ぬるが高田圃口や、とても浮世は牛込と、思ひ染井もうつろいて誓し命をつなぐなる、御倉の馬場も小石川、外山の霞たたずみて。

〽義理と情の二た瀬川、わしの心を汲み別れて、いんで秋を。

〽コレ、一緒に死ぬる約束で、爰まできたやらみなみやら、西へ行く身は極樂の、阿彌陀さんや釋迦さんのお世話になつて世帶して、勤めのうちの前帶を、後で結ぶ水仕業、馴れては蓮の糸針も、縫うて氣儘の木綿夜具、引け四ツ閨かぬ床に寐て、細見の名も幼名に、歸る別れのきぬ〳〵も、知らで比翼のはし紙も、人の咎めぬ取り膳は、嬉しからうぢやないかいな。

〽それに氣強い心やと、抱きつくづく顏と顏、わりなき中へ向うより。

ト 目白の九八の出になる。

〽さいな〳〵見さいな、鳥をさいた、見さいな

〽罪も報いも打忘れ、日を春の日と鳥さしが、鳩ぞ三枝十二貫、うそ鳥ならば八百か、雀は百とあての身に、あいも押へも我れ一人り、棹をかたげて來て見れば。

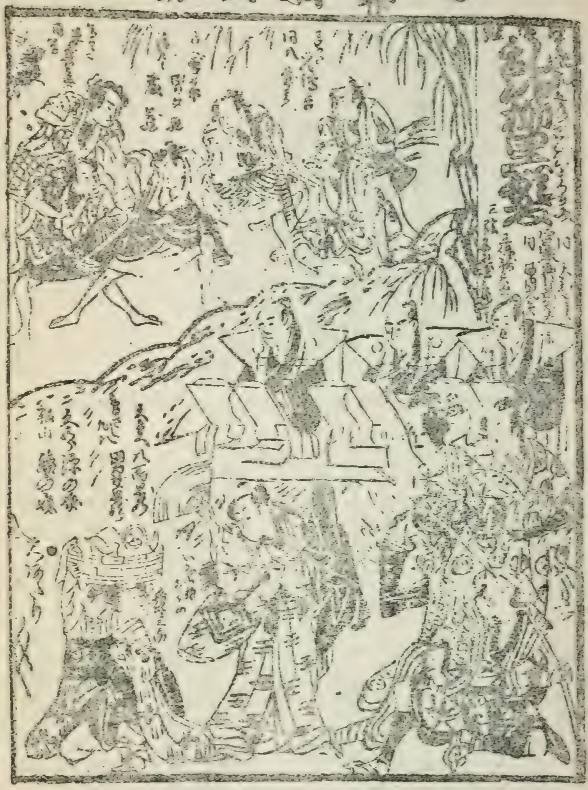
〽女鳥男鳥の美しさ、纔かにこれは色鳥と見て鳥さしがエ、さらばこれから、餌差の棹へ取持ちか、イヤやきもちに商賣を、さすも合點で、よろ〳〵と、酒を力に來りけり。

九八　ちよいとさいた、見さいな。

〽一つ人目に二つ二人を三つ見れば、四つ夜る〳〵口舌の床で、囀づるやうは、天氣よかれ首尾もよかれ、呼んでくれうと思うて、こい〳〵兎角文ちよいと色にしてとつた。

〽登りつめたる山雀の、ひわせきれいのあらうとも、冥土の鳥にならうとは、野暮鶯ぢやないかいな、山鳥の尾の長い世に、短かい雉子はよしきりと、鳥さしめきし意見なり。

巴華園大切



〽氣を鳥さしが、浮かれ唄。
〽お月さま、野暮せずと叶はぬ用ぢや、山の端に待ちなんせ、オツと心得、早く忍びて行かしやんせ、ほんに鼠は六疋ぢや、チウ〳〵。
〽ちうを走りて鳥さしは、元來し道へ
〽見送り、二人もこなたへと、別れてこそは。
〽辿り行く今は心も亂れ候。

ト久兵衞の出になる、

〽末の松山、思ひのたねよ、あのや椀久は、鼓の皮の打込んだ、我が名も折れじ椀久と、呼べば戀のと疑ひの、人のそしりも、わざくれも、兎角耳には入相の、鐘もつけ雞も鳴け、戯れ遊べ世の中は、廣いやうでも狹い世のいとし女子は抱いて寐もよし、どん〳〵〳〵つく〳〵、どんつくどんからの大鼓も音もよし、やつとセイ踊り狂うて心なき、花も吹雪も散り〳〵に、なれて田舍の小娘が。

トおとめの出になる。

〽色氣つき夜のナアンヤレ糸薄、野越え山越えかつつくりけつくり石原の、やくらんがましく云ひ立てゝ、逢へば田もやりまた畦も、やりばなしなる轉び寐も、實に樂しみと夕まぐれ、つくらぬ梅の色も香も、こぼれる花の愛敬も、にこはことして、來りけり。
〽自體某は、吾妻に産れ、智惠も器量も身代も、みな泡雪と消え失せて、こんな形になられた。
〽はつち〳〵、この十德は過ぎし頃、ゆかり法師が、ひとふしも。
〽瓢簞かしくの釣針に、かゝる浮身も昔なり。
〽法師々々は木の端と、思ふも野暮に譯知らず、心の花の君こわく、我れは塵かや身に積る、思ひのちりの胸に滿ち、それが嵩じた物狂ひ。
〽ほんに氣樂なせうねでも、藪から棒や笹の葉に、すみてならうか、畑男の土性に、鍬の金性惚れ込んで、忘れべいにもやる瀨なく、いふべい事も顏さ見りやア、うつたつべいにもすべいにも、にしやアあんだが戀知りな、忍んで逢ひに木枕の、堅い約束、石ごきも、ひとよ酒とはむごかんべい、それサアまめでごんしやつて、いつまで草の末さアは、てゝらの女子は二布して、おはゞおんしやれ、ぢゞいどんと夕顏棚もあるものを、コレ〳〵コレ〳〵氣サア丈夫に持ちめされろ、オヤてんこちねえぞとなだめける。

〽菩提の道に入りぬれど、一つも從ふものぞなき、南無妙法蓮華經々々々々々々。

〽四十餘年の經々も、法華經一部にとゞめたり、南無妙法蓮華經々々々々々々有り難や

〽また狂亂の心づき、あちよこちよと狂ひ人に、狂はぬ人も物狂ひ、もてあましたる、有樣を。

〽見兼ねてや、木蔭に二人は走り出で

〽こちの内には〳〵桐の木がござる、さぞや鳳凰が來るであろ、イヤ下駄屋の親仁どの、尤も〳〵

〽こちのうちには梅の木がござる、さぞや鶯が來るであろ、イヤ是齋の親仁どの、尤も〳〵

〽唄ふをしほに賤の女は、我が家をさしてぞ歸りける。

〽歸る故郷へ錦繪の、種もまき畫も花うるし、離れぬ椀久松山が、末の榮えぞめでたけれ

ト直ぐに打込み。

久兵　先づは今日はこれぎり。

打出し

江戸紫由縁十徳（終り）

竹に寄拍子唄に

東上總の夷隅の郡村の
小名をばかねおき村よ
角力取にて白藤源太其
相方は土橋のおしゆん

# 四紅葉思戀深川

後日四冊物

表のカタリは「四紅葉思戀深川」初演の折のものである。

この狂言、歌舞伎年代記なぞには「想戀深川」となつてゐるが「思戀深川」の方が正しいのである。

下掲の凸版は、歌舞伎年代記に出てゐる、大切淨瑠璃の場の繪である。

本文に挿入したのは、初演の時に發行された錦繪である。筆者は豐國、これは單に或る場面としてゞなく、俳優中心に白藤源太とおしゆんを對照させたに過ぎないのであらう。



# 四紅葉思戀深川

## 序幕

### 深川八幡の場
### 二軒茶屋松本の場

役名――講釋師、笹田友軒。劍菱屋傳兵衛。夷橋角太郎。醫者、竹林麥庵。太鼓持ち、萬六。佐原佐五右衛門。奴、宅内。加賀屋小雛。藝者、おうめ。女中、おなみ。鶴屋女房、おつる。女中、おりく。行司、此村大之助。白藤云ひ號け、お妙。番頭、次郎吉。岩橋屋藤三郎。金貸し、金兵衛。加賀屋太左衛門。加賀屋お俊。關取、白藤源太。

造り物、平舞臺、見附け深川八幡前、石の鳥居。左右に茶屋講釋場、この模樣よろしく、右の講釋場に笹田友軒、紙子仕立ての羽織、講釋師にて、見臺にかゝり、講釋して居る。床几の上に仕出し大勢、聽く人にて直り居る。この見得、宮神樂にて幕明く。

ト神樂少し掠める、友軒、こなしあつて

友軒　先づ今日は、これぎりに仕り、明日讀みまするは、卽ち羽柴筑前守、紫野大德寺に於て、信長公の葬式を執り行ひ、信雄、信孝燒香を爭ふ所へ、秀吉三法師丸を守りたて、一の燒香なりと權威を見せ、彼の柴田勝家、瀧川左近等を大いに罵り、加藤、福島、小西などが武勇を顯はし、兩人をきめつける、これは太閤記の骨といふ燒香の段で、隨分お早うお出で下さりませう。今日はこれぎりでござります。

ト本を疊んで見臺を片寄せる。仕立し皆々立ち上がり

仕一　明日の燒香の場は、さぞ面白からう。こりや出掛けにやならぬわえ。

仕二　兩國で馬谷を聽いたが、また爰の講釋師も、太閤記は上手ぢや。なか〳〵よい辯でござる。

仕三　おりや繪本で、とつくりと見て置いたが、太閤記が流行り物ぢや。明日は早う來ませう。

仕四　オヽ〳〵、さうしませう〳〵。

ト又宮神樂になり、捨ぜりふ、しか〴〵あつて皆々向うへ別れ入る。後の床几に佐原佐五右衛門、着付け羽織、侍ひの形にて、大鼾、生醉ひの體にて倒れ寐て

居る。友軒、そこら片付けながら、佐五兵衛門を見て

友軒　これはしたり、見れば生醉ひのお侍ひさうなが、他愛もない、コレこの新、コレ／＼、これサ。

ト揺り起しても矢張り寐て居る。

もう講釋は仕舞ひました。起きさつしやれぬか。これは殊んだお侍ひではあるぞ。

トこなしある所へ、門の内より奴宅内、ウロ／＼と走り出て、そこらを尋ね廻り

宅内　お旦那佐五右衛門さまは、どれへござつた。面妖な。

トあたりを見廻し、佐五兵衛門を見て

ヤア、爰に寐てござるワ。

ト立寄り

モシ、お旦那佐五右衛門さま、これは／＼、酒臭ひ事ではあるぞ。

ト鼻を摘む。友軒、立寄り

友軒　さては、このお侍ひの御家來か。ちやつと起して連れ申して下され。見世を片付ける邪魔になりますワ。

宅内　合點だ／＼。モシ／＼、お旦那、若殿様がお呼びなされてござります。サア／＼、お旦那、佐五右衛門さま佐五右衛門さま／＼。

ト無理に引起す。佐五兵衛門、目を覺まし、うんと起き上がる。その顔に濃ぐろに大いびきやかましいと書いてある。これを知らずに

佐五　もう／＼、御免々々、飲めぬぞ／＼。

宅内　イヤサ、若殿様のお召しでござります。早くござりませ。

佐五　なんぢや、若殿ぢや。

ト奴を見て

そんや家來の宅内か。ハテ、强か醉ひし事ぢや。

ト立ち上がり、衣紋つくらふ。

若殿のお召しとあらば、行かずばなるまい。ドレ／＼。

ト仔細らしうこま言を云ひ／＼、花道へ行きかける。この時、宅内、佐五兵衛門の顔を見て

宅内　ヤア、お旦那、あなたのお顔に。

佐五　なにを。構はずとも、供いたせ／＼。

ト宮神樂になり、悠々と宅内を連れて向うへ入る。引違へて茶屋の男、文を持つて出て來り、友軒を見て

男　モシ／＼、講釋師の友軒さまとは、お前でござりますか。

友軒　成る程、手前でござるが、こなたは。

男　加賀屋のお俊さまから、この文が。

ト渡す。友軒取つて

友軒　成る程〳〵、覺えあるお俊が文。返事は後より。慥かに受取りました。

男　左樣ならば、慥かにお渡し申しましてござります。

ト云ひ〳〵向うへ入る。友軒、この文を披き、口の内にて讀み

友軒　娘が深切、勤めの内にも、この親が身の上、彼の一品の事を案じて、度々の音づれ。

ト思ひ入れあつて

アヽ、子は持つべきものぢやなア。

トころりとして居る。向うよりバタ〳〵にて、佐五右衞門、顏を洗ひ落して、走り出て來て

佐五　ヤイ〳〵、憎くい講釋師め。うぬ、よく武士の面へ、樂書きをひろいだな〳〵。

ト胸倉を取る。

友軒　こりや、何さつしやるぞ。

ト振り放す。

佐五　イヤサ、身共が醉醒ましに講釋を聽くうちに、トロトロと居眠つたところ、あらう事かあるまい事か、武士の面を草紙に致したな。夢にも知らず、家來を連れて、いま大磯の鶴屋へ行く道で物笑ひ。コレ、この鏡で見て

ト懷より小さき鏡を取出し

コレ、これで見て悔り、其まゝ洗ひ落して、直さま引返したのは、うぬに鬱憤を。イヤ、その分にはせん爲だ。

友軒　これは迷惑。お前が居眠つてござるうち、外の聽き手が惡戲したものであらう。此方は存ぜぬ事を。

佐五　イヤ、うぬ、知らぬと云うて濟まうか。侍ひの面へ墨を塗るとは言語道斷。料簡がならぬぞ。

トきつぱ廻す。友軒笑ひながら

友軒　料簡がならぬと云うて、相手も知れぬに、キヨロキヨロとしたお侍ひ。そんな馬鹿な事を云うて、お前の顏から鼻血が出ますぞえ。

佐五　ナニ、身共が鼻血が出る。

ト顏を撫で、持つて居る鏡で顏を見て

コリヤ〳〵、鼻血ではない。うぬ、また身共を馬鹿にして、額へ南天を書き居つたな。

友軒　ハヽヽヽヽ、馬鹿らしい。そりや鏡の裏ぢやわいの。

佐五　ドレ。

ト引ツくり返して見て

成る程、今のは鏡の裏であつた。
友軒　ハテ、天晴れなお侍ひではあるわえ。
　ト脊中を叩く。また宮神樂になり、友軒こなしあつて門の内へ入る。佐五右衞門、矢張り鏡を見ながら
佐五　見れば見る程、餘り惡くもない男だに、これでお俊が靡かぬは、彼方の麁相だ。
　ト太鼓入りの鳥刺しの合ひ方になり、門の内より小雛・女郎の形。藝者おうめ・下女おなみ、同じくおりく、鶴屋の女房おつる、大皷持ち万六、この人數皆々手を叩き、囃し〳〵逃げて出て來る。後より竹林麥庵、惣髮にて、めんない千鳥をかけ、若殿角太郎を脊負ひ、皆々を追ひ出る。角太郎、棕梠箒を持ち小雛を追ひ廻す。
皆々　この鬼は、まだい〳〵〳〵。
　ト駈け歩く。
角太　目指すは小雛、ソレ、此方ぢや〳〵。エヽ、麥庵、又、其方ぢや〳〵。
麥庵　合點ぢや〳〵。
　ト脇の方へ連れて行く。小雛始め皆々駈けあるく。この見得よろしく、トヾ、麥庵こける。角太郎落ちる。
角太　アイタ〳〵。こりや腰骨を強か打たせ居つた。
皆々　ホヽヽヽ、角さま、馬鹿らしいわいなア。
　トこれにて合ひ方になる。佐五右衞門出で
佐五　これは〳〵、若殿角太郎さま、先程お呼びなされたなれど、酒に醉うて二軒茶屋を取り違へ、大橋の鶴屋へ來り、只今また爰へ。
角太　佐五右衞門、遲い〳〵。竹林麥庵が思ひ付きで、かぶされ鬼で、小雛にこの箒の先が當ると、抱いて寐る約束。それで鬼で松本の座敷から、社内を駈け歩き、爰まで追はへて來たが、どうも捕へられるものではない、
万六　そりや、竹林先生の追ひやうが下手だから。この萬六が下になつたら、やるものぢやござりませぬ。
麥庵　何と云ふやら。めんない千鳥で目は見えず、なんでも若殿に小雛の君を捕まへさゝうと、あせればあせる程すり股でござる。こりやどうでも若殿が、小雛の君に緣の無いのでござりませう。
佐五　イヤ〳〵、たとへ盲目鬼で捕へぬでも、小雛にこの佐五右衞門が計らひで、若殿角太郎さまのお手に入れまする。
小雛　佐五右衞門さん、堪忍しておくれ。なんぼ勤めして

居ても、一旦嫌と思うたお客は、どなたの仰せでも、いつまでも嫌ぢやわいなア。

角太　ハテ、情の強い奴。コリヤ、身共を誰れと思ふ。東上總夷隅の郡の領主、夷隅角太郎、得心して抱かれて寐れば、身請けして、直ぐに奧樣。すりや、その身の仕合せといふものサ。

皆々　そんなら、小雛さんを身請けさしやんすかえ。

小雛　梅吉さん、皆さん構うて下さんすな。身請けと云うても久しいものぢやわいなア。

佐五　その久しい所を、矢ッ張り久しう若殿に身請けさすそのお心で、身共が兼ねて心を掛けて口說いて居る、お俊も身請けして女房に致して見せう。

つる　佐五右衞門さん、そんな事云はしやんしたら、また白藤さんに叱られさんせうぞえ。

佐五　ナニ／＼、白藤源太は若殿のお抱への角力取り、云はゞ御家來同然といふもの。彼奴、若いに似合はぬ大の偏屈者。

りく　ほんに白藤さんは、色事はきつい嫌ひぢやわいなア。

万六　ハテ、角力取りが色事すると、第一力が落ちるゆゑ。

つる　白藤さんは立派なよいお角力取り樣なれど、色事が嫌ひは、ほんにあれが、玉に疵といふものであらう。

角太　その替へ玉の文をやらかしたが、おなみ、返事はどうであつた。

なみ　返事どころか何と云うても、七里けつぱいでござんすわいなア。

麥庵　ムウ、さてはこの竹林麥庵が、腕を振うて書いてやつた、お俊が似せ筆の付け文でも、堅氣の白藤は得心し居らぬか。

なみ　得心どころか、明けても見ずに封の儘で、お俊さんによろしく事分け云うてくれいと、取り合はずぢやわいなア。

小雛　コレ／＼、おなみどの、お俊さんが、どうさしやんしたえ。

角太　イヤ、お俊は何も知らぬ事ぢやが、白藤源太にあのお俊が、惚れて居るといふ文を、麥庵に書かせてやつたのぢや。

小雛　そりや又、なんの爲にぢやえ。

麥庵　ハテ、斯うぢや。白藤源太めは、偏屈に四角四面た堅い生れ付き、そこで茶屋狂ひ、色酒が氣に入らぬゆゑ若殿に意見をしたり、我れ／＼に當てこすりを云ふが嫌

さに、お俊が名の付け文で、フワと乘せて得心すれば、馬鹿にして、皆が嬲りものにする。

小雛　いとしぼなげに、氣前のよい源太さんを、嬲りものにとは、よしにさしやんせいなア。

麥庵　イヤ、嬲りものにせねばならぬ。日頃の腹癒せ、なんぼ彼奴が堅藏でも、おなみに云ひ付け、是非似せ筆の付け文を取つて、明けて見る手段があるぞ。

佐五　こりやア、面白い、竹林先生、その手段とは。

麥庵　オツト、計り事は密なるを以てよしとする。

角太　何を仔細らしうやり居つたワ。

皆々　ハヽヽヽヽ。

ト摺り鉦入り、伊達な唄になり、向うより源太、着付け羽織、角力取りの拵らへ、大小を差して出て、本舞臺へ來る。

源太　これは／＼、若殿角太郞さま、佐原佐五右衞門さま並びに竹林の麥庵どのにも、相變らず御機嫌で、今日もこれへ入らせられてござりまするな。

麥庵　そりやこそ、噂の堅藏、もう四角四面にやりかけた。

源太　ヤ。

麥庵　白藤關取、お出でか。

皆々　源太さん、待つて居たわいなア

佐五　源太どのが參つたこそ幸ひ、若殿、これから山の松本へ行て、又わつさりと飮みかけうではござりませぬか

麥庵　さうぢや／＼。兎角酒でなければ、花やかにない。最前から若殿も、どうやら鬱ぎ姿。これから、白藤關取同道で、サア、松本へ。

源太　これサ、麥庵どの、餘り騷ぎ召さるな。こなたは本家若殿へ、手蹟の御指導ではないか。

麥庵　ヤ。

源太　但し又、江戸の遊所へ來て、洒落の御指導か。アヽ見苦しい。その頭にも、ちと恥ぢさつしやれい。

麥庵　成る程　御尤も。

ト悄げて居る。

源太　佐五右衞門さまも御仁體な。これまでいくら申しても、お聞入れのない角太郞さまの御放埒。御意見もなさらねばならぬ身で、同じやうに深川通ひ、この事がお國へ聞えては、あまり御首尾がよろしうもござりますまいぞえ。

佐五　源太、其方は、堅い男ではござるわえ。たかで角太郞さまを、この遊所へお供申せしは、これ世事のことを

お聞かせ申さうため、云はゞ身共がマア忠義サ。

源太　アノ忠義に、お俊とやらいふ女郎を、口説かつしやりますか。

佐五　イヤサ、それは。

源太　ハテ、結構な御家來ごまぢやな。

佐五　こりや、煮ても燒いても

麥庵　啮める男ではない。

うめ　ほんに、お前が爰へござんしたので、角さんを始めお二人も、蛭に鹽、きつい悄げやうぢやわいなア。

小雛　イエ〳〵、わたしが爲には、嫌らしい事を聞かいでようござんす。源太さん、いつまでも角さんの傍に居て下さんせえ。

角太　ナニサ、たとへ源太が居やうが、平次が居やうが構はぬ。身共が抱への白藤なれば、家來同然、彼奴に遠慮はない。佐五右衛門、麥庵、皆のもの、松本で酒にせう。來い〳〵。

麥庵　イヤ、若殿、それでは。

角太　ハテ、大事ない、先づ小雛を先へ連れて行かう。

ト小雛が手を取るを

小雛　嫌ぢやわいなア。

ト振り切る。

角太　ハテサテ、來いと云うたら早く來いてや。

ト無理に小雛を連れ、門の内へ連れて入る。佐五右衛門、麥庵こなし。

麥庵　コレ〳〵、若殿があのやうに。

佐五　白藤が手前もあるに、これは〳〵苦々しい。角太郎さま〳〵。

ト云ひ〳〵、佐五右衛門も逃げて入る。

麥庵　エヽ、佐五右衛門どのまで同じやうに。それでは。

ト麥庵も逃げて入る。

万六　なんの事ぢや、お三人ながら逃げぼへに。

つる　わたしらも行かうわいなア。

皆々　サア、ござんせいなア。

ト合ひ方になり、おつる皆々、門の内へ入る。源太後見送り

源太　いくら云うても聞分けのない、若殿を唆かして、佐五右衛門どのや麥庵、あれで詰まるものかしらぬ。笑止千萬な。

トこなしある。此うち始終合ひ方。向うより長之助、着付け羽織、一本差し、行司の拵らへにて出て來て、

長之　源太を見て

白藤關取、源太どのか。

源太　これは行司長之助どの、さてはお前も、この八幡さまへ。

長之　イヤ〳〵、この長之助は近所に居れば、勿體ないが八幡さまへ參つたではない。ちとこなさんに逢ひたさに。

源太　アノ、おれに。マア〳〵、この床几へ。

長之　そんなら關取。

ト兩人、床几に腰をかける。

源太　なんの用かは知らねども、今日おれが爰へ來た樣子を、どうしてお前が知つて。

長之　サア、旅宿へ人を遣つたところが、親方の侍ひを見舞ひにと聞いたゆゑ、大方、大橋の鶴屋か、この山の二軒茶屋の內であらうと思うて。

源太　ハア、そんならどこぞの、田舍の角力の相談かえ。

長之　イヤ〳〵、さうではごんせぬ。ちつと折入つて話して、逢はす人があつての事。

源太　アノわしに。

長之　面倒ながら、關取、ちつとの間。

ト立ち上がり、花道切り幕に向ひ

駕籠の衆、爰へ來てもらはう。

駕籠　ハイ〳〵。

ト駕籠を舁いて出て、本舞臺へ下す。長之助、立ち上がり

長之　サア〳〵、爰へ出て逢うたがよい。

ト垂れを揚げる。中よりお勝

かつ　大事ないかえ。

ト田舍娘の拵らへにて出る、源太見て

源太　思ひがけない、そちや國のお勝ではないか。

かつ　アイ、源太さま、お前に逢ひたさに、この江戸へわざ〳〵と。

源太　ヤ。

長之　イヤ、その樣子はおれが話さう。コレ、駕籠の衆、御大儀であつた。わしが內へ行て、酒でも飮んで休んで下され。

駕籠　ハイ〳〵、有り難うござります

ト駕籠を舁いて向うへ入る。此うち始終合ひ方。

源太　お年寄られた親仁さまの、介抱がてら、國のお留守居に致し置いたお勝、爰へは何用があつて。

かつ　又お前に叱られやうか知らぬが、長之助さま、そこ

はよいやうに、仰しやつて下さりませ。

長之　氣遣ひせまい〳〵。おれが呑み込んで居る。關取、たかで斯うぢや。こなさんの親御、白藤源兵衞は、前々は鳴らした關取、この長之助が十二三の、まだ小僧の時であつたが、回向院の角力、中入り前の勝負に、彼の白山關取新三どの、讃岐の相引、互ひに手取りなれば、何が諸見物が固唾を呑んで見て居る角力、その時の行司はこの長之助、ヤッと云うて團扇を引くと、ドッコイと立合つて、互ひに組まさず跳ね合ふうちに、相引が浮き足、そこを見付けて、白山へ團扇を上げたのを、サア揉めまい事か大騷ぎ、西國方一統に勝負はないと、行司の麁相と揉め拔くを、土俵の眞中におれがぶッ坐つて、なんぼ子供でも、此村長之助、見損じはせぬ、相引が負けに違ひはないと、泣きしみついて爭ふ仲へ、こなたの親御白藤關取が出て、イヤ〳〵、今の勝負は長之助が見損ひではない、それが越度なら長之助が代りにおれが相手だと、一腰極めて西國方との詰め開き、それでやう〳〵皆々得心、江戸方も納得して、勝負付けも相引が負けに、この長之助が詞も立つ。それから段々年を取つて、今この廣いお江戸に、此村長之助と人に知られ、日本國の關取が、手を置くやうになつたのは、元は源兵衞どのが、小僧の時に肩を持つて下さつた其お庇。それから親同然懇ろにするといふ、こりやおれが身の上話し。時に、このお勝どのは、國で源兵衞どのが貰うて置いて、末はこなさんと夫婦にする心ぢやさうなに、もう脊丈延びて、祝言してよい時分に、悪角關取は素氣なう、その氣なしに他人向き、それが年寄つた源兵衞どのゝ苦勞になるさうで、今度こなたが江戸へ來て居るを幸ひに、昨日、國からおれが所へ、樣子委しく書いた狀と、お勝どのを送らしておこしての頼み。現在の親の口から云ひ憎い、お勝も自分の娘、源太に得心させて、内祝言などさしてくれ、年寄の事、明日をも知れぬ身の上なれば、二人が祝言すれば、この世に思ひ置く事はないと、くれ〴〵の頼みの狀。そこで返事を請合つて、此村長之助、商賣の行司は卽ち仲人役だ。關取、承知してもらひたい。

源太　ムウ、そんなら國許の親仁さまから、お勝をこなさんの所へ送らして來て。

かつ　アイ、わたしや何にも知らぬが、父さまの云ひ付け。それでアノ長之助さまをお頼み申して、お前とアノ

ト袖にて顏を隱し、恥かしき思ひ入れ。

長之　關取、嫌であらうが、長之助を立てゝお勝と內祝言を。

　ト源太、思ひ入れ。

源太　そりやハヤ、國の親仁さまからの頼み、こなさんが世話してくれるもの、わしぢやというて萬更でも、

長之　そんなら得心して。

源太　アイ、お勝、杯しても、後で嫌らしい事はならぬぞ。

長之　ハテマア、そりやどうなりとも。なんとお勝どの、どうだ〳〵。

かつ　アイ、わたしやモウ〳〵、嬉しうて〳〵、何も申しませぬ。長之助さま、エヽ。

　ト兩手を合せ、拜む。長之助こなしあつて

長之　アレ、あのやうに。

　ト源太に云ふ。源太、ちやつと脇見をする。

ハヽヽ。善は急げと云へば、先づ杯を。おれが所はこの横町なれど、取敢へず山の二軒茶屋、あひに相生の松本。

　ト門の中を指し

とはどうです。

源太　そんなら松本へ行て。

かつ　內祝言するのかえ。

長之　オヽ、するのぢや〳〵。ナウ、關取。

源太　エヽ、さま〳〵の事云うて、女郎が失せて、長之助どのゝ手前、小ッぱづかしい。

長之　何を初心な。マア、二人ともに、サアごんせ。

　ト唄になり、三人とも思ひ入れ、こなしあつて門の內へ入る。向うより劍菱屋傳兵衞、着付け羽織、町人の拵らへにて出る。後より次郎吉、火繩箱を持ち、船頭の形にて駈けて出て

次郎　申し旦那、お前、いつもの鶴屋へ行かつしやると思うて、この河岸へ船を付けたら、こりや八幡さまへ御參詣でござりまするか。

傳兵　イヤ〳〵、八幡さまでもないてや。ちと逢はねばならぬ人があつて、山の二軒茶屋へ行くのぢや。

次郎　ほんに旦那は、上方から新川へ來てござる酒屋の

傳兵　劍菱屋傳兵衞、新川に出見世があれば、ちよこ〳〵逢つて居るゆゑ、江戸は大方承知ぢや。

次郎　さうでござりませう。お前も又、この深川へ來すと町へでもちとお出でなされませぬか。

傳兵　イヤ〳〵、吉原はどうでも手重い。矢張り馴染んだこの深川がよいてや。時に次郎吉、夷隅角太郎さまとい

ふお侍ひは來てござるか、尋ねて來てくれ。

次郎　そりや、東上總から來てござるお侍ひでござりませう。

傳兵　ハテ、詳しうよく知つて居るな。

次郎　そこが江戸ッ子、水道の水で育つた次郎吉。ドリヤ、さう云うて來て進ぜませう。

ト また宮神樂になり、次郎吉、門の內へ入る。傳兵衞殘り、こなしあつて

傳兵　なんでも角太郞さまに逢うて、金のせいらく。また佐五右衞門さまには、おれが賴んで置いた、彼の返事を聞きたいものぢや。

ト これにて潮來唄になり、傳兵衞、床几に腰をかける。向うよりお俊、女郎の形にて、男に襠文庫を持たせ出て來る。

お俊　小兵衞さんは、先へ行てぢやあつたかえ。

男　最前の事でござります。お前を待つてござりませう

お俊　髮結ひさんが遲いゆゑ、手間取つたわいなア。

ト 云ひ〳〵、本舞臺へ來て、門の內へ行かうとする。

傳兵　これサ、加賀屋の板頭々々。

ト 呼びかける。お俊見て

お俊　傳兵衞さん、嫌いなア。いろ〳〵の名を云うてから。

傳兵　ハテ、吉原で花魁、爰では板頭、いつも御盛んでおめでたい。お俊さん、なんと江戸詞は詳しうなつたらうが。

お俊　上方のお方は、其やうに調子なさるわいなア。

傳兵　ナニ、噓ではなし、マア、ちよつと爰へ。

お俊　いま約束で二軒茶屋へ行くが、田舍の客人で遲いと云うて、やかましいわいなう。

男　サア、早うお出でなされませ。

傳兵　その客人といふは、東國の御家來、佐五右衞門どのか。

お俊　お前も知つてぢや、佐五右衞門さま、それでわたしは。

ト 行かうとするを

傳兵　ハテ、佐五右衞門どのなら、おれがよう云うてやる。マア〳〵ちよつと。

ト 手を取る、振り拂ひ

お俊　傳兵衞さん、顏出してから、ゆるりとお目にかゝりませう。

ト 合ひ方になり、お俊行くを、傳兵衞留めるを、構は

ず、若い者を連れて門の内へ入る。傳兵衛、こなし。
傳兵　彼奴は、どうでも手に廻らぬ。但し、佐五右衛門どのがメめたか知らぬ。よもやさうではあるまいか、ハテ、どうしたものであらうな。
トまた宮神樂になり、彌三郎、着付け羽織、町人の形、金貸し金兵衛を連れ立つて出て來る。
彌三　金兵衛さま、約束違へず御苦勞、よう來て下さりました。
金兵　サア、お前の餘儀ないお頼み、靈岸島の内へは行かれず、爰へ來てくれいとあるゆゑ、それでわざ／＼來ましてござります。
彌三　段々の御親切、忝なうござります。マア／＼、向うへ行つてとつくりと。
金兵　そんなら彌三郎さま。
彌三　サア、ござりませ。
ト兩人、本舞臺へ來る。これを見て傳兵衛、下の方講釋場の方へ寄り、様子を窺うて居る。兩人これを知らず、床几に腰を掛ける。
金兵　時に彌三郎さま、いよ／＼右の代物、爰へ持參さつしやりましたか。
彌三　成る程、お前を頼んだは、死なしやつた大仁さまが、此方の内へ質に取つて置かつしやりました、小倉の色紙、定家卿の夕風の歌、その置き主は、疾に出奔して行くへも知れねば、今では此方の内の實物同然。大事の色紙なれど、お前に預けて暫らくの間、金が借りたさに。
金兵　ハテ、金貸しはおれが商賣、四五日の間、小倉の色紙を預かつて、五十兩貸してくれいと頼みゆゑ、云うても靈岸島で岩橋屋彌三郎さま、如何にも呑み込んで貸しませうが、その色紙は。
ト彌三郎、懷より色紙の箱を取出す。此うち片脇より傳兵衛、とつくりと様子を聞いて居る。彌三郎、箱の紐を解き
彌三　定家卿の色紙に違ひはない。とつくりと改めて見て下さりませ。
ト金兵衛取つて、袱紗を披き、色紙を改め、とつくりと見て
金兵　成る程／＼、墨色と云ひ、この筆法、また格別。こりや定家卿に違ひはあるまい。
彌三　そんなら、わしが頼んだ
金兵　五十兩貸しませう。

ト色紙を箱へ入れ、元の所へ直し置き、金兵衛、金を出すうち、傳兵衛、右の箱をソツと取り、中の色紙を取り、箱を元のやうに直し、色紙を頂き、うまいと云ふ思ひ入れ、ソツと門の内へ入る。金兵衛、金を改め彌三郎に見せ

金兵　コレ、約束の五十兩、わしが金は、此やうに壹兩壹兩に、澤と云う字の極印、改めた正金、ソレ、渡しますぞ。

ト彌三郎、受取り

彌三　成る程、澤といふ字の極印、丁度五十兩、慥かに受取りました。

ト金兵衛、財布ともに遣る。彌三郎、右の金を財布に入れ

日頃の懇ろとて、金兵衛さま、とても物の事に、右云ふ通りに、内の寶物同然なれば、お前がとつくりと改めて見さんした上は、その箱へ、わしが心覺えの封印をしつかりと。

金兵　成る程、大切な物とあれば、互ひの念。サア、望みの通り、この箱へ封印をしつかりと。

彌三　なんの封印にも及ばぬけれど、ほんのわしが馬鹿念とやらで。

ト云ひ／＼、色紙の箱の紐へ封印を付ける。金兵衛、また矢立を拔いてやる。これにて封印の覺えをして、金兵衛へ渡し

彌三　これで、わしも心が濟みました。

金兵　この色紙が證文代り、必らず四五日のうちに。

彌三　ハテ、取戻さにや内へ濟みませぬ。

金兵　そんなら、彌三郎さま。

彌三　金兵衛さま。

金兵　コレ、呑み込んで貸す大金、四五日のうちにきつとよ。

彌三　承知して居ます。

金兵　承知なら、ドリヤ、歸りませうか。

ト唄になり、金兵衛、色紙の箱を持つて向うへ入る。

彌三郎殘り、こなし。

彌三　ア、嬉しや、内のおきのを頼んで、色紙を借りたればこそ、マア、五十兩出來たといふもの。これを小雛が身請けの手附け。この事を早う知らして喜ばせたいものぢや。

ト門の内より小雛、走り出て、彌三郎を見て

小雛　彌三郎さん。

彌三　小雛か。

小雛　コレ、逢ひたかつたわいなア。

ト抱き付く。これより三味線入りの神樂になり、彌三郎こなし。

彌三　今日この山の、松本へ來て居ると知らせやつたゆゑ、それで來たが、斯うして居る所を、彼の侍ひが見附けたら、また苛め居らうぞや。

小雛　なんの大事ござんせぬ。この樣子を侍ひが見付けて腹を立てたら、それを幸ひ、それ切りに、わたしや出やせぬわいなア。

彌三　イヤ〳〵、出やせぬ〳〵と、これまで云うても、矢ツ張り今日も出て居るではないか。

小雛　サア、どのやうに云うても、あのやうにしつこう呼び出すわいなア。

彌三　そりや、なんぞ譯があらう。

ト態とムツとして上の方へ來て、立て札を見る。小雛付けて來て

小雛　またお前、何でもない事を、其やうに。

彌三　なんぢや、開帳八幡宮御神儀並びに靈寶。

ト構はず讀んで居る。

小雛　コレ、彌三郎さん、お前に云はねばならぬ事があるわいなア。

彌三　エヽ、甲子三月朔日より。ハテ、この八幡さまもお開帳があるな。

小雛　ニヽ、モウ、自烈たい。コレイナア。

ト無理に此方へ連れて來る。

彌三　小雛、てまへも開帳さしたな。

小雛　エヽ、

彌三　八幡さまではない、お侍ひさまの御新造には、ハテ、靈寶を出して、おツつけ身請けされて、そも〳〵上總の國へ嫁入りをする女郎は、こなたでござる、近う寄つて顏を見ようか。

ト小雛を引寄せる。

小雛　イヽエ、わたしが顏より、吉原の花魁の顏が見たからうが。

彌三　なんの事ぢや。

小雛　知るまいと思うてかいな。今度の突出し、松葉屋の市川さんに馴染まんして、逢はしやんすであらうがや。

彌三　アノ、市川に。

小雛　アイ、市川さんに。

　ト門の內より

次郎　オイ〳〵、誰れぢや、何の用ぢやな。

　ト次郎吉出て來て、二人が眞中へ入る。

彌三　そちや、市川の舟宿

次郎　市川屋の次郎吉、彌三郎さま、さては小雛さんを連れて、二丁町へ行かつしやりますか。舟でもいりまするかな。

小雛　エヽ、お前の事ではござんせぬ。あの彌三郎さんが、吉原の松葉屋の市川さんに、凝つて通はしやんすゆゑ。

次郎　ハヽア、そんなら今度の突出し、美しいと剛氣に評判のよい、松葉屋の市川に彌三郎さまが。

彌三　イヤ、覺えはない。尤も初手の市川に、一昨年の春は、馴染んで居たれども、今度の市川は、よい花魁と聞いたゆゑ、ちよつと仲の町で見たばかり、それを小雛が市川〳〵と、名立てがましう云ふが、をかしいわいの。

次郎　わつちがお爺さんなら、向島に隱居してござれども

彌三　松葉屋の市川が事は、知らぬ〳〵。

次郎　こりやア、小雛さんが、誰れぞにしやくられたものぢやな。

小雛　さういふ事なら、わしや嬉しいわいなア。

彌三　オヽ、嬉しからう。今日も爰へ角太郎と連れ立つて來て居るわえ。

小雛　又かいなア。

　トせり合ふ。次郎吉「マア〳〵」と引分ける。小雛、ツンとして床几に腰を掛けて莨をのむ。

次郎　モウ〳〵、角太郎も飛車太郎も、そんな事はこの市川へ流して、お二人ともに機嫌直して、仲直りの酒の代り、杯莨盆。

　ト小雛ののんで居る煙管を取つて、彌三郎へ持つて行く。

彌三　腹が立てど、次郎吉が挨拶。こりや堪忍してやらずばなるまい。

　ト取つてのむ。小雛、こなしあつて

小雛　ほんに、あんまりの事で、をかしいわいなア。

彌三　をかしくば、もう一服付けてのませ。

　ト側へ寄添ふ。小雛、付けてやる。次郎吉、これを見て

次郎　サア、千秋萬歲、千箱の莨が直ぐの仲人。ハテ、睦ましいお二人が仲、幾久しう。

ト辭儀をする。

彌三 ほんに、それで思ひ出した。次郎吉、其方に頼みたい事がある。

次郎 何なりとも。

彌三 外でもない、この小雛が親方、加賀屋太左衞門に逢うて、急用の相談がしたい程に、大儀ながら爰まで來て下されと、呼んで來てくれぬか。

次郎 大橋の子供屋は、どこでも知つて居るこの次郎吉。

小雛 モシ、親方さんを呼びにやつて

彌三 ハテ、案じる事はない。默つて居や。

次郎 ドリヤ、わつちは呼んで參りませう。

ト矢張り三味線入りの神樂にて、次郎吉向うへ入る。

小雛 モシ、角太郎や佐五右衞門が、是非ともわたしを身請けすると云うて居るゆゑ、その樣子をお前に文で云うて上げたが、それで今、親方さんを。

彌三 サア、呼びにやつたは、侍ひより先へ、身請けはおれがする。親方が來たら、マア手附けを渡して置けば、滅多に外へ相談はならぬわサ。

小雛 でも、その手附けの金が。

彌三 コレ、爰に持つて居る。

ト最前の財布を出して見せる。此うち門の方より角太郎、麥庵を連れて出て來て、二人を見て、倒り、囁き合ひ、窺うて居る。

この五十兩を手附けにして、後金は四五日のうちに拵らへて渡せば、勤めを引かして、末の松山浪越さゝぬ二人が仲。

小雛 忝なうござんす。よう金を拵らへて下さんしたなア。わたしが身請けが濟んだら、直ぐにお前の内へ行くのかえ。

彌三 イヤノヽ、おきのといふ者があれば、滅多に内へは入られぬ。當分は其方のゆかり、大和町の友軒どのゝ所へ預けて置いて、毎晩おれが逢ひに行くわいの。

小雛 こんな嬉しい事はござんせぬ。モシ、彌三郎さん、まだお前に話しがたんとあれば、アノナ。

彌三 滅相な。どこで晝中に話しがなるものか。

小雛 ツイあの、葭簀の内へ。

彌三 ありや、饂飩の揚弓場。

小雛 山へ行くと、侍ひに見付けられたら悪い。ちよつと來て下さんせ。

彌三 ぢやというても。

小雛　ハテ、大事ないわいなア。
ト小雛・無理に彌三郎を下の方葭簀の内へ連れて入る。此うち矢張り三味線入りの神楽にて、麥庵、角太郎、をかしき身振りにて前へ出て
角太　麥庵。
麥庵　今のを見ては
角太　幸ひ／＼。
ト縁起の金を出して見せ
この縁起の金は、松本の小僧が持つて遊んで居たを、身共が借りて、太鼓の萬六や、女子供を騙さうと思うたが、この縁起の金と、今の彌三郎が持つて居た五十兩と、コリヤ。
ト囁く。麥庵、この金を取つて
麥庵　成る程、摺り替へて、身請けの手付を此方から。
角太　合點か。
麥庵　人が來るか、心を付けさつしやりませ。
角太　オ、サ、早く／＼。
ト始終三味線入りの神楽の内にて、麥庵・縁起の金を持ち・葭簀張りの内へ差足にて入る。角太郎殘り、こなしある所へ、門の内より

佐五　若殿々々、麥庵はどれへ參つた。
ト云ひ／＼出て來て
これにござりますか。
角太　佐五右衛門か。コリヤ。
ト囁く。
佐五　ムウ、そんなら彌三郎が
角太　ハテ。
ト又囁く。
佐五　成る程、こりや出來ました。
ト此うち麥庵、葭簀の内より出て來る。
角太　麥庵、首尾は。
麥庵　まんまと、摺り替へた正金五十兩。
ト包みの金を出す。
角太　よし／＼。
ト受取る。
佐五　この上は、二人を引出し、存分に。
角太　それがよい。麥庵、ソリヤ。
麥庵　合點ぢや。
ト葭簀の内へ入り
不義者めら、うせう／＼。

ト彌三郎小雛を引立て出る。角太郎は彌三郎、佐五右衛門は小雛が首筋を取つて

佐五　若殿の揚げ詰めの、この小雛を

角太　盗み喰ひの素町人め。

麥庵　存分にせにや置かぬぞ。

小雛　コレ、滅多な事を云はしやんすな。なんぼ角太郎さまに出ても、帯紐解いた事はござんせぬ。彌三郎さんは下地から云ひ交した殿御も同然。

彌三　殊に小雛は女郎、貸し借りといふ事は、すべて色町の慣ひなれば。

佐五　無駄口利かずと、ぶち据ゑさつしやれ。

麥庵　うぬを。

ト兩人して彌三郎を打擲する。小雛「それは」と寄るのを、佐五右衛門「何を」と引留める。いろ／＼ある所へ、門の内より友軒出て、この體を見て、ツカ／＼と出て、角太郎を突き廻し、麥庵を取つて投げる。

佐五　ヤア、麥庵を。

トかゝるを、グツと手を捻ぢ上げる。彌三郎小雛、友軒を見て

彌三　ほんに、思ひがけない。

小雛　お前は爰へ。

友軒　イヤ／＼、女中、お若いお人、手前の挨拶は後で。先づ此奴を。

トまた捩ち上げるを佐五右衛門、振り切り、かゝるを見事に中返りをさせる。角太郎、麥庵「それは」とかかるを、左右へ突き廻し、兩人が面を見る。

麥庵　アイタヽヽ。こりや、どうしをる。

角太　かけも構はぬ所へ、出たうぬは。

友軒　この所に於て講釋を致す、笹田友軒と申す者。

ト此うち佐五右衛門、起き上がり

佐五　ほんに、うぬは最前の講釋師。

角太　その講釋師が、身共が揚げ詰めの女郎の、横盤を切る二才めが肩を持つて

佐麥　なぜ、今のやうに、手ひどい目にあはせた。

友軒　イヤ、横盤やら竪盤やら、その儀は存ぜぬが、アレあの葭簀の内は、手前の稼業場、何ゆゑあの如く打ち壞した。

三人　ヤア。

友軒　サヤ、稼業場を打ち壞し、渡世の妨げ致すのか。

佐五　ハテ、大層な物の云ひやう。あの葭簀はツイこけた

のだ。それに何程の事がある。

麥庵　それに稼業場の講釋小屋を、この二人の出會ひ宿。

角太　呑み込み仕事の逆ねだり、我れ／＼をなんでぶち投げた。この返答があるか。

三人　サア／＼、どうだ。

友軒　ヘヽヽヽ、ハヽヽ。見れば兩腰を挾み居れば、武士の作法は存じて居らう。譬へあの二人が横盤とやら、出會ひとやらの、越度あらうにもせよ、あの小屋は笹田友軒が居所なれば、卽ち屋敷城廓も同然。其方達が不屆きあれば、主たるこの友軒が捕へて手渡しするが大法。それに理不盡に、主に屆けもせず、猥りになぜ暴れ込んだ。

三人　イヤ、それは。

友軒　浪人なれど以前は武士、サア、返答次第で料簡があるが。

三人　サア、それは。

三人　サア／＼／＼。

佐五　こりや、モウうぬ。

ト刀を拔いて切つてかゝるを、友軒、三人を相手にちよつと立廻りあつて、友軒、佐五右衞門の刀を引ッたくり、三人を酷く脊打ちに打ち据ゑる。

友軒　年寄つたれど笹田友軒、身動きひろぐと、ぶち放すぞ。

三人　コレ、料簡を。

ト三人、こけながら手を合す。

友軒　この二人に云ひ分はないか。

三人　勿論々々。

友軒　云ひ分なくば、赦してくれる。

ト刀を抛り付ける。

彌三　よい所へ來て下さりまして、今の難儀を。

小雛　彌三郎さまにも、お怪我がなうてわたしが喜び。

兩人　思へば、ハテ、無理な理窟で

友軒　なんと。

兩人　イヤ、お達者な親仁樣。

ト皆々こなしある。向うより太左衞門、スタ／＼出て來て

太左　モシ、小雛のお客の彌三郎さま、先程、次郎吉を呼びに遣はされたれど、叶はぬ用事があつて、さう／＼只今。

小雛　親方さん、待ち兼ねて居たわいなア。

太左　さうであらう。相談とあるは、大方わが身の

彌三　成る程、身請けをせうと思うて、サア、小雛が身請けをするがどうぢや。

トわざと角太郎が方へ向いて云ふ。友軒こなしあつて

友軒　すりや、小雛どのゝ身請けを、こなさんが。

小雛　モシ、お前も喜んで下さんせ。わたしや彌三郎さんに、身請けせらるゝわいな。

友軒　それは何より。エヽ、忝ない。

ト嬉しきこなし。

太左　モシ、彌三郎さま、いよ／＼小雛を身請けなされますれば、只今手附けの五十兩。

彌三　渡さうと思うて、呼びにやつた。

ト財布を出して

サア、五十兩、とつくりと改めて受取らつしやれ。

太左　ハイ／＼、有り難うございます。先づ改めて。

ト財布を取り、披き、緣起の金ゆゑ恟り。

ヤア、こりや緣起の土の金。彌三郎さま、これが小雛の手附け金でござりまするのかえ。

ト彌三郎に見せる。彌三郎、恟りして

彌三　ほんに、こりや緣起の金。最前金兵衞が手から、改めて受取つたは正金五十兩。それがどうして此やうに、ヤア／＼、面妖な

トうろ／＼こなし。小雛も驚ろく。

友軒　彌三郎さま、正金五十兩がこの緣起の金になつたとは譯があらう。コレサ、とくと氣を鎭めて、なんぞ覺へがあれば云はつしやい。及ばずながら拙者めが吟味を。サア、どうでござる／＼。

ト氣を急いて云ふ。此うち門の内よりお俊、この體を見て、わざと後に樣子を聞いて居る。彌三郎、こなしあつて

彌三　サア、何も覺えはござりませぬが、宮前の澤屋金兵衞といふ人に、借り受けた五十兩の金、即ち一兩々々に澤の字の極印があつて、それを財布に入れて、チツと持つて居りましたが、あの葭簀の内へ小雛が來てくれいと云ふゆゑ、二人行て、アノ、ソレ、ツイ話しを。ナウ、小雛。

小雛　サイナア。その時には、何にも外に變つた樣子も。

ト兩人、愚圖々々と云ふと、友軒、思ひ入れあつて

友軒　エヽ、さては、これも大方。

ト三人を尻目にかけ

とは思うて居れど、證據も見ねば迂濶に。ハテ、どうし

たものであらう。

ト思案する。

太左　エヽ、らつちもない。何の役にも立たぬ事に呼び付けて、彌三郎さま、こりやどうでござります。

彌三　サア、肝心の手附け金が此やうに。

太左　土の金では、小雛が身請けは出來ませぬぞ。

彌三　エヽ、これは。

ト打ちつけ、泣く。小雛も取付き、こなしある。友軒、思案して居る。お俊、氣の毒なる思ひ入れよろしく

佐五　若殿、彼方が埒が明かずば、ソレ、小雛は此方へ身請けしておしまひなされませ。

ト懐より財布を出し、その金を出せと敎へる。

角太　コリヤ、親方、小雛はこの角太郎が身請けする。緣起の金ではない。しかも正金五十兩。それ〱、佐五右衞門、あれに渡せ。

ト最前の包み金を出して佐五右衞門に渡す。佐五右衞門取つて、太左衞門を呼び、渡す。

佐五　コレ、親方、云うても御主人は、東上總夷隅の領主、身請けとあれば違ひなく、早速手付け五十兩、お渡しなさるゝ。改めて受取れ。

太左　イヤモウ、どなたでもお金の早い方へ身請けさします。と云ふは親方のお定まり。マア、金を改めて

ト受取り

ほんに、こりや正金五十兩、違ひござりませぬ。

佐五　なんの違つてなるものか。金を渡せば手付け證文を。

太左　疾より認めて、持つて參りました。

ト懐より出して渡す。

小雛　親方さん、なんぼお前が承知でも、嫌ぢやと思ふ客人に身請けせらるゝ事は、嫌でござんすぞえ。

ト太左衞門が側へ行かうとするを、友軒引留めて

友軒　コレ、急くまい。まだ手附けは假り。後金が濟まねば、しつかりとした身請けといふのでもあるまいてや。

小雛　それでも親方さんに。

ト又行くを

友軒　ハテ。

ト留めるうち、お俊、後にて心遣ひのこなし。この時、フト友軒と顏見合せ、兩人思ひ入れ。お俊、友軒、心意氣あつて、ツイと門の内へ入る。

彌三　さうぢや。

ト友軒が脇差にて死なうとするを

友軒　これは短氣な彌三郎どの。云ひ交した小雛どのゝ、
身請けせうと持參の金は、緣起の金と入れ替つた外聞、
また外へ身請けせられては、男が立たぬ、濟まぬと思う
て死ぬるとは、ア、、どうでも若い〳〵。
彌三　ぢやというても。
友軒　コレ、また思案もあらうわサ。
　ト兩人ヂッととまる。
角太　なんと、佐五右衞門・麥庵、此方は身請けが片付い
て、めでたいではないか。
麥庵　ヤア、めでたやな〳〵、めでたい事を申さうなら、
鶴は千年龜は萬年、小雛はなんぼ振り付けても、身請け
が濟んだら彌三郎を思ひ切り、若殿の屛風の內へ、サラ
リサラリ。
佐五　時に、あまりめでたがるまい。この身請けの樣子を、
彼の白藤源太めが聞いたら、又むづかしう云うて、意見
を致しませうぞえ。
角太　そこは拔からぬ。麥庵に云ひ付けて置いた。
麥庵　我れらが似せ筆の付け文で、白藤源太めに、頭は上
げさせませぬ。
佐五　そんなら、祝ひに一つ〆めませうか。

三人　よい〳〵〳〵。
　ト手を打つ。向うバタ〳〵にて、嘉七、ブッ裂き羽織
股引、大小にて、捕り手三人、連れ出て來て
嘉七　この所に詮議があるぞ。一人も動くまいぞ。
　ト下の方にて捕り手三人、十手を振り上げ、取卷く。
皆々　ヤア、こりや何事。
嘉七　盜賊の懸り合ひの詮議。
友軒　あなたはお代官さまと見受けましたが、して、盜賊
の懸り合ひと仰せられますると、その樣子は。
嘉七　即ち當所に於て、金貸しを渡世に致す、澤屋金兵衞
といふ町人は、大それた盜賊。
彌三　エ、、澤屋金兵衞が。
　ト恟りする。
友軒　コレ。
　ト抑へる。
嘉七　天命遁がれず、顯はれし舊惡の中にも、嚴しくお尋
ねなさるゝは、京都何某どのへ押入り、盜み取つたる金
子には、一々澤の字の極印、所持いたし居るゆゑ、先程
召捕り、代官所にて拷問にかけしに、この所に於て五十
兩、懇意の者へ貸したとあるゆゑ、直ぐに吟味に向うた。

覺えあらば金子を差上げい。さもなくば盜賊の同類。キツと曲事に申し付けるぞ。

彌三　イヤ、申し、その金は。

友軒　ハテ、うろたへまい、その金が、お前の手にござるか。

彌三　ほんに、この。

ト緣起の金を取上げるを

小雛　マア、何も云はずと、默つて居やしやんせいなア。

ト彌三郎を鎭める。此うち太左衞門、また手附の金を、とつくりと改め見て

太左　ヤア〳〵、この金は五十兩ながら、澤といふ字の極印が打つてござる。

嘉七　ドレ。

ト嘉七、取つて見る。

誠にこの金は、吟味の金に違ひはない。さてはうぬ。

太左　ア丶、モシ〳〵、私しは何にも存じませぬ。その金はたつた今、あのお侍ひさまから受取りました。

トきつとなるを

嘉七　すりや、あの侍ひが。ソリヤ。

三人　ハツ。腕廻せ。

ト押取り卷く。

角太　コレ、必らず麁相召さるな。

佐五　成る程、これには云ひ譯があるぞ。

嘉七　ナニ、云ひ譯とは。

佐五　外でもない、この金は、それ、そこに居る彌三郎が持つて居たのを、オ丶、この麥庵が摺り替へて渡したのぢや。麥庵、ちやつとそこへ出て、樣子を云へやい。

麥庵　ぢやというて、おれ一人に熱湯を浴びせるやうに。自體これは、若殿の云ひ付けで。

角太　コリヤ〳〵、身共は知らぬ。其方が摺り替へて來て渡したではないか。

麥庵　サア、それでも。

嘉七　樣子を云はねば、ソレ。

三人　繩、打たうか。

ト十手振り上げる。

麥庵　ア丶、コレ〳〵、申します〳〵。これは又情ない事ではあるぞ。

ト頭を搔く。

たかで斯うでござります。あの緣起の土の金と、彌三郎が持つて居た正金五十兩と、アノわたしが麁相で、ツイ

嘉七　穿き違へたのでござります。イヤ、こりや雪駄の事でござります。金と摺り替へたのでござります。
嘉七　さてはこの金の元の持ち主は、彌三郎ぢやな。
麥庵　ハイ／＼、左樣でござります。
嘉七　摺り替へた科はあれども、金が返れば宥しくれる。この上吟味は彌三郎に。
麥庵　エヽ、有り難うござります。
太左　さうぢや。金も取らずに、手付け證文は渡されぬ。
ト佐五右衞門の持つて居る證文を引ッたくる。
佐五　コリヤ／＼、それは。
太左　いつでも金と引替へ。ヤレ、恐ろしやの。
ト向うへ逃げて入る。三人、こなしあつて顏見合せ
三人　なんの事ぢや。
角太　ちつとの間、空喜び。
佐五　爰に居たら、どんな目に逢はうも知れぬ。サア、若殿。
角太　佐五右衞門、麥庵、來い。
ト合ひ方になり、角太郎、佐五右衞門、麥庵を連れ、門の内へ入る。彌三郎、こなしあつて嘉七が側へ行き
彌三　何事も今といふ今思ひ當つたこの身の罰。お代官樣、この上は如何やうにも。
ト覺悟の體。友軒、立寄り、彌三郎を引退け、嘉七に向ひ
友軒　もうよい／＼、大儀でござつた。
嘉七　なんと、代官の役は出かしましたらうか。
ト大小を抜く。捕り手三人も尻からげを下ろす。門の内よりお俊出て
お俊　父さん。
友軒　娘。
お俊　首尾ようゆきましたわいなア。
トこれにて彌三郎、小雛、合點のゆかぬ思ひ入れ。
小雛　友軒どの、お俊さん。
彌三　代官捕り手も、あの姿といひ、こりやマアどうで
小雛　ござんすえ。
友軒　こりやア娘が働きで。
お俊　最前後で樣子を聞いて、慥かに金は三人が、摺り替へたと思うたゆゑ、父さんに目で知らし、門を廻つて十二軒へ走つて行て、澤の字の極印の金、斯う／＼でござんすと、委しく賴んで代官役、それで取返した五十兩。
彌三　そんなら、あの代官さまは。

嘉七　十二軒に居る中村屋嘉七といふて、この頃上方から下つたこの門前の者。友軒さまの講釋場での菓子賣り、茶番狂言の下地があるゆゑ、今の通りに、あの位の役は、見ん事こなしますて。
小雛　あの三人の捕り手のお方もかえ。
友軒　あの衆達も、毎日講釋にござる、矢ッ張り十二軒の衆、嘉七どのが代官で來たゆゑ、さては娘が指圖と落ち付いて見て居たゆゑに、彌三郎どのゝ摺り替へられた金が元へ戻るといひ、小雛どのゝ身請けは、矢ッ張りこの金を手附けに。
お倭　さうでござんす。父さんやわたしが、お主筋の小雛さま、とてもの事なら、好き合うた彌三郎さまに。
彌三　常からのお世話といひ、今の仕儀、段々のお志し。
小雛　以前はともあれ、友軒どのやお倭さま。
お倭　なんのお禮に及ばうぞいなア、父さん。
友軒　それ〳〵、尾羽打枯らせば、心に任せぬ、後金の才覺も。
お倭　ハテ、どうともならうぞいなア。
　トこの時、ジャン〳〵と暮れ六ッの鐘鳴る。
友軒　ありや、暮れ六ッの鐘。
小雛　そんなら、わたしは。
彌三　手附けゑ早う。
嘉七　わたしどもは、もうお暇。
友軒　段々御大儀千萬。
お倭　ほんに、三人に見付けられぬうち
皆々　何事も
友軒　コレ、秘すべし〳〵。
　ト皆々こなし、思ひ入れ。チョン〳〵と道具ぶん廻す。
　ト造り物、二重舞臺、見附け塗り骨障子。上の方離れ座敷、亭屋體。橋がゝり、枝折り門、柴垣に植込み、すべて山の松本の模樣にて、方々へ燭臺燈し、二上り潮來にて道具とまる。
　ト好みの合ひ方になり、向うより下女おなみ、松本のぶら提灯を下げ、先へ出る。後より源太、連れ立ち出て、花道にて
源太　コレサ、女子衆、おらは國元から内證の客が來て、宮本で飲んで居る所を呼び出して、無理に見てくれいと、こなさんの段々の頼み。これまで度々斯う云うても、

聞分けのないお俊どの。なんと、あんまりしつこいでは
ごんせぬか。
なみ　サア、これまでの事は格別、その文は色氣なしに、お前を男と見て、頼みたい事があるとやら。それでどうぞ受けてくれいとの事ぢやわいなア。
源太　さう云はんしたゆゑ、ツイ明けて見たが、コレ。
ト鼻紙へ紅に書いた文を見せ
「ちよつと申しあげ參らせ候ふ、今宵密かに御目もじにてお話し申し上げ度き事山々に候へば、必らず〳〵松本の小座敷までお忍び下され、何事も人目を憚り、あら〳〵かしこ、白藤さまへ參る、しゆんより」コレ、矢ッ張り此やうに紅筆で書いてある。
なみ　急な文ゆゑ、紅筆で書かしやつたのでござんせう。マア、ちよつとお俊さんに逢はしやんして、聞けば解るわいなア。
源太　これは又、迷惑な事ではある。
トこなしある。
ようごんす、さう云はんす事なら、お俊どのに直ぐに逢うて、田舍角力のおれがやうなものに、これまで兎やかう云うて下さんした禮も云はうし、また色事のならぬといふ譯も云うて、斷わりを云ひませう。
なみ　さうして下さんすと、わたしも頼まれた甲斐があるわいなア。
源太　甲斐か信濃か知らぬが、こんな面倒な事はごんせぬて。
なみ　そんなら白藤さん、お俊さんが待ち兼ねてござんせう。サア、ござんせいなア。
源太　そんなら、是非行かねばならぬかな。
なみ　ハテ、たつた今直に逢うて、斷わりを云ふと云はんしたからは、男のやうにもない。
源太　エヽ、怪態な。相手が女子ゆゑ、何を云うても、せう事がない。行きませう。
ト謠らへの唄になり、源太、こなしあつて、おなみ先へ、枝折り門の内へ入る。おなみ、矢張りぶら提灯を持つて居て、上手の亭屋體を源太に敎へ、燭臺の火を殘らず消して廻る。
源太　コレサ、それでは。
なみ　ハテ、人が見れば惡い。これもお俊さまのお頼み。お前はちやつと。
ト上の方へ突きやり、提灯持つて奥へツイと入る。こ

れより暗がりの合ひ方になり、源太、不承々々に行かうとしたり、また表へ出ようとしたり、さま〴〵こなしあつて、暗がりゆゑ勝手の知れぬ思ひ入れ。いろいろあつて、探り〳〵思はず亭屋體の前へ行くと、亭屋體の内にて、ソツと手を叩き、鼠啼きする。源太、これにて

源太　お俊どの、そこにか。

トぎこつに云ふ。亭屋體の障子を細目に明け、下くゝりを投げ出す。源太が手に當り、こりや何ぢやといふ心にて、探り、取上げる。右の下くゝりを障子の内より無性に引く。源太、これにつれて、障子を開き、屋體の内へ入ると、少し間を置いて、屋體の内、バタ〳〵にて

佐五　不義者見付けた。動き居るな〳〵。

ト大聲と共に佐五右衛門、着流し前帶にて、障子蹴破り、見事に中返りに投げ出されながら

憎くい不義者、早く灯々。

ト喚く。奥よりバタ〳〵にて、角太郎、麥庵、傳兵衛、おつる、万六、てんでに手燭を持つて出て

つる　ヤア、佐五右衛門さま。

麥庵　不義者とは、何奴。

傳兵　仰山な、誰れでござりますぞ。

佐五　サア、何奴か知らねど、あの一間に。

傳兵　ナニ、あの一間に。ソレ、麥庵どの。

麥庵　ドレ。

ト亭屋體の障子を開く。内に床を取り、蒲團の上に源太、大胡坐にて、兩手を組み、坐り居る。

皆々　ヤア、其方は白藤源太。

源太　なんでござります。

皆々　さては不義者といふは

佐五　白藤、われであつたか。

傳兵　ハテナ。

源太　馬鹿云はつしやれ。

ト立ち上がり、前へ出る。佐五右衛門、キツとなり

佐五　ヤイ、角力取りめ、うぬ、力があると思うて、あまり強う出るな。今宵身共がお俊を口說き落し、こつそり抱いて寢ようと、ちよんの間に小座敷へ床を取らし、先へ入つて忍んでゐたに、蒲團越しにこれまでお俊どの〳〵と、肥つた小手で搖り起したは、なんの爲だ。

源太　ヤ。

トこなしある。

佐五　イヤサ、お俊が寢間へ、なんで忍んで來た。

源太　アノ、それは。

角太　さては、白藤、疾よりお俊と懇ろして居たか。

傳兵　イヤ〳〵、よもやさうではあるまい。白藤關取は、日頃から色氣のない武骨者、堅い實體者、なんの女郎の横盤切つてよいものか。ナウ、關取。

佐五　コレサ、傳兵衞、贔屓しやるな。その物堅い白藤が、どうしてお俊の寢間へ忍んで來たのだ。

源太　サア、そりやア。

トあたりを見て、おなみを尋ねる心持ちにて

鶴屋の女中が無理無體に。

皆々　手引きしたのか。

源太　措かつしやれ。この白藤は、こなた衆のやうに、裾ツ張りではないぞ。

ト此うち麥庵、落ちてある紅筆の文を取上げ

麥庵　なんぢや、妙な物が落ちてあるワ。

角太　ドレ。

ト取る。

紅で書いてある女の手、カウツ、何ぢや。「ちよつと申し上げ參らせ候ふ、今宵密かに御目もじにて、お話し申し度き事山々に御座候へば、必らず〳〵松木の小座敷までお忍び下されかし、何事も人目を憚り、あら〳〵かしく、白藤さま參る、しゆんより。」

傳兵　ハテサテ、氣の毒な物が出たな。

ト片脇に莨をのんで居る。

角太　アノ、恥隱して意見の返報。

麥庵　女嫌ひと云うたは赤嘘。

角太　ヤイ、白藤、斯ういふ文を持つて居ても

佐五　相方を盜んだ大盜人め。

源太　泥坊とは。

角太　この文。

佐麥　なんで、忍んで來た。

源太　サア。

皆々　サア〳〵〳〵。

源太　エヽ。

ト思ひ入れある。傳兵衞せゝら笑ひ

傳兵　さて〳〵、氣の毒。關取、云ひ譯はないか。いよいよ横盤切つたか。よもやさういふ後暗い事などは、おれは思はねども、あゝいふ慥かな證據があれば、挨拶した

うてもし憎い。こなさんも夷隅家のお抱へ角力、この劍菱屋傳兵衞も、お金御用を聞くお出入りの町人、佐五右衞門さま始め、麥庵さまとても、云はゞ朋輩、お役柄こそ違へ、犬も朋輩、鷹も朋輩ぢやに依つて、どう思うてもア、仕様はなし。

ト美しう云うて三人へ目配せする。角太郎、呑み込み

角太　それ〳〵、角力取りの色事は、仲間でも成敗。

佐麥　成る程、色事の成敗は、カウ。

ト源太にかゝるを、それはと、おつる取支へるを引退け、立廻りのうち、奥よりお俊走り出て

お俊　マア〳〵、待たしやんせ〳〵。

ト立廻りにて兩人を取留める。

佐五　お俊、留めな。構ふな〳〵。

お俊　イヽエ、留めやんす。アイ、留めにやならぬわいなア。

三人　イヤ、なんと。

お俊　サア、今奧でとつくり様子を聞きましたが、お前方もあんまりな、覺えのないわたしが似せ筆を拵らへて、洒落かと思へば誠らしう、いとしほなげに白藤さんを、苛めさしやんすなえ。

佐五　イヤ、こりや苛めるのではない、成敗するのぢや。

お俊　成敗とはえ。

三人　色事の。

お俊　そりや、誰れとえ。

佐五　白藤源太とお俊、其方が色事。證據はこの紅筆の文で、忍んで來た、貧乏神角力。

お俊　佐五右衞門さん、そんなあざとい事では、わたしやお前の心に從はぬわいなア。

佐五　ヤ。

お俊　いろ〳〵の事を拵らへて、無理無體に理窟を付け、わたしに往生させ、帶紐解いて抱いて寐ようといふ、惡い手管でござんせうがな。それにお前は、お先に使はれて

ト傳兵衞を尻目にかけ

外に頼んだお人もある事も、よう承知してゐやんす。嫌なと思うて一旦振つたお方に、そんな事で得心して、靡くやうな加賀屋の俊ぢやござんせぬわいなア。

ト此せりふ始終、傳兵衞にかけて云ふ。傳兵衞、咳拂ひして莨をのんで居る。佐五右衞門、傳兵衞、心意氣あつて

佐五　ハテ、よく揩れた革羽織めおやなア。
ト源太、最前より押默つて居て、お俊に向ひ
源太　お俊どの、これまでこなさんが、田舍者のおれに惚れたとやら云うて、度々の狀文、封も切らずに斷わりを云うて返したが、今宵また紅筆の文、是非逢うて外に賴みたい事があるとの言傳て。おれも逢うて、直ぐにこれまでの禮も云はうし、また色事をせぬ斷わりも云はうと、忍んで來た所がこの仕儀。
トこなしあつて
いま聞けば、こなさんは微塵も覺えのない樣子……ムウ、すりやこれは拵らへ事。
ト三人をキツと見廻して
それにウカ／＼と嵌つて。エヽ。
ト四股踏むやうに手を叩きて、いろ／＼と口惜しきこなしあつて
エヽ、いま／＼しいわえ。
ト思はず側にある茶碗を取つて摑み潰す。皆々悔りする。お俊、此うち源太を見詰めて居て、これを見て
お俊　白藤さん、持つた茶碗が其やうに。
ト源太、心付き見て
源太　これはしたり。
皆々　ても凄まじい。
ト云はうとして、顏見合せ、氣味の惡きこなし。
お俊　それ程にまで、正直な、直ぐな心のお前を
ト三人こなしあつて
よいかと思うて惡黨づらが
ト立ち上がり、衣紋を直して、又改めて下に居て
白藤さん、わたしが改めて、お前に賴みがござんすが、聞入れて下さんすかえ。
源太　改めてお賴みとは。
お俊　サア、果敢ない女郎のわたしと、どうぞ色になつて下さんせいな。
源太　ヤ。
トこなしある。
お俊　惚れました。恥かしながら眞實お前に。サア、わたしが似せ文にて、嬲り者にならしやんしたお前が、ぞつこん愛しうなつて、憎いと思ふこの場の張合ひ。これからは又、誰れが何と云はうが、お俊が色は白藤と、浮名が立つてもいとやせぬ。隨分派手にこの深川は愚か、江戸中の噂に謳はれたいわいなア。

源太　ムウ、男の達引も女郎の意氣地も心は一つ。さう打解けられては、自惚れか知らぬが面白い。尤も國許に云ひ號けはあつても、これも嫌うて、やう〳〵今日內祝言。その手前もあれど、こなさんの意氣張り、おれも一旦受けたこの惡名、とても毒喰はゞ皿、成る程、承知して、お俊どの、金輪際、色になりませう。

お俊　そんなら、アノ得心して。

源太　應と云うたら、一寸も引かぬが男。

お俊　エヽ、嬉しうござんす。

ト兩人、こなしあつて寄り添ふ。傳兵衛、此うちさまざま思ひ入れ。

傳兵　ハテ、見事。

ト煙管にて莨盆を叩き

イヤモウ、江戸の女郎は、張りが強いと上方での噂。なれども、聞いたにまさるお俊が心底、この傳兵衛、甚だ感心。イヤ、きよといものぢや。また白藤どのも承知して、金輪際色にならうとは、男の意氣づく。關取は關取だけの事がある。あれを見ては若殿、イヤ、佐五右衛門さまも、フツツリと思ひ切らねば、ナア、思ひ切らずばなりますまい。

トこなしあり、角太郎、佐五右衛門に目くばせして、存分にせいと教へる。

佐五　ムウ、成る程、傳兵衛が申す通り、こりやお俊が事を思ひ切らずばなるまい。ナア、若殿樣。

角太　抱への白藤は家來も同然、その主の前とも憚からず、稼業の法度を背く源太めを、佐五右衛門、麥庵、ソレ、ぶち据ゑろ。

トきつと云ふ。

佐麥　でも、それでは。

角太　ハテ、主の云ひ付け、苦しうない。

兩人　畏まりました。

ト立ち上がり、扇子にて源太をぶつ。お俊「それは」と留める。麥庵、楯になり

麥庵　若殿の仰せぢやぞ。

佐五　身共がぶつは、主命だ〳〵。

トさん〴〵にぶち据ゑる。源太、こなしあるを、傳兵衛、大小も引ッたくれと教へる。角太郎心得、ツカ〳〵と行て源太を引附け

角太　うぬ、今まで扶持をくれた、この角太郎に、手向ひはなるまい〳〵。これまで身共が遊びに慮外な意見、そ

れに、ほてくろしいうぬが色事。不屆き者。只今より暇を遣はす。大小も取上げて

ト大小を取る。

扶持放れの辻角力、マデ〳〵したしやッ面を見て、佐五右衞門、麥庵、笑へ〳〵。

三人　ム、、ハ、、、ハ、、。

この態わえ。

ト大笑ひして

ト三人して足蹴にする。

お俊　こりや又、あんまり。

ときつとなるを源太、引廻して

源太　コレ、一旦番うた男の詞、たとへこの身はどうなつても構はぬ。ハテ、打ッちやつて置きやいなう。

とぢつとなる。傳兵衞、こなしあつて

傳兵　ハテ、色男といふ者は、辛抱のよいものぢやなア。

ト源太、こなしある。お俊立寄り、源太が手を取つて

お俊　白藤さん、ござんせ。

源太　來いとは、どこえ。

お俊　あの一間へ。

源太　ヤ。

お俊　お前もわたしゆゑに、お主さまからお暇の出た程の浮名の立つたあの一間、寐所も其まゝにして置くでもござんせぬ。わたしやお前と、宿入りした心で、あそこへ行てナ。寐ようわいな。

トこなしある。源太、振り切つて

源太　イヤ〳〵、此方の商賣に忌み言葉、寐るといふ事は嫌ひぢや。

お俊　コレ、今となつて其やうに　嫌ひぢやと云はしやんしては。

源太　成る程。男の詞は金鐵、そんならお俊

お俊　エ、。

トきつとこなしあつて、源太に寄り添ふを、皆々「エヽと腹を立て、いろ〳〵こなし。傳兵衞、堪へられぬ思ひ入れあつてキッとなり、又皆々と顏見合せ、ちやつと貰のんで居る。源太こなし。

源太　ア、、思へばおれが身の上は、最前割れたあの茶碗

ト缺けを取上げる。

お俊　わたしゆゑに、その身の無念を堪へさんして、力任せにこの茶碗、碎ける程の口惜しさ、さぞ腹が立たう、道理でござんす。

源太　イヤ〳〵、おりや口惜しうはない。
お俊　エ。
源太　腹も立たぬ。
お俊　アノ、今のやうに打ち叩きに會はしやんしても。
源太　サア、そこが割れた茶碗、斯うまた微塵になつたからは、どうで元の滿足にはならぬ。お暇の出たこの白藤、扶持放されになつて見れば、結句氣樂でこの身の仕合せ。
お俊　そんなら、この茶碗のやうに。
源太　割れてしまへば、主でなし、家來でなし、お俊どの、この上は、こなたと一緒に燒き付いて。
お俊　引付からかいなア。
　ト又ヂツと寄り添ふ。
佐五　ヤイ〳〵、お俊、今日一日は身共が揚げ、それにマア。
お俊　エヽ。
　トこなし。
源太　揚げであらうが　なんであらうが、屋敷の扶持に放れた白藤、腕づくでおれが色事。指でもさすと、四ツ這ひぢやぞ。
　トきつと云ふ。三人とも顫へる。
佐五　今までは、田舍角力の武骨の白藤、お俊が眞實惚れたといふに、手强う斯う色事とは。
角太　雌鷄進めて、雄鳥塒をつくるの譬へ。
麥庵　アヽ、朱に交はれば赤、厚かましい事だなア。
　ト三人呆れる。傳兵衞、此うちこなしあつて
傳兵　お俊、てまへはよい男見立てたな。この傳兵衞も、これから若い者を相手に、小角力でもひねつて、深川の女郞に惚れられるわい。なんぼ角力取の女房になればとて、裸にならぬ用心しや。ハヽヽヽヽ。
　ト嘲笑ふ。お俊、源太へこなし。これに構はず
源太　サア、お俊どの、商賣には忌み詞ぢやが、これぼつかりは、寐ざなるまいかえ。
お俊　さうでござんす。なんぢや憎てらしい。わたしもお俊ぢや、これから意地惡う目の前で。
　ト源太が手を取つて行かうとする。佐五右衞門、悄々とこなしあつて
佐五　ヤイ〳〵、あんまりぢやが〳〵。見事白藤、お俊と寐るのか。
源太　エヽ、寐やんす。
佐五　エヽ、恩知らずの蛆蟲めが。

源太　イヤ、もう斯うなるからは、お俊、夜が明けやうが日が暮れやうが儘ぢや。

佐五　エヽ、おのれ、揚げのお俊を自由にするといひ、その體裁、いつそ、うぬ。

ト源太にかゝるを、見事に取つて投げる。

お俊　サア、寛ろがしやんせぬか。

源太　解いて下んせ。

角太　ヤイ〳〵、白藤、身が目通りで。

麥庵　あまりの法外、うぬ。

トまた麥庵、源太にかゝる。同じく取つて投げる。

源太　暇が出たれば、爰が氣散じ。

お俊　サア、ござんせいなア。

源太　ドレ、お俊どの、立合ひやんせうか。

ト手を引かれ、一間へ行く。三人、刀に手を掛け、ヂリ〳〵と無念がり、睨み付けて居る。

角太　アレ〳〵、あんな事をするわえ。

麥庵　言語道斷不屆き者。

三人　そこ放れまいか〳〵。

お俊　アレ、見やしやんせ。あの馬鹿々々しい顏わいなア。

三人　エヽ、うぬ。

源太　お俊どの。

お俊　白藤さん。

ト唄になり、兩人、こなし、障子を締める。皆々呆れる思ひ入れ。佐五右衛門、それなりにグニャ〳〵と下に居る。

麥庵　佐五右どの、どうでござるぞ。

佐五　どうの斯うのと、論議にかゝつた事ではござらぬ。

麥庵　なんと、手強い奴ではござらぬか。

角太　彼奴、人の心まで惡く致す憎くい奴。

佐麥　どうぞ仕樣はあるまいかえ。

トこなしある。此うち傳兵衛、さま〴〵思ひ入れ。

傳兵　四も五もいらぬ。その仕樣は。

ト立ち上がる。

佐五　傳兵衛、こなたの智惠袋を。

傳兵　この上は親方へ手を廻し、お俊が身請けの手附け金、ナ。

ト三人に囁く。

角太　すりや、手附けの金を囮にして

麥庵　引摺り出して

佐五　此方の腹癒せ。

三人　して、早速に手附け金が。
傳兵　そこは、お金の御用聞き。
佐五　でも、白藤が腕づくとの今の一言。
麥庵　どうやら氣味が。
　トこなしある。
傳兵　それぢやに依つて、金の威光で。そんな甘口な男山ではごんせぬ。
三人　まさかの時には。
傳兵　コレ、劍菱屋傳兵衛ぢやわいの。
三人　エヽ、頼もしい。
傳兵　よいかえ。
　ト唄になり、傳兵衛、奥へ入る。角太郎「ソレ」と思ひ入れ。佐五右衛門、麥庵、キッとなつて、さうぢやとこなしにて、一間の障子を明け、内へ入り
佐麥　白藤、うぬを。
　トばた／＼にて、兩人を投げ出す。障子開く。内に長之助、莨盆持ち、莨のみながら出て來て、合ひ方になり、三人、長之助を見て恟り。
角太　ヤア、白藤とお俊が寐て居る、あの一間。
三人　思ひがけない。
長之　此村長之助といふ角力の行司。
三人　ヤア。
　ト恟りする。
長之　いつの間にやら。
　ト三人、モヂ／＼して
長之　變つた所で、お屋敷様方。
三人　なんぞ用か。
長之　わしが斯う借り切つたこの一間は、武士の構ひとやら、四本柱の土俵の上同然。滅多に人の踏ん込む所ではごんせぬ。
三人　ヤ、なんと。
長之　殊に、色氣の蒲團の土俵へ、なぜ理不盡に踏み込んだ。
佐五　イヽヤ、理不盡でない。
長之　そりや又、なぜ。
佐五　加賀屋のお俊は、身が揚げ詰めの女郎なれど、白藤と見つともない事があれば、不義間男、それぢやに依つて、理非を分けねば武士が立たぬ。
長之　ムウ、そんなら、こなさんの揚げのお俊ゆゑ、白藤と不義あつては、それで

佐五　不義の成敗。

長之　最前から隣座敷で、うす／＼樣子を聞いて居たが、そりや白藤が抱への内の事、お暇が出たれば只の關取、よしそれもよいが、お俊に抱への主のある身の上、今日一日の揚げなればとて、さのみこなさん方が、其やうにやかましう。

ト佐五右衞門、そろ／＼と不氣味になり、麥庵に手附けの事を云へと、いろ／＼こなし。麥庵呑み込んで

麥庵　オヽ、さうぢや、お俊が身請けを致しさへすりや、此方の儘ぢや。

長之　ムウ、そんなら、お俊が身請けは出來ますか。

佐五　オヽ、身請けする。後とも云はず今宵で、加賀屋太左衞門を呼びにやつた。

長之　成る程、それも尤もぢやが、わしが借りて居るあの一間へ、なぜ斷わりなしに、踏ん込まんした。この譯を聞かうかえ。

佐五　ヤ。

長之　サア、其方の馬鹿殿らしいお人、山伏どの、三人ながら、そこへ出さつしやれ。

ト三人、ブル／＼顫へながら、そこへ出る。

三人　出たが、なんぢや。

長之　今不義の理非を分けねば、武士が立たぬと云はしやつたが、人の座敷へ理不盡に踏ん込んでも、それでも武士か。

角佐　イヤ、侍ひぢや。

麥庵　此方は、醫者が稼業。武士ではないぞ。

ト顫へ／＼、逃げようとする。

長之　コレサ、この返答を聞かうかえ。

ト三人、顔見合せ、こなしあつて

三人　イヤ、間違ひぢや。

長之　ヤ、なんと。

佐五　お俊白藤が出會ひの一間と思ひ

三人　踏ん込んだのは間違ひぢや。どうぞコレ、料簡を。

長之　イヽヤ、ならぬ。人の鏡にもなるお侍ひが、間違ひで事が濟まうか。イヤサ、この長之助は、町人でこそあれ、軍配團扇壹本で、三ケ津を歩くのが渡世。東西の關取が、ヤアと聲掛け團扇を引き、互ひに付け入り取組んで、土俵一つを越した越さぬ、足がちよつと出た出ぬにさへ、日本國へ響く勝負。數萬人の見物衆へ、誤りなく見分ける稼業の長之助が、この一間へ一人ならず二人三人、大

小差して踏ん込んで、間違ひと云うて事が濟むか。角力の行司もその通り、西を勝と團扇を上げて、後から今のは東が勝と云はれるものか。すりや、こなさん方は軍に負けて、首切られたり、鐵砲で打たれ、今のは間違ひ、命を元へ戻してくれいと云はるゝか。其やうな端た侍ひ、それでも二本差して歩くか。

三人　エ、

長之　アノ爰な、腰拔け武士めが。

三人　サア、それは。

トロ惜しきこなし。

長之　この理不盡は、此方から。

トそこにある銚子にて、打つてかゝり、立廻りにて、三人を散々に打ち据ゑ

これでおれの胸が晴れた。

トこの時奥にて

傳兵　お後が手附けは、傳兵衞が今渡すぞ。

トこれを聞いて

三人　ヤ、ナニ。

佐五　手附けを渡せば此方の儘。この上は、二人の奴等を

ト行かうとするを、長之助立廻りにて

長之　その手附け、おりや合點がゆかぬわえ。

トまた立廻りにて引付け

トこなし。チョン〳〵にて、この道具ぶん廻す。

造り物、一面に二重舞臺。見附け葭簀張、庭先の道具植込み、石燈籠よろしく、爰に友軒、眞中に源太、腕を差出し、お俊、切つた指を見せて居る。友軒、兩人の手を持ち添へ見て居る。そこらに銚子杯直しある。合ひ方にて時の鐘にて道具とまる。

友軒　天晴れ、若いに似合はぬ二人の心底。

お俊　勤の身に起請誓紙は常の事、變らぬ固めの今の神水。

源太　一旦云ひ交はしたれば、違はぬ男の魂ひなれば、其方の心の濟むやうにこの神水。

友軒　誠に、男一疋を見立てやれば、親が安堵。

源太　すりや、いよ〳〵違ひなく

お俊　二世と誓うて

友軒　聟舅、夫婦の固めはその神水、親が誓ひは以前の武士、金打よりもまだ堅い。この境内に建てゝある、彼の祐天の左名號に石の判

源太　アノ、それ程までに。
お俊　わたしを思うて、勿體ない。
源太　して、舅御の俗姓は。
友軒　笹田友軒といふ浪人者、尾羽打枯らし、一人の娘に勤め奉公、面目ない身の上なれど、以前は甲州八代の家中、主家の至寶、定家卿小倉の色紙紛失ゆゑ、主家の沒落、即、脇腹の御息女は、これもお俊が朋輩、小雛と云うて流れの身。人に騙され、大橋の加賀屋にて、娘との名乘合ひ。様子を聞けば、等閑ならぬ我れ〳〵親子。この年月の願望は、先年紛失せし定家の色紙を尋ね出し、女なれども小雛どのに、八代の名跡を、せめて小身にても立てさせたく、心を盡すも傾く齢、一子は女、あるに甲斐なさ。せめて勤めの身を幸ひ、夫を見立て云ひ交はし、父が存念立つやうにと、くれ〴〵娘に云ひ敎へて置いた、心が屆いて縁でがな、今日聟舅の仲となり、様子明かした白藤どの、早速ながらお頼み。不束な娘が身の上、定家の色紙の行くへを、偏へに頼み存ずる、源太どの。
ト慇懃に云ふ。源太こなしあつて
源太　ア、思ひがけないお俊が親御、その事とても誓ひと共に。
友軒　然らばいよ〳〵。
お俊　父さんのお頼み、わたしが事も。
源太　この上は、命にかけて……、ムウ、寶の詮議が一大事。
ト立ち上がる。友軒、源太が腰を見て、氣の毒の思ひ入れ。
友軒　ア、今までは抱への角力取り。
お俊　わたしゆゑに、殿様よりお暇。
トほろりとする。源太、こなし、
源太　ア、これにつけても、物足らぬはどうやら。
ト帯を撫で、こなし、此うち麥庵、佐五右衛門、出かかる。友軒、差して居る脇差を拔き
友軒　差し古したれども備前長舟、腰が明いて見苦しい。
ト脇差を出す。
お俊　そんならそれを。
友軒　何かの頼み、聟引出。
源太　申し請けるが、變せぬ證據。
ト取つて戴き、腰へ差す。この時兩人
麥庵　白藤、うぬを。

佐五　お俊、來い。

ト麥庵は源太、佐五右衛門はお俊へかゝる、立廻り、友軒、佐五右衛門を引退ける。この途端に長之助出て、佐五右衛門と立廻り。源太は麥庵、長之助は佐五右衛門、双方一時に見事に取つて投げ出して

長之　東西々々、勝角力お俊白藤。

源太　さる御方より褒美として、腰骨四五十。

ト麥庵を踏みのめす。

長之　天晴れ關取。

ト友軒、喜び

友軒　エヽ、小氣味のよい。

ト佐五右衛門、麥庵、又かゝるを取つて投げ

長之　又の取組。

友軒　暫しこの場は。

長之　中入り〳〵。

ト扇子を上げる。お俊、源太に寄りそふ。友軒、脇見する。長之助、右の扇子を顏に當てる。源太、これにてお俊をソツと引廻し

源太　地取りは晩に

トこなし、思ひ入れ　ひやうし幕

## 二幕目

白藤内の場
鶴屋の場
友軒内の場

役名　講釋師、笹田友軒。劍菱屋傳兵衛。信樂勇藏。角力取り、行川福八。同、瀧登り鯉之助。同、八幡鐘權作。同、小松濱小吉。同、蔦ノ岡與良右衛門。東隅角太郎。書家、玉蘭。醫者、竹林麥庵。佐原佐五右衛門。岩橋屋彌三郎。加賀屋小藤。鶴屋女房、おつる。女中、おなみ。金貸し、文六。加賀屋お俊。關取、白藤源太。

造り物、二重舞臺、見附け赤壁、納戸口、下の方に竈、いつもの所に門口。平舞臺眞中に福八、權作、角力取りにて、地取りをして居る。二重舞臺に源太、浴衣にて莨をのみながら見て居る。與良右衛門、鯉之助、小吉、角力取り、浴衣にて、同じく地取りを見て居る。皆々掛け聲、てんつゝにて、幕明く。

ト福八、權作、いろ〳〵あつて分けになる。

皆々　見えた／＼。
與良　向うが、附けて來たのを、構はず骨を折つて、行川が褌を取つた鹽梅。
福八　下手に付入る、八幡鐘が唸り聲、土俵まで押して來たが
小吉　行川が捻つて、分れになつたこの勝負。
三人　關取、どちらが出來でごんした。
源太　みな地取に精が出るゆゑ、餘ッぽど揉み上げたやうなれども、八幡鐘が忌味な具へ、行川が踊り足、もつと足の附くやうにせい。
與良　サア、そこが稽古、揉み拔かにや、出來にはなられんて。
源太　全體、二人ながら、家鴨追ふやうで惡いわい。
與良　家鴨追ふやうな、腰つきな筈、瀧登り、われや行川は、昨夜も海の藤屋で逢つたらう。
福八　小松濱は唄の通り、藤屋にまかれて寐とござる。泊りに行たぢやないか。
小吉　なんの、おれぢやない、泊りに行たのは鳶ヶ岡ぢや。道理で地取りがよろ右衞門ぢや。
皆々　ハヽヽヽヽヽヽ。

源太　ちと、わいらも女を愼しめ／＼。
與良　さう云はんす關取、こなさんが、國の云ひ號けのお勝さまと內祝言といひ
權作　お俊さんと爰への新世帶。
小吉　家鴨を追ふと、餘り笑はんすな。
鯉之　關取、こなさん、腮で蠅追ふやうでごんせうぞえ。
皆々　オヽ、さうだ／＼。
源太　何を云ふぞえ。ありや知つての通り、よん所ない男づくで、持つた新女房。云ひ號けのお勝も、長之助どのの世話で內祝言、それで何やかやで、爰へ店を借りたのだ。
鯉之　元よりわしらは、弟子なり居候ふなり。
福八　この東永代寺門前は、地取り場にはようごんす。お俊さんと關取、晝中に取組んでも、心遣ひない所。
源太　何を馬鹿な事を。さうして、あのお俊は、どこへ行た。
鯉之　先刻、湯へ行かんした。
源太　ハテ、長い湯ぢやな。
ト唄になり、向うより、お俊、着流し、駒下駄、浴衣を抱へ、湯歸りの形にて出て來て直ぐに內へ入る。

皆々　ソリヤ、お俊さまが歸らつしやつた。
源太　お俊、どこへ行たぞ。
お俊　湯へ行きやんしたわいなア。
源太　湯にしては、大分長いな。
お俊　そりや長い筈、朝直しから歸つて、湯へ行て、父さまの所へ用があつて話してゐたわいなア。
源太　ムウ、それで遲いのか。皆も腹がへつて待つて居た飯拵らへでもして、親仁どのへ行けばよいのに。
お俊　なんのマア、最前飯も炊いて、お菜も拵らへて置いたわいの。
與良　そんなら、ようごんす。わし等が出して食ひませう。
權作　サア、關取も食はんせいな。
源太　皆、一緒に食へ〳〵。
お俊　わしやちよつと顏を直してから。給仕してあげて下さんせ。
皆々　合點ぢや〳〵。
ト合ひ方になり、お俊、鏡臺を出して、顏を直す。皆々膳立てして、出しながら與良右衞門、鍋を覗き
與良　お俊さま、此お菜は、菜に油揚かえ。
お俊　なんのいな、最前、鰻を取りにやつて、菜と一緒に煮たわいなア。
源太　なんぢや、菜に鰻、面白い取合せだの。
權作　菜に鳥とか、油揚なら聞えたが、菜に鰻とは。
ト此うち皆々膳立てして、源太、喰ひにかゝり
源太　これ見い、飯も粥のやうぢや。
お俊　さうでござんせうかえ。壹升程の米に、手桶に一杯水を入れたわいなア。
與良　道理で、飯が粥ぢや。
福八　菜が鰻に菜、飯が粥とは、七種の菜に、鰻を食ふやうな。
お俊　なんと、よい料理番でござんせうがな。
皆々　ハヽヽヽヽ。
ト唄になり、向うより勇藏、袴羽織、立派な侍ひにて、若黨、草履取りを連れ、出て來て
勇藏　大方この内であらう、案内いたせ。
若黨　ハツ……白藤源太といふ、角力取りの宅はこれか。
源太　アレ、誰れやら表へ來たさうなよ。
鯉之　どこのか侍ひが見えました。
皆々　そりや、とんだ者が來たなア。
源太　コリヤ〳〵、滅多な事を云ふな。マア、此方へ通し

ませい。
鯉之　白藤關取は此方でごんす。サア、入らつしやりませ。
勇藏　然らば許しやれ。
お俊　モシ、あなたは。
ト内へ入る　源太、お俊、勇藏を見て
源太　この間、大和町の舅どのゝ所でお目にかゝつた、お
侍ひさま。
勇藏　信樂勇藏でござる。
源太　マア／＼、これへ。
ト勇藏、上へ通る。お俊、煙草盆を持つて行く。
與良　關取、お客のござるうち、此方はちよつと
福八　洲崎へ行て、辨天へ參つて來ませう。
源太　オヽ、さうせい／＼。
お俊　また網打ち場の辨天樣ぢやないかえ。
鯉之　なんの、ほんの辨天樣へ。
權作　サア／＼、みんな來い／＼。
ト合ひ方になり、ワヤ／＼云うて向うへ入る。源太、
こなしあつて
源太　これは勇藏さまには、見苦しい所へ
お俊　よう入らつしやりましたなア。

勇藏　いや別の儀でもをりない。この間大和町の友軒どの
宅で、談じ申した通り
源太　彼の色紙の事でござりまするか。
勇藏　先達て申す通り、定家卿小倉の色紙の儀は、この度
京都の武將、東山にて三十六歌仙の色紙、御上覽これあ
るによつて、諸家より三十五枚は集まれども、彼の夕風
の色紙調はず、とくと吟味とげしところ、即ち甲州八代
氏の重寶のよし。然るに先年、八代家は沒落、武將の御
威勢にて相尋ねしに、八代の家臣、笹田友軒どのに巡
會ひ、色紙の筋も相知れ、當所靈岸嶋岩橋屋へ、質物に
取りありしを、これも又計らず摺り替へられ、いよ／＼
行くへ相知れず。如何せんやと當惑の折から、友軒どの
と白藤源太、お身は聟舅の緣あれば、たつて身共が頼み、
色紙の詮議請け合ひしが、最早今日中、明朝までに色紙
受取り、歸參いたさねば、勇藏が役目立たず。武將家の
嚴命なれば、キッと詮議の仕樣もあれど、そこをお身が
達ての頼み。殊に八代家の再興、是非とも今宵中に詮議
仕出す手懸りでもあるか。白藤、お身が返答聞かん爲、
わざ／＼尋ねて參つた勇藏。
源太　成る程、舅友軒どの方にて、昨日初めてお目にかゝ

り、委細承りまして、お願ひ申した色紙の詮議。
勇藏　其方の手にて差上げなば、友軒どのゝ頼み、八代の
お家も立ち、彼の岩橋屋の懸り合ひも事なく相濟み
源太　ぢやによつて、私しが、
お俊　サア、その事のみにござんすが、なんぞ心當りがござんすかえ。
源太　サア、苦勞をすれども、今に於て
勇藏　相分らぬか。
源太　イヤ、差上げまする。
お俊　アノ色紙を。
源太　ハテ、懸り合ひ、彌三郎さまの難儀も遁かれ、男どのに頼まれた、小雛どのゝ身の上、其方の願ひ、ナ、三方四方は小倉の色紙。
勇藏　すりや、いよ／＼今宵中に拙者へ。
源太　して、勇藏さまの、御旅宿はいづれ
勇藏　芝赤羽根なれど、町人どもの振舞ひにて、白藤、今宵は土橋の鶴屋とやらに罷り居れば、いづれ後方。
源太　有無の返答。
お俊　とうで、鶴屋へ
勇藏　吉左右、相待つ。

ト唄になり、勇藏、こなしあつて、供を連れ、向うへ入る。兩人、門送りして
お俊　申し、源太さん、今日まで在所の知れぬ色紙、今宵中と請合はさんした、その心はえ。
源太　ハテ、手懸りといふは、矢ッ張りあの角太郎が群れ、一々に引ッ捕へて、締め上げて詮議する。
お俊　アレ、矢ッ張り短氣な。それと知れたら、騙すに手なし。
源太　色紙も手詰め。また小雛どのゝ後金も、今日が切端。
お俊　後金の事は氣遣ひさしやんすな。わたしが
源太　ヤ
ト　お俊、思ひ入れあつて
お俊　サア、とつくりと相談せうわいなア。
源太　イヤ、云うても、百五十兩。
お俊　案んじるより生むが安いとやら。
源太　お俊、其方は、なんぞ心當りが。
お俊　マア、あるでもなし、ないでもなし。
源太　エヽ、あやふやな、何を云ふのぢや。
お俊　また口のかゝらぬうち、身拵らへして置かうわいなア。

ト唄になり、お俊、ツイと奥へ入る。源太殘り、こなし。

源太　ハテ、女房というてもまだ女郎、しどのないものではある。時に、今宵中に色紙の在所、小雛さまの後金、兩方ともに。こりや一朝一夕の思案ではいかぬ。とつくりと。ムウ。

ト思ひ入れ。キツと思案する。向うより彌三郎、イソイソと出て來て内へ入り

彌三　源太、お俊どのは。コレ、二人ともに、忝ない〳〵。小雛に逢はぬうちに、禮に來ましたわいなう。

源太　彌三郎さま、なんぢや、ニコ〳〵と嬉しさうな顔して、禮に來たとは、そりや又、なんの禮に。

彌三　なんの禮とは、アヽ、どうでも男ぢや、恩にきせまいと其やうに、外らして居る源太。連れ添ふお俊どのもその通りであらう。ほんに、フツと山の松本で、名乘り合うた國許での主從、それからおれを身に引請けての段段の世話。色紙の事、また小雛が後金。なんと禮云うてよいやら、詞には盡されぬ。眞實淚がこぼれて、有り難いわいなう。

源太　サア、その小雛どのゝ後金も、今日が切端。それで私しも有やうは

彌三　サア〳〵、尤もぢや〳〵。さぞ苦勞であつたであらう。ツイ口では云ふものゝ、百五十兩、よう拵らへて下された。

源太　まだ拵らへは致しませぬが、一旦請合うた白藤が顔づく。是非、今日中に。

彌三　ハテ、その金は、もう濟みましたわいの。

源太　エ。

彌三　親方に逢うたら、八幡で受取つた五十兩、今日また受取つた百五十兩、都合貳百兩で、何もかも濟んだ。小雛の身請け、年季證文を渡しますと、コレ〳〵

ト年季證文を出し

いま受取つたゆゑ、それでマア、其方衆二人へ禮を云はうと思うて、爰へ來たのぢや。こんな嬉しい事があらう。白藤、これぢや〳〵。

ト拜む。源太、合點のゆかぬこなしにて

源太　なんと云はつしやりまする、彌三郎さま。すりや、後金の百五十兩を、親方へ渡し、小雛さまの身請けは濟みましたか。

彌三　それで、受取つた年季證文。

源太　その金には、誰れが渡しました。
彌三　ハテ、お俊どのが。
源太　エヽ。
　ト悄りして
源太　アノお俊が、百五十兩拵らへて
彌三　親方へ渡して下さつたゆゑ、めでたう濟んだ小雛が身請け。おりや早うこの事を、小雛に知らせて喜ばしてやりたいゆゑ、鶴屋へちよつと行て來るぞや。
　ト行かうとして又立戻り
コレ、お俊どのへも、よいやうに。小雛もコレ、源太どの、よう金拵らへてたもつたと喜ぶであらう。アヽ、嬉しうて〳〵、氣がモタ〳〵する。後に來るぞや。ドレ、行て來ようか。
　ト行たり戻つたり、そゞろに喜び、思ひ入れあつて向うへ引返し入る。此うち始終合ひ方。源太、ウツトリと思案して居る。
源太　ハテ、思ひ掛けない。今の今までどうせうと、屈託して居た後金の百五十兩、それをお俊が親方に渡して、身請けが濟んだといふ事を、おれには……お俊〳〵〳〵。
　トけはしく呼ぶ。

お俊　アイ〳〵。
　ト出て來て
なんぢやいなア、けたゝましい。
源太　イヤ、外の事でもない、いま彌三郎さまが、小雛どのゝ身請け濟んだと、喜んでござつたが、聞けば其方が、金拵らへて渡して遣つたとあるが、いよ〳〵、さうか〳〵。
お俊　アイ、今日の切端、それで今朝、やう〳〵渡しました。
源太　アノ、百五十兩を。
お俊　オヽ、仰山な、なんぢやいなア。
源太　イヤサ、その金、どうして出來た。
お俊　餘所で借りました。
源太　ヤ。
お俊　サア、アノ父様と相談して、さる所で借りて濟まして、しまうた後金百五十兩、これもお前の屈託を。サア、せめて一方なりと、わたしが才覺で。
源太　そりや忝ない。ようマア拵らへてたもつたなう。
お俊　ほんに、この身を切るより
　ト泣かうとして取直し
ホヽヽヽ。サア、この身はたとへ黎の杖突くまで勤めし

て居ても、大事のお主、小繋さんを身儘にせねば、お前
も彌三郎さんへも、義理が立つまい。それで嫌なと思へ
ども、サア、云ひ憎い無心を云うて、借りました百五十
兩。

源太　その樣子を又、なんおれに今まで。

お俊　サア、それはな

源太　氣の惡い、なんで隱した。

お俊　お前に案じさせて、思ひ掛けない所で、わたしが拵
らへた、サア、喜ばしやんせと、働らきを見せうと思う
て。

源太　ハテナア

ト顏を眺め、こなしあつて

源太　お俊、昨夜から鶴屋へ出てゐて、今朝も朝直し、そ
の客は。

お俊　エ。

源太　サア、よもや初めてではあるまい。馴染みの客であ
らうの。

お俊　ナニ、お屋敷さんサ。

源太　アノ、侍ひの。ム、、、。又例の、角太郎連中・佐五
右衛門か

お俊　云うても下さんすな。佐五右衛門に出ぬ事は、主も
よう知つて居ながら。

源太　そんなら、外に。

ト　お俊、源太が顏に指さして

お俊　アレ、色客が出來たと思うて、源太さんの燒餅を。

源太　なにサ、燒餅ではない。其方とフト云ひ交して、舅
友軒どのまでも、打拔いた色事、神水飮んで互ひの固め。
殊に自前自然の其方。それで爰へ店を借りての宿入り、
おれも國へ歸らず、二人して入つて居るは、ハテ、心は
夫婦暮らしで、居るではないか。

お俊　そんなら、何もわたしに。

源太　疑ひはせぬが、大枚百五十兩の後金の出所。

お俊　男に知らさず拵らへた、こりや女房の働らき。

源太　ヤ。

お俊　新世帶の宿入り。爰らも取散らして見苦しい。マア、
片附けて置かうわいなア。

ト立ち上がる。獨吟になる。

めりやす〽一筋の流れに淀む心の塵の、多くてよきはふく
るまや、文の數々、かよふ神、いのる御見とやる瀬なき
思ひ染めてや四つ紅葉。

ト右唄のうち、お俊、紛らす心にて、そこらを片附け、掃き出す。源太は、氣の濟まぬこなしにて、莨盆を持ち、立ち上がり、そろ／＼と上の方へ居直る。唄よろしく納まる。お俊、新らしい二張の弓を取上げ

お俊　申し、邪魔なこの弓、しかも二つまで、誰れぞに遣つてしまはんせぬかいなア。

トぐわつたりと一所に置く。

源太　ハテ、盆體もない。こりや去年、藏前の八幡と、回向院とで取つた弓。長押を拵らへ、立てかけて置かにやならぬ。關を取つた角力の印。

お俊　アノ二つのこの弓がかえ。

源太　これサ、角力取りの女房のやうにもない、弓を一つぢやの二つぢやのとは、馬鹿らしい。

お俊　そんなら、なんと云ふのぢやえ。

源太　弓は一張二張と云やいの。

お俊　さう云へば、こりや二張の弓

源太　いかにも、二張の弓。

お俊　ほんに、さうぢやわいなア。……アノ、これまで、芝居でもよう云ふ事ぢや。常磐の狂言にナ、ソレ、淸盛が心に隨ふを、二張の弓を引くといふ事があるなア。

源太　おりや田舍者、芝居事は知らぬ。

お俊　知らしやんせずば、わたしが身の上は。

源太　女房ではないか。

お俊　サア、内に斯うして居れば、お前の女房、また口が掛つて、寄せ場から茶屋へ出た時は。

源太　女郞のお俊。

お俊　それを、お前はよう合點かえ。

源太　ムウ、二張の弓に。

お俊　わたしは、女郞。

源太　金の出所。

お俊　知らさぬ祕術。

源太　色紙の在所も

お俊　どうぞ、わたしが

源太　勤めの手管で

源太　角力の手取り。

ト源太、弓を取上げ

源太　こりやこの弓は、二張あれど

お俊　まだ弦をかけぬが、心の潔白。

源太　これでは滅多に

ト弓を引絞る眞似をして

引かれまい。
お俊　ア丶、勤めは辛いものぢやなア。
　ト暮れ六ツの鐘鳴る。向うより廻し男、走り出て
廻し　お俊さま、口が掛りました。
お俊　どこぢやの。
廻し　鶴屋でござります。
源太　アノ又、鶴屋か。
お俊　オ丶、その弓を仕舞うて置きやんせ。
廻し　サア、早うお出でなされませぬか。
お俊　オ丶、せわしない。あの人わいの。源太さん、モシ。
　トちよつと囁く。
源太　オ丶、承知。
お俊　必らず、待つて居るぞえ。
廻し　サア、お俊さん。
お俊　そんなら、行て來るぞえ。
　ト唄になり、お俊、小褄を取つて、駒下駄を履き、男を連れ、向うへチョコ／＼と入る。源太、後を見送り
源太　お俊が今の詞の端、金の出所、弓の謎。こりやマア、とつくりと解かねばならぬわえ。
　ト手を組んで思案する。これにてチョン／＼。道具、ぶん廻す。

造り物、二重舞臺、見附け一面の障子。上の方、中二階。橋がゝり、格子門口。內の柱に、鶴屋といふ掛け行燈、すべて、土橋茶屋の模樣にて、二重舞臺に、角太郎、佐五右衞門、傳兵衞、酒吞んで居る。おなみ、おりく、酌して居る。梅吉、三味線を彈いてゐる。平舞臺に、麥庵、玉蘭、坐りなして居る。この見得、大小入り拍子舞臺、合ひ方にて、道具とまる。

玉蘭　ふる道ふる雪古大道がん松原にてんからり、ひよこすかそわかに、すここん／＼、このむつくりちよん／＼、むくちよん／＼。
　トこれより、玉蘭、麥庵、いろ／＼あつて納まる。
皆々　やんや／＼。
傳兵　もう／＼、措け／＼。面白うない／＼。麥庵さんも、仁體に恥おさつしやれ。あまり勘辨のない。
麥庵　コレ、傳兵衞、其方が勘辨などいへど、勘辨して酒が吞めるものか。それでは、なか／＼御近習役が
傳兵　御近習なら、お側にはござらいで、玉蘭と一つにな

つて今の騒ぎは。
角太　こりや、傳兵衛が尤もぢやわい。
麥庵　若殿までが同じやうに、傳兵衛が贔屓して。
傳兵　どうでお金のお用をきく、この傳兵衛なれば。
麥庵　ハ、ア、「口切りや汝を呼ぶは、金の事」とは、其角が發句。思ひ當つた。
玉蘭　なにを、うぬ傳兵衛が。酒を吞むなら勘辨せいと云へど、畢竟書家の身で、此やうに酒吞むも、若殿の御意。書家は書家、酒は酒、勘辨は勘辨、傳兵衛は傳兵衛、此お叱りは、替へ／＼に、ナア申し。
傳兵　なにを、馬鹿々々しい。
佐五　傳兵衛。其方は、お俊を手に入れたと云ふが、いよいよ、さうか／＼。
傳兵　いつぞや彼奴に振りつけられて、それから松本で、お前を先に使うてやりかけたれど、ゆかなんだが、又いろいろと献立てして、今朝の朝直しから、喰つたてや／＼。
トこなしある。
佐五　そりやアノほんの事か。よもやお俊が
ト思ひ入れあつて
先達て松本で、其方が賴んだといふものゝ、身共も矢ッ張り、白藤もどきで、あじやらが誠と首ッ丈惚れたてゝそれに、嫌うた其方に、お俊が付いて。面妖な。
ト合點のゆかぬこなし。
傳兵　一旦嫌つた傳兵衛へ、なんにもかも振り捨てゝ、持ちかけて來たは、どうぢや、きついか／＼、ひどからうがの。
佐五　そんなら白藤といふ男も捨てゝ
傳兵　この鼻に。
皆々　ハテ、きつい傳さんの自惚れなア。
傳兵　自惚れか、ほん惚れか。お俊が來た所で、角太郎さまの御前披露。
角太　面白い／＼。お俊、傳兵衛がうまい仲、御前披露が見たい／＼。
玉蘭　オット、我れらも、この色事の、誠惚れたか惚れぬかを、見たさの／＼、さのきの金毘羅。
ト立つて踊る。騒ぎ唄になり、向うよりお俊、男にぶら提灯を持たせて出て、直ぐに内へ入る。
廻し　お俊さんを送り申しました。
女皆　お俊さん、ござんしたかえ。
角太　サア／＼、お俊が、來たぞ／＼。

お俊　どなたも、夜前は御盛んで。
玉蘭　お俊さん、お前のお出でを皆さんが、松つるやてござります。
傳兵　お俊、爰へ來や。
　ト　お俊、こなしあつて
お俊　わたしが坐る所は、爰かいなア。
　ト　傳兵衛が側へ坐る。
どなたも、お許しえ。
　ト　皆々、呆れて居る。
麥庵　こいつは、奇體ぢや。
玉蘭　妙々々。
角太　成る程、角太郎も呆れたわい。
　ト　此うち、お俊、こなしあつて、杯を取上げ
お俊　梅吉さん、一つついで下さんせ。
　ト　梅吉、酌してお俊、一つ吞んで
も一つついで下さんせ。
　ト　又注ぐ。お俊、グッと飲んで
傳兵衛さん、お前に上げるぞえ。
　ト　杯をさす。傳兵衛、こなしあつて
傳兵　ついにない、よう吞みやるの。

お俊　アイ、お前の顔を見て嬉しいゆゑさの。お前、嫌かえ。わたしが杯は吞まんせんかえ。そんならも一つ。
傳兵　アヽ、コレ／＼、短氣々々。
お俊　イエ、わたしが。
　ト　杯を出して、注がせ、吞んで紛らす。
傳兵　もうよしにしやいの。
　ト　云ひながら、杯を取つて吞む。
お俊　傳兵衛さん、よう吞んで下さんしたなア。
　ト　傳兵衛に寄り添ふ。
傳兵　なんと若殿、御前披露でござりませうが。
角太　あまり披露過ぎるわい。
佐五　とんと譯が知れぬ。
角太　いつそ、これを肴に二人を煽てながら、座敷を替へて吞み直さうか。
皆々　こりや、ようござんせうわいなア。
傳兵　そんなら、お俊。
お俊　傳兵衛さん。
傳兵　ドリヤ、煽てられませうか。
　ト　騒ぎ唄になり、角太郎先にお俊、傳兵衛の手を引き、こなしあつて、皆々奥へ入る。向うよりおつる、女房

にて鶴屋のぶら提灯を持ち、勇藏、後より羽織袴の手代に付いて出て來る。

勇藏　今宵は殊の外たべ醉うた。洲崎の宵月、また格別な詠めぢや。

つる　イヤ又、日の出は怪しからずようござんす。

勇藏　さうであらう／＼。今宵は夜と共に呑みあかし、明朝の日の出を拜まうかえ。

つる　初日の出には、皆子供衆が行てござんす。

勇藏　さうあらうて／＼。さて吳服屋の手代衆、今日は終日馳走でござる。

手代　イヤモウ、親方の申し付け、たま／＼のお下がり、御馳走申せとの儀でござります。

勇藏　心配忝なうござる。イヤナニ、內儀、もし白藤源太といふ、角力取りが尋ねて參つたら、知らせてくりやれ。

つる　エヽ、源太さんの事かえ。始終此方へ見えてゞござんす。

勇藏　そんなら、爰へも心安う參るかの。

つる　この近所で源太さんを知らぬ者はござんせぬわいなア。

勇藏　ハテ、世間廣い男ではある。サア／＼、行きやれ。

つる　ハイ／＼。

ト本舞臺へ來て、內へ入る。

つる　お客がお歸りなされたよ。誰れぞ來や、お客ぢやお客ぢや。

ト始終、騷ぎ唄にて勇藏先におつる、皆々奧へ入る。バタ／＼にて彌三郞、後を見い／＼走り出て、ツイと內へ入り、門口を締め、こなしあつて

彌三　アヽ、嬉しやこれで落ちついた。思ひ掛けなく文六めに、逢うたら、おれをひどい目に逢はさうとした。オオ、爰は鶴屋の內ぢや。幸ひ／＼、ドレ、奧へ行て小雛に逢はうか。

ト始終合ひ方にて彌三郞奧へ入る。また向うよりバタバタにて、文六、尻からげ鉢卷にて、薪ざつぱを持つて、走り出て來て

文六　あの彌三郞の極道め、うぬが庇で、おれは拋り出され、伯母御は押籠め、この意趣を、どこぞで／＼と思ひ掛けなく、今逢うたゆゑ、ぶち殺してと思うたが、どこへうせた。

ト蕩れて

なんでも、この鶴屋へ逃げ込み居つた。うぬ、彌三郎めが。

ト内へ入る。此うち傳兵衛、奥より出て來るを文六、「おのれを」と打つてかゝる、傳兵衛よろしく留めて、顏を見合せ

文六　ヤア、お前は、傳兵衛さま。

傳兵　文六、こりや何する。

文六　今この横町で、彌三郎を見付けたゆゑ、岩橋屋をしくじつた意趣晴らし、打ちのめさうと思うたに、この鶴屋へ逃げ込み居つたを、それと思うてお前を。

傳兵　ハテ、麁相な者ではある。時に文六、おれが頼んで置いた事はよいか。

文六　そりや、彼の色紙の

傳兵　コリヤ。

ト兩人あたりを見てこなし。

文六　サア、その物は根が岩橋屋に質に取つて有つたを、あの彌三郎めが盗み出して、金の抵當に渡してあつたを。

傳兵　おれが幸ひ、その場に居合して、摺り替へて持つて居るが、急に金が入る事があれば、この間から頼んだ通り、一時も早く賣り拂ひたい。

文六　お前も新川で、劔菱屋傳兵衛さん、さうマアなんで、金の入る事がござりまするえ。

傳兵　サア、今朝もポッカリと、百五十兩出した。さう〳〵はおれも矢種が續かぬ。それで彼の色紙を。

文六　氣遣ひさつしやりますな。賣る先は京の武將家。今度彼の定家の色紙を集めるといふ、慥かな噂。即ち、その役人も來て居るげな。それ〳〵手を廻して賣れば、大金になる代物。

傳兵　サア、そこが貴樣の働らきで。

文六　そりや、呑み込んで居ます。して、その代物は。

傳兵　後に渡さう。それまで奥の小座敷で。

文六　そんなら、お前の連れぢやと云うて。

傳兵　一つ呑んで、待つて居や。

文六　そんなら、さうしませう。

ト隠れんぼの唄になり、文六奥へ入る。傳兵衛殘る。所へこの唄のうち、奥よりお俊出て來る。いろ〳〵こなしあつて、ヂッと後より傳兵衛に抱きつく。これより好みの合ひ方になる。

傳兵　誰れぢや〳〵。

お俊　ハテ、わたしぢやわいなア。

傳兵　ムウ、お俊か。
お俊　傳兵衛さん、お前、爰にたつた一人、何して居やんした。
傳兵　ちつと用があつて。お俊、幸ひ皆、奥や二階へ行て、爰には誰れも居ぬ。二人差向ひ。コレ。
　ト有りあふ銚子を取つて來て
もう、そろ〳〵醉が覺めて來さうな。今宵は其方と祝言。
　ト茶碗へ注いで、グッと呑んで
互ひに夢中にならにや、それノ、云ひたい事が云ひ憎い。其方も一つ呑みや。
お俊　ほんに、寐る事思へば、いつそ醉うて、夢中になつたもよからうわいなア。
傳兵　さうぢや〳〵。呑んで呑みぬいての、ソレ。
　ト茶碗に酒を注いで出す。お俊、取つて
お俊　傳兵衛さん、お前の呑ましやんした所はどこぢやえ。
傳兵　爰々。
　ト數へる。お俊、こなしあつて呑む。
傳兵　デツト、その後を。
　ト取つて呑むうち、お俊、思ひ入れあつて
お俊　どうやら、二人斯うして居るに、あの行燈の灯が
　ト行燈を片脇へ、つッと直し下に居て、傳兵衛に寄り添ひ
斯ううす暗がりにして置けば、何をしてもナ、傳兵衛さん。
傳兵　エヽ、有り難い。
　ト引寄せて
時にお俊、最前も奥で問うたが、今朝遣つた金は、どこへ遣つた。
お俊　アレ、又かいなア。
傳兵　白藤源太に遣つたか。
お俊　アイ。
傳兵　そんなら、矢ッ張り源太に。
お俊　措かしやんせ。たかで白藤どのゝ事思やせぬわいなア。甲斐性もない、男づくで請合うた彌三郎どのゝ事、小雛さんの後金百五十兩、金でわたしが事も思はぬ、馬鹿らしい人ぢやと、フッと思うたら嫌になつた。フッツリ切れる心の手切れに、百五十兩の金を打ちつけて置いて、そこでお前と斯うして居るぢや。なんと憎いかえ。
傳兵　なんの憎からう、可愛けりやこそ、百五十兩、お俊、どうぞ早う寐ようぢやないか。

お俊　何時でも。

傳兵　忝ない。

ト合ひ方になり、兩人こなしある所へ、向うより源太出て、空を見い〳〵

源太　ア丶、また曇つて來たが、もう何時ぢや知らぬ。早うお俊に逢うて、色紙の事を。さうぢや〳〵。

ト本舞臺へ來て、ツイと内へ入り、薄あかりの心にて、いろ〳〵透かし見て

誰れぢや、何者ぢや、

ト傳兵衞、物云はず、行燈を取つて來て灯を搔き立て

傳兵　眼が見えざア、よう見て置け。

源太　ヤア、そちや劍菱屋傳兵衞。

傳兵　お俊が客ぢやが、なんとした。

ト此うち小雛出かけ、聞いて居る。源太、思ひ入れあつて

源太　ムウ、昨夜から今朝の朝直しまで口說き落して得心させた、新らしい色客。

傳兵　口說き落して得心させた、新らしい色客。

源太　お俊、あれは。

お俊　源太さん、お前は何にも云はしやんす事は、ござんすまい。わたしは女郎、傳兵衞さんは客人、その座敷へ來て、どうの斯うのと云はずとも、ちやつと内へ歸らしやんせいなア。

傳兵　色を呼んで樂しんで居る、おれが座敷へ踏み込んで、物云ひつけりや、角太郎どのや、佐五右衞門とは違ふ。この傳兵衞が、ぶちのめすぞ。

源太　なんとほざく。

トきつと立ちかゝるをお俊、ちやつと、傳兵衞と入れ替り

お俊　ハテ、何にもお前が云はしやんす事はないと云ふのに。この譯は、明日でも知れる事でござんす。マア、わたしが云ふ通りに、ちやんと歸らしやんせいなア。

ト源太を無理に門口の方へ突き遣る所へ、小雛出て、お俊を引退け

小雛　お俊さん、イヤ、お俊どの。

ト胸倉を取つて下に置く。

お俊　小雛さん、お前は、いつの間に。

小雛　アイ、最前から來かゝつて、樣子は聞いて居ましたわいな。ナニお前、今さら源太さんと切れて、傳兵衞さんに逢はんしては、濟むまいがな〳〵。

お俊　サア、すまうが濁らうが、わたしが身儘、構はずと

お前は、あの彌三郎さんを大事にかけて居やしやんせいなア。

小雛　アイ、その彌三郎さんに連れた源太さん、わたしはお前が、二人を世話して下さんす忝なさ、その一人が缺けては、ほんにわたしも、彌三郎さんも。

お俊　ア、申し／＼、そんな事云うて下さんすな。アノ、わたしは女郎、サ、客人の心次第で、風の柳に靡かにやならぬ。義理詰めに傳兵衞さんが、きつういとしうなつたわいなア。

小雛　お俊さん、そりやお前でもあるまいぞえ。一體、源太さんと云ひ交しやんしたは、互ひの意氣づく。いつぞや山の松本で

お俊　サア、その時は嘘が誠、また誠が嘘に、返つたのぢやわいなア。

小雛　イエ／＼、さうではござんせぬ。どうも合點がゆきませぬお前の心。ソレ、いつやらでござんした。身仕舞ひ部屋で借らしやんした、上方の義太夫本、いろは藏とやらいふ中の文句に、流れの身ほど貞節を、立て通さねば恥かしい、ぬめた女郎と後々まで、廓の名を出しやんなといふ、それ、道芝といふ傾城の果ての女房に、妹女郎の雛路が意見。その淨瑠璃本をわたしにまで、讀んで聞かして、お前が云はんすには、いづくの浦でも、勤めの身はこの通りに守るがよい。お前も合點かえ、よう書いた文句ぢやないかと、譽めさしやんしたではござんせぬかいなア。それにお前は、源太さんを突き出して、今また傳兵衞さんを、色男にするといふ、不實な事がござんすか。コレ申し、今云うた義太夫本の文句まで、忘れてかいな、お俊さん。

お俊　サア、これには

ト云はうとして、思ひ入れあつて

エ、知らぬわいなア。

ト身を外ける。小雛、こなしあつて

小雛　さう云ふ心とは知らず、コレ、お前、わたしが爲には。

ト立ちかゝるを源太、ちやつと留めて

源太　ハテ、小雛どの、其やうに氣を揉む事はないわいの。

小雛　ぢやと云うても、あんまり。

ト又行かうとするを、此方へ引廻し

源太　たかでコレ、犬のやうな賣女め、いきせい張つて云ふのは無駄な事。マヽ、ヂツとしてござりませ。

小雛　エヽ、それでも。

　トあせるを源太、ヂツと押へる。傳兵衛、こなしあり

傳兵　お俊、これからわが身を急に身請けして、この傳兵衛が女房にする。オヽ、云うても新川の劍菱屋、酒問屋の御新造さまとも云はすが、どうぢや〳〵。

　ト嫌らしく寄り添ふ。お俊、思ひ入れ。

お俊　そりやわたしが望みでござんす。いつがいつまで勤めして、居たい事もござんせぬ。早う引いて、お前の女房・眉を取つて、前帶にして、物見遊山に行きたいわいなア。

傳兵　そりや心安い。明日からでもさうしてやる。殊によつては上方へも、見物がてら連れて行くわい。

お俊　ほんにかえ。

傳兵　なんの嘘を。

お俊　嬉しいなア。

傳兵　嬉しけりや、もつと此方へ寄りや。

お俊　アイ、斯うかいなア。

　ト寄り添ふ。此うち小雛、いろ〳〵あつて

小雛　アレ〳〵、見やしやんせ、源太さん、お前はあれを見ても、よう辛抱さしやんすなア。わたしや同じ女子でも、お俊さんの心意氣が、腹が立つて〳〵なりませぬわいなア。

　ト泣いて腹立つ。お俊、わざと、傳兵衛に

お俊　傳兵衛さん、お前と斯うして居るを小雛さんが、法界悋氣してぢやわいなア。

傳兵　イヤ、小雛よりは白藤が、グッとも云はず、マジマジと、ひつかい面は蟇蛙ぢや。ハヽヽヽヽヽ。

お俊　コレ、もうあの人の事は、構はしやんすな。

傳兵　成る程、構はずと、これからしつぽりと、其方と一緒に。

お俊　どうなりとも、お前のお好き。

小雛　イエ〳〵、寐さす事はなりませぬ。わたしがキッと

　ト振り切つて、ツカ〳〵行くを、源太、立ち上がり、小雛を留める。

源太　コレ、盛りの附いた女郎に、詞交すも穢らはしい。小雛どの、お前はもう身請けの濟んだ體、爰にござる事はごんせぬから、わしが連れて歸つて、これから彌三郎さまと寐さします。構はずとマア、わしが內へ。

小雛　それでも、アノ。

　トまた行きかゝるを、源太、引廻して、小雛を留めなが

ら

源太　お俊、これ覺えて居るか。

ト差して居る脇差を、出しかけ見せる。

お俊　そりや父樣が、お前に讓らしやんした一腰。

源太　サア、腰に帶して居るうちは、拔き放なされぬ備前長船、男の魂ひ、チツと堪えて居るぞよ。

傳兵　ムウ、さては源太、わりやお俊を切る氣か。

源太　オヽ、切る〳〵。

傳兵　ヤア。

小雛　エヽ。

源太　思ひ切る。勝手にせい。

小雛　そんなら、あのお俊さんの事は。

源太　もう捨て置いて下んせ。こんな所に居やうより、お前は早う、歸りなんせ。

小雛　でも、あんまりな。

トきつとなるを、源太、留めて

源太　小雛どの、サア、ごんせ。お前、履き物はえ。

トそこらを尋ね

オヽ、爰にごんした。サア、履かつしやりませ。

小雛　それはお慮外でござんす。

ト門口へ出て

小雛　源太さん、お前の心を推量する程、ほんに思へば。

ト思ひ入れ。

源太　ハテサテ、構はつしやりますな。お前のやうに彌三郎さまの事を思うてござる、誠の有る女はごんせぬ。勤めの身は皆あんなもの。

小雛　ぢやと云うても。

源太　犬でござります。サア、行きませう。

ト唄になり小雛、あせるを源太「ハテ」と鎭めながら、兩人、向うへ入る。後に傳兵衞お俊、殘り

お俊　サア、これで心がさつぱりしてよい。傳兵衞さん、マア二階へ行て。

ト手を取るを

傳兵　イヤ、行くまい。

ト振り放す。

お俊　なぜえ。

傳兵　サア、とつくりと思案して見れば、いま白藤めが、おとなしく歸つたが合點がゆかぬ。

お俊　エヽ。

傳兵　ハテ、こりや二人が云ひ合はせて、今朝、おれに百

五十兩出させた仕事と見える。なぜと云や。今の愛想づかし、釋迦でも腹立つて、殺さにやならぬ所を、ヂッと短氣を押へて歸つたは、お俊、こんな云ひ合はせも、あるものだ。古いぞや。コレ、百五十兩の金も、殊によつたら取返さにやならぬわい。

ト手を組む。お俊「エ、」とこなしあつて、又ヂッと思ひ入れ。

お俊　なんのこつちやぞいなア。傳兵衛さま、氣の惡い、今朝お前に番うた詞、わしや日の暮れるを待つて居たに矢ッ張り疑うてかいな。

ト膝にて脊中を突く。

傳兵　イヤ、疑はにやならぬ。白藤が爰へ來たのが、マア氣障ぢやて。それとも、眞實抱かれて寐る氣なら、とつくりと必定を見た上。

お俊　コレ、人に物思はすやうに。

傳兵　おれも、源太ではないが、寐たい所をチッと辛抱して、あの二階に待つて居る。お俊、疑ひ晴らす思案して早うおぢや。

ト唄になり、傳兵衛、こなしあつて、中二階へ上がる。お俊、後に思案して、色紙を持つて居るであらうが、それをどうぞ取りたいと、思ひ入れいろ／＼ある。此うち合ひ方になり、奥より彌三郎出かけて

彌三　お俊どの。

ト前へ出る。

お俊　彌三郎さん、お前は爰へ來て居やしやんしたかいなア。

彌三　サア、お前方、お二人のお志し、身請けの濟んだ嬉しさに、小雛に逢ひに、又お前に禮も云はうし、また今の樣子、とつくりと聞いて居て、わしや涙がこぼれて、感心しましたわいなう。

お俊　彌三郎さん、今の樣子、お前も、さぞ憎いと思うてござんせうに、替つて感心したとはえ

彌三　サア、源太が爲に、嫌なと思ふ、傳兵衛と、寐やうといふ辛抱は、これ皆

お俊　イエ／＼、さういふ心ぢやござんせぬわいなア。

ト二階へ氣兼ねの思ひ入れ。

彌三　イヤ／＼、お前がなんぼ口で、愛想づかしを云うても、目からは涙がこぼれてあるもの。

お雛　なんのマア、わたしが。

ト自惚れ鏡を出して顏を見る。此うち二階より傳兵衛、

障子をソッと明け、聞いて居る。この影鏡にうつる心にて

お俊　なんの、こりや逆上せて眼が悪いゆゑ。

彌三　そんならお前、眞實、源太は。

お俊　否になりました。

彌三　エ。

お俊　サア、とんと飽きが來たによつて、わたしや、切れる心でござんす。

彌三　そりや、お前、ほんにかいな／＼。

お俊　アイ、眞實否になりました。よう思うても見やしやんせ、元が、思ひ掛けない、わたしが似せ文で詐められさしやんした、時の張合ひで、ツイ色事になつたが、實に惚れたといふではなし、殊に田舎生れの偏窟な白癡さんより、外に立派な頼もしい男が、なんぼでもあるもの。

ト二階へ掛けて云ふ。

彌三　そりや、お前

ト腕まくりして、鏡臺を叩き

昨日までも昨夜までも、さう云ふ心ではなかつたに、夜の間に變る飛鳥川、男の心より女子の心、それで可哀さうに、源太の男が立つかいなう。

お俊　ハテ、立たうが轉けやうが、切れる氣になりや構はせぬわいなア。

彌三　それで濟むか、お俊どの。

お俊　オヽ、お前も、小雛さんと同じやうに。

彌三　イヽヤイナウ、こなさんも以前は、笹田友軒どのゝ娘ではござらぬか。それに一旦云ひ交した事を、反古にする義理知らず。但し、仇ついて女郎になつたのか、よもやさうではあるまい。これまでの志し、殊に今日小雛が身請けまで、皆お前のお世話。その恩を忘れて、斯ういふ事を云ふも、切れる事が誠なら、源太が心推量して、腹立ち紛れの今の當て事。どうぞ堪忍して心底を明かして下され。小雛も最前云うた通り、矢ッ張り源太と睦まじう。小雛が爲、わしが爲、手を合せて拜む。お俊どの。

トいろ／＼ある。此うち、お俊、わざと知らぬ振り、堪えゐて、フト二階を見る。傳兵衛招く。お俊、うなづく。傳兵衛、障子を締める。お俊、ツッと立つて行かうとする。彌三郎に構はず行くのを、彌三郎裾を捕へ

彌三　待つた。これ程まで云ふのに、こなさんは。

お俊　お慮外ながら源太さんに、眞實切れると云うておくれえ。

ト振り切り、唄になり、こなしあつて、二階へ上がる。彌三郎殘り、こなし。

彌三　あの心底では、こりや眞實、源太を思ひ切つて、傳兵衞に身を任すのか。それでは……こりや、小雛とも相談して、どうぞ二人が中を丸うして。さうぢや、マア、小雛に逢うて。

ト行かうとする。この前より後へ角太郎、麥庵、出かけ居て引戻し、引挾む。

兩人　彌三郎、待て。

彌三　ヤア、其方は角太郎、麥庵

麥庵　うぬに出合うたは、八幡の意趣返し。

角太　身共が爲には戀の仇、逢うた所が百年目。コリヤ、麥庵。

麥庵　彌三郎、われを

ト有りあふ箒にて打つてかゝる。彌三郎立廻つて留め

彌三　コレ、おりやそこ所ぢやない。ちッと急に。

ト振り拔け、行かうとする。

角太　やらぬワ。

ト引戻す　麥庵かゝる。彌三郎兩人を相手に柔らかなる立廻り。此うち玉蘭後へ出かけ、焦つてゐるこなし。三人よろしくあつて、トゞ彌三郎、有りあふ火鉢を麥庵の頭へスッポリ冠せる。角太郎それはトよるをこの時、玉蘭、角太郎を支へて、箱の炭取りを取つて角太郎が頭へ冠せる。

彌三　ヤア、玉蘭か。

玉蘭　申し、二人の奴等へこの炭取り。

兩人　なにを。

ト一時に火鉢、炭取りを取る。麥庵は灰だらけ、眞白になり、角太郎は炭だらけ、眞黑になり、キッとなる。

彌三　アレ、二人は。

玉蘭　サア／＼、生捕つた／＼。錢は戻り／＼。

兩人　おのれらは。

ト兩人にかゝるを、どつこいト八人藝のやうに鳴り物になり、右四人をかしみの立廻り少しあつて、よろしく見得になる。チョン／＼／＼にて、道具廻る。

造り物、二重舞臺。見附け鼠壁、納戸口。上の方、佛檀。御燈を上げ、文を位牌に貼り付け、友軒、後

向きに座り、佛檀に向ひ看經して居る。源太、今來た體にて、二重舞臺に腰かけて居る。道具は大和町麁末なる家の體、友軒、木魚の音の合ひ方にて、道具とまる。

ト友軒、文の回向願意宿得と木魚を打ちあげる。源太、此うち見合せて居て

源太　申し〳〵、舅御どの〳〵。

ト友軒これにて正面へ居直り

友軒　オヽ、最前から誰れぢやと思うたら、聟の源太どの夜中に何の用があつて、

源太　イヤ、お暇乞ひに。

友軒　ヤ、

源太　イエサ、商賣の角力で、明日は未明に、急に遠い上方へ參りますゆゑ、それで夜中ながら、ちよつとお暇乞ひに。

友軒　ムウ、アノ、角力で上方へ。そりや商賣、行かずばなるまい。

ト源太が顏を見て、思ひ當ることなしにて

源太　エ、

こりやモウぼつたりと、

友軒　イヤサ、明日の晩には立たれぬかいの。

源太　イエ〳〵、今でも立ちたい心急き。

友軒　アノそれは……南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト心の内に愁ひあつて、珠數を繰る。源太これにて、氣を附け

源太　イヤ、舅御、お前この夜中に、なんで看經をしてござりました。

友軒　ヤ。

源太　もう、コレ、余ツぽど夜が更けてござりますぞえ。

友軒　イヤサ、ナニおれは、商賣の講釋で晝は忙しない。それで夜に入つての看經。

源太　ハテナア。

トこなし。友軒、にじり寄つて

友軒　源太どの、まだ娘は無事で居りますか。

源太　エ。

トぎよつとする。

友軒　イヤ〳〵、娘は癪持ち、こなたが遠い旅へ行くと聞いて、持病は起りはしませぬか、と云ふ事サ。

源太　イエモウ、隨分達者で、今宵も客があつて

友軒　茶屋に居ましたが。

源太　今頃は大方、
　ト向うを睨み、ちやつと氣を替へ
酒呑んで、客を勸めて居りました。
友軒　アヽ、また過さねばよいが。イヤ、娘よりは聟どの
こなた、余ッぽど顏色が惡いが。
源太　イエ〳〵。
　ト頭をふる。
友軒　なんともないか。
源太　アイ。
友軒　イヤ〳〵、どこも惡うはあるまいが、云うても、お
れが頼んだ小雛どのや彌三郎どのゝ事で、いかい苦勞ぢや。
オヽ、幸ひ酒の取つたのがある。少しなれど燗をして一
つ。
　ト立ち上がるを
源太　アヽ、イヤ〳〵申し、舅御、明日の旅立ち、さう手間
とつては居られませぬ。暇乞ひがてら參りましたは、お
預け申したい物があつて。
友軒　ムウ、預けたいとは、エヽ、聞けば小雛どのゝ身請
けを、段々とのお世話で、濟んだげな。それで當分、こ
の家へ。

源太　イヤ、小雛どのではござりませぬ。この一腰。
　ト拔いて前へ置く。
友軒　こりや聟引手、頼みの印に、讓り申した一腰。
源太　サア、遠い旅へ行くのに、旅差しにするは惜しい物。
それで暫らくのうち
友軒　ムウ、旅へ行くのには、獨更差さねばならぬ、覺え
の業物。それを預けて、遠い上方へ。
　ト源太が顏を見る。源太顏を外らす。友軒、こなしあ
つて
友軒　成る程、慥かに預かり申した
源太　左樣ならば、キッと。
友軒　承知。併し一旦お頼み申した定家の色紙は。
源太　今日の晝、勇藏さまが入らせられまして、請合ひし
色紙は今宵中に。
友軒　最早九ツ過ぎ、八ツでもあらうか。
源太　火急な身の上。
　ト立ち上がる。
有無を聞いたるその上にて、女房お俊を。
友軒　逢ふは別れ、生まるは、死ぬの元。
源太　おさらば。

ト唄になり、源太向うへツイと入る。友軒、後見送り

友軒　あの體なれば、娘はまだ……源太の詞に、色紙の有無を聞いた上とあれば

ト佛檀の位牌に貼つてある文を取つて來て

こりや最前娘がおこした書置。讀んで見れば、傳兵衛とやらに身を任せ、小雛どのゝ後金、また色紙の在所も聞出したさ、道ならぬ不義。源太が聞かば男づく、生けては置くまい、お主と夫の爲に命を惜しまず、死んだ後にて、樣子くれ〴〵、夫に傳へてくれいと、現在の親への頼みの書置。健氣なやつ出かしたと、泣かずに譽むるは侍ひの、以前に恥ぢて、せめてはと、死なぬ先から回向する、親が世界にあらうかやい。天にも地にも、たつた一人の娘が、死ぬるを留めぬは因果、年寄つて子を先立てる悲しみは、どのやうにあらうぞ。情ない。

ト源太が置いた一腰を取上げ

緣を切るのは、娘を切る源太が性根、返しに來たこの一腰。

トこの時、輕いと心つき、思ひ入れあつて

ハテ、この一腰は、以前に變つて、どうやら。

と行燈の灯にて、とくと改め拔いて見る。身は無くて、中よりバラリと書置出る。友軒、ハツと取上げ見て

「舅友軒どのへ書き殘し申し候ふ。」

ト讀み上げ、こなしあつて

ナニ〳〵「女房お俊が不實忍び難く、今宵手に掛け候へども、一旦の契約、未來までも舅の緣は切り申さず、長船の身は此方へ申し請け、たとへ命は終るとも、小雛どのゝ身の上、色紙の儀も、とくと承知に御座候ふ。」

ト讀み終り

すりや、いよ〳〵源太は。

ト書置二通を兩手に持ち

コレ、この書置は娘も死ぬる氣。コレ、聟も殺す氣。斯ういふ事が出來やうとは、神ならぬ身の露知らず、數年帶せし備前長船、娘を殺す聟が出に、なんの讓らうぞや。

チエ、〳〵。

ト兩手を震はし、さま〴〵こなし。

口惜しや、年とれば武士氣質もどこへやら、湧き出る涙に胸せまり、只の親仁になつたわいやい。

トどつかと下に居る。大泣き落しにて、チヨン〳〵道具廻る。

造り物、また以前の鶴屋の道具になる。矢張り、合ひ方、雨車にて道具とまる。

ト八幡鐘突き出す。向うより源太、尻からげにて脇差の身を、手拭にて卷き腰に差し、米俵をかぶり、出て來て、俵の間より顏を出し

源太　もう、雨も止んださうな。ヤア、ありやモウ、八幡鐘、勇藏さまは、矢張り鶴屋で吉左右待つてござらう。ムウ。

ト思案しながら本舞臺へ來て、門の戸を明けようとして明かぬゆゑ、格子先の用水桶の上の石を取上げて格子を石にて突き破り、これより入り、ウソ／＼と、そこらこゝらを見廻し

こりや、どいつも、どぶさつて居るさうな。慥かに傳兵衞めは、あの二階。

ト行かうとする所へ、奥より麥庵、出て

麥庵　ヤア、白藤、待て。

ト脇差の身を摑む。源太、構はず腰を捻る。手拭解ける。

麥庵　アイタ……ヤア、こりや。

ト兩手の血を見て、あわてるを源太

源太　エヽ、面倒な。

ト蹴倒し、ポンと一刀に切り殺す。拔き身を提げ、ウソ／＼と傳兵衞が居所を尋ねる所へ、おなみ走り出て傳兵衞と取り違へ

なみ　傳兵衞さん、お俊さまは二階の寐間に。

ト源太が顏を見て

ヤア、お前は、源太さま。

ト悑り。これも一刀に切り殺し、さては二階ト上がりかける所へ、佐五右衞門出て來て

佐五　白藤か。何しに。

トかゝるを源太、構はずちよつと立廻り、佐五右衞門に手を負はす。佐五右衞門共まゝ奥へ逃げて入る。源太二階の上に上がり、障子を蹴放す。寢所の内より傳兵衞出て

傳兵　白藤源太か。

源太　傳兵衞、うぬを。

トばた／＼にて立廻り。とゞ傳兵衞が首を切り、その首を持ち、片手に拔き身を下げて、首を見てニツコリと笑ひ、打ちつけ、踏みつけ居る所へ、奥より勇藏、手燭を持ち窺ひ出て

勇藏　今の物音、慥かに人を殺めし樣子。

ト手燭を上げる。その手を切り落す。手燭消える。勇藏、暗がりにてかゝるを、これもよろしく切り殺す所へ、ツイと男一人、ぶら提灯を下げ出て、源太を見てヤアと恟り、逃げようとずる。首筋を取つて締め上げる。この提灯の灯にて、勇藏が死骸を見て

源太　ヤア。コリヤ信樂勇藏さま。そんなら今。ムウ。

ト若い者の首筋を持ちながら恟り、後悔の思ひ入れ。この時、捕へられたる男の、兩眼出て死ぬる。角太郎出る。

角太　人殺しの白藤源太、この通りを。

ト表の方へ行かうとする。源太、後より一刀切る。角太郎、手を肩へ逃げて入る。源太、拔き身を提げながら、奥へ追ひかけて入る。

直ぐに明く。　　引返し幕

奥庭、奥座敷になり、バタ／＼にて佐五右衛門、血まぶれになり逃げて出て來て逼ひ廻る。柴垣へ隠れる。始終バタ／＼にて角太郎逃げて出る。源太、追ひかけ出て追ひ廻す。角太郎向うに逃げて入る。源太、爰にて一息つく所へお俊、バタ／＼にて出て行きあたり、顔見合はせ

源太　お俊、うぬ。

ト振り上げる。

お俊　コレ。

ト書置を擴げ突きつける。源太振り上げながら

源太　「人目繁く候ふゆゑ、書置も心に任せず、さぞ／＼御腹立ちに御座候はん、委細の事は、大和町の父樣へ申し遣はし候ふ通り、やう／＼色紙を尋ね出し、傳兵衛を騙し」……ヤア、すりや色紙は。

お俊　コレ、爰に。

ト色紙を出して渡す。源太、受取る所へ文六窺ひ出て

文六　その色紙を。

トかゝるを切る。

お俊　それは。

源太　大勢の奴等を切り殺し、剰さへ、この色紙受取りの役人、勇藏さままで。

お俊　エヽ、そんなら。

源太　人殺しの科人、未練に生き長らへる所存はない。

お俊　死なば一緒に。

源太　先づ色紙は舅殿へ。

ト佐五右衛門、柴垣より出て、人殺しト後より抱きとめる。源太、引外し面を切る。鄭へ面にて、パッタリと落入る。お俊、こなし。

お俊　コレ、申し。

源太　構はすと、行け〳〵。

ト、お俊先へ、源太、色紙を持つて拭き身を下げ、いろいろ、こなしあつて向うへ入る。カチ〳〵〳〵。

幕

# 大切　淨瑠璃の場

淨瑠璃　妻夫事雨柳　（富本連中）

役名――鹿島の事觸れ、お石。角力取り、行川福八。同、八幡鐘權作。同、小松濱小吉。同、瀧登り鯉之助。同、蔦ヶ岡與良右衛門。加賀屋お俊。關取、白藤源太。

本舞臺、三間の間、向う草土手、太夫連中居並び、下の方下座の所へ、橋を半分見せ、芦萱生ひ茂り、下に柳の大樹。爰にタテの人數立ちかゝり、時の鐘にて幕明く。

福八　なんでも、あの白藤とお俊めは、さう遠くへ逃げて行く筈はないが。

鯉之　それ〳〵、どうで此方の方より外、江戸の方へは行かぬ。

小吉　先づ猪の堀、砂村の方を頑張つて

權作　見附け次第に引ッ縛る。

皆々　サア〳〵、來い〳〵。

ト下座へ入る。前彈きになり、雨車の音。

〽白藤とお俊が仲は濡れに寄る、傘に人目を隱し紋、うは繪も散れば命まで、流れ次第の捨て小舟。

ト合ひ方になり上の柱の下より、小船を押し出す。この船の內、源太、お俊、傘にて體を隱し、乘つて出て舞臺、眞中にて船とまる。よい所にて源太、立つて傘なさす。お俊、寄り添ふ見得にて

〽岸につく〳〵身の上の、ゆたのたゆたの、今しばし、この世をもやひ洲崎から、上がつて木場の川づたひ、待

たれず町を離れては、誰れに遠慮も菜種畑、二人一緒に猪の堀も、永代橋と思ひしに、今宵未來へ早歸り、泣いて心も佃節〽更けゆく川風、あがれよ簾、中の小唄の顏見たや〽これこの顏も名殘ぞと、見交す空を春雨の、小やみにしばし休らひて。

ト此うち船より上がりて、いろ〱あるべし。

お俊　白藤さん、心に思はぬ愛想づかし、さぞ腹が立つたでござんせうが、堪忍して、一緒に死んで下さんせい。

源太　イヤ〱、この身の追手を遁がれんと、八幡川岸の小船に飛び乘り、もやひを解いて流れ次第と、二人一緒に、爰までは來たが、人違ひとはいひながらも、勇藏どのを手に掛けたれば、取詮生きては居られぬこの身。おぬしは又格別、跡に殘つて白藤が、とひ弔ひを頼むぞよ。

お俊　モシイナア、さういふ身にならしやんした、お前を見捨て長らへさうな、わたしぢやと思うて下さんすか。そりやあんまりおや、源太さん。

〽元この戀はわたしから、しかし文庫の打明けて、いうたお前も合點して、閨の角力の新枕、深川や、浮名たつみに勤めの誠、部屋で噂も味に氣を、廻し男や、茶屋方で、せけばせく程かんざしや、鏡袋に名がしらの、人目に立つて一夜さも、顏見ぬうちの遣る瀨なさ、それ松本で呑み明かし、濟まぬ心も開いてから、ゆかりの月の面白さ、可愛い男に三味線の、三は切れても二世の緣、いろにかせさへかけながら、今のこの身を寐こかしに、一人あの世の通ひ船、積にさわるぢやないかいな、そりやあんまりな胴よくと、打ちつけられて關取も、外に出す手はなかりけり〽それその誠白藤も、斯ういふ鴨の羽搔〱め、浮名をあすの顏ぶれも、何かいとはんいとはじと覺悟を死出の立會ひは、小氣味も宵の月晴れて、心は曇る折からに。

トこの文句にて兩人抱きつく所へ、橋の上よりお石、事觸れの形にて烏万燈を持ち、ツカ〱と兩人の中へ出る。源太お俊、悄りして

源太　ヤア、珍らしい女の事觸れ。

お俊　まだ宵ながら、どうしてまア。

いし　サア、方々廻つて歸り道、早う歸つて連れ添ふ男の顏が見たいでおじやり申す。

源太　ハヽア、そんなら今日は御亭主の、替りに出たといふやうな事か。睦ましいな〱。

いし　睦ましいは此方ばかりか、それ、お前にも。

〽今年や世がよい色事の、豐年年增に娘も、うけが七人むけ五人、苦界十年その中で、男一人をほとゝぎす、守りほそんとかけられて、引くに引かれず辻占も、よく相性の云ひ交し。添はれぬ時は土性と、木性も揃ふ無分別、ちよちよちよつくり宮雀、手ふり羽ぶりの意見でも、よもやきかじの要石、とは思へども戀風は、愼しみたまへと觸れにける。

いし　ア、申し、なんの差出がましいと、叱られぬうち歸ります。とは云ふものゝ、聞き屆けてもあらうなら、ほんにめでたう

〽おじやりや申す。

ト これより、太鼓入り

〽御代はめでたのナ、ナアナエ。

コレワイナア。

〽若松さまよ。

オヤモサ〳〵。

〽鹿島浦には、ナナア、ナエ。

コレワイナア。

〽鹿島浦には、寶うき船がツン着いたエ。

コレワイナア。

〽ちへほさエ、コレハちよんねがナ、ナン〳〵ヨ〽サア黄金柄杓でサ、水さ汲みませうな、ナアン〳〵ヨ、おつやがとつさま抱いたら放すな、辛抱所だ。

ほんに、おめでたうござります。

〽こちはおゆるしやれ、草臥れ申した、歸りや申すと走り行く。

ト お石、向うへ走り入る。時の鐘になつて

源太　ありや二人が無常の音。

お俊　南無阿彌陀佛。

〽八幡鐘もつきつめし、今ぞお俊と白藤が、心の竹の拍子唄、後の噂に殘るらん

ト 淨瑠璃納まると柳の影より、權作、福八、小吉、鯉之助四人出て

四人　動きやアがるな〳〵。

源太　こりやアうぬらは、なんとする。

福八　弟子でも、師匠でも、斯うなるからは向う面。

權作　人を殺して逃げるのを、おいらが追ひ投げ、向うづけ。

鯉之　褒美に預かる腹卷、開くと沈む、白藤が

小吉　四手搦みの四ツ紅葉、もう叶はぬと諦らめて、お念

佛でも。

四人　こづき出せエ、。

ト四人、源太を引ッ挾む。

源太　小積な奴等。この白藤を、ならば手柄に捕つて見ろ。一人々々は面倒な。一緒に來い〳〵〳〵。

ト源太、衣裳を脱ぎ捨て、裸になり、大小三味線、摺り鉦入りの合ひ方にて、目覺ましき大タテあつて

皆々　どつこい。

トきまる。

源太　先づ今日は、これぎりめでたく。

打出し

四紅葉思戀深川（終り）

第二番目初日は
小まん
源五兵衛
是は御ぞんじ
五大力を

# 略三五大切

最初は洲崎桝屋
次は道行浄瑠璃
續いて大和町
夫より仲町
又返して大和町
切は木場泥仕合

表のカタリは「略三五大切」初演の時のものである。

下掲の番附は、この狂言の再演「五大力色讃」の折ので、安政元年三月、中村座の舞臺であつた。この時は八代目團十郎が源五兵衛に扮し、嵐吉三郎が三五兵衛と八右衛門を替り、小万には尾上梅幸であつた。普通の「五大力」が、この頃にはもう夏狂言のやうな習慣になつてしまつたので、春に五人斬を出す場合、この方を選んだものと見える。

本文の中へ挿入したのは、初演の折の櫓下番附の一部である。



# 略三五大切

## 序幕

深川八幡の場
洲崎桝屋の場

役名――千島千太郎、笹野三五兵衞。鹿兒島十次兵衞、桝屋娘、おこの。同、おはる。同、おきち。仲居、おなか。藝者、房野。同、男藝者、繁次。廻し男、彌助。奴、土手助。多々良佐十郎。横川早助。舟戸三四郎。醫者、秦元南。桝屋下女、おしも。桝屋宗吉。賤ヶ谷伴右衞門。出石宅左衞門。藝者、濱吉實ハ三五兵衞云ひ號け、渚。料理人、喜助。若黨、井關門平。船頭、長吉長兵衞。藝者、櫻屋小万。

造り物、一面の竹垣。上の方に栗丸太の枝折り門。これに山本といふ額を掛け、深川八幡山の體。騷ぎ唄にて、幕明く。

ト直ぐに向うより、おこの、詰め袖、褄の拵らへ。房野、おはる、おきち、何れも仲町藝者の拵らへ。おなか、仲居の形。後より繁次、男藝者の拵らへにて出て、花道にて

この　ほんにお前方も、埒の明かぬ足でござんすなア。

房野　おこのさん、其やうに、忙しう云はしやんすけれど、たつた今、江戸から歸つたもの。ナア、お春さん。

はる　さうして、舟に乘り詰めて居ると、結句足が草臥れるものぢやといなア。

きち　それで大抵、氣を急いた事ぢやござんせぬぞえ。

なか　おこのさんが、あのやうに氣を急かしやんすのも、お客がやかましう云はしやんすからぢやわいなア。

繁次　生憎、今日はどこもかしこも忙がしいかして、寄せ場に居るも目が舞ひさうだ。

この　今日は千島の若殿樣が、初めてのお出でぢやに依つて、今朝から御近習のお方々がお出でなされて、やかましう仰しやつてゞござんすわいなア。

なか　常のお客と違うて、大抵むづかしい事かいなア。

はる　さういふ事なら、早く行つて勤めるがよい。

房の　大方小万さんは、山本に居やしやんすであらうわいなア。早う行て、連れ立つて行かうわいなア。

きち　そんなら、直ぐに山本へ

なか　サア、行かしやんせいなア。

ト矢張り騒ぎ唄にて皆々、本舞臺へ來る　枝折り戸の内より、彌助、廻し男にて三味線箱を提げ出て、皆々を見て

彌助　オヽ、これはおこのさん、皆打揃うて、何しに爰へお出でなされました。

この　何しにといふ事があるものかいなア。コレ、彌助どの、今朝云うてやつてある、小万さんの事はよいかえ。

彌助　サア、それで、この彌助が氣ばかり揉んで居りまする。小方さんは、もそつと先まで、山本の座敷に勤めて居なさつたが、癪が痛いとやら云うてたつた今、内へ歸りなさつた所で、また福本からも、ちよつと貸してくれろと云つて來たを、喧嘩面をして今お前の方へ、わたしが送つて行く積りにして、洲崎までの駕籠を誂らへに、行く所でござりまする。

この　そりや悪い時分に、癪が起つた事ぢやなア。

彌助　なにサ、癪だといつて、きつい事はないのサ。全體、内のこれが

ト小指を出して見せ

あんまり慾張つて、物を云ふから起る事サ。わたしらでさへ時々、癪に障る事がありやすのサ。

この　そんなら、どうぞそこをよいやうに云うて、送つておくれ。

彌助　ハテ、廻しの彌助が呑み込んだら、丈夫に思うてござりませ

繁次　イカサマ、呑み込んだ日には、滅多に吐き出すといふ氣遣ひなしサ。

彌助　どうで、わたしは、爰へ歸つて参ります。おこのさん、お前方も山本の内で待つて居て、あの子と一緒に連れ立つて行ておくれなされませ。

この　そんなら彌助どの、ちつとも早いがよいぞえ。

彌助　合點でござります。

この　サア、皆さん。

繁次　お出でなされませ。

ト騒ぎ唄になり、おこの先に皆々、枝折り門の内へ入る。後に彌助殘り

彌助　ヤレ／＼、今朝から歩き通しの所爲か、膝頭が折れ

るやうだ。併し、もう一遍急いて來ずばなるまい。

ト花道の方へ行きかゝる。通り神樂、流行り唄になり、向うより、長兵衛、廣袖、布子、細帶、船頭の拵らへにて出て來り、花道中程にて、彌助に行き合ひ

長兵　てまへは彌助ぢやないか。

彌助　オヽ、松屋長兵衛か。

長兵　よい所で逢つた。マア、あそこへ戻つてくれ。

ト本舞臺へ連れて行く。彌助、是非なく戻る。

長兵　彌助、おぬしはマア、あんまりな男だ。長い事は云はない、コレ、正月になつて、もう幾日になると思ふ。去年の暮れに、どうも成らぬと云ふに依つて、茶屋の拂ひを繰り廻し、達引をしてやつたものを、梨の礫もせねば自體マア、あの金は、どうする料簡だ。いま返事をしてもらひたい。

彌助　おぬしも、長吉長兵衛と云つては、船宿仲間で小口も利く、毅仁分の男ではないか。それに僅の事を大道中で、さう云はずともよからうではないか

長兵　彌助、人に物を借りて、さう云ふなとは何事だ。大道中で云はれるか否ならば、借りた物をさつぱりと返してから物を云やれな。

彌助　それを教へられるものかえ、借りたからは。もう一月と二月は待つてもらふから、さう思つてくりやれ。

長兵　ムウ、さう其方から圖太く出たら何も云はぬ。これから仲町へ引摺つて行つて、取る所から取るわえ。

彌助　面白い。われはおれをマア、どうして引摺つて行く。

長兵　やかましい事はない、おれが今

ト鉢卷をしめる。彌助、三味線箱を床几の上に置き、捨ぜりふにて惡たいを云ひながら鉢卷をする。通り神樂になり、向うより宅左衛門、件右衛門、袴羽織、大小にて、土手助、中間の形にて、供をして出る　直ぐに本舞臺へ來て、彌助、長兵衛が爭ひにかゝるを、土手助、二人を引分け

土手　マア／＼、二人ながら待ちやれサ。

兩人　料簡しないぞ／＼。

トやかましう云ふを、土手助、宥めて

土手　これはしたり、廻しの彌助でないか。マア／＼、待つたがよい。

彌助　オヽ、土手助さんぢやござりませんか。

宅左　彌助、何を聲高に申すのだ。

彌助　イヤモウ、さしたる事でもござりませぬが、あの男

に私しが、少しばかり借り受けました物がござりまする。それを只今爰で、急に催促を致しまするゆゑ、一つ二つ爭ひましたのでござりまする。

長兵　モシ、お侍ひ樣、みんな彌助が不理窟でござりますゆゑ、私しが料簡しないと申すのでござります。御挨拶なら構はずに置いて下さりませ、サア、彌助、キリ／＼親方の所へうしやアがらないか。

ト立ちかゝつて云ふ。宅左衞門、こなしあつて

宅左　委細を聞いた所が、有觸れた借金の喧嘩とあらば、身共が挨拶に一扱つて遣はさう。

伴右　イカサマ、彌助、其方には、我れ／＼が密々に申し談ずる儀もあるが、して、その借り受けた金子は。

彌助　イヤモウ、元利で五兩足らずの金、それで今のやうに申しましたのでござります。

ト宅左衞門、懷より小判五兩出して

宅左　コリヤ、そこに居る男、彌助が其方に借りた金子は身共が取替へて遣はす間、慥かに請けたがよい。

彌助　イヤ申し、それではお氣の毒でござりまする。

伴右　ハテサテ、苦しうない。早く返せばよいではないか。

彌助　それは大きに有り難うござりまする……コレ、長兵衞、おぬしはマア、よい所へ來て仕合せな男だ。おれがお客が、おぬしに金を拂つて下さる。慥かに受取つたがよい。

長兵　イヤモウ、ほんの云ひがゝりで、ツイ口やかましう云つたものゝ、日頃から心易い中。コレ、氣に障つたら料簡してくれろ。

兩人　仲よし／＼。

長兵　シタガ、これもあなた方のお庇、彌助、よろしくお禮申してくれ。

ト金を懷へ入れる。彌助、こなしあつて

彌助　イヤ、お二人樣、この男は船宿の仲間で、長吉長兵衞といつて、顏の賣れた者でござりまする。その上、何事にかけても如才がなければ、何ぞ御用でもござります時は、私しと同じやうに、お遣ひなされて御覽じませ。

宅左　イカサマ、萬事呑み込みのよさゝうな男。ナウ、伴右衞門どの。

伴右　左樣でござる。我れ／＼が同腹中に致して置くがようござる。

長兵　イヤモウ、何事によらず、小むづかしい出入り程、骨を折るが私しの請合ひ。

宅伴　して、其方が住居は。

長兵　イヤモウ、内といへば年が年中、深川の土地で日を暮らして居る、長吉長兵衛。これから爰の山本の内に用があつて居りますれば、御用とあるならば、この山本へ御しやつて下さりませ。

彌助　そんならおぬしには、山本へ行くか。

長兵　オヽサ、次手に仲直りの酒も拵らへて置かう。

土手　裁人のこの土手助も、後に行つて一つ呑まう。

長兵　お近付きの印に、待つて居りまする。お二人さま、こりやア大きにおやかましうござりました。

ト合ひ方になり、長兵衛、枝折り門の内へ入る。

彌助　思ひがけない所で只今の仕合せ、有り難うござります。して、私しへの御用の筋と申しまするは。

宅左　他の事でもないが、この度我れ〳〵が主人、千島千太郎さま、初めての江戸詰。それゆゑ國元の家老中より、智惠付けの傳に、諸所繁花の土地へ連れ立つて、御覧に入れよとの内意。それを幸ひ、この深川の遊里へ伴ひ、うつけ者の大將に仕立てる、我れ〳〵が思ひ付き。

伴右　元來、愚痴短才なる若殿ゆゑ、色よき女どもを餌にして、金銀を遣はすれば、その尾に付いて企みはさまざま。其方親方の抱へ、櫻屋の小万は、仲町にて評判の藝者なれば、彼の小万に喰ひつかせるが、屈竟の事と思へど、この間より度々呼び出しても、とんと折悪しく、小万は外々の揚げ詰め。それゆゑ今日は、是非々々小万を召し寄せるやうにと、洲崎の枡屋宗吉方へも申し付け遣はしたれど、全盛の小万が事ゆゑ、こりや其方へ申し含めたらばよからうと、それゆゑわざ〳〵。頼みと云ふはこの事ぢやて。

彌助　そんならアノ小万に、若殿樣をかき轉ばしてくれろといふ事を、私しに云へでござりまするか。

宅左　廻しの其方なれば、首尾よう成就しさうな事。

伴右　成るべく外々の客は斷わり、千太郎さまの揚げ詰め同然に致し置く程に、其方よく、呑み込んでくれまいか。

彌助　イヤモウ、いつぞやフッとこの二軒茶屋で、お近付きになりましてから、いろ〳〵と御贔屓になされて下されますお二人樣、別して又只今も、私しが借金まで拂うて下さる御仁心、委細呑み込んで、お前方の方へばかり持ちかけるやうに、つうくつを致しませう。

宅左　それは忝ない。其方が呑み込んでくれさへすれば、我れ〳〵が安心

ト懐中より金を出して

これは骨折りの印、取つて置け。

ト遣る。彌助、取つて

彌助　これでは却つて縮み入りまする。併し、流行りッ子の小万さんなれば、マア、後に丼屋へ這つた上、それより又とつくりと、お話し合ひ致しませう。

伴右　兎も角も、其方が働らき次第、首尾よう行きさへすれば、その上では又我れ〳〵が、爰に有るわい

ト胸を叩いて見せる。

彌助　イヤモウ、根かぎりに精出しまする。

宅左　併しこの事、必らずともに

彌助　ハテ、延しこそすれ、この彌助は、そんな迂濶な男ぢやござりませぬ。

宅左　でも、小氣味のよい男でござるわい。

トばつたりと矢響きの音して、床几の上に直してある三味線箱の緣へ、白羽の矢一本當る　これにて最前より土手助、居眠り居て、この時、恟りして目を覺まし

土手　アイタ、、、。石をぶッ付けた奴は、どいつだ、どいつだ

ト狼狽へ、三人も恟りして、彌助、箱を直しながら

彌助　ヤア〳〵、とんだ所へ流れ矢が來たので、恟りしたわい

宅左　思へば危ない事ではある。

彌助　滅相な。どいつが、どこから、放したのであらう。

土手　鐵砲ならば網打場か、安宅からでも、放したであらうが

ト矢を取上げ見て

よもや天から矢の降るやうな日和でもなし。

彌助　とんと合點が行かぬわい。

ト宅左衞門、こなしあつて

宅左　土手助、その矢をこれへ。

ト矢を取り　とつくりと見て

宅左　伴右衞門どの、御覽じたか。これは若殿千太郎さまの、數矢ではござらぬか。

伴右　ドレ

ト取つて見て

成る程、こりや千太郎どのゝ數矢に違ひござらぬ。

宅左　アヽ、これで解りました。今日は若殿千太郎どの、新春の弓始めを召さるゝにつき、當所三十三間堂にて、稽古の差矢を射さつしやる筈。卽ち笹野三五兵衞がお供い

たして、今朝より三間堂に御入り。大方、例の馬鹿殿が滅多放しの外れ矢でござらう。

伴右　いかにも、それに違ひはござらぬ。

土手　ヘエ、、左樣ならばその流れ矢は、三十三間堂から飛んで來たのでござりまするか　それで樣子が判りました。

伴右　何は格別、新春から、當るといふは先づめでたい。

ト此うち宅左衞門、思案して居て、件の矢を見て思ひ入れあつて

宅左　伴右衞門どの、只今申す通り、今朝より笹野三五兵衞が、若殿のお側に付添ひ居りますれば、なんと斯樣に致したら、如何でござらう。

ト伴右衞門に囁く。

伴右　天晴れの妙計でござる。して、その當人は何者を。

宅左　サア、それも何かに如才のない、あの彌助を賴むがようござらう。

彌助　何か存じませぬが、御用とあるなら、何なりとも。

宅左　賴みたけれど爰はあんまり、パツと致すではないか。

彌助　成る程、左樣ならば、繪馬堂の茶見世まで。

伴右　同道いたして密々の談じ。

彌助　吳羽綾羽の繪馬の下にて

宅左　土手助、參れ。

土手　ネイ。

宅左　サ、、來やれ。

ト騷ぎ唄になり、宅左衞門、伴右衞門、土手助を連れ、彌助、箱を持つて向うへ入る。大拍子になり、道具廻る。

造り物、平舞臺、見附け赤塗り、三十三間堂の體。上の方に靑竹の矢來。舞臺眞中に花莚を敷き、毛氈を敷いて、こ　上に千太郎、着附け麻上下、若殿の拵らへにて鞢をかけ、鉢卷、銀の茶碗にて湯を呑んで居る。早助、三四郞、左十郞、羽織袴、大小にて千太郎をあふいで居る。玄南、着附け羽織、醫者坊主にて、茶辨當の銅壺にて茶を煎じて居る。この見得、大拍子にて道具とまる

ト三人、千太郎を煽ぎながら

三人　若殿樣、お疲れにござりませう。

千太　イヤモウ、大汗になつた。

元南　千太郎さま、あまりお氣をお詰めなされまして、お頭痛の氣味はござりませぬか。
千太　なんの／＼、矢數の千や二千射たとて、弱るやうな千太郎ではないわい。
四人　イヤモウ、日頃のお稽古が、キッと顯はれましてござりまする。
ト通り神樂になり、向うより、三五兵衞、齊附け麻上下、宅左衞門、伴右衞門、連れ立ち出て來る。
宅左　これは／＼三五兵衞どの、最早、御射術は相濟みましたか。
三五　やう／＼只今相濟みました。即ちあれに千太郎さま、御休息なされてゞござります。
宅左　然らば御祝儀を申し述べませう。
三五　サヽ、お越しなされい。
宅作　まづ／＼、お先へ。
ト矢張り通り神樂にて、本舞臺へ來る。
千太　オヽ、三五兵衞、宅左衞門、伴右衞門も連れ立つて參つたか。
皆々　最前より若殿の、お待ち兼ねでござりまする。
宅左　我れ／＼兩人は、お國許の御用向きにて、お藏屋敷へ立寄り、それゆゑ只今
伴右　お弓始めの御祝儀も、先づは相濟み
皆々　おめでたう存じまする。
千太　なんと皆の者、この千太郎が弓勢の程、凄まじからうがや。唐土の鎭西八郎も及ぶまい。コレ、譽めてくれ譽めてくれ。
宅左　イヤモウ、我れ／＼も及ばぬ儀と
皆々　恐れながら、感心いたしてござりまする。
ト摺り鉦入り、花やかなる唄になり、向うより小万、仲町の藝者の拵らへ、おこの、房野、お春、繁次、おきち、おなか、皆々前の形にて出る。彌助、三味線箱を提げ、宗吉、袴羽織、一本差し、町人の拵らへにて出て來る。
彌助　コレ／＼、あそこにお出でなさるゝは、千島の若殿樣、どなたも麁相のないやうに。
皆々　そりや合點ぢやわいなア。
小万　おこのさま、なんとマア、晴れがましい所へ行くのでござんすなア。
宗吉　それで早う、わたしが所へ、若殿樣をお連れ申さうと、お迎へに出て來た桝屋宗吉。

繁次　袴羽織でわざ〳〵、三升仕るといふ洒落はどうだ。

彌助　無駄を云はずと、マア、あそこへ。

女皆　サア、ござんせいなア。

ト本舞臺へ來る。此うち舞臺には、千太郎、上下を取り、羽織を着る事よろしくある　小万、三五兵衞を見て

小万　三五兵衞さま、お前もそこにかいなア。

ト云はうとして、皆々を見て遠慮のこなし。三五兵衞も、わざと知らぬ振りにて居る。千太郎、皆々を見て

千太　宅左衞門、あの者どもは。

宅左　イヤ、當所深川の藝者どもでござりまする。

伴右　即ち、洲崎の枡屋方へお入りなさるゝにつき、御酒宴のお相手に、召寄せましたのでござりまする。

三五　枡屋宗吉はじめ女ども、若殿のお迎ひに、參りましたのでござりまする。

千太　ムウ、そんなら、枡屋の主が、おれが迎ひに、女どもを連れて參つたと申すのか。

宅左　左樣でござりまする。彼れらにお詞を下し置かれませう。

千太　オヽ、詞を下してやらう〳〵。コリヤ宗吉、今日は其方が宅へ行く程に、隨分とも、馳走いたせ〳〵。

宗吉　若殿樣に、お目見得を致しまする上、私し方へお出で遊ばされ下さる段、有り難き仕合せに存じまする。

千太　さうして、それに居る女どもは、殘らず藝者か。

この　ハイ、私しは、宗吉の妹でござりまする。サア、小万さまも皆樣も、若殿樣へお目見得しなさんせいなア。

ト女形皆々こなし。千太郎、皆々を見て

千太　コリヤ〳〵、三五兵衞、あの藝者どもに杯をくれう。酒を持て〳〵。

三五　ア、イヤ〳〵、この所は往還も同樣の儀にござりますれば。

宅左　ハテサテ、三五兵衞どの、誰れあらう千島千太郎さま、何事をなされうと、そこがお大名。

伴右　兎角、若殿の思し召し次第か、ようござる。ナウ、何れも。

皆々　いかにも、左樣でござりまする。

千太　サア、早う杯を持て〳〵。

三五　ハツ〳〵。併しながら、折惡しくお杯の用意もなし。これは伴右衞門、如何いたさう

ト彌助、この時前へ出て

彌助 申し〳〵、その擂らへは憚かりながら、私しが只今いたし差上げませう。

ト件の三味線箱より鯛の濱燒、大きな蛸を鉢に入れ、備前德利と一緒に並べ、三味線箱の蓋に載せて出し

彌助 斯ういふ事もあらうかと存じまして、山から、ソツと入れて參りました、此お肴、時の用には花見の心で、あの毛氈の上でのお酒盛りは、どうでござりませう。

千太 こりや思ひ付きな物を持つて參つたな。宅左衞門、あの者は

宅左 彼れめは廻しの彌助と申しまする者でござりまする。

千太 廻しとは何を廻すのぢや。

宅左 アイヤ、廻しと申しまするは、藝者どもを廻しまするゆゑ、それで廻しと申しまする。

千太 おりや、角力取りの褌の事かと思うた。彼れに褒美を遣はせい。

宅左 ハツ、彌助、若殿へお禮申し上げい。

彌助 エヽ、有り難うござりまする。

早助 なんと何れも、瓢箪から駒が出るの、灰吹から大蛇と申す事は、承はり及んだが

三四 三味線箱から蛸肴とは、珍らしいではござらぬか

元甫 イカサマ、お江戸に繁華と申しながら、三味線までが、派手なものぢやなア。

千太 コリヤ〳〵、三五兵衞、そこに居る藝者どもを近う呼べ〳〵

三五 ハツ

トこなしあつて

ソレ、皆の者、若殿がお召しなさるゝ。お側へ參れ。

ト小万こなしあつて、房野、おはる、おきち、三人、千太郎が側へ坐る。千太郎見て

千太 オヽ、なか〳〵よい藝者どもぢや。名は何といふぞ。

房野 ハイ、房野と申しまする。

はる 私しは、おはると申しまする。

きち わたしや、おきちと申しまするわいなア

千太 オヽ、どれもよい名ぢや。褒美に、大事な物ぢやが薩摩芋を出して遣はさう

ト房野の手を取る。

房野 ア、申し、私しどもは、其やうな事は存じませぬわいなア。

ト三人、此方へ来る。宅左衞門、小万を見て

宅左　コリヤ〳〵、そこに居るは、小万ではないか。なぜ御前のお側へ参らぬぞ。

小万　イエ、わたしや。

　ト三五兵衛にこなし。

三五　ハテサテ、千太郎さまのお召しとあらば、早う行て、御機嫌のよいやうにしやれナ。

小万　それでも、ちつと爰に。

　トうぢ〳〵して居る。宅左衛門こなし。

宅左　なんと、千太郎さま、あれに居りまする小万が、あなた様に、少し氣がござるやうな體に見えまするが、御前には如何思し召しますか。

千太　ナニ、嘘ばつかり。ほんの事なら、これへ呼べ〳〵。

皆々　小万さん、あそこへ行かしやんせいなア。

小万　エヽ、つんとモウ其やうに云うて下さんすな。お前も一緒にお出でいなア。

　トこなしあつて、千太郎が側へ坐る。千太郎、小万が顏を見て

千太　其方が小万か……コレ、宅左衛門、おりやこの小万が氣に入つた。コリヤ小万、今からこの千太郎が側に置くぞよ。

　ト手を取つて引寄せる。

小万　アヽコレ、わたしや嫌ぢやわいなア。

　トついと此方へ來る。

千太　宅左衛門、小万が嫌ぢやと云ふわい。

宅左　イヤ〳〵、苦しうござりませぬ。譬へ嫌ぢやと申してからが、そこが彼のお大名の御威勢でござる。ナウ、伴右衛門どの。

伴右　思ふ坪へ丁度參つて……イヤサ、參つたからは、最早御前のお好き、お心任せでござりまする。

千太　おりや、薩摩芋より何より、あの小万が大好きになつた。

宅作　ハヽヽヽヽ。

　ト通り神樂になり、向うより長兵衛、火繩箱を提げ、戸板に死骸を乘せて、これを若い者二人、船頭の形にて擔いで出る。直ぐに本舞臺へ來て

長兵　サア〳〵、爰だ〳〵。こなさん達は、マア、河岸へ行つて待つて居て下さい。

船頭　そんなら、置いて行くぞや。

長兵　御苦勞々々々。

　ト船頭、戸板を置いて入る　宅左衛門、皆々、これを

見て
宅左　ヤイ〳〵、其方は何者で、何ゆゑ御大身のお入りなさるゝに、尾籠の振舞ひ。
皆々　下がり居らぬか
長兵　御大身でも、お大名でも頓着はない。下手人を取りに來たのだ。
ト　やかましう云ふ。皆々思ひ入れ。三五兵衛、こなしあつて
三五　コリヤ〳〵、何を聲高に申すのぢや。ソレ、彌助、その者に、とくと樣子を聞いて遣はせ。
彌助　ハイ〳〵、畏まりました。
ト　長兵衛を見て
ヤア、こなたは、船宿の長兵衛ぢやないか。
長兵　オヽ、廻しの彌助か
彌助　やかましく何を云ふのだ。こりや一體、どうしたのだ。
長兵　聞いてくりやれ。先刻お客を連れて、山本から出る所をば、どこからやら、ヒヨイと矢が一本飛んで來て、お客の頭へ立つが早いか、直ぐにコツクリ死んでしまつた。なんでもこの矢を詮議したら、敵が知れやうと、死骸に立つた矢を見たら、コレ。
ト　矢を出して
この通りに千島千太郎と、漆でしつかりと印が書いてある。それで爰へ下手人を取りに來たのだ。
彌助　そんならなんと云ふ。アノ殿樣の射さつしやれた矢が、おぬしの客の頭へ當つて
長兵　コツクリ往生、この態だ。
ト　死骸にかぶせてある蒲團を退ける。喜助、やつしにて、頭を手拭にてグル〳〵卷きにして死んで居る。皆々これを見て恟り。
三五　すりや、若殿の數矢が外れて……ムウ。
ト　當惑のこなし。宅左衛門、作右衛門もこなし。
宅左　誠にこれが珍事ぢやよう。
作右　三五兵衛どの、こりや、どうせうと思はつしやるぞ。
三五　申さば、人の一命に係はつたる儀。こりや一大事が出來いたし參つた。
作右　イヤ、一大事どころはござりませぬ。三五兵衛どの、一體今日の始末は、おてまへが付添ひ召されたではござらぬか。
宅左　數矢の外に外れ矢があつて、斯樣な事が出來いたし

たを、なぜとくと吟味めされぬ。
ト三五兵衞、こなしあつて
三五　いかにも、その儀は拙者が不念。併し、間數を隔てましたる場所へ、外れ飛んだ矢尖、一命に係はる程の儀とは、思ひがけない。
ト思案する。宅左衞門、長兵衞、目まぜして
宅左　イヤサ、一命に係はらうが、係はるまいが、怪我過ちが出來いたせば、即ち若殿のお名の出まする事でござる。
伴右　町人でも大名でも、命に二つは無い道理。なんとか申しなだめ遣はさるゝがようござる。
長兵　コレサ／＼、何もむづかしい事はない。この通り死んだ怪我人。此方は下手人さへ取ればよい。埒が明かずば此方から、代官所へ駈込む分の事。
三五　イヤ、待て、長兵衞とやら。其方が申し分、立てゝくれう。
長兵　そんなら何か、譯道を付けると云はつしやりまするか。
三五　いかやうとも致してくれる。先づ／＼、扣へて居やれ。
長兵　ちつとも早く頼みまする。
三五　サ、承知いたした。
ト此方へ來て、元南に囁く。元南、呑み込み
玄南　ア、成る程。
ト下座へ入る。
三五　イヤナニ、長兵衞、先づその死人、身共が検分いたさう。
長兵　アノ、お前樣が。
ト宅左衞門に思ひ入れ。
三五　疵の樣子を、とくと見せやれ。
ト寄るを、長兵衞、こなしあつて
長兵　イヤモ、腦天に血の多い若い者ゆゑ、あの通りになつて居ります。
ト蒲團を明け、ソツと見せる。三五兵衞見てこなし。玄南、出て來て
玄南　三五兵衞どの、御検分なされたか。
三五　玄南老、御覧の通りの怪我人でござれば、なんと、御療治をなされて遣はされぬか。
玄南　ア、成る程、承知いたしました。
三五　イヤナニ、長兵衞とやら。この死人をそれへ直せ

長兵　エ

三五　ハテ、爰へ持つて參れ。

長兵　さうして、なんとなされます。

三五　ハテ、諺に、死人は二十四時以内は、未だ呼吸を通はすといへば、療治を加へ、その上にては兎も角も。

長兵　エヽ、成る程死んでもまだ、息の通ひは致しまする。コレ、彌助、ちよつと其方を持つてくれ。

彌助　合點だ〳〵。

ト喜助が寐て居る戸板を、彌助と手舁きして前へ直す。

これは又、ひよんな事が出來て、アヽ、氣の毒な事だ。併し斯うなつた怪我人、耆婆扁鵲でも療治は屆くまい。滅多な事をして、毛を吹いて疵が直ればよけれど、アヽ、心元ない。

トこなしある。此うち玄南、大きなる艾を扇に載せ、持つて出る。長兵衞見て、恟りして

長兵　申し〳〵、そりや何をなされまする。

玄南　ハテ、鍼灸は命を司る。一旦なればこの灸にて、怪我人を試し見るのぢやわい。

ト喜助が足の上へ、右の艾を載せる。長兵衞、あわてて

長兵　アヽ、申し〳〵、滅相な。このマア大きな艾を、据ゑて堪るものでござりまするか。

三五　ハテ、苦しうない。ソレ、玄南老。

玄南　アヽ、承知いたした。

トそろ〳〵煽ぐ。長兵衞、彌助と顏見合せて思ひ入れ玄南、頻りに煽ぐ。喜助、足をヒク〳〵動かす

長兵　アヽ、コレ〳〵、ヂツとして……イヤサ、實に死んだに違ひござりませぬ。

ト喜助、ヒク〳〵とするを、長兵衞押へて

これはしたり、死んだ者が動くといふ事があるものか。ムウ、彌助、アヽ、不便や、此奴も迷うて居るなア。

彌助　それ〳〵、なんぼ死んだ骸でも、熱いは道理、尤もだ〳〵。併し、熱いといふも、ちつとの間、怖い夢だと思つて居やれサ。

ト喜助、又ムク〳〵となるを、彌助、長兵衞、無理に押へて

長兵　コリヤ……そこが男の辛抱ぢや。

ト玄南、やたらに煽ぐ。喜助、堪へかね、刎ね起きて

喜助　こりや堪らぬ。アツ、〳〵。

ト逃げ廻る。皆々恟り。

三五　ハテ、療治といふものもあればあるもの。
玄南　拙者が醫薬も、的中いたしました。
長兵　イヽヤ、療治が利いても疵が癒えねば、お定まりの膏薬代。
彌助　こりやア長兵衛が云ふのも聞えた。甦えつても頭は大疵。
喜助　この分では、濟まぬぞ〱。
三五　いかにもその疵口を、とくと洗うて。ソレ、宗吉。
宗吉　畏まりました。
　ト喜助が頭の手拭を取りにかゝる。
喜助　なにを。
　ト振り切る。ちよつと立廻りにて宗吉、喜助が頭の手拭を引ッたくる。
宗吉　今の灸で疵もさつぱり。痕さへ付かぬ化けの皮。ソレ、とつくりと御覧じませ。
　ト上の方へ投げやる。三五兵衛、喜助を見て
三五　そちや、料理人の喜助。
佐兵　南無三、こりや叶はぬ。
　ト下座へ逃げて入る。
長兵　なんの事だ。いま〱しい。

三五　怪我人が無事ならば、申し分はあるまいが。
長兵　サア、云ひ分があつても。
　ト宅左衛門皆々と顔見合せ
　仕方がござりませぬ。
三五　ハヽヽ。その筈の事。灸も只今の様にきけば、玄南老、よいではないか。
玄南　イヤモ、そこは又居合した宗吉、艾の功能が見えました。
宗吉　艾の次手に彌助、貴様達も、お相伴する氣はないか。
彌助　イヤモウ、磨でも見て、とつくりと据ゑませう。ナウ、長兵衛。
長兵　おれはこれから、山でも見て來ませうか……古いやつだが、とは云ふものゝ
　ト宅左衛門・こなしあつて
宅左　ハテ、何事も仕様は様々……イヤサ、様々の奴らが參つて、千太郎さまには、御退屈にございませう。
千太　イヽヤ、おりや今の奴が、大分をかしかつた。
三五　若殿には、最早桝屋方へお越し遊ばされるが、よろしうございませう。
千太　オヽ、行かう〱。

宅左　然らば、別當方へお入りあつて、お小袖を召替へられ、お越しあるが
伴右　よろしうござりまする。
千太　そんなら、皆の者。
皆々　先づお越しあられませう。
ト唄になり、千太郎、三五兵衛、女形皆々、宗吉付添ひ下座へ入る。彌助、長兵衛、宅左衛門、伴右衛門、殘り、合ひ方。
長兵　なんの事だ。折角うまくやらかした所を、エヽいまいましい。
彌助　さうして、アノ喜助めは、どこへ逃げて行つた知らぬ。
伴右　酢につけ粉につけ、邪魔になるは、あの笹野三五兵衛。その上、この頃國元より、鹿兒島十次兵衛、當地へ出府いたしたるも、大方彼の紛失の一品。
宅左　コレ。
ト押へて、こなし。
宅左　その儀も承り及んだゆゑ、即ち國元の家老中より、三五兵衛を押籠めに、申し付けろといふこの似せ狀。
ト懷より狀を出し
この狀を、國元から參つた狀と申して、若殿の前で、披露いたしては如何でござりませう。
伴右　イカサマ、これは上分別でござる。して、その狀を何者に
宅左　即ち、家來土手助に申しつけませう。
伴右　この上は、兎角小万が一件でござる。
彌助　申し、どうでこの上は、あの小万を、身請けといふやうな工面になされずばなりますまい。
長兵　外から手を入れぬうちに、人知れず體を拔けば、どうせうと自由な事でござりまする。
宅左　その賣買も御用金は、三五兵衛が預かりなれば、我れ／＼が自由にはならぬ、若殿の御用金。
ト伴右衛門、心付いたるこなしにて
伴右　幸ひな儀がござる。この度當所八幡宮へ、千島家より奉納の金子三百兩、後刻洲崎桝屋方にて、三五兵衛より、十次兵衛へ相渡すとの事。その金子、此方へ盜み取り、小万が身請け致したら、如何でござらう。
宅左　イカサマ、こりや好い手段でござる。
彌助　そんなら、その三百兩さへ此方へ來れば。
長兵　小万を身請けの一埒は、私しが請け込みます。

宅件　然らば、萬事は桝屋方にて。

長彌　お二人樣。

宅件　兩人、來やれ〳〵

ト唄になり、宅左衞門先に長兵衞・彌助、件右衞門、下座へ入る。通り神樂になり、向うより十次兵衞、袴羽織、大小にて、門平、若黨にて付いて出て來る。

十次　門平、向うが三間堂であらう

門平　左樣でござりまする。若殿樣は、あれにお入りなさるでござりませう。

十次　然らば、どうぞ三五兵衞に逢ひたいものぢやが。

ト矢張り通り神樂にて、本舞臺へ來る。下座より三五兵衞出て、十次兵衞を見て

三五　これは鹿兒島十次兵衞どの。

十次　三五兵衞どの、久々にて御意得まする。先づはおまへも御健勝にて、重疊に存ずる。して、若殿千太郎さまにも、御機嫌よろしうおわたりなさるゝかな。

三五　隨分御安全にお入りあられまする。今日は洲崎の桝屋と申すへお入りの筈。何は格別、先づこの度の御出府、誠に遠路の所、御苦勞に存じまする。

十次　これは〳〵、御挨拶にござりまする。

門平　三五右衞門さま、御機嫌ようお入りなされまするか。

三五　オヽ〳〵、門平、いつも達者で重疊々々。

十次　さてハヤ、其許にも江戶詰めの儀なれば、若殿當所に御逗留申すは、萬事お心遣ひでござらう。

三五　當所の御逗留も、下世話の申す智惠付けの爲。それで拙者をば、乳母のやうに思し召してござりまする。

十次　その儀についても、拙者この度罷り越しましたる仔細は、貴殿にもかねて御存じの通り、先達てお國元に於て紛失の龍虎の呼子、何卒詮議いたせよとある、家老中よりの內意でござれば、貴殿にもとく〳〵とお心に掛けられ下されい。

三五　より〳〵詮議は仕りますれど、手掛りとてもござりませぬ。朋友勝間源五兵衞は、武術の遺恨に依つてお暇を取り、當地へ罷り越し居るとの事。何を申すも拙者が胸一つ。さて〳〵心を痛めまするばかりでござる。

トこの前より、小万、おしも、後に出掛け居て

しも　三五兵衞さま、若殿樣がお召しなされてゞござんしたぞえ。

三五　ナニ、若殿樣がお召しなさるゝ。

ト立ちあがり、こなしあつて

三五　十次兵衛どの、大方洲崎へお越しなさるゝのでござりませう。

十次　拙者は桝屋方へ參り、お目見得を致すでござらう。三五兵衛どのにて御同道なされませぬか。

しも　イヽエイナア、三五兵衛さまには、アノ、若殿樣の御用があるといなア。

トこなし。

三五　それぢやに依つて、十次兵衛とのとも、御一緒に參るのぢやが。

しも　サア、それぢやに依つて、アノ、お前さん一人、呼び連れて來いと、若殿樣が云うてお出でなさんしたわいなア。

ト三五兵衛へこなし。十次兵衛、これを知らず

十次　三五兵衛どの、拙者はこれより八幡宮へ參詣いたして、洲崎桝屋方にて御意得ませう。先づ〳〵、其許お一人、お側へお越しなされい。

三五　左樣ならば其許樣は、八幡宮へ御參詣でござりまするか。

十次　萬事は後刻、桝屋方にて。

ト唄になり、十次兵衛、門平を連れ、下座へ入る。此うち小万出て居て

小万　三五兵衛さま、そこに居やしやんしたかいなア

三五　これは小万、國許の鹿兒島十次兵衛どのと申す仁と面談いたし居つたが、若殿がお召しとある。ドレ、參らうか。

ト行かうとするを、おしも氣の毒さうに

しも　アヽ申し、そのお呼びなさつたは、若殿樣ぢやござんせぬ。

ト愚圖々々云ふ。

三五　イヤサ、其方が若殿のお召しと申すゆゑ、參るのぢや。

しも　イエ、そりやなんでござんす。

三五　なんでとは

ト小万、こなしあつて

小万　アノ、若殿樣のお召しぢやと云うて、お前を呼びにおこしたは。

三五　ムウ、そんなら若殿のお召しではなうて

小万　わたしぢやわいなア。

ト三五兵衛、合點のゆかぬこなしにて

三五　さうして、其方の用とは。

小万　用事のある事ぢやないわいなア。

　ト三五兵衛の手を取つてこなし。三五兵衛、思ひ入れあつて

三五　ア、、コレ〳〵、其やうな、パッとした用事があるものか。よう思うても見たがよい。假初めにも、宅左衛門や伴右衛門が、小万々々と云ひたれば、二人が事を、必らず人に悟られぬやうに致したがよい。

小万　サア、それも合點でござんすが、アノ宅左衛門さまや伴右衛門さまといひ、一體好かんお方々。さうして、千太郎さま〳〵と云はしやんすが、あのお方は、何でござんす。

三五　ありや此方どもの、大切なる御主人。

小万　馬鹿らしい様に、何ぢややら嫌らしいお方なア。

三五　ぢやというて、御主人なれば、奉公が大切。もしや御用があらうも知れねば

　ト行かうとするを、小万留めて

小万　お前様、そんな事云うて、外で悪性せうと思うて。

三五　ハテ、いろ〳〵な事云うて迷惑かゝす女ぢや。

　トおしもこなしあつて

しも　ほんに、小万さま、お前へ届けてくれというて、そシこの

　ト封じ文を出す。小万、取つて

小万　小万さま参る渚より。

　ト讀まうとして、ちやつとこなし。

三五　小万、そりや何ぢや。

小万　サア、これは。

　トつかへる。三五兵衛、こなしあつて

三五　ハ、ア、聞えた。こりや其方が悪性の

小万　イヽエ、そんな文ぢやないわいなア。

三五　そんなら、ちよつと見せてたも。

小万　イエ、これはなア。

　トうぢ〳〵する

しも　ありや何でござんすわいなア。

小万　ア、コレ、それを云うては。

三五　見せられまい〳〵。てん〳〵の悪い事隠さうというて、おれを捕へて無理ばつかり。

小万　サア、さうではないがナ。

三五　なら、なぜ見せぬ。

小万　自然たい。

卜三五兵衞に抱きつく。此うち奧にて大勢
皆々　若殿のお立ちでござるぞ。
三五　アレ、若殿のお立ちの供觸れ。
小万　エヽ、つッとモウ。
　卜こなしあるを、おしも、押へて
しも　抱きつき次手に仲直りを
小万　そんなら、あそこへ行て
しも　指切りなさんせいなア。
　卜三五兵衞、思ひ入れあつて
三五　ハテ、いろ／＼な事を。
　卜唄になり、三五兵衞、小万を連れ、おしもも入る。
　ト下座より土手助、狀を持ち出し
土手　なんでもこの狀を、國から飛脚が來たと僞はつて、大勢の居る所へ持つて行けば、三五兵衞が身の上。さうださうだ
　卜下座より喜助出て
喜助　土手助さま、そこにござりましたか
土手　オヽ、料理人の喜助。して、最前の云ひ合せは、どうであつた。
喜助　イヤモ、すんでの事、生きながら火葬になる所でござりました。時に、お前に渡して置いた、夜講前の仕切りの〆め高、具に書いて置きました程に、これを宅左衞門さまに、上げて下さりませ
　卜懷より書出しを出して渡す。土手助取つて
土手　そんなら、この書付けをば、お旦那へ見せさへすればよいのか。
喜助　どうぞお世話樣ながら。
　卜この前より後へ門平出かけ、聞いて居て思ひ入れ。土手助、これを知らずに
土手　よし／＼、慥かに受取つた。これから此方の狀を持つて行つて、三五兵衞をしくじらせる手番ひ。喜助、われも來い。
喜助　一緒に行きませう。
　卜門平、ツカ／＼と出て、土手助が持つて居る狀に手をかける。土手助、恟りしながら
土手　ヤア、うぬは若黨の門平。こりやア何ひろぐのだ。
門平　イヤ、何もせぬが、いま後で聞いて居れば、何か怪しいその手紙、この門平に渡して行け。
土手　そんなら、わりやア後で樣子を。
門平　聞いたに依つて、その狀を。

ト取りにかゝるを、土手助、キッとなつて

土手　どつこい、さう吐かせば、この狀、われには渡されぬぞ。

門平　イヤ、おれが。

土手　何を小癪な。ソレ、喜助。

喜助　合點だ。

トこれより騷ぎの三味線になり、三人、右の狀を奪ひ合ふ。此うち土手助の懷より書出しも一緒に引出し、ゴッチャに揉み合ふ。三ッ四ッに引ちぎり、ト三人、揉み合ひにてよろしく見得になる。曲撥にて、この道具ぶん廻す。

造り物、平舞臺、見附け一面の塗り骨障子。上の方、折廻しの障子屋體。柴垣、手水鉢。下の方に唐紙、出入りあり、すべて洲崎、桝屋座敷の體。房野、おきち、おはる、三人立ちかゝつて居るを、おこの、宥めて居る。下の方に、彌助、やかましう云うて居る。所々に雪洞付きの大燭臺並べある。この見得、騷ぎ唄にて道具とまる。

この　マア〳〵、ようござんすわいなア。

女形　イエ〳〵、堪忍ならぬわいなア。

彌助　お前方、そりやアあんまり、理强いといふものでござります。

この　ハテマア、彌助どのも、靜かに云うたがよいわいなア。

房野　おこのさん、聞いて下さんせ。アノ彌助どのゝ、云ひやうが惡いによつて

三人　譯を聞くのでござんすわいなア。

彌助　おこのさん、高が斯ういふ譯でござります。あの子達は、今日一日の揚げで、爰の內へ來て居ながら、座敷をば勤めるが否ぢやと云はつしやりますに依つて、それでわしが、理窟を申しますのでござります。

三人　アレ、まだあのやうに、云うてぢやわいなア。

この　サア、ようござんすわいなア。彌助どの、お前も、云はしやんす理は聞えてあれど、この子達の云はしやんす事も、マア、譯を聞いたがよいわいなア。

房野　サイナア。いま彌助どのが云うてぢや通り、成る程今日は、一日の揚げになつて居るといふものゝ、座敷ばかり勤める藝者が、勤めやうが惡いと云うてぢやによつて

きち　それでわたしらが、腹立てるのでござんすわいなア
彌助　子供衆の機嫌さへ直れば、何も私しが方に、兎や角はござりませぬわいの。
この　彌助どのが、あゝ云うてなら、マア今日の事は、もう、これぎりに、水に流して下さんせいなア。
房野　なんの、お前の知らしやんした事ではなし、譯さへ云うたら、わたしらが方に、腹立てるといふ譯もないわいなア。
皆々　お前の手前も、ほんに氣の毒でござんすわいなア
この　なんのいなア。それならば皆樣も、機嫌よう、酒にせうぢやあるまいかいなア。
　ト奥より、早助、佐十郎、三四郎出て
早助　コリヤ〳〵、おこの、最前から座敷に小万が見えぬが、いづれへ参つて居るぞ
三四　太皷どもばかりでは、座敷が持てぬ。藝者ども、其方達も奥へ参つて
佐十　おこのも共々、お伽申してくりやれ。
この　畏まりましてござります。そんなら皆樣、わたしと一緒に、マア奥へ。
早助　早う参つて、お伽を頼む〳〵。
女形　そんなら、おこのさま。
この　サア、ござんせいなア
　ト合ひ方になり、おこの、おはる、おきち、房野、皆皆連れ立ち、奥へ入る。彌助、殘り、こなしあつて
彌助　ヤレ〳〵、よく世話を焼かせる子供衆ではある。
早助　彌助、其方が働らきで、あの小万を若殿に、どうやら斯うやら喰ひ付かした。
彌助　イヤモ、細工の仕上げは、これからでござります。
三四　兎角小万が、お側に居らぬには困り果てる。
彌助　それも私しが、曲尺を遣ひまして、いつともなしに、ずる〳〵はつたり、氣遣ひな事はござりませぬ。
　トばた〳〵にて向うより、土手助、返し前の狀の半分を持ち、走り出て、彌助に突き當り、倒りして
土手　ヤア、おぬしは彌助。
彌助　土手助、息を切つて、こりやアどうさつしやりました。
三人　慌しい、樣子は何事。
土手　最前、お旦那より受取つた狀の半分。
　ト右の狀を半分出して見せる。

皆々　ヤア〳〵。
土手　そこへ預けましたぞ。
　ト打ちつけて
うぬ、待ち居れ。
　ト一散に向うへ走り入る。皆々、恟りして
彌助　なんの事だ。
　ト云ひながら、狀の半分を取上げ、破れを見て
こりやア最前の、宅左衞門さまが仰しやつた、云ひ合せの狀の半分。
三人　ヤア。
彌助　こりやアおれも、行てやらずばなるまい。
　ト右の狀を持ちながら、一散に走り入る。皆々向うを見て
三人　とんと、譯が知れませぬ。
早助　この通りだ、宅左衞門どのへ。
　ト向う揚げ幕の内に
宗吉　サア、濱吉さま、早くお出で。
濱吉　今そこへ行くわいなア。
　ト三人、思ひ入れあつて
佐十　マア、ござりませう。

　ト三人入る。花やかなる唄になり、向うより宗吉、着付け羽織にて、濱吉、着流し、藝者の形にて出る。おつれ、仲居にて三味線箱を提げ、出て來る。
濱吉　宗吉さま、わたしは勝手を知らぬに依つて、初々しいわいなア。
宗吉　そりやその筈の事。併し女郎衆と違つて、藝者といふものは、座敷に依つて、結句樂しみになる事もあるさうな。
濱吉　併し、今日のお客は、どなたもお侍ひ樣ぢやと、おつねさんが云はしやんしたに依つて、どうやら氣が張るやうなわいなア。
つれ　なんのいなア、今のお屋敷樣は、結句、町のお方より、氣が通つて、野暮な事はないわいなア。
濱吉　それでも、初めて座敷へ出る事ぢやに依つて、宗吉さま、お前、よいやうに頼むぞえ。
宗吉　ハテ、何事も吞み込んで居るに依つて、おれに任して、あそこへお出で。
濱吉　そんなら、おつねさん。
つれ　マア、行かしやんせいなア。
　ト右の唄の切れにて、三人、本舞臺へ來ると、奥より

　　三五兵衞出て來る。宗吉、三五兵衞を見て
宗吉　これは三五兵衞さま、先程は、ろく／＼に御挨拶も致しませぬが、お早うお出で下さりました。若殿樣も、御入來なされましたか。
三五　先刻お入りなされて、奧座敷にて、只今御酒が始まつて居る。宗吉、おてまへは、仲町へ參つたではないか。
宗吉　左樣でござります。私しが仲町へ參りましたは、櫻屋から、今日初めて藝者に出まする、濱吉と申しまする上方者を、連れて參りましてござります。
三五　ムウ、その女が、藝者の濱吉とやらか。
宗吉　どうぞこれから、御贔屓になされて遣はされませ。
　　ト濱吉も、恥かしき體にて、默つて辭儀する。
三五　オヽ、贔屓いたさうとも／＼。幸ひ只今若殿樣にも御酒の最中なれば、その濱吉を、早うお座敷へ召連れて參つたがよい。
濱吉　イエ、わたしや、
宗吉　ハテ、なんでも座敷へ出て勤めるが、藝者の役ではないか。コレ、おつね、その三味線箱は、マア、跡からにして、この子を早く、お座敷へ連れましたがよい。
つれ　アイ／＼、畏まりました。

　　ト三味線箱を片脇へ置く。
濱吉　そんなら、奧へ行くのかいナな。
宗吉　おこのも、待つてなれば、マア奧へ。
つれ　サア、お出でなされませ。
宗吉　三五兵衞さま、後程お目にかゝりませう。
　　ト唄になり、宗吉、濱吉、こなしあつて、おつれも三味線箱を置いて奧へ入ると、奧にて
伴右　三五兵衞どのは、いづれへお出でなされたな。
　　ト云ひ／＼、蒔繪のしたる小さい手箱を臺に乘せて持つて出て
三五兵衞どの、これにお出でなされたか。
三五　これは／＼、伴右衞門どのでござるか。先刻より拙者も、御前のお持たせなされました、彼の泡盛にて大きに酩酊仕りました。それゆゑ、ちと保養の間でござりまする。眞平御容赦下されい。
伴右　イヤモ、その儀は拙者も御同樣でござる。若殿樣の無理強ひには大難儀仕るて。ハヽヽヽ。
三五　只今、拙者をお尋ねなされたが、何御用でござりまする。
伴右　その儀は卽ち、この金子の儀でござる。

ト持つて出た箱の蓋を明けると、中に百兩包み三ッ入れある

伴右　この金子は、この度、お國の大殿樣、御所勞に依つて、當所八幡宮は、鎌倉鶴ヶ岡と同社なれば、御病氣平癒の御祈禱料に、先刻、掛け屋方より持參いたしましてござる　この儀は江戸詰めの貴殿なれば、萬端貴殿のお取計らひになされ下されい。即ちこの金子、慥かにお手渡し致さうと存じて、持參いたしてござる。イザ、お受取り下されい。

ト三五兵衞に渡す。三五兵衞、取つて

三五　これは〳〵、御念の入りました儀でござる。この金子の儀につき、お國元より、大殿樣始め、一家中の御代參として、鹿兒島十次兵衞どのお越しにて、爰へ參らるる筈にござれば、後刻若殿千太郎さまへ、御披露の上にて、十次兵衞どのへ手渡し仕るでござる。

伴右　然らば、慥かにお手渡し仕つてござる。

ト右の箱を三五兵衞受取り、蓋をすると、奧にて大勢の聲にて呼ぶ。

皆々　三五兵衞どの〳〵、千太郎さまのお召しでござります。

三五　ハッ〳〵、只今それへ。

皆々　伴右衞門どの〳〵、若殿がお召しなされまするぞ。

伴右　ハッ〳〵、それへ參ります。

皆々　お早う、お出でなされい〳〵。

伴右　然らば、拙者は先づ御前へ。

三五　サヽ、お越しなされい。

ト騷ぎ唄になり、奧へ入る。引違へて奧より宗吉、おなかを連れ出て來て

宗吉　おれは殿樣のお歸りにつき、お船を拵らへさせに行くに依つて、隨分お座敷へ氣を付けてくれ。

なか　アイ〳〵、そりや隨分氣を付けませうが、誰れぞ男衆にでもさう云うて、おやりなされませぬかいなア。

宗吉　イヤ〳〵、大事のお客のお召しなさるゝお船、麁相があつては惡い。男どもを遣るより、おれが自身に、キッと云ひつけて來ねば、氣が濟まぬ。

トおなか、此うち、ぶら提灯を灯して

なか　そんならモシ、提灯をあげませう

宗吉　ほんに、イカサマ、提灯が無くちやアならねえ。どうでもてまへは、氣の付く者だ。コレ、おれが行つて來るまで、座敷を頼んだぞよ。

なか　おこのさんなり、わたしなり、隨分氣を付けて居りますわいなア。
宗吉　成る程、今での流行りッ子、如才もあるめえ。
なか　又あんな冗談ばつかり。
宗吉　ハヽヽヽ。ドリヤ、行つて來ようか。
ト騷ぎ唄になり、向うへ入る。おなかは奧へ入ると、合ひ方になり、奧より、三五兵衞、莨盆を提げ出る。跡よりおはる、おきち、房野、おこのも、連れ立ち出て
皆々　サアノヽ、來なさんせいなア。
ト皆々、よき所に下に居て
三五　おこのを始め、何ぢや、皆打揃うて、この三五兵衞に、用でもあるのか。
この　アイ、ちつとお前樣に、お話しがござりまするわいなア
三五　ムウ。おれに話しがあるとは
この　外の事でもござんせぬが、あの小万さんが、どうぞして殿樣の仰しやるやうに……仰しやる事をば、聞いてあげなさんすやうにはなるまいかと、いふ事ぢやわいなア。
三五　ムウ、そんならアノ小万が、若殿樣の御意に入つたに依つて、それで、どうぞして若殿樣の仰しやるやうに、小万がなればよいと云やるのか。
房野　外の藝者さんならば、わたしらも取持ちの云ひやうもあれど、あゝいふ氣立てな小万さん。
はる　ツイ應とは云はしやんせぬわいなア。
この　この樣の利くのは、お前樣より外はござんせぬわいなア。
三五　あの小万が、若殿樣の思し召しにさへ隨へば、あれは仕合せなれど、外の事とも違うて、なんぼおれが云ふ事でも、ツイ應とは返事はせまい。
この　それに又、あの意地惡の宅左衞門さまや、伴右衞門さまが、最前も云はしやんすには、あの小万が若殿樣を嫌といふのは、もしや御近習樣の中に、色でもあるので、あらう、氣を付けるがよいと云はしやんしたに依つて、それでわたしや、皆打揃うて、イエノヽ、あの小万さんに限つて、とんと色がましい事はござんせぬと云うたわいなア。
三五　オヽ、そりやよう云うてくれた。
この　サア、それぢやに依つて、もしやお前樣と小万さま

との譯を、二人が聞かしやんしたら、惡いぢやござりませぬかいなア。
三五　惡い段ではない、大騷ぎぢや。
この　それなれば猶の事、あの小万さまが、マア一旦、若殿樣に、ツイ應と口先でなりと、返事して上げなさんすやうに、よい思案はあるまいかいなア。
三五　おれが口から、譯も無いのに、ツイ斯う〱とは云はれぬ。どうぞ、よい思案はあるまいか。
ト此うち、おこの、いろ〱思案して居て
この　ほんに、よい智惠があるわいなア。
三五　おこの、よい智惠があるとは、どういふ智惠ぢや。
この　さればいなア、小万さまぢやというて、お前樣が、只斯う〱とばかり仰しやつては、なか〱ツイ返事はあるまいに依つて、お前樣に色があると云うてはどうでござんせうぞいなア。
三五　ムウ、おれに色があると云ふとは。
この　サア、お前樣が、誰れぞ藝者さんと色ぢやと仰しやりましたら、小万さんもお前樣との意氣張りで、あの若殿樣の仰しやる通りに、なりさうなものでござりますぞえ。
三五　成る程、こりやよい思ひ付きぢや。併し、その色ぢやというて置く藝者は、誰れにしたものであらう。
この　それもよい事がござります。最前爰へ見えた、今日始めての藝者さんが、ようござりませうわいなア。
皆々　ほんに、こりやよい思ひ付きぢやわいなア。
三五　そんなら、その濱吉を、早う呼んで頼むがよいではないか。
この　それ〱、小万さんの知らしやんせぬ先に、その譯を頼んで置くがようござりますわいなア。
三五　ちつとも早く、爰へ呼んで來てくれぬか。
皆々　アイ〱。そんなら、呼んで來ようわいなア。
この　皆さん、マア何にも云はずに、わたしが用があると云うて、爰へおこして下さんせえ。
皆々　そりや、合點ぢやわいな。
ト合ひ方になり、三人、奥へ入る。三五兵衞、こなしあつて
三五　おこの、段々と其方の世話、忝ない。いつぞやこの内へ參つた時、フッとあの小万と馴染みになつてからは、物堅い國屋敷の、朋友どもの手前も包み隱し、人に知らさぬも、全く其方の世話ゆゑと、禮は詞に盡されぬ。今

云ふ通りに、一旦はあの小万が、若殿様のお心に随うてさへくれゝば、又外の思惑も、氣遣ひないと云ふやうなものではないか。

この　小万さまが、若殿様の仰しやる事をば、聞いて上げなさんしたら、わたしらも心遣ひがないといふものでござりますわいなア。

ト奥にて

濱吉　アイ〳〵、わたしを呼ばしやんしたかえ。

ト云ひ〳〵、奥より出る

おこのさま、わたしを呼ばしやんしたは、何の用でござんすぞいなア。

この　オヽ、濱吉さん、よう來て下さんしたなア。ちつとわたしや、お前に話しがあるわいなア。マア、下に居て聞いて下さんせいナア。

濱吉　おこのさん、話しとは、何の話しでござんすぞいなアサ。

この　サア、その話しと云ふはナ。

ト三五兵衞へこなしある。

濱吉　話しとはえ。

この　話しといふは……話しでござんすわいなア。

濱吉　何の話しでござんすぞいなア。

この　三五兵衞さま、こりやお前様から、お話しなされませいなア

濱吉　おこのさん、そんなら話しといふは……あなたがお話しなされるのかいなア。

ト三五兵衞、こなしあつて

三五　オヽ、其方は、最前來やつた藝者の濱吉ぢやの。話しといふのは、外の事でもない。ちつと其方に折入つて頼みたい事があるわいの。

濱吉　わたしに頼みがあると仰しやりますのかえ。

この　濱吉さん、ようとつくりと、聞いてあげなさんせいなア。

濱吉　さうして、マアその頼みとは、何のお頼みでござりまするえ。

三五　マア、下に居やれ。

ト合ひ方になり

イヤ、外の事でもない。身共が其方に頼みといふは。サア、ちとさしかゝつて、難儀な事があるが、それでどうぞ其方を。

ト濱吉の顔を見て

こりやどうも云はれぬ。おこの、てまへがどうぞ。

この　イエ／＼、直々に仰しやらねば、解りませぬわいなア。

三五　でも、侍ひの口からは、あまり馬鹿々々しうて、云ひ憎いが。

この　なんの、世間にない事ではなし。

三五　サア、その様子は、小万と身共とは、サア、ちつと譯があつて、久しう馴染んで心安う……致し居る。所で、ちと、よんどころない譯合ひがあつて

濱吉　どうでござりますえ。

三五　そこで、急に其方を身共が

濱吉　わたしを、お前様の

三五　サア、其方を身共が

濱吉　どう致しますのでござりますえ。

三五　暫らくのうち、マア、表向きばかりでも、この三五兵衛が、ナウ、おこの。

ト濱吉、早う云へといふこなし。

三五　小ッ恥かしながら、濱吉……アノ、色になつてたもるまいか。

トちやつと扇にて顔を隠す。

濱吉　エ、

トこなしある。

この　もう、この上は、わたしが申しますわいなア。濱吉さん、高で斯うぢやわいなア。三五兵衛さまのお身に、ちつと御難儀な事があつて、お前を急に色にせねばならぬ譯がござんす。お前も思ひがけもあるまいけれど、どうぞ色になつてあげさしやんすりや、わたしも三五兵衛さまに頼まれた甲斐があるわいなア。お侍ひ様のきつい御難儀なされておいでなされる御様子。それでその事をお前に頼むのぢやわいな。

濱吉　おこのさん、お前もマア、わたしや、やう／＼とこの間より、櫻屋の抱へになつて、今日初めて内方へ來て、お客の勝手も知らぬ者が、嘘にもマア其やうな、戀ぢやのなんのといふやうな事が、云はるゝものかいなア。

三五　おこの、こりや濱吉の云ふ所が尤もぢやぞや。

この　それぢやというて、外の者では、とんとゆかぬ頼みでござりますわいなア。

三五　コレ、濱吉、武士が折入つて頼むのぢや。どうぞ得心して、頼まれてたもれ／＼。

濱吉　それはマア、ほんに困つた事でござんす……わたし

は又、三五兵衞さまがお話しがあつて、頼みたいと仰しやるのは、コレ濱吉、其方を呼んで頼みといふは、どうぞこの頃流行る、新唄を教へてくれと仰しやるやうな事ならば、そりや藝者の事ぢやに依つて、ツイあいと云ひますけれど……色ぢやのなんのと、つッとモウ。

この　常から物堅い三五兵衞さまが、あのやうに云うてお出でなされての事。どうぞ聞入れて上げなさんせいなア。

三五　どうぞ聞入れてたもらぬか。コレ、頼むわいの。

濱吉　其やうに仰しやります事ぢやに依つて、ほんの今宵表向きばかり。後で又、ひよつと小万さまに、恨みを受けては、どうもならぬに依つて、おこのさん、お前が得心ならば、頼まれて上げるわいなア。

この　そんなら、頼まれて下さんすかえ。

三五　承知いたしてくれるか。

濱吉　表向きばかりぢやが、おこのさん、合點かえ。

この　そりや承知して居るわいなア。申し、三五兵衞さま、お前さんも又、あの子の頼む事は、聞いて上げなさんすでござりませうな。

三五　ハテ、何なりと、承知ぢや／＼。

ト この時、奥にて小万

小万　おこのさん／＼、どこに居やしやんすぞいなア。

ト云ひ／＼出る。三人、思ひ入れ。

申し、おこのさん、先刻にから、わたしや、お前を尋ねて居たわいなア。

ト三五兵衞を見て

三五兵衞さま、お前も爰に居やしやんしたかえ

ト側に坐る。三五兵衞、こなしあつて

三五　小万、そちやなぜ若殿のお側には居ぬぞ。

小万　お前も、よう思うても見て下さんせ。あの愚かしい若殿樣を、意地惡の宅左衞門さまや、伴右衞門どのが勸めて、わたしに惚れたと嫌らしい事ばかり。どう側に居られうぞいなア。それに又、お前は何ぢややら、ろくろくにわたしが側に、片時も居て下さんせぬは、何ぞお腹の立つ事があるかえ。こちや何にも腹立てられる覺えはござんせぬわいなア。

ト莨盆を取つて莨のむ。此うち、おこの、濱吉にこなしある。濱吉は、小万、手前を思ひ、奥へ行かうとするを、三五兵衞見て

三五　コレ、濱吉、大事ない／＼。爰へおぢや。

ト無理に濱吉を引留め

イヤ、小万、最前云はうと思うたれど、若殿の御前ゆゑ、何事も云はなんだが、今この三五兵衛が云ふ通り、なんであらうと、若殿のお心に隨うたがよい。

小万　イヽエ、なんぼわたしがやうな者ぢやというて。

　トこなしあつて

おこのさんといひ、濱吉さん、皆様も知つてなれば、隱す事はなけれども、お前の云ひつけ、人目を忍んでわざと外々しうして居ても、どうマア若殿樣のお心に隨はれませうぞ。お前も又、外で悪性の事などしなさんした事でもあつた時には、聞く事ぢやござんせぬ。わたしもキツと愼んで、ほんに芥子ほどの

三五　イヤ、その芥子は散り易い。

小万　エヽ。

三五　小万、おりや外に色が出來たぞや。

小万　なんと云はしやんすえ。

三五　色が出來た。

小万　エヽ、そりや誰れとえ。

三五　外でもない。この濱吉といふ、可愛い新らしい藝者と、サア、とつくりと云ひ交したわいの。

小万　アノ、お前、濱吉さんに。

　トむつとして、又ちやつと思ひ入れあつて

三五兵衛さまとした事が、わたしに氣を持たさうと思うて、アノまざ〳〵しい顏で、ても、きつい嘘を。

三五　イヽヤ、眞實、嘘ではない。

小万　アレ、矢ッ張り眞面目で嘘を云はしやんす。オヽ、憎やの。

　トおこの、こなしあつて

この　イエ〳〵、小万さま、嘘ではござんすまい。どうやらほんまのやうなぞえ。

小万　おこのさまとした事が、お前まで矢ッ張りわたしに。ホヽヽヽヽ。嘘といふ證據はナ、よう〳〵今日ござんしたアノ濱吉さん、それにマア三五兵衛さまの、みす〳〵な事を。

三五　小万、嘘と思ふなら、いま目の前で濱吉、ちよつと爰へ。

　ト濱吉、こなしあるを

ハテ、大事ない、爰へ。

濱吉　それでも、小万さまの手前。

三五　これサ、小万は通り者ぢやわいの。

　ト小万、ツンとして居る。

濱吉　そんなら。
　ト側へヒッタリと寄り添ふ。
おこのさま、お前方にまで隱して居たのは、三五兵衞さまと小万さまの、譯のある事は露知らず、惜からぬ殿御と思うて、ツイ云ひ交しましてござんす。何事も小万さん、堪忍して下さんせ。
小万　エヽ、何の事ぢやぞいなア。アタ自烈たい。同じ内の藝者だてら、殊に新子のお前が、わたしが云ひ交して居る三五兵衞さまと、譯があるとは、あんまりな踏みつけやう。よい〳〵、三五兵衞さまがその氣になりや、わたしも又
三五　若殿樣に靡く心になつたか。
小万　そりやわたしが勝手にしますわいなア。
三五　成る程、勝手に致したがよい。アヽ、どうやら最前から、大きに醉ひが出た。濱吉、あの一間へ來て、ちと介抱してたもらぬか。
　ト「雉子」の唄にかゝる。
濱吉　そんなら、あの一間で。
三五　サア、醉醒ましにしつぽりと。
濱吉　三五兵衞さま。
　ト三五兵衞が手を取つて行くを、小万、ちよつと留めて
小万　申し、いよ〳〵お前は。
　ト奥にて
〽あれ蟲さへも、番ひ離れぬ揚羽の蝶。
三五　番ひ離れぬ我れ〳〵二人。
濱吉　それぢやというて。
　ト思ひ入れあるを、三五兵衞、ちよつと引廻して、濱吉の手を持ちかへる。小万
小万　コレ。
　ト煙管にて、濱吉の裾を押へる。三五兵衞「ハテ」と振り離す。小万
小万　ムウ。
　ト俯向く。
三五　サア、おぢや。
　ト唄になり、三五兵衞、濱吉を連れ、一間へ入る。おこの、小万を見て思ひ入れ。奥より房野、おきち、おはる出て
房野　小万さま、樣子はあそこで
三人　聞いて居たわいなア。

房野　コレ……聲が大きいわいなア。

小万　ト押へる。小万、こなしあつて
皆様の思惑も恥かしいけれど……ほんに、女と云ふ者は、ナア、おこのさま。

この　お前の心は

小万　風吹かば沖津白波

この　ナニ、風吹かば、沖津白波

三人　龍田山。

小万　こりや、醉はにやならぬわいなア。

ト唄になり、小万、思ひ入れあつて、おこの皆々奥へ入る。跡合ひ方になり、下の方の襖を明け、宅左衛門、ソロ〱と出て來て、懐より三百兩の金を出し、あたりを見廻し、こなしあつて

宅左　笹野三五兵衛が預かりの金子三百兩、床の間へ直してあつたを幸ひ、盗み出しては來たものゝ、大勢の人目、ハテ、どうぞ早く土手助めに、渡してやりたいものだが。

ト奥にて手を叩く。大勢の返事の聲する。これにて恟りうろたへ、金を抱へて隱し所に困る、思ひ入れ。この前より十次兵衛、下の方の襖を明けて窺ひ見て居る。宅左衛門、うろたへ、足許にある三味線箱に躓づき、思ひ入れあつて

ムウ、幸ひのこの箱。

ト奥にて頻りに手を叩く。宅左衛門、うろたへながら手早く三百兩を箱の中へ入れ、元のやうにして

ちつとの間先づ斯うして。

ト奥へ入る。十次兵衛、ソツと出て、上の方の手水鉢の小石を三つ取つて來て、三味線箱を明けて、宅左衛門が隱せし三百兩の金を出し、跡へ小石を入れて、又元のやうにして右の三百兩の金をちよつと見て思ひ入れ。合ひ方になり、奥へ入ると、一間より濱吉、ソロソロと出て、手水鉢にてこなし。奥よりおこの、小万、出て、顔見合せ

この　申し、渚さま。

濱吉　小万どのゝお庇ゆゑ

小万　お前のお望みの通り

濱吉　日頃の思ひを

この　まんまと首尾よう

小万　この間二軒茶屋で、始めてお目に掛りました渚さま、三五兵衛さまとの云ひ號けで、はる〱とこの江戸まで

も、嬉うてお出でなされました、お前さまのお志しがおいとしさに、おこのさんとの云ひ合せ

この　お少ひさいからの云ひ號けで、三五兵衞さまがお顏も御存じないを幸ひ、あなたを藝者に仕立てました今日の仕儀。

濱吉　なんとお禮を云はうやら、死んでも忘れは置かぬぞえ。

この　小万さまの志し、粹なお捌きも

小万　里の手管、物堅い三五兵衞さま、殊にわたしといふ者があるゆゑに、ツイ一通りでは得心さしやんすまいと思うて。

濱吉　お前方のお世話で、三五兵衞さまのお目にかゝつて、優しいお詞、嬉しうござりますわいなア。

この　イヤ申し、お前のお身の上も、人に知られたら惡うござんせう。

小万　ほんに、それ〳〵、今日はマア、藝者の濱吉で

この　わたしが直ぐに佐賀町まで。

濱吉　これといふも、皆おこのさまのお世話ゆゑ。

この　サア、此やうにしたればこそ、釋迦でも參る云ひ合はせ。

三五　隱らす樣子は、爰から聞いた。

ト障子を明ける。

皆々　エヽ、三五兵衞さま。

三五　よう、おれを騙したなア。

小万　堪忍して下さんせ。

この　渚さまのお心根を。

三五　ハテ、氣扱ひではあつたぞ。

ト障子を閉す。

この　そんなら、小万さま。

小万　氣を附けて行かしやんせ。

ト唄になり、おこの、こなしあつて濱吉を連れ、向うへ入ると、小万、こなしあつて

ほんに、渚さまの頼みゆゑ、二世までも云ひ交した、三五兵衞さまに取持つて、現在眼の前で、寐さすのも浮世の義理。なんぼう心で諦めても、ひさげの水の湯になる譬へ。これを思へば女ほど、淺ましい愚痴な者はないわいなア。

トこなし。この時、奥より皆々出て來り

千太　小万は、爰に居たぞ〳〵。

宅左　小万、最前から若殿がお尋ねなされた。

千太　小万が居たので、落ちついた
宅左　ソレ、お杯を、早う〳〵。
皆々　アイ〳〵。
　トおなか、おしも、杯持つて出る。作右衛門、こなしあつて
作右　千太郎さまへ申し上げまする。お國許より鹿兒島十次兵衛、若殿樣へお目見得に伺候仕りました
宅左　次手ながら、この席へ召されまするか、よろしうござりませう。佐十郎どの、ソレ、十次兵衛どのを、これへ同道召されい。
　ト奥にて十次兵衛
十次　アイヤ、十次兵衛、即ちそれへ推參仕りませう。
　ト合ひ方になり、十次兵衛出て
先づは若殿樣にも、御機嫌ようお渡り遊ばされ、恐悦に存じまする。
千太　十次兵衛、遠方の所、よう出て參つた。國許の親人は、機嫌はよいか。
十次　ハッ、大殿樣御儀は、この程、聊か御所勞にあらせられますれど、典藥ども相詰め居りますれば、追ひ〳〵御全快の、お知らせでござりませう。

千太　サア、これで此方の用は濟んだ。マア〳〵、小万、おれが側へ參れ。
　ト小万、矢張り離れて居る
女皆　小万さま、マア、あそこへ行かしやんせいなア。
小万　わたしや酒に醉うて、いつそ切ないわいなア。ちつとの間、堪忍して下さんせいなア。
　ト云ひ捨て、小万、こなしあつて、奥へ入る。
十次　宅左衛門どの、今のは小万と申すのでござるかな。
宅左　左樣でござる。若殿のお氣に入りでござる。これに居るのが、同じ藝者の、おはる、房野と申す、飛切りでござる。
十次　イヤそ、いづれを見ても美しいもの　拙者も國許の出崖に、なんぞ江戸の面白い手事を、一曲所望いたしたいが、なんと宅左衛門どの、如何でござりませう
千太　イカサマ、こりや面白からう。ソレ、二人の者に、三味線を彈かせい〳〵。
はる　不調法なるわたしが三味線は、お免しなされて下さりませいなア。
十次　若殿の御意ぢや。早う彈いたがよい
房野　其やうに仰しやります事なら、彈きは彈きませうけ

れど、そんならちよつと三味線を。
　ト立つを止めて
十次　コリヤ／＼、さう云うて、爰を抜ける事、ならぬならぬ。
　ト十次兵衛、下の方にある三味線箱を取つて来て
三味線が爰にあるではないか……サヽ、早う聞きたい聞きたい／＼。
　ト件の三味線箱を持ち出す。宅左衛門、悄りして、三味線を押へて
宅左　アヽ、イヤ／＼、十次兵衛どの、左様ならば、アノこの三味線で
十次　一曲承はりたい。
皆々　所望ぢや／＼。
　ト宅左衛門、悄りして
宅左　アヽ、コレ／＼、何れも、どう致したものでござる。若殿の御前でござる。お静かになされぬか。
十次　サア、若殿の御前ゆゑ、弾きまするがよいではござりませぬか。ナウ、伴右衛門どの。
伴右　左様でござる。若殿の御意とあらば、何ぞ面白い、わつさり致した賑やかな唄が、ようござりませう。

皆々　サア／＼、所望ぢや／＼。
　ト宅左衛門、気を揉んで
宅左　これは又情ない三味線ではあるぞ。どこの国にか、芸者に三味線を弾かせるといふやうな、無理な事があらうか。ナウ、おはる。
はる　サア、わたしも、晴れがましいけれど、あのやうにお好みなされての事。房野さん、ちよつと弾いてお聞かせ申しませうかいなア。
　ト箱の蓋を取りにかゝるを、宅左衛門、留めて
宅左　コリヤ、待つた／＼、早まるまい。
はる　イヽエイナア、三味線を弾くのぢやわいなア。
十次　これや、一段とようござらう。
皆々　所望ぢや／＼
宅左　これは又、情ない事ではある。
　ト頭を抱へ、術なき思ひ入れ。
伴右　コレサ、宅左衛門どの、若殿の御意ならば、兎角御機嫌のよいが、第一でござるがや
宅左　これはしたり、貴殿は何も御存じないからだ。このナ……ソレ、金、イヤサ、かね／＼御存じの通り、拙者は三味線が大禁物……オヽ、さうぢや／＼。イヤナニ、

十次兵衞どの、有やうは斯樣でござる。拙者、生れ付きましてから、三味線の音を承ると、卽座に氣を取失ひ、悶絶仕りまする。もし又、左樣な儀がござつては、座興の妨げにも相成りまするではござらぬか。是非音曲がお好みとならば、鼓、太鼓、笛、何なりとも仰せ付けられまするがよろしうござる。三味線の儀は、御容赦下されい。

十次　すりや、なんと御意なさるゝ　宅左衞門どのには、三味線が、お嫌ひとな。

宅左　イヤモ、見るも嫌ひでござる

十次　遊里へお供にお越しなされ、宅左衞門どの、三味線がお嫌ひとは……ア、御不自由な儀でござる。

宅左　御推量下されい。

十次　地震嫌ひ、雷嫌ひなどは承はり及んだが、三味線嫌ひとは、ハテ、珍らしい儀でござる。ハ、、、、、、。

ト笑ふと合ひ方になり、奥より三五兵衞、最前の金の箱を持つて出て

三五　十次兵衞どの、これにお出でなさるゝか。この度若殿樣、當所深川八幡宮へ、御祈禱料に御奉納の金子三百兩、御前にてお受取り下されませう。

千太　十次兵衞、其方、よいやうに取計らうてくれい。

十次　ハツ、委細畏まりましてござります

ト件の金箱を前へ直す。宅左衞門、こなしあつて

十次　三五兵衞どの、宅左衞門どの、ちよとお立合ひ下されい

宅左　承知いたしました。

ト兩人、立合ひ見ろこなし。十次兵衞、金の箱の蓋を明けると、中に金入つてある。宅左衞門、恟りして

宅左　ヤア、こりや思ひがけなき、この中に三百兩

十次　慥かに受取り奉りました。

ト蓋なして納める。宅左衞門、合點ゆかぬ思ひ入れ

宅左　ハテ、合點のゆかぬ。この中に最前の三百兩が……ハテ面妖な

ト思ひ入れ。十次兵衞、こなしあつて、

十次　イヤモ、得て斯樣な時に、箱の蓋を明けると、中にある一物が、紛失いたして居ると申す儀も、古いやつではござらぬか。

宅左　ハテ、面妖な。最前慥かに。ムウ

十次　箱の蓋を明けると、こりや中に金子はと……サア、こりやこの三五兵衞どのが云はねばならぬ所を、宅左衞

門どのが今の悔り。
宅左 ヤ。
十次 こりや勝手が違ひまして、新らしうござる。
ト宅左衛門こなしあつて
宅左 ハテ、面妖な事ではある。
ト件の三味線箱に心付き、それト手を掛けるを十次兵衛、留めて
十次 アイヤ、宅左衛門どの、其許は三味線は、お嫌ひではござらぬか。
宅左 ヤ。
ト悔り。
十次 見るも嫌ひ。もし、ひよつと音を聞くと、忽ち氣を失ふと、只今仰せられたではござらぬか。
宅左 サ、それは。
十次 もしや又、この箱の中をば、御覧なされたら、又悔り。
宅左 ヤア。
十次 氣を失はつしやれたら、お座が白けまするではござらぬか。
宅左 ウム。

十次 ト思ひ入れ、
但し又、三味線を出しませうか
宅左 サア、それは。
十次 ハテ、それはきついお嫌ひでござるな。ハヽヽヽ。
ト笑ふと、バタ／＼にて、向うより土手助、狀の半分を持ち、一散に走り出て
土手 ヤア、お旦那、宅左衛門さま。
ト息を切つていふ。
宅左 ヤア、其方は土手助。
伴右 その一通は。
土手 お國許より參つたる書狀。
ト出す。皆々こなし。
宅左 ナニ、お國許よりの書狀とは、ドレ。
ト取つて
伴右衛門どの御覧なされ。こりや、お國許の御家老、堤惣左衛門どのよりの飛札。
伴右 ドレ。
ト取つて見て
笹野三五兵衛を押籠め申しつくるとある狀の文言。
三五 ナニ、某を押籠めとは。

宅倅　お國許より申し越した。

ト十次兵衛、こなしあつて

十次　伴右衛門どの、その書面、拙者も拜見。

伴右　ソレ、御覧なされい。

ト渡す。十次兵衛、見て

十次　ナニ〳〵、この度、笹野三五兵衛事、申しつくる仔細あるに依つて、

ト狀を見て

こりや、半分が切れてござるが、押籠めに申し付けいとは、どこに書いてござるな。

宅倅　ヤ。

土手　その書狀は、飛脚から受取つて參る道、若黨の門平めが、引裂きました。

トばた〳〵にて、喜助、走り出る。門平、追ひかけ出て、ちよつと立廻りあつて直ぐに本舞臺へ來て

門平　いづれも樣、怪しい狀を、此奴めが。

ト立廻りにて土手助、眞中より門平が持つて居る狀を引ツたくり

土手　サア、これで殘らず揃つたこの狀。

門平　それを。

ト立ちかゝるを、十次兵衛押へ

十次　門平、待て。

門平　でも、怪しいあの狀ゆゑ

十次　ハテ、若殿の御前、扣へぬか。

門平　ハツ。

ト扣へる。土手助、喜助も思ひ入れ。

宅左　何はともあれ、その書面、揃ひしとあらば、引合せて御覧なされい。

ト破れし狀を一つ〳〵に繼ぎ合せる。

伴右　ドレ、身共が繼ぎ合はして。

ト狀を見て

飛札を以て申し入れ候ふ、若殿千太郎さま、江戸表御逗留につき

ト宅左衛門も繼ぎ合せの狀を讀んで

宅左　この度、笹野三五兵衛事、申しつくる仔細あつて……

……サア、この跡が肝心でござる。

土手　オツト、ござります〳〵。

ト破れを出し、繼ぎ合せ

金一兩二歩、十二日の夜、同伴右衛門さま分、外に玉燒茶碗蒸し。十一日同三歩、船賃駕籠賃。

喜助　又二兩二歩、十日藥者どもへ、御祝儀。

土手　差引〆めて七兩三歩十貫、

喜助　右の通り御座候ふ、以上。

ト一つ〳〵に出して讀んで見て

土手　伴右衛門さま、宅左衛門さま。

喜助　こりやア何の事だ。

伴右　そんなら最前の一通は

土手　後先破れて、どこへやら、思ひがけない恥の書出し。

喜助　どうぞよろしうお頼み申しまする。

土手　エヽ、大べら坊め。

ト突き倒す。

宅左　イヤ、譬へ跡がちぎれても、讀ますと知れた、三五兵衛が身の上。

伴右　國許へ押籠めるとある、狀に違ひない。

三五　文言揃はぬ一通にて、この三五兵衛が身の上とは。

宅左　ハテ知れた事、我が身の上の事だに依つて、若黨の門平に、引破らせたお國の狀。

宅作　なんと異論は、あるまいな。

十次　イヤ、そりや證據には罷り成らぬ。

宅作　なぜ證據には成りませぬ。

十次　申さば大事のお國の書狀。中間の土手助が、何ゆゑ所持して參りました。

宅作　ヤ。

十次　殊に破れて跡なき書狀、たつて詮議とお云やれば、其ちぎれ〳〵の一部始終、家老中へ達しまする。

宅作　サ、それは。

十次　と、サア、申さば當所は遊里の儀、何事もこの座ぎりに、この十次兵衛が預かりませう。

宅作　兎も角も、勝手にさつしやい。

十次　然らば、拙者はこれよりお暇。

三五　若殿樣にも、最早御歸館。

千太　屋敷まで歸る道々、女ども、送つてくれ。

女皆　そんなら、殿さま。

宅作　エヽ、コレ、思へば。

ト寄らうとするを十次兵衛、三味線の箱を楯にして

十次　三味線を彈かせませうか。

宅左　イヤ、心得ぬは、箱の內。

ト箱を引くり返すと、中より最前の石、ガラリと、出る。

伴右　ヤア、この石は。

十次　思ひがけない、三味線の
三五　かはつた所に
宅左　入つたは、慥かに
ト十次兵衛が金に手をかけるを、突き退け
十次　アイヤ、何れも、終日御造作。
宅作　うぬ。
ト十次兵衛にかゝるを、突き廻す。土手助、門平を退けて立ちかゝるを、門平留める。伴右衛門、キッとなるを、三五兵衛留める。十次兵衛、宅左衛門を留めながら
十次　よい楽しみを仕つた。
トよろしく、　　　　　　　　ひやうし幕

## 二　幕　目　　大和町貸座敷の場

役名――若黨、八右衛門。肴屋、久六。酒屋、佐兵衛。蕎麦屋かつぎ、權太。貸物屋、善六　家主、德右衛門。男藝者、繁次。粂本のお園。廻し男、彌助。勝間源五兵衛。

造り物、一面の平舞臺。見附け鼠壁、唐紙の押入れ、納戸口。上の方、筋違ひに障子屋體。橋がゝり板塀。いつもの所に門口。よき所に炬燵の矢倉ばかり、大和風呂の七輪直し、すべて大和町貸座敷の體にて、八右衛門、淺黄木綿の襦袢一つにて、庭箒を持ち、掃除して居る、てんつゝにて、幕明く。
八右　ヤレ〳〵、十日振りで箒を持つたら、すさまじい埃であつた。まづ一服せうわい。
ト汚ない莨盆を持つて出て、火入れを見て、また七輪の下を探し
南無三、火が消えた。
ト火打ち箱を取つて来て、火を打ち
こりやア切り火では、煙草が一しほうまい。
ト火を打つて煙草をのむ。在郷唄になり、向うより佐兵衛、久六、權太出て来て
佐兵　また留守で無ければよいが。
久六　オヽ、こりや門口が開いてある。
ト皆々内へ入る。

佐兵　お宿にござりまするか

八右　オヽ、横町の魚七、河岸の酒屋か。

權太　イヤ、おりや、蕎麥屋でござります。昨夜の鉢が明いてござりまするかな。

八右　そこらにあらう。探して去なつしやれ。

權太　ハイ〳〵

ト奥へ入る。

久六　八右衞門さま、この間の肴代は、どうでござりまするな

佐兵　どうぞ酒代も、御せいらくなされて下さりませ

八右　サア、旦那へさう云うたれど、ろく〳〵に返事さへさつしやれぬ、

ト奥より權太、蕎麥の箱を持つて出る。

權太　モシ、蕎麥代を下さりませ。

久六　そりやアどうでござります。現金の相對で賣りました肴代、今日やらう、明日やらうでは、ナウ酒屋。

佐兵　さうぢや。お馴染みもない事に、さう〳〵は待たれませぬ。今拂つてもらひませう。

八右　そりやア貴樣達が無理といふものだ。

兩人　どうして、わたし等が無理でござります。

權太　モシ、蕎麥の錢はどうでござります。

八右　ハテ、おら一人して飮み食ひはせまいし、さうせぶつてどうするのだ。

佐兵　でも、掛けたのはお前、それで乞ふが、なんで無理ぢやな。

權太　蕎麥代を下さりませぬか。

八右　でも、おらは知らないワ。

ト障子屋體の内にて

源五　小万々々、いづれへ參つた。コレサ、小万

八右　ヤア、旦那がお目が覺めたさうな。

ト行かうとする。

權太　コレ、蕎麥代はな。

八右　エヽ

ト見事に取つて投げ、障子を開く。内に源五兵衞、垢付きたる黑羽二重の着流し、中月代にて、晝寢して居る體。但し側に置いた挾み箱、麁相な刀懸けに大小かけてあり。

旦那、今お目が覺めましたか。

ト源五兵衞、八右衞門が顏をキッと見て、あたりを見廻し

源五　そちや、家來の八右衛門。爰は矢張り身が假の住居
の大和町、僅かに今、龜井戸で小万を
ト思ひ入れあつて
八右　すりや、爰であつたか。誠に思ひ内にあれば
小万どのゝ夢を見さつしやりましたか。
源五　いかにも。ハテ、夢は五臓の煩ひだな。
三人　サア、借りのせいらゝは、どうでござりますな。
源五　騒がしい、ありや何事。
八右　酒代や肴代を、取りに參つて居ります。
源五　ナニ、酒肴の料物を取りに參つて居るか。
八右　左樣でござります。
源五　それなれば、早く取らしたがよいわい。
八右　サア、拂ひせうにも、錢が一文も。
源五　なにか、鳥目の替へたのが無いか。よい〳〵。ソレ、
身が紋羅紗の紙入れに、金子が百兩入つてある。それを
取つて參れ。
八右　エヽ。
ト合點の行かぬこなし。
源五　奥の小箪笥の下抽出しに入れて置いた。
八右　どこにマア。

源五　早く取つて參れ。
八右　旦那どの、お前、まだお目が覺めませぬか。
ト源五兵衛、顏にて押へながら
源五　イヤ〳〵、待て〳〵。僅かな事に紙入れを取るにも
及ぶまい。兩替への通ひを彼れらに渡し、先で直ぐに受
取らせたがよい。
八右　エヽ、質屋の通ひの事かな。
源五　イヤサ、兩替屋の通ひ。ソレ、ナ、早く取つて參れ
八右　通ひ取つて來ても、質に置く物は、何にも無いもせ
ぬもの。
源五　默り居らう。
トきつと云ふ。八右衛門、悄り飛び退く。
うぬ、座興を云ふも時によるわい。
八右　ヘイ。
ト眞面目になる。
源五　未だ馴染みも無い町人ども、誠と心得、身共を侮る
まいものでもないわい。
八右　ヘイ。
源五　扣へて居れ。
八右　ヘイ。

　トこなしあつて扣へる。

源五　コリヤ〳〵、町人ども、毎度の催促、大儀ぢや。此奴、馬鹿者の不精者ゆゑ、われ達に足を運ばせ、氣の毒千萬、おッつけ鳥目を取寄せ、持たせやらう程に、先づ歸れ歸れ。

八右　アヽ、モシ〳〵、そんな事を云うて、また跡でおらに難儀をかけやうと思つて。

源五　まだ〳〵此奴、扣へて居れ。

八右　ヘイ。

久六　コレ、酒屋、旦那が直ぐに、あゝ仰しやるからは、よもや違ひはあるまいかい。

佐兵　そんなものぢや。八右衛門さま、お前、どうぞ、早うお頼み申しませう。

八右　おらは知らぬぞ〳〵。

源五　よい〳〵、彼奴めが行かずば、外の家來に持たせ遣はすであらう。

權太　モシ、わたしは端錢でございます。どうぞ只今下さりませ。

源五　イヤ〳〵、面倒だ。一緒に遣はさう。

權太　左樣なら、よろしう

兩人　お頼み申します。

源五　オヽサ、よく來やつた。

　ト合ひ方になり、暮れ六ッ打つ。三人、門口へ出て

權太　何の事ぢや。錢も取らずに投げられて、どうでもぶッかけにはならぬわい。

　ト云ひ〳〵、兩人も向うへ入る。八右衛門も思ひ入れあつて

八右　旦那どの、いかにこれまで、榮耀榮華に育つたお身ぢやというて、當ても無い事を云うて、どうせうと思うでござる。

源五　ハテ、どうなりと云うて、歸しさへすりやよいではないか。

八右　ぢやというて、滅相な。

源五　大分、暗くなつた。灯しをとぼさぬか。

八右　油は一雫もございませぬ。

源五　でも、焚火でもせねば、物の黒白が分らぬ。

八右　焚火せうにも、薪は一本も無い。

源五　エヽ、不氣轉な奴、ドレ〳〵

　ト炬燵の矢倉を取つて來て、無理に毀し、柴垣を折つて來て

火鉢を持つて來い。

八右　贅澤らしい、どこに火鉢があるもので。ソレ

ト七輪を取つて來る。源五兵衞、火を打ち、吹き付け燃す。此うち八右衞門、思ひ入れあつて

若旦那、源五兵衞さま、あなたはマア、どういふ天魔が見入りましたぞいなう。

ト合ひ方になり

今更改めて申すではござらねど、あなたは西國にて、名に負ふ千島の御家中、勝間源次兵衞さまの御子息。下郎が親どもは、お家の御譜代、生れ落ちるとお側に育ち、怪我にも片時お別れ申した事のないこの八右衞門。先つ頃お國に於て、若侍ひ衆と武藝の論に依つて、一徹なこなた樣、人の下には付かじと、劍術修行に武者修行と、書置殘して御出奔。下郎めはあるにもあられず、お跡を慕ひ參りしところ、この江戸にてお目にかゝり、主從二人足を留めて、劍術武藝を御鍛練あれば、日々に御上達、最早御歸國なされても、苦しうあるまいと、度々お進め申しても、イヤ〳〵、日本に名を發し、殿樣よりお迎ひの來るまでは歸らぬとの仰せ、これも武士の器量、御尤もと思ふ所に、いつの程にか遊所通ひ、それもこの頃は身が入つて、夜晝分かぬ居續けに、用意の金子は元より武具衣類までも賣り代なし、云はうやうもない道樂のお身持ち。いろ〳〵に意見を云うても、お聞入れなく、生れてから付添ふこの八右衞門、神佛へ手を合しても、外の事は何も申さぬ、只若旦那の武運長久、息災延命と祈つて居りますに、こりやマア、何たる因果な事だと、ほんに夜の目もろくに合ひませぬ。これ程大切に思うて居る、下郎めが志し、ちつとは思ひやつて、御本心になつて下され。若旦那源五兵衞さま、そりやあまりお胴慾だ。むごいといふものでござるわいなう。

トいろ〳〵こなしあつて云ふ。源五兵衞、此せりふのうち、ホロリと思ひ入れあつて、また氣を變へ

源五　アヽ、くさ〳〵と、よしなき繰り事。楚の項羽、我が朝の義經、色を好むは勇者の習ひサ。

八右　イヤ〳〵、そりや譬へに云ふ杓子定規。

源五　ハテ、役にも立たぬ事を云はずとも、嗽ひを持て。

八右　でも、云ひ出すからは金輪際。

源五　かしましい、默れ。

八右　お身の大事を思ふゆゑ。

源五　默り居らう。

八右 トきつと云ふ。八右衛門、愕り飛びのき

八右 ても、情の強い。

トぼやき〳〵、嗽ひを汲んで行く。在郷唄になり、向うより徳右衛門、家主の形にて出て來て、ズッと內へ入る。

八右 オヽ、これはお家主の徳右衛門さま、ようございました。

徳右 源五兵衛さま、この間はお目にかゝりませぬ。

源五 誠に徳右衛門どの、これへ〳〵。

徳右 左樣なら、許さつしやりませ。

八右 マア、一服まゐりませ。

ト火を打つて出す。

徳右 よい所へ來て下さりました。おらがちつとお前へ、御談合があつて、參らうと思つた所でござります。

徳右 ハア、何ぞよい談合かな。

八右 イヤモウ、どうでろくな事ではござりませぬ。

徳右 そんなら、おれは聞くまい。これと談合さつしやれ。

ト右股を捲り、八右衛門に突き付ける。

八右 そりや何でござります。

徳右 ハテ、膝とも談合ぢや。ハヽヽ。

八右 イヤ、洒落どころではござりませぬ。

ト源五兵衛を指ざして

とんと益體。一昨日から、米が一合、木が一本、油が一雫もござりませぬ。旦那は晝は一日寢て居られます。夜に入ると出歩かつしやる。おらは、ひだるうて〳〵耐へられぬ。そこで昨夜からぶつかけ蕎麥で、やう〳〵命をつないで居ります。

徳右 ハテ、それは氣の毒。さうして、なんぼ春でも、まだ餘寒が強いのに、その薄着とは元氣ぢやの。

八右 イエ、おらが古着は、昨日の朝、古鐵買ひに賣つてやりました。

徳右 ヤ、マア。

ト呆れて源五兵衛を見る。源五兵衛、嗽いにて、ちやつと紛らす。

八右 それで、あなたの所の座敷代も、段々遲うなつた上、近頃盜人に追ひ錢とやらなれど、どうぞナ、申し兼ねましたが、少々ばかり。

徳右 ムウ、そりや斯うぢや。おれは內が質商賣、今も今で、餘所へ五六兩の代物を見に行くゆゑ、爰に持ち合せもあれば、何ぞ質に置きさうな物があるならば

八右　サア、そこでござります。一枚古着まで賣る程の事なれば、御推量なされて下さりませ。
德右　アノ、何も無いか。ハテ、鈍なものぢやの。
ト氣の毒なこなし、所へ向うより善六、損料屋にて、風呂敷包みを擔げ出て
善六　何でも今日は、一せツぱせにやらぬ。
ト云ひ／＼内へ入り
ハイ、損料屋善六でござります。お約束の身の廻り、取揃へて、持つて參りました。
源五　それは大儀、いかい世話であつた。
善六　小袖と羽織、帶ともに、三品ござりまする。
源五　慥かに預かつた。置いて歸りやれ。
善六　時にモシ、旦那、この間から餘ツぽど損料もたまつてござります。只今貰うて歸りたうござります。
源五　されば、その儀は、おてまへへ渡さうと思うて、金子を調へ置いたが
善六　お渡しなされて下さりますか。
源五　イヤサ、斯うぢや。夜前盜賊が入つて、コロリと盜まれた。
善六　エヽ。
ト愕り、これを聞いて德右衞門も、八右衞門に本間かと云ふ事をする。八右衞門、イヤ／＼嘘ぢやと云ふ仕方する。
源五　それゆゑ只今、お家主のこの德右衞門どのを、呼びに遣はし、何かの談合を致し居る所。なんと、憎くい盜賊めではないか。
善六　それはマア、鈍な
ト頭を掻き／＼
そんなら下地の損料は
源五　サヽ、よいて／＼。
善六　イエ／＼、よいとばかりでは詰まらぬ。金が出來ずば、この衣裳は、マア、持つて歸りませうわい。
ト風呂敷包みを持つて、立たうとするを、これを押へて
源五　ハテ、短氣な男だ。マヽ、樣子を聞いてたもれ。身も國元へ歸參を致す。卽ち家老衆が出府いたされ、今宵、當所仲町の、花屋とやらいふ茶屋にて、何かの熟談を致す約束なれども、この形ではどうも參られぬ。ハテ、歸參いたさば、お身が損料は倍々で拂うてくれるわサ。
善六　倍々とは耳寄りぢやが、又さう云うて、いかさまに

かけるのでないかえ。

源五　不粋に思ふならば、後方、花屋方へ參つたがよい。

善六　さう堅う云はつしやれば、違ひもあるまい。そんなら、この代物は置いて歸り、後に仲町へ行きますぞえ。

源五　そりやお身が勝手次第。

善六　さう云ふ議定なれば、違ひもあるまい。代物は風呂敷包みの儘置きまする。ようござります。ドリヤ歸りませうか。

ト云ひ〳〵向うへ入る。徳右衛門、摺り寄つて、八右衛門に小聲になり

徳右　そんなら今の歸參の事は

ト八右衛門、手にて、いや〳〵とする。

がをれ。

トこなしある。深川騒ぎになり、向うより彌助、廻し男。繁次、太鼓持ち。おくに、茶屋女子にて、粂本といふぶら提灯を灯し出て來て

彌助　旦那、あまりお出でが遅いゆゑ

繁次　お迎ひに參りました。

源五　ヤア、廻しの彌助、粂本のおくに、太鼓持ちの繁次、いま出掛けようと思ふ所。よく來た〳〵。これへ來いこれへ來い。

彌助　八右衛門さま、この間は

ト挨拶しても

八右　エ、知ら、わい。

トむつとして居る。

彌助　でも、わるい請けだア。

源五　時に彌助、兼ねて頼み置いたる小万が返事は。

彌助　ようござります。この間からも申します通り、小万さまは、疾からその氣がやけれど、てこが彼の眞心傳心。

源五　されば、それゆゑ身共も、凡そコレ、日數は三十日の餘も、毎晩〳〵仲の町の花屋に通うても、身が直々に彼れを口說くも、何とやら異なもの。どうぞ今宵は、是非其方が働らきを以つて

彌助　帶紐解いて、抱かして寢さします。

源五　そりや眞實か。

彌助　なんの嘘を申しませう。

繁次　中裏で顔の古い彌助、旦那、違ひもござりますまい。

くに　ほんに、子供衆の色事を、内の廻しの彌助どのが、取持つとは、丈夫なものでござりまするぞえ。

彌助　日頃の思ひを、キッと晴らさせます。

源五　エヽ、有り難いワ。

ト此うち八右衛門、始終ムカ〳〵して居て、この時

八右　結構な事ぢや。

源五　たわけ者めが。然らば、直ぐに參らうか。

ト立たうとするを

彌助　旦那、マヽ、お待ちなされませ。小万さまの事は、私しが請合うて埒明けますが、この間、お前にお頼み申した事を、ナモシ。

源五　そりや、アノ、金子の事か。

彌助　今宵、五兩無ければ、どうも男の立たぬ事がござります。下地から段々お庇に與かりました上、近頃お氣の毒には存じまするが。

源五　なにさ〳〵、云はゞ僅な事ども、斯うも致して遣はさう。暫らくこれに扣へて居やれ。

ト此方へ來て

徳右衛門どの、お家主ノヽ、ちよつと面談が致したい。

徳右　私しにな。

源五　大儀ながら。

ト徳右衛門、側へ行て

徳右　何でござりまするな。

ト源五兵衛、小聲になり

源五　おてまへ、先程噂の金子、それに所持召されるか。

徳右　ハイ、持つて居ります。

源五　ムウ。

トずつと行て、障子屋體の内より、一腰を取つて來て

源五　これまで如何やうな事があつても、嗜み置いたる大切な二字吉光の業物、判金二十枚の折紙、なんとこれで、その金子を借用はなるまいか。

徳右　そりやモウ、私しは商賣の事。マア、不躾ながら代物を

ト取つて、とつくりと改め見て

成る程、ようござります。外ならぬ刃物には鞘添へが入りますれど、それは跡でどうなと。マア、五兩貸しませう。

ト紙入れより金を出して渡す。

源五　早速の承知、過分々々。

徳右　左樣なら、私しは、もう歸りませう。

ト一腰を持つて立たうとするを

源五　イヤノヽ、コレ。

ト袖を扣へ、その一腰を八右衛門や皆の見ぬやうにし

てくれと云ふこなし。徳右衞門、合點だと思ひ入れあつて、懐へ入れて見やり、いろ〳〵困つたこなしにて、

トヾ股倉へ隠し・此方へ來て

徳右　八右衞門どの、おりや、モウ歸ります。

八右　まだお賴み申したい事も。もそつと遊んで下さりませ。

徳右　イヤ〳〵、長居したら、どんな事を聞かうも知れぬ。

八右　それもさうぢや。後程おいが参りませう。

徳右　イヤ、借りる事なら、來ずとよしにして下され。ハヽ、ドリヤ、歸りませうか。

ト合ひ方になり、いぢかり股にて向うへ入る。

八右　お家主は、をかしい身振り、どうでも疝氣病かしらぬ。

繁次　サア、モシ、源五兵衞さま、お早う

くに　お出でなされませぬかいなア。

源五　參らう〳〵。サテ、彌助、金子は五兩でよいか。

彌助　マア〳〵、今晩の所は、五兩ありや凌がれます。

源五　ソレ、取つて置け。

ト金をやる。

彌助　エヽ、有り難うござります。

ト八右衞門、悔りして

八右　ヤア〳〵、金が出た〳〵。しかも五兩。コレ〳〵旦那どの、あの金はどうして。

源五　また差出るか。默つて居れ。

八右　ぢやというて、大枚五兩。

源五　默れと云ふに。

八右　ハテ、面妖な。

ト合點のゆかぬこなし。

源五　馬鹿を云はずと、身が衣服をこれへ。

八右　アノ、損料屋が持つて來た

源五　コリヤ。

ト目で押へる。八右衞門、默れる。

八右　知りませぬわい。

くに　そりや、わたしが召替へさしませう。

源五　大儀ながら、その風呂敷に包んである。

くに　ハイ〳〵。

ト取つて來て着替へさす。源五兵衞、よろしくあつて

源五　サア、これでよい。ドレ、参らうか。

繁次　イヤ、旦那、私しがちと、お願ひがござります。

源五　何か〳〵。

繁次　最前から、咽喉がグウ〳〵云うて居りまする。どうぞ、一丁入れ山とは出來ますまいか。

源五　ハテ、よく飲みたがる男ぢや。斯うせう。參りがけに夷の宮へ、ちよつくり寄らうではないか。

彌助　イカサマ、麥飯で底を入れて參りませう。

繁く　左様なら、モシ、お早う。

ト源五兵衞、皆を連れ、門口へ出かゝるうち、八右衞門、一間の刀懸け、あたりをいろ〳〵拔き見て、さてはト云ふ心意氣にて

八右　ヤア〳〵、こりや二字吉光が。さては今、家主へ

トつか〳〵と行て、源五兵衞を留め

旦那どの、コレ、お前は

源五　何をおのれが

ト振り切るを

八右　でも、差添も

ト構はず門口へ出て、外より戸をピツシヤリ。

源五　八右衞門、よく留守いたせ。サア、皆來やれ。

ト騷ぎ唄になり、源五兵衞、皆を連れ、向うへ入る。

幕

トつなぎを打つて居るうち、矢張り騷ぎ。知らせにて返す。

# 大切

## 仲町花屋の場
## 木場仕返しの場

役名――千島千太郎。笹野三五兵衞。出石宅左衞門。賤ケ谷伴右衞門。多々良佐十郎。横川早助。舟戸三四郎。廻し男、彌助。奴、土手助。山本屋才兵衞。花屋下女、おなか。花屋娘分、おさい。下女、おうめ。若黨、八右衞門。粂本のおくに。男藝者、繁次。貸物屋善六。藝者、櫻屋小万。勝間源五兵衞。

造り物、平舞臺、東西、上下の中二階、眞中は一面の長暖簾。よき所に衝立て直し、門口に花屋と云ふ懸け行燈かけ、この道具に好みあつて、鳴り物入り慈童の所作の切れにて幕開く。

ト奥より千太郎、宅左衞門、伴右衞門、早助、佐十郎三四郎、おさい、おうめ、皆々宥めながら出て來る。

さい　其やうに仰しやらずとも。
うめ　マア、ようござりますわいなア。
伴右　若殿には、何ゆゑ御歸館と、仰せられまするな。
宅左　この面白い騒ぎを打ッちやつて、お館へとは、よく
よくの儀でござりませう。
皆々　先づ／＼、様子を仰せられ下さりませう。
千太　様子は云はいでも知れてある。先程から待ち兼ねて
居るに、どうして小万は、顔出しはせぬ。小万が居ねば
おりや面白うない。それで館へ歸るのぢや。
宅左　これは御尤も。豫ねてお心をかけられし、小万がお
側に居らねば、御機嫌がそこねる筈。これさ、おうめ、
どう致したものぢや。小万は今宵の約束ではないか。
さい　それで最前から、中裏へ人橋をかけて居ります。ナ
ウ、おうめ、
うめ　アイ、わたしらに如才はござりませぬ。もう今、小
万どのは見えますわいなア。
伴右　もう見えますでは、埒が明かぬ。今宵の約束に今に
來ぬとは、憎くい小万。コリヤ、おうめ、マア、一遍參
つて、早く引立てゝ來い／＼。
うめ　アイ／＼、合點でござんす。ほんに小万どのも、ど
うして暇のいる事やら。ドレ、呼んで參じませう。
ト云ひ／＼向うへ走り入る。
千太　小万が來ねば、おりや歸る／＼。
三人　イヤ／＼、小万は只今參りまする。
宅左　さうぢや。今暫らくの御辛抱を、若殿。
皆々　先づ／＼、御機嫌を直されませう。
宅左　イヤ、何れも斯う致さう。小万が來るまで氣を替へ
て、この所で、わつさりと酒に致さうか。
伴右　そりやようござらう、ソレ、おさい、早くお銚子を
これへ／＼。
宅左　サア、若殿、一騒ぎ。
皆々　騒ぎかけませう。
ト此うち奥より三五兵衞、出かけ居て
三五　イヤ、伴右衞門どの、宅左衞門どの、何れも、お騒
ぎに暫らくお待ち下され。
ト前へ出る。
宅左　三五兵衞どの、小万が參らぬゆゑ、若殿の御機嫌そ
これしを、執成し致す我れ／＼。
伴右　なぜ留めさつしやるな。
千太　三五兵衞、そちや最前からどれに居た。云ひ付けて

置いた、小万が返事はどうぢやぞいやい。

三五　イヤ、拙者めは小万が返事より、お國許の御家老中の返答に、心の内は途方に暮れて居ります。

千太　そりや又なんで。

三五　何ゆゑとは、申し上げねばならぬ事がござります。先づ〳〵。

　ト合ひ方になり、千太郎をよき所に坐らし

毎度同じ事ながら、何卒一刻も早く、御歸國の儀を。

宅左　イヤ〳〵、三五兵衛どの、若殿が御承引なきに、たつて御歸國をお勸め申すは、そりや餘り一途と申すもの。

三五　如何にも、拙者一途にござる。

宅左　より〳〵に、なぜお勸め申して。

三五　イヤ、左樣な猶豫はなりませぬ、最早お國の一大事と相成りまする。先々月御出府の砌りより、大殿の御不例、お國許より度々のお飛脚、この三五兵衛に早速お供いたし、罷り下れよとあるに、小万が色に迷はせられ一向に御承引なく、一日と暮れ二日と過ぎ、はや五十日餘り、お國許より御大切と櫛の齒を引く如し。一刻も早く御歸國下されうなれば、一家中の安堵、この上がござりませうか。若殿、何卒お聞濟み下されまして、お國許へ。

千太　コリヤ〳〵、三五兵衛、國許へ歸る事は、いつでも歸る。けれど、兎角、小万が得心して、おれが心に從はぬうちは、親仁が死なうが、國が潰れうが、そんな事に構ひはせぬ。是非歸したくば、早う小万に得心させい。

三五　すりや、小万がお心に從はねば

千太　國へ歸る事は、否ぢや〳〵。

　ト三五兵衛、千太郎が顔をキッと見て

三五　ホイ。

　ト當惑の思ひ入れ。唄になり、向うよりおうめ、ぶら提灯を提げ、小万、おなかに連れ立ち出る。彌助、跡より三味線箱を提げて出る。

うめ　サア〳〵、小万さまをお連れ申して歸りましたわいなア。

彌助　小万さまを送ります。

さい　オヽ、遲い〳〵、お前もマア、何をして居なさつたぞいなア。

小万　サア、疾から拵らへて待つて居ても、彌助どのが戻つてくれぬゆゑ、遲うなつたのは、わたしが所爲ぢやないわいなア。

宅左　小万、若殿のお待兼ね。サ、、これへ〳〵。
小万　アイ〳〵。
　ト三五兵衛と顔見合せ、心意氣あつて
皆さま、お許した。
　トよき所に坐る。
うめ　おさいさん、わたしが急きに行かぬと、大抵で埒の明く事ぢやなかつたわいなア。
さい　彌助どの、どうしたものぢやぞいな。知れてある小万さんの揚げ詰め。此やうに人橋かけにやならぬかいなア。主が女子ぢやというて、其やうにするものぢやござんすまいぞや。
彌助　其やうに、腹立てなさる事はござりませぬ。わたしも日暮れ前から、ちつと外へ行て、これも矢ツ張り、小万さんのお客の事。そのお方が夷の宮へ連れて行て、一杯飲まさうと仰しやつたれど、遲うなつてはならぬと、お客を夷の宮に置きまして、トツカワ戻つて、今途りました。ちつとやそつと遲うなつたとて、其やうに頭ごなしに、云ふものぢやござりませぬ。
さい　そんなら、約束の子達をいつ迄つても、云ふ事はならぬかえ。

彌助　イヤサ、さうぢやなけれど。
うめ　でも、お前のやうに云はしやんすと、此方が濟まぬわいなア。
うめ　マア〳〵、おさいさん、もうよいわいなア。彌助どのも、ちやつと行かしやんせ〳〵。
彌助　ハイ〳〵、小万さん、莨は後で持つて參ります。
　ト門口へ來て
もう一遍、源五兵衛さまに逢うて。さうぢや。
　ト合ひ方になり、ツイと向うへ入る。千太郎、こなしあつて
千太　小万、最前から待ち兼ねて居た。サア、奥へ來てたも。
　ト手を取る
小万　奥へ行て、どうするのぢやえ。
千太　ハテ、女夫事を始めるのぢやわいの。
小万　又かいなア。こちや嫌いなア。
　ト振り放す。
千太　三五兵衛、アレ、矢ツ張り嫌ぢやと云ふわいの。
　トおろ〳〵聲にて云ふ。
宅左　三五兵衛どの、ちよつと御意得ませうか。

三五　拙者にか。
宅左　如何にも。
ト三五兵衞、向うへ出る。
先頃、洲崎枡屋に於て、若殿千太郎さま、小万に御執心の趣き、如何にも口說き落して、お心に從はせませうと請合うた貴殿、只一概に御歸國のみを進め、お望みはなぜ叶へさつしやらぬ。今にもせよ、小万が承引して、お心に從へば身請け致して、直ぐに御歸國。すりや、お國の落去は、小万が返事一つに極まる。但し、お身が口から、若殿のお心に從へと申されぬ譯でもござるかな。
三五　アイヤ、全く左樣ではござらねど。
宅左　それに小万は、なぜお心に從ひませぬ。
小万　わたしや藝者でござんす。
宅左　ヤア。
小万　座敷ばかりは勤めても、帶紐を解く勤めは、どうも得心いたさぬわいなア。
千太　アレ、あんな事を云ふわいやい。
宅左　三五兵衞どの、小万が今の返答では、千太郎さまへお請合ひ申した、貴殿の詞が立つまい。ナウ、伴右どの。
伴右　如何にも左樣。三五兵衞、若殿の仰せ、なぜ小万を口說き落さつしやれぬぞ。
三五　サア、その儀は。
宅左　御歸國なくとも、お家が立つか。
三五　サア、それは。
伴右　明日をも知れぬ大殿の御大病。小万さへ若殿のお心に從へば、今宵直ぐに御歸國。
宅左　それに便々と、事を延して
伴右　只御歸國を進めろとは
早助　三五兵衞どの、貴殿の心底
皆々　どうも合點が參らぬ。
三五　イヤ、今宵中に、小万を口說き落して、お目にかけませう。
小万　アヽコレ、申し、三五兵衞さま、わたしやなんぼうでも、若殿樣に。
三五　ハテ、嫌でも應でも小万、其方が若殿のお心に從はねば、御歸國はなされず。すりや、お家の大事にかゝはる戀路。今聞く通りの仕儀なれば、とくと思案を、後までに。
小万　おやというて、一旦云ひ交はした
三五　イヤサ、云ふに云はれぬ義理づくも、勤めの習ひと

やゝ聞いては居るか、そこを又とつくりと思案をして、
若殿のお心にナ

小万　従へと云はしやんすかえ。

三五　女の貞心、武士の忠義。

小万　思ふは一筋。

三五　戀の二道。

小万　暴れたる駒を繋ぐがわたし。

三五　里の女の習はせに

小万　抱かれて寐いとは、そりやお前

ト三五兵衛が側へツカ／＼と行くを、三五兵衛、思ひ入れあつて、小万を引廻し

三五　帶紐解くばかりを、イヤサア、帶紐解いてしつぽりと、サア　その返事は、後まで、小万。

ト兩人思ひ入れあつて

小万　エヽ、自烈たい。

ト心意氣こなしあつて

事ぢやなア。

トつんとする。三五兵衛も、こなしあつて

三五　千太郎さま、是非とも小万を、拙者が後までに。

千太　得心さすか。

三五　その上にて、御歸國の儀を。

千太　そりや合點ぢや。ナア、宅左衛門、件右衛門。

宅左　その儀も、小万がとつくりとお心に従うた上

件右　色よい返事のあるまでは

うめ　マア、奥の二階でわつさりと

千太　酒にして待つて居よう。

宅左　イカサマ、先程より餘程退屈。

三四　三五兵衛どのも御一緒に。

三五　成る程、參りませう。

千太　小万が來ねば、おりや淋しい。

うめ　おツつけそこへ、お連れ申します。

さい　サア／＼、マア、お出でなされませいなア。

千太　そんなら皆の者。

皆々　先づ、入らせられませう。

ト騷ぎ唄になり、右の一件、皆々。奥へ入る。跡に小万、おさい殘り、合ひ方になり、こなしあつて

さい　申し、小万さん、わたしやお前に、ちつと話したい事があるわいなア。

小万　オヽ、おさいさんの、事ありさうに、何ぢやぞいなア。

ト　おさい、莨盆取つて來て、小万に吸ひつけてやり

さい　外の事でもないが、小万さん、あの千太郎さまをお客にしてゞあつたが、よからうかとわたしや思ふわいなア。

小万　エヽ、

さい　サア、嫌であらう、面白くあるまいけれど、云うてもお大名の若殿、お前の爲にもならうかと思うての事、必らず腹立てゝ下さんすなえ。

小万　おさいさん、なんの腹立てうぞいなア。眞實によう云うて下さんした。有り難うござんすが、わたしやちと、さうならぬ譯があるわいなア。

さい　サア、それも推察しては居るが、此方を蹈めば、此方が上がる。

小万　ほんに任せぬ浮世ぢやわいなア。

ト唄になり、向うより八右衛門、浴衣の上に赤合羽着て出る。揚げ幕前の内にて犬の聲する。

八右　シイ〳〵。形が形だから犬めが嚇かし居る、おさいさん、お宿か。

ト入らうとして、こなしあつて門口を窺ふ。

さい　オヽ、八右衛門さま、珍らしい。サア、お入りなされませ。

八右　誰れも差合ひはござらぬか。

さい　イヽエ、小万さんばかりでござんす。

八右　ナニ小万さんか。それは幸ひ。然らば、許さつしやれ。

ト内へ入り

小万どの、この間はお目にかゝりませぬ。

小万　八右衛門さま、ようござんした。サア爰へ。

八右　イヤ、矢張りこれが勝手でござる。

さい　見りやお前、變つた形、雨も降らぬに合羽を着て、何の事でござんすぞいなア。

八右　イヤ、宿を出しなに、どうか曇つたやうにあつたゆゑ、引ツかけて參つた。

さい　でも、鬱陶しうござんせう。ドレ、取つてあげう。

ト取らうとする。

八右　アヽ、益體もない。これを取つて堪るものか。

さい　でも、わたしが内で、雨は降らぬわいなア。

八右　火が降らいで仕合せだ。ハヽヽヽ。時に小万どの、今宵この八右衛門が、わざ〳〵參つたは、ちとこなたへ折入つて、頼みたい儀があつて。

小万　お前のお頼みと仰しやるは、聞くに及ばぬ。源五兵衛さまと寐てくれいでござんせうがな。
八右　イヤ、さうでない。思ひ切らしてもらひたい。
小万　エヽ。
八右　お身達は知らぬ事なれど、旦那源五兵衛さまには、其方大切なる歸參の望みあるお身の上。いつぞやより、其方の美しい笑顔に迷うて、夜晝なしの居續けに、どのやうに意見申しても、馬の耳に風、金銀を湯水のやうに、パッパと撒き散らし、衣類手道具は云ふに及ばず、恥かしい事だが、八右衛門が身に引ッかける物は、この合羽たつた一點。もし、この事が、お國の親旦那源次兵衛さまに聞えるが最期、若旦那は一生埋れ木、おらが艱難は厭はねど、兎角大事は源五兵衛さまのお身の上。頼みたいと云ふは爰。なま中にこなたが、しなつこらしうして下さるゆゑ、なんぼうでも思ひ切らつしやれぬ。今にこれへござつたら、こなたの口からむごたらしう、飽いたわいなアとか何とか云うて、振り切つて下さつたら、ハテ、狂人も一人は狂はぬ。御本心にならつしやれば、親旦那さまのお喜び、おらが安堵。この事を頼まう爲、見苦しいこの態で、わざ／＼これまで出て參つた。小万どの、どうぞ頼まれては下さるまいか。
ト小万こなしあつて、
小万　八右衛門さま、色町に住む者は、お客をたらす憎い奴と、さぞ恨んでゝござんせうが、源五兵衛さまには始めから、所詮あなたのお望みは叶へられませぬと云ひ切つた客人なれど、矢ッ張り深切に繁しみもない待夜のお遊で、床の間の座敷ばかり。やう／＼四ツになるたらず、もうおれは歸る程に、跡は其方の勝手にせいと、無體な座敷。面白うあるまいに、よう付合うてたもつたと、禮を受けろわたしが心は、どのやうにあらうと思うて下さんす。又わたしが騙すといふではなく、これも意氣地の磨き合ひ。機嫌よう歸らしやんす、後影を見る時は、さぞや氣強い女ぢやと、思し召しも恥かしい。よしない事に思はれて、仇な費をさしますと、心の內では拜んでばかり。それに今更源五兵衛さまに、優しい事こそ云はずとも、酷いつれない愛想づかしが、どう云はれませうぞいなア。お前がお主大切に思はしやんすも、わたしが藝者の意氣づくも、譬へて云へば同じ事。八右衛門さまどうぞこの事ばかりは、堪忍して下さんせいなア。
八右　さう入り譯を聞いて見れば、これも尤も、と云う

て、あの様子では、後には色狂人にがなたなるであらう。ア、、これ
何を云うても皆、源五兵衛さまが悪いから。ア、、これ
も何ぞの因果でがなあらう。

ト悄々立ちあがり

用もない所に、見苦しい形で、へちもうても居られまい
ドリヤ、大和町へ歸らうか。

ト行かうとして又、立戻り、おさいを見て

おさいどの、どうぞ分別はあるまいかの。

トおさい、最前より貰のんで居て

さい　聞けば聞く程、お氣の毒な源五兵衛さまのお身の上
とんと芝居の世話狂言、お妻八郎兵衛を見るやうな、入
組んだ義理合ひ。今のお前の詞では、小万さんをさつば
りと思ひ切らしませねば、源五兵衛さまのお爲にならぬ
……ようござんす。わたしが呑み込んで、思ひ切らしま
せうわいな。

八右　ナ、、なんと云はつしやるぞ。

さい　サア、お前の忠義は、香具屋彌兵衛が深切。わたし
が小万さんに代り、お妻が云うた愛想づかし、それがあ
なたの矢ツぱりお爲。

八右　忝ない／＼。おさいどの、よう呑み込んで下さつた
こなたのお庇で、主人一人拾ひました。ヤレ／＼、嬉し
や。これでとんと日本晴れが致したやうな。

さい　あんまりお前の心根がいとしさに、請合ひは請合ふ
ものゝ、もしや又、源五兵衛さまが八郎兵衛のやうに腹
立つて、怪我過ちがあるまいかな。

八右　イヤ／＼、そりや氣遣ひ召さるな。一旦の所は木の
出花、左様までに無分別な和郎でもない。

さい　そんなら後に。

八右　時に、旦那はどこへ。

小万　いつも暮合ひから、粂本へござんす源五兵衛さま。

八右　座敷を先刻出られたれば、大方粂本にござるであら
う。おらが尋ねて。

さい　おやというて、お前、そんな形では。

八右　ハテ、風の神だと云へば濟むサ。ハ、、、。

ト門口へ出て

ドリヤ、行て參らうか。

ト唄になり、八右衛門、こなしあつて、向うへ入る。
おさい、思ひ入れあつて

さい　小万さん、何も彼も一時になつて、どうやら欝陶し
いぢやないかいな。奥へ行て、わつさりと一つ飲ましや

んせぬか。

小万　サア、そんな事もようござんせうが、おさいさん、お前の最前の一言、わたしやどうやら氣がゝりながら、この間からのわたしが素振り。

さい　蛇の道はへび、何もかも知り拔いて居るわいな。

小万　そんなら、必らずともに。

さい　この子とした事が野暮らしい。何事も、わたしが胸にあるわいなア。

小万　そんなら、おさいさん。

さい　小万さん、マア、奥へござんせいなア。

小万　アイ

ト唄になり、おさい、小万、奥へ入る。向うより彌助出て來て

彌助　誰れぞこの莨を、小万さんに渡して下さりませ。おはなどの、おいわどの、どいつも居らぬか。いま／＼しい。

ト奥より宅左衞門出て

宅左　彌助でないか。

彌助　オヽ、これは宅左衞門さま。

宅左　其方に折入つて頼みたい事あつて、今呼びに遣はさうと存じて居た所。

彌助　それは幸ひでござります。して、そのお頼みといふは。

宅左　イヤ、別儀でもないが、この頃國許よりの內通に、大殿には九死一生、今暫らく若殿を留め置き、大殿落命に及びなば、入國いたさぬ科を云ひ立て、若殿をぼい捲り、我れ／＼が千島の家國を押領せんと、兼ねての云ひ合せ。それについて、兎角歸國を進め、邪魔になる笹野三五兵衞、彼奴、慥かに小万めと、とち狂うて居るとは推量はすれど、これぞといふ證據がなければ咎められず。何卒、其方が計らひにて、彼奴ら二人が不義の證據、しかとした品を摑まへくれなば、褒美は望み次第。なんとこの相談はどうあらう。

彌助　ようござります。金儲けにさへなる事なら、どんなむづかしい事でも取込む彌助。三五兵衞どのが科に落ちる、キッとした證據、取つて上げませう。

宅左　早速の承知、先づは過分。まだ申し談ずる事もあれば。

彌助　爰は端近。奥の方へ。

宅左　彌助。

彌助　宅左衞門さま。
宅左　奥へ來やれ。
彌助　マア、ござりませ。
ト騷ぎ唄になり、兩人、奥へ入る。この唄をかりて、向うより、おくに先に源五兵衞、返し前の形にて、繁次連れ出て
源五　花屋方へは久しう參らねば、どうか初々しいやうな。
くに　なんの、おうめさんは、そんなお方ぢやござんせぬわいなア。
繁次　それ／＼、嬪分のおさいさんも、お客を丸める評判の團子、如才のある內ぢやござりませぬ。
くに　わたしらが、御案內いたしませうわいなア。
ト云ひ／＼本舞臺へ來て
繁次　おさいさん、客人をお伴れ申しました。
さい　アイ／＼。
ト奥より出て
オヽ、粂本のおくにどの、繁次さん、これは／＼源五兵衞さん、お珍らしい。
源五　おさい、暫らく逢ひ申さぬ。どうだ、變る事もないか。
さい　イエモウ、わたしが方は變らねど、あなたは兎角粂本へばつかりお出でなさるゝげな。よいなされ方でござります。
源五　サア／＼、その恨みがあらうと思うて、今宵わざわざ／＼詫び言に來たわや。
さい　滅相な。お客にお詫びを請けましては、罰が當りますわいなア。
源五　イヤ、さうでない。久々遠ざかつた事譯。殊に身が贔屓の小万、この間よりこの家の揚げ詰め。今宵もこれへ參り居るよし。何卒お身が働らきにて、暫時客人へ斷わりを立て、借りてもらひたいが。
さい　イヤ、そりやなりませぬわいなア。
源五　ハア。叶ふまいかの。
さい　わたしが所の客人と云ふのもお侍ひさま、どうも勝手づくは申し憎うござります。殊に又小万さんは、たつた今客人と連れ立つて、山の二軒茶屋へ行てゞござりました。
源五　すりや、小万は山へ。ムウ。
ト思ひ入れあつて

ハ、、、。イヤ、おさい、久しう中絶の上、わざ〳〵參つて、小万を無體の頼み、心には入るまいなれど、是非小万を。

さい　サア、わたしが承知でも

ト奥より

宅伴　我れ〳〵が承知いたさぬぞ。

ト宅左衛門、伴右衛門、早助、三四郎、佐十郎、おうめも出る。源五兵衛、見て

源五　ヤア、御自分達には。

宅左　勝間の子息源五兵衛どの、出國以來打絶え申した。舊友出石宅左衛門でござる。

伴右　鷺ヶ谷伴右衛門、よもやお見忘れはござるまい。

佐十　高木佐十郎。

早助　沼澤早助。

三四　横川三四郎。

宅左　先づは堅固で

四人　重疊に存ずる。

源五　ムウ。さては小万を揚げ詰めの客人といふは。

伴右　イヽヤ、我れ〳〵ではない、お家の若殿。

ト千太郎ヅッと出て

千太　オヽ、輕少ながら、この千太郎ぢやわやい。

源五　こは、存じがけなき若殿のお入り。ハ、ハッ。

ト平伏する。

宅左　以前は御主人たる千太郎さま、御寵愛の小万に横戀慕、知らぬうちは是非もなし。今宵限りに、思ひ切りやれ、源五兵衛。

源五　ハヽヽヽ、。遊里の出合ひに主從の隔てがあらうか。殊に只今は、御知行戴かぬ源五兵衛、買濟みの相手お若殿とあれば、猶面白い。口說き落して、手に入れてお目にかけう。

伴右　イヽヤ、そりや及ばぬ事だ。云うてもお大名、金銀は如何程いつても、藏屋敷より取寄せ、自由自在にお遣ひなさるゝ。お身達のやうな、かび浪人が、千太郎さまに敵たふは、正眞の富士の山をせゝる蟻同然。ナウ、お三人。

佐十　左樣でござる。これが彼の俗に申す、腕なしのふりづんばいでござる。

早助　それ〳〵、本のごまめの齒ぎしりとやら、及ばぬ事サ。

三四　浪人に似合つたやうに、謠でも謳うて歩かつしや

れ。

四人　ハヽヽヽヽ。

ト源五兵衛、ムツとして

源五　御深切に、よく云つて下された。浪人いたしても勝間源五兵衛、金銀に事は缺きませぬ。若殿が千兩にて根曳きなさるれば、身共は二千兩、申しかゝつた武士の意地、是非小万は手に入れます。

宅左　アノ、おてまへがなかか。

源五　なか〳〵

ト　おさいこなしあつて

さい　申し、源五兵衛さま、最前から聞いて居れば、身請け身請けと仰しやるが、そりや、どなたの身請けでござんすえ。

源五　知れた事、小万が身請けサ。

さい　そんなら小万さんは合點かえ。

源五　ヤア。

さい　あの子とは、同胞同然に懇ろにするわたし。心根はとつくりと聞いて居ますが、お氣の毒な事なれど、小万さんは。

ト源五兵衛キツとなる。

サア、お腹を立てなさんすな。お前さまを、きつう嫌うてぢやぞえ。

ト源五兵衛、思ひ入れ。

宅左　ムウ、なに、そりや、小万は源五兵衛を嫌うて居るか。こりや、さうありさうなものぢや。また彼奴が女房になるや否や、おッつけ喰ひ物に盡きて、夜鷹にかな賣るであらう。こりや得心せぬは至極尤もだわい。

ト源五兵衛、ムッとして、又氣を替へ

源五　おさい、お身が小万どのと入魂は知らねど、廻しの彌助が仲立ちにて、小万は疾より承知いたして、身共に從ふ心底サ。

さい　イヽエ、そりや合點が參りませぬ。彌助といふ人はちよつくらと、よう嘘をつく人でござんすぞえ。

宅左　幸ひ、奧へ參り居れば、これへ呼び出し、樣子を糺したがよい。ソレ、おうめ。

うめ　ハイ〳〵。彌助どの〳〵。

彌助　オイ〳〵、なんでござりますな。

ト云ひ〳〵出る。

源五　彌助、これへ來やれ〳〵。

彌助　これは源五兵衛さま、先程は申し。

源五　コリヤノ\、彌助、先刻お身が申した通り、いよいよ小万は身が心に從ふ料簡。それに相違はないか。

彌助　ハイ、そりやアノ、なんでござりますわい。隨分その氣はその氣ぢやけれど、ちつとそこに、マア、私しが惡うは致しませぬ。この彌助に任して置いて下さりませ。

さい　そりや覺束なうござんすわいなア。

ト此うち、向うより幕前の善六、風呂敷を持つて出て

善六　イヤ、御免なされませ。內方に源五兵衛さまといふ……オヽ、そこにござります。

彌助　コレ、てまへは損料屋の善六ぢやないか。

善六　オヽ、彌助どの、ねつから逢ひませぬ

彌助　貴様、源五兵衛さまと近付きか。

善六　近付きの段かいの。大事のおれが仕送りのお得意。イヤ申し、後にこれまで來いと仰しやつたゆゑ、わざわざ參りました。ハイ、損料を受取りませうか。

彌助　コレ/\、貴様、そりや何を云ふのぢや。爰はどこぢやと思ふ。なんぼ浪人でござつても、源五兵衛さまというては、この島で今發向の大盡。それにてまへ連れの物を借らつしやるやうな御仁體ぢやない。門違ひか、但し氣が狂ひはせぬか。

善六　狂人とは有り難い。何も知らざア云うて聞かさう。この二十日あまり先に、この和郎が、大和町の座敷から呼びにおこしたで、夏冬の物を十ばかり貸うた。それが根になつて、呑み込んだ衣裳の損料二十貫あまり、今日取りに行たれば、今夜この內で、お國の御家老と對談、歸參が叶ふによつて、金を渡す程に、取りに來いとの約束。こなたが何も知つた事ぢやない。退いて居やれ。サア、源五兵衛さま、待つ程は待つてある、損料受取りませう。

ト源五兵衛、默つて俯向いて居る。

どうだ、返事せぬか。物云はぬかいの。うんだものが、潰れたとも云はぬは。エヽ、そんならこりや、やつたのぢやな。金が無きや、脫げ。サア、脫げやい。エヽ、キリ/\と脫がさらせ。

ト立寄つて羽織着付けを脫がせ、源五兵衛、襦袢一つになる。

オヽ、よい態ぢや。何ぢややら、侍ひで候ふの、源五兵衛ぢやのと、損料もおこさず、おれが代物を澤山さうにエヽ、コレ、いま/\しい。いくら損が行くやら知れぬわい。こりや持つて歸るが、云ひ分はあるまい。あつて堪るものか、大泥坊め……コリヤ、損料は明日、大和町へ

行て、疊上げても取らにや置かぬ。生馬の目を拔く、この善六ぢや。そんなで行くのぢやないぞよ……イヤ、皆樣、おやかましうござりませう。ハテ、けちな野郎めだわい。

ト云ひ〳〵、風呂敷包みを持つて向うへ入る。此うちおさい、氣の毒なこなし。宅左衞門、思ひ入れあつて側へ行き

宅左　勝間源次兵衞どのゝ御子息、源五兵衞どの、先刻貴殿何とやら仰せられたな。オヽ、さうだ。若殿が千兩にて根曳きなさるれば、此方は二千兩、その二千兩の内を百兩ばかり、借用いたしたいが成りますまいか。御浪人なされても、金銀澤山と見えて、損料借りの衣服、我れ我れの面前でこの態。何れも見さつしやれ。これが勝間氏の御子息の態でござるか。ハヽヽヽ。ハテ、笑止千萬。

トおさい、源五兵衞が側へ坐つて

さい　源五兵衞さま、お前はマア、ほんに其やうなお方ぢやとは知らなんだわいな。おうめさん、今日からモウ、此やうな客人は内へ寄せぬがよいわいなア。何ぢやか來る度に、イヤ禰袢拵らへてやらうの、簪を買うてやらうのと、空贅澤の嘘八百、今までアタフタ勤めたと思や、ほんに、あんまりの事で呆れ返る。彌助どの、お前はマア、お馴染か知らぬが、此方の内には、マア、此やうな客は寄せられぬ程に、早う追ひ出して下さんせ。サアサア、モウ、その形で、キリ〳〵歸つておくれえ。

彌助　ヤレ、旦那、源五兵衞さま、こりやマアどうでござりますぞいな。お前ばかりは、斯うであらうとは、今の今まで知らなんだわい。ほんに、人といふものは、見かけには依らぬものぢやな。愛想もこそも盡き果てた。この後辻で逢うたとも、彌助々々と澤山さうに云うて下さりますな。外聞が惡いわい。さうしてマア、太平樂を放しかけて、藝者さまを口說いてくれ。よう小万さんが得心せなんだ。どうでもあの子は賢い。モシ、返事が出來たら、簪がな拔くであらう。オヽ、怖々。時に、その態で見苦しい。茶屋の内に居ては、第一緣喜が惡い。サア、歸らんせ、行かんか。腰が拔けて立たれぬか。立たざ、おれが斯うして。

ト手を取つて引立てようとするを源五兵衞、彌助が首筋取つてグッと引附け

源五　こな恩知らずめが。そも小万に執心の始めより、度

度の無心合力。多くの金銀をくれ、恩を見せたるうぬ。餘人は格別、うぬばかりは斯うあらう筈はない。コリヤ、恩を知らぬは人面獸心、うぬだけだぞよ。

ト ひしぎ附ける。

彌助　イヤサ、それは。

源五　エヽ、なんとしてくれう。こな、犬畜生め。

ト突き放す。此うち上手の中二階を明け、小万出て、聞いて居て、いろ／＼思ひ入れある。この時、フト源五兵衛、中二階を見て

ヤア、小万。

ト寄らうとするを、おさい隔て

さい　イヤ、小万さんは、わたしが所の揚げでござんすわいな。必らず側へ寄つて下さんすな。

ト源五兵衛こなしあつて、チッと下に居て

源五　小万、最前からの樣子は聞いたであらう。そちや何と思うてくれるぞ。

小万　源五兵衛さま、あの千太郎さまは、お前のお主ぢやげな。それに今までは、深切なよい氣なお方ぢやと思うて居たが、お侍ひにあるまじい、お主の心をかけてござるこの小万を、しつかう口說かしやんすとは、不忠とやら、不義とやら、

ト源五兵衛ギックリ。

そんなお方の相方になつては、里の意氣地が立ちませぬ。この上はフッツリと、思ひ切つて下さんせいなア。

源五　すりや、これまでの心盡しも。

小万　千日の茅が、今宵一夜さ。

源五　そりや又あんまり。

ト行かうとするを、おさい、キッと留める。小万、障子ピッシャリ。源五兵衛、いろ／＼あつて、ドッと下に居る。

宅左　イカサマ、お江戸は繁華、いろ／＼の化物が徘徊いたす。コリヤ、おさい、今宵は何か面白くない。若殿にもさぞ御退屈にござりませう。座敷を替へて、呑み直しませうか。

千太　それがよい／＼。又飲んで、三五兵衛が返事を聞かねばならぬ。

伴右　それよりは、藝者太鼓の大寄せは、どうござりませう。

彌助　左樣ならば、飛切りの藝者さんを、十組ばかり揃へて參りませう。

佐十　こりやよからう。彌助、早く働らけ〳〵。
彌助　畏まりました。
三四　そんなら、どなたもマア奥へ。
皆次　わたしらも御一緒に。
皆々　打ち混じて、騒げ〳〵。

ト踊三味線になり、彌助は向うへ、右の一件皆々奥へ入る。おさい、續いて行かうとして、源五兵衛を見て、氣の毒なる思ひ入れ。しめやかなる合ひ方になる。源五兵衛、始終手を組み、俯向いて居る。よき程に中二階の障子を明け、小万、おさいを招き、囁やき、風呂敷包みを取寄せ、着替へを出す。おさい、心得、持つて下りて、ソッと後より着せて入る。源五兵衛、稍あつて、頬を上げ、こなしあつて、右の着替へに下括りにて帶を締めて、大小を差し、着付けを裾にて引上げ、行かうとして、剝出しにてはといふ思ひ入れ。小万、手拭掛けの手拭を取つて、投げてやる。源五兵衛の肩にかゝる。源五兵衛、振り向く。小万、又障子さす。頭になる。源五兵衛、ツカ〳〵と表へ出る。この時、向うよりぞめき一人出て來る。源五兵衛、小隱れして臆病口へやり過し、右の手拭を頰冠りにして、向うヘツイと走り入る。始終此うち合ひ方にて、小万、二階より、そろ〳〵下りて來て、門口の方へ行くこなしあつて

小万　源五兵衛さま、よしないわたしが事ゆゑに、さま〴〵の憂苦勞。これまでのお志し、それを無にするのみならず、心に思はぬ愛想づかし、さぞ腹が立つたでござんせう。これも矢ツ張りお前のお爲、堪忍して下さんせ。堪へて下さんせ。見るにつけ聞くにつけ、ほんに里の勤めほど、果敢ない悲しいものはないわいなア。

ト思ひ入れある。合ひ方になり、下の方の中二階を明け、三五兵衛出て

三五　小万〳〵。
小万　ヤア、三五兵衛さま。
三五　コリヤ、密かに〳〵。

ト中二階より下りて來て、あたりを見廻し、こなしあつて

小万。改め云ふには及ばねど、いつぞや始めて出合ひし時、變つたはずみで云ひ交し……跡で聞けば、若殿千太郎さま、桝屋にて見染め給ひ、其方に御執心。南無三寶、死せしと悔めど歸らぬ後の祭り。お國よりは日々の

早飛脚。三五兵衛の心は早鐘。千島のお家を納めるは、小万、其方が心一つ。思案極めて返事が聞きたい。

小万　すりや、最前の仕儀といひ、お前と云ひ交はした事を、云ふに云はれぬ忍び合ひ。なんぼ藝者のわたしでも、一旦斯うと思ひ込んだる心の操。

三五　サア、その操をほどいて欲しい。

小万　そんなら、若殿千太郎さまに。

三五　靡いてたも。

小万　エ、。

三五　サア、一旦請合つた三五兵衛。其方が心に従はねば、御歸國はなされぬとある。愚かしうても武士の意氣地、千島の御家風。

小万　ムウ。もし又わたしが靡いた上では、お前の心は。

三五　身共が心底。

〽いつまで草のいつまでも、なま中まみえもの思ふ。

ト側にある三味線を見て取上げ、硯を取つて來て、裏皮へ五大力と書いて渡す。小万、これを見て

小万　この三味線の裏皮に、五大力と書かしやんしたは。

三五　その三味線は藝者の魂ひ、それに五大力と書いたは一旦云ひ交したれど、お主の思ひもの。この上は、猥りに其方が事思はぬと云ふ、心の封じ目、誓ひの五大力。

小万　イヽエ、それではわたしが

三五　思ひが濟まぬか。

小万　サア、たとへ嫌でも、お前の餘儀ないお頼みなれば殊によつては嫌ながら、千太郎さまのお心に、従ふまいものでもござんせぬが、それもお前、わたしが心は。

ト思ひ入れある。また唄になる。

〽たとへせかれて程ふるとても、縁と時節の末を待つ、なんとせう。

ト此うち小万、右の五大力を三五大切と書き直して

小万　コレ、この通り。

ト三五兵衛に見せる。三五兵衛、取つて

三五　ムウ。こりや、五大力に筆を加へて三五大切……これは。

小万　二世も三世も替らぬといふ、起請代りの三五大切、お前も必らず。

三五　ヤ。

小万　わたしや死んでも、離りやせぬわいなア。

ト思ひ入れあつて、ひつたりと抱き附く。三五兵衛もこなしある。所へ向うより、奴一人、状箱を持ち出て

奴　誰ぞ頼まう。これに笹野三五兵衞さまはござるか。お藏屋敷から火急のお使ひ。

トこれにて兩人こなしあつて、三五兵衞立ちあがり

三五　お身は鹿兒島十次兵衞どのゝ御家來でないか。

奴　これは〳〵、三五兵衞さま。お旦那十次兵衞さまより火急の密事。卽ち御狀、慥かにお渡し申しました。

ト狀箱を渡す。三五兵衞、取つて

三五　慥かに受取つたと申してくりやれ。使ひ大儀。

奴　アイ〳〵。然らばお暇。

ト云ひ捨てゝ引返し、奴、向うへ入る。小万こなしあつて

小万　申し、なんぞ氣遣ひな事ぢやござんせぬかえ。

三五　火急の密事とは心元ない。何にもせよ。

ト封を切る。

ナニ〳〵「密かに申し送り候ふ、大殿御病氣の樣子、至極御大切の儀、猶御家督相續の御上使として、當所より多度津閣書さま、明朝寅の一天に御出立のよし仰せ渡され候ふ、然らば千太郎さま御儀、御歸國延引に及ぶ時には、千島の家沒收と存じ候ふ。出石、賤ケ谷等の佞人、お側にこれあり候ふ上は、貴殿密かに藏屋敷まで御供いたさるべく候ふ、猶出立までに、直々申し入れたき一大事これあり候ふ間、早速御入來御待ち入り候ふ」……ヤア〳〵、すりや、御家督の御上使には、明朝寅の刻に、御當所を御出立とは。ムウ。

トきつと思ひ入れあつて

さうぢや。

ト腹切らうとするな、小万、縋り、あわてゝ留めて

小万　コレ、待つて下さんせ、三五兵衞さま、何ゆゑお前は。

三五　切腹せねば武士が立たぬ。小万、留めな。放せ〳〵。

小万　イエ〳〵、マア〳〵、待つて下さんせ。コレ、樣子をとつくりとわたしにも。

三五　云ふに及ばぬ、知れた若殿のお身の上。御執心の小万、其方がお心に從はねば、なか〳〵御歸國なされず。そのお心に從へといふ其方には、この三五兵衞が云ひ交し、賴めど聞かぬは女の道。これとても無理ならず。おやと云うて、お家の大事にノメ〳〵と、なに面目で生きて居られうぞ。

小万　そんならお前は、若殿千太郎さまの戀ゆゑに。

三五　この身を果さねば、こりや人でないわい。

小万　コレ、マア／＼待つて下さんせ。お前の武士を立てませう。

ト又死なうとする。

三五　ヤア。

小万　サア、千太郎さまのお心に従ひますわいなア。

三五　すりや、得心して若殿と

小万　寝るほどにコレ

ト引廻して

必らず早まつて下さんすなえ。

三五　ムウ、出かした。小万、よく得心してくれたな。

ト小万、こなしあつて、又三味線を取上げ

小万　コレ、この三味線が起請代りの

三五　三五大切。

小万　外へは解かぬ五大力も

三五　胸の誓ひの封じ目しつかり。

小万　破る心の苦しさを

三五　推量して、コレ

ト裏皮を小柄にて切り取る。

起請代りの志し。

小万　そんなら、三五大切を

三五　エ、忝ない。

ト右の裏皮を戴き、懐へ入れる。

小万　それでわたしも

ト思ひ入れあつて

嬉しうござんすわいなア。

ト互ひにこなしあつて

三五　この上は、身共は直ぐに蔵屋敷、十次兵衛どのにお目にかゝり、御出立の手番ひを申し合せ、直さまお迎ひ。その間に小万、若殿にナ、とくと合點か。

小万　アイ／＼。

ト心にて愁ひ。

三五　必らず頼んだぞ。

ト表へ出ようとする。

小万　ア、コレ、申し。

ト三五兵衛立ちどまる。

未來までもお前と。

三五　ハテ、刀に懸けて。

小万　それがせめての……イヤ、わたしが樂しみ。

三五　その樂しみは苦しみの

小万　若殿さまに

三五　しつぽりと
小万　それも誰れゆゑ
三五　三五大切。
小万　引くに引かれぬ
三五　誓ひの三味線、小万
小万　三五兵衛さま
ト兩人、心意氣あつて
三五　其方の吉左右、待つて居るぞや。
ト また五大力の唄になり、合ひ方にて、向うへツイと走り入る。四ツの鐘鳴る。小万、後見送り、いろ〳〵思ひ入れ、こなしあつて
小万　申し、三五兵衛さま、お前の命を助けたいばつかりに若殿さまのお心に從ひますと云うたは、みんな僞り。眞實誠は、死ぬる覺悟でござんすわいなア……せめては後の云ひ譯に、一筆殘す藻汐草。さうぢや〳〵。
ト また獨吟になり、小万、硯箱を取上げ、中二階へ上がり、書置にかゝる。
〽變る色なき御風情、やがて逢はぞへ語ろぞえ、惜しき筆とめ候かしく。
ト 此うち向うより源五兵衛、内着の羽二重と着替へ、尻引ツからげ、彌助を引立て、拔刀を差しつけながら出て來て、門口にて
彌助　申し〳〵、お約束なれば、小万を呼び出して、お前に渡しましたら、私しはお助けなされて下さりませ。
ト 源五兵衛、頷づき、門口を明け、彌助を突き飛ばす。彌助、燭臺に行き當り、闇になる。
うめ　誰れぢや〳〵。
ト 何心なう奥より出る。彌助、おうめを捕へ「それ」と聲かけ突き出す。源五兵衛心得、一かせ切る。おうめ「ワツー」と反る。彌助、うろたへ探り廻つて、奥へ逃げて入る。此うち始終合ひ方、靜かに時の鐘。源五兵衛、おうめを探り見て、頭を撫で、こりや違うたといふ思ひ入れにて、是非なう奥を窺ひ、行かうとする所へ、三四郎、奥より探り出て
三四　これはしたり、なぜ灯を消した。
ト 云ひ〳〵、源五兵衛に突き當るを、源五兵衛、持つたる刀にて、三四郎ズツと後より撫で、入る。
何者だ〳〵。
ト 云ひながら頭のひやりとする思ひ入れにて、二足程歩きて、バツタリと二つになつて倒れる。此うち中二

階には、小万書置を認めしまひ
小万　覺悟極めて、書置に、詳しう書いて置いたれど、ま一度お名殘に、三五兵衞さまのお顔。
ト思ひ入れあつて
逢ふは別れの、始めと思へども今更に……どうやら名殘が惜しいわいなア。
ト泣く。此うち源五兵衞、後より中二階へ出て
源五　小万、小万。
小万　ヤア、源五兵衞さま、いつの間に。
源五　其方にこれまでの禮を。
ト切り附ける。小万「あれえ」と中二階より飛んで下りる、源五兵衞、續いて飛んで下りる。一かせポンと切る。また逃げる所を追ひ廻して、切り込み、小万が髮を手にからまき、眞中へ引摺つて來て、グツと刺し通す。此うち始終合ひ方、時の鐘、よろしくあつて、源五兵衞、小万が首を搔き、ニツタリと笑ひ、直ぐに首を有りあふ前垂れにて包み、しつかりと腰にまく。此うち彌助、ソロ〳〵逃げて出て、表の方へソツと出ようとする所へ源五兵衞出かゝるゆゑ、ちやつと身を縮め片寄る。
源五　誰れだ〳〵。
彌助　ワン〳〵。
ト犬の眞似する。
源五　犬めだな。
彌助　ロウ〳〵。
源五　彌助の病犬め、うぬもいつそ。
ト同じく切り倒し、止めを刺し、向うへ行かうとする所へ向うより、土手助・奴の形にて出かゝる。これにて源五兵衞、ちよつと身を背ける。土手助、本舞臺へ來て
土手　誰ぞ賴まうぞよ、賤ヶ谷伴右衞門さまへ、お國許より大切な密事のお使ひ。
ト云ふ所を後より寄つて眞二つに胴切りにする。土手助、骸二ツになる見得。源五兵衞、刀を拭ひ、鞘に納め、右の密書を取つて披き、星影に透かし讀みながら靜々と、向うへ入る。引き違へて向うバタ〳〵にて、八右衞門、条本の提灯を持つて走り出て
八右　ハテ、合點のゆかぬ。どこで旦那に間違つたぞ。怪しからぬ胸騒ぎといひ、エヽ、コレ、何事もなければよいが。

ト云ひ〳〵、本舞臺へ來て
旦那はこれへ見えたか。おうめどの〳〵。
トおうめが死骸に爪づき
ヤア、こりやどいつやら。
ト提灯にて見て
ヤア〳〵、こりや女めが殺されて居る……オヽ〳〵……
小万さんも。オヽ。ホイ。
ト驚ろき、ドッサリ下に居ると、奥より佐十郎、早助手燭を持ち出て、この體を見て
早助　ヤア、こりや、小万が最期は、源五兵衛の仕業。
佐十　その家來の八右衛門、此奴を囮に人殺しの詮議を。
ト兩方より引立てようとする。
八右　さてはお旦那が。エヽ、これだに依つて。
ト振り放して行かうとする。
兩人　おのれを。
ト引戻す立廻り。三人、血に辷る。立廻りあつてよろしくとまる。ちよん〳〵。この見得にて道具廻る。
造り物、元の大和町貸座敷になり、矢張り合ひ方、時の鐘にて道具とまる。

ト向うより源五兵衛、右の形にて戻つて來て、門口を無理に引明ける。眞くらがりゆゑ、どうせうといふこなしある所へ、向うより風鈴の夜鷹蕎麥賣り、荷に長行燈を附け、かたげて出る。源五兵衛、幸ひと、右の蕎麥荷の行燈を取る。蕎麥賣り「ヤアそれは」と惘りするを、刀をヒラリと拔く。蕎麥賣りうろたへ、荷をかたげながら逃げて入る。源五兵衛、右の行燈を持ち内へ入り、手水鉢にかゝり、水を汲んで見ても汲めぬとくと見れば底拔けであり「エヽ」と打ち附け、土瓶を取つて來て、この水にて前垂れを解き、首を出し洗ひ、緣の取れたる挾み箱を取つて來て、この上へ載せる。小万の本首出る。源五兵衛、七輪を取つて來て、印籠の焚き物を焚き、回向する思ひ入れ。此うち向うより捕り手大勢連れ、三五兵衛、直ぐに本舞臺へ來て、門口に窺うて居る。捕り手殘らず引返して向うへ入る。内に源五兵衛こなしあつて
源五　小万、片田舍に產まれし源五兵衛、情を知らぬ不束者、武骨者とさぞや恨んであらう。不便の至り、不義不忠にあらぬ云ひ譯、一通り聞いてくれ。先月中旬、身が父源次兵衛どの方より密かの飛脚。この大和町の旅宿へ

尋ね來り、仰せ越されし趣きは、若殿千太郎さま御出府の折から、小万といふ藝者の艶色に迷ひ、御歸國御承引なき趣き、お側に付添ふ佞人ばら、燃ゆる火に薪の譬へ。大殿には御不例なれば、一刻も早く御歸國ならでは、お家お國の一大事、何卒其方、思慮を廻らし、小万を退け、若殿の御入國を計らひくれよと、親どもよりくれ／＼の頼み。幸ひ當所に居る身共なれば、それより遊所へ入込み、餘所ながら窺へば、情なや若殿、佞辯に迷はされ、いよ／＼募る御放埓。この災ひの根を斷つには、小万を口說いて手に入れなば、不實の女と若殿も、御本心におなりなされんと、思ひ付いたる身共が苦心。金銀調度はいふに及ばず、重代の差添まで手放して、いろ／＼心を盡せども、承引せぬは天晴れ、勤めの身には似合はぬ貞女の鏡。然るに今朝、又々親どもより火急の書面。今宵寅の一天に、家督相續の御上使、當所を御出立との知らせに、南無三寶、遲なはりし、この上は是非に及ばず、小の蟲を殺して大國の納まりと、不便ながらも手にかけ若殿の迷ひを斷ち切らんと、さてこそ斯くは計らひし源五兵衛が、不忠にあらぬ身の云ひ譯、小万が首に魂ひ止まらば、草葉の蔭より必らず恨んでくれるな。千島のお家相續の上は、其方が後の問ひ弔ひ、この身は人殺しの下手人になるとても、國許へ申し殘し置けば、未來成佛いたしてくれ。南無阿彌陀佛々々々々々々々。

ト合掌して愁ひにて回向する。此うち三五兵衛も門口にて泣いて居て、この時

三五　ハヽア、天晴れ忠義の源五兵衛どの。

ト内へ入る。源五兵衛、ちやつと思ひ入れあつて、首に前垂れを掛け

源五　思ひがけなき、御身は、笹野三五兵衛。

三五　委細はとくと承りて、驚ろき入つたる御心底。拙者とてもその事に、心付かぬにはあらねども、若殿御執心の女なれば、御知行頂く身の、無下に殺害もなり難く殊に又人知れず、兼ねて小万と密通の拙者なれば、とくと申し含ませ、承引させて、お心に從はさんと、さまざま心を盡せども、遊里に稀れなる彼れが貞節は、却つてこの身の仇敵。武運に盡きしと覺悟して、腹かッさばかんと致せしゆゑ、やう／＼に得心せしが、さては我が命に代り、死ぬる覺悟であつたるよな。

ト思ひ入れあつて

さうとは知らず、屋敷へ立越え、明朝の御出立、手番ひ

申し合せ、立歸つて見れば、彼所の騷動、若殿には其許を、一途に小万が敵と思し召し、首討つて歸れよとの上意。當所の代官へ斷わりを立て、望んで捕り手に向ひし三五兵衞。御心底を承れば、矢張り主人へ對して大忠臣。憚りながら拙者も、感心仕つてござる。源五兵衞どの。

源五　三五兵衞どの、貴殿に巡り合はずば、死後までも源五兵衞は、色に迷ひしうつけ者、不忠の者と世の人口、若殿のお怒りを請けずんもの、今際の本望この上なし。

ト前に土手助が持つて出た密書を出し

コレ、この密書は、出石騷ケ谷の者どもへ、本國の佞人ばらより內意の書面。これを證據に、お家に仇する不忠の奴ばら、一人も殘らず追ひ退け、我れ死後の惡名を晴らしてくりやれ。申し置く事これはかり。三五兵衞、介錯頼む

ト腹切らうとする。

三五　待つた、何ゆゑの御切腹。

源五　今は主なき素浪人、町人にもせよ、多くの者を手にかけたれば、下手人となつて、見苦しく繩にかゝつては屍の恥辱……ゆゑに依つて、

ト又腹切らうとするを、よろしく留めて

三五　イヤサ、忠義全き貴殿なれば、若殿へ申し上げ、御歸參あれば、千島の御家老。慮外いたせば、幾人でも切捨て〳〵。先づ〳〵。

ト無理に留める。源五兵衞、思ひ入れあつて

源五　ムウ。實に尤も。惜しからぬ命なれど、長らへるも忠孝。

三五　拙者は直さま若殿へ、この趣きを申し上げ、お身の御歸參。

源五　油斷ならざる出立の刻限。

三五　然らば此まゝ。

ト行かうとするを

源五　三五兵衞、待ちやれ。

三五　御用かな。

ト源五兵衞、首を取上げ

源五　お身が一日の情に依つて、百歳の命を誤まつたる小万が貞女。せめて一遍の回向なりとも。

ト三五兵衞、振り返り

三五　不便や小万。南無。

ト拜まうとして、思ひ入れあつて

おさらば。

ト一散に向うへ走り入る。源五兵衛、首を見て、ホロリと溜息つく。これにて、ちよん／＼と返し。

造り物、高塀、裏通りの體にて、爰に宅左衛門、伴右衛門、向うと臆病口より走り出て來て、行き合ひ

作右　宅左衛門どの、源五兵衛めが途方もない事仕出かして、亂騷ぎでござる。その上、國許より參りし飛脚の土手助を殺したれば、我れ／＼へ、參る密書は、彼奴が手に入つたと思はれます。

宅左　大事ござらぬ。何も騷ぐ事はない。源五兵衛めは今浪人、大勢を手にかけたれば、天下の科人、代官所の捕り方に、我れ／＼も加勢して生捕り、打ち殺せば密書の詮議もその場切り。

作右　こりや御尤も。

ト靜かなる太鼓になる。

あの物音に、源五兵衛を捕り方の役人。

宅左　早速駈付け討取つて、災ひの根を斷たん。伴右衛門どの、ござれ。

ト宅左衛門、作右衛門、又向うへ走り入る。返し

右の高塀、兩方へ引分ける。うしろ打拔き木場の模様にて、提灯松明にて、源五兵衛、眞中に大童、これを捕り手、梯子にて圍ひ、前へ出て、これより梯子のタテよろしくあつて、皆々を追ひ込む。手桶の水を汲んで呑み、一息つく所へ、宅左衛門、作右衛門、凛々しき形にて、兩方より出て

宅左　若殿御寵愛の小万を手にかけた源五兵衛。

作右　まだその上に三四郎、彌助、飛脚、女まで、以上五人の人殺し。

宅左　遁がれはあるまい、覺悟せい。

源五　ヤア、お國に仇する犬侍ひ、刀次手に、うぬら、覺悟ひろげ。

兩人　なにを。

ト双方より切つてかゝる。少し立廻りあつて作右衛門を切り倒し、宅左衛門が懷中より呼子を取出し

源五　これこそ、紛失と聞きたるお家の重寶、龍虎の呼子。さては宅左衛門、うぬが奪ひ取つたな。

宅左　それを。

ト寄るをポンと切る所へ、捕り手大勢、バラ／＼と出

て。

捕手　やらぬぞ

ト取巻く。バタ／＼にて三五兵衛、八右衛門走り出て

三五　待つた／＼。源五兵衛どのには御歸參、理不盡の計らひはなりますまい。

捕手　でも、大勢殺せし科人。

八右　その科人は、若黨八右衛門、イザ、繩をかけてお引きなされい。

ト眞中へ出る。

源五　すりや、八右衛門が。

三五　イヤサ、何事も本國よりの御沙汰あるまで。

源五　紛失の呼子も奪ひ返したれば

八右　千島のお家お國も治まり。

三五　若殿の御歸國、出立の御供。

源五　めでたい／＼

先づ今日はこれぎり。めでたく

打出し

# 略三五大切（終り）

# 解說及年表

渥美清太郎

初代並木五瓶が、三世澤村宗十郎に隨つて江戸へ下つたのは、寛政六年十月で、彼れが四十八歳の時、芝居は宗十郎の出勤する堺町の都座であつた。下り早々、彼れは宗十郎の爲に時代狂言を書いた。宗十郎の威光で、初下りではあるが立作者に据ゑられたので、充分に念を入れて執筆した脚本は、「花都廓繩張」といふ天草軍記であつた。所が、それは大失敗であつた。上方風丸出しの脚色振りは江戸の看客には全然向かず、散々な不評を招いだのであつた。併し、彼れは第一作の失敗に挫けなかつた。彼れは忽ちのうちに江戸看客の嗜好を觀破し、江戸の作者の短所を知り、自分の赴く方針を定めた。前作とはガラリと行き方を變へて發表したものが、本卷の卷頭に載つてゐる「五大力戀緘」であつた。これが非常な評判を取つたので、彼れは一躍大家になつてしまつた。この狂言は、前年の二月、大阪の中座で同じ宗十郎に書き卸したものを、江戸向きに訂正したに過ぎぬのだが、その「江戸向き」の眞髓を彼れは素早く獲得しまつたので、非常な喝采を得たのであつた。「五大力戀緘」は、彼れが第二期の出世作といふべきものである。

彼れは、なか／＼の英斷家で、江戸芝居の古例を、隨分改良した。從來、春の曾我狂言は、名題が一本で、全然違つた内容の二番目狂言が附いてゐても、別に名題は設けず、何々曾我の一本で通すのが習慣であつたが、この時彼れは構はずに、「江戸砂子慶曾我」「五大力戀緘」と、一二番目とも違つた名題を附して、古例を破つた、といふ說が傳はつてゐる。五瓶が江戸芝居の古例を、いろ／＼改めたのは事實であるが、この時の紋番附を見ると、二番目の名題は見えず、矢張り「江戸砂子慶曾我」の一本しか名題が書いてない。これは再演の折からだらうと思ふ。「五大力戀緘」といふ名題が出來たのも、再演の時であらう。初演には特別の名題が無かつたものであらう。この脚本に「春花五大力」といふ、年代記にも無い名題を附されてゐる事があるが、これも最初特別に名題が無かつた爲、いゝ加減に賦されたものではなからうか。

彼れが江戸の看客に迎へられたといふのは、世話狂言に巧みなからであつた。否、彼れが江戸向きな世話狂言を器用に作つたからであつた。彼れの覘ひ所は、從來の江戸世話物が、慣習に災ひされて、兎角複雜に過ぎて、筋の通らぬ憾みがあつたのを、彼れは改良して、非常に簡單なものとした。さうして、今まで練熟して來た上方式技巧の長所を加味して、目新らしくした。第二には、寫實に留意した。

江戸の寫實劇は、先輩の初世櫻田治助が始めてゐたが、未だ生温いものであつたのを、彼れは一層突込んで、市井のスケッチに特に力を用ひた。氣分描寫といふやうな點に、非常に重きを置いたものであつた。この二點が、江戸人に歡迎されたので、寛政の半から文化の初年までの江戸劇壇に覇を稱へる事を得たのである。

本卷には、彼れが第二期での出世作である「五大力戀緘」を始めとして、江戸劇壇を驚かした世話狂言の傑作八篇を聚めた。いづれも前記の長所を具へた五瓶の後半期の代表作で、同時にその當時の世話狂言の代表作である。

## 五大力戀緘（ごだいりきこひのふうじめ）

元文二年、薩摩の侍で早田八右衛門といふ者が、大阪曾根崎の藝子菊野になじみ、時計修繕の官金を費消した結果自暴自棄的に菊野を始め五人を切り殺した、有名な事實を脚色したものである。同じ材料の脚本は數多くあるが、この作は最も有名であり、すぐれてもゐる。寛政六年二月、大阪中座で、宗十郎の爲に「島廻戯聊書（しまめぐりうそのききがき）」といふ瑠璃責めの狂言を脚色した、その二番目にこれを附加して評判を取つたのを、五瓶が江戸下りの翌年、寛政七年二月の都座に、更に改訂上場したものである。その行はれた事は、二幕目に使つたメリヤスの「五大力」が、今日猶流行して、子供の手まどき唄になつてゐるのでもわかる。

初演以來の役割の年表を掲げて置く。

| 年月 | 座 | 名題 | 源五兵衛 | 小万 | 三五兵衛 | 八右衛門 | 彌助 | 千太郎 | おこの | 宅左衛門 | 六右衛門 | 土手平 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 寛政七年二月 | 都座 | 五大力戀緘（ごだいりきこひのふうじめ） | 澤村宗十郎 | 瀬川菊之丞 | 片岡仁左衛門 | 阪東三津五郎 | 嵐龍藏 | 澤村春五郎 | 中村のしほ | 大谷廣次 | 大谷德次 | 中村藏 |
| 寛政十年九月 | 桐座 | 五大力戀緘 | 澤村宗十郎 | 瀬川菊之丞 | 大谷友右衛門 | 阪東三津五郎 | 澤村東藏 | 市川男女藏 | 松本米三郎 | 尾上雷介 | 中村傳九郎 | 松本桃太郎 |
| 享和三年六月 | 市村座 | 五大力戀緘 | 澤村源之助 | 瀬川路之助 | 市川男女藏 | 市川門三郎 | | 松本七藏 | ｜ | ｜ | ｜ | ｜ |
| 文化十年四月 | 森田座 | 五大力戀緘 | 尾上新七 | 岩井半四郎 | 澤村四郎五郎 | 市川團十郎 | 桐山紋次 | 阪東大太郎 | ｜ | 市川團十郎 | 桐島儀右衛門 | ｜ |
| 文化十三年六月 | 桐座 | 御ぞんじ（ご）五大力（ごだいりき） | 關三十郎 | 瀬川菊之丞 | 坂東又重郎 | 花井才三郎 | 阪東善次 | 中村村右衛門 | 市川瀧三郎 | 大谷門藏 | 大谷候兵衛 | 關三平 |

| 年月 | 劇場 | 外題 | 配役 | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 文政三年五月 | 河原崎座 | 御ぞんじ五大力 | 市川團十郎 | 市川門之助 | 市川鰕十郎 | 市川門三郎 | 淺尾友藏 | 市川茂々太郎 | 中村大吉 | 市川常十郎 | 大谷馬十 | 松本小次郎 |
| 文政八年六月 | 河原崎座 | 五大力戀緘 | 市川團十郎 | 岩井紫若 | 松本幸四郎 | 中山富三郎 | 澤村しやばく | 阪東好藏 | 市川三之助 | 市川宗三 | 大谷門藏 | 市川染五郎 |
| 文政九年七月 | 河原崎座 | 御ぞんじ五大力 | 市川團十郎 | 瀬川菊之丞 | 片岡仁左衛門 | 三枡源之助 | 松本幸四郎 | 片岡我十郎 | 瀬川路之助 | 市川鶴藏 | 桐山紋治 | 中島勘左衛門 |
| 天保二年三月 | 河原崎座 | 五大力比翼三紋 | 澤村源之助 | 瀬川菊之丞 | 市川團十郎 | 市川壽美藏 | 松本幸四郎 | 市川團四郎 | 市川富瀧 | 嵐七五郎 | 市川新猿 | 市川團九郎 |
| 天保四年三月 | 市村座 | 五大力戀緘 | 市川團藏 | 中村みよし | 阪東三津五郎 | 市村羽左衛門 | 片岡市藏 | 市川團十郎 | 小佐川常世 | 市川團三郎 | 坂東三津右衛門 | 坂東三津右衛門 |
| 天保四年七月 | 河原崎座 | 五大力戀緘 | 鰕三郎高麗藏 | 瀬川多門 | 高麗藏鰕三郎 | 中島勘藏 | 尾上梅五郎 | 市川今六 | 尾上きんし | 市川鶴助 | 坂東彦左衛門 | 松本麗助 |
| 天保四年七月 | 中村座 | 五人切籠一日替 | 海老藏芝翫 | 嵐龜之丞 | 芝翫海老藏 | 澤村源之助 | 松本幸四郎 | 市川鬼一 | 山下金作 | 嵐冠十郎 | 中山文五郎 | 中村千代飛助 |
| 嘉永元年七月 | 河原崎座 | 五大力戀緘 | 澤村宗十郎 | 尾上梅幸 | 坂東彦三郎 | 松本錦升 | 大谷友右衛門 | 中村芝雀 | 市川新車 | 坂東佐十郎 | 澤村宇十郎 | 淺尾爲十郎 |
| 弘化三年五月 | 市村座 | 五大力色湊 | 市村家橘 | 坂東しうか | 中村歌右衛門 | 中村梅舍 | 關三十郎 | 中村福助 | 嵐小六 | 中村翫右衛門 | 中村芝十郎 | 坂東三八 |
| 嘉永四年九月 | 河原崎座 | 五大力戀緘 | 澤村長十郎 | 尾上梅幸 | 市川海老藏 | 尾上新七 | 關三十郎 | 市川猿藏 | 市川團之助 | 市川男女藏 | 淺尾奥山 | 市川團五郎 |
| 安政三年六月 | 中村座 | 御誂織薩摩新形 | 片岡我童 | 岩井粂三郎 | 關三十郎 | 市川團三郎 | 中村鶴藏 | 關花助 | 嵐小六 | 阪東佐十郎 | 大谷德次 | 市川米五郎 |
| 明治元年九月 | 中村守田座 | 音揃成雨勘大寄 | 阪東彦三郎 | 岩井紫若 | 中村芝翫 | 市川九藏 | 關三十郎 | 中村福助 | 尾上菊次郎 | 市川團藏 | 中村翫太郎 | 坂東薪左衛門 |
| 明治八年十月 | 中村座 | 御註文薩摩上布 | 中村宗十郎 | 岩井半四郎 | 中村芝翫 | 中村時藏 | 中村仲藏 | 中村時藏 | 嵐大三郎 | 中村成藏 | 中村鶴藏 | 坂東薪左衛門 |
| 明治卅二年四月 | 明治座 | 五大力戀緘 | 市川權十郎 | 澤村源之助 | 市川左團次 | 阪東鶴之助 | 市川壽美藏 | 澤村訥升 | 市川升若 | 勝川又吉 | 市川荒次郎 | 市川荒次郎 |

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明治廿四年六月 | 東京座 | 五大力戀緘 | 市川染五郎 | 市川莚女 | 市川壽美藏 | 市川團次郎 | 中村勘五郎 | 中村成若 | 阪東三津太郎 | ― | ― | ― |
| 大正八年十月 | 帝國劇場 | 五大力戀緘 | 澤村宗十郎 | 澤村宗之助 | 松本幸四郎 | 澤村長十郎 | 守田勘彌 | 助高屋高丸 | 尾上梅幸 | ― | 尾上幸藏 | 澤村連舍 |

## 隅田春妓女容性

寛政八年正月の桐座に、「曾我大福帳」の二番目狂言として書き卸された、今も盛んに上場される「梅の由兵衛」である。

梅の由兵衛は、元祿頃に大阪を横行した梅澁吉兵衛といふ盜賊の事を脚色したものである。芝居では男達であるが事實は盜賊だ。聚樂町に住んでゐて、丁銀板を兩替屋へ持つて行つては子銀に替へ、もう一度丁銀を見せろと云つて、手早く摺り替へる事に妙を得てゐたので、板替への吉兵衛と綽名に呼ばれてゐた。この吉兵衛が、天王寺屋九左衞門の丁稚長吉を殺して金を盜み、死骸を井戸に投じた事が發覺し、女房もろとも召捕られ、仕置になつたのは元祿二年であつた。

この事實は享保二十一年の春、江戸の中村座で「遊君鎧曾我」といふ曾我狂言の二番目に俠客として脚色され、初世澤村宗十郎が由兵衛に扮して大當りを得た。以來、澤村家の藝となり、鷺と烏の模様の着附や、「今を始めの旅衣」云々の臺詞と共に後に傳はつたのを、五瓶が又三世宗十郎の爲に、全然新らしく脚色し直したのであつた。別に又、義太夫の方へも入込んで、「迎駕籠血汐茜染」「茜染野中の隱井」等の院本も出來てゐる。

初演以來の役割の年表を掲出する。

| 年月 | 座 | 名題 | 由兵衛 | 小梅 | 長吉 | 源兵衛 | 金五郎 | 金兵衛 | 勘十郎 | おきみ | 長五郎 | 久庵 | 小さん |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 寛政八年一月 | 桐座 | 隅田春妓女容性 | 澤村宗十郎 | 瀨川菊之丞 | 瀨川菊之丞 | 嵐龍藏 | 市川男女藏 | 大谷廣次 | 坂東三津五郎 | 中山富三郎 | 大谷友右衛門 | 中村歌七 | 松本米三郎 |
| 文化七年三月 | 中村座 | 隅田春妓女容性 | 澤村源之助 | 瀨川路考 | 瀨川路考 | 市川男女藏 | 關三十郎 | 關三十郎 | 坂東彦三郎 | 相川仙女 | 中村歌右衛門 | ― | 山下龜三郎 |

| 年月 | 座 | 外題 | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 天保四年三月 | 市村座 | 勝見幢頃由兵衛（かつみごろはよしべゑ） | 坂東三津五郎 | 小佐川常世 | 坂東玉三郎 | 片岡市蔵 | 市村羽左衛門 | 市川團三郎 | 坂東三津五郎 | 中山みよし | 片岡市蔵 | 坂東三津右衛門 | 坂東玉三郎 |
| 天保六年四月 | 中村座 | 紫初由兵衛（ゆかりのいろそめてよしべゑ） | 坂東彦三郎 | 岩井紫若 | 岩井粂太郎 | 中村芝十郎 | 市川高麗蔵 | 市川高麗蔵 | 市川團三郎 | 岩井紫 | — | 中村千代飛助 | 松本にしき |
| 天保九年九月 | 中村座 | 女房盛中由兵衛（にようぼさかりなかもよしべゑ） | 中村歌右衛門 | 尾上菊五郎 | 尾上菊五郎 | 坂東彦三郎 | 尾上松助 | — | 坂東彦三郎 | 尾上菊次郎 | 尾上菊四郎 | 中村鶴蔵 | 中村歌菊 |
| 弘化元年七月 | 市村座 | 澤村咲初由兵衛（さはむらさきそめてよしべゑ） | 澤村宗十郎 | 坂東しうか | 坂東しうか | 嵐吉三郎 | 坂東鬘助 | 坂東三津五郎 | 市村羽左衛門 | 尾上菊次郎 | 浅尾工左衛門 | 市川團八 | 吾妻藤蔵 |
| 嘉永元年正月 | 中村座 | 褄二重梅由兵衛（つまかさねうめのよしべゑ） | 中村歌右衛門 | 尾上菊次郎 | 岩井粂三郎 | 関三十郎 | 尾上新七 | 市川男女蔵 | 市川九蔵 | 坂東玉三郎 | — | 中村鶴蔵 | 中村梅花 |
| 安政六年三月 | 中村座 | 對梅松契由兵衛（ついのうめまつのちぎりよしべゑ） | 片岡仁左衛門 | 尾上菊五郎 | 尾上菊五郎 | 中村鶴蔵 | 片岡我當 | — | 中村鶴蔵 | 市川團之助 | 中村翫太郎 | 中村粗蔵 | 澤村田之助 |
| 明治十九年十月 | 中村座 | 新女房中由兵衛（しんにようぼなかもよしべゑ） | 市川九蔵 | 中村福助 | 中村福助 | 片岡市蔵 | 市川新蔵 | — | 彦東彦十郎 | 嵐璃幸 | 中村勘五郎 | 中村鶴蔵 | 澤村田之助 |
| 明治廿九年二月 | 都座 | 春景色梅由兵衛（はるけしきうめのよしべゑ） | 市川九蔵 | 中村芝鶴 | 中村芝鶴 | 中村芝翫 | 市川染五郎 | — | 市川猿蔵 | 市川女寅 | 市川團七 | 市川團七 | 市川女寅 |
| 大正六年四月 | 市村座 | 御存梅の由兵衛（ごぞんじうめのよしべゑ） | 中村吉右衛門 | 尾上菊次郎 | 中村時蔵 | 尾上菊五郎 | 坂東三津五郎 | — | 坂東彦三郎 | — | 中村翫助 | 守田勘彌 | 河原崎國太郎 |
| 大正十年十月 | 新富座 | 御存梅の由兵衛 | 中村吉右衛門 | 中村時蔵 | 中村時蔵 | 坂東壽三郎 | 市川小太夫 | — | 市川小團次 | — | 中村若猿 | 坂東村右衛門 | 中村勝五郎 |
| 大正十三年五月 | 本郷座 | 御存梅の由兵衛 | 中村吉右衛門 | 中村時蔵 | 中村時蔵 | 片岡市蔵 | 坂東三津五郎 | — | 市川三升 | — | — | 尾上幸蔵 | 中村福助 |
| 大正十四年十月 | 邦楽座 | 隅田春妓女容性 | 中村吉右衛門 | 中村時蔵 | 中村時蔵 | 市川新十郎 | 坂東三津五郎 | 澤村源之助 | — | 中村米吉 | — | — | 坂東八十助 |

# 青樓詞合鏡（さとことばあはせかゞみ）

享保年中、野州佐野の百姓次郎左衛門が、吉原江戸町二丁目兵庫屋の八つ橋はじめ、大勢を切つた事は有名な事實で、早くから芝居に持出されてゐた。本篇はその書替へで、佐野は武士でワキ役になり、木屋文蔵といふ町人がシテに

輭用されてゐる。寛政九年二月、桐座に上演されたものである。

この脚本では、芝居茶屋や女郎屋の內證氣分のスケッチが非常に行届いて巧みに出來でゐる。五瓶は斯ういふ所で落を取つたのであらう。「富岡戀山開」の深川の場と並んで、五瓶が氣分描寫の上手に驚ろかされる。

| 年月 | 座 | 名題 | 文藏 | 佐野 | 八ツ橋 | おしづ | 小兵衛 | 松藏 | 高崎 | 三婦 | 伊平次 | 善右衛門 | 善六 | 數右衛門 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 寛政九年二月 | 桐座 | 青樓詞合鏡 | 澤村宗十郎 | 坂東彦三郎 | 瀨川菊之丞 | 瀨川菊之丞 | 嵐龍藏 | 市川男女藏 | 松本よね三 | 大谷友右衛門 | 坂東三津五郎 | 嵐龍藏 | 澤村東藏 | 松本國五郎 |
| 文化元年七月 | 市村座 | 青樓詞合鏡 | 澤村源之助 | 澤村源之助 | 瀨川路之助 | 瀨川路之助 | 澤村藤藏 | — | 瀨川雄次郎 | 關島儀右衛門 | 市川門三郎 | 澤村藤藏 | — | — |
| 文化十四年四月 | 中村座 | 青樓詞合鏡 | 坂東三津五郎 | 尾上菊五郎 | 中山龜三郎 | 中村大吉 | 松本幸四郎 | — | 山科甚吉 | 市川森三郎 | 關三十郎 | 淺尾友藏 | 松本小次郎 | 松本金平 |

## 月武藏野穐狂言（つきのむさしのあきのせわきやうげん）

寛政九年七月の桐座初演、小いな半兵衛の書替へである。非常な好評だつたので、その後主演の宗十郎が大阪へ上つた時、五瓶も同伴し「傀儡浅妻船（かいらいあさまぶね）」と改題訂正して上演、同地でも喝采を得た。三幕目の「夕顔棚の場」は、妹脊山と瀧壺をお家に直したやうな場で、趣向の面白い所から、三世櫻田治助なぞは二度も借用、自作の脚本にソツクリ應用してゐる。斯うして、後にまで影響は及ぼしたが、この狂言だけとしては初演ぎりで絕えた。

初演の役割は左の通りであつた。

半左衛門、半十郎（澤村宗十郎）幾町、小稻（瀨川菊之丞）瀧平（市川男女藏）主計、傳助（大谷廣次）先次郎（中村傳九郎）鉦八、伴作（澤村東藏）典膳（松本國五郎）彌源次、雁助（大谷友右衛門）勘解由、松兵衛（嵐龍藏）柏木（松本よね三）おしな（岩井喜代太郎）友次、お孝（坂東三津五郎）內藏之進（坂東彦三郎）

## 富岡戀山開（とみがをかこひのやまびらき）

俗に「二人新兵衛」といふ、玉屋出村の狂言で、寛政十年正月、桐座の二番目狂言である。序幕の深川の場が、酒落本風のスケツチで實に巧く出來てゐる。それから、鵜飼

九十郎といふ役が、類型から離れた珍らしい役柄なのが目立つ。「五大力戀緘」の三五兵衛や彌助、「隅田春藝妓女容性」の金五郎なぞと共に、五瓶の作にはいつも現はれる特殊な性格を持つ人物の一つである。五瓶が江戸看客に對する用意のいよ〳〵深く、又いよ〳〵歡迎された所以がハッキリと解る。

| 年月 | 座 | 名題 | 玉屋 | 出村 | 小女郎 | おえん | 九十郎 | 勇藏 | 金太郎 | 新右衛門 | 藤兵衛 | 三[illegible] | 伊三郎 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 寛政十年正月 | 桐座 | 富岡戀山開 | 市川八百藏 | 澤村宗十郎 | 瀬川菊之丞 | 瀬川菊之丞 | 嵐三八 | 市川男女藏 | 坂東三津五郎 | 嵐三八 | 澤村東藏 | 大谷友右衛門 | 中村傳十郎 |
| 享和四年二月 | 中村座 | 寵出村助花 | 坂東三津五郎 | 市川八百藏 | 岩井粂三郎 | 岩井粂三郎 | 嵐三八 | 坂東八十助 | 市川荒五郎 | 山風三八 | 荻野半左衛門 | 嵐音八 | 森田勘[illegible] |
| 文化六年八月 | 市村座 | 富岡戀山開 | 尾上榮三郎 | 澤村源之助 | 岩井半四郎 | 澤村田之助 | 松本幸四郎 | 市川門三郎 | 市川團十郎 | 松本幸四郎 | 嵐新平 | 澤村四郎五郎 | — |
| 文政五年五月 | 市村座 | 山開戀深川 | 市川團十郎 | 松本幸四郎 | 市川門之助 | 市川門之助 | 市川男女藏 | 市川雷藏 | 坂東彦三郎 | — | 淺[illegible]友藏 | 大谷馬十 | 市川茂々太郎 |
| 文政年三月 | 市村座 | 富岡戀山開 | 坂東三津五郎 | 松本幸四郎 | 瀬川菊之丞 | 岩井半四郎 | 嵐冠十郎 | 中山富三郎 | 坂東彦三郎 | 市川門十郎 | 坂田半五郎 | 淺尾友藏 | — |
| 天保七年五月 | 中村座 | 富岡戀山開 | 澤村訥升 | 市川團藏 | 岩井紫若 | 岩井松之助 | 中村芝十郎 | 市川團三郎 | 市川高麗藏 | — | 松本幸四郎 | 坂東三津右衛門 | 市川[illegible]五郎 |
| 安政三年十月 | 中村座 | 富賀岡戀の山鐘 | 坂東彦三郎 | 片岡我童 | 尾上菊次郎 | 岩井粂三郎 | 中村鶴藏 | 澤村源之助 | 中村芝雀 | — | 中山市藏 | 大谷德次 | 澤村訥升 |
| 安政四年三月 | 中村座 | 富岡戀山開 | 片岡仁左衛門 | 關三十郎 | 岩井粂三郎 | 市川團之助 | 中村鶴藏 | 中山市藏 | 片岡我當 | — | 關歌助 | — | 澤村訥升 |
| 明治元年三月 | 中村座 | 富岡戀山開 | 坂東彦三郎 | 河原崎權十郎 | 大谷友右衛門 | 嵐榮三郎 | 河原崎權十郎 | 嵐吉三郎 | 大谷友右衛門 | — | 嵐吉三郎 | 大谷萬作 | 嵐璃鶴 |
| 明治廿九年一月 | 歌舞伎座 | 富岡戀山開 | 市川權十郎 | 市川八百藏 | 市川女寅 | 市川團次郎 | 市川猿之助 | 市川新藏 | 市川壽美藏 | — | 市川猿藏 | 市川團八 | 市川[illegible]五郎 |
| 大正十二年一月 | 明治座 | 書初二人新兵衛 | 市川中車 | 片岡仁左衛門 | 中村雀右衛門 | — | 坂東壽三郎 | 市村龜藏 | 片岡千代之助 | — | 市川七百藏 | — | 河原崎長十郎 |

## 江戸紫由縁十德

享保三年正月の市村座「歳男徳曾我」の二番目に書き卸した、椀久松山の狂言である。この時の市村座は、若手の腕利きが軒並んだ大一座だつたので、一同に役を割るため椀久以外にいろ〳〵な人物を出したので、五瓶の世話物には珍しく、可成りな複雜さになつてゐる。

椀屋久右衞門は延寶頃に實在の人物で、大阪御堂前の豪商であつたが、新町の傾城松山と深くなり、金銀を節分の豆の代りに蒔くなぞの豪奢を盡したので、座敷牢に入れられたが、發狂して市中を狂ひ廻つたと云はれてゐる。

久右衞門を久兵衞として、歌舞伎に淨瑠璃に、早くから脚色され、その書替へも澤山に出來てゐる。本篇も書替への一種であるが、椀久の本筋よりも、挿話の濡島のおかんの件を眼目にしたらしい。おかんと三平が喧嘩をしながら昔契つた仲とわかる趣向は、大阪種の小三金五郎「南詠戀抜萃」から取つたものである。

大切の道行場は、淨瑠璃の文句だけで、セリフもト書も一向無い。原本がさうなので、是非なくそのまゝにして置いたが、文化頃の臺本の大切淨瑠璃には、折々こんな形式のものが見受けられる。

この狂言は、後に改訂されて「盟約誓十德」となり、故市川齋入が得意の出し物にしてゐたが、本狂言そのまゝでは再演を見なかつた。爰に初演の役割を記して置く。

久兵衞、甚平(市川八百藏)三平、九八(市川男女藏)久五郎(澤村源之助)三五右衞門、五郎四郎(尾上松助)おしづ、おかん、おとめ(岩井粂三郎)松山(瀨川路之助)おまつ(小佐川常世)波の戸(瀨川濱次郎)文藏(岩井喜代太郎)大藏(嵐冠十郎)壽德(市川門三郎)音次(大谷鬼治)淸九郎(澤村藤藏)作兵衞(市川國藏)おさん(大谷万作)伊八(小佐川七藏)

## 四紅葉思戀深川

文化元年正月、市村座で「梅櫻松相生曾我」の二番目に、二つの世話狂言を一日變りに出した。二つとも五瓶の作で、初日は幸四郎中心の「四花菱比翼吉原」で、後日は男女藏中心、この「四紅葉思戀深川」であつた。この方は、相撲の白藤源太と藝者お俊の情話を取扱つたもので、南北の「勝相撲浮名花觸」と並んで、白藤源太の二幅對狂言と稱されてゐる。當時、「東上總 夷隅の群相撲とりにて白藤源太」といふ四つ竹節が流行したので、それに因んで脚色したのである。

誠によく纏まつた二番目物だが、再演はされなかつた。

源太(市川男女藏)長之助(松本幸四郎)お俊 (松本よれ

三）傳兵衛、友軒（淺尾工左衛門）彌三郎（澤村源之助）小纒・おいし（瀨川路之助）文六（澤村藤藏）勇藏（市川門三郎）角太郎（嵐新平）次郎吉（市川團十郎）お勝（荻野伊三郎）

## 略三五大切（かきなおしてさんごたいせつ）

文化三年正月、市村座で「梅柳魁曾我」（こめやなぎさきがけそが）の二番目に、矢張り二つの狂言を一日變りに上演した。初日は幸四郎中心の、この「略三五大切」で、後日は高助中心の、「河原噂（かはらうはさ）京諺（きやうのせわごと）」であつた。

この狂言は五瓶が自作の「五大力」を、書き替へたものである。立派な五大力を捨てゝ、なんで斯うした書替へ狂言を作つたのか解らぬが、恐らくは劇場側の註文であらう。自作の書替へをやるといふのは珍らしい事だから、特にこの巻へ挿入したのである。全體が五大力をお茶番式に取扱つたもので、この時分から斯うした趣味が看客に行渡りはじめたらしい。

原作には二幕目に「仇枕夢玉鉾」（あだまくらゆめのたまぼこ）といふ常磐津淨瑠璃の場がある。源五兵衛が夢に、小万と道行をするといふのであるが、正本に缺けてゐるので、殘念ながら入れられなかつた。

この狂言は三度上演されてゐる。

| 年月 | 座 | 名題 | 源五兵衛 | 源五兵衛 | 小万 | 八右衛門 | 十次兵衛 | 伴右衛門 | 伴左衛門 | 渚 | 長兵衛 | おこの | 徳右衛門 | 土手助 | 彌助 | 千太郎 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 文化三年正月 | 市村座 | 略三五大切（かきなおしてさんごたいせつ） | 松本幸四郎 | 澤村源之助 | 中山富三郎 | 尾上榮三郎 | 助高屋高助 | 松本武十郎 | 嵐冠十郎 | 瀨川路之助 | 尾上松助 | 瀨川路三郎 | 嵐新平 | 嵐新平 | 澤村東藏 | 市山七藏 |
| 安政元年三月 | 市村座 | 五大力戀緘 | 市川團十郎 | 嵐吉三郎 | 尾上梅幸 | 嵐吉三郎 | 中村仲助 | 成田屋宗兵衛 | 中村霞太郎 | 中村福助 | ― | 中村富十郎 | 中村菊十郎 | 中村鴻藏 | 市川高麗藏 | 市川集藏 |
| 万延元年五月 | 守田座 | 五大力色〆（ごだいりきいろのふうじめ） | 中村福助 | 市川市藏 | 澤村田之助 | 市川市藏 | 嵐雛助 | 中村熊十郎 | 嵐冠五郎 | 市川米之助 | 市川九藏 | 市川團之助 | 淺尾與六 | ― | 中村歌雀 | 中村壽老 |

編纂校訂責任
渥美清太郎
岡康夫
鈴木侃

日本戯曲全集・第六卷
歌舞伎篇・第二回配本

編纂者檢印

昭和三年四月二十二日印刷
昭和三年四月二十五日發行（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行所　春陽堂
電話京橋　六五二
四四一五
振替東京　一六一七

製版所　新倉東文堂

（神田區・松下町・明治印刷株式會社印刷）